

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第105集

# 今 町 遺 跡

2 0 0 2

財団法人 愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第105集

い ま ち ょ う い せ き  
今 町 遺 跡

2002

財団法人 愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター



## 序

今町遺跡が所在する豊田市は愛知県のほぼ中央に位置し、自動車の生産では世界でも有名な工業都市となっています。市域の東側には矢作川が流れており、太古の昔から流域に住む人々に多くの恩恵を与えてきました。

愛知県埋蔵文化財センターでは、第二東海自動車道建設に伴い、豊田市内で本川遺跡、矢迫遺跡、川原遺跡、郷上遺跡、天神前遺跡、水入遺跡など多くの遺跡の発掘調査を行ってきました。今町遺跡もその関連事業の1つで、愛知県教育委員会を通じ、日本道路公団より委託を受けて、平成10年度と同12年度に発掘調査を実施するとともに、同13年度には報告書作成事業を実施してまいりました。

調査の結果、縄文時代から江戸時代までの先人の生活の痕跡を確認することができました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関、並びに発掘調査・整理作業に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成14年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 井上 銀治

# 例 言

1. 本書は、<sup>あいちけん</sup>愛知県<sup>とよたし</sup>豊田市<sup>いまちょう</sup>今町に所在する<sup>いまちょういせき</sup>今町遺跡（県遺跡番号63476）の発掘調査報告書である。
2. 調査は第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が実施した。調査対象面積は、平成10年度が4,400㎡、平成12年度が4,000㎡で、計8,400㎡である。
3. 調査期間は、平成10年9月～平成11年2月と、平成12年6月～11月であり、調査に引き続き平成13年度には報告書作成のための整理作業を実施した。
4. 調査担当者は、以下の通りである。

平成10年度 赤塚次郎（本センター主査）・鈴木正貴（本センター調査研究員）

平成12年度 花井 伸（本センター主査・現三好町立三好中学校教諭）・小嶋廣也（本センター調査研究員）・成瀬友弘（同）・武井繁樹（同・現知立市立知立南小学校教諭）・永井邦仁（同）

なお、平成10年度の調査においては、アジア航測株式会社に委託し、当センターの調査研究員の指示の下で、発掘調査を実施した。

5. 遺物の整理・製図などについては次の方々の協力を得た。（敬称略）

小川あかね・華井京子（調査研究補助員）

土井由美子・横川尚美・鈴木加代子・堀田春美・祖父江久栄・穂波由枝・大塚みゆき（以上整理補助員）

神谷利英子・村山和子・吉田節子・秋山佳子・後藤智佐（以上整理作業員）

平原知未（別府大学3年生）、伊藤 希（早稲田大学2年生）、石井里英（立命館大学1年生）

この他に、石器類の実測・トレースでは小嶋そのみ氏（調査研究補助員）、データ入力などで安達亜紀子氏、鈴木智恵氏（発掘調査補助員）、遺物の復元では新川事務所の整理作業員、収納作業では尾張事務所の整理補助員の方々の協力をいただいた。

6. 調査に当たっては次の関係機関からご指導・ご協力を得た。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・豊田市教育委員会・日本道路公団

7. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。ただし、旧基準「日本測地系」で表記した。また、海拔標高はT. P.（東京湾平均海面高度）による。

8. 本書で使用する色調名は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』に依拠した。

9. 遺構の写真撮影は各調査担当員が行った。遺物の写真撮影は福岡 栄氏に依頼した。

10. 遺構は以下のアルファベットによる分類記号と発掘当時の番号を付して表記している。基本的には、発掘調査時の遺構番号をそのまま使用し調査区名と併せて4桁で表記しているが、井戸などで一部付け直したものもある。

S B：堅穴住居・掘立柱建物      S D：溝      S E：井戸      S F：道路      S K：土坑

S X：その他

ただし、今回の調査においては柱穴であってもPit番号は付けずに全てSK番号を付けている。

11. 本書の執筆・編集は小嶋が行ったが、一部に分担執筆がある。

第Ⅰ章 武井繁樹      第Ⅱ章第2節・第5節 鈴木正貴      第Ⅲ章第1節1 酒井俊彦

第Ⅳ章第1節 鬼頭剛・堀木真美子・上田恭子      第Ⅳ章第2節 (株)ズコーシャ

12. 本書をまとめるに当たり、次の各氏のご指導の他、多くの方々のご協力を得た。（敬称略）

岡本直久・加藤安信・齊藤基生・城ヶ谷和広・檜崎彰一・松井孝宗

13. 調査記録（図面・写真資料・日誌等）は本センターにて保管している。

14. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 電話番号0567-67-4164

# 目次

第Ⅰ章 調査概要	1
第1節 調査の概要	2
1. 遺跡の位置	2
2. 調査に至る経緯	2
3. 調査の経過	4
4. 発掘調査参加者	5
5. 調査日誌抄	6
第2節 遺跡をめぐる環境	7
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	8
第Ⅱ章 遺構	11
第1節 基本層序	12
第2節 縄文時代の遺構	14
1. 竪穴住居	14
2. 土坑	14
第3節 古代の遺構	16
1. 竪穴住居	16
2. 溝状遺構	59
3. 土坑	59
第4節 中世の遺構	62
1. 掘立柱建物	62
2. 土坑墓	62
3. 溝	68
4. 土坑	68
第5節 戦国時代から江戸時代前期までの遺構	70
1. 竪穴状建物	70
2. 掘立柱建物	70
3. 溝	71
4. 池状遺構	78
5. 井戸	78
6. 土坑	82
第6節 江戸時代後期の遺構	84
1. 掘立柱建物	84
2. 溝	85
3. 道路状遺構	89
4. 井戸	92
5. 池状遺構	95
6. 石敷遺構	95
7. 汚水溜り遺構	95
8. 土坑	98
第7節 時期不明の遺構	100
1. 掘立柱建物	100
2. 井戸	101
3. 土坑	101
第Ⅲ章 遺物	105
第1節 縄文時代の遺物	106
1. 縄文土器	106
2. 石器類	107
第2節 古代の遺物	109
1. 概要	109
2. 出土遺物	110
3. 製塩土器	117
4. 土錘	118
第3節 中世の遺物	120
1. 概要	120
2. 出土遺物	121
第4節 戦国時代から江戸時代前期までの遺物	122
分類	122
統計方法	125
概要	126
98 B S D 0014	127
98 C S D 0009	131
98 D S D 0002	135
98 E S D 0004	138
98 B S D 0017	141
98 B S D 0002	142
その他の S D 合計	143
98 C S E 0003	147
98 B S E 0001	150
その他の井戸合計	156
S K 合計	157
その他の遺構出土合計	159
第5節 江戸時代後期の遺物	161
概要	161
S D 合計	163
井戸合計	166
98 C S K 0066	168
98 B S K 0191	171
98 C S K 0454	173
その他の S K 合計	174
S F 合計	176
S X 合計	178
検出合計	178
その他合計	180
その他の遺物	186
第6節 土器・陶磁器類以外の遺物	187
1. 瓦類	187
2. 木製品	189
3. 金属製品	192
4. 石製品	194
第Ⅳ章 科学分析	197
第1節 矢作川沖積低地北部、今町遺跡における古環境解析	198
第2節 今町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析	208
第Ⅴ章 まとめ	217
まとめ	218

# 図版目次

- 図版 1 遺構配置図 (1)
- 図版 2 遺構配置図 (2)
- 図版 3 遺構配置図 (3)
- 図版 4 遺構配置図 (4)
- 図版 5 遺構配置図 (5)
- 図版 6 遺構配置図 (6)
- 図版 7 遺構配置図 (7)
- 図版 8 遺構配置図 (8)
- 図版 9 遺構配置図 (9)
- 図版 10 遺構配置図 (10)
- 図版 11 遺構配置図 (11)
- 図版 12 遺構配置図 (12)
- 図版 13 遺構配置図 (13)
- 図版 14 遺構写真 (1) 98年度調査区全景 (空撮写真)
- 図版 15 遺構写真 (2) 00年度調査区全景 (空撮写真)
- 図版 16 遺構写真 (3) 縄文時代の遺構・古代の遺構 (1)
- 図版 17 遺構写真 (4) 古代の遺構 (2)
- 図版 18 遺構写真 (5) 古代の遺構 (3)・中世の遺構
- 図版 19 遺構写真 (6) 戦国時代から江戸時代前期までの遺構 (1)
- 図版 20 遺構写真 (7) 戦国時代から江戸時代前期までの遺構 (2)・江戸時代後期の遺構 (1)
- 図版 21 遺構写真 (8) 江戸時代後期の遺構 (2)
- 図版 22 遺物写真 (1) 縄文時代の遺物・古代の遺物 (1)
- 図版 23 遺物写真 (2) 古代の遺物 (2)
- 図版 24 遺物写真 (3) 古代の遺物 (3)・中世の遺物
- 図版 25 遺物写真 (4) 戦国時代から江戸時代前期までの遺物 (1)
- 図版 26 遺物写真 (5) 戦国時代から江戸時代前期までの遺物 (2)
- 図版 27 遺物写真 (6) 江戸時代後期の遺物 (1)
- 図版 28 遺物写真 (7) 江戸時代後期の遺物 (2)
- 図版 29 遺物写真 (8) 江戸時代後期の遺物 (3)
- 図版 30 遺物写真 (9) 瓦類・木製品・金属製品・石製品・その他の用途の遺物

# 挿図目次

第1図 今町遺跡調査区位置図……………	2	第27図 00 B S B 0038・S B 0039・S B 0040・	
第2図 発掘作業風景……………	3	S B 0041・S B 0060・S B 0062・	
第3図 矢作川沖積低地および周辺の地質図 ……	7	S B 0063平面図、00 B S B 0041断面図…	40
第4図 今町遺跡周辺の遺跡分布図……………	9	第28図 00 B S B 0038・S B 0039・S B 0040・	
第5図 整理作業風景……………	10	S B 0060断面図、00 B S B 0039・	
第6図 調査区基本層序模式図……………	13	S B 0041カマド断面図……………	41
第7図 98 E S K 0187平面図・断面図……………	14	第29図 00 B S B 0042・S B 0043・S B	
第8図 98 B S B 0001平面図・断面図……………	15	0044・S B 0045・S B 0046・S B 0048・	
第9図 98 A S B 0002平面図・断面図、		S B 0049・S B 0054・S B 0055・	
カマド断面図……………	17	S B 0056平面図、00 B S B 0043・S B 0044・	
第10図 98 A S B 0001・S B 0003		S B 0045・S B 0054断面図……………	44
平面図・断面図……………	18	第30図 00 B S B 0042・S B 0043・S B 0046・	
第11図 98 A S B 0003カマド断面図……………	19	S B 0048・S B 0049・S B 0055断面図、	
第12図 98 F S B 0001平面図、		00 B S B 0044・S B 0046・S B 0055	
カマド断面図……………	19	カマド断面図……………	45
第13図 00 A S B 0002・S B 0003		第31図 00 B S B 0050平面図・断面図、	
平面図・断面図……………	22	カマド断面図……………	47
第14図 00 A S B 0002・S B 0003		第32図 00 B S B 0051・S B 0052平面図・	
カマド断面図……………	23	断面図……………	48
第15図 00 A S B 0001平面図・断面図……………	23	第33図 00 B S B 0053平面図・断面図……………	49
第16図 00 B S B 0002・S B 0003・S B 0004・		第34図 00 B S B 0057平面図・断面図……………	50
S B 0005・S B 0006・S B 0016・		第35図 00 B S B 0058平面図・断面図……………	51
S B 0019・S B 0061平面図、00 B S B		第36図 00 B S K 1423・S K 1424平面図・	
0019・S B 0061断面図……………	24	断面図……………	53
第17図 00 B S B 0002・S B 0003・S B		第37図 00 C S B 0006・S B 0007・S B	
0004・S B 0005・S B 0006・S B 0016		0008平面図、00 C S B 0006断面図……………	54
断面図……………	25	第38図 00 C S B 0007・S B 0008断面図……………	55
第18図 00 B S B 0008・S B 0009・S B 0010・		第39図 00 C S B 0009・S B 0010・S B	
S B 0011・S B 0012・S B 0017・S B		0014平面図・断面図……………	56
0020平面図・断面図……………	27	第40図 00 C S B 0011平面図・断面図……………	58
第19図 00 B S B 0013・S B 0014・S B 0015・		第41図 古代の遺構平面図・断面図……………	61
S B 0021・S B 0026平面図・断面図、		第42図 98 D S B 0101平面図・断面図……………	63
00 B S B 0013カマド断面図……………	29	第43図 00 B S B 0101・S B 0102平面図……………	63
第20図 00 B S B 0022平面図・断面図、		第44図 土坑墓平面図・断面図①……………	65
カマド断面図……………	31	第45図 土坑墓平面図・断面図②……………	67
第21図 00 B S B 0018・S B 0023・S B 0024・		第46図 溝断面図……………	69
S B 0025・S B 0035平面図……………	32	第47図 00 B S K 1425平面図・断面図……………	70
第22図 00 B S B 0018・S B 0023・S B 0024・		第48図 溝断面図①……………	72
S B 0025・S B 0035断面図、		第49図 溝断面図②……………	73
00 B S B 0018・S B 0025カマド断面図		第50図 溝断面図③……………	75
……………	33	第51図 溝断面図④……………	77
第23図 00 B S B 0028・S B 0029・S B 0030		第52図 00 B S X 0006平面図・断面図……………	79
平面図・断面図……………	35	第53図 98 B S E 0001・98 C S E 0003	
第24図 00 B S B 0031平面図・断面図……………	36	断面図……………	80
第25図 00 B S B 0032・S B 0034		第54図 98 D S K 0074遺物出土状態図・	
平面図・断面図……………	37	98 F S K 0062断面図……………	80
第26図 00 B S B 0036平面図・断面図……………	38		

第55図	00 B S E 0001・S E 0002		第94図	98 C S D 0009①	132
	断面図	81	第95図	98 C S D 0009②	133
第56図	98 B S K 1120平面図	81	第96図	98 C S D 0009③	134
第57図	00 A S K 0123・00 B S K 0203		第97図	98 D S D 0002	
	平面図・断面図	83		出土陶磁器類用途組成図	135
第58図	98 D S B 0201平面図	84	第98図	98 D S D 0002①	136
第59図	溝平面図・断面図・立面図①	87	第99図	98 D S D 0002②	137
第60図	溝断面図②	88	第100図	98 E S D 0004	
第61図	98 B S F 0001・S F 0002			出土陶磁器類用途組成図	138
	平面図・立面図	90	第101図	98 E S D 0004①	139
第62図	98 B S F 0001・S F 0002		第102図	98 E S D 0004②	140
	立面図・断面図	91	第103図	98 B S D 0017	
第63図	98 B S E 0002・98 C S E 0004			出土陶磁器類用途組成図	141
	平面図・断面図	93	第104図	98 B S D 0017	142
第64図	98 A S E 0002・00 A S E 0002		第105図	98 B S D 0002	
	平面図・断面図	94		出土陶磁器類用途組成図	143
第65図	98 C S K 0454平面図・断面図・		第106図	98 B S D 0002	144
	立面図	96	第107図	その他のS D合計	
第66図	98 C S K 0066・00 A S K 0094			出土陶磁器類用途組成図	145
	平面図・断面図	97	第108図	その他のS D合計①	145
第67図	土坑平面図・断面図・立面図	99	第109図	その他のS D合計②	146
第68図	掘立柱建物平面図①	102	第110図	98 C S E 0003	
第69図	掘立柱建物平面図②	103		出土陶磁器類用途組成図	147
第70図	98 A S E 0003・98 C S E 0001断面図	103	第111図	98 C S E 0003①	148
第71図	00 B S K 1393平面図・断面図	103	第112図	98 C S E 0002②	149
第72図	「今村絵図」	104	第113図	98 B S E 0001	
第73図	縄文時代の遺物①	106		出土陶磁器類用途組成図	150
第74図	縄文時代の遺物②	107	第114図	98 B S E 0001①	151
第75図	縄文時代の遺物③	108	第115図	98 B S E 0001②	152
第76図	古代の遺物分類図	109	第116図	98 B S E 0001③	153
第77図	古代の遺物①	110	第117図	98 B S E 0001④	154
第78図	古代の遺物②	111	第118図	98 B S E 0001⑤	155
第79図	古代の遺物③	112	第119図	その他の井戸合計	
第80図	古代の遺物④	113		出土陶磁器類用途組成図	156
第81図	古代の遺物⑤	114	第120図	その他の井戸合計	156
第82図	古代の遺物⑥	115	第121図	S K合計①	157
第83図	製塩土器	117	第122図	S K合計②	158
第84図	土錘①	118	第123図	S K合計出土陶磁器類用途組成図	159
第85図	土錘②	119	第124図	その他の遺構合計	
第86図	中世の遺物分類図	120		出土陶磁器類用途組成図	160
第87図	中世の遺物	121	第125図	その他の遺構合計	160
第88図	戦国時代から江戸時代前期までの遺構		第126図	江戸時代後期合計	
	出土陶磁器類用途組成図	126		出土陶磁器類用途組成図	161
第89図	98 B S D 0014		第127図	江戸時代後期遺構	
	出土陶磁器類用途組成図	127		出土陶磁器類用途組成図	162
第90図	98 B S D 0014①	128	第128図	S D合計出土陶磁器類用途組成図	163
第91図	98 B S D 0014②	129	第129図	S D合計①	164
第92図	98 B S D 0014③	130	第130図	S D合計②	165
第93図	98 C S D 0009		第131図	井戸合計出土陶磁器類用途組成図	166
	出土陶磁器類用途組成図	131	第132図	井戸合計	167

第133図	98 C S K 0066 出土陶磁器類用途組成図	168	第176図	試料中に残存する脂肪の 脂肪酸組成	214
第134図	98 C S K 0066 ①	169	第177図	試料中に残存する脂肪の ステロール組成	214
第135図	98 C S K 0066 ②	170	第178図	試料中に残存する脂肪の 脂肪酸組成樹状構造図	215
第136図	98 B S K 0191 出土陶磁器類用途組成図	171	第179図	試料中に残存する脂肪の 脂肪酸組成による種特異性相関	216
第137図	98 B S K 0191	172	第180図	遺構変遷図(1)	219
第138図	98 C S K 0454	173	第181図	遺構変遷図(2)	221
第139図	98 C S K 0454 出土陶磁器類用途組成図	174			
第140図	その他のS K合計 出土陶磁器類用途組成図	174			
第141図	その他のS K合計①	175			
第142図	その他のS K合計②	176			
第143図	S F合計出土陶磁器類用途組成図	176			
第144図	S F合計	177			
第145図	S X合計出土陶磁器類用途組成図	178			
第146図	S X合計	179			
第147図	検出合計出土陶磁器類用途組成図	180			
第148図	その他合計 出土陶磁器類用途組成図	180			
第149図	検出合計①	181			
第150図	検出合計②	182			
第151図	検出合計③	183			
第152図	検出合計④	184			
第153図	その他合計①	185			
第154図	その他合計②	186			
第155図	その他の遺物	186			
第156図	瓦類①	187			
第157図	瓦類②	188			
第158図	木製品①	189			
第159図	木製品②	190			
第160図	木製品③	191			
第161図	金属製品①	192			
第162図	金属製品②	192			
第163図	金属製品③	193			
第164図	石製品①	194			
第165図	石製品②	195			
第166図	石製品③	196			
第167図	98 C区S K 0454花粉化石群集	202			
第168図	98 C区S K 0454植物珪酸体化石群集	202			
第169図	98 C区S K 0454の珪藻化石群集	203			
第170図	98 D区S D 0002植物珪酸体化石群集	203			
第171図	98 D区S D 0002の珪藻化石群集	203			
第172図	写真図版1 珪藻化石	204			
第173図	写真図版2 花粉化石(1)	205			
第174図	写真図版3 花粉化石(2)	206			
第175図	写真図版4 植物珪酸体	207			

# 表目次

第1表	作業工程表	4	第17表	その他の遺構合計	
第2表	陶磁器類分類表①	122		出土陶磁器類集計表	160
第3表	陶磁器類分類表②	123	第18表	江戸時代後期合計	
第4表	陶磁器類分類表③	124		出土陶磁器類集計表	161
第5表	戦国時代から江戸時代前期までの遺構		第19表	江戸時代後期遺構	
	出土陶磁器類集計表	126		出土陶磁器類集計表	162
第6表	98 B S D 0014 出土陶磁器類集計表	127	第20表	S D 合計出土陶磁器類集計表	163
第7表	98 C S D 0009 出土陶磁器類集計表	131	第21表	井戸合計出土陶磁器類集計表	166
第8表	98 D S D 0002 出土陶磁器類集計表	135	第22表	98 C S K 0066 出土陶磁器類集計表	168
第9表	98 E S D 0004 出土陶磁器類集計表	138	第23表	98 B S K 0191 出土陶磁器類集計表	171
第10表	98 B S D 0017 出土陶磁器類集計表	141	第24表	98 B S K 0454 出土陶磁器類集計表	174
第11表	98 B S D 0002 出土陶磁器類集計表	143	第25表	その他のS K 合計	
第12表	その他のS D 合計			出土陶磁器類集計表	175
	出土陶磁器類集計表	145	第26表	S F 合計出土陶磁器類集計表	177
第13表	98 C S E 0003 出土陶磁器類集計表	147	第27表	S X 合計出土陶磁器類集計表	178
第14表	98 B S E 0001 出土陶磁器類集計表	150	第28表	検出合計出土陶磁器類集計表	180
第15表	その他の井戸合計		第29表	その他合計出土陶磁器類集計表	184
	出土陶磁器類集計表	156	第30表	土壌試料の残存脂肪抽出量	214
第16表	S K 合計出土陶磁器類集計表	159	第31表	試料中に分布するステロールの割合	214

# 第 I 章 調査概要



調査前風景（南西から）

# 第1節 調査の概要

## 1. 遺跡の位置

今町遺跡は、豊田市今町に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。豊田市の南端に位置し、愛知環状鉄道末野原駅から東約2kmで、矢作川と巴川の合流点の近くの矢作川右岸の台地上に立地している。

## 2. 調査に至る経緯

日本道路公団において計画された第二東海自動車道建設に際し、豊田市南部において本川遺跡をはじめ矢迫遺跡、川原遺跡、郷上遺跡、天神前遺跡、水入遺跡などの調査が実施され、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡や、戦国時代の集落跡などが確認されてきている。水入遺跡の北東に位置する豊田市今町周辺では、遺跡分布地図には遺跡として掲載されていないものの、以前から遺物散布地として知られていた。このため、財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が平成9年6月に範囲



第1図 今町遺跡調査区位置図 (1:5000)

確認調査を実施した（トレンチ10ヶ所、面積200㎡）ところ、戦国時代から江戸時代までの遺構が広範囲に分布し、古代から中世の遺構や遺物も存在することが確認された。これにより事前に発掘調査を実施し、記録保存をする必要性が認められた。

発掘調査は、日本道路公団より愛知県教育委員会を通して委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が実施した。調査面積は、平成10年度が4,400㎡、平成12年度が4,000㎡で、合計8,400㎡である。なお、平成10年度の調査はアジア航測株式会社に委託し、当センター調査研究員の指示のもとに発掘調査を実施した。



第2図 発掘作業風景

### 3. 調査の経過

調査の便宜上、平成10年度の調査では調査区をA区～F区の6調査区に、平成12年度の調査ではA区～C区の3調査区（なお、調査区内にU字溝が存在したため、各調査区ともa、bと2分している。）に分けて調査を実施した。バックホウにより現地表面から表土を除去した後、国土交通省（旧建設省）告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、その後、手掘りにより包含層を掘削して遺構検出を行った。まず、はじめに調査区周辺に土層の確認や排水を目的としたトレンチを掘削した。しかし、このトレンチ調査においては明確に遺構を捉えることができなかったため、基盤層である地山まで掘り下げて遺構を検出した。とくに平成12年度の調査においては、調査期間の前半が梅雨の時期に当たっていたこともあって、9月の記録的な豪雨により調査区が完全に水没し、水抜き作業や崩落した壁土の除去、遺構の再検出など、作業は難航を極めた。また、調査の最終段階で予想外に遺構が濃密に検出されたため、発掘作業員を集中的に投入して作業を終わらせることができた。

遺構の測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50、1/100、1/200の基本平面図を作成したほか、重要部分については平成10年度には業者によるデジタル測量で、平成12年度には手測りによって補助測量図を作成した。

また、平成12年度の調査時の10月14日には00B区を中心に現地説明会を開催し、天候にも恵まれたこともあり238名の方々に参加していただいた。この説明会においては、古代の竪穴住居や中世の土坑墓、戦国時代以降の溝などの遺構の説明や、須恵器・土師器、近世陶磁器類などの出土遺物の展示を行い、調査成果を披露することができた。

全調査区から出土した遺物は、27リットル入りコンテナ約160箱に及ぶ。平成10年度の調査では近世陶磁器類や鍋などの土器が主であったが、平成12年度の調査では須恵器や甕などの土師器、山茶碗などの灰釉系陶器が中心であった。他に刀子や銭貨などの金属製品や硯・砥石などの石製品も出土している。出土遺物の整理については、発掘調査と平行して一次整理作業として洗浄・注記を実施した。平成13年度には報告書作成に向けて、二次整理作業である接合・分類、実測図作成やトレース、口縁部計測法による数量カウントなどを実施し、原稿執筆などを行った。

	年度	調査区/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当調査員
発掘調査	98	A区													赤塚・鈴木
		B区													赤塚・鈴木
		C区													赤塚・鈴木
		D区													赤塚・鈴木
		E区													赤塚・鈴木
		F区													赤塚・鈴木
調査	00	A区												花井・小嶋・武井・成瀬	
		B区												花井・小嶋・武井・成瀬・永井邦	
		C区												花井・小嶋・武井・成瀬・永井邦	
整理	01	報告書作成											小嶋		

\* 1次整理（洗浄・注記）は、調査の進行に合わせて98・00年度にそれぞれ実施した。

\* 2次整理（接合・分類）は、報告書作成の01年度に実施した。

第1表 作業工程表

#### 4. 発掘調査参加者

今回の発掘調査に参加していただいた方々は以下の通りです。ご協力いただきありがとうございます。ありがとうございました。

##### 平成10年度

アジア航測株式会社（民間委託業者）

主任技術者 宮塚義人 現場代理人 影山和雄 副調査員 真許英治  
測量調査員 玉井彰一・小林令明・高橋保弘 調査補助員 赤坂健太郎  
重機担当 平野彰一 表土剥ぎ 松下昌矢

発掘作業員

天野 和之・石川 鎮夫・宇野 慶子・長田さき代・笠原 恭子・河村 英治・小芦 三男  
小池きたえ・小松恵美子・近藤 鋭彦・近藤 昌代・真川 昇・柴田 隆義・谷口 三男  
戸田 敬子・七原 せき・成瀬 光代・成瀬 嘉子・長谷川敬一・深津 力・矢頭 裕子  
山田 英和・横幕リツ子

##### 平成12年度

発掘調査補助員

秋田 道子・渡辺 周子

発掘作業員

青木 孝成・青山 勝・阿部 治己・阿辺山ヤエ子・石川恵美子・石川 鎮夫・出 久代  
伊藤登代子・稲垣 保夫・宇野 秀夫・大木さだみ・大竹 元弘・大塚みて子・刑部 守彦  
尾崎 操・落合 秀吉・落合ひろ恵・甲斐 茂夫・柏原 清子・勝田 末子・神谷 幸子  
神谷 幸弘・河合 美江・篠田 忍・下村 一美・鈴木 金之・曾根 静枝・高橋 是行  
田境 治美・只野 国雄・塚本かつ江・富永 平・中島 和子・中根 明・七原 せき  
成瀬香寿美・野田すえ子・橋本たつ子・原田美千代・比嘉ヘンリー・日比野弘子・平尾 伸一  
深津 祐一・福島 和人・松山 清志・萬谷 盟・村瀬 功・村松 賢子・安本佳代子  
山崎 育子・山下 和夫・山田 英和・山田 吉之

学生アルバイト

勝田 吉紀（名城大4年）・加藤 典子（名古屋大2年）・平原 知未（別府大2年）  
山田 桃栄（名古屋大2年）・米津沙斗子（名古屋大2年）・渡會 哲子（愛知大1年）

重機オペレーターなど

池田 栄治・池田 勝治・池田 勝典・稲垣 毅・稲垣 美香・稲垣和華男・鈴木 敏夫  
平岩 充郎・三輪 康仁

\*アジア航測は役職順、他は五十音順、敬称略

## 5. 調査日誌抄

### 平成10年度

9月17日 現場事務所立ち上げ  
 9月28日 調査区設定  
 9月29日 98 B区表土剥ぎ開始  
 9月30日 98 A区表土剥ぎ開始  
 10月 2日 作業開始、清掃・トレンチ掘削  
 10月 5日 98 D区表土剥ぎ開始  
 10月 6日 98 C区表土剥ぎ開始  
 10月 9日 98 A区掘り下げ・遺構検出開始  
 10月13日 98 B区掘り下げ・遺構検出開始  
           基準杭設置  
 10月21日 98 B区上面遺構検出  
 10月23日 98 C・D区清掃・トレンチ掘削  
 10月29日 98 D区遺構検出開始  
 11月 5日 98 C区遺構検出開始  
           県史編纂室城ヶ谷和広氏来訪  
 11月12日 98 D区遺構掘削開始  
 11月16日 98 A区遺構掘削開始  
 11月19日 98 C区遺構掘削開始  
 11月20日 理事長視察  
 12月 2日 98 F区表土剥ぎ開始  
 12月 3日 98 E区表土剥ぎ開始  
 12月 8日 (財)岐阜県文化財保護センター  
           次長他3名来訪  
 12月 9日 豊田市教委森泰通氏来訪  
 12月16日 98 B区遺構掘削開始  
 12月18日 98 E区遺構検出開始  
 1月 7日 98 F区遺構検出開始  
 1月 8日 98 E区遺構掘削開始  
 1月18日 98 F区遺構掘削開始  
 1月27日 98 A～F区空撮準備  
 2月 1日 98 A～F区空撮  
 2月 2日 98 A～F区補足調査開始  
 2月17日 98 B区埋め戻し  
 2月18日 98 A・C区埋め戻し  
 2月19日 98 D区埋め戻し  
 2月20日 98 E・F区埋め戻し  
 2月25日 完全撤去

### 平成12年度

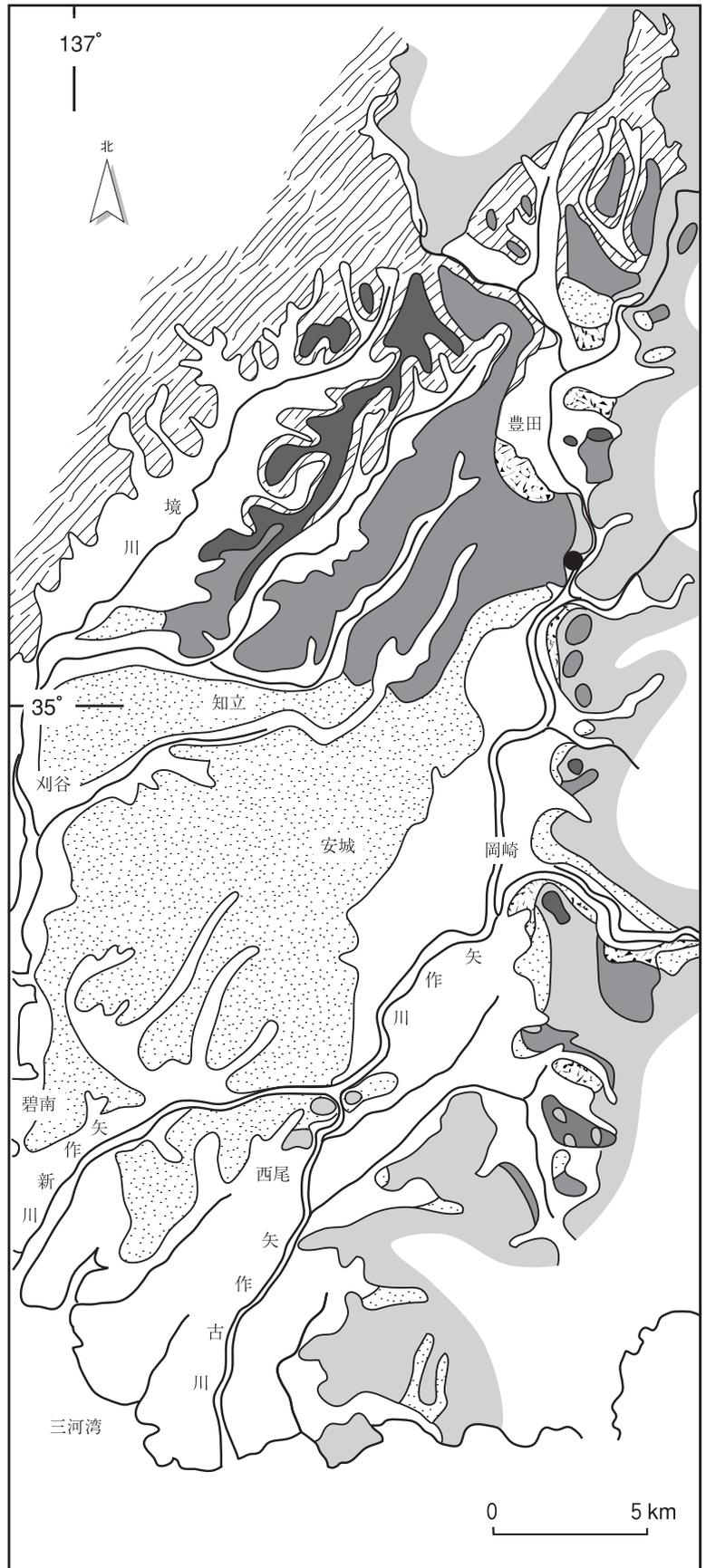
6月12日 現場事務所立ち上げ  
           00 A区調査区設定  
 6月14日 00 A区表土剥ぎ開始  
 6月19日 作業開始、清掃・トレンチ掘削  
           基準杭設置  
 6月21日 00 A区遺構検出開始  
 7月 5日 00 B・C区調査区設定  
 7月 7日 00 A区遺構掘削開始  
 7月10日 00 B区表土剥ぎ開始  
 7月25日 00 C区表土剥ぎ開始  
 7月27日 00 A区空撮準備  
 7月28日 00 A区空撮  
 7月31日 00 A区補足調査開始  
           00 B区清掃・トレンチ掘削  
           発掘作業員追加登録  
 8月 2日 00 B・C区基準杭設置  
           県史編纂室余合昭彦氏来訪  
 8月 4日 名古屋明德短大松原隆治氏他2名来訪  
 8月 7日 00 C区清掃・トレンチ掘削  
 8月 8日 00 B区遺構検出開始  
           名古屋大山本直人氏・伊藤伸幸氏来訪  
 8月17日 00 A区埋め戻し  
 8月22日 00 C区遺構検出開始  
 8月28日 00 B区遺構掘削開始  
 9月11日 東海豪雨  
 9月12日 00 B・C区調査区完全水没  
 10月10日 理事長視察、00 B区空撮準備  
 10月11日 専門委員檜崎彰一先生現地指導  
           00 C区遺構掘削開始  
 10月14日 現地説明会  
 10月19日 00 C区空撮準備  
 10月21日 00 B・C区空撮  
 10月24日 00 B区補足調査開始  
 10月30日 00 C区補足調査開始  
 11月11日 00 C区埋め戻し  
 11月25日 00 B区埋め戻し  
 12月 1日 完全撤去

## 第2節 遺跡をめぐる環境

### 1. 地理的環境

今町遺跡は、愛知県の中央やや北よりに位置する豊田市の南東部、豊田市今町元屋敷（旧字名）に所在し、そのすぐ東には西三河随一の河川である矢作川が北から南にかけて流れている。この付近を含む西三河平野部は、藤岡面・三好面・拳母面・碧海面・越戸面という5つの段丘面と矢作川によって形成された沖積面とに大別される。このうちの碧海面は、第四氷期に堆積した碧海層を基盤としており、洪積面中もっとも広範囲に見られるもので、豊田市南部から安城市にかけて広がっている。豊田の市街地から南へおよそ6～7 kmに所在する鶯鴨町や渡刈町などの集落は、この碧海面上に形成され、今町遺跡もまた、矢作川と巴川の合流点に近い矢作川右岸の碧海台地上に立地している。標高は27～28 mである。

-  上部更新統最上部～完新統
-  三好層・明大寺層
-  越戸層
-  東海層群
-  碧海層
-  先新第三系
-  拳母層・細川層・仁木層・美合層



第3図 矢作川沖積低地および周辺の地質図  
(牧野内 (1988) を基に作成 ●が今町遺跡)

## 2. 歴史的環境

今町遺跡周辺の碧海台地上や矢作川によって作り出された沖積地では、以前から多くの遺跡の存在が知られていたが、調査された遺跡が少なく十分な情報は得られていなかった。しかし平成9年度から本格化した第二東海自動車道建設により大規模な発掘調査が行われ、しだいに周辺の様子が明らかになってきた。以下、最近の調査を中心に周辺の遺跡についてふれてみる。

### (旧石器時代～縄文時代)

水入遺跡(49)では遺跡北端付近の窪地を中心に石器作りの痕跡が確認され、330点を超える石器類が出土している。黒曜石や頁岩・土岐石などの遠隔地から入手したものもあり、旧石器時代人の活動範囲に関する資料として注目される。また、水入遺跡のすぐ北に所在する大明神A・B遺跡(47・45)や矢作川の対岸の岡崎市千地遺跡(86)や仁木八幡宮遺跡(85)も後期旧石器時代～縄文時代の遺跡として知られている。

### (弥生時代)

今町遺跡の南西約3kmにあり、標高20m前後の自然堤防上に立地する川原遺跡(67)では弥生時代中期から後期にかけての墓域や多くの竪穴住居群からなる居住域が確認されている。また、川原遺跡の北の台地に展開する神明遺跡(62)や川原遺跡の南西にある本川遺跡(68)でも竪穴住居群が確認されている。

### (古墳時代)

碧海台地縁辺部には数多くの古墳が築造されている。今町遺跡を囲むように北に池ノ表古墳(23)、北西に豊田大塚古墳(26)、南西に鳥狩塚古墳(44)が展開し、さらに矢作川対岸の渡合町には荒山古墳群(28・29)や梅垣内古墳(30)を含め、数十基の古墳が展開し古墳群を形成している。集落遺跡は古墳時代中期以降に活動が活発になる。神明遺跡ではカマドを持つ竪穴住居が確認され、また須恵器や鉄製農具なども導入されている。本川遺跡では100棟を超える竪穴住居が確認され、川原遺跡や郷上遺跡(59)、天神前遺跡(58)でも集落遺構が明らかにされている。

### (古代)

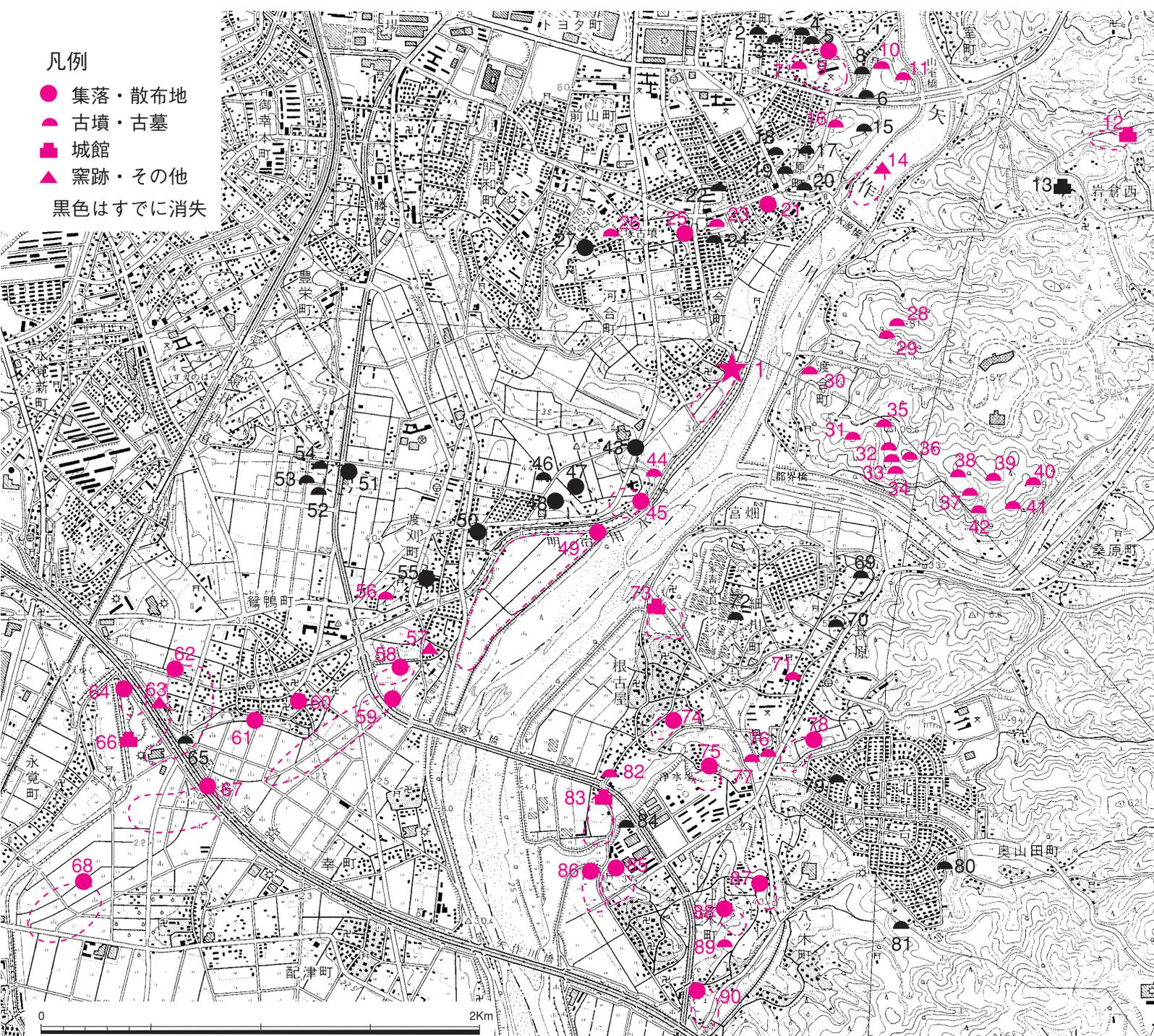
神明遺跡の所在する台地から西に向かう斜面に神明瓦窯(63)の存在が確認されている。採集された素弁六弁蓮華文軒丸瓦は岡崎市の北野廃寺のものと同じであり、北野廃寺の瓦窯の1つと考えられている。また、神明遺跡では7世紀後半から8世紀後半にかけての30棟前後の、水入遺跡でも100棟以上の建物群が確認されている。さらに郷上遺跡や天神前遺跡でも8世紀後半から9世紀にかけての人々の生活跡が確認され、台地だけでなく沖積地への人々の移動の様子が明らかにされている。

### (中世以降)

郷上遺跡・本川遺跡・天神前遺跡などで方形区画を有する屋敷地が確認されている。神明遺跡では12世紀～13世紀の掘立柱建物が10棟以上確認され、水入遺跡では300基を超える円形または方形の土坑墓が検出されている。矢作川対岸には今町遺跡の北東約2kmに岩倉城(12・13)、南約2kmに細川城(83)などの中世城館がある。

(武井繁樹)

- 凡例
- 集落・散布地
  - ▲ 古墳・古墓
  - 城館
  - ▲ 窯跡・その他
- 黒色はすでに消失



- |               |             |            |           |            |               |
|---------------|-------------|------------|-----------|------------|---------------|
| 1 今町遺跡        | 2 長田古墳      | 3 長田南古墳    | 4 新切1号墳   | 5 新切2号墳    | 6 新切3号墳       |
| 7 新切4号墳       | 8 新切5号墳     | 9 新切遺跡     | 10 天王山古墳  | 11 岩鼻古墳    | 12 岩倉城跡(城ノ浦城) |
| 13 岩倉城跡(城ノ峠城) | 14 明治用水田頭首工 | 15 平子山北古墳  | 16 平子山古墳  | 17 水源山北古墳  | 18 水源高根古墳     |
| 19 水源山南古墳     | 20 萱野古墳     | 21 寄畔遺跡    | 22 大谷古墳   | 23 池ノ表古墳   | 24 薬師山古墳      |
| 25 小猿投遺跡      | 26 豊田大塚古墳   | 27 河合遺跡    | 28 荒山1号墳  | 29 荒山2号墳   | 30 梅垣内古墳      |
| 31 上ヶ塚古墳      | 32 琴平1号墳    | 33 琴平2号墳   | 34 琴平3号墳  | 35 琴平4号墳   | 36 琴平5号墳      |
| 37 玄野1号墳      | 38 玄野2号墳    | 39 玄野3号墳   | 40 一本松1号墳 | 41 一本松2号墳  | 42 玄野古墓       |
| 43 鷹戸遺跡       | 44 鳥狩塚古墳    | 45 大明神B遺跡  | 46 西槽目古墳  | 47 大明神A遺跡  | 48 西槽目遺跡      |
| 49 水入遺跡       | 50 北田遺跡     | 51 高岡遺跡    | 52 高岡1号墳  | 53 高岡2号墳   | 54 高岡3号墳      |
| 55 小狭間遺跡      | 56 渡刈富士塚古墳  | 57 上郷中塚状遺構 | 58 天神前遺跡  | 59 郷上遺跡    | 60 安福寺遺跡      |
| 61 鴛鴨町元屋敷遺跡   | 62 神明遺跡     | 63 神明瓦窯    | 64 矢迫遺跡   | 65 三味線塚古墳  | 66 鴛鴨城跡       |
| 67 川原遺跡       | 68 本川遺跡     | 69 雨戸古墳    | 70 長原古墳   | 71 古村積神社古墳 | 72 榎水古墳       |
| 73 細川城山城跡     | 74 仲門町遺跡    | 75 岩御堂遺跡   | 76 石田1号墳  | 77 石田2号墳   | 78 石田東遺跡      |
| 79 窪池古墳       | 80 烏ヶ根古墳    | 81 八反田古墳   | 82 上平古墳   | 83 細川城跡    | 84 しんぞう塚古墳    |
| 85 仁木八幡宮遺跡    | 86 千地遺跡     | 87 八反田遺跡   | 88 年重遺跡   | 89 年重古墳    | 90 東郷遺跡       |

第4図 今町遺跡周辺の遺跡分布図(1:25,000)  
(平成9年11月国土地理院発行「豊田南部」を一部改変した)

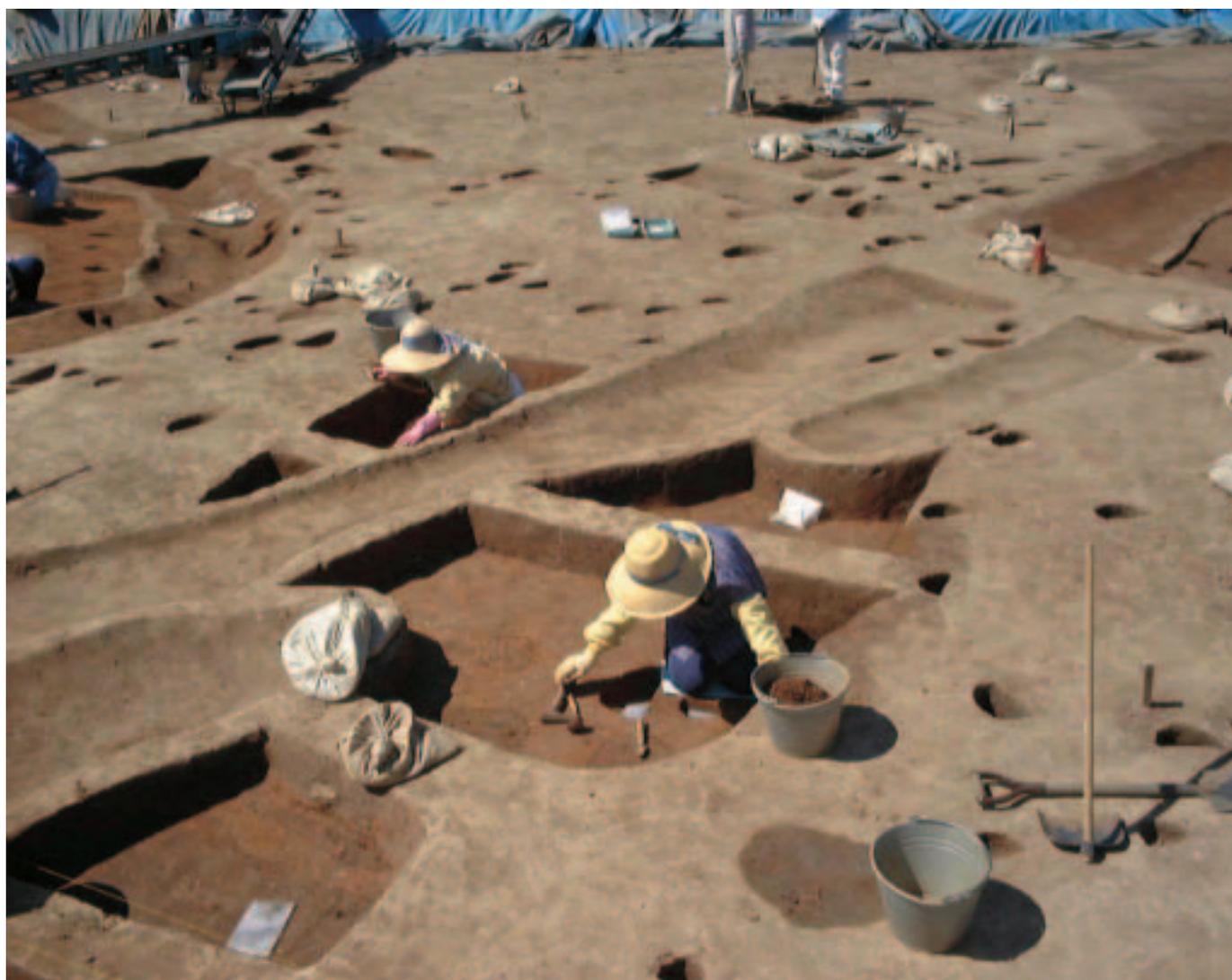
## 参考文献

- 赤塚 次郎 「今町遺跡範囲確認調査」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成9年度』  
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1998  
「今町遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報14 平成9年度』 愛知県教育委員会 1999
- 小嶋廣也他 「今町遺跡」『平成12年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』  
(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2001
- 鈴木 正貴 「今町遺跡」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成10年度』  
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1999  
「今町遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報15 平成10年度』 愛知県教育委員会 2000
- 武井 繁樹 「今町遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報17 平成12年度』 愛知県教育委員会 2002
- 牧野内 猛 「岡崎平野地域」『日本の地質5 中部地方II』 共立出版 1988
- 愛知県教育委員会 「愛知県遺跡分布地図(Ⅲ) 知多・西三河」 1995
- 豊田市教育委員会 『豊田市遺跡分布図』 1999



第5図 整理作業風景

## 第Ⅱ章 遺 構



作業風景（南東から）

## 第1節 基本層序

本遺跡における層序は概ね3～6層に分かれていて、水田になっている00B区や00C区と一段高い98A区や00A区ではやや様相が異なっている。現地表面では00A区は道路と同じ高さであったが、他の調査区の大半は道路よりも低くなって水田として利用されていた。

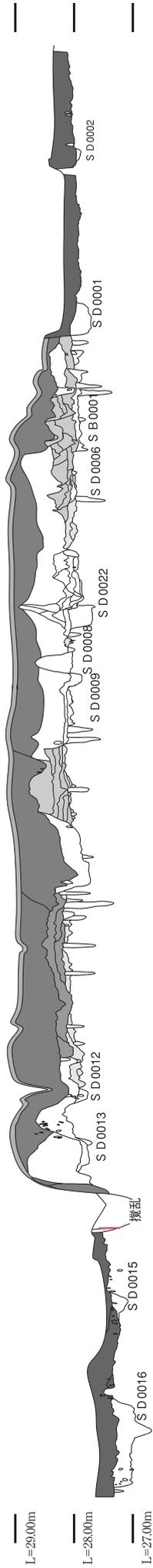
まず98A区や00A区西半を見てみると、第Ⅰ層は表土で、現地表面から8～12cm程の厚さを有する。水田として利用されていない所で確認される程度である。第Ⅱ層は灰黄色砂質土で、厚さは15～60cm程度で、最大約1m近くに及ぶ箇所もある。明治時代以降の整地層と考えているが、98A区で確認された盛土部分（調査前は竹林）は第Ⅴ層とした水田部分を削って盛り上げているように見られ、屋敷地と水田を区画させていたと思われる。土塁のようなものも一部で確認されている。第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に灰黄色粗粒砂やにぶい黄褐色中粒砂の層が一部で見られ、明治以降に起こった水害により堆積したものと想定される。第Ⅲ層は褐色粘質シルトで、厚さは最大60cmを測る。江戸時代の整地層と思われる。この土層の上から掘り込まれた遺構から江戸時代後期の遺物が出土していることから、江戸時代後期の地表面＝生活面と考えられる。第Ⅲ層と第Ⅳ層の間にも砂の層が確認されており、江戸時代中期頃にも水害があった可能性が想定される。その下に第Ⅳ層の暗褐色粘質シルトが、調査区の全体からではなく基盤層の低い箇所で見られる。江戸時代前期までの包含層と考えられる。この層の上から戦国時代から江戸時代前期までの遺構が掘り込まれていることから、戦国時代以降の地表面＝生活面と思われるが、すぐに基盤層となってしまふことから確かな面とは捉えにくい。同様に、中世、古代、縄文時代の遺構は確認されているが、各時代の地表面＝生活面も確認することはできなかった。第Ⅶ層は赤褐色粘質土または黄褐色粘質土や砂礫で、地山層である基盤となる。これが碧海台地であり、調査区の南西から北東にかけて緩やかに傾斜し、また北西から南東にかけて下がり、検出面で最大120cmの標高差がある。この高低差が、自然地形であるのか後世の削平によるものかは定かではないが、00B区で竪穴住居が検出されている状況からみて自然地形に近いものと思われる。

00A区東半・00B区や00C区では、第Ⅰ層～第Ⅳ層までの土層は確認されず、第Ⅴ層の黄灰色粘質シルトが現耕作土となっている。厚さは10～30cmを測る。その下の第Ⅵ層は褐色粘質シルトで、厚さは5～30cmを有し、最大50cmを測る。江戸時代の旧耕作土と考えられる。前述した水害でできた緩やかな傾斜を平坦にすることで水田を作り出しているものと思われる。その下は第Ⅶ層の基盤層（地山）となる。第Ⅵ層は全体的に広がるものではなく、第Ⅴ層の下が直接基盤層になっている箇所も確認されている。

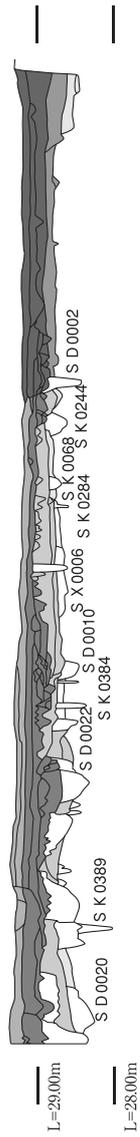
調査区の基本層序は以上であるが、今回の発掘調査では遺構検出を各時代の地表面＝生活面では行えなかった。発掘調査の時間的な問題や、整地層や包含層の中で遺構を面として捉えることが困難であったことなどから、基盤層まで掘り下げて遺構検出を行わざるを得なかったためであるが、幸いなことに縄文時代から江戸時代後期までの遺構と遺物を確認することができた。ただし、整地層や包含層中でとどまってしまう遺構は、記録することができなかったことは予め断っておきたい。以下に、遺構と遺物の概要を報告する。

（小嶋廣也）

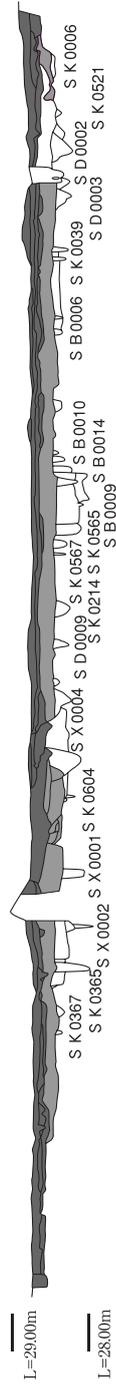
98 A 北壁



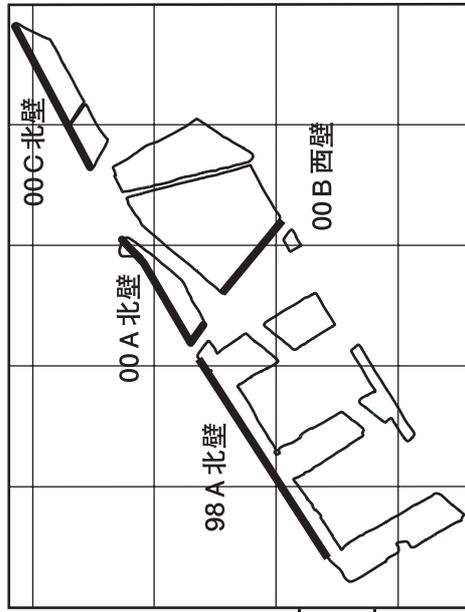
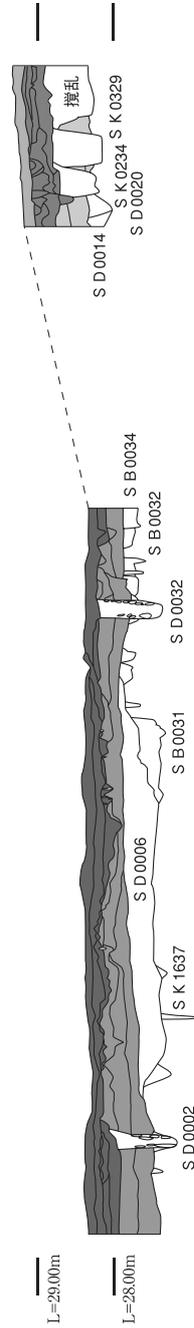
00 A 北壁



00 C 北壁



00 B 西壁



第6図 調査区基本層序模式図 (タテ: ヌコ = 5 : 1)

- 第I層=表土
- 第II層=灰黄色砂質土
- 第III層=褐色粘質シルト
- 第IV層暗褐色粘質シルト
- 第V層=黄灰色シルト
- 第VI層=褐色粘質シルト

## 第2節 縄文時代の遺構

今回の調査において、縄文時代の遺構を確認したのは、竪穴住居1棟と土坑数基である。後世の遺構の埋土中や検出段階においても、縄文時代と思われる土器や石器類が出土しており、縄文時代からこの地に人々が生活していたことを確認できたことは興味深い。

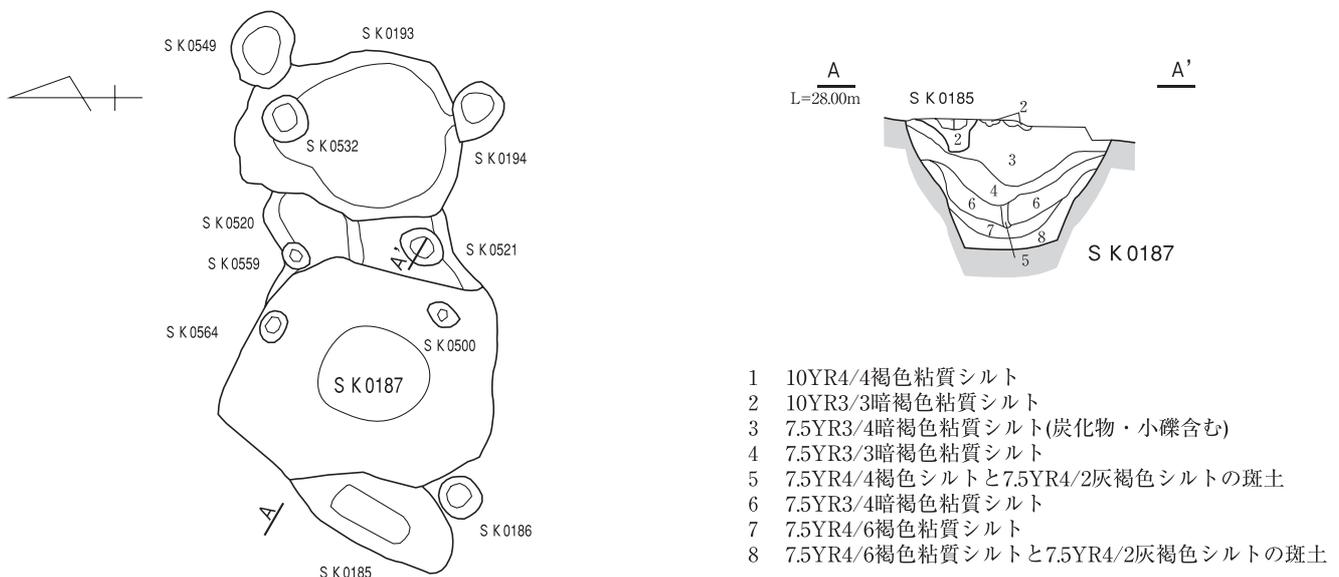
### 1. 竪穴住居

**98 B S B 0001** 平成10年度の調査区である98 B区の南西端で検出された竪穴住居である。住居全体を確認することはできなかったが、確認できた規模は、長軸残存長664cm、短軸残存長208cmで、径約6m前後の円形または不定円形の平面プランを持つ竪穴住居であったと想定される。検出面からの深さは最大35cmを測る。住居の床面から9基の土坑が検出されているが、そのうちの98 B S K 1088は長径55cm、短径約40cm、深さ25cmの平面楕円形の土坑、98 B S K 1090は長径43cm、短径36cm、深さ39cmの平面楕円形の土坑、98 B S K 1096は長径58cm、短径55cm、深さ33cmの平面楕円形の土坑と、大きさや深さに違いはあるが、住居の柱穴と考えられる。残念ながら炉のような施設を確認することはできなかった。縄文時代後期前葉の土器が出土していることから、該期の住居であると思われる。

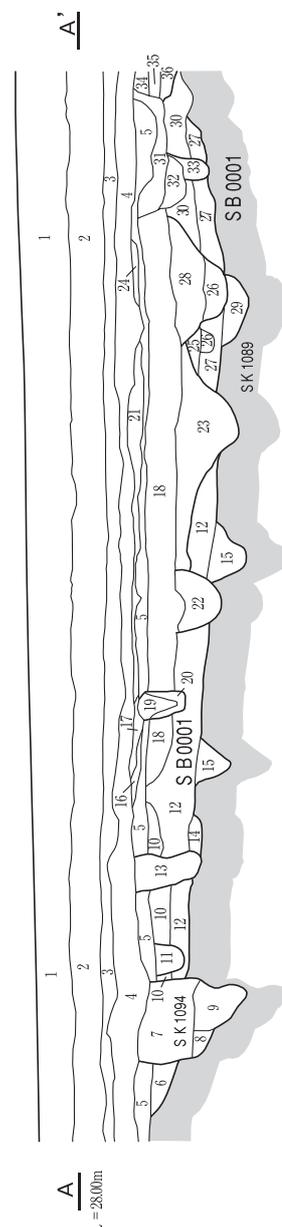
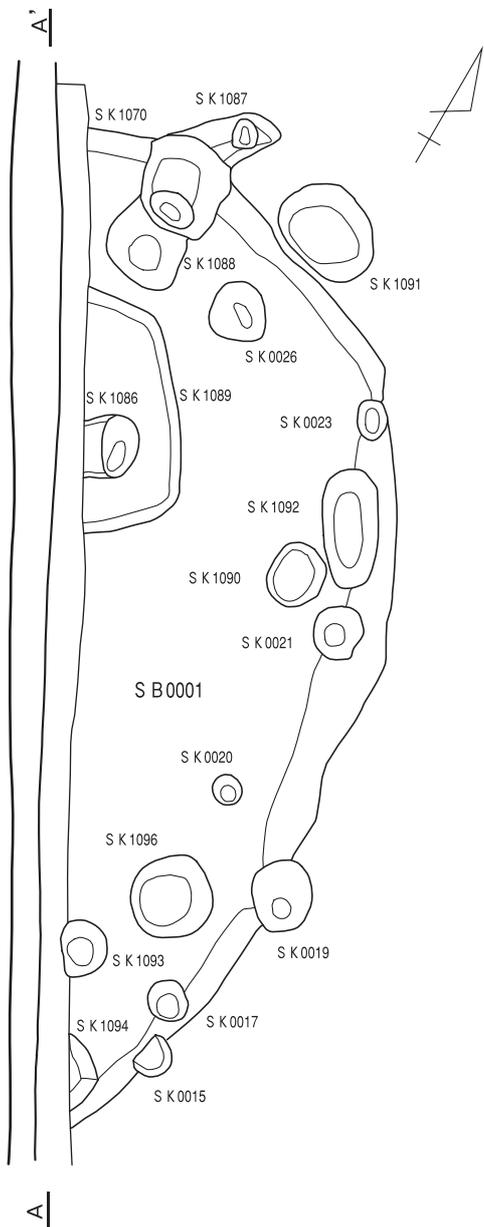
### 2. 土坑

**98 E S K 0187** 平成10年度の調査区である98 E区の北側で検出された土坑である。後世の遺構に切られているが、長径172cm、短径推定163cm、深さ111cmの平面不定円形の土坑である。この遺構から、縄文時代中期後葉の土器が出土している。この土坑とよく似た埋土で規模が1m前後の土坑が他にも確認されているが、出土遺物がないため時期を特定することができなかった。

(鈴木正貴)



第7図 98 E S K 0187 平面図・断面図 (1:50)



- |  |  |
|--|--|
| <p>1 10YR4/2灰黄褐色粘土と5YR4/6赤褐色粘土の斑土</p> <p>2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(水田耕作土)</p> <p>3 2.5Y4/3オリブ褐色砂質シルト(旧水田耕作土)</p> <p>4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土(洪水による堆積か)</p> <p>5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と7.5YR6/8橙色粘質土の斑土<br/>(小礫多く含む)</p> <p>6 5YR4/6赤褐色粘土(S B 0001埋土)</p> <p>7 7.5YR4/3褐色粘質土と7.5YR5/4にぶい褐色粘質土の斑土</p> <p>8 7.5YR4/4褐色粘質土</p> <p>9 10YR3/4暗褐色粘質土</p> <p>10 5YR4/6赤褐色粘土</p> <p>11 7.5YR4/3褐色粘質シルト</p> <p>12 7.5YR5/6明褐色粘質土と7.5YR4/3褐色粘質土の斑土<br/>(S B 0001埋土)</p> <p>13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土</p> <p>14 7.5YR4/6褐色粘質シルト</p> <p>15 7.5YR6/6橙色粘土</p> <p>16 7.5YR3/3暗褐色砂質土</p> <p>17 7.5YR4/4褐色粘質土と7.5YR5/8明褐色粘質土の斑土</p> <p>18 7.5TY3/3暗褐色粘質土</p> <p>19 10YR3/4暗褐色粘質土</p> <p>20 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(炭化物含む)</p> <p>21 10YR6/4にぶい黄橙色砂質土と10YR6/6明黄褐色粘土の斑土</p> <p>22 7.5YR4/3褐色粘質土(小礫含む)</p> | <p>23 7.7YR4/3褐色粘質土と7.5YR5/6明褐色粘質土の斑土</p> <p>24 10YR3/4暗褐色粘質土と10YR7/6明黄褐色粘質土の斑土</p> <p>25 7.5YR4/4褐色粘土</p> <p>26 7.5YR4/3褐色粘土</p> <p>27 7.5YR4/4褐色粘土と7.5YR3/3暗褐色粘土の斑土<br/>(S B 0001埋土)</p> <p>28 7.5YR3/3暗褐色粘質土</p> <p>29 7.5YR4/6褐色粘土(径1mm程の白色砂粒を多く含む)</p> <p>30 7.5YR4/4褐色粘土と7.5YR4/3褐色粘土の斑土</p> <p>31 7.5YR5/4にぶい褐色砂質土</p> <p>32 7.5YR4/3褐色粘質土</p> <p>33 7.5YR4/4褐色粘質土と7.5YR5/6明褐色粘質土の斑土</p> <p>34 10YR4/4褐色砂質土</p> <p>35 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(小礫含む)</p> <p>36 10YR4/3褐色粘質シルト</p> |
|--|--|

第 8 図 98 B S B 0001 平面図・断面図 (1 : 50)

## 第3節 古代の遺構

今回の調査において、古代の遺構を確認したのは、竪穴住居と思われる遺構も含め竪穴住居は全調査区で97棟、溝状遺構1条、土坑などである。とくに、竪穴住居が00B区において多く検出され、古代の時期にこの地に集落が展開していたことが確認された。

### 1. 竪穴住居

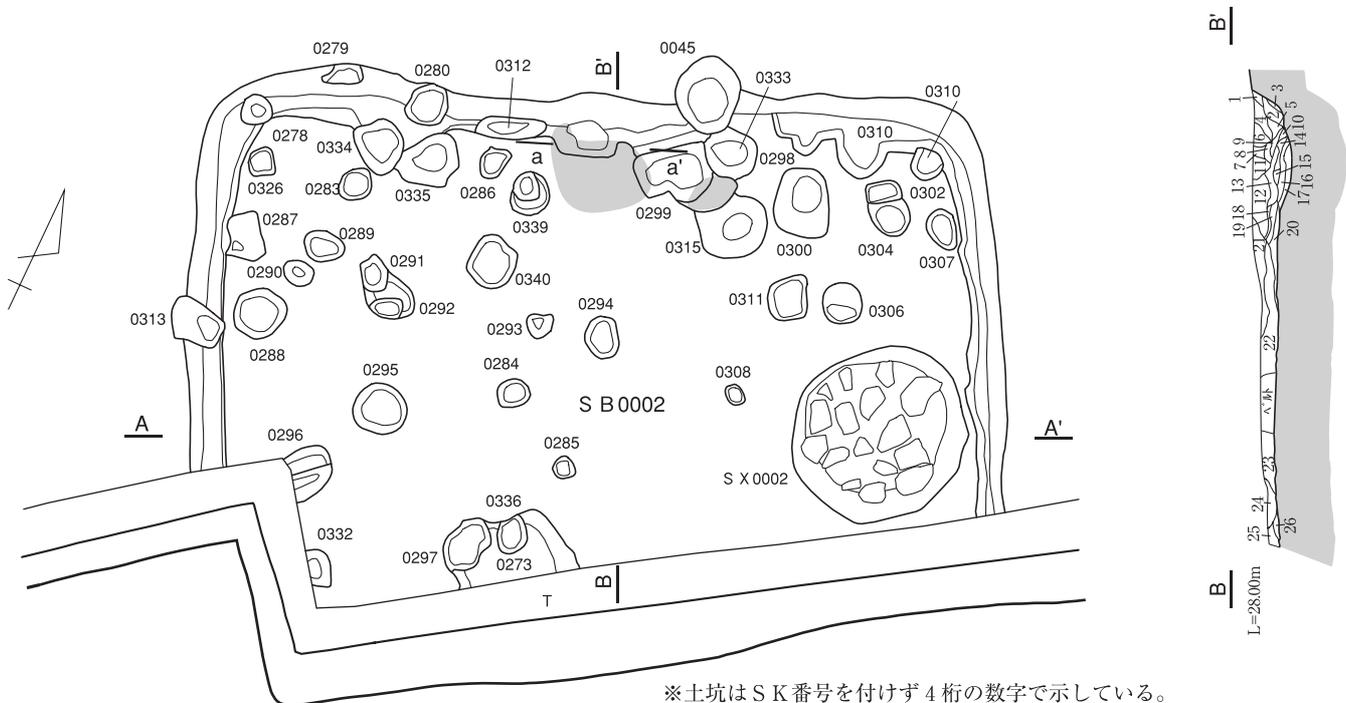
竪穴住居の分布を見てみると、平成10年度の調査では、98A区で3棟、98F区で1棟の計4棟、平成12年度の調査では、00A区で5棟、00B区で68棟、00C区で20棟の計93棟が検出されている。大部分の住居の平面プランは隅丸方形を呈しており、一部の住居で支柱穴・貯蔵穴・周溝・カマドなどの施設が確認されている。検出面から床面までの深さは数cm～40cmとかなりの差がある。これを単純に後世の削平による差と考えることはできず、時期的な差や住居のもつ性格による差も考えられる。検出された97棟全ての住居が同時期に存在していたわけではなく、十数棟の住居が集まる集落であったと思われる。時期は、出土した須恵器の編年型式から岩崎17号窯様式から鳴海32号窯様式までで、やや時期差がある。以下、調査区ごとに見ていくが、住居の主軸方向はカマド痕の中心を通る線の方位であることを予め断っておく。

#### 98A区

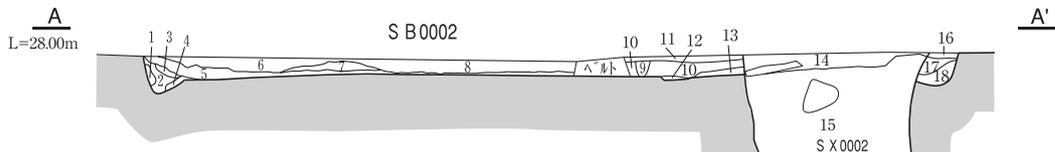
**98A S B 0002** 平成10年度の調査区である98A区のはほぼ中央で検出された竪穴住居で、98C区との境近くに位置している。住居の南側が調査区外に広がっているため正確ではないが、規模は長軸532cm、短軸残存長313cmとなっており、1辺が約5m30cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と考えられる。住居の主軸方向はN-23°-Wを示している。検出面からの深さは最大29cmである。床面から、支柱穴2基(98A S K 0331・98A S K 0340)、周溝、住居の北辺でカマド痕と思われる焼土が確認されている。98A S K 0300や98A S K 0315は、貯蔵穴である可能性が高い。時期は、出土遺物に小片が多く限定できないが、8世紀中葉頃と思われる。

**98A S B 0001** 98A区の東側で検出された竪穴住居で、98D区との境近くに位置する。住居の西側が残るのみで、東側と南側は戦国時代以降の溝に切られ北側は調査区外に広がっている。このため規模は不明であるが、1辺が5m前後の隅丸方形の平面プランをもつ住居と想定される。検出面からの深さは最大15cmである。床面から、柱穴1基(98A S K 0318)と周溝が確認されている。残念ながらカマド痕などは確認されていない。須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯が出土しており、98A S B 0002よりも古い住居であると思われる。

**98A S B 0003** 98A区の東側で検出された竪穴住居で、98A S B 0001の南側に位置する。住居の北側は近世の溝98A S D 0001で切られ、南側は調査区外に広がるため正確な規模は確認できなかったが、長軸556cm、短軸残存長320cmで、1辺が5m50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と考えられる。住居の主軸方向はN-52°-Eを示している。検出面からの深さは、最大12cmを測る。床面から支柱穴2基(98A S K 0329・98A S K 0341)、周溝、住居の東辺でカマド痕と思われる焼土が確認されている。時期については、出土量が少なく明らかではない。また、S B

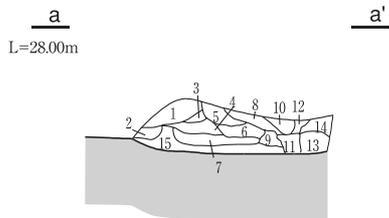


※土坑はS K 番号を付けず 4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。



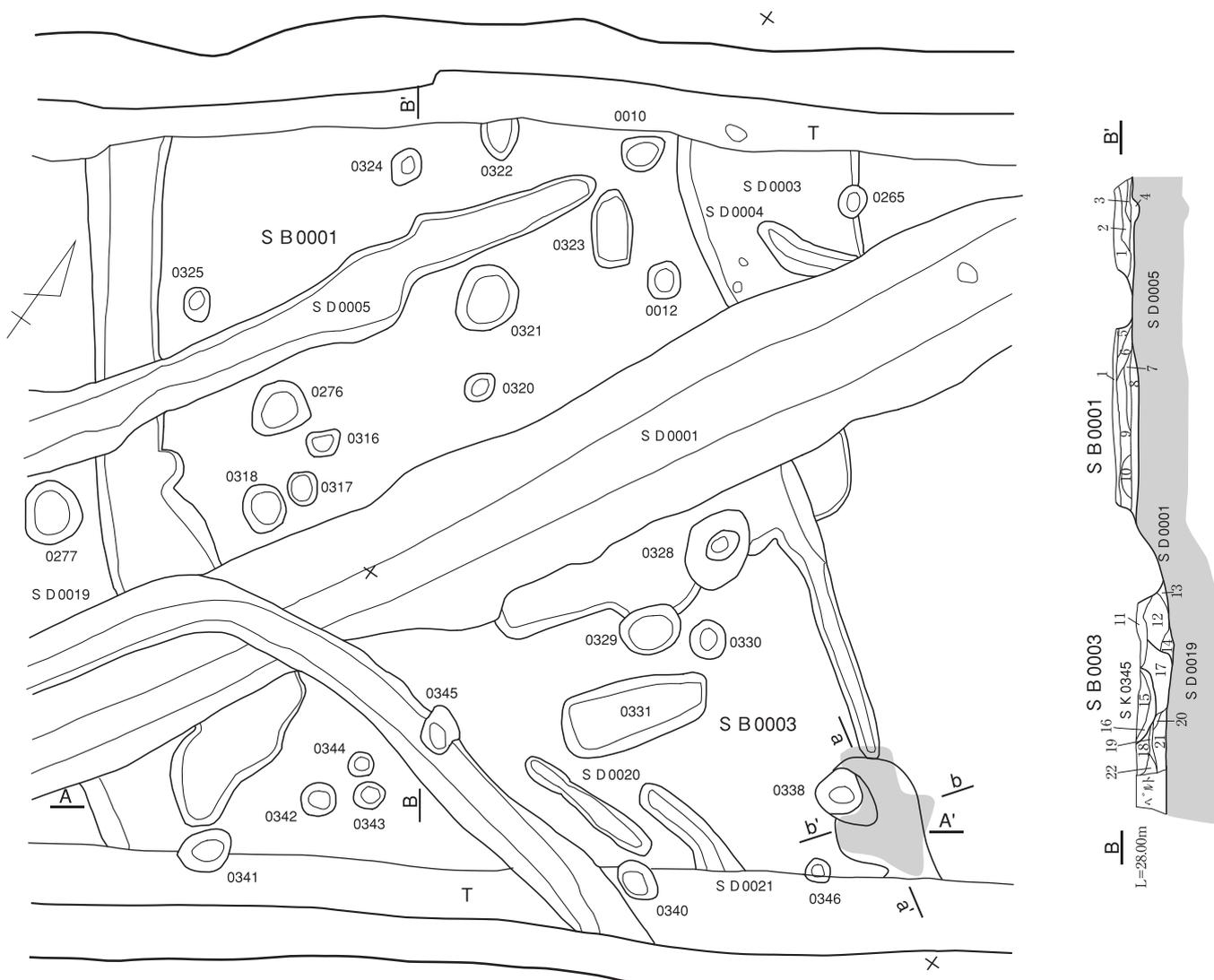
- A :
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
  - 2 10YR3/4暗褐色シルト(小礫含む)
  - 3 7.5YR3/4暗褐色粘土
  - 4 7.5YR4/3褐色粘土
  - 5 7.5YR3/3暗褐色粘土(小礫含む)
  - 6 10YR3/4暗褐色粘土
  - 7 10YR3/4暗褐色粘土
  - 8 10YR3/4暗褐色粘土
  - 9 10YR3/3暗褐色粘土(炭化物含む)
  - 10 10YR3/4暗褐色粘土(炭化物含む)
  - 11 7.5YR4/4褐色粘土
  - 12 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
  - 13 7.5YR4/3褐色粘土
  - 14 7.5YR4/3褐色粘土(花崗岩含む)
  - 15 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(花崗岩含む)
  - 16 7.5YR3/2黒褐色粗砂
  - 17 7.5YR4/3褐色粘土
  - 18 7.5YR3/4暗褐色粘土

- B :
- 1 5YR4/3にぶい赤褐色シルト(焼土含む)
  - 2 7.5YR3/3暗褐色粘土(焼土含む)
  - 3 7.5YR4/4褐色粘土
  - 4 7.5YR4/3褐色粘土
  - 5 7.5YR4/4褐色粘土(焼土含む)
  - 6 7.5YR4/4褐色粘土
  - 7 7.5YR3/3暗褐色粘土
  - 8 7.5YR4/2灰褐色シルト
  - 9 7.5YR3/3暗褐色シルト
  - 10 7.5YR4/3褐色シルト
  - 11 7.5YR4/4褐色粘土(小礫含む)
  - 12 10YR4/3にぶい黄褐色粘土(焼土含む)
  - 13 7.5YR4/3褐色シルト
  - 14 7.5YR4/4褐色粘土(焼土含む)
  - 15 5YR4/3にぶい赤褐色粘土
  - 16 5YR3/4暗赤褐色シルト(焼土固く締まる)
  - 17 5YR3/3暗赤褐色シルト
  - 18 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
  - 19 5YR4/3にぶい赤褐色粘土
  - 20 7.5YR4/3褐色粘土(小礫含む)
  - 21 10YR4/4褐色細砂(小礫含む)
  - 22 7.5YR4/4褐色細砂
  - 23 7.5YR4/4褐色粘土(小礫含む)
  - 24 7.5YR4/3褐色砂混じり粘土
  - 25 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
  - 26 7.5YR5/4にぶい褐色粘土

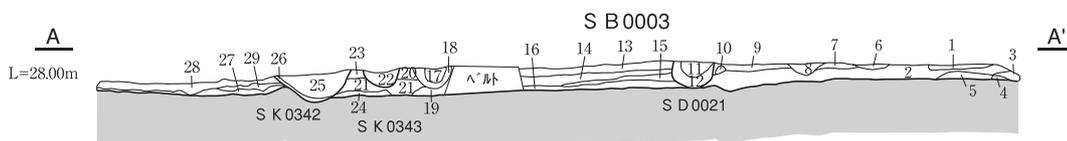


- 1 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 3 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 4 7.5YR4/4褐色粘質シルト(炭化物含む)
- 5 7.5YR4/3褐色粘質シルトと5YR4/8赤褐色粘質シルトの斑土
- 6 7.5YR4/3褐色シルト
- 7 7.5YR4/4褐色粘質シルトと5YR3/6暗赤褐色粘質シルトの斑土
- 8 7.5YR4/4褐色粘質シルトと2.5YR4/8赤褐色粘質シルトの斑土(焼土)
- 9 7.5YR4/4褐色シルト
- 10 5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト
- 11 7.5YR4/3褐色粘質シルト(炭化物含む)
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
- 13 7.5YR4/4褐色粘質シルトと5YR4/8赤褐色粘質シルトの斑土(焼土)
- 14 7.5YR4/3褐色粘質シルト
- 15 7.5YR4/6褐色粘質シルト

第9図 98 A S B 0002 平面図・断面図、カマド断面図 (平・断 1 : 50、カマド 1:40)



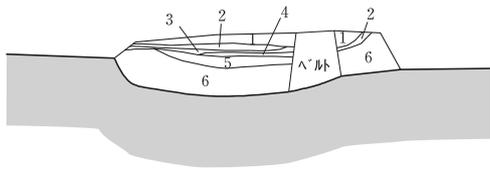
※土坑は S K 番号を付けず 4 桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。



- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>A :</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 7.5YR4/3褐色粘土</li> <li>2 10YR4/3にぶい黄褐色粘土と10YR4/4褐色粘土の斑土(炭化物・小礫含む)</li> <li>3 10YR4/4褐色シルト</li> <li>4 10YR4/3にぶい黄褐色粘土(焼土含む)</li> <li>5 7.5YR5/4にぶい褐色粘土</li> <li>6 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>7 10YR4/4褐色粘土</li> <li>8 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>9 10YR4/4褐色シルト</li> <li>10 10YR5/4にぶい黄褐色粘土</li> </ol>   | <p>S B 0003</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>11 10YR4/3にぶい黄褐色粘土(小礫含む)</li> <li>12 7.5YR4/3褐色シルト</li> <li>13 10YR4/4褐色シルト</li> <li>14 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>15 10YR4/4褐色粘土(砂粒含む)</li> <li>16 10YR4/2灰黄褐色シルト</li> <li>17 10YR5/3にぶい黄褐色シルト</li> <li>18 10YR5/4にぶい黄褐色粘土</li> <li>19 7.5YR4/3褐色粘土</li> <li>20 7.5YR4/4褐色粘土と10YR6/6明黄褐色粘土の斑土(小礫含む)</li> </ol>            | <ol style="list-style-type: none"> <li>21 10YR5/3にぶい黄褐色シルト</li> <li>22 7.5YR4/3褐色粘土</li> <li>23 10YR6/6明黄褐色粘土</li> <li>24 7.5YR4/3褐色粘土と10YR6/6明黄褐色粘土の斑土(小礫含む)</li> <li>25 10YR6/6明黄褐色粘土</li> <li>26 10YR6/6明黄褐色粘土</li> <li>27 7.5YR4/4褐色シルト(炭化物含む)</li> <li>28 7.5YR5/4にぶい褐色シルト</li> </ol> |
| <p>B :</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/4褐色粘土(小礫含む)</li> <li>2 7.5YR4/3褐色粘土(小礫含む)</li> <li>3 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>4 10YR4/2灰黄褐色粘土</li> <li>5 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>6 7.5YR3/4暗褐色粘土(小礫含む)</li> <li>7 10YR3/4暗褐色粘土</li> <li>8 10YR6/4にぶい黄褐色粘土</li> <li>9 10YR3/3暗褐色粘土と2.5Y4/3にぶい赤褐色シルトの斑土</li> <li>10 10YR3/4暗褐色粘土</li> <li>11 10YR3/3暗褐色粘土(小礫・炭化物含む)</li> <li>12 10YR3/4暗褐色粘土(小礫・炭化物含む)と10YR4/2灰黄褐色シルトの斑土</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>13 7.5YR4/4褐色シルト</li> <li>14 10YR4/3にぶい黄褐色シルト</li> <li>15 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>16 7.5YR4/2灰黄褐色粘土(砂粒含む)</li> <li>17 10YR5/3にぶい黄褐色粘土と10YR5/4にぶい黄褐色粘土の斑土(炭化物含む)</li> <li>18 10YR4/3にぶい黄褐色粘土</li> <li>19 10YR4/2灰黄褐色粘土(小礫含む)</li> <li>20 10YR3/3暗褐色粘土</li> <li>21 10YR3/4暗褐色粘土(小礫含む)</li> <li>22 10YR3/3暗褐色粘土と7.5YR4/3褐色粘土の斑土</li> </ol> |  |

第10図 98 A S B 0001・S B 0003 平面図・断面図 (1:50)

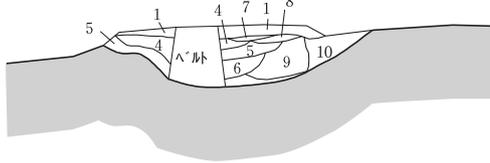
a  
L=28.00m



a'

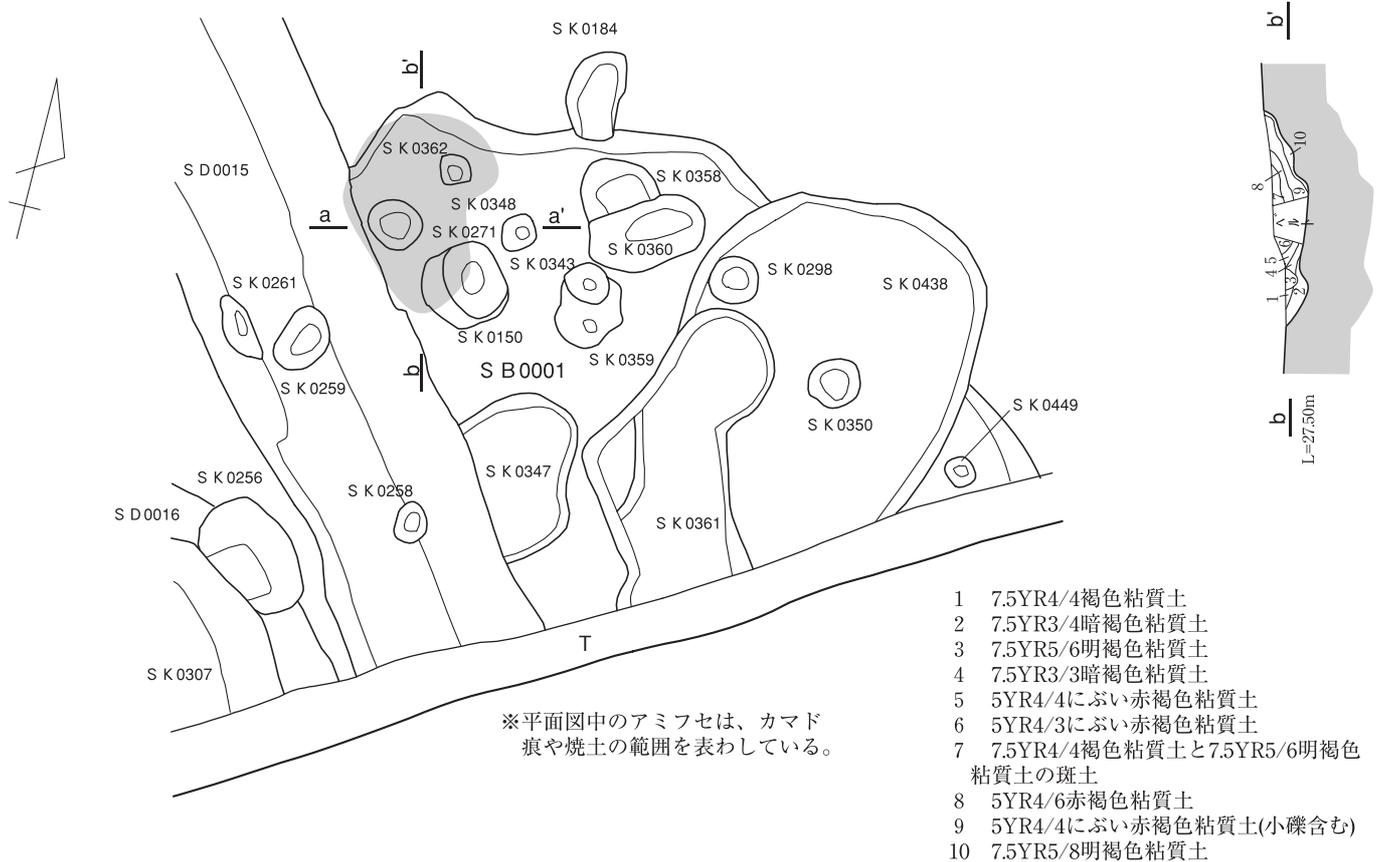
- 1 5YR3/4暗赤褐色粘質シルト
- 2 7.5YR7/1明褐色粘質シルト(炭化物多く含む)
- 3 7.5YR5/4にぶい褐色粘質シルト
- 4 2.5YR4/6オリーブ褐色粘質シルト
- 5 2.5YR4/4オリーブ褐色粘質シルト
- 6 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物含む)
- 8 5YR3/6暗赤褐色粘質シルト
- 9 7.5YR4/3褐色粘質シルトと5YR3/6暗赤褐色粘土の斑土(礫含む)
- 10 7.5YR4/4褐色粘質シル

b  
L=28.00m



b'

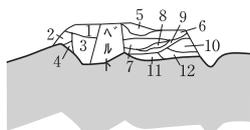
第11図 98 A S B 0003 カマド断面図 (1 : 40)



※平面図中のアミフセは、カマド  
痕や焼土の範囲を表わしている。

- 1 7.5YR4/4褐色粘質土
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 3 7.5YR5/6明褐色粘質土
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質土
- 5 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土
- 6 5YR4/3にぶい赤褐色粘質土
- 7 7.5YR4/4褐色粘質土と7.5YR5/6明褐色粘質土の斑土
- 8 5YR4/6赤褐色粘質土
- 9 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土(小礫含む)
- 10 7.5YR5/8明褐色粘質土

a  
L=27.50m



a'

- 1 7.5YR4/4褐色粘質土
- 2 7.5YR4/3褐色粘質土
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土
- 4 7.5YR4/4褐色粘質土
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質土と5YR3/6暗赤褐色粘質土
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質土(砂粒多く含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 8 5YR3/4暗赤褐色粘質土
- 9 5YR3/2暗赤褐色粘質土(小礫含む)
- 10 7.5YR4/4褐色粘質土
- 11 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 12 5YR3/2暗赤褐色粘質土(炭化物含む)

第12図 98 F S B 0001 平面図、カマド断面図 (平 1:50、カマド 1 : 40)

0001 との切り合い関係も明確ではないが、98 A S B 0003の方が新しい住居である可能性が高い。

#### 98 F 区

**98 F S B 0001** 98 F 区のやや東側で検出された竪穴住居である。周囲を後世の遺構に切られているために正確な規模は明らかではないが、長軸残存長 290cm、短軸残存長 209cm で、98 A 区で検出された住居に比べやや小規模の竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は  $N - 21^{\circ} - W$  を示していると思われる。検出面からの深さは最大 18cm を測る。床面から支柱穴 1 基 (98 F S K 0343)、北辺からカマド痕と思われる焼土が確認されている。周溝は確認されていない。また、床面で検出された 98 F S K 0358 や 98 F S K 0360 は、貯蔵穴の可能性が高いと思われる。時期については出土量が少なく明らかではないが、98 A 区で確認された他の竪穴住居と同時期と思われる。

#### 00 A 区

**00 A S B 0001** 平成 12 年度調査区の 00 A b 区の北東端で検出された竪穴住居である。表土剥ぎの段階で旧耕作土と思われる褐色粘質シルトを除去するとすぐに確認された。北側はトレンチ、南側は調査区外になるため正確な規模は明らかではないが、長軸 502cm、短軸残存長 213cm で、ほぼ 1 辺 5 m 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると思われる。住居の主軸方向は  $N - 45^{\circ} - W$  を示している。検出面からの深さは最大 28cm を測る。床面から支柱穴と思われる柱穴 1 基 (00 A S K 0255)、西側から北側にかけて周溝が検出されているが、カマド痕などは確認されていない。遺物は小片が僅かに出土しているのみで、時期を確定するまでには至っていない。

**00 A S B 0002** 00 A b 区の中央やや東寄りで検出され、00 A S B 0003 に切られる竪穴住居である。住居の南側は調査区外になるため正確な規模は明らかではないが、長軸 612cm、短軸残存長 335cm で、1 辺が 6 m 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は  $N - 59^{\circ} - W$  を示している。検出面からの深さは最大 41cm を測る。床面から支柱穴と思われる柱穴 2 基 (00 A S K 0270・00 A S K 0274)、周溝、北辺からカマド痕が検出された。カマド痕からは土師器の甕や甑がまとまって出土しているが、須恵器は少量しか出土していないため時期は不明な点が多い。他の住居と同じように 8 世紀代と考えている。

**00 A S B 0003** 00 A b 区の中央やや東寄りで検出され、00 A S B 0002 を切る竪穴住居である。遺構検出段階では確認されておらず、00 A S B 0002 を掘削した後に床面で検出された住居である。住居の南側は調査区外になるため規模は明らかではないが、長軸 410cm、短軸残存長 162cm で、1 辺が 4 m 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は  $N - 50^{\circ} - W$  を示している。検出面からの深さは推定 42cm で、00 A S B 0002 の床面より 1 cm 程低くなっている。床面から支柱穴 1 基 (00 A S K 0345)、周溝、北辺からカマド痕が検出されている。出土遺物は 00 A S B 0002 のものと明確に区別できていないが、ベルトのセクションを観察すると 00 A S B 0002 を切っていることから新しい住居であると思われる。

**00 A S X 0010** 00 A b 区の中央の北壁付近で検出された竪穴住居と思われる遺構である。住居の西側は戦国期以降の遺構に切れ北側は調査区外になるため、住居の規模・主軸方向はともに不明で、検出面からの深さは最大で 11cm を測る。床面から焼土が確認された程度で、他には何も検出されていない。出土遺物は僅かで時期は不明である。

## 00 B 区

**00 B S B 0001** 平成12年度の調査区である00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居である。住居の北東隅のみを検出しただけで残りの部分は全て調査区外となるため規模は明らかではないが、長軸残存長128cm、短軸残存長108cmで、隅丸方形の平面プランをもつ小規模な竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大23cmを測る。床面で検出された00 B S K 0841は支柱穴の可能性があるが、周溝やカマド痕などは確認されていない。製塩土器の脚部などが出土しているが、他は僅かで時期を決定することはできない。

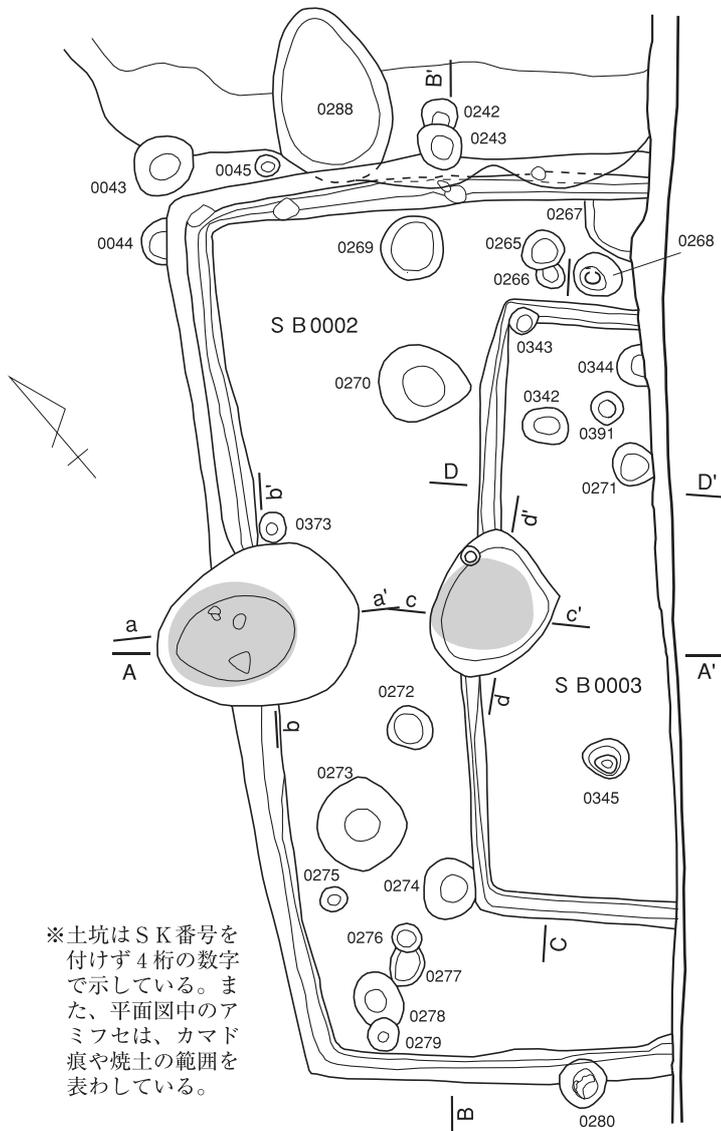
**00 B S B 0002** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、5～6棟の住居が重複関係を持ち、そのうちで一番新しい住居である。住居の北隅の一部を戦国時代以降の溝00 B S D 0001に切られているが、長軸421cm、短軸408cmで、1辺が4 m 10cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向はN - 13° - Eを示している。検出面からの深さは最大21cmを測る。床面から支柱穴2基（00 B S K 0431・00 B S K 862）、周溝、北辺からカマド痕が確認されている。00 B S K 0438は、カマドの脇に位置しているところから貯蔵穴の可能性が高い。遺物は比較的多く、土師器の甕・製塩土器の脚部以外に須恵器で鳴海32号窯様式の無台杯・有台杯・長頸瓶などが出土している。

**00 B S B 0003** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、住居の北側を00 B S B 0002に切られ00 B S B 0004・00 B S B 0005・00 B S B 0016を切っていることから、00 B S B 0002に次いで新しい住居と思われる。長軸推定389cm、短軸推定387cmで、1辺4 m弱の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。カマド痕の部分を北辺とすると、住居の主軸方向はN - 15° - Eを示すと思われる。検出面からの深さは最大でも5 cmを測るのみである。床面から支柱穴1基（00 B S K 0447）と周溝が確認されている。遺物は小片が多く時期を限定することはできないが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0002よりも古い住居であると思われる。

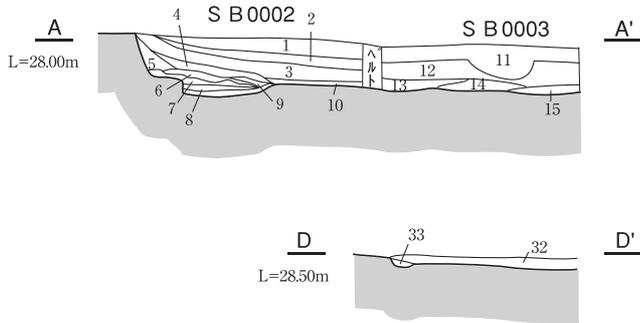
**00 B S B 0004** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0003と戦国時代以降の溝00 B S D 0001に切られ、長軸残存長102cm、短軸残存長50cmのみが確認されているだけで全体の規模・主軸方向などは不明である。検出面からの深さは最大8 cmを測る。床面からは何も検出されていない。出土遺物も細片のみのため時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0003よりも古い住居であると思われる。00 B S B 0005と同一の住居である可能性が高い。

**00 B S B 0005** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0002と戦国時代以降の溝00 B S D 0001に切られ、長軸残存長187cm、短軸残存長72cmで、北東隅の一部のみが確認されている。住居の規模・主軸方向ともに不明で、検出面からの深さは最大10cmを測る。床面からは周溝などは確認されていない。出土遺物も僅かで時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0002よりも古い住居であると思われる。00 B S B 0004と同一の住居である可能性が高い。

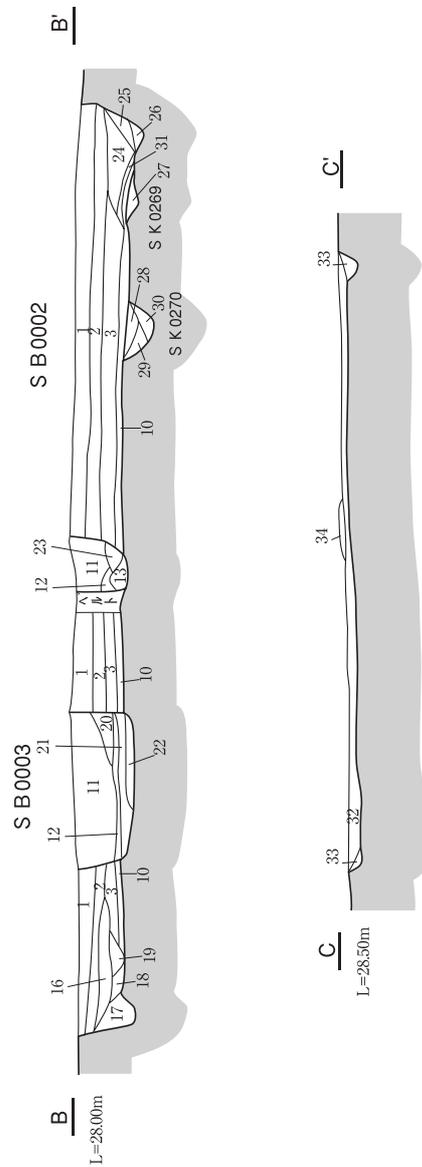
**00 B S B 0006** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0003と00 B S D 0001に切られ、長軸残存長134cm、短軸残存長81cmで南西隅の一部が確認されたのみである。住居の規模・主軸方向などは不明で、床面から周溝が確認されている。検出面からの深さは最大でも5 cmを測るのみである。出土遺物は細片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0003



※土坑はS K 番号を  
付けず 4 桁の数字  
で示している。また、平面図中のア  
ミフセは、カマド  
痕や焼土の範囲を  
表わしている。

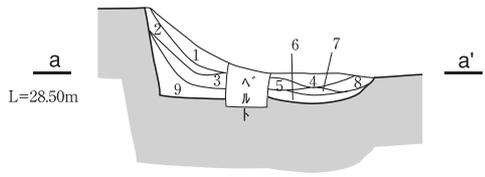


- 1 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を多く含む)
- 5 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を多く含む、固く締まっている)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)
- 10 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、炭化物を多く含む全体に黒っぽく見える)
- 11 7.5YR4/4褐色粘質シルト(礫を含む)
- 12 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を含む)
- 13 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)

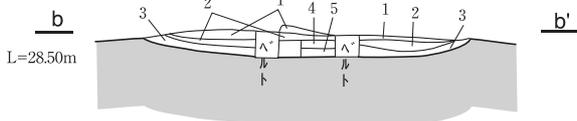


- 14 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を多く含む黒っぽく見える、焼土ブロックを含む)
- 15 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を含む)
- 16 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)
- 17 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 18 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)
- 19 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 20 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を少量含む)
- 21 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 22 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 23 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 24 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 25 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 26 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 27 7.5YR4/4褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色シルトブロックを少量含む)
- 28 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(10YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 29 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(10YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 30 10YR4/4褐色粘質シルト(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを含む)
- 31 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 32 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 33 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 34 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を多く含む黒っぽく見える)

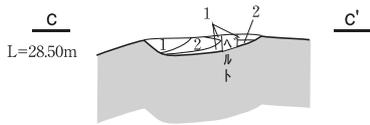
第13図 00 A S B 0002・S B 0003 平面図・断面図 (1:50)



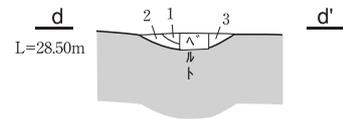
- 1 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR6/6橙色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 3 7.5YR5/6明褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 4 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 5 5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 6 5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 7 5YR4/6赤褐色焼土
- 8 5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)



- 1 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を多く含む)
- 2 5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック(小礫を含む)
- 4 5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 5 5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む)

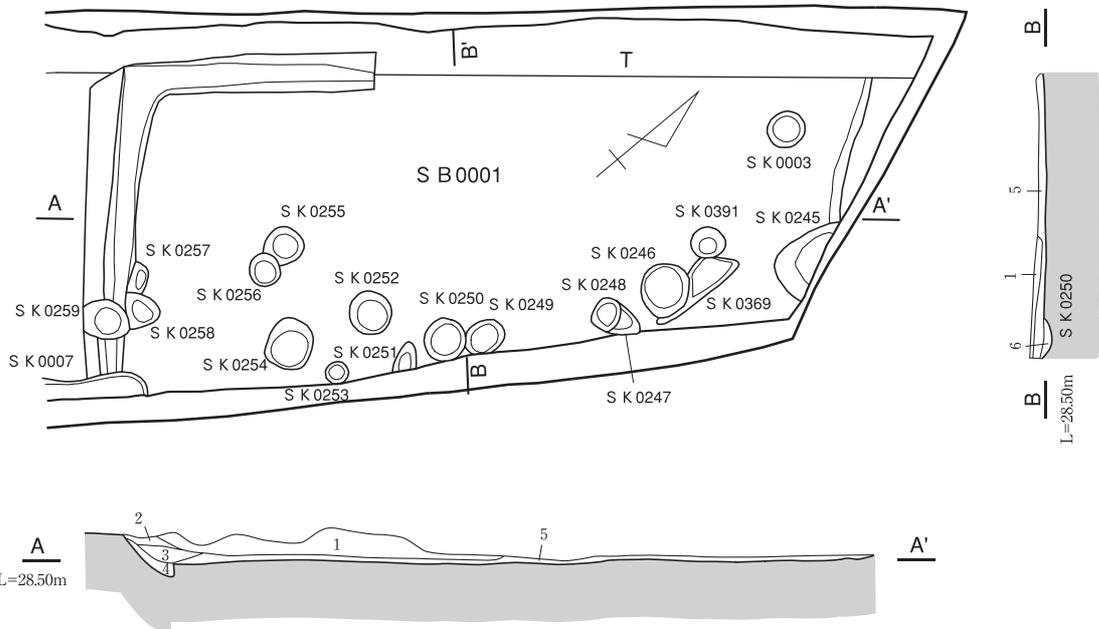


- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 2 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト(炭化物を少量含む・小礫を含む)



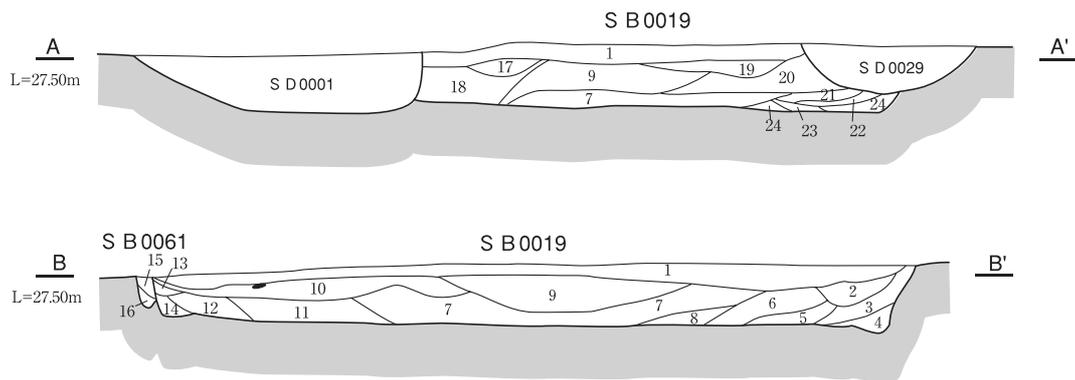
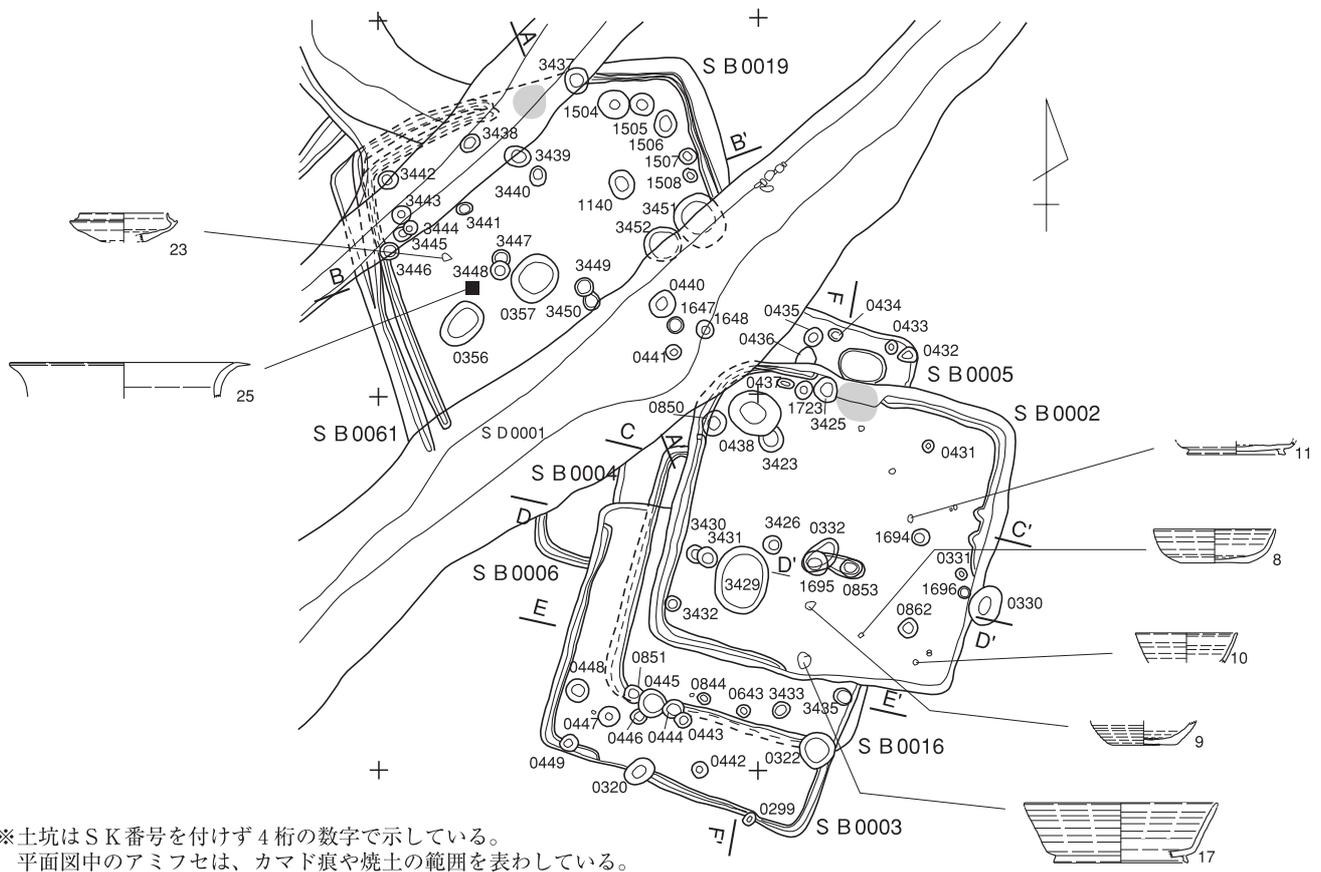
- 1 5YR5/6明赤褐色焼土と7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック(炭化物を含む)
- 2 5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物・小礫を含む)
- 3 7.5YR3/4暗赤褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)

第14図 00 A S B 0002・S B 0003 カマド断面図 (1:40)



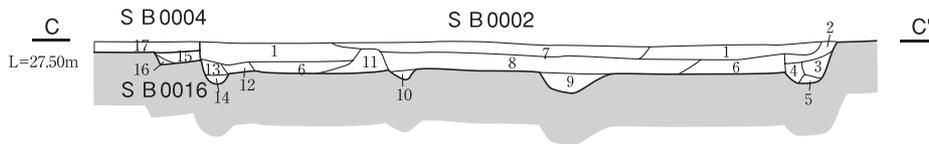
- 1 7.5YR3/4暗褐色シルト(礫・円礫を多く含む、炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR4/4褐色シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(径2~3mm程の小礫を多く含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物を多く含み黒っぽく見える)
- 6 7.5YR4/4褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物を少量含む)

第15図 00 A S B 0001 平面図・断面図 (1:50)

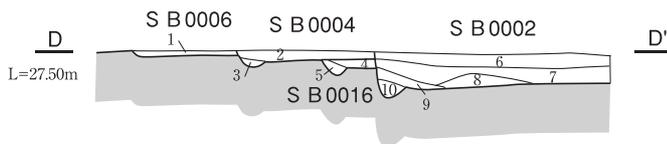


- 1 7.5YR4/3褐色シルト(炭化物を少量含む、小礫を多く含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色シルトの斑土(7.5YR5/6明褐色砂質シルトブロック・焼土ブロック・小礫を含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土(7.5YR5/6明褐色砂質シルトブロック・焼土ブロックを少量含む。炭化物を含む)
- 4 7.5YR3/4明褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色砂質シルトブロック・焼土ブロックを少量含む、締まり弱い)
- 5 5YR4/6赤褐色粘質土(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 8 7.5YR3/2黒褐色粘質土(7.5YR5/6明褐色シルトブロックを含む)
- 9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR4/4褐色シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロック・小礫・炭化物を少量含む)
- 11 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 12 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 13 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 14 7.5YR3/3暗褐色粘質土
- 15 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を含む)
- 16 7.5YR4/4暗褐色粘質シルト
- 17 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 18 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 19 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫を含む)
- 20 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 21 5YR3/4暗赤褐色シルト(焼土ブロックを含む)
- 22 7.5YR4/2灰褐色シルト(5YR3/4暗赤褐色シルトブロック・焼土ブロック・炭化物を多く含む)
- 23 2.5YR4/6赤褐色シルト 焼土か?
- 24 7.5YR3/3暗褐色粘質土(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロック・焼土ブロックを含む)

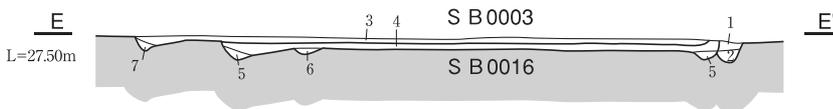
第16図 00 B S B 0002・S B 0003・S B 0004・S B 0005・S B 0006・S B 0016・S B 0019・  
 S B 0061 平面図、00 B S B 0019・S B 0061 断面図(平 1:100、断 1:50)



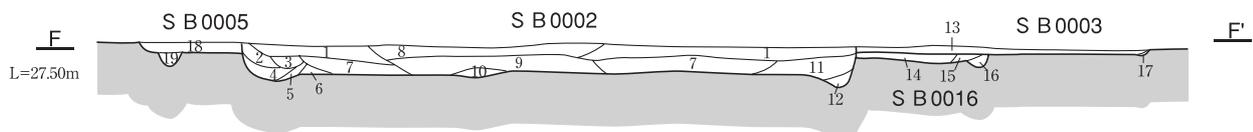
- |                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| 1 7.5YR 4/3褐色粘質シルト(小礫を多く含む)           | 10 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト                    |
| 2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫を含む)             | 11 7.5YR2/2黒褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)       |
| 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)       | 12 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)            |
| 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)            | 13 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土 |
| 5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土 | 14 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト                    |
| 6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫を含む)    | 15 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)             |
| 7 10YR3/2黒褐色シルト(小礫を多く含む)              | 16 7.5YR3/4暗褐色シルト                      |
| 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)       | 17 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)                |
| 9 7.5YR3/2黒褐色粘質土                      |  |



- |                                 |
|---------------------------------|
| 1 7.5YR5/3にぶい褐色シルト(小礫を含む)       |
| 2 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)          |
| 3 7.5YR4/3褐色シルト                 |
| 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)       |
| 5 7.5YR3/4暗褐色シルト                |
| 6 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)        |
| 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト              |
| 8 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む) |
| 9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む) |
| 10 7.5YR3/4暗褐色シルト               |



- |                           |
|---------------------------|
| 1 7.5YR 3/4暗褐色粘質シルト       |
| 2 7.5YR3/4暗褐色シルト          |
| 3 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)    |
| 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む) |
| 5 7.5YR3/4暗褐色シルト          |
| 6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト        |
| 7 7.5YR4/3褐色シルト           |



- |   |
|---|
| 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を多く含む)                      |
| 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(5YR4/8赤褐色焼土を少量含む、小礫を含む)      |
| 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(5YR4/8赤褐色焼土を多く含む、小礫・炭化物を含む)  |
| 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(焼土を少量含む、炭化物を含む)              |
| 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物を少量含む)                      |
| 6 7.5YR3/4暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)                      |
| 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫を含む)              |
| 8 10YR3/2黒褐色シルト(小礫を多く含む)                        |
| 9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)                 |
| 10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土          |
| 11 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)                |
| 12 7.5YR3/4暗褐色シルト                               |
| 13 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)                         |
| 14 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫を含む)             |
| 15 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む) |
| 16 7.5YR3/4暗褐色シルト                               |
| 17 7.5YR4/3褐色シルト                                |
| 18 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)                         |
| 19 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む)                      |

第17図 00 B S B 0002・S B 0003・S B 0004・S B 0005・S B 0006・S B 0016 断面図 (1:50)

よりは古い住居であることがわかる。

**00 B S B 0016** 00 B a 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0002・00 B S B 0003に切れ、00 B S B 0003・00 B S B 0004の床面でも確認されている。長軸推定355cm、短軸推定347cmであり、1辺が3 m 50cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつやや規模の小さな竪穴住居であると想定される。カマド痕がないため住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大で11cmを測る。床面からは周溝のみ確認され、支柱穴などは確認されなかった。出土遺物は細片が多く時期を特定することはできないが、切り合い関係のある竪穴住居の中では一番古い住居であると思われる。

**00 B S B 0019** 00 B a 区の00 B S B 0002の北で検出された竪穴住居で、戦国時代以降の溝00 B S D 0001と00 B S D 0029の間に位置する。住居の両端を溝に切られているが、長軸473cm、短軸残存長394cmで、1辺が5 m 弱の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居である。住居の主軸方向はN - 16° - Wを示している。検出面からの深さは最大41cmを測り、かなり掘り込みが深い。床面から周溝、北辺からカマド痕が確認されているが、支柱穴は不明である。土師器の甕や製塩土器の脚部以外に、須恵器で岩崎17号窯様式の杯身・蓋などが出土している。

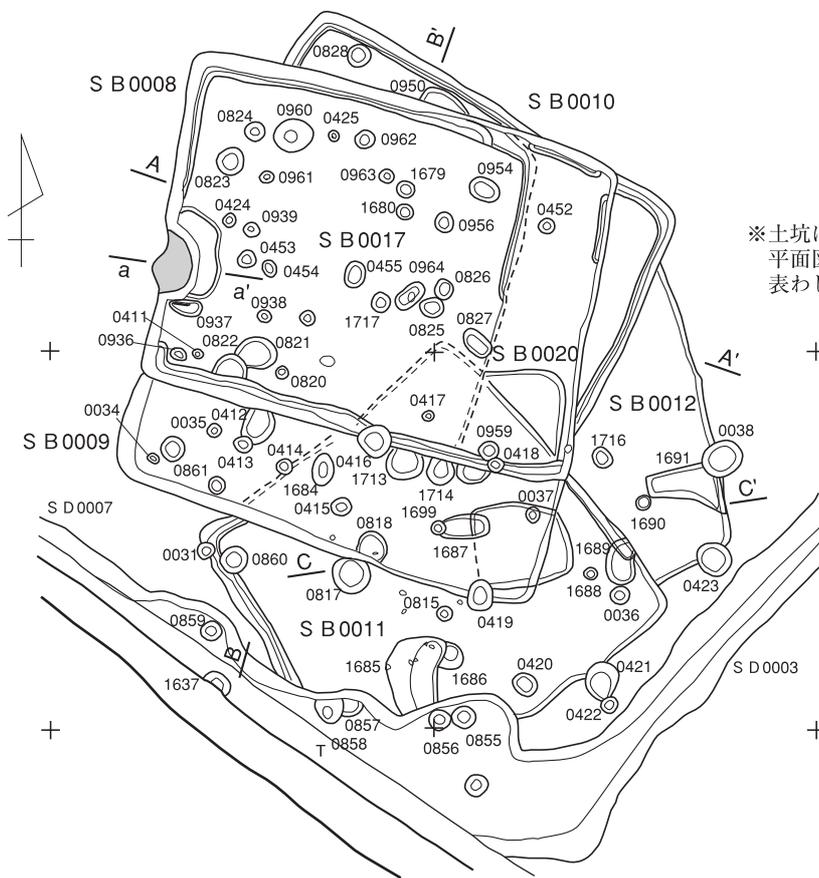
**00 B S B 0061** 00 B a 区の西側の00 B S B 0002の北で検出された竪穴住居で、00 B S B 0019に切られている。もともとは1棟の住居と考えて検出したが、掘削段階で別遺構と確認された。長軸残存長407cm、短軸残存長36cmで西側の壁のみが残るが、00 B S B 0019とほぼ同様の規模と主軸方向を持っているようである。検出面からの深さは最大21cmを測る。床面からは周溝のみが検出された。出土遺物が明確に区別できていないので時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0019より古い住居であると思われる。

**00 B S B 0007** 00 B a 区の00 B S B 0002の南東で検出された竪穴住居で、東壁の南東端に位置する。住居の大部分が調査区外になるため、規模・主軸方向ともに不明で、検出面の深さは最大27cmを測る。床面から周溝が検出されているが、他は確認できていない。出土遺物は小片が多く、時期を決定することができない。

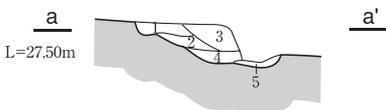
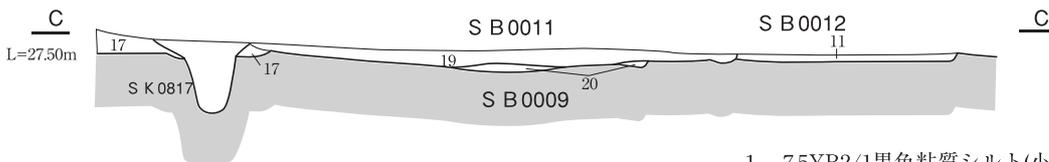
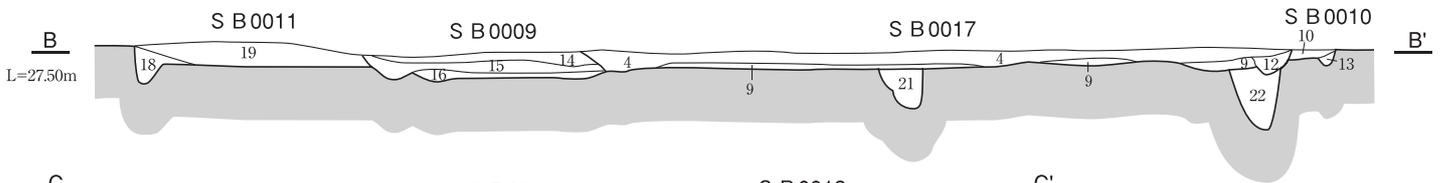
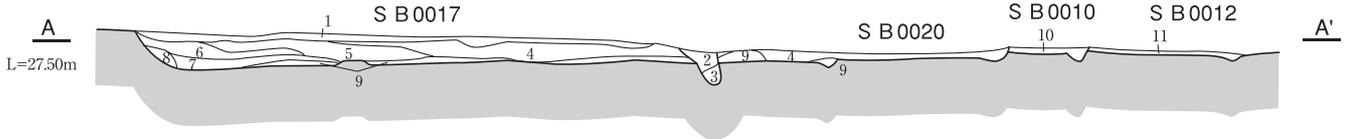
**00 B S X 0002** 00 B a 区の00 B S B 0002の南東で検出された竪穴住居で、00 B S B 0007の隣に位置する。住居の南側は00 B S B 0007で切れ、北・東側は調査区外になるため正確な規模はわかっていない。住居の主軸方向はN - 71° - Wを示しており、他の住居と大きく異なる。検出面からの深さは最大14cmを測る。床面から一部で周溝、西辺でカマド痕が確認されている。出土遺物はなく時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0007より古い住居であると思われる。

**00 B S B 0008** 00 B a 区の西壁付近で検出された竪穴住居で、5～6棟の住居が重複関係を持っている中の1棟である。00 B S B 0017に切れ規模はよくわからないが、短軸推定452cmであるところから、1辺が4 m 50cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大10cmとやや浅い。床面からは支柱穴1基(00 B S K 0452)、周溝が確認されている。土師器の甕・甑の把手以外に、須恵器で岩崎41号窯様式の無台杯が出土している。

**00 B S B 0009** 00 B a 区の西壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0008の南西に隣接している。00 B S B 0008に大半を切られているために正確な規模は不明であるが、長軸580cm、短軸残



※土坑はSK番号を付けず4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を  
 表わしている。



- 1 7.5YR2/1黒色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 3 地山と2.5Y3/2黒褐色粘質シルトの斑土
- 4 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山・粗粒砂を含む、炭化物を多く含む)
- 5 10YR3/1黒褐色シルト(地山を含む)
- 6 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山・粗粒砂を含む、炭化物を多く含む)
- 7 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物・焼土を多く含む)
- 8 地山(7.5YR3/2黒褐色シルト・焼土を少量含む)
- 9 地山(7.5YR3/2黒褐色シルトを少量含む、縮まり強い)
- 10 7.5YR4/2灰褐色シルト
- 11 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 12 7.5YR2/3極暗褐色シルトと地山ブロックの斑土
- 13 10YR4/2灰黄褐色シルト(地山を含む)
- 14 7.5YR3/2黒褐色シルト(炭化物を少量含む)
- 15 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山を含む、粗粒砂・炭化物を多く含む)
- 16 7.5YR3/2黒褐色シルトと地山の斑土(焼けて赤化した箇所有り)
- 17 10YR2/2黒褐色シルト(地山ブロック・粗粒砂・炭化物・焼土を少量含む)
- 18 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト(N3/暗灰色砂質シルトを含む)
- 19 10YR2/2黒褐色シルト(粗粒砂・炭化物を少量含む)
- 20 10YR2/2黒褐色シルト(地山を含む)
- 21 7.5YR3/2黒褐色シルト
- 22 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む)

- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む、焼土ブロックを多く含む)
- 2 5YR3/3暗赤褐色粘質土(小礫・炭化物・焼土ブロックを少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、焼土ブロックを少量含む)
- 4 5YR3/2暗褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 5 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト(やや固く締まる、小礫を少量含む)

第18図 00 B S B 0008・S B 0009・S B 0010・S B 0011・S B 0012・S B 0017・S B 0020  
 平面図・断面図(平1:100、断1:50)

存長347cmで、1辺が5m80cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ規模の大きな竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大21cmを測る。床面からは周溝のみが確認されている。出土遺物が小片であるが、00BSB0008よりも古い住居であると思われる。

**00BSB0010** 00Ba区の西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0008の北東に位置する。00BSB0008に大部分を削平されているため規模は不明であるが、長軸556cm、短軸残存長347cmで、1辺が5m50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ住居と考えられる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大13cmを測る。床面からは周溝のみが確認されている。出土遺物には小片が多く時期はわかりにくい、遺構の切り合い関係から00BSB0008よりも古い住居であると思われる。

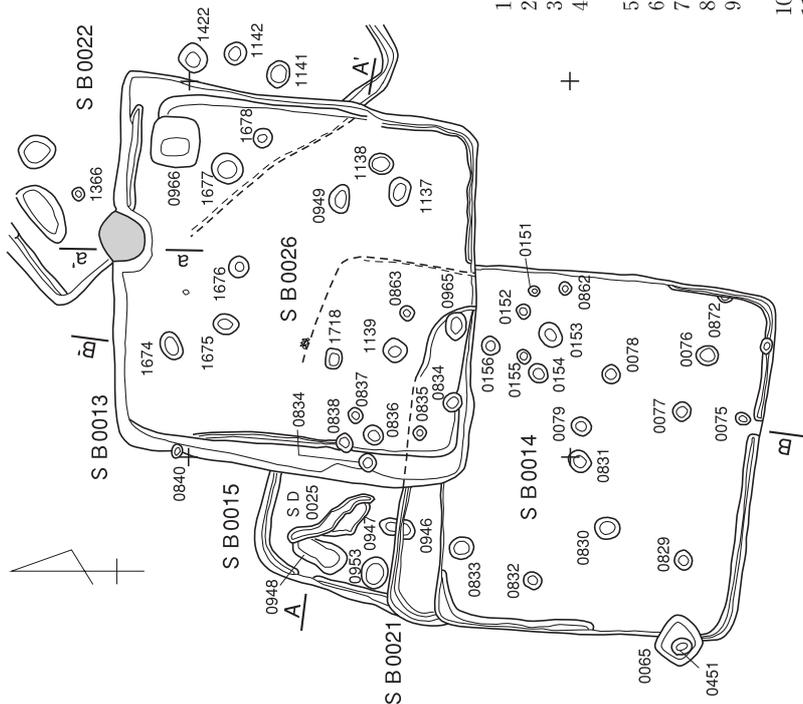
**00BSB0011** 00Ba区の西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0009の南に隣接している。住居は00BSB0009や戦国時代以降の溝00BSD0007に切られているが、長軸464cm、短軸推定456cmで、1辺が4m60cm前後のやや歪んではいるが隅丸方形の平面プランをもつ住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大22cmを測る。床面からは周溝のみが確認されている。出土遺物には小片が多く時期はわかりにくい、遺構の切り合い関係から00BSB0009よりは古い住居であると思われる。

**00BSB0012** 00Ba区の西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0010の南、00BSB0011の北に位置している。住居の大半を00BSB0010や00BSB0011に切られているため南東隅のみが検出され、長軸残存長351cm、短軸残存長192cmで、住居の規模・主軸方向ともに不明である。検出面からの深さは最大でも僅かに5cmである。床面からは明確な遺構は確認されていない。出土遺物には小片が多く時期は確定できないが、遺構の切り合い関係から00BSB0011よりも古い住居であると思われる。

**00BSB0017** 00Ba区の西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0008を切って検出されていることから、一番新しい住居となると考えられる。長軸468cm、短軸452cmで、1辺が4m50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向はN-78°-Wを示しており、検出面からの深さは最大22cmを測る。床面からは、主柱穴3基(00BSK0960・00BSK0954・00BSK0821)、周溝、西辺やや南からカマド痕が検出されている。00BSB0008と遺物が明確に区別できていないが、岩崎41号窯様式かそれ以降の時期と思われる。

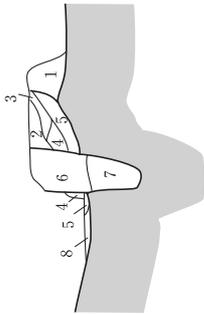
**00BSB0020** 00Ba区の西壁付近で検出された住居で、00BSB0008の範囲中で確認されている。住居の大部分を00BSB0011・00BSB0017に削平されているため、北東隅のみが確認されている。そのため住居の規模・主軸方向ともに不明であるが、隅丸方形の平面プランを持つ竪穴住居であると想定される。00BSB0008の床面からの深さは僅かに4cmである。床面から遺構は検出されておらず、時期も不明である。

**00BSB0013** 00Ba区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、6棟の住居が重複して確認されている中の1棟である。その規模は長軸504cm、短軸494cmで、1辺が5m前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居である。住居の主軸方向はN-3°-Eを示しており、検出面からの深さは最大28cmを測る。床面からは、主柱穴と思われる柱穴4基(00BSK1675・00BSK1677・00



- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、地山ブロックを少量含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・焼土ブロックを含む)
- 3 5YR3/3暗赤褐色粘質土(小礫を少量含む、炭化物・焼土ブロックを含む)
- 4 5YR3/2暗赤褐色粘質土(小礫を少量含む、炭化物・焼土ブロックを含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(カマド埋土を含む)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・カマド埋土を含む)
- 8 5YR3/4暗赤褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)

a'

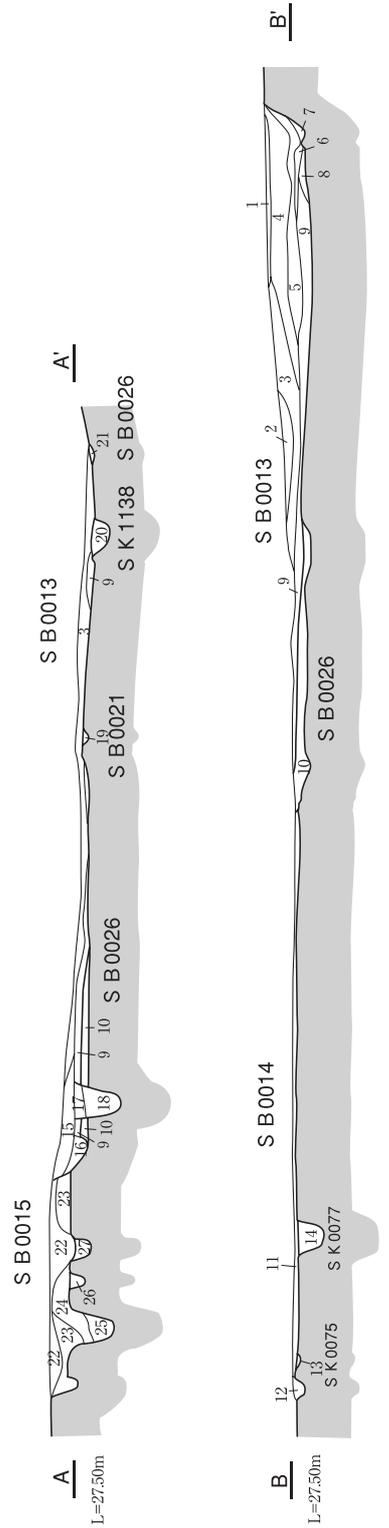


a  
L=27.50m

- 1 10YR2/2黒褐色粘質シルト(粗粒砂を多く含む)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト(地山・粗粒砂・炭化物を少量含む)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト(地山・粗粒砂・炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山・炭化物を含む、粗粒砂を多く含む)
- 5 10YR2/2黒褐色シルト(粗粒砂・炭化物を含む)
- 6 7.5YR2/2黒褐色シルト(地山を少量含む)
- 7 7.5YR2/2黒褐色シルト(地山を少量含む)
- 8 7.5YR6/4にぶい褐色シルト
- 9 7.5YR6/6棕色シルト(7.5YR2/2黒褐色シルトを含む、堅く締まる) S B 0013貼床
- 10 10YR2/2黒褐色シルト S B 0026埋土
- 11 7.5YR5/8明褐色シルト(地山・粗粒砂を含む、10YR3/2黒褐色シルトを含む)
- 12 7.5YR5/2灰褐色シルト(地山を含む)
- 13 7.5Y R 4/2灰褐色シルト

- 14 7.5YR4/1褐灰色シルト
- 15 10YR2/2黒褐色シルト
- 16 10YR2/2黒褐色シルトと地山の斑土
- 17 地山(10YR2/2黒褐色シルトを少量含む)
- 18 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山を少量含む)
- 19 7.5YR4/2灰褐色シルト
- 20 7.5YR2/1黒色粘質シルト
- 21 10YR2/2黒褐色シルト(地山を少量含む)
- 22 10YR2/3暗褐色シルト(粗粒砂を少量含む)
- 23 7.5YR3/2黒褐色シルトと7.5YR2/1黒色シルトの斑土
- 24 7.5YR3/3暗褐色シルト(地山ブロック・粗粒砂・小礫を含む)
- 25 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 26 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 27 7.5YR3/4暗褐色シルト(地山を多く含む)

※土坑はS K 番号を付けず4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。



第19図 00 B S B 0013・S B 0014・S B 0015・S B 0021・S B 0026 平面図・断面図 (平 1:100、断 1:50)  
 00 B S B 0013 カマド断面図 (1:40)

B S K 1137・00 B S K 1139)、貯蔵穴 (00 B S K 0966)、周溝、北辺でカマド痕を検出した。土師器の土錘以外は小片が多く、須恵器で岩崎 17 号窯様式と思われる有台杯が出土している。遺構の切り合い関係から重複した住居の中では一番新しい住居であると思われる。

**00 B S B 0014** 00 B a 区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、00 B S B 0013 に南接している。住居の北東隅を 00 B S B 0013 に切られているが、長軸 481cm、短軸 400cm で、隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。カマド痕が確認されていないため住居の主軸方向は不明であるが、00 B S B 0013 によく似ている。検出面からの深さは最大でも 5 cm のみである。床面から、支柱穴と思われる柱穴 4 基 (00 B S K 0076・00 B S K 0156・00 B S K 0829・00 B S K 0833)、周溝の一部が検出された。出土遺物は小片が多く時期を確定することは難しいが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0013 よりも古い住居であると思われる。

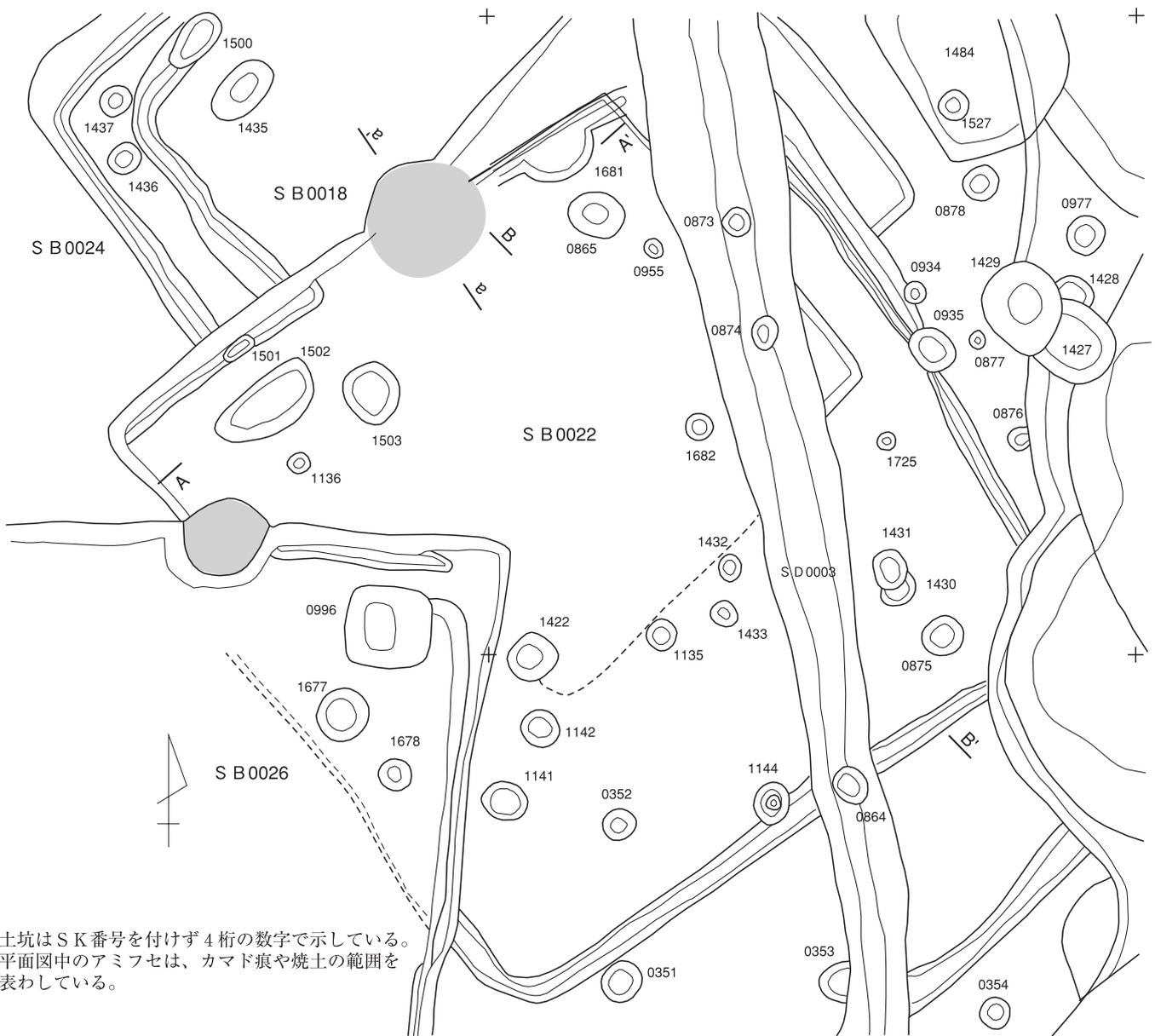
**00 B S B 0015** 00 B a 区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、00 B S B 0013 や 00 B S B 0014 に切られている。他の住居に削平され北西隅のみの検出のために規模は不明であるが、長軸推定 460cm、短軸残存長 184cm で、1 辺が 4 m 60cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 14cm を測る。床面からは周溝のみ確認されている。出土遺物は小片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0021 より古い住居であると思われる。

**00 B S B 0021** 00 B a 区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、00 B S B 0015 を切って検出されている。00 B S B 0015 と同様に住居の北辺を検出したのみで、長軸推定 428cm、短軸残存長 63cm で、1 辺が 4 m 30cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 8 cm である。床面からは周溝のみ確認されている。時期は不明であるが、切り合い関係から 00 B S B 0015 より新しく 00 B S B 0014 より古い住居であると思われる。

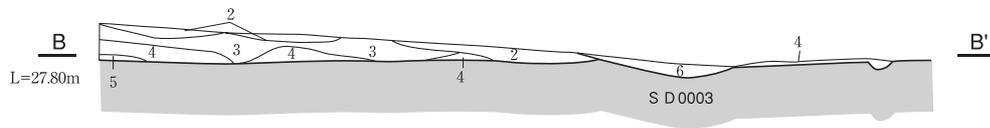
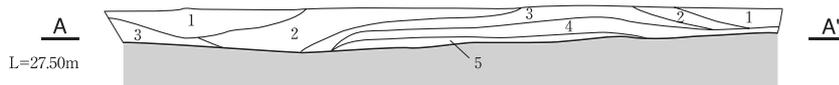
**00 B S B 0026** 00 B a 区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、00 B S B 0013 を掘削している時に確認された。長軸 494cm、短軸 451cm で、南北方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居である。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 30cm を測る。床面からは周溝のみが確認されているが、00 B S B 0013 の支柱穴と考えた柱穴がこの住居の支柱穴になる可能性もある。出土遺物も 00 B S B 0013 と明確に区分できていないため、不明な点が多い。

**00 B S B 0022** 00 B a 区の中央やや南寄りで検出された竪穴住居で、00 B S B 0013 に切られて確認されている。長軸推定 606cm、短軸推定 594cm で、1 辺が 6 m 前後の隅丸方形の平面プランをもつやや大型の竪穴住居である。住居の主軸方向は N - 38° - W を示しており、検出面からの深さは 27cm を測る。床面からは、支柱穴になるとと思われる柱穴 3 基 (00 B S K 0865・00 B S K 1141・00 B S K 1430)、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物には小片が多く時期を確定できないが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0013 よりも古い住居と思われる。

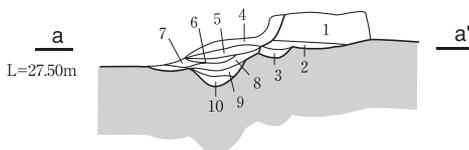
**00 B S B 0018** 00 B a 区のほぼ中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0022 の北側で 5 棟の住居が切り合っている中の 1 棟で、00 B S B 0024 と重複している。住居の大半を 00 B S B 0022 に切られているため全体の規模は確かではないが、長軸推定 421cm、短軸残存長 226cm で、1 辺が 4 m



※土坑はSK番号を付けず4桁の数字で示している。平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。



- 1 7.5YR3/4暗褐色シルト(地山ブロック・粗粒砂・小礫多く含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色シルトと細粒砂(地山・粗粒砂・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色シルトと7.5YR3/1黒褐色シルトの斑土(地山ブロックを含む、粗粒砂・小礫・炭化物を多く含む)
- 4 7.5YR3/2黒褐色シルト(粗粒砂を少量含む、炭化物を多く含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色シルト(地山ブロックを含む、炭化物・焼土を多く含む)
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトと細粒砂



- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルトと地山ブロック(小礫を含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと5YR4/8赤褐色焼土ブロック(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 5 5YR3/3暗赤褐色粘質土(小礫・焼土ブロックを含む)
- 6 5YR3/2暗赤褐色粘質土(炭化物を多く含む)
- 7 5YR3/2暗赤褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 8 5YR4/3にぶい赤褐色粘質土(小礫を少量含む)
- 9 7.5YR4/3褐色粘質土と地山ブロック(炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR4/3褐色粘質土(地山ブロックを少量含む)

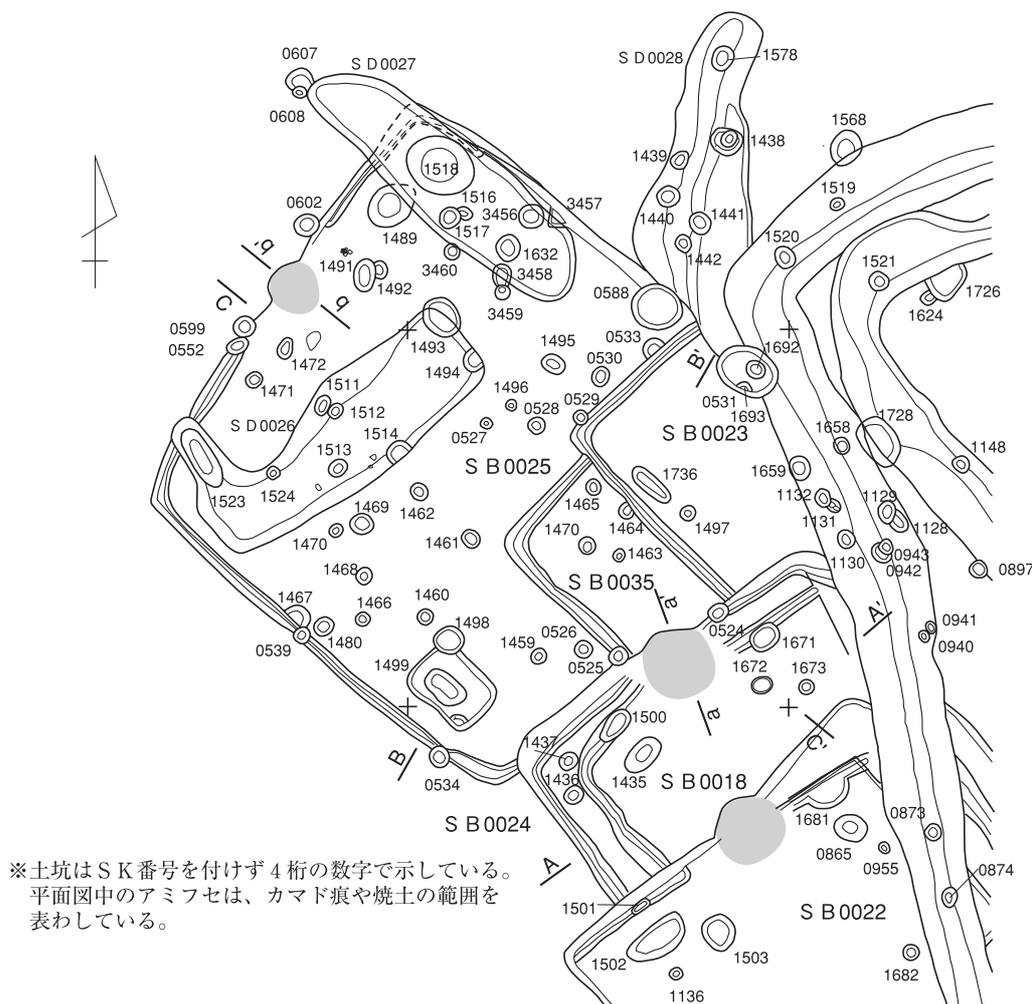
第20図 00 B S B 0022平面図・断面図、カマド断面図(平・断1:50、カマド1:40)

20cm程の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明であるが、00 B S B 0024 よりやや西に振れている。検出面からの深さは最大 23cm を測る。床面からは周溝のみが確認されている。遺物は小片が多く時期は不明であるが、00 B S B 0024 より古い住居であると思われる。

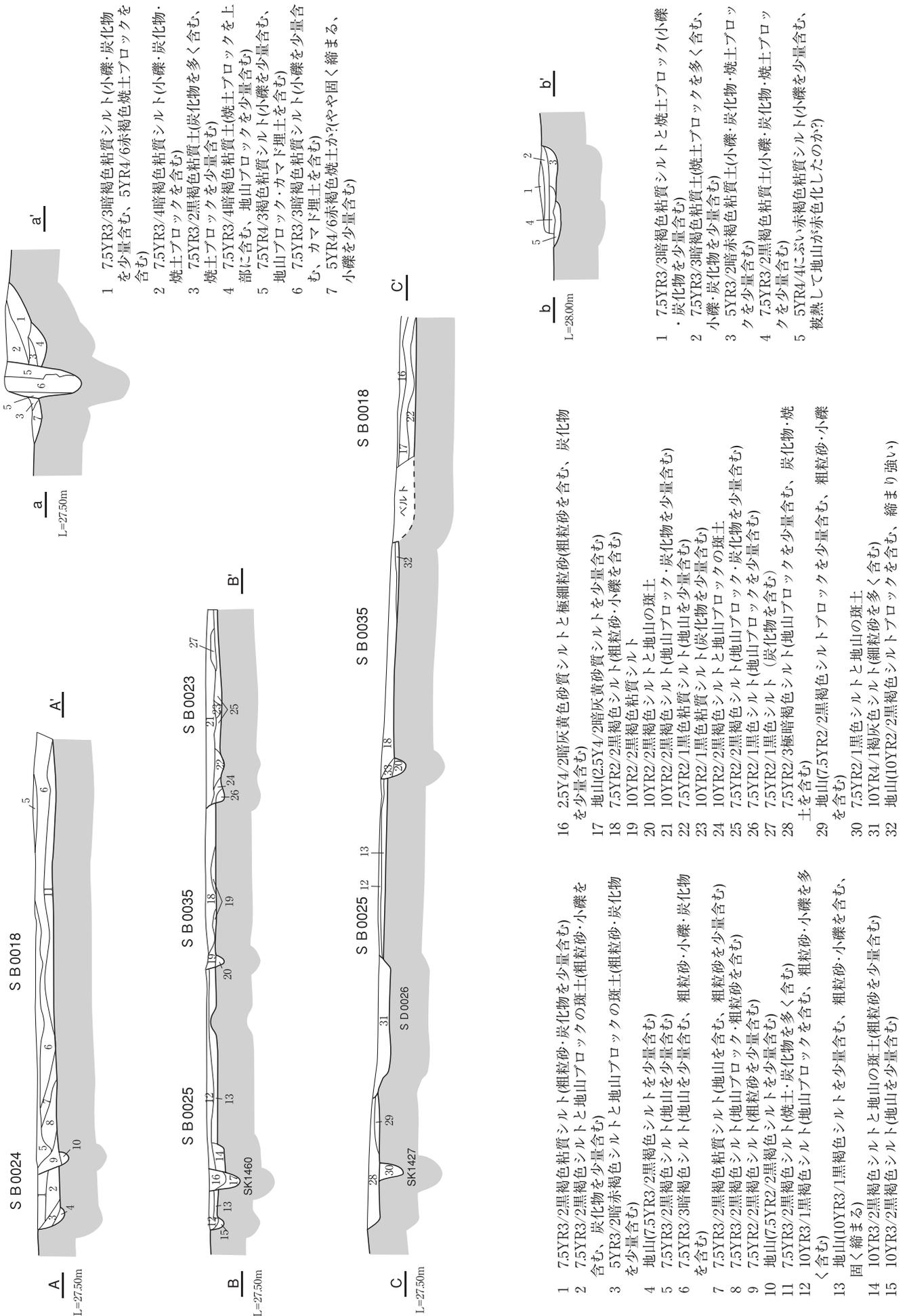
**00 B S B 0023** 00 B a 区のほぼ中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0024 の北側に位置する。住居の大半を 00 B S B 0024 や戦国時代以降の溝 00 B S D 0023・00 B S D 0024 により削平され、北西隅のみが検出されたのみである。長軸残存長 350cm、短軸残存長 228cm で、住居の規模・主軸方向ともに不明である。検出面からの深さは最大 27cm を測る。床面からは周溝のみが確認された。出土遺物には小片が多く不明であるが、00 B S B 0024 より古い住居であると思われる。

**00 B S B 0024** 00 B a 区のほぼ中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0022 に北接している。住居の南側を大きく 00 B S B 0022 に切られているが、長軸推定 480cm、短軸残存長 284cm で、1 辺が 4 m 80cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は N - 34° - W を示し、検出面からの深さは最大 20cm を測る。床面からは、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。土師器の土錘以外には小片が多いが、須恵器で岩崎 17 号窯様式の杯身も出土している。

**00 B S B 0025** 00 B a 区のほぼ中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0023 と 00 B S B 0024 の北側に位置している。住居の南側を他の住居に切られているが、長軸残存長 670cm、短軸推定 667cm で、1 辺が 6 m 70cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ大型の竪穴住居である。住居の方向



第 21 図 00 B S B 0018・S B 0023・S B 0024・S B 0025・S B 0035 平面図 (1:100)



第22図 00 B S B 0018・S B 0023・S B 0024・S B 0025・S B 0035 断面図 (1:50)  
 00 B S B 0018・S B 0025 カマド断面図 (1:40)

性はN - 53° - Wを示し、検出面からの深さは最大16cmを測る。床面からは、貯蔵穴と思われる土坑2基(00 B S K 1489・00 B S K 1518)、周溝、北辺にカマド痕を確認している。遺物は、土師器の土錘以外は小片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0023や00 B S B 0024よりも古い住居であることは確認される。

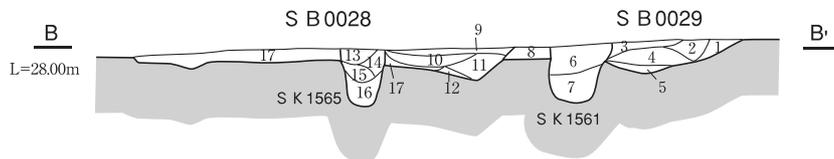
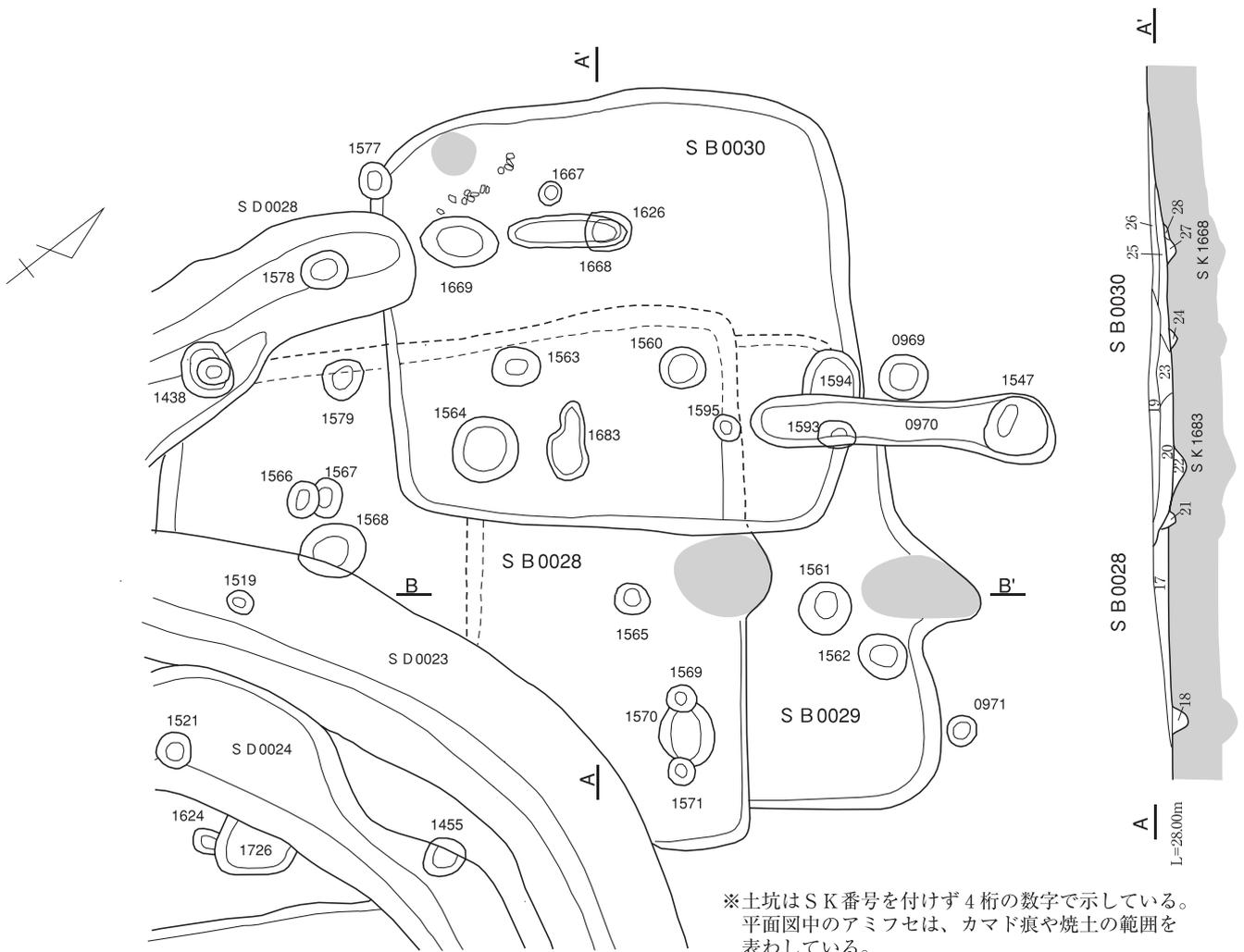
**00 B S B 0035** 00 B a 区のほぼ中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0023の西側に位置している。住居の大半を00 B S B 0023や00 B S B 0024に切られており正確な規模は不明であるが、長軸残存長267cm、短軸残存長162cmで、隅丸方形の平面プランをもつ住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大14cmを測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴1基(00 B S K 1670)、周溝を確認している。出土遺物には小片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0023や00 B S B 0024より古くS B 0025よりも新しい住居であると思われる。

**00 B S B 0027** 00 B a 区の中央から南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居である。住居の大半が調査区外(U字溝の下で調査不能)になるため規模・主軸方向ともに不明であるが、長軸残存長347cm、短軸残存長162cmで、隅丸方形とは言い切れない不定形な平面プランをもつ住居と思われる。検出面からの深さは最大13cmを測る。床面からは柱穴になりそうな土坑以外検出されていない。遺物は小片が多いが、須恵器で東山50号窯様式以前と思われる高杯、東山50号窯様式から岩崎17号窯様式までの無台杯、岩崎17号窯様式頃の杯蓋などが住居内や土坑から出土している。

**00 B S B 0028** 00 B a 区の中央で戦国時代以降の溝00 B S D 0023や00 B S D 0024が湾曲する北側で検出された竪穴住居である。00 B S D 0023や00 B S D 0024に切られているが、長軸推定400cm、短軸392cmで、1辺が4m前後の隅丸方形の平面プランをもつやや小型の住居である。住居の主軸方向はN - 37° - Eを示し、検出面からの深さは最大7cmを測る。床面からは、周溝の一部と北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物には、製塩土器の脚部以外の須恵器・土師器ともに小片が多く、時期を決定することができない。なお、00 B S B 0028・00 B S B 0029を切っている00 B S B 0030は戦国時代の竪穴状建物である。

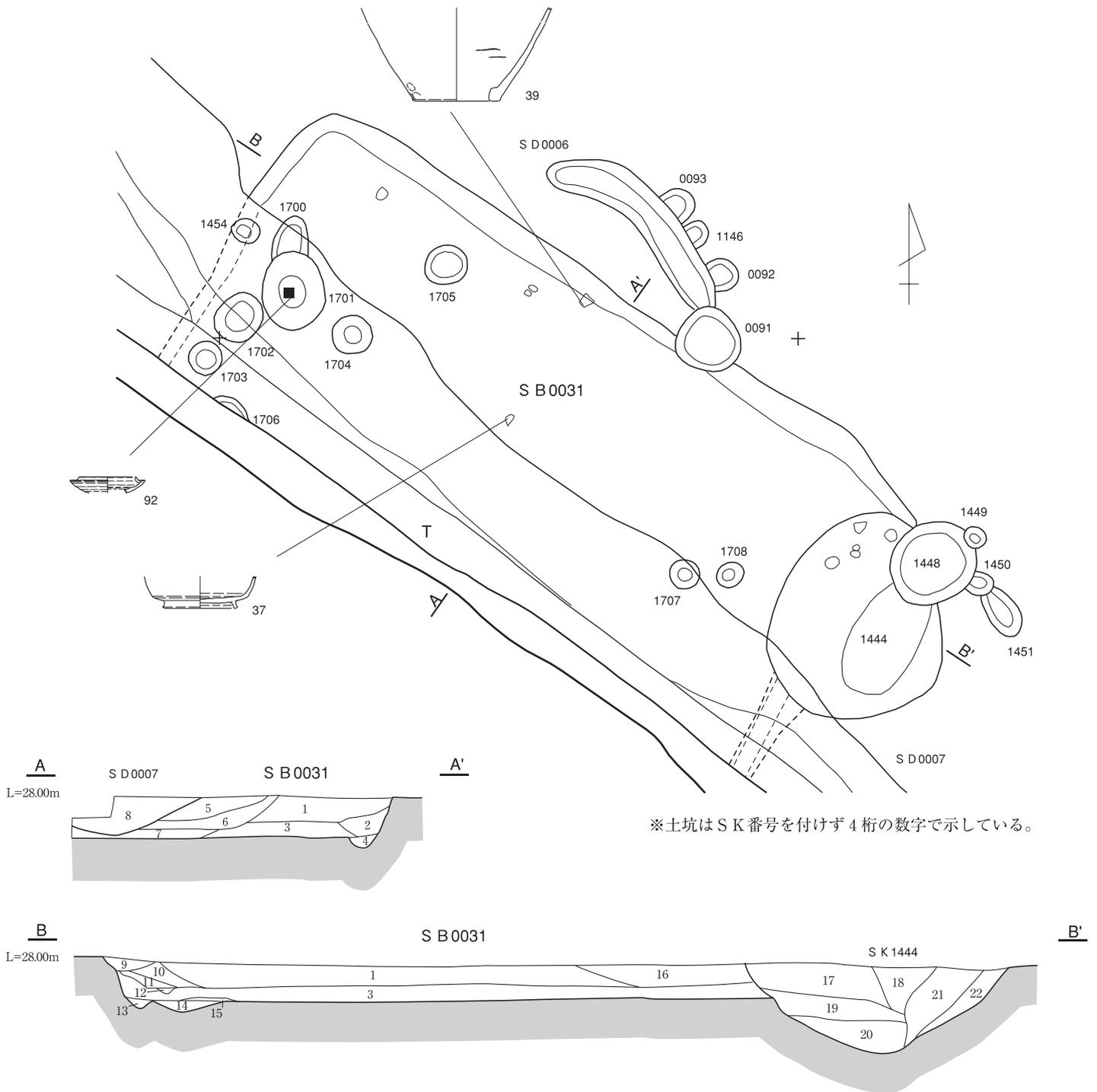
**00 B S B 0029** 00 B a 区の中央で検出された竪穴住居で、00 B S B 0028の北東側に位置する。住居の大半は00 B S B 0028に切られてはいるが、長軸364cm、短軸340cmで、不定方形の平面プランをもつやや小型の竪穴住居である。住居の主軸方向はN - 32° - Eを示し、検出面からの深さは最大17cmを測る。床面からは、北辺でカマド痕を検出した以外に周溝などは確認されていない。出土遺物には小片が多く時期を決定することは難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0028よりも古い住居であると思われる。

**00 B S B 0031** 00 B a 区の中央やや南寄りの西壁付近で検出された竪穴住居である。住居の大半は戦国時代以降の溝00 B S D 0007に切られたり、調査区外になるため正確な規模は不明であるが、長軸推定645cm、短軸残存長274cmで、1辺が6m50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ大型の竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大43cmを測り00 B S B 0019よりも深くなっている。床面からは周溝が検出された程度で、柱穴やカマド痕は確認されていない。遺物には小片が多かったが、土師器の土錘や製塩土器の脚部や甌以外に須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯や平瓶の口縁部が出土している。



- 1 7.5YR4/6褐色粘質シルト(小礫を含む、7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを少量含む?)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・地山ブロックを含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質土(焼土ブロックを含む)
- 5 5YR4/4にぶい赤褐色焼土(粘質強い)
- 6 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂を含み、締まり弱い)
- 7 10YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む、地山ブロック・焼土ブロックを含む)
- 9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロックを含む、炭化物を多く含む)
- 10 5YR4/6赤褐色焼土(固く締まったところもある)
- 11 10YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)
- 12 10YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 13 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 14 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・地山ブロックを少量含む)
- 15 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土(小礫・炭化物を少量含む)
- 16 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を少量含む、7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む)
- 17 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、焼土ブロック・地山ブロックを含む)
- 18 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロック・小礫を少量含む)
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 20 10YR4/2灰黄褐色シルト(地山ブロックを少量含む)
- 21 10YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 22 7.5YR4/6褐色粘質シルト(10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロックを含む)
- 23 7.5YR3/4暗褐色粘質土(10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック・炭化物を少量含む)
- 24 7.5YR3/4暗褐色シルト(地山ブロックを含む)
- 25 10YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 26 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 27 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(地山ブロック・小礫・炭化物を少量含む)
- 28 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(地山ブロックを少量含む)

第 23 図 00 B S B 0028・S B 0029・S B 0030 平面図・断面図 (1:50)



※土坑は S K 番号を付けず 4 桁の数字で示している。

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を含む)</li> <li>2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物・地山ブロックを少量含む)</li> <li>3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む、炭化物・地山ブロックを含む)</li> <li>4 7.5YR3/3暗褐色シルト</li> <li>5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)</li> <li>6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)</li> <li>7 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物・地山ブロックを少量含む)</li> <li>8 10YR3/3暗褐色粘質土(砂を含む)</li> <li>9 7.5YR4/2灰褐色シルト(小礫を含む)</li> <li>10 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む、地山ブロックを少量含む)</li> <li>11 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)</li> <li>12 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・地山ブロックを含む)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>13 7.5YR3/3暗褐色シルト(地山ブロックを含む)</li> <li>14 7.5YR4/4褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)</li> <li>15 7.5YR5/6明褐色砂質シルト(7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む)</li> <li>16 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと地山の斑土(小礫・炭化物を含む)</li> <li>17 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を多く含む、炭化物を少量含む)</li> <li>18 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと地山ブロック(小礫を多く含む)</li> <li>19 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を多く含む、炭化物・地山ブロックを少量含む)</li> <li>20 7.5YR3/2黒褐色粘質土と地山ブロック(小礫を少量含む、炭化物を含む)</li> <li>21 5YR4/6赤褐色粘質シルト(小礫を含む)</li> <li>22 7.5YR4/6褐色粘質シルト(小礫を含む)</li> </ul> |
|--|---|

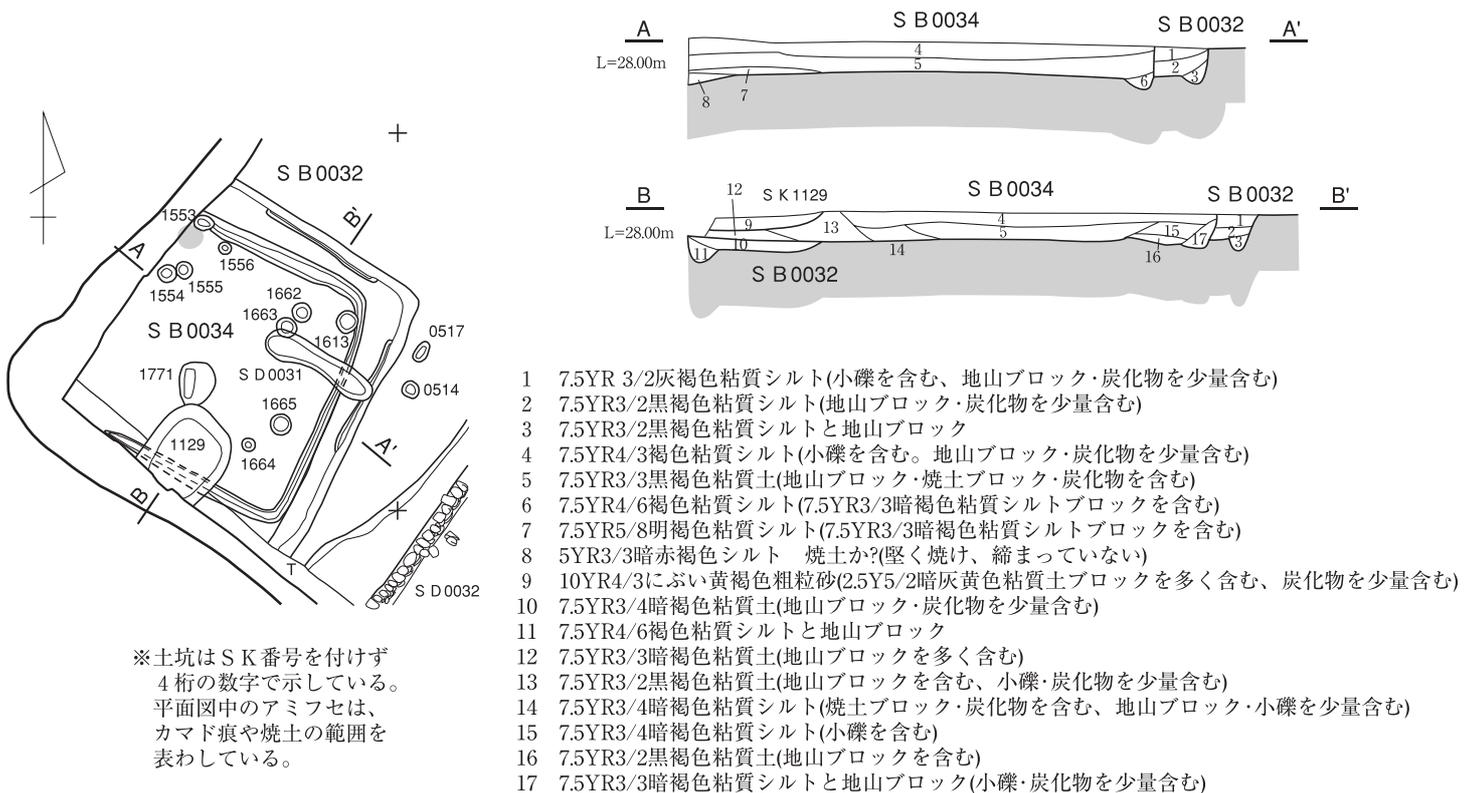
第 24 図 00 B S B 0031 平面図・断面図 (1:50)

**00 B S B 0032** 00 B a 区の西端で検出された竪穴住居である。住居の一部が調査区外に出てしまうために正確な規模は不明であるが、長軸残存長 398cm、短軸残存長 362cm で、1 辺が 4 m 強の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 21cm を測る。床面からは周溝が検出されるのみである。遺物には小片が多く土師器の土錘の他、須恵器で岩崎 17 号窯様式の無台杯や鉢、東山 50 号窯様式か岩崎 17 号窯様式の甕の口縁部が出土している。

**00 B S B 0034** 00 B a 区の西端で検出された竪穴住居で、00 B S B 0032 の範囲内で検出されている。住居の一部が調査区外に出ているが、長軸 341cm、短軸残存長 326cm で、1 辺が 3 m 40cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居である。住居の方向性は不明であるが、北壁付近で焼土が確認されているのでこの辺りにカマドがあったとすれば住居の主軸方向は N - 27° - E を示すこととなる。検出面からの深さは最大 21cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 3 基 (00 B S K 1554・00 B S K 1663・00 B S K 1664)、周溝、北壁付近で焼土を確認している。出土遺物は小片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0032 より新しい住居であると思われる。

**00 B S B 0033** 00 B a 区の西側の北壁付近で検出された竪穴住居である。戦国時代以降の溝 00 B S D 0030 や江戸時代後期の石組みの溝 00 B S D 0032 に切られているが、長軸推定 410cm、短軸推定 385cm で、1 辺が 4 m 前後の隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は N - 66° - W を示し、検出面からの深さは最大 16cm を測る。床面からは周溝と西辺でカマド痕を確認している。出土遺物は小片が多く、時期は不明である。

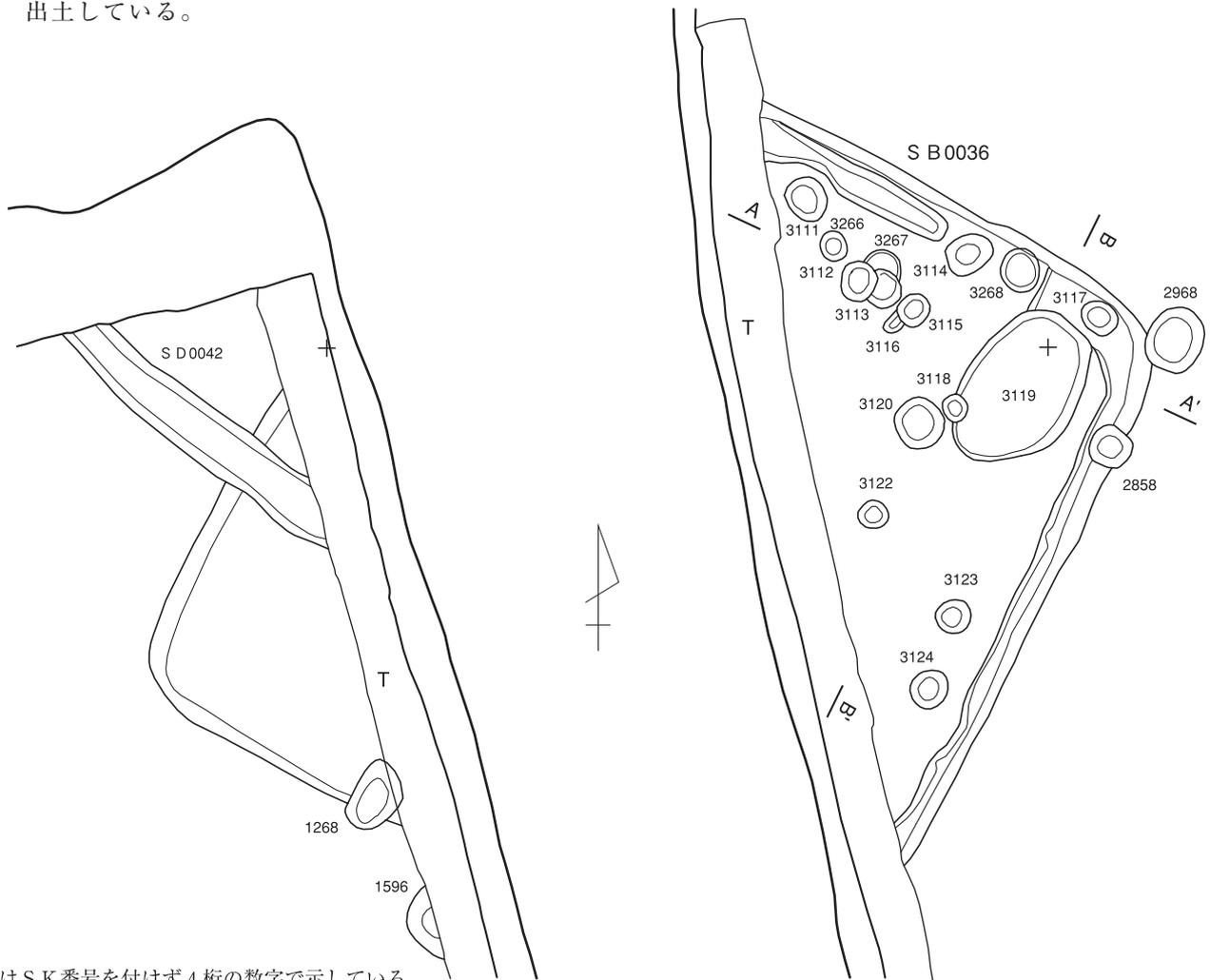
**00 B S B 0037** 00 B 区のやや北寄り、B a 区と B b 区にまたがって検出された竪穴住居である。調査区外の部分はあるが、長軸 475cm、短軸推定 433cm で、隅丸方形に近い平面プランをもつ竪穴



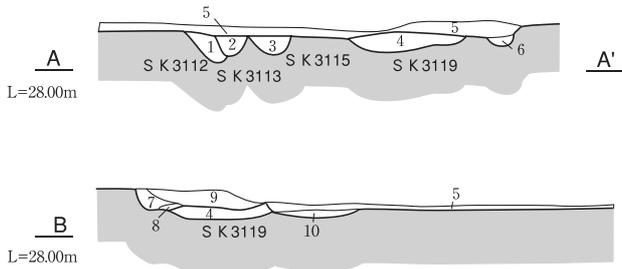
第 25 図 00 B S B 0032・S B 0034 平面図・断面図 (平 1:100、断 1:50)

住居である。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大16cmを測る。床面からは、周溝を確認したのみである。遺物は小片が多く、土師器の甕・甌以外に須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯や高杯が出土している。

**00 B S B 0036** 00 B 区の北端で、00 B a 区と B b 区にまたがって検出された竪穴住居である。調査区外の部分もあるが、長軸推定553cm、短軸推定542cmで、1辺が5m50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居である。00 B a 区の東壁でカマド痕が確認されているので、住居の主軸方向はN-63°-Wを示すと思われる。検出面からの深さは最大11cmを測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴1基(00 B S K 3120)、周溝、西辺やや南寄りでカマド痕が確認された。遺物には小片が多いが、土師器の甕以外に須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯、岩崎41号窯様式と思われる鉢が出土している。



※土坑はS K 番号を付けず4桁の数字で示している。



- 1 7.5YR4/6褐色粘質シルト(7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロックを含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色シルト(地山ブロックを少量含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと地山の斑土
- 5 7.5YR4/3褐色シルト(炭化物を多く含む、地山ブロックを少量含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む、焼土ブロック・小礫を少量含む)
- 8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む)
- 9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 10 7.5YR4/3褐色粘質シルトと地山の斑土(炭化物を少量含む)

第26図 00 B S B 0036 平面図・断面図 (1:50)

**00 B S B 0038** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、7～8棟の住居が重複している中の1棟である。住居の北辺を00 B S B 0039と00 B S B 0041によって切られているが、長軸347cm、短軸残存長312cmで、1辺が3 m 50cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居と思われる。住居の主軸方向は不明であるが、他の住居と比べてやや北を向いている感がある。検出面からの深さは最大28cmを測る。床面からは、主柱穴と思われる柱穴1基(00 B S K 3461)、周溝を確認している。出土遺物は、土師器の土錘以外は小片が多いため時期を決定することが難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0039や00 B S B 0041より古い住居であると思われる。

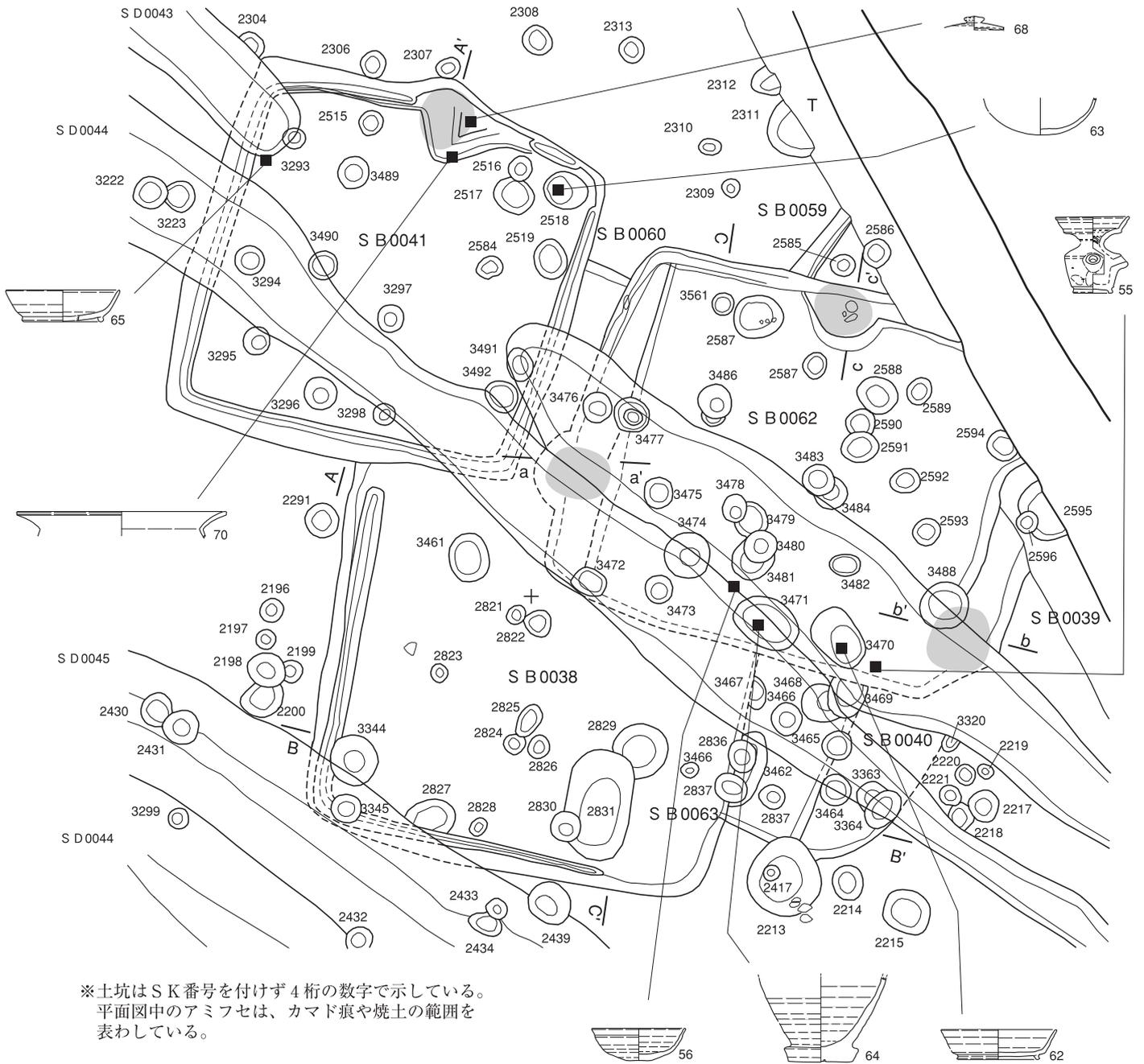
**00 B S B 0039** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0038の北東に位置している。戦国時代以降の溝である00 B S D 0043や00 B S D 0044に切られていたり、北東隅が調査区外になっているが、長軸391cm、短軸312cmで、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居であったと思われる。住居の主軸方向は、西辺にあるカマド痕を根拠とすればN-72°-Wとなるが、東辺にも検出されているために定かではない。検出面からの深さは最大21cmを測る。床面からは東西辺でカマド痕を確認したが、さらに内部から00 B S B 0063が検出された。住居内の土坑などから、須恵器で岩崎17号窯様式から高蔵寺2号窯様式の有台杯や8世紀代の鉢が出土している。

**00 B S B 0040** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0038の東側に位置している。住居の大半を00 B S B 0038・00 B S B 0039や戦国時代以降の溝00 B S D 0043・00 B S D 0044に切られ、僅かに南東隅のみが確認されている。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大6 cmを測る。出土遺物には小片が多く時期は不明であるが、遺構の切り合い関係からこの部分の住居群の中では一番古い住居であると思われる。

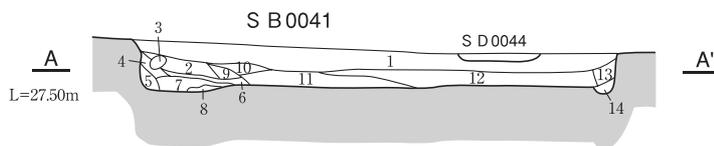
**00 B S B 0041** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0038の北側に位置している。戦国時代以降の溝00 B S D 0043や00 B S D 0044に切られているが、長軸328cm、短軸310cmで、1辺が3 m 20cm前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居である。住居の主軸方向はN-18°-Eを示し、検出面からの深さは最大28cmを測る。床面からは、主柱穴と思われる柱穴3基(00 B S K 2517・00 B S K 3293・00 B S K 3295)、周溝、貯蔵穴と思われる土坑1基(00 B S K 2518)、北辺でカマド痕が確認されている。遺物は土師器の土錘以外は小片が多いが、須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯や岩崎41号窯様式までの蓋が出土している。

**00 B S B 0059** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0039の北側に位置している。住居の大半は調査区外であったり、00 B S B 0039に切られていたりして、僅かに西辺が確認されているのみで規模は不明である。住居の主軸方向も不明で、検出面からの深さは最大15cmを測る。床面からは周溝が確認されている。出土遺物には小片が多く、時期を決定することができない。

**00 B S B 0060** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0039と00 B S B 0041の間に位置している。住居の大半を00 B S B 0038・00 B S B 0039・00 B S B 0041に削平され、僅かに北辺を確認したのみであり規模は不明である。住居の主軸方向も不明で、検出面からの深さは最大19cmを測る。出土遺物は小片が多く、時期を決定することは難しい。

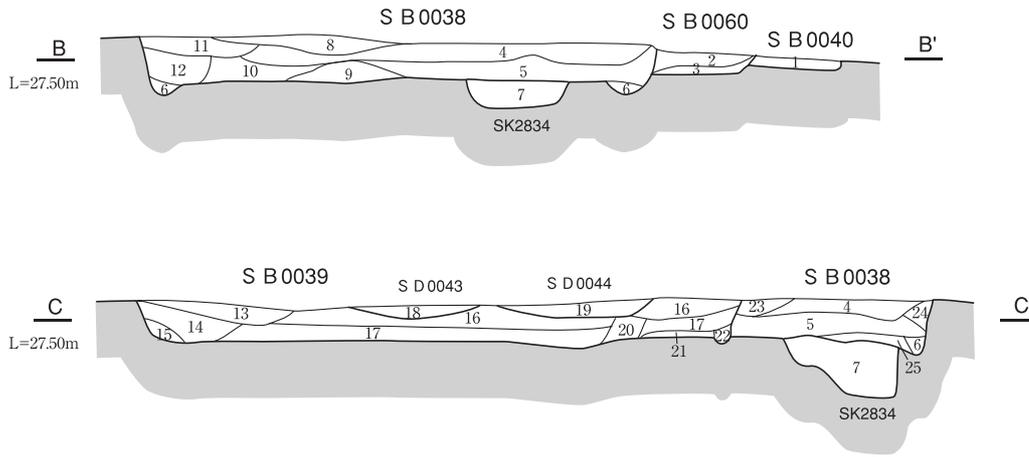


※土坑はSK番号を付けず4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を  
 表わしている。

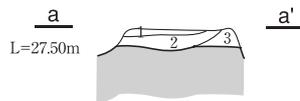


- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を多く含む、礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質土(5YR4/6赤褐色粘質シルトブロック・小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを少量含む、炭化物を含み全体に黒っぽく見える)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルトの斑土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック・炭化物を少量含む)
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質土と焼土ブロックの斑土(炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/2黒褐色粘質土(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック・焼土ブロックを少量含む、炭化物を多く含む全体に黒っぽい)
- 8 2.5YR4/6赤褐色粘質土(被熱して地山が赤化したものか)
- 9 7.5YR3/2灰褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫を少量含む)
- 11 7.5YR3/2灰褐色粘質シルト(焼土ブロック小礫を少量含む)
- 12 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・小礫を少量含む)
- 13 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・小礫・炭化物を少量含む)
- 14 7.5YR3/3暗褐色シルト(縮まり弱い)

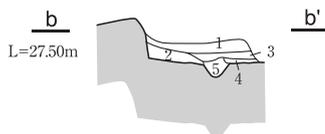
第27図 00 B S B 0038・S B 0039・S B 0040・S B 0041・S B 0060・S B 0062・S B 0063 平面図、  
 00 B S B 0041 断面図 (1:50)



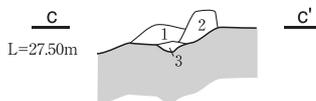
- 1 7.5YR4/2灰褐色粘質土(小礫・地山ブロックを含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 8 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 9 7.5YR4/6褐色粘質シルト(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR3/2黒褐色粘質土(砂を含む、小礫を少量含む)
- 11 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 12 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 13 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 14 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)
- 15 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫を少量含む、地山ブロックを含む)
- 16 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 17 7.5YR3/3暗褐色粘質土(礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 18 10YR3/3暗褐色シルト(砂を含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 19 7.5YR4/3褐色粘質シルト
- 20 7.5YR3/3暗褐色粘質土(炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)
- 21 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 22 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 23 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、砂を含み、締まり弱い)
- 24 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 25 7.5YR4/6褐色粘質シルト(小礫・7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)



- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む、小礫を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物・小礫を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を含む、小礫を少量含む)



- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を含む、礫・小礫を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を含む、小礫を少量含む)
- 3 7.5YR3/1黒褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を含む、小礫を少量含む)
- 4 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、焼土ブロック・炭化物・小礫を少量含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む、小礫を含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと地山ブロック

第28図 00 B S B 0038・S B 0039・S B 0040・S B 0060 断面図、  
00 B S B 0039・S B 0041 カマド断面図(断 1:50、カマド 1:40)

**00 B S B 0062** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0039 の床面から確認されている。住居の北東隅は調査区外であるが、長軸 318cm、短軸 306cm で、1 辺が 3 m 10cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居である。住居の主軸方向は N - 17° - E を示し、検出面からの深さは最大 28cm を測る。床面からは北辺でカマド痕が確認されたのみである。出土遺物は、前述の通り 00 B S B 0039 と明確な区別ができていない。

**00 B S B 0063** 00 B b 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0038 と 00 B S B 0040 の間に位置している。住居の大半を 00 B S B 0038 と 00 B S B 0039 に削平され、南東隅が確認されたのみで規模は不明である。住居の主軸方向も不明で、検出面からの深さは最大 17cm を測る。出土遺物には小片が多く時期は決めかねるが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0040 より新しく 00 B S B 0038 よりも古い住居であると思われる。

**00 B S B 0042** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、10 棟の重複した竪穴住居群の一番北側に位置している。住居の南側を 00 B S B 0043 に切られたり調査区外になるため正確な規模は明らかではないが、長軸残存長 362cm、短軸 370cm で、1 辺が 3 m 70cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつやや小型の竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 28cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 2 基 (00 B S K 2143・00 B S K 2500) が確認されたのみである。出土遺物には小片が多く、時期を確定することは難しい。

**00 B S B 0043** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0042 の南西側に位置している。住居の南東隅が調査区外になるが、長軸 413cm、短軸 304cm で、南北方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 16cm を測る。床面からは一部で周溝が確認され、多くの柱穴と思われる土坑が検出されているが規則的には並んでいない。出土遺物には小片が多く時期を確定することはできないが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0042 より新しい住居であると思われる。

**00 B S B 0044** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0043 の西側に位置している。住居の西側を 00 B S B 0045、南側を 00 B S B 0046 に切られ正確な規模は不明であるが、長軸 434cm、短軸残存長 395cm で、1 辺が 4 m 30cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であったと想定される。住居の主軸方向は N - 10° - E を示し、検出面からの深さは最大 10cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 3 基 (00 B S K 2809・00 B S K 3322・00 B S K 3555)、一部で周溝、北辺でカマド痕、東辺中央部で焼土が確認されている。出土遺物には小片が多く時期を確定できないが、遺構の切り合い関係から 00 B S B 0045・00 B S B 0046 より古い住居と思われる。

**00 B S B 0045** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0044 の南西側に位置している。長軸 385cm、短軸 374cm で、1 辺が 3 m 70 ~ 80cm の隅丸方形の平面プランをもつやや小型の竪穴住居である。住居の主軸方向性は不明で、検出面からの深さは最大 18cm である。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 2 基 (00 B S K 2064・00 B S K 3329)、周溝、貯蔵穴と思われる土坑 1 基 (00 B S K 2565) が確認されている。遺物は小片が多いが、土師器の土錘や性格不明の土器の他、須恵器で岩崎 41 号窯様式の有台杯や同時期と思われる蓋などが出土している。

**00 B S B 0046** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0045 の南東側に位置し

ている。住居は00 B S B 0045や00 B S B 0055により削平されているが、長軸推定456cm、短軸428cmで、やや東西方向に長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大7 cmである。床面からは周溝のみ確認されている。出土遺物には小片が多く時期の確定は難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0044より新しく00 B S B 0045・00 B S B 0054より古い住居であると思われる。

**00 B S B 0048** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0049の南西側に位置している。住居の大半は00 B S B 0049に削平されたり調査区外であるため、住居の南西隅を確認したのみで正確な規模は確認できない。住居の主軸方向も不明で、検出面からの深さは最大5 cmを測る。床面から検出された00 B S K 2796は、柱穴である可能性が高い。出土遺物は小片が多く時期は定かではないが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0049より古い住居であると思われる。

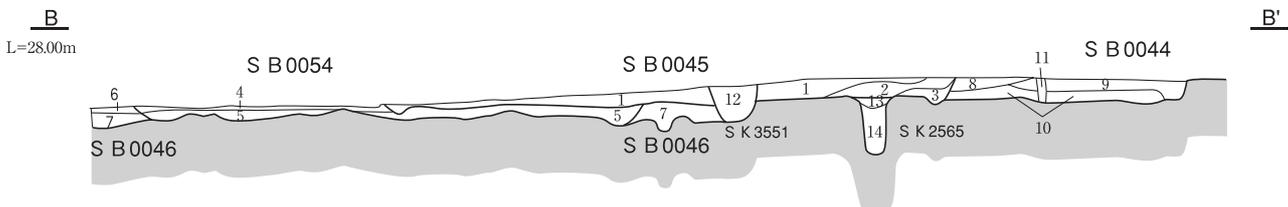
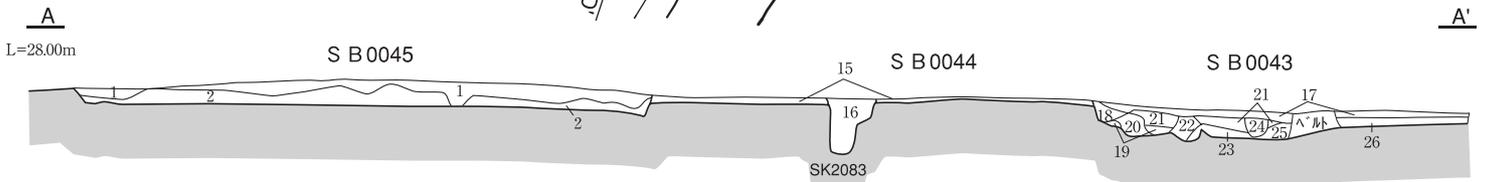
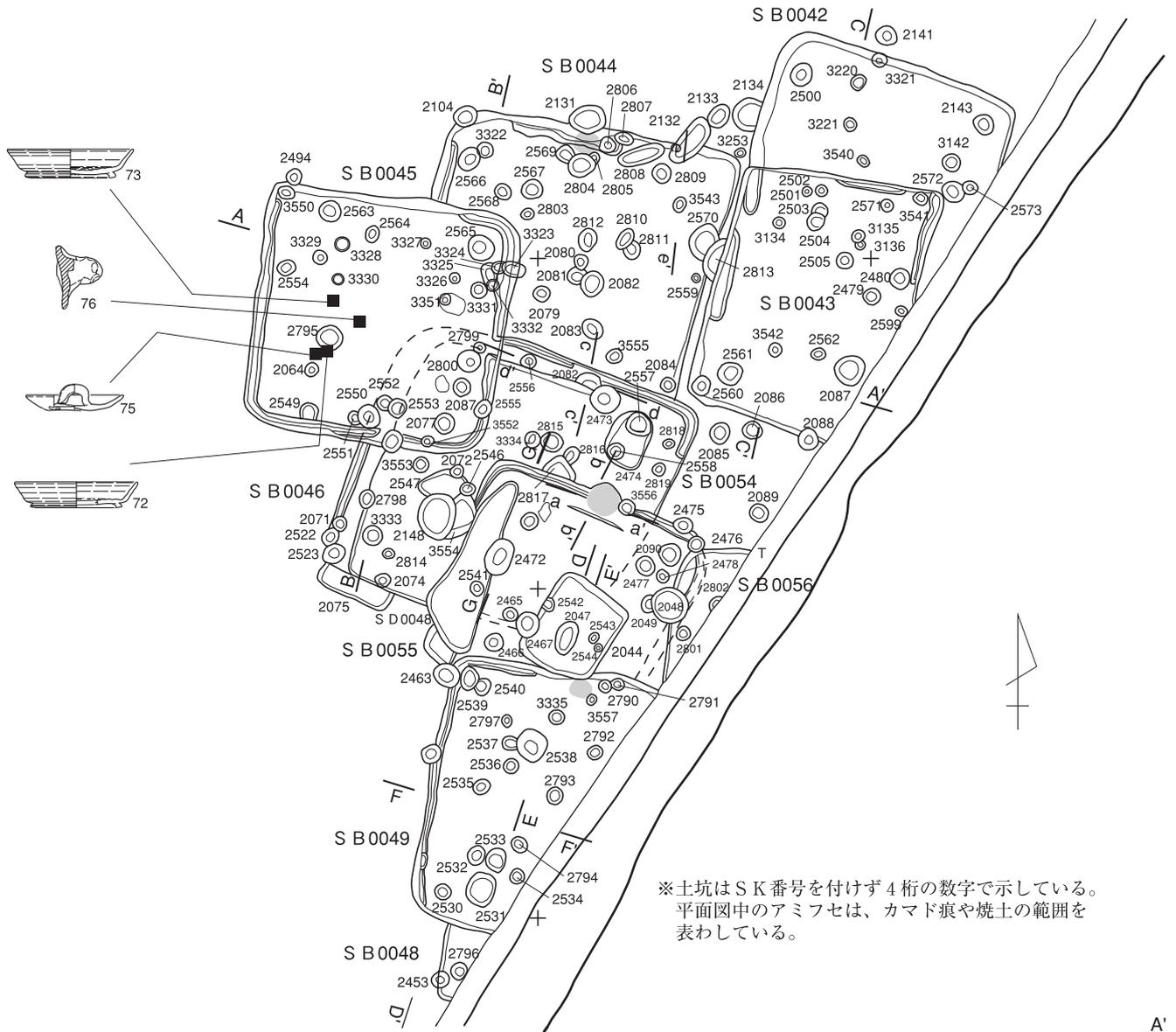
**00 B S B 0049** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0048の北東側に位置している。住居の大半は調査区外になるため正確な規模は不明であるが、長軸411cm、短軸残存長296cmで、1辺が4 m 10cm前後で隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向はN - 12° - Eを示し、検出面からの深さは最大13cmを測る。床面からは柱穴と考えられる土坑は少なく、可能性が高いのは00 B S K 2466と00 B S K 2530ぐらいである。他に、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物には小片が多く時期の決定は難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0048や00 B S B 0055より新しい住居と思われる。

**00 B S B 0054** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0046を掘削中に確認されている。長軸推定415cm、短軸393cmで、1辺が4 m前後で隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大6 cmを測る。床面から検出された00 B S K 2078は柱穴、00 B S K 2474は貯蔵穴と考えることができる。出土遺物には小片が多く時期を確定することは難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0046より新しく00 B S B 0045や00 B S B 0055より古い住居と思われる。

**00 B S B 0055** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0054の南東側に位置している。住居を他の遺構に切られてはいるが、長軸364cm、短軸推定353cmで、1辺が3 m 50～60cm程で隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向はN - 22° - Eを示し、検出面からの深さは最大10cmを測る。床面からは、主柱穴と思われる柱穴3基(00 B S K 2466・00 B S K 2477・00 B S K 3365)、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物には小片が多く時期の決定は難しいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0049よりも古く00 B S B 0046・00 B S B 0054よりも新しい住居であると思われる。

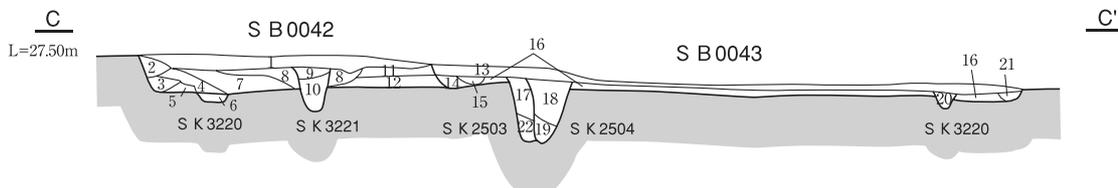
**00 B S B 0056** 00 B b 区の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0055の東側に位置している。住居の大半は調査区外になるため北西隅を確認したのみで、住居の規模・主軸方向ともに不明である。検出面からの深さは最大でも僅かに3 cmである。床面で検出された00 B S K 2802が柱穴になる可能性が高い。出土遺物には小片が多く時期は決めたいが、遺構の切り合い関係から00 B S B 0055より新しい住居と思われる。

**00 B S B 0047** 00 B b 区の南端で検出された竪穴住居で、00 B S B 0048の南西側に位置してい

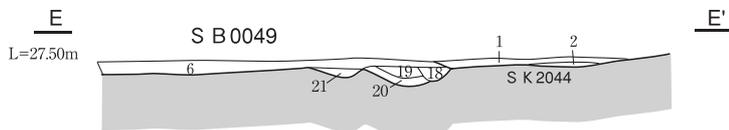
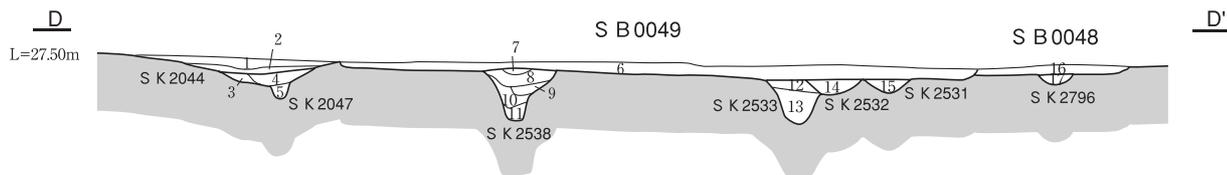


- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 10YR2/2黒褐色粘質シルト(地山ブロック・礫・小礫を少量含む、炭化物・土器片を含む)</li> <li>2 10YR2/2黒褐色粘質シルト(地山ブロックを多く含む、粗粒砂・小礫を少量含む、炭化物・土器片を含む)</li> <li>3 10YR2/2黒褐色粘質シルト(地山を多く含む、粗粒砂・小礫を少量含む、炭化物を含む)</li> <li>4 7.5YR2/1黒色シルト(地山を少量含む)</li> <li>5 地山(7.5YR3/2黒色シルトブロックを含む、締まり弱い)SB0054貼床</li> <li>6 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(地山を少量含む)</li> <li>7 10YR3/3暗褐色粘質シルトと地山ブロックの斑土(礫を少量含む、炭化物を含む、締まり弱い)</li> <li>8 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト(粗粒砂・礫を含む)</li> <li>9 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト(地山ブロックを多く含む、粗粒砂・礫を含む)</li> <li>10 地山(7.5YR4/1褐色粘質シルトを多く含む、粗粒砂を少量含む、締まり弱い)</li> <li>11 2.5YR4/1黄灰色砂質シルト(締まり弱い)</li> <li>12 7.5YR3/2赤-7 黒色砂質シルト(炭化物を含む、締まり弱い)</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>13 7.5YR2/1黒色シルト(竪穴以前の上層)</li> <li>14 不明(竪穴以前の上層)</li> <li>15 7.5YR2/1黒色粘質シルト(地山を少量含む、炭化物を含む、締まり弱い)</li> <li>16 5YR4/1灰色砂質シルト(竪穴覆土から掘り込まれる)</li> <li>17 7.5YR4/3褐色シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む、小礫を含む)</li> <li>18 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・地山ブロックを少量含む)</li> <li>19 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・地山ブロックを少量含む)</li> <li>20 7.5YR3/2黒褐色粘質土と7.5YR3/3暗褐色粘質土の斑土(地山ブロックを少量含む)</li> <li>21 5YR4/6赤褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)</li> <li>22 7.5YR3/3暗褐色粘質土と7.5YR4/3褐色粘質シルトの斑土(地山ブロックを少量含む)</li> <li>23 7.5YR3/2黒褐色粘質土(7.5YR4/6赤褐色粘質シルトブロック・炭化物を少量含む)</li> <li>24 5YR4/6赤褐色粘質土(7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック・小礫を含む)</li> <li>25 5YR4/6赤褐色粘質土(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・小礫を含む)</li> </ol> |
|---|--|

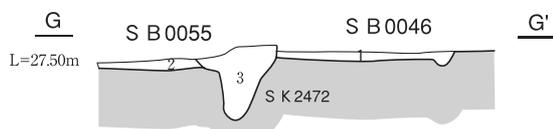
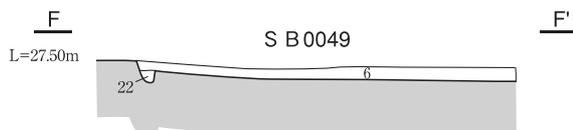
第29図 00 B S B 0042・S B 0043・S B 0044・S B 0045・S B 0046・S B 0048・S B 0049・S B 0054・S B 0055・S B 0056 平面図、00 B S B 0043・S B 0044・S B 0045・S B 0054 断面図(平1:100、断1:50)



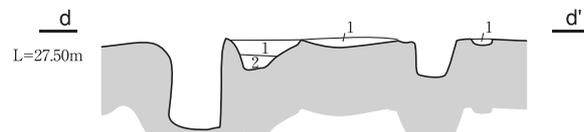
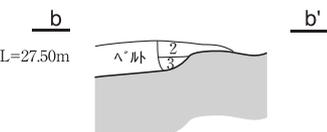
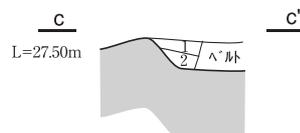
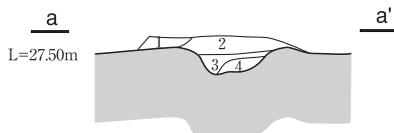
- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(小礫を多く含む、炭化物を少量含む)</li> <li>2 10YR3/3暗褐色粘質シルト</li> <li>3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト</li> <li>4 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)</li> <li>5 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを含む)</li> <li>6 7.5YR4/4褐色粘質シルト(7.5YR4/2灰褐色粘質シルトブロックを少量含む)</li> <li>7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)</li> <li>8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む)</li> <li>9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)</li> <li>10 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む)</li> <li>11 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック・小礫を含む)</li> <li>12 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>13 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を多く含む)</li> <li>14 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を多く含む)</li> <li>15 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を多く含む)</li> <li>16 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)</li> <li>17 7.5YR3/2黒褐色粘質土</li> <li>18 7.5YR3/1黒褐色粘質土</li> <li>19 7.5YR3/3黒褐色粘質土(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む)</li> <li>20 10YR3/2暗褐色粘質シルト</li> <li>21 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト</li> <li>22 7.5YR3/4暗褐色粘質土(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを含む)</li> </ol> |
|--|--|



- 1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 10YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 3 10YR3/3暗褐色粘質シルト
- 4 10YR3/3暗褐色粘質シルトと地山の斑土
- 5 10YR3/1黒褐色粘質シルト(砂を含み、縮まり弱い)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質土(焼土ブロック・小礫・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 8 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと5YR4/8赤褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)
- 9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと5YR4/8赤褐色粘質シルトの斑土
- 11 7.5YR3/2黒褐色粘質土
- 12 7.5YR3/3暗褐色粘質土と地山の斑土
- 13 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと地山の斑土
- 14 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロックを含む)
- 15 7.5YR4/6褐色粘質シルト(7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロックを含む)
- 16 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫を含む、地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 17 7.5YR4/6褐色粘質土(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む)
- 18 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 19 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 20 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 21 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 22 7.5YR3/4暗褐色シルト(地山ブロックを少量含む)

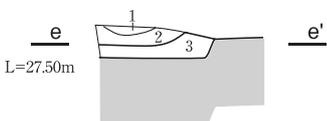


- 1 7.5YR2/1黒色粘質シルト(地山を少量含む、炭化物を含む、縮まり弱い)
- 2 10YR3/3暗褐色粘質シルトと地山の斑土(縮まり弱い、炭化物を含む) SB0046貼土
- 3 5Y4/1灰色砂質シルト(SK2472覆土)



- 1 7.5YR5/2黒褐色粘質シルト(地山を少量含む) S B 0046覆土
- 2 7.5YR2/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)
- 3 7.5YR4/4褐色(被熱のため赤化した地山、流れ込みのため縮まり弱い)
- 4 10R4/6赤色(被熱のため赤化した地山、固く締まる)

- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロックを含む)
- 2 7.5YR4/4褐色(被熱のため赤化した地山)



- 1 10R3/6暗赤色(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 2 10R4/6赤色(被熱のため赤化した地山)
- 3 7.5YR4/4褐色(被熱のため赤化した地山)

第30図 00 B S B 0042・S B 0043・S B 0046・S B 0048・S B 0049・S B 0055 断面図、  
00 B S B 0044・S B 0046・S B 0055 カマド断面図(断 1:50、カマド 1:40)

る。住居の大半は調査区外になるため北西隅を確認したのみで住居の規模は不明であるが、かなり小さな竪穴住居であると想像される。住居の主軸方向はN-8°-Eを示し、検出面からの深さは最大14cmを測る。床面からは支柱穴と思われる柱穴1基(00BSK2525か00BSK2526)、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物では土師器の土錘以外は小片が多く、須恵器で産地・時期不明の高杯の脚部が出土しているが時期は不明である。

**00BSX0010** 00Bb区のほぼ中央の東壁付近で検出された竪穴住居で、3~4棟が重複した住居の中の1棟である。00BSX0010と00BSX0011とは区別がつかず、全体を掘り下げていく中で確認されたため、明確に遺物を区別し切れていない。また00BSX0010を掘り下げた段階でさらに00BSX0012が確認されている。住居の北東隅は調査区外となるが、長軸推定528cm、短軸推定510cmで、僅かに東西方向に長い隅丸方形に近い平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大35cmと深い。床面からは、支柱穴と思われる柱穴1基(00BSK3414)、周溝が確認されている。出土遺物は小片が多く時期は決定できないが、00BSX0011や00BSX0012より新しい住居であることは遺構の切り合い関係から明らかである。

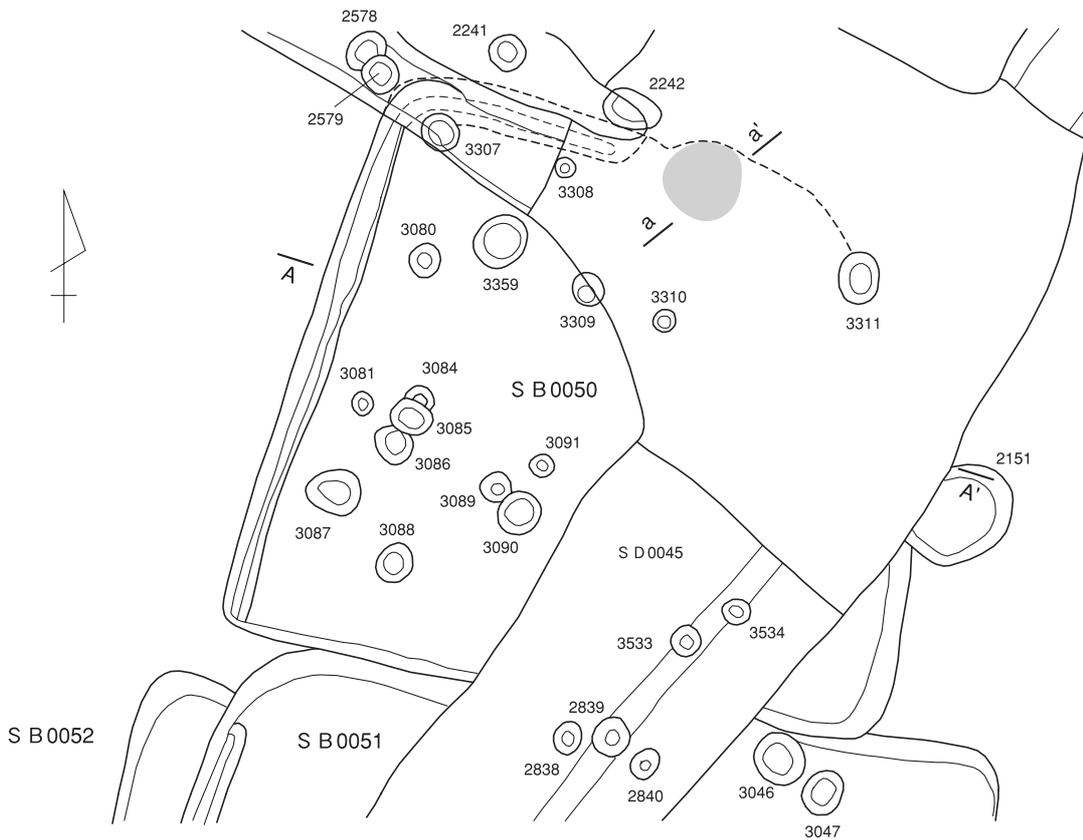
**00BSX0011** 00Bb区のほぼ中央の東壁付近で検出された竪穴住居で、00BSX0010の北側に位置している。調査区外の部分が多いため住居の規模・主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大29cmと深い。床面からは、周溝が僅かに確認されたのみである。

**00BSX0012** 00Bb区のほぼ中央の東壁付近で検出された竪穴住居で、00BSX0010の南西側に位置している。住居の規模・主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大38cmと深い。床面からは周溝が確認されているのみである。

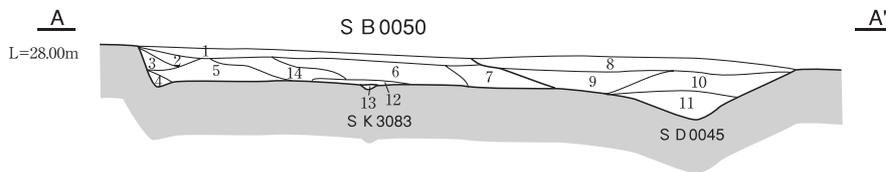
**00BSB0050** 00Bb区の中央やや南寄りの西壁付近で検出された竪穴住居で、3棟が重複している中で一番北に位置している。住居は戦国時代以降の溝00BSD0045などで削平を受けているが、長軸437cm、短軸推定385cmで、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向はN-19°-Eを示し、検出面からの深さは最大24cmを測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴2基(00BSK3088・00BSK3359)、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。遺物は、土師器の土錘以外は小片が多く、須恵器で時期不明の無台杯と高蔵寺2号窯様式までの蓋などが出土しているが、00BSB0051を切っていることからもっと新しい住居とも考えられる。

**00BSB0051** 00Bb区の中央やや南寄りの西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0050の南側に位置している。住居は戦国時代以降の溝00BSD0045・00BSD0046・00BSD0047に削平されたり一部が調査区外であったりするが、長軸566cm、短軸推定528cmで、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大33cmと深い。床面からは、支柱穴と思われる柱穴2基(00BSK3304・00BSK3375)、周溝が一部確認されている。出土遺物には小片が多いが、須恵器で岩崎41号窯様式頃の蓋や鳴海32号窯様式頃の有台杯が出土している。

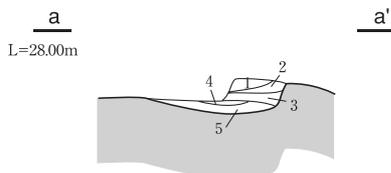
**00BSB0052** 00Bb区の中央やや南寄りの西壁付近で検出された竪穴住居で、00BSB0050の南側に位置している。住居の大部分は00BSB0051により大きく削平されているため正確な規模



※土坑はSK番号を付けず4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。

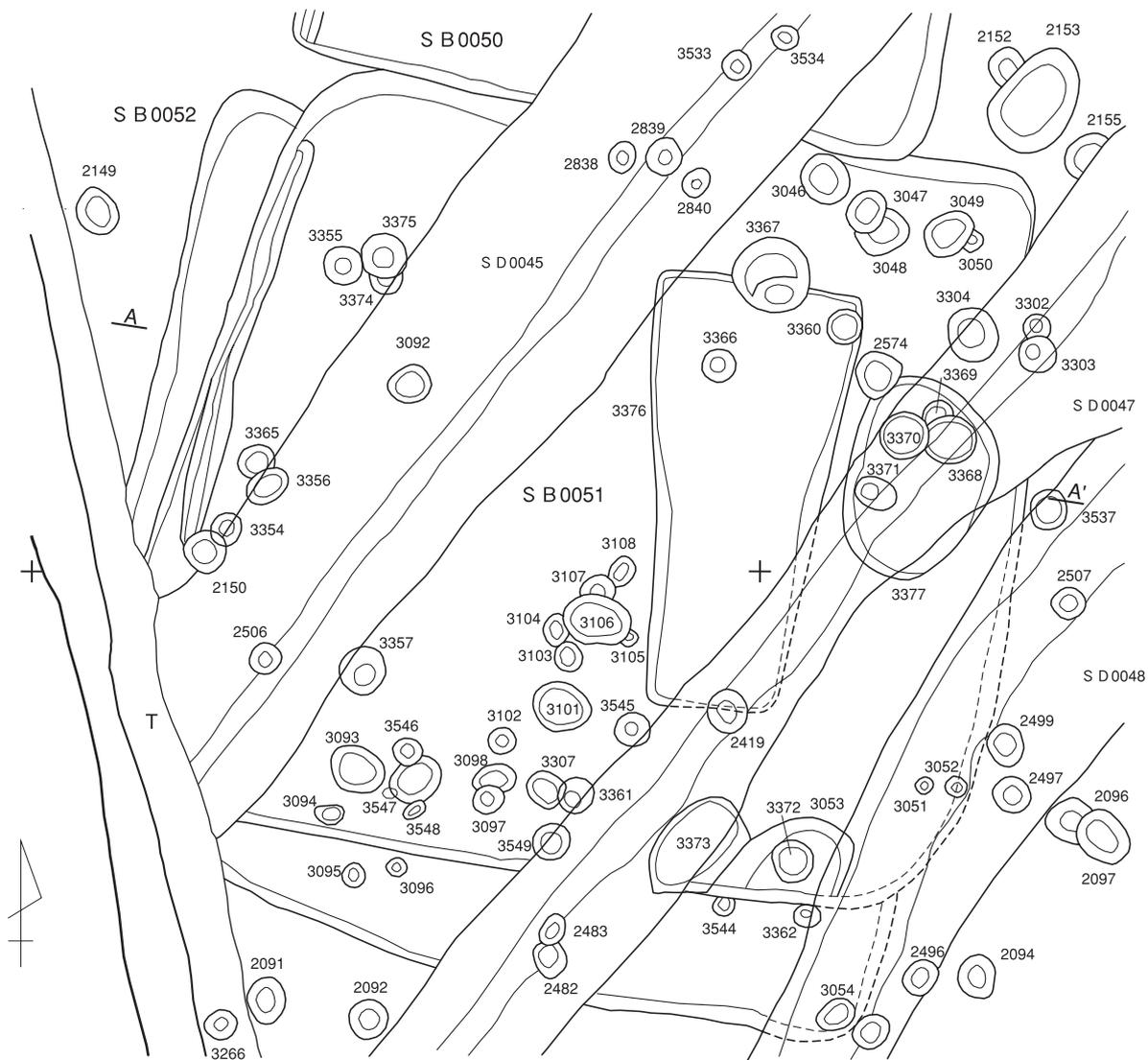


- 1 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を多く含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 3 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫を少量含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR3/2暗褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・地山ブロックを少量含む)
- 8 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を多く含む、2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂を少量含む)
- 9 7.5YR4/3褐色粘質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂を含む)
- 10 7.5YR3/3暗褐色粘質土(7.5YR3/3暗褐色細粒砂・地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 11 7.5YR4/3灰褐色粘質土(7.5YR4/3灰褐色細粒砂・地山ブロックを少量含む)
- 12 7.5YR4/6褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 13 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 14 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・地山ブロック・炭化物を少量含む)

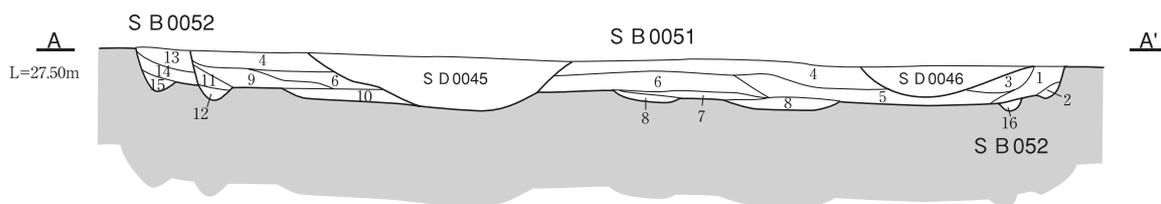


- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと5YR5/8明赤褐色焼土ブロック(小礫・炭化物を含む)
- 2 5YR3/2暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物・焼土ブロックを少量含む)
- 3 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物・焼土ブロックを含む、小礫を少量含む)
- 4 5YR4/6赤褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)

第31図 00 B S B 0050 平面図・断面図、カマド断面図 (平・断 1:50、カマド 1:40)



※土坑は S K 番号を付けず 4 桁の数字で示している。

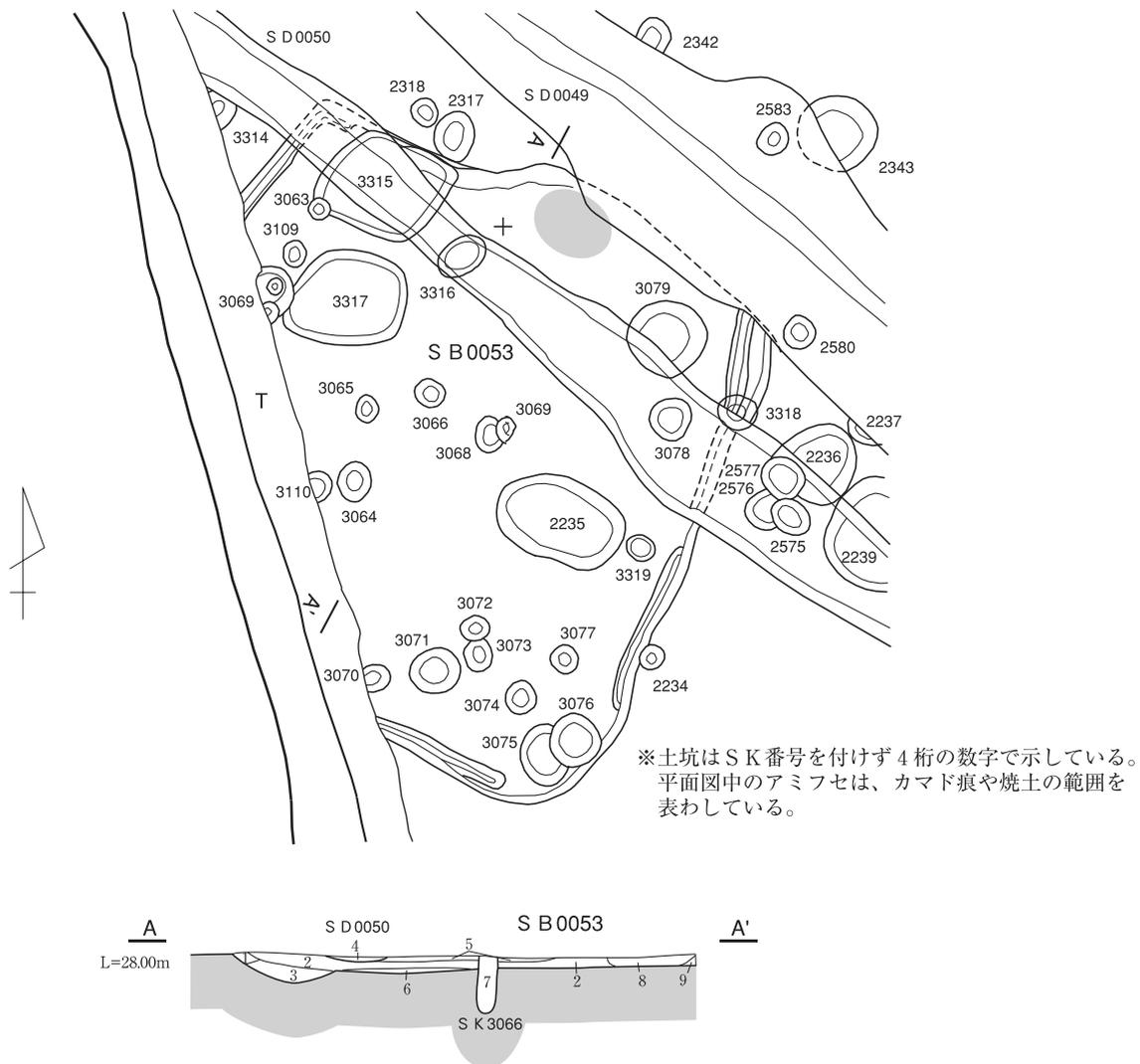


- 1 7.5YR4/6褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・2.5YR4/8褐色焼土ブロックを含む)
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む、7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロック・7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを含む)
- 9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 10 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 11 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 12 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 13 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 14 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)
- 15 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物・地山ブロックを少量含む)
- 16 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

第 32 図 00 B S B 0051・S B 0052 平面図・断面図 (1:50)

は不明であるが、00 B S B 0051 とほぼ同様な規模の竪穴住居であったことが想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは31cmと深い。床面からは、周溝の一部を確認しただけである。出土遺物は土師器の土錘以外は小片が多く時期を決定することはできないが、00 B S B 0051 と00 B S B 0052 のベルトの中から須恵器で岩崎 17 号窯様式の杯身が出土している。遺構の切り合い関係から00 B S B 0051 より古い住居と思われる。

**00 B S B 0053** 00 B b 区のほぼ中央の西壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0050 の北西側に位置している。戦国時代以降の溝00 B S D 0049・00 B S D 0050 に削平されたり、南西隅部分が調査区外であるために住居の規模は明らかではないが、長軸推定391cm、短軸384cmで、1辺が3m 90cm前後で隅丸方形の平面プランをもつやや小型の竪穴住居であることが想定される。住居の

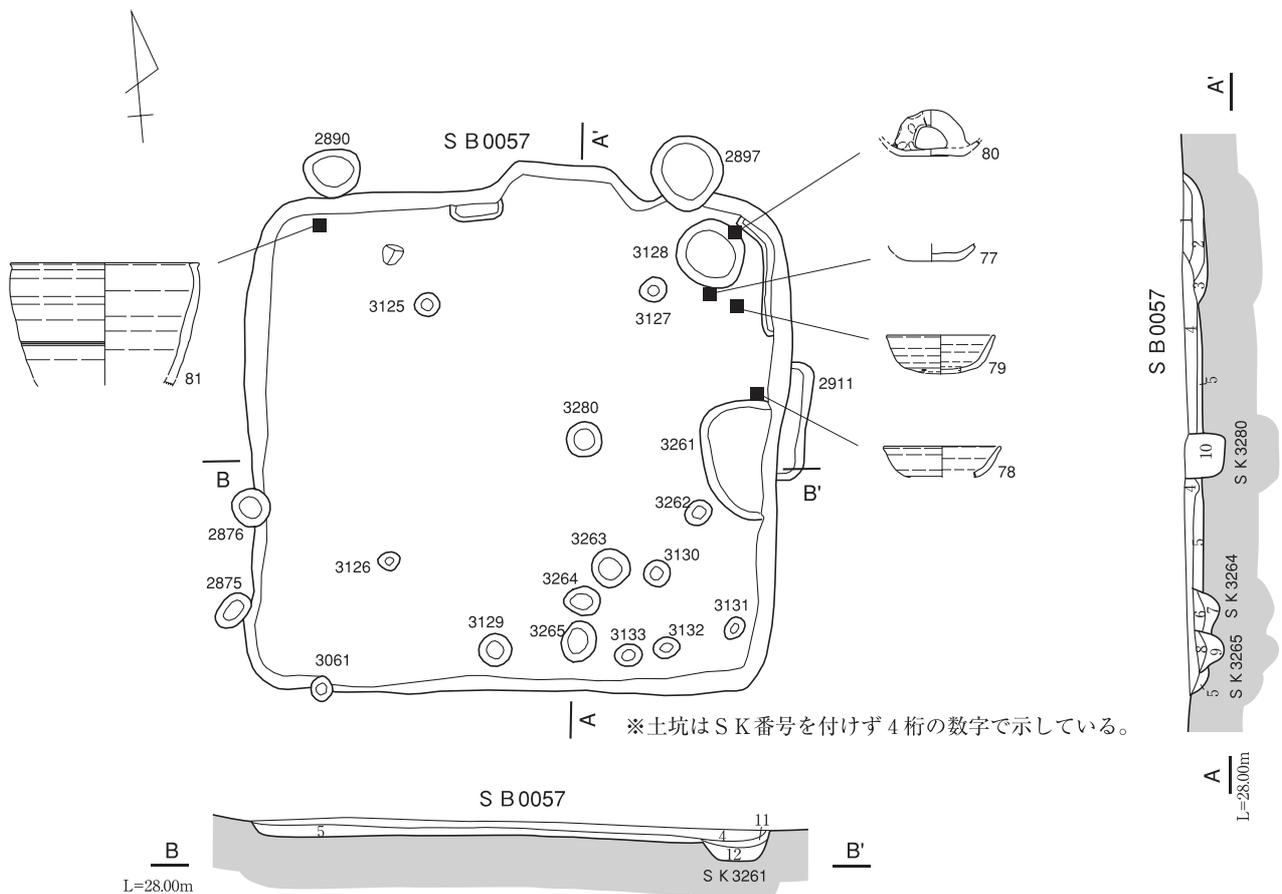


- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物・焼土ブロックを少量含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫・焼土ブロックを含む)
- 3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(炭化物を少量含む、小礫・地山ブロック・焼土ブロックを多く含む)
- 4 7.5YR4/3褐色シルト(2の埋土を少量含む)
- 5 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を多く含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 7 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロック・7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを含む)
- 8 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物・焼土ブロック・地山ブロックを含む)
- 9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物・地山ブロックを少量含む)

第33図 00 B S B 0053 平面図・断面図 (1:50)

主軸方向はN - 38° - Eを示し、検出面からの深さは最大でも4 cmと僅かである。床面からは、周溝と北辺でカマド痕を確認している。他に00 B S K 3074など柱穴と思われる土坑が検出されているが、確かではない。出土遺物は土師器の土錘以外には小片が多く、他の遺構との切り合い関係もないため時期を決定することが難しい。

**00 B S B 0057** 00 B b 区の北側中央部分で検出された竪穴住居である。ほぼ全体が検出されており、長軸358cm、短軸351cmで、1辺が3 m 50cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居である。カマド痕が確認されていないので住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大14cmを測る。床面からは主柱穴と思われる柱穴4基（00 B S K 3125・00 B S K 3126・00 B S K 3127・00 B S K 3130）、貯蔵穴と思われる土坑1基（00 B S K 3128）、周溝の一部が確認されている。遺物には小片が多いが、土師器の土錘・甑・性格不明の蓋の他、須恵器で岩崎17号窯様式頃の無台杯、8世紀代の鉢などが出土している。



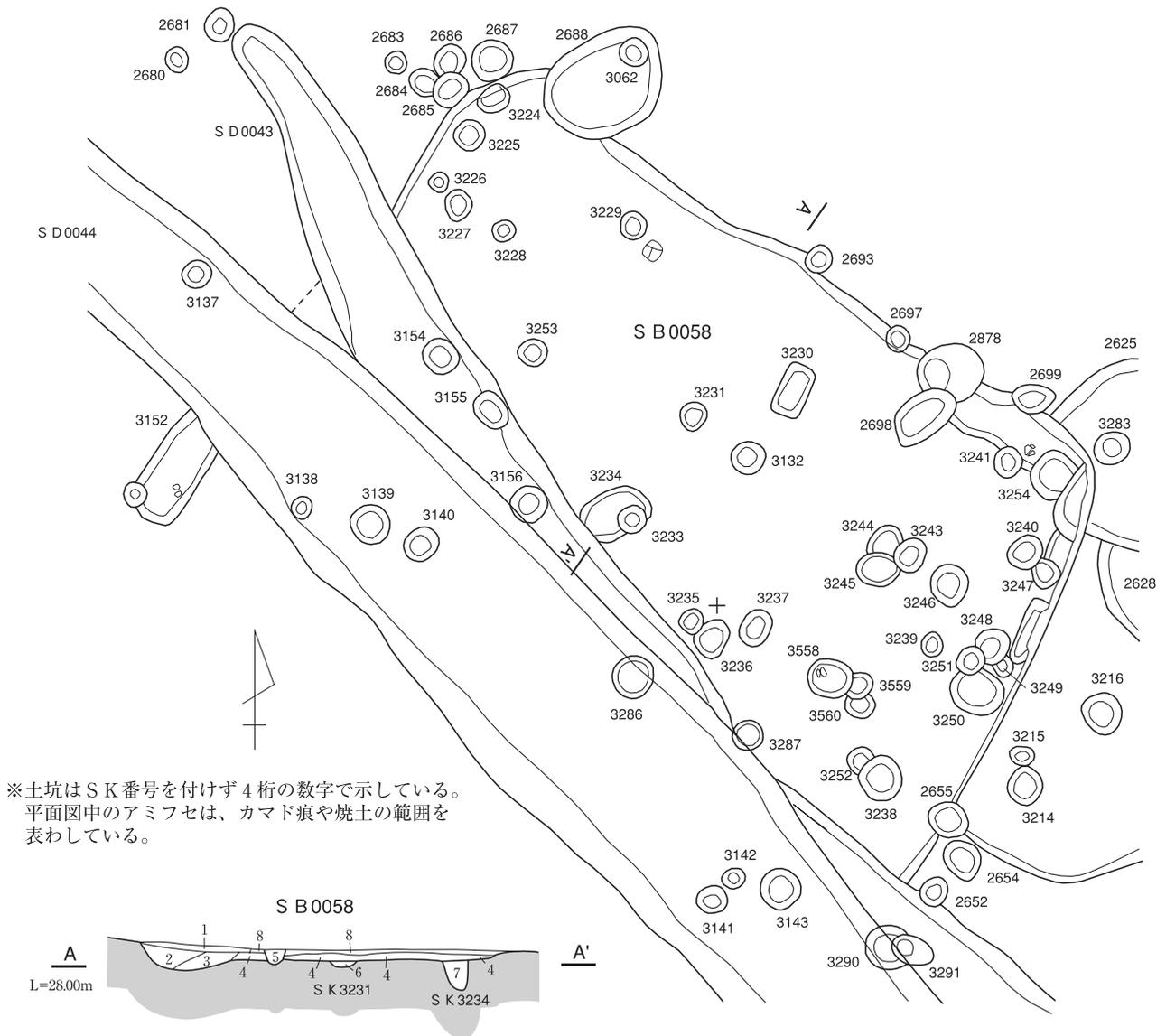
※土坑はS K 番号を付けず4桁の数字で示している。

- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質土(5YR5/6明赤褐色焼土ブロックを多く含む、炭化物を含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質土(地山ブロックを多く含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む、小礫を含む)
- 5 5YR4/6赤褐色粘質土(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 6 5YR4/6赤褐色粘質シルト(小礫・7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 8 5YR4/6赤褐色粘質シルト(小礫・7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを含む)
- 9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 10 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロックを少量含む、炭化物を含む)
- 11 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫を少量含む、地山ブロックを含む)
- 12 5YR4/6赤褐色粘質土(小礫を少量含む、7.5YR3/4暗褐色粘質土ブロックを含む)

第34図 00 B S B 0057 平面図・断面図 (1:50)

00 B S B 0058 00 B b 区の北側の西壁付近で検出された竪穴住居で、00 B S B 0057 の南西側に位置している。住居の南側を戦国時代以降の溝 00 B S D 0043・00 B S D 0044 に切られているため正確な住居の規模は不明であるが、長軸 611cm、短軸残存長 337cm で、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつやや大型の竪穴住居と想定できる。住居の主軸方向は N - 22° - E を示し、検出面からの深さは最大 14cm を測る。床面からは、一部で周溝と北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物は、土師器の土錘以外は小片が多く、時期を決定することは難しい。

+



- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物・小礫を含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)
- 4 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(焼土・地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 6 7.5YR4/3黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロックを含む)
- 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(焼土ブロック・地山ブロック・炭化物を少量含む、小礫を含む)

第 35 図 00 B S B 0058 平面図・断面図 (1:50)

**00 B S K 1423** 00 B a 区のほぼ中央の東壁付近で検出された竪穴住居と思われる遺構である。戦国時代以降の井戸 S K 1147 や溝 S D 0024 に切られてはいるが、長軸 352cm、短軸 264cm で、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつかなり小型の竪穴住居と想定される。検出面からの深さは最大で 14cm を測る。床面からは周溝の一部が確認されているのみである。出土遺物には小片が多く、時期は決定できない。

**00 B S K 1424** 00 B a 区のほぼ中央の東壁付近で検出された竪穴住居と思われる遺構で、S K 1423 の北側に位置している。戦国時代以降の溝 S D 0024 に切られているが、長軸残存長 386cm、短軸残存長 262cm で、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ小型の住居と想定される。検出面からの深さは最大 12cm を測る。床面からは周溝の一部が確認されている。出土遺物には小片が多く時期は決められないが、遺構の切り合い関係から S K 1423 よりも古いことが確認される。

## 00 C 区

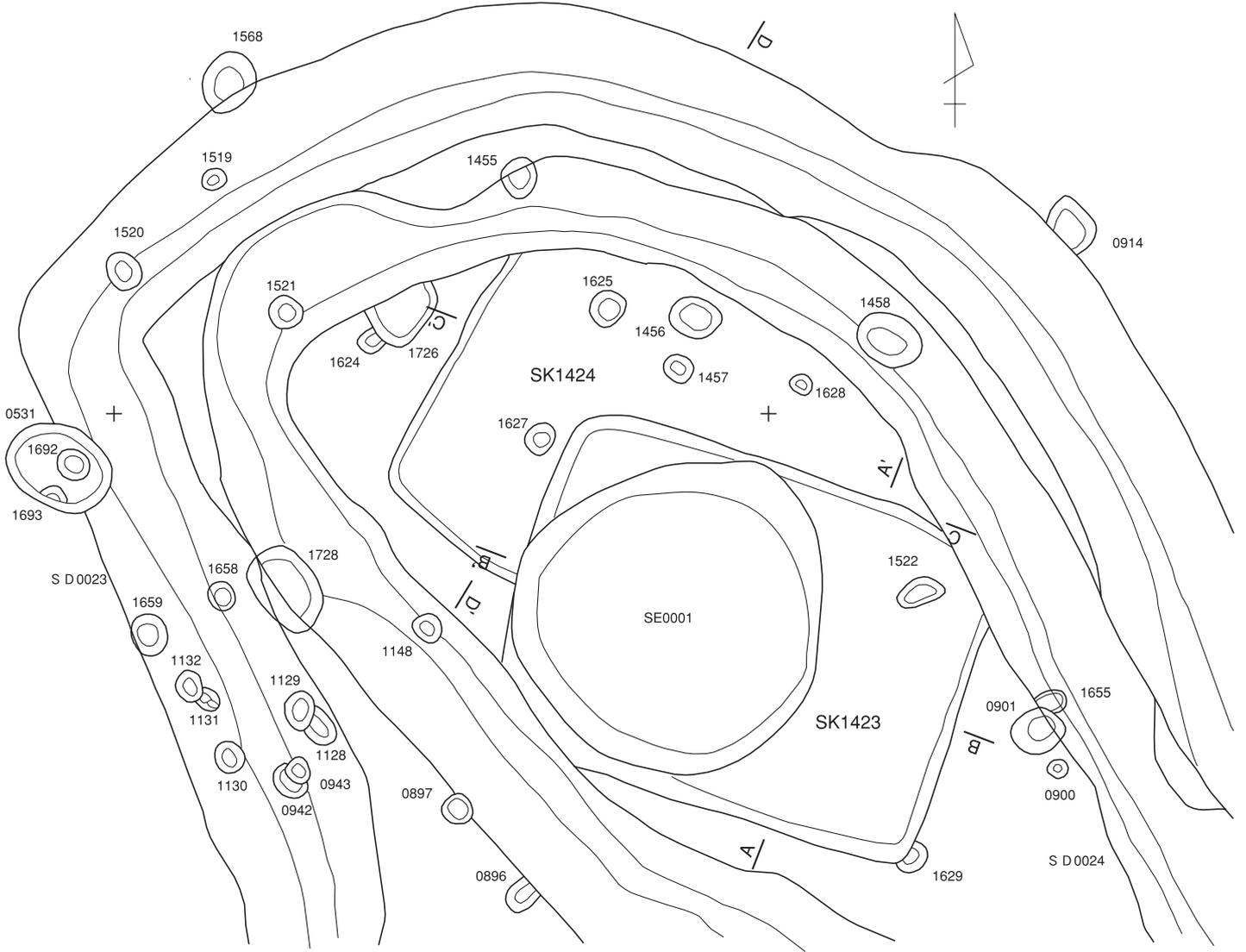
**00 C S B 0002** 平成 12 年度の調査区である 00 C b 区の東端付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0001 の西側に位置している。戦国時代以降の溝 00 C S D 0002 に切られて正確な規模は不明であるが、長軸推定 338cm、短径残存長 324cm で、1 辺が 3 m 40cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大でも僅かに 4 cm を測るのみである。床面からは周溝の一部が確認されたのみである。出土遺物も小片のみで時期を決定するにいたっていない。遺構の切り合い関係から、00 C S B 0001 よりも新しい住居と思われる。

**00 C S B 0003** 00 C b 区の東端付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0002 の南西側に位置している。住居はほぼ全体が確認され、長軸 236cm、短軸 235cm で、1 辺が 2 m 40cm 弱の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大でも 7 cm と浅い。床面からは支柱穴と思われる柱穴 3 (00 B S K 0068・00 B S K 0070・00 B S K 0753) が検出されている。出土遺物は小片のみで、時期を決定することはできない。

**00 C S B 0004** 00 C b 区の東寄りの南壁付近で検出された竪穴住居で、4 棟が重複している中の一番北側に位置している。住居の大部分が 00 C S B 0005 に切られていたり調査区外になるため、北西隅のみを確認しただけで住居の規模・主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大でも 7 cm と浅い。床面からは遺構は検出されておらず、遺物も僅かに小片が出土した程度で時期の特定は難しい。遺構の切り合い関係から、この中では一番古い住居であると思われる。

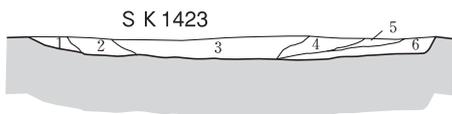
**00 C S B 0005** 00 C b 区の東寄りの南壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0004 の南側に位置している。住居の半分は調査区外になることや 00 C S B 0016 に削平されているが、長軸 260cm、短軸残存長 178cm で、1 辺が 2 m 60cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 15cm を測る。床面からは周溝を検出している。出土遺物も僅かに小片のみで時期は決めたいが、遺構の切り合い関係から 00 C S B 0004 よりも新しい住居と思われる。

**00 C S B 0015** 00 C b 区の東寄りの南壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0005 の床面から重複して確認されている。住居の大半が調査区外であるため、住居の規模・主軸方向は不明である。検出面からの深さは最大 25cm であるが、00 C S B 0005 の床面からの深さは 11cm となってい



※土坑はS K 番号を付けず 4 桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を  
 表わしている。

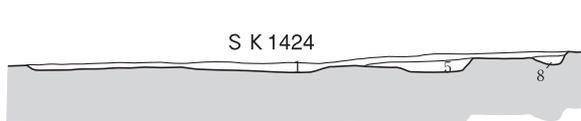
**A**  
 L=28.00m



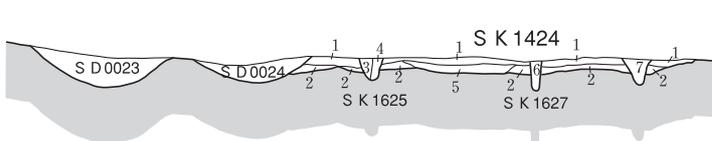
**B**  
 L=28.00m



**C**  
 L=28.00m



**D**  
 L=28.00m



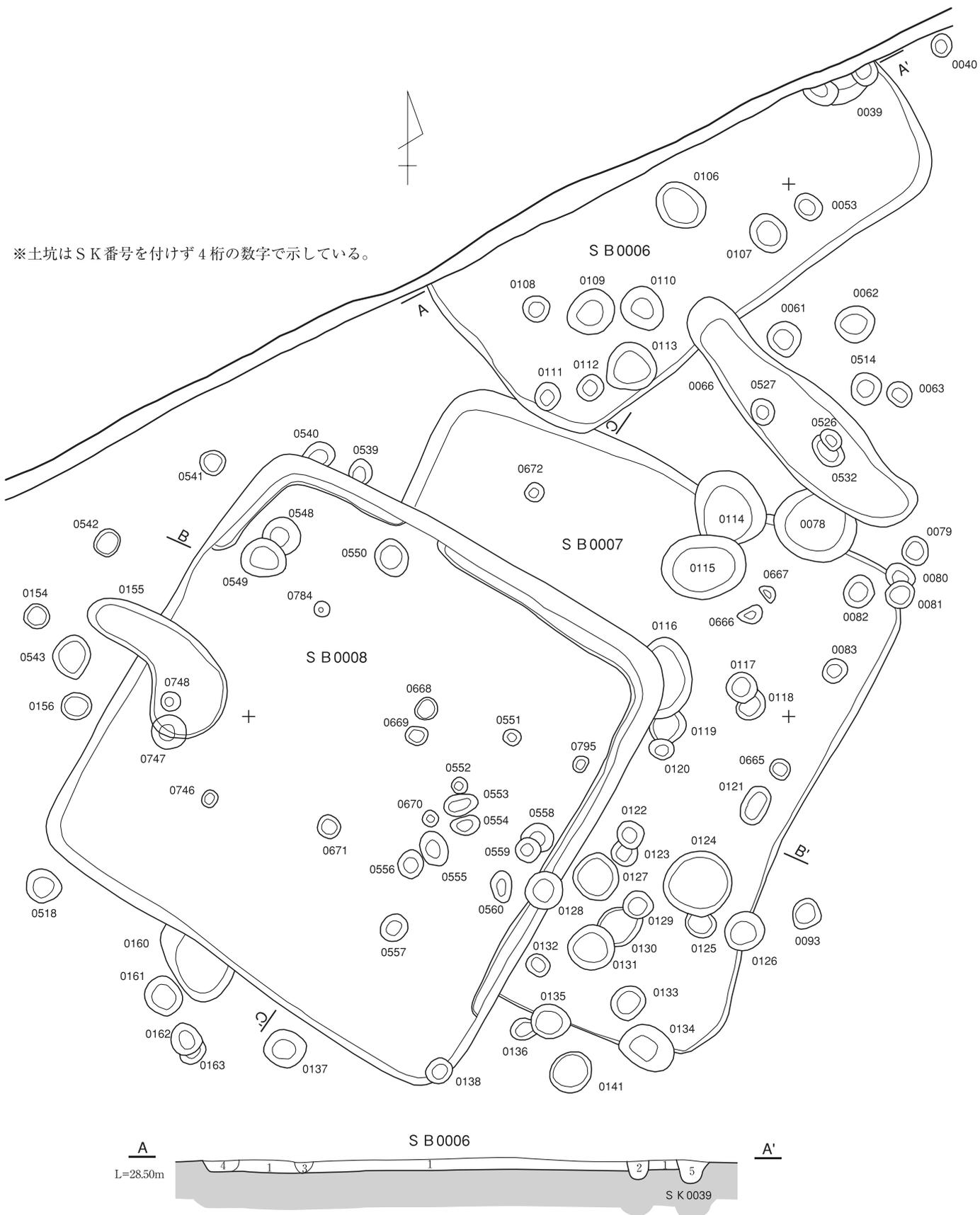
**SK1423**

- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(地山ブロック・小礫を含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫・炭化物を含む)
- 5 7.5YR4/4褐色粘質シルト(5YR4/6赤褐色焼土ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(5YR4/6赤褐色焼土ブロック・炭化物を多く含む、全体に黒っぽく見える)
- 7 7.5YR4/3褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

**SK1424**

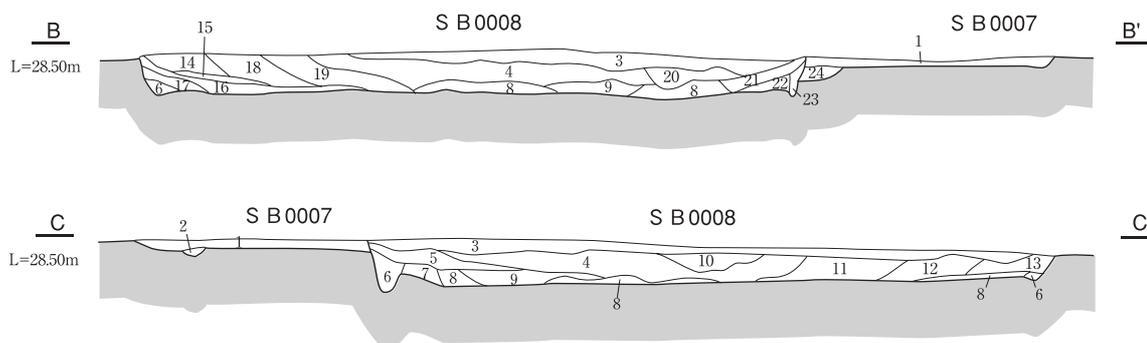
- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(地山ブロック・小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、小礫を少量含む)
- 3 7.5YR4/2灰褐色粘質土
- 4 7.5YR3/2黒褐色粘質土
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 6 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

第 36 図 00 B S K 1423・S K 1424 平面図・断面図 (1:50)



- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・地山ブロックを少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・地山ブロックを少量含む)
- 3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)

第 37 図 00 C S B 0006・S B 0007・S B 0008 平面図、00 C S B 006 断面図 (1:50)



- |   |  |
|---|--|
| 1 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を含む、地山ブロックを少量含む)          | 14 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)                          |
| 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む)                 | 15 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)               |
| 3 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)           | 16 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロック・炭化物を少量含む)                 |
| 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと地山の斑土(小礫・炭化物を少量含む)       | 17 7.5YR3/2黒褐色粘質土(炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)              |
| 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを含む)          | 18 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)              |
| 6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)               | 19 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む、地山ブロックを含む)           |
| 7 5YR4/6赤褐色粘質シルト(7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む) | 20 5YR4/6赤褐色粘質シルト(小礫を含む、7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む) |
| 8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)         | 21 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む)                         |
| 9 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロックを多く含む)               | 22 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫を少量含む、地山ブロックを含む)               |
| 10 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫を含む)                    | 23 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・地山ブロックを含む)                  |
| 11 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)       | 24 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)                         |
| 12 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物・地山ブロックを少量含む)       |  |
| 13 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・地山ブロックを少量含む)           |  |

第38図 00 C S B 0007・S B 0008 断面図 (1:50)

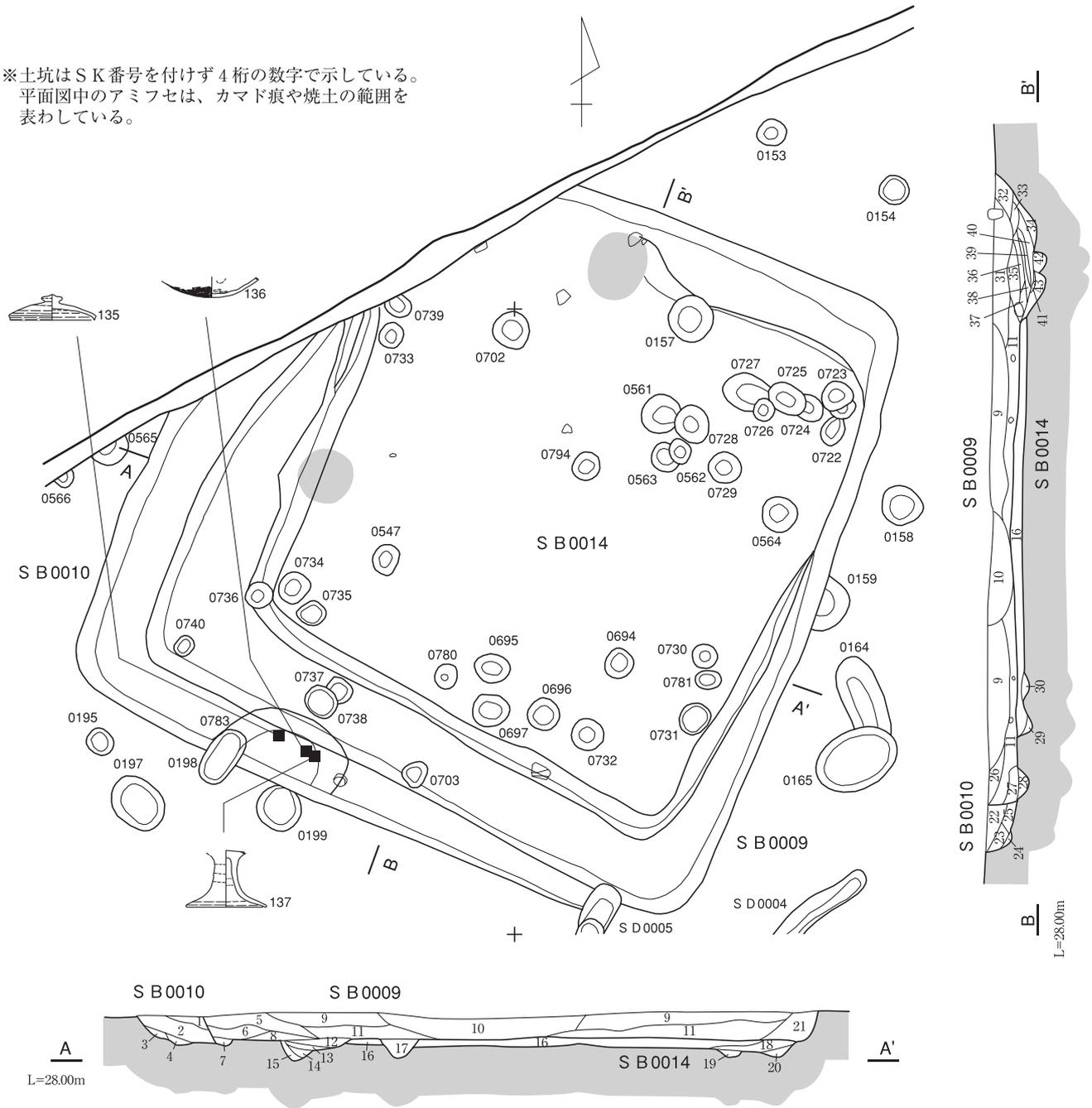
る。床面からは何も検出されず、遺物も区別できていないため時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 C S B 0005よりも古い住居であると思われる。

**00 C S B 0016** 00 C b 区の東寄りの南壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0005の床面から重複して確認されている。住居の大半が調査区外であるため、住居の規模・主軸方向は不明である。検出面からの深さは最大28cmで、00 C S B 0005の床面からの深さは3cmである。床面からは何も検出されておらず、遺物も区別できていないために時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から00 C S B 0005や00 C S B 0015よりも新しい住居であると思われる。

**00 C S B 0006** 00 C b 区の中央やや東寄りの北壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0003の北西側に位置している。住居の大半が調査区外であるため正確な規模は不明であるが、長軸460cm、短軸残存長194cmで、1辺が4m60cm前後の隅丸方形あるいは隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大で8cmを測る。床面から周溝などは確認されていない。出土遺物は小片が多く時期を決定することはできないが、遺構の切り合い関係から00 C S B 0007よりも新しい住居であると思われる。

**00 C S B 0007** 00 C b 区の中央やや東寄りで検出された竪穴住居で、00 C S B 0007の南西側に位置している。住居は00 C S B 0008に削平されているが、長軸517cm、短軸471cmで、やや変形しているが南北方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ大型の竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大10cmを測る。床面からは、主柱穴と思われる柱穴2基(00 C S K 0666・00 C S K 0672)が確認されているが、住居の大きさに比べ柱穴が小さすぎる感がある。出土遺物は僅かで小片のため時期を決めることは難しいが、遺構の切り合い関係から00 C S

※土坑はSK番号を付けず4桁の数字で示している。  
 平面図中のアミフセは、カマド痕や焼土の範囲を表わしている。



- |   |  |
|---|--|
| <p>1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)<br/>         2 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)<br/>         3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)<br/>         4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         5 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)<br/>         6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと地山の斑土(小礫を含む、炭化物を少量含む)<br/>         7 7.5YR3/4暗褐色粘質土(地山ブロックを含む)<br/>         8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)<br/>         9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)<br/>         10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を含む)<br/>         11 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)<br/>         12 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと地山ブロック(小礫・炭化物を少量含む)<br/>         13 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)<br/>         14 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと地山ブロック(炭化物を少量含む)<br/>         15 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)<br/>         16 7.5YR3/2黒褐色粘質土(焼土ブロック・地山ブロック・炭化物を含む)<br/>         17 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         18 7.5YR3/2黒褐色粘質土(地山ブロック・小礫・炭化物を少量含む)<br/>         19 7.5YR3/2黒褐色粘質土と地山ブロック(炭化物を少量含む)<br/>         20 7.5YR3/3暗褐色粘質土(7.5YR3/2黒褐色粘質土ブロック・地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)</p> | <p>21 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)<br/>         22 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)<br/>         23 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         24 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)<br/>         25 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         26 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)<br/>         27 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)<br/>         28 7.5YR3/4暗褐色粘質土と地山ブロック(炭化物を少量含む)<br/>         29 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)<br/>         30 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロックを少量含む)<br/>         31 7.5YR3/2黒褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)<br/>         32 5YR3/2暗赤褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を含む)<br/>         33 5YR3/4暗赤褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         34 5YR4/2灰褐色粘質土(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)<br/>         35 7.5YR3/3暗褐色粘質土(焼土ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         36 5YR3/3暗赤褐色粘質土(焼土ブロックを含む、炭化物を少量含む)<br/>         37 5YR3/4暗赤褐色粘質土(焼土ブロックを含む)<br/>         38 5YR3/2暗赤褐色粘質シルト(焼土ブロック・炭化物を含む)<br/>         39 5YR4/2灰褐色シルト(焼土ブロック・炭化物を少量含む)<br/>         40 2.5YR3/2暗赤褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)<br/>         41 5YR3/2暗赤褐色粘質土(地山ブロックを含む)<br/>         42 5YR3/2暗赤褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、焼土ブロックを少量含む)<br/>         43 5YR4/2灰褐色粘質土(地山ブロックを含む、炭化物を少量含む)</p> |
|---|--|

第39図 00CSB0009・SB0010・SB0014平面図・断面図(1:50)

B 0006・00 C S B 0008 よりも古い住居であると思われる。

**00 C S B 0008** 00 C b 区の中央やや東寄りで検出された竪穴住居で、00 C S B 0007 の西側に位置している。長軸 467cm、短軸 450cm で、1 辺が 4 m 50 ~ 60cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 24cm を測る。床面からは周溝が確認されており、他に柱穴と思われる土坑も見られるが不明な点が多い。遺物には小片が多いが、須恵器で岩崎 17 号窯様式と思われる杯身や同時期の高杯の脚部などが出土している。

**00 C S B 0009** 00 C b 区のほぼ中央の北壁付近で検出された竪穴住居で、3 棟が重複している中の 1 棟である。住居の北西隅が調査区外になるが、長軸 540cm、短軸 536cm で、1 辺が 5 m 40cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつやや大型の竪穴住居である。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 30cm と深い。遺物には小片が多いが、須恵器で高蔵寺 2 号窯様式の無台杯が出土している。

**00 C S B 0010** 00 C b 区のほぼ中央の北壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0009 の西側に位置している。住居の大部分は 00 C S B 0009 によって削平されているが、長軸残存長 455cm、短軸残存長 279cm で、00 C S B 0009 と同様の規模をもつ竪穴住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大 28cm を測る。出土遺物には小片が多いが、土師器の甕の他、須恵器で焼成不良の高杯の脚部、岩崎 17 号窯様式から岩崎 41 号窯様式までと思われる蓋が出土している。

**00 C S B 0014** 00 C b 区のほぼ中央の北壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0009 の床面から重複して確認されている。このため、遺物の明確な区別ができていない。住居の北西隅は調査区外であるが、長軸 423cm、短軸 415cm で、1 辺が 4 m 20cm 前後の隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向は N - 22° - E を示し、検出面からの深さは最大 34cm で、00 C S B 0009 の床面からの深さは 4 cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 4 基 (00 C S K 0547・00 C S K 0694・00 C S K 0702・00 C S K 0727)、周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物は僅かで時期は決定しにくい。遺構の切り合い関係から 00 C S B 0009 より古い住居であると思われる。

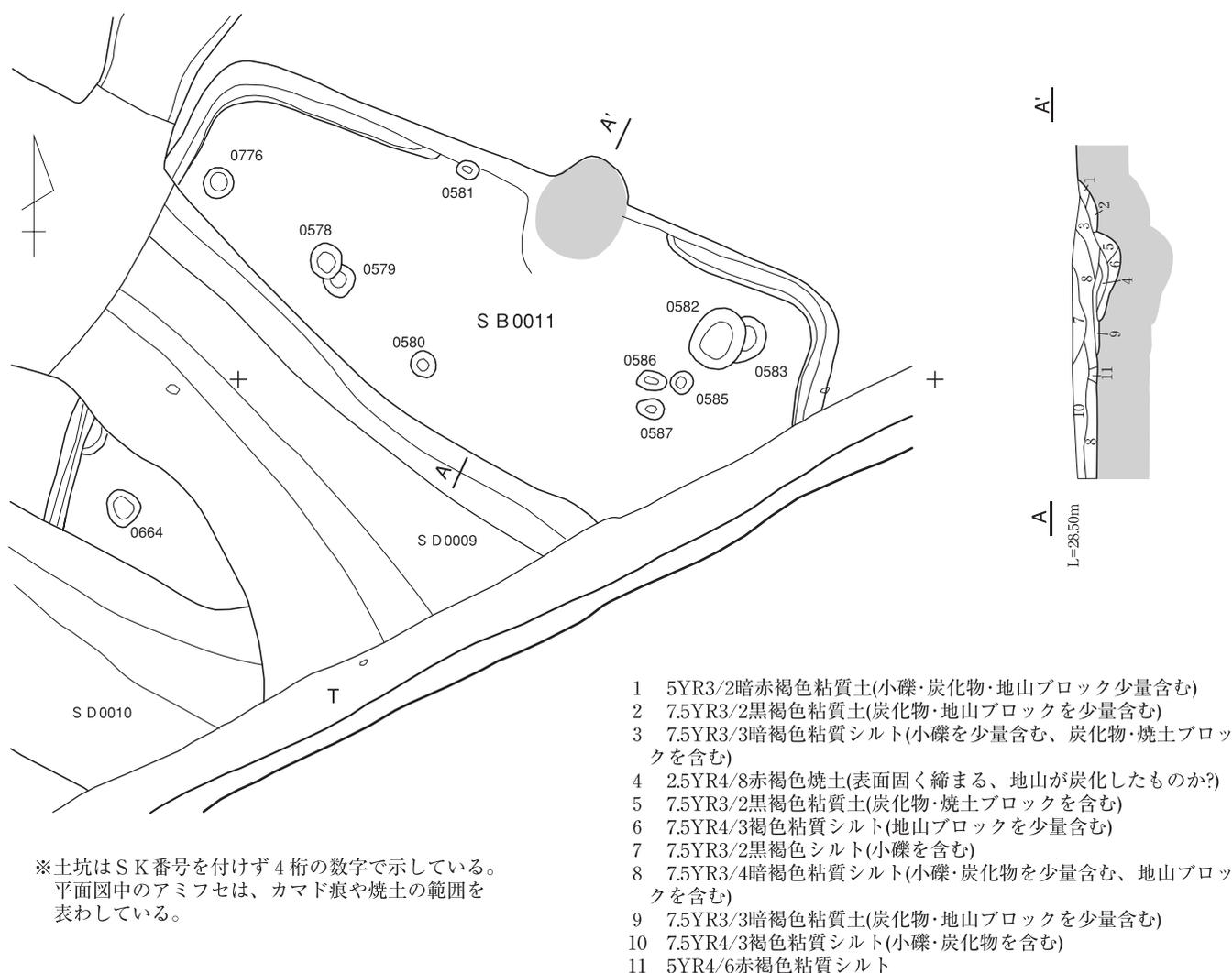
**00 C S B 0011** 00 C b 区の西側の南壁付近で検出された竪穴住居で、00 C S B 0009・00 C S B 0010・00 C S B 0014 の南西側に位置している。住居の大半は調査区外であったり戦国時代以降の溝 00 C S D 0009・00 C S D 0010 に切られているため正確な規模は不明であるが、長軸 498cm、短軸残存長 231cm で、1 辺が 5 m 前後の隅丸方形の平面プランをもつやや大型の竪穴住居と想定される。住居の主軸方向は N - 23° - E を示し、検出面からの深さは最大 20cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴 2 基 (00 C S K 0586・00 C S K 0776)、貯蔵穴と思われる土坑 1 ~ 2 基 (00 C S K 0582 または 00 C S K 0583)、周溝、北辺東寄りでカマド痕が確認されている。出土遺物には小片が多いが、須恵器で岩崎 17 号窯様式と思われる有台杯や蓋が出土している。

**00 C S B 0012** 00 C b 区の西側で検出された竪穴住居で、00 C S B 0011 の西側に位置している。住居の大半を戦国時代以降の溝 00 C S D 0009・00 C S D 0010 に切られているが、長軸 512cm、短軸 463cm で、東西方向にやや長い隅丸長方形の平面プランをもつ竪穴住居である。住居の主軸方向は N - 22° - E を示し、検出面からの深さは最大 21cm を測る。床面からは、支柱穴と思われる柱穴

3基(00CSK0256・00CSK0262・00CSK0598)、一部で周溝、北辺でカマド痕が確認されている。出土遺物には小片が多く時期を決定することはできない。

**00CSX0008** 00Cb区の中央やや東寄りの南壁付近で検出された竪穴住居で、00CSB0009・00CSB0010・00CSB0014の南側に位置している。住居の大部分が調査区外であるため正確な規模は不明であるが、長軸291cm、短軸残存長50cmで、1辺が3m前後の隅丸方形の平面プランをもつ小型の竪穴住居であると想定される。住居の主軸方向はN-28°-Wを示し、検出面からの深さは最大14cmを測る。床面からは北辺でカマド痕が確認されているが、周溝や柱穴ははっきりしていない。00CSK0698・00CSK0699は柱穴と思われるが確かではない。出土遺物は僅かで、時期を決定することはできない。

**00CSB0013** 00Ca区のほぼ中央の北壁付近で検出された竪穴住居である。住居の北西隅が調査区外であったり中世以降の溝00CSD0019・00CSD0020などで切られているが、長軸408cm、短軸395cmで、1辺が4m前後の隅丸方形の平面プランをもつやや小型の竪穴住居と想定される。住居の方向性は不明で、検出面からの深さは最大でも4cmしかない。床面からは周溝が確認され、柱穴と思われるものもあるが確かではない。出土遺物は小片が僅かで、時期を決定できていない。



第40図 00CSB0011平面図・断面図(1:50)

## 2. 溝状遺構

明確に古代の溝であると言い切れる遺構は確認されていない。しかし、土坑としては長軸が短軸に比べて長すぎる土坑が確認されているため、ここでは溝状遺構として紹介する。

**00 B S D 0005** 00 B a 区の中央やや南西側で検出された溝状遺構で、00 B S B 0008・00 B S B 0010の北側、00 B S B 0013・00 B S B 0014の西側に位置している。溝の方向はN-3°-Wでは北を向いている。長さ966cm、幅84～148cm、検出面からの深さは最大11cmを測る。底面から土坑状の遺構が確認されているが、性格は不明である。出土遺物は土師器が多いが、須恵器で岩崎17号窯様式の蓋が出土しており、前述までの竪穴住居群と時期が一致している。

## 3. 土坑

多数の土坑が検出されているが、その多くは性格が明らかとなっていない。大半の土坑は中世以降の掘立柱建物の柱穴（柱穴と柱穴以外の土坑については区別せずにS K番号をつけた。）になると思われるが、これも確かではない。ここでは遺物が出土した土坑のうち、遺物実測図を掲載した土坑を中心に紹介する。

**98 C S K 0578** 98 C 区の北端の98 A区との境付近で検出された土坑である。長径138cm、短径69cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大62cmを測る。須恵器で摘み付きの蓋が出土しているが、正確な時期は不明である。

**00 B S K 0889** 00 B a 区の南端の東壁付近で検出された土坑で、00 B S B 0019の北東に位置している。長径40cm、短径36cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大24cmを測る。出土遺物は土師器の甕などが多く、時期の決定は難しい。

**00 B S K 1049** 00 B a 区の中央やや北寄りの東壁付近で検出された土坑である。長径83cm、短径73cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で9cmを測る。須恵器で東山50号窯様式から岩崎17号窯様式ぐらいまでの高杯が出土している。

**00 B S K 1050** 00 B a 区の中央やや北寄りの東壁付近で検出された土坑で、00 B S K 1049に切られている。長径残存長104cm、短径86cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。須恵器で岩崎17号窯様式の壺や岩崎41号窯様式の高杯が出土している。

**00 B S K 1616** 00 B a 区の中央やや北寄りの東壁付近で検出された土坑で、00 B S D 0038の中に位置している。長径14cm、短径10cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大10cmを測る。須恵器で岩崎41号窯様式の甕が出土している。

**00 B S K 2137** 00 B b 区の南寄りで検出された土坑で、00 B S B 0042の北西側に位置している。長径36cm、短径32cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大16cmを測る。土師器の甕が出土しているが時期は不明である。

**00 B S K 2146** 00 B b 区の西壁付近で検出された土坑で、00 B S B 0050の西側に位置し、00 B S K 2145に切られている。長径39cm、短径推定34cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大9cmを測る。須恵器で鳴海32号窯様式の盤が出土している。

**00 B S K 2453** 00 B b 区の南端付近で検出された土坑で、00 B S B 0048 と切り合い関係を持っている。長径28cm、短径24cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大17cmを測る。須恵器で鳴海32号窯様式の無台杯が出土しているが、00 B S B 0048 の遺物である可能性もある。

**00 B S K 2595** 00 B b 区の東端の東壁付近で検出された土坑である。長径51cm、短径残存長29cmで平面円形を呈していると思われ、検出面からの深さは最大で9cmを測る。土師器の甕以外に有台杯や蓋が出土しているが、時期は確定できない。

**00 B S K 2624** 00 B b 区の中央やや北寄りで検出された土坑で、00 B S X 0010 の北西側に位置している。長径170cm、短径144cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大14cmを測る。土師器片以外に須恵器で岩崎17号窯様式の杯身が出土している。

**00 B S K 2672** 00 B b 区の中央やや北寄りで検出された土坑で、00 B S X 0010 の北西側に位置している。長径残存長123cm、短径124cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大15cmを測る。土師器片以外に須恵器で岩崎17号窯様式の杯身・鉢・平瓶が出土している。

**00 B S K 3152** 00 B b 区の中央やや北寄りの西壁付近で検出された土坑である。長径残存長79cm、短径40cmで平面長方形を呈し、検出面の深さは最大17cmを測る。00 B S B 0058 の一部である可能性がある。土師器の甕の底部が出土しているが、時期は不明である。

**00 B S K 3182** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長径120cm、短径推定93cmで平面楕円形を呈すると思われ、検出面からの深さは最大20cmを測る。土師器片以外に須恵器で5世紀代と思われる甕、岩崎17号様式と高蔵寺2号窯様式と思われる有台杯が出土している。

**00 B S K 3183** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑で、00 B S K 3182 を切っている。長径104cm、短径92cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大25cmを測る。土師器以外に須恵器で岩崎17号窯様式から岩崎41号窯様式までの有台杯や無台杯が出土している。

**00 B S K 3184** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長径80cm、短径推定78cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大30cmを測る。土師器以外に須恵器で岩崎17号窯様式の有台杯が出土している。

**00 B S k 3187** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長径推定40cm、短径32cmで平面楕円形を呈すると思われ、検出面からの深さは最大24cmを測る。土師器片以外に須恵器で岩崎17号窯様式から岩崎41号窯様式までの有台杯が出土している。

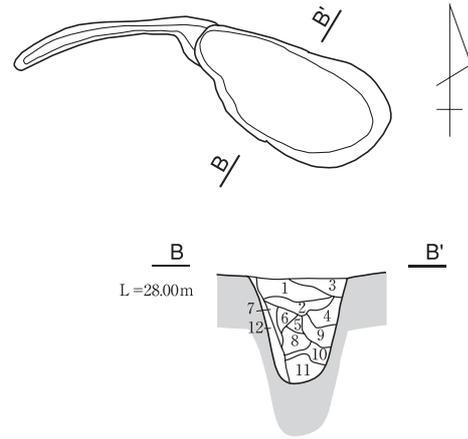
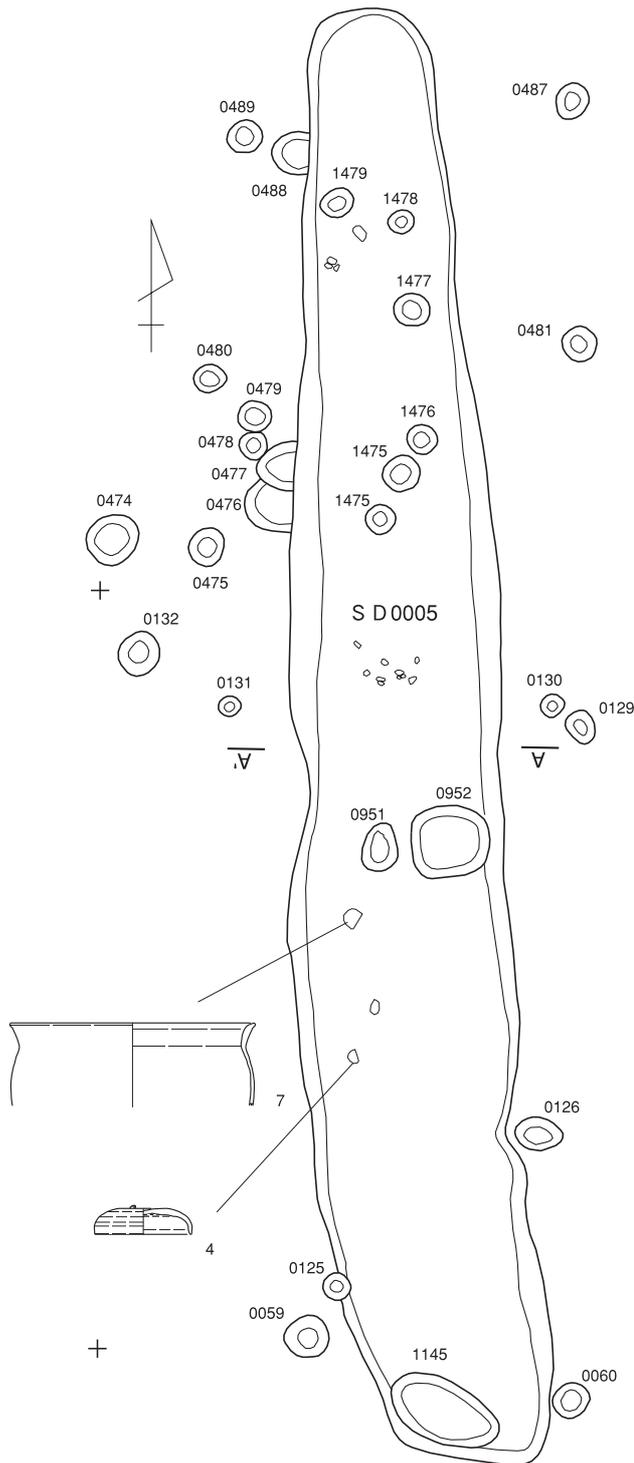
**00 B S K 3211** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長径36cm、短径32cmで平面円形を呈し、検出面からの深さは最大22cmを測る。土師器片以外に須恵器で岩崎17号窯様式から高蔵寺2号窯様式までの蓋が出土している。

**00 B S K 3218** 00 B b 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑で、00 B S K 2628 の中に位置している。長径27cm、短径21cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大24cmを測る。土師器片以外に須恵器で東山50号窯様式の蓋や岩崎17号窯様式の高杯と思われるものが出土している。

**00 B S K 3284** 00 B b 区の中央やや北寄りで検出された土坑で、00 B S X 0010 の北西側に位置している。長径44cm、短径38cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大37cmを測る。土師器以外に須恵器で岩崎17号窯様式の鉢が出土している。

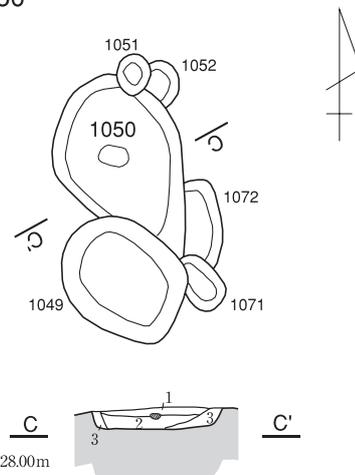
00 B S D 0005

98 C S K 0578

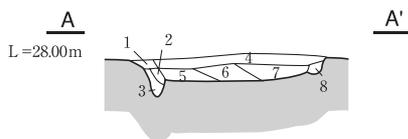


- 1 10YR4/4褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質土の斑土
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と5YR3/4暗赤褐色粘質土の斑土
- 3 10YR4/4褐色粘質土と2.5YR5/4にぶい赤褐色粘質土の斑土
- 4 10YR4/4褐色粘質土
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質土
- 6 7.5YR5/6明褐色粘質土
- 7 10YR4/4褐色粘質土
- 8 10YR5/6黄褐色粘質土
- 9 7.5YR4/4褐色粘質土と5YR4/3にぶい赤褐色粘質土の斑土
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 11 7.5YR4/3褐色粘土(小礫含む)
- 12 10YR6/6明黄褐色粘質土

00 B S K 1050



- 1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 10YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(2のブロック・小礫を含む)



- 1 7.5YR4/2灰褐色シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土(地山ブロックを少量含む)
- 4 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む)
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質土(炭化物・小礫を少量含む)
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質土(地山ブロック・炭化物・小礫などを少量含む)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む、小礫を含む)
- 8 7.5YR4/3褐色粘質シルト(地山ブロックを含む)

第41図 古代の遺構平面図・断面図 (1:50)

## 第4節 中世の遺構

今回の調査において、中世の遺構には、掘立柱建物3軒と土坑墓25基、溝数条、土坑などがある。地山面の標高が比較的高い所で遺構が検出されている。僅かではあるが古代に続いて中世においても、この地で人々が活動していたことが確認されている。

### 1. 掘立柱建物

掘立柱建物は全部で12軒確認されている。その数はさらに増える可能性があるが、時期が確認できた建物は中世3軒、江戸時代後期1軒で、残り8軒は時期が不明である。ここでは、中世の掘立柱建物を紹介する。

**98 D S B 0101** 98 D区の南東端の南壁付近で検出された掘立柱建物で、98 D S D 0002の東側に位置している。確認された建物は、主軸方向はN-42°-Wを示し、他の2軒の掘立柱建物とは異なっている。規模は1間×2間と小規模な建物であり、心心間の距離は250cmと150cm・160cmとなっている。柱穴は5基確認されており、径20～28cmで平面円形を呈し、検出面からの深さは15～19cmを測る。98 D S K 0014からは第4型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

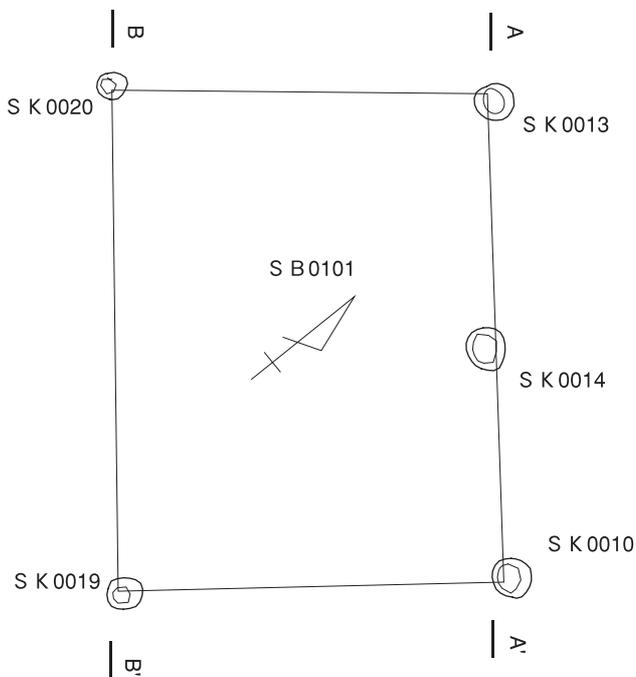
**00 B S B 0101** 00 B a区のほぼ中央の西側で検出された掘立柱建物で、00 B S B 0008・00 B S B 0010の北側に位置している。確認された建物は、主軸方向はN-58°-Eを示し、98 D S B 0101と異なっている。規模は2間×3間で、心心間の距離は205cm・203cmと200cm・210cmとなっている。柱穴は9基確認されており、径21～34cmで平面円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは16～25cmを測る。00 B S K 0056・00 B S K 0118・00 B S K 0126からは灰釉系陶器の椀が出土しているが、小片のため時期は確定できない。

**00 B S B 0102** 00 B a区のほぼ中央の西側で検出された掘立柱建物で、00 B S B 0025の西側に位置している。確認された建物は、主軸方向はN-42°-Eを示し、98 D S B 0101と方向が逆になっている。規模は2間×3間で、心心間の距離は200cm・206cmと220cm・230cm・250cmと不均等になっている。柱穴は8基確認されており、径30～55cmで平面円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは17～30cmを測る。00 B S K 0584から灰釉系陶器の椀が出土しているが、小片のため時期は確定できない。

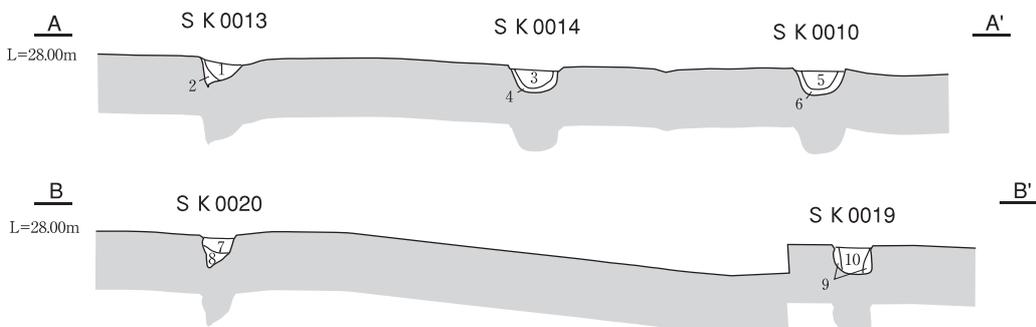
### 2. 土坑墓

本遺跡を調査している際に土坑墓と思われる遺構がいくつか検出されていたが、出土遺物が少なく確証がもてなかった。しかし、00 C区において初めて灰釉系陶器の椀と鉄製の刀子が出土する土坑が検出されたことで、この地域に土坑墓の存在が確認された。ここで紹介する土坑墓の中には土坑墓の可能性の高いものも含んでいること、これ以外にも土坑墓が存在するかもしれないことを予め断っておきたい。調査区全体で確認された土坑墓は約25基で、中でも00 B区に多く見られており、比較的矢作川に近い調査区に集中する傾向にある。本遺跡の南西に位置する水入遺跡においても380基に及ぶ土坑墓が検出されていることから本遺跡との関連が想定され、この地域にも墓域が広がっていた可能性が高くなった。

98 D S B 0101

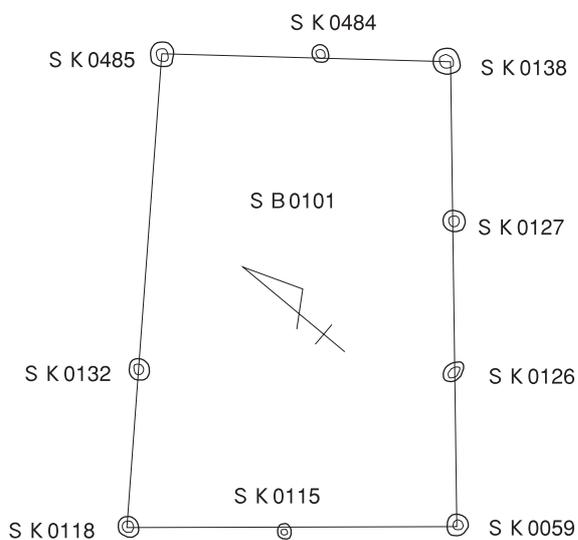


- S K 0013  
 1 7.5YR4/4褐色粘質シルトと5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトの斑土  
 2 10YR3/3暗褐色粘質シルト
- S K 0014  
 3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土  
 4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土
- S K 0010  
 5 7.5YR4/4褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土  
 6 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
- S K 0020  
 7 7.5YR4/4褐色粘質シルト  
 8 7.5YR5/6明褐色粘質シルト
- S K 0019  
 9 7.5YR4/4褐色粘質シルト  
 10 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと10YR6/4にぶい黄褐色粘質シルトの斑土

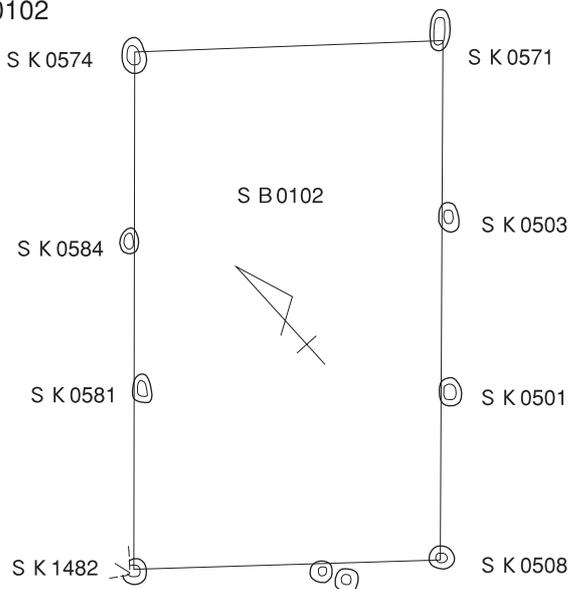


第42図 98 D S B 0101 平面図・断面図 (1:50)

00 B S B 0101



00 B S B 0102



第43図 00 B S B 0101・S B 0102 平面図 (1:100)

**98 C S K 0209** 98 C 区の南端付近で検出された土坑である。長軸 90cm、短軸 78cm で平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大 18cm を測る。長軸の方位は N - 50° - E を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**98 C S K 0672** 98 C 区のほぼ中央で検出された土坑である。長軸 51cm、短軸 48cm で平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大 60cm を測る。方位・時期ともに不明である。

**98 E S K 0193** 98 E 区の北側で検出された土坑である。規模は長軸 145cm、短軸 112cm で平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 36cm を測る。長軸の方位は N - 6° - E を示している。出土遺物は小片で時期は決定できない。

**98 E S K 0212** 98 E 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸 108cm、短軸 106cm で平面円形を呈し、検出面からの深さは最大 31cm を測る。方位・時期ともに不明である。

**98 E S K 0255** 98 E 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸 126cm、短軸 104cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 45cm を測る。長軸の方位は N - 17° - W を示している。出土遺物は小片で時期は決定できない。

**98 E S K 0276** 98 E 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸 200cm、短軸 155cm で平面不定長方形を呈し、検出面からの深さは最大 47cm を測る。長軸の方位は N - 30° - E を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**98 E S K 0339** 98 E 区のほぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長軸 173cm、短軸 111cm で平面不定長方形を呈し、検出面からの深さは 43cm を測る。長軸の方位は N - 32° - E を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**98 E S K 0360** 98 E 区の南側で検出された土坑である。S D 0004 に切られているため正確な規模は確認できない。検出面からの深さは 8 cm と浅く、方位・時期ともに不明である。

**98 F S K 0329** 98 F a 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸 71cm、短軸 66cm で平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大 22cm を測る。方位・時期ともに不明である。

**00 B S K 0679** 00 B a 区のほぼ中央の北壁付近で検出された土坑である。長軸 110cm、短軸 72cm で平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 20cm を測る。長軸の方位は N - 31° - W を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

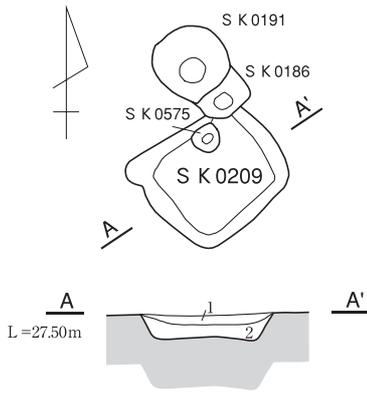
**00 B S K 0700** 00 B a 区のほぼ中央の北壁付近で検出された土坑である。長軸 105cm、短軸 59cm で平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大 18cm を測る。長軸の方位は N - 50° - W を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**00 B S K 0710** 00 B a 区のほぼ中央の北壁付近で検出された土坑である。長軸 99cm、短軸 93cm で平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大 15cm を測る。方位・時期ともに不明である。

**00 B S K 0719** 00 B a 区のほぼ中央の北側付近で検出された土坑である。長軸 124cm、短軸 82cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 14cm を測る。長軸の方位は N - 51° - W を示している。出土遺物はなく時期は不明である。

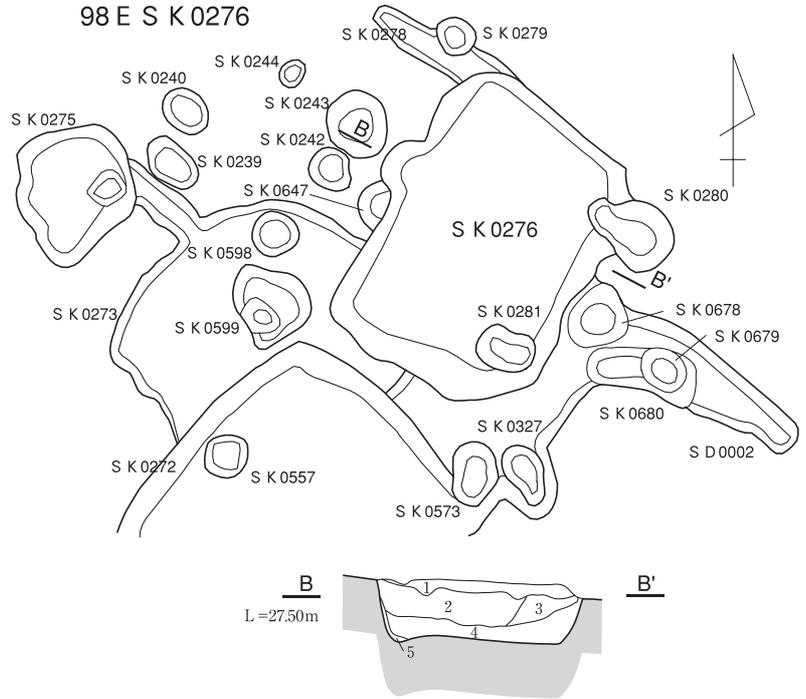
**00 B S K 0765** 00 B a 区のほぼ中央の北寄りで検出された土坑である。長軸 115cm、短軸 72cm で平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 22cm を測る。長軸の方位は N - 38° - E を示している。出土遺物は小片で時期を決定できない。

98 C S K 0209

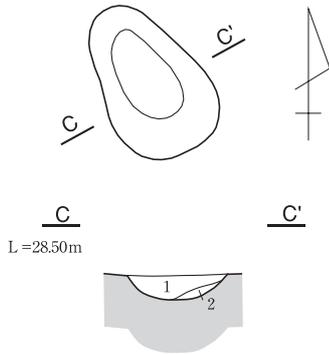


- 1 10YR4/4褐色粘質土
- 2 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土と10YR4/3にぶい黄褐色粘質土の斑土

98 E S K 0276



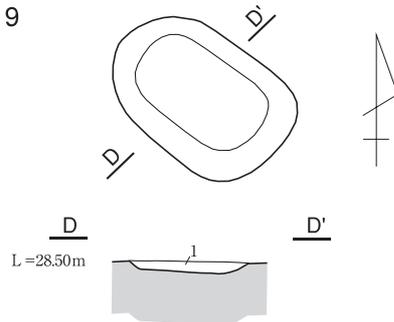
00 B S K 0679



- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土(炭化物・小礫を少量含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルト

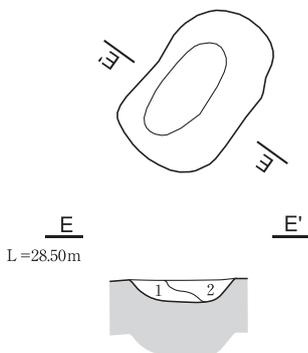
- 1 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を多く含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)
- 3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)
- 4 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR4/6褐色粘質シルト

00 B S K 0719



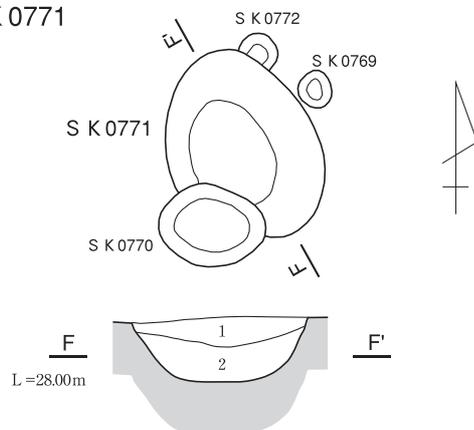
- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色シルトの斑土(小礫含む)

00 B S K 0765



- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土(炭化物・小礫を含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土(炭化物・小礫を少量含む)

00 B S K 0771



- 1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトブロックの斑土(炭化物を含む)

**00 B S K 0771** 00 B a 区のほぼ中央の北寄りで検出された土坑である。長軸133cm、短軸100cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大38cmを測る。長軸の方位はN - 29° - Wを示している。出土遺物は小片で時期を決定できない。

**00 B S K 0909** 00 B a 区の中央やや南寄りの東壁付近で検出された土坑である。長軸120cm、短軸96cmで平面不定長方形を呈し、検出面からの深さは最大10cmを測る。長軸の方位はN - 47° - Eを示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**00 B S K 1029** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸152cm、短軸104cmで平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大28cmを測る。長軸の方位はN - 58° - Wを示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**00 B S K 1192** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸97cm、短軸78cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大10cmを測る。長軸の方位はN - 48° - Eを示している。出土遺物は小片で時期は決定できない。

**00 B S K 1307** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸94cm、短軸86cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大15cmを測る。方位・時期ともに不明である。

**00 B S K 1315** 00 B a 区のほぼ中央の北寄りで検出された土坑である。長軸91cm、短軸63cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大8cmを測る。長軸の方位はN - 85° - Wを示している。出土遺物はなく時期は決定できない。

**00 B S K 1340** 00 B a 区の北端付近で検出された土坑で、00 B S D 0039に一部を切られている。長軸残存長98cm、短軸84cmで平面楕円形と思われ、検出面からの深さは最大6cmを測る。長軸の方位はN - 44° - Eを示している。遺物は出土しているが小片で時期を決定できない。

**00 B S K 1341** 00 B a 区の北端付近で検出された土坑で、00 B S D 0039に一部を切られている。長軸残存長122cm、短軸75cmで平面楕円形と思われ、検出面からの深さは最大7cmを測る。長軸の方位はN - 48° - Eを示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**00 B S K 1343** 00 B a 区の北端付近で検出された土坑である。長軸75cm、短軸65cmと小規模で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大18cmを測る。長軸の方位はN - 59° - Eを示している。出土遺物はなく時期は不明である。

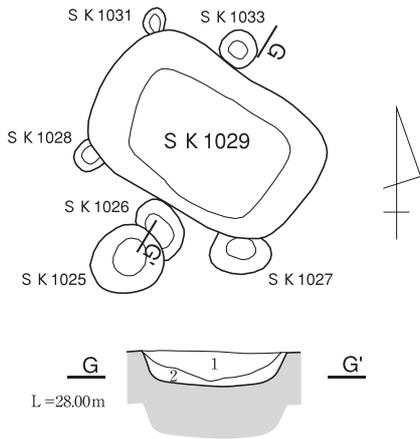
**00 B S K 1354** 00 B a 区の北端付近で検出された土坑である。長軸74cm、短軸64cmと小規模で平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。長軸の方位はN - 38° - Wを示している。出土遺物はなく時期は不明である。

**00 B S K 1587** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸170cm、短軸132cmで平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大14cmを測る。長軸の方位はN - 47° - Wを示している。遺物は小片で時期を決定することは難しい。

**00 B S K 2731** 00 B b 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長軸143cm、短軸90cmで平面不定長方形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。長軸の方位はN - 46° - Eを示している。遺物は小片で時期は不明である。

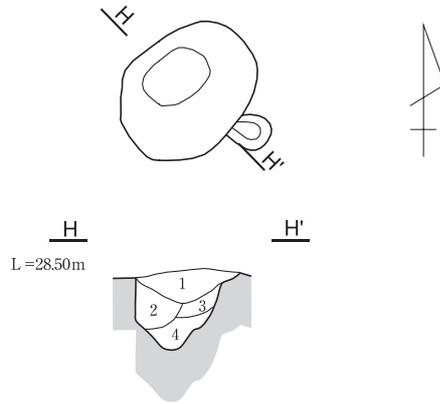
**00 B S K 2870** 00 B b 区の北側の西壁付近で検出された土坑である。長軸98cm、短軸推定68cmで平面不定長方形で、検出面からの深さは最大39cmを測る。長軸の方位はN - 29° - Wを示してい

00B S K 1029



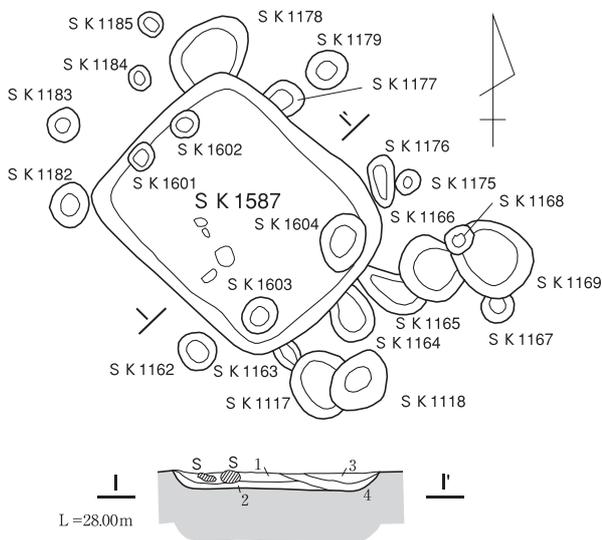
- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土(炭化物・小礫を少量含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト(7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック・炭化物を含む)

00B S K 1192



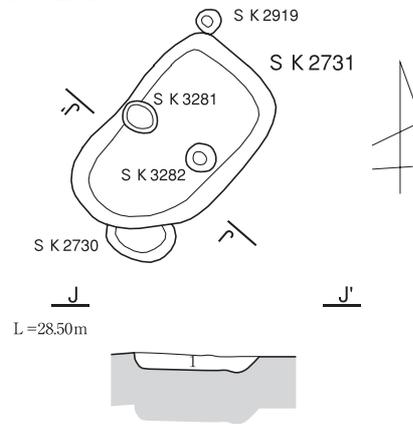
- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物・小礫を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(砂を含みしり弱い)

00B S K 1587



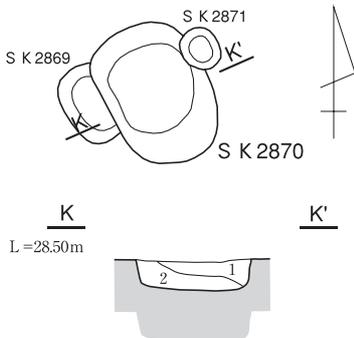
- 1 10YR3/2黒褐色シルト(砂を含みしり弱い)
- 2 10YR3/3暗褐色シルト(砂を含みしり弱い)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト(炭化物を少量含む)

00B S K 2731



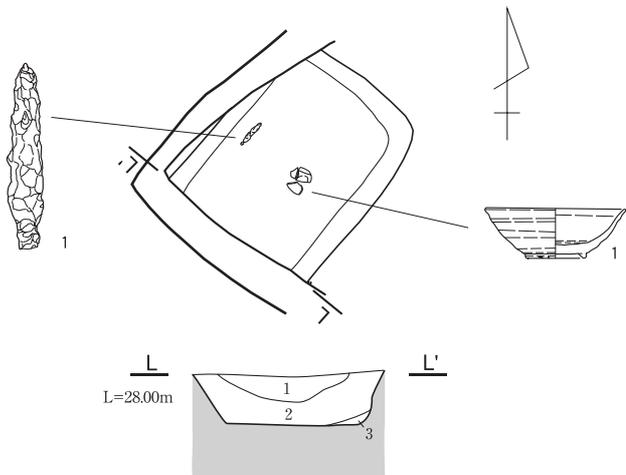
- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(小礫・炭化物を少量含む)

00B S K 2870



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土(小礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと地山の斑土

00C S X 0001



- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR5/8明褐色粘質シルトの斑土(小礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/1黒褐色粘質土と7.5YR5/8明褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/1黒褐色粘質土と7.5YR5/8明褐色粘質シルトの斑土

る。遺物は小片で時期は決定できない。

**00 B S K 2994** 00 B b 区の北端で検出された土坑である。長軸 79cm、短軸 73cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 12cm を測る。方位・時期ともに不明である。

**00 C S X 0001** 00 C a 区の西端の西壁付近で検出された土坑である。長軸残存長 156cm、短軸 116cm で平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大 21cm を測る。長軸の方位は N - 42° - E を示している。第 5 型式古段階の灰釉系陶器の椀と鉄製の刀子が出土している。屋敷墓である可能性があるが、詳細は不明である。

### 3. 溝

中世の溝は明確になっていないが、00 C b 区から幅が細くて浅い溝がまとまって検出されている。それらは土坑墓 00 C S X 0001 に関連する屋敷地境の溝である可能性があるので、ここで紹介しておく。出土遺物は小片で、時期を決定できる遺構はない。

**00 C S D 0016** 00 C b 区の東壁付近で検出された溝で、幅 73 ~ 154cm、検出面からの深さは最大 11cm を測る。溝の方位は N - 47° - E を示している。00 C a 区で検出された戦国時代以降の溝 00 C S D 0012 と同一遺構の可能性もある。

**00 C S D 0017** 00 C b 区の東壁付近で検出された溝で、幅 35 ~ 66cm、検出面からの深さは最大 6 cm を測る。溝の方位は N - 43° - E を示している。00 C b 区で検出された 00 C S K 0349 とつながる溝である可能性がある。

**00 C S D 0018** 00 C b 区の東壁付近で検出された溝で、幅 30 ~ 46cm、検出面からの深さは最大 9 cm を測る。溝の方位は N - 43° - E を示している。00 C a 区で検出された 00 C S D 0013 と同一遺構である可能性が高い。

**00 C S D 0019** 00 C b 区のほぼ中央の北側で検出された溝で、幅 21 ~ 85cm、検出面からの深さは最大 6 cm を測る。溝の方向性は N - 30° - E を示し、他の溝とやや異にしている。00 C b 区で検出された江戸時代の溝 00 C S D 0024 と同一遺構の可能性もある。

**00 C S D 0020** 00 C b 区のほぼ中央の北側で検出された溝で、幅 31 ~ 77cm、検出面からの深さは最大 8 cm を測る。溝の方位は N - 41° - E を示している。00 C b 区で検出された 00 C S D 0025 と同一遺構の可能性もある。

### 4. 土坑

多くの土坑が検出されているが、大半は掘立柱建物の柱穴である可能性が高いようである。ここでは出土遺物を実測した遺構を中心に紹介する。

**98 D S K 0014** 98 D 区の東端付近で検出された 98 D S B 0101 の柱穴の 1 つである。長径 28cm、短径 25cm で平面不定円形を呈し、検出面からの深さは最大 17cm を測る。第 4 型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**98 E S K 0221** 98 E 区の北端付近で検出された土坑である。長径 25cm、短径 24cm で平面円形を呈し、検出面からの深さは最大 20cm を測る。古瀬戸前期段階の壺の口縁部が出土している。

**98 E S K 0232** 98 E 区の北側で検出された土坑である。長径 60cm、短径 35cm で平面不定楕円

形を呈し、検出面からの深さは最大54cmを測る。第5型式の灰釉系陶器の皿が出土している。

**98 E S K 0259** 98 E 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長径53cm、短径残存長42cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは7cmを測る。第8型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**98 E S K 0379** 98 E 区の北側の東壁付近で検出された土坑である。長径43cm、短径27cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは44cmを測る。第8型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**98 E S K 0539** 98 E 区の北側で検出された土坑である。長径107cm、短径70cmと大きく平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大42cmを測る。

**00 B S K 0250** 00 B a 区の南壁付近で検出された土坑である。長径27cm、短径26cmで平面円形を呈し、検出面からの深さは最大7cmを測る。第5型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 B S K 3022** 00 B b 区の北端付近で検出された土坑である。長径36cm、短径27cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大16cmを測る。第5型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 C S K 0249** 00 C a 区の東端の南壁付近で検出された土坑である。長軸残存長70cm、短軸72cmで平面楕円形と推定され、検出面からの深さは15cmを測る。第7～8型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 C S K 0406** 00 C b 区の西端の南壁付近で検出された土坑である。長径推定39cm、短径推定39cmで平面不定円形と思われ、検出面からの深さは最大14cmを測る。第8型式以降の灰釉系陶器の椀が出土している。

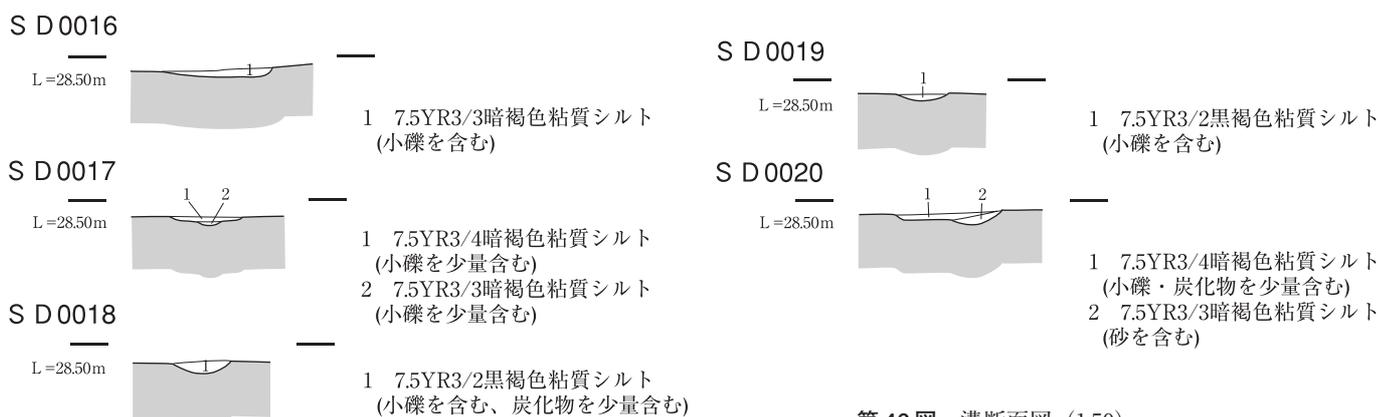
**00 C S K 0465** 00 C b 区の西端付近で検出された土坑である。長径54cm、短径43cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは9cmを測る。第7型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 C S K 0511** 00 C a 区の東端付近で検出された土坑である。長径32cm、短径30cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。第8型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 C S K 0519** 00 C a 区の東端付近で検出された土坑である。長径37cm、短径32cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。第5型式の灰釉系陶器の椀が出土している。

**00 C S K 0520** 00 C a 区の東端付近で検出された土坑である。長径26cm、短径25cmで平面円形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。第8型式以降の灰釉系陶器の椀が出土している。

(小嶋廣也)



第46図 溝断面図 (1:50)

## 第5節 戦国時代から江戸時代前期までの遺構

今回の調査において、この時期の遺構を確認したのは、竪穴状建物2軒、溝十数条、井戸7基、池状遺構1基、土坑などである。溝で囲まれた屋敷地が存在することが明らかとなり、この時期にも人々が生活していることが確認された。

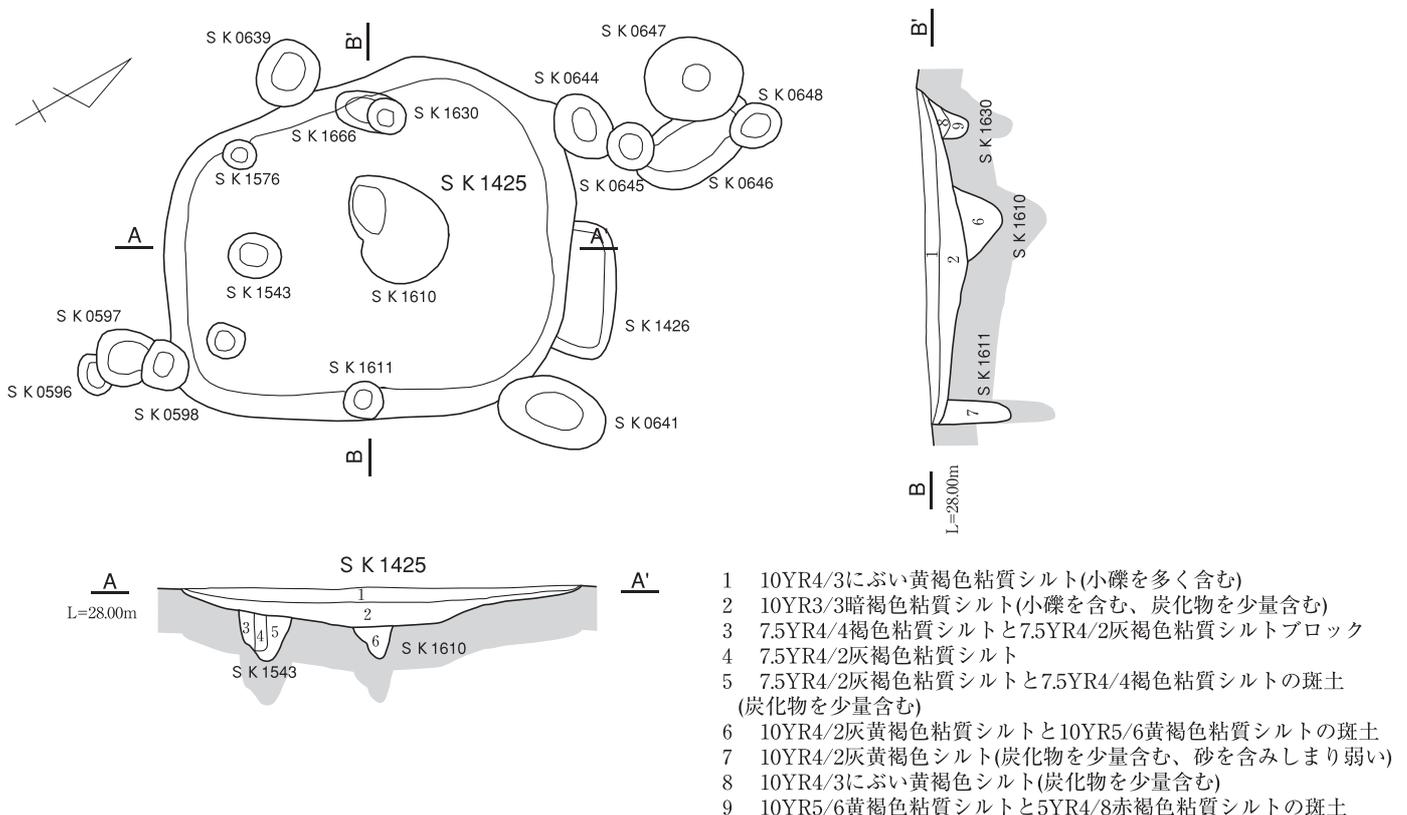
### 1. 竪穴状建物

**00 D S B 0030** 00 B a 区の中央やや東側で検出された竪穴状建物で、00 B S B 0028・S B 0029の北西側に位置している。長軸332cm、短軸317cmで、やや不定形ながら隅丸方形の平面プランをもつ住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大12cmを測る。床面からカマド痕などの遺構は検出されていないが、西壁付近で焼土や炭化物の広がり確認された。遺物として土師器皿や鍋・釜類が出土しているが、正確な時期は不明である（第23図参照）。

**00 B S K 1425** 00 B a 区のほぼ中央やや東側で検出された竪穴状建物と思われる遺構で、00 B S B 0030の北西側に位置している。長軸272cm、短軸234cmで、やや不定方形の平面プランをもつ住居と思われる。住居の主軸方向は不明で、検出面からの深さは最大20cmを測る。床面からカマド痕などの遺構は検出されていない。遺物として土師器皿が出土しているが、正確な時期は不明である。

### 2. 掘立柱建物

調査区において柱穴と思われる土坑が多く確認されており、溝に囲まれた内側を屋敷地として捉えるところに複数の掘立柱建物を想定することは可能であるが、今回は明確に捉えることができなかった。



第47図 00 B S K 1425 平面図・断面図 (1:50)

た。紹介する掘立柱建物以外に建物が存在していた可能性があることをここで断っておきたい。後述する時期不明とした掘立柱建物の中に該当する建物があるかもしれないが、遺物が出土していないために決定できていない。

### 3. 溝

今回の調査でこの時期に該当する溝は十数条検出されており、大部分は屋敷地を区画するための溝と想定される。以下に主な溝を個別に紹介するが、00年度調査区で検出された溝からは出土遺物が少なく小片ばかりで、時期を決定できたものは少ない。

**98 B S D 0002** 98 B 区の南側で検出された溝で、幅173～302cm、検出面からの深さは最大62cmを測る。断面はU字形で、形状はL字状に西に屈曲しているが、溝の方向性はN-39°-Wを示している。出土遺物から時期は16世紀後半から18世紀前半頃と思われる。

**98 B S D 0014** 98 B 区のほぼ中央で検出された溝で、幅221～320cm、検出面からの深さは最大63cmを測る。断面は箱堀に近く、形状はL字状に東に屈曲し98 C 区 S D 0009 と同一の溝になる可能性が高い。溝の方向性はN-40°-Wを示している。出土遺物から16世紀中葉から17世紀後半頃と思われる。

**98 B S D 0017** 98 B 区の南側で検出された溝で、98 B S D 0014 と同一の溝になる。幅248～464cm、検出面からの深さは最大32cmを測る。断面は箱堀に近く、溝の方向性はN-41°-Wを示している。出土遺物から時期は16世紀代から17世紀前半頃と思われる。

**98 C S D 0001** 98 C 区の南側で検出された溝で、98 C S D 0003 と同一の溝になる可能性が高い。幅44～82cmで弓なりを呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。出土遺物から時期は17世紀初頭頃と思われる。

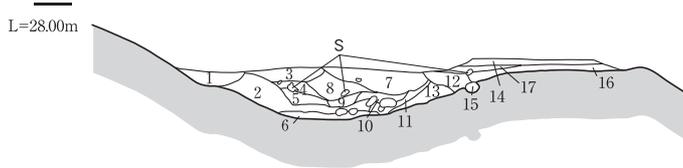
**98 C S D 0009** 98 C 区のほぼ中央の西壁付近で検出された溝で、98 B S D 0014 と同一の溝である可能性が高い。幅192～274cm、検出面からの深さは最大59cmを測る。溝の方向性はN-49°-Eを示している。出土遺物から時期は16世紀から17世紀前半頃と思われる。

**98 C S D 0015** 98 C 区のほぼ中央で検出された溝で、98 C S D 0009 の北側に位置している。幅138～183cmで、検出面からの深さは最大115cmを測る。断面は箱堀で、L字状に南側に屈曲しており、溝の方向性はN-44°-Eを示している。出土遺物から時期は16世紀代と思われる。

**98 D S D 0002** 98 D 区の北側で検出された溝で、98 C S D 0015 と同一の溝となる可能性がある。幅164～300cm、検出面からの深さは67cmを測る。断面は箱堀に近く、L字状に西側に屈曲しており、溝の方向性はN-51°-Wを示している。出土遺物から時期は16世紀中葉から17世紀前半頃と思われる。

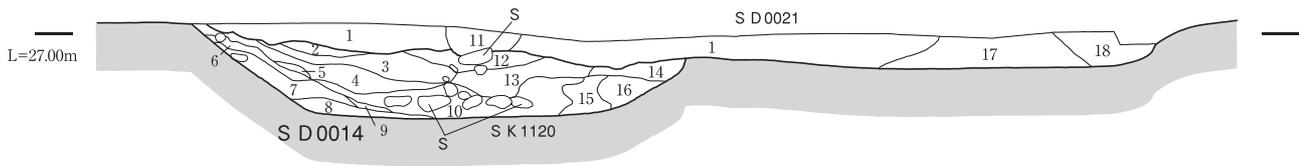
**98 E S D 0004** 98 E 区の南側で検出された溝で、98 F S D 0010 と同一の溝となる可能性がある。幅330～417cmで、検出面からの深さは最大59cmを測る。断面は丸底で、L字状に南側に屈曲しており、溝の方向性はN-48°-Eを示している。出土遺物から時期は16世紀代から18世紀前半までと思われる。ただし、屈曲した南側で二股に溝が分かれて検出されており、一方の溝は江戸時代後期の段階で掘り直された溝と考えられるが、正確な規模などについては不明な点が多い。

98 B S D 0002



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(白色砂粒を若干含む)
- 2 10YR3/3暗褐色砂質土
- 3 10YR3/4暗褐色粘質土
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質土(礫を含む)
- 5 7.5YR4/4褐色粘質土(炭化物を含む)
- 6 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
- 7 10YR4/2灰黄褐色粘質土
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(礫を含む)
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 12 10YR4/4褐色粘土
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(小礫を含む)
- 15 10YR4/4褐色粘質シルト
- 16 10YR4/6褐色粘質シルト
- 17 10YR4/4褐色砂質土

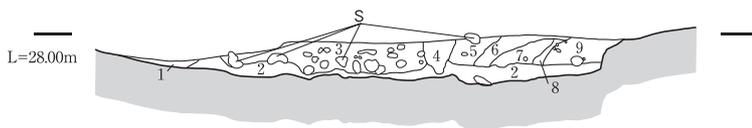
98 B S D 0014



- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト
- 2 7.5YR4/4褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの斑土
- 3 7.5YR3/3暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの斑土(小礫を含む)
- 4 7.5YR3/3暗褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの斑土(小礫を含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色シルト
- 6 10YR3/4暗褐色シルト
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(礫を含む)
- 8 2.5Y3/2黒褐色細粒砂

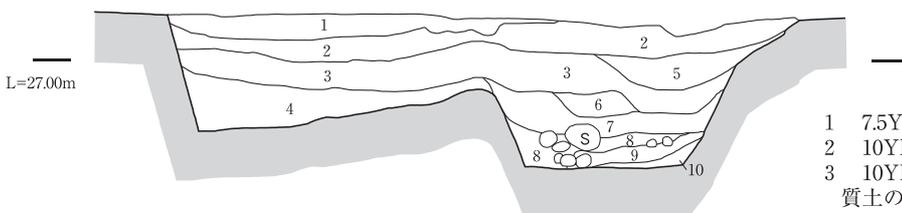
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- 10 2.5Y3/1黒褐色シルト
- 11 10YR4/4褐色粘質シルトと5YR5/6明赤褐色粘質シルトの斑土
- 12 10YR3/4暗褐色シルトと7.5YR5/6明褐色シルトの斑土
- 13 7.5YR4/3褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトの斑土
- 14 10YR3/3暗褐色シルトの斑土
- 15 10YR3/2黒褐色砂質シルト
- 16 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト(礫を含む)
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと10YR4/6褐色粘質シルトの斑土(小礫を含む)
- 18 10YR3/4暗褐色粘質シルト(礫を含む)

98 B S D 0017



- 1 10YR4/4褐色粘土
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(礫を多く含む)
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色シルトと10YR3/4暗褐色粘土の斑土(礫を含む)
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(礫を含む)
- 6 10YR3/4暗褐色粘質土(炭化物を含む)
- 7 10YR3/3暗褐色粘質土と10YR5/3にぶい黄褐色砂質土の斑土(礫を含む)
- 8 7.5YR4/4褐色粘質土
- 9 10YR4/2灰黄褐色シルト(拳大の礫を少量含む)

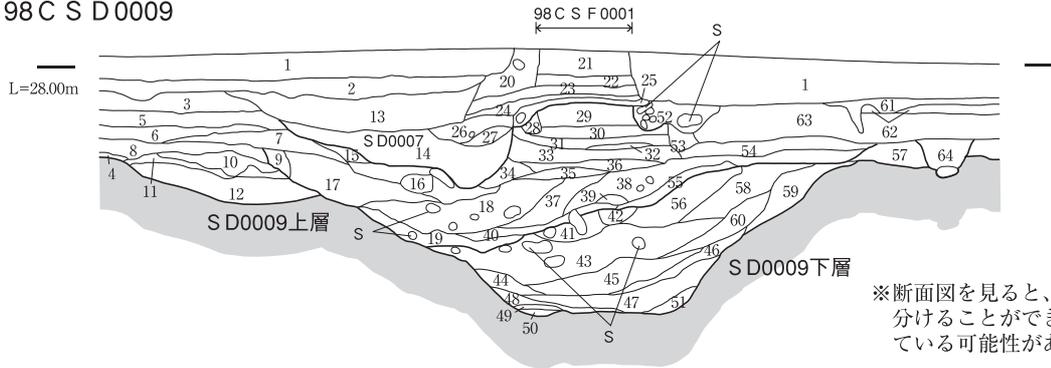
98 C S D 0015



- 1 7.5YR4/6褐色粘質シルト
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルトと10YR5/6黄褐色砂質土の斑土
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトと10YR4/4褐色砂質土の斑土
- 5 7.5YR5/4にぶい褐色粘質シルトと10YR5/6黄褐色粘質シルトの斑土
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色シルト(小礫を含む)
- 7 10YR6/6明黄褐色シルト(人頭大の礫を含む)
- 8 10YR5/2灰黄褐色シルト(礫を多く含む)
- 9 10YR4/6褐色粘質シルト
- 10 2.5Y4/1黄灰色シルト

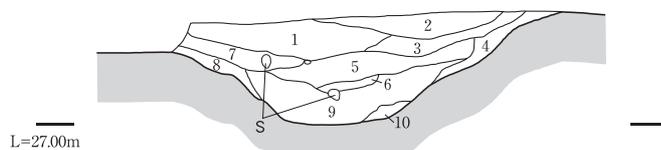
第 48 図 溝断面図① (1:50)

98 C S D 0009



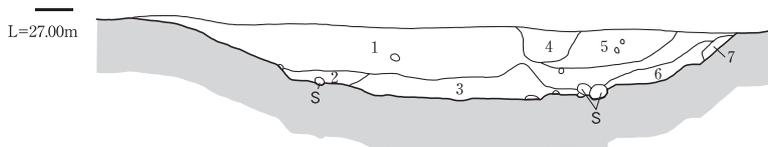
- |    |                                     |    |                                    |
|----|-------------------------------------|----|------------------------------------|
| 1  | 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト(水田耕作土)              | 33 | 10YR4/4褐色砂質土                       |
| 2  | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(旧水田耕作土)          | 34 | 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂                   |
| 3  | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト(炭化物を含む)            | 35 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土と10YR6/6明黄褐色砂質土の斑土 |
| 4  | 7.5YR5/3褐色粘質シルト                     | 36 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(小礫を含む)            |
| 5  | 10YR4/4褐色シルト(洪水による堆積?)              | 37 | 10YR5/2灰黄褐色粘質土                     |
| 6  | 10YR3/4暗褐色シルト(洪水による堆積?)             | 38 | 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂(礫・小礫を多く含む)        |
| 7  | 7.5YR5/4にぶい褐色粘質シルト                  | 39 | 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土                   |
| 8  | 7.5YR4/4褐色粘質シルト                     | 40 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂と10YR4/6褐色粘質土の斑土   |
| 9  | 7.5YR5/6明褐色砂質シルト                    | 41 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土(礫を含む)               |
| 10 | 7.5YR4/6褐色粘質シルト                     | 42 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土                     |
| 11 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト                  | 43 | 2.5Y4/1黄灰色シルト(礫を含む)                |
| 12 | 7.5YR5/6明褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトの斑土 | 44 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト                 |
| 13 | 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土                     | 45 | 10YR4/1褐灰色シルト                      |
| 14 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘土                       | 46 | 10YR4/1褐灰色粘質土                      |
| 15 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト                  | 47 | 2.5Y4/1黄灰色シルト                      |
| 16 | 10YR4/4褐色粘質シルト(人頭大の石を含む)            | 48 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土                     |
| 17 | 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR5/6黄褐色粘質シルトの斑土 | 49 | 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土                   |
| 18 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土                    | 50 | 2.5Y3/2黒褐色粘質土                      |
| 19 | 2.5Y4/1黄灰色粘土(炭化物・小礫を含む)             | 51 | 10YR4/2灰黄褐色シルト                     |
| 20 | 2.5Y5/3黄褐色砂質土                       | 52 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂(小礫を多く含む)          |
| 21 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(現畔道)             | 53 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土                   |
| 22 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト                  | 54 | 10YR4/4褐色粘質シルト                     |
| 23 | 10YR4/4褐色粘質土の斑土(小礫を含む)              | 55 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂                   |
| 24 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土                      | 56 | 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土                   |
| 25 | 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土の斑土                 | 57 | 10YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)             |
| 26 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土                    | 58 | 7.5YR4/3褐色粘質土                      |
| 27 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土と10YR5/6黄褐色粘質土の斑土     | 59 | 7.5YR4/3褐色粘質土                      |
| 28 | 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂                    | 60 | 7.5YR4/4褐色粘質土(炭化物を含む)              |
| 29 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂(小礫を含む)             | 61 | 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト                   |
| 30 | 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂(小礫を含む)             | 62 | 10YR4/4褐色シルト                       |
| 31 | 10YR4/4褐色砂質シルト                      | 63 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト                   |
| 32 | 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂(堅く締まる)             | 64 | 7.5YR4/4褐色粘質土(拳大の石を含む)             |

98 D S D 0002



- |    |                                |
|----|--------------------------------|
| 1  | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(小礫を少量含む)      |
| 2  | 7.5YR4/4褐色粘質土と7.5YR4/6褐色粘質土の斑土 |
| 3  | 10YR4/2灰黄褐色粘質土                 |
| 4  | 10YR4/4褐色粘質土(1mm以下の砂粒を含む)      |
| 5  | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土               |
| 6  | 10YR4/6褐色粘質土                   |
| 7  | 10YR3/3暗褐色粘質土(小礫を少量含む)         |
| 8  | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(小礫を少量含む)      |
| 9  | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト               |
| 10 | 10YR4/4褐色シルト                   |

98 E S D 0004



- |   |  |
|---|--|
| 1 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と5YR4/6赤褐色粘質土の斑土(炭化物・礫を含む) |
| 2 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂                           |
| 3 | 7.5YR3/1黒褐色シルト(小礫を含む)                      |
| 4 | 2.5Y5/3黄褐色シルト                              |
| 5 | 10YR4/4褐色細粒砂(炭化物・小礫を含む)                    |
| 6 | 10YR4/4褐色細粒砂                               |
| 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂                           |

第49図 溝断面図② (1:50)

**98 F S D 0010** 98 F a 区の中央のやや東側で検出された溝で、98 E S D 0004 と同一の溝となる可能性がある。幅 117～248cm、検出面からの深さは最大 44cm を測る。断面は箱堀に近く、溝の方向性は N - 53° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀前半までと思われる。

**98 F S D 0016** 98 F a 区の中央やや西側で検出された溝で、幅 163～181cm、検出面からの深さは最大 39cm を測る。溝の方向性は N - 40° - W を示している。出土遺物から時期は 17 世紀前半までと思われる。

**98 F S D 0017** 98 F a 区の西壁付近で検出された溝で、幅 108～150cm、検出面からの深さは最大 48cm を測る。断面を見ると 2 つの溝が切り合っているようであり、L 字状に北側に屈曲している。溝の方向性は N - 34° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀前半までと思われる。

**00 B S D 0001** 00 B a 区の南側で検出された溝で、00 B S D 0046 と同一の溝である可能性が高い。幅 71～224cm、検出面からの深さは最大 40cm を測る。断面を見ると 2 つの溝が切り合っているようであり、L 字状に南側に屈曲している。溝の方向性は N - 43° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀代と思われる。

**00 B S D 0003** 00 B a 区の南側で検出された溝で、00 B S D 0001 の北側に位置している。00 B S D 0045 と同一の溝となる可能性が高い。幅 44～187cm、検出面からの深さは最大 33cm を測る。断面は U 字形で、北側に大きく屈曲している。溝の方向性は直線部分で N - 50° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀初頭までと思われる。

**00 B S D 0007** 00 B a 区の西壁付近で検出された溝で、幅残存 12～185cm、検出面からの深さは最大 33cm を測る。断面は U 字形で、溝の方向性は N - 48° - W を示している。出土遺物から時期は 17 世紀初頭までと思われる。

**00 B S D 0024** 00 B a 区の中央やや東側で検出された溝で、幅 34～158cm、検出面の深さは最大 33cm を測る。断面は丸底に近く、北側に大きく屈曲している。溝の方向性は直線部分で N - 38° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀代までと思われる。

**00 B S D 0030** 00 B a 区の北壁付近で検出された溝で、00 B S D 0007 と同一の溝となる可能性が高い。幅 56～残存 183cm、検出面からの深さは最大 25cm を測る。断面は U 字形で、溝の方向性はほぼ N - 41° - E を示している。出土遺物から時期は 17 世紀前半までと思われる。

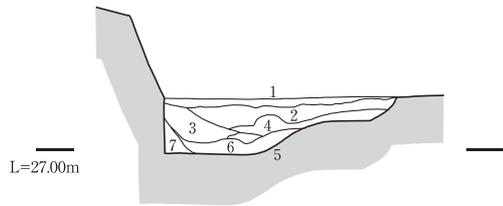
**00 B S D 0038** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された溝で、00 B S D 0049 と同一の溝である可能性が高い。幅 98～174cm、検出面からの深さは最大 26cm を測る。断面 U 字形で、溝の方向性は N - 41° - W を示している。出土遺物から時期は 17 世紀代と思われる。

**00 B S D 0039** 00 B a 区の北側の東壁付近で検出された溝で、00 B S D 0050 と同一の溝である可能性がある。幅 34～106cm、検出面からの深さは最大 26cm を測る。長さ 9 m 弱のみの検出であるが、溝の方向性は N - 46° - W を示している。出土遺物から時期は 17 世紀初頭までと思われる。

**00 B S D 0043** 00 B b 区のはほぼ中央で検出された溝で、幅 49～残存 111cm、検出面からの深さは最大 12cm を測る。途中で途切れているが 1 つの溝と考えている。溝の方向性は N - 56° - W を示している。出土遺物から時期は 17 世紀前半までと思っている。

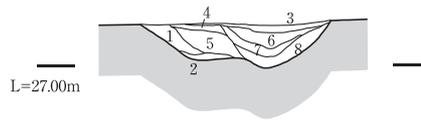
**00 B S D 0044** 00 B b 区のはほぼ中央で検出された溝で、00 B S D 0043 を切って平行に位置して

98 F S D 0010



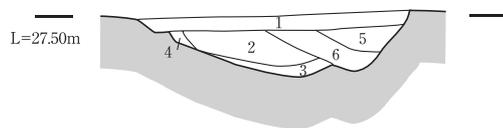
- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 2 7.5YR4/4褐色粘質土と7.5YR5/6明褐色粘土の斑土
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫を含む)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 5 7.5YR4/4褐色粘質土
- 6 7.5YR4/3褐色粘土
- 7 10YR4/4褐色粘土

98 F S D 0017



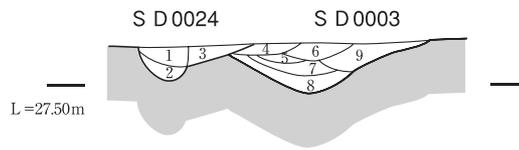
- 1 7.5YR4/4褐色粘質シルトと5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトの斑土
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト
- 3 10YR3/4暗褐色粘質シルト
- 4 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 6 7.5YR4/3褐色粘質シルトと5YR4/3にぶい赤褐色粘土の斑土
- 7 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 8 7.5YR4/3褐色粘土

00 B S D 0001



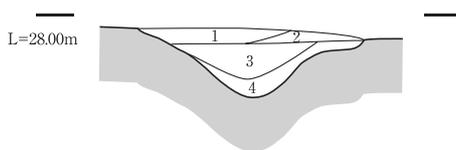
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(砂・小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 10YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 10YR3/4暗褐色粘質土(炭化物を含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む、小礫を含む)
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質土(S B 0019の埋土ブロック・炭化物を含む、礫を少量含む)
- 6 10YR3/3暗褐色粘質土(炭化物を含む)

00 B S D 0003・0024



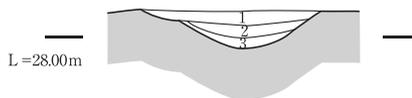
- 1 10YR3/4暗褐色粘質シルト(砂・炭化物を少量含む)
- 2 10YR3/3暗褐色粘質シルト(砂・炭化物を少量含む)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(砂・炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR3/2黒褐色粘質土
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 7 7.5YR4/3褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 8 7.5YR3/4暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 9 5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)

00 B S D 0007



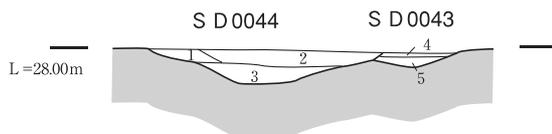
- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR4/3褐色粘質土(地山ブロックを少量含む)

00 B S D 0038



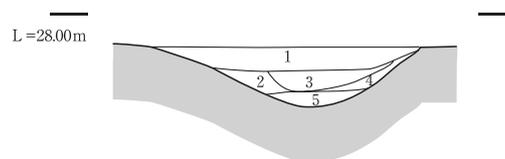
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 3 7.5YR4/4褐色粘質土(地山ブロックを少量含む)

00 B S B 0043・0044



- 1 7.5YR3/4暗褐色シルト(炭化物を少量含む、小礫を含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR4/4褐色シルト(小礫を含む)
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

00 B S D 0045



- 1 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を多く含む)
- 2 7.5YR4/3褐色シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック(炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 4 5YR4/2灰褐色粘質シルト(地山ブロック・炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(砂を含む、地山ブロックを少量含む)

いる。幅26～174cm、検出面からの深さは最大23cmを測る。溝の方向性はN-47°-Wを示している。出土遺物から時期は17世紀代以降と思われる。

**00 B S D 0045** 00 B b 区のほぼ中央の西壁付近で検出された溝で、00 B S D 0003 と同一の溝である可能性が高い。幅24～180cm、検出面からの深さは最大40cmを測る。溝はL字状に北側に曲がって00 B S D 0049・S D 0050 とつながるが、両者の関係は不明である。断面はU字形で、溝の方向性はN-39°-Eを示している。出土遺物から時期は17世紀前半までと思われる。

**00 B S D 0046** 00 B b 区の南側で検出された溝で、00 B S D 0001 と同一の溝となる可能性が高い。幅46～148cm、検出面からの深さは最大27cmを測る。断面は丸底で、L字状に南側に屈曲している。溝の方向性はN-42°-Eを示している。出土遺物から時期は17世紀代と思われる。

**00 B S D 0047** 00 B b 区の南側で検出された溝で、00 B S D 0046 に切られ南側に位置している。幅34～残存147cm、検出面からの深さは最大25cmを測る。断面は丸底で、L字状に南側に屈曲している。溝の方向性はN-40°-Eを示している。出土遺物から時期は17世紀前半と思われる。

**00 B S D 0049** 00 B b 区のほぼ中央の西壁付近で検出された溝で、00 B S D 0038 と同一の溝である可能性が高い。幅73～144cm、検出面からの深さは最大27cmを測る。断面は丸底で、溝の方向性はN-53°-Wを示している。出土遺物から時期は17世紀代と思われる。

**00 B S D 0050** 00 B b 区のほぼ中央の西壁付近で検出された溝で、00 B S D 0039 と同一の溝である可能性が高い。幅34～71cm、検出面からの深さは最大11cmを測る。断面は丸底で、溝の方向性はN-52°-Wを示している。時期は00 B S D 0039 と同様の時期と思われる。

**00 C S D 0002** 00 C a 区の東端付近で検出された溝で、幅156～166cm、検出面からの深さは最大22cmを測る。断面から2つの溝が切り合っているように見えるが、不明な点が多い。溝の方向性はN-54°-Wを示している。出土遺物から時期は17世紀代と思われる。

**00 C S D 0003** 00 C a 区の東端付近で検出された溝で、幅74～134cm、検出面からの深さは最大21cmを測る。断面から2つの溝が切り合っていることが確認されている。溝の方向性はN-66°-Wを示している。時期は00 C S D 0002 と同様と思われる。

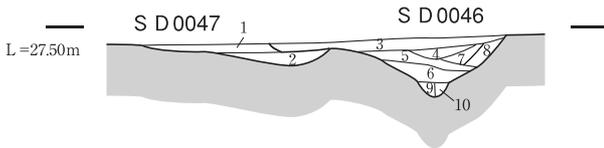
**00 C S D 0009** 00 C a 区の西側で検出された溝で、幅122～175cm、検出面からの深さは最大25cmを測る。断面からは2つの溝が切り合っているように見える。溝の方向性はN-48°-Wを示している。出土遺物から時期は17世紀代以降と思われる。

**00 C S D 0010** 00 C a 区の西側で検出された溝で、幅134～231cm、検出面からの深さは最大31cmを測る。断面からは2つの溝が切り合っているようにも見える。溝の方向性はN-52°-Wを示している。出土遺物から時期は17世紀前半までと思われる。

**00 C S D 0011** 00 C a 区の西壁付近で検出された溝で、00 C S D 0015 と同一の溝である可能性がある。幅111～177cm、検出面からの深さは最大19cmを測る。溝の方向性はN-42°-Eを示している。00 C S D 0010 との関係も不明である。時期は17世紀代までと知っている。

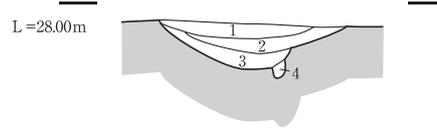
**00 C S D 0015** 00 C b 区のほぼ中央で検出された溝で、00 C S D 0011 と同一の溝である可能性が高い。幅45～94cm、検出面からの深さは最大9cmを測る。溝の方向性はN-41°-Eを示している。時期は00 C S D 0011 と同様の時期と思われる。

00B S D 0046・0047



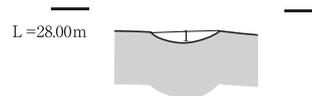
- 1 10YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 10YR3/3暗褐色粘質土(小礫を少量含む)
- 3 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 4 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
- 5 7.5YR2/3暗褐色粘質シルト
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 8 7.5YR3/4暗褐色粘質土(小礫・炭化物を少量含む)
- 9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
- 10 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土

00B S D 0049



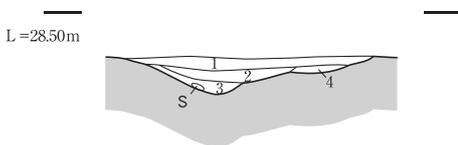
- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(小礫を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(地山ブロック・砂を含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

00B S D 0050



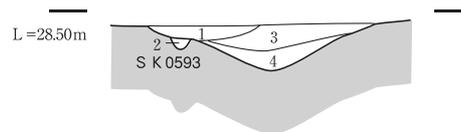
- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(SB50の埋土を少量含む)

00C S D 0002



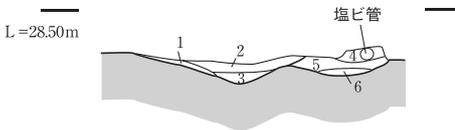
- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR4/4褐色粘質土
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質土

00C S D 0009



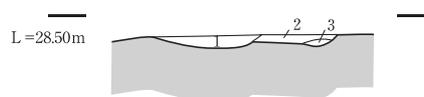
- 1 7.5YR4/3褐色シルト(炭化物を少量含む、砂を含みしまり弱い)
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む、砂を含みしまり弱い)
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(地山ブロックを少量含む)

00C S D 0003



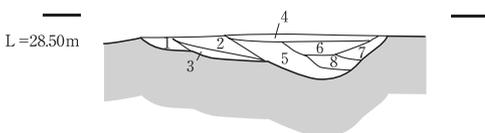
- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫少量含む、植物遺体を含む?)
- 3 7.5YR4/3暗褐色粘質シルト(小礫少量含む)
- 4 2.5Y5/1黄灰色細粒砂(7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを斑土状に多く含む、塩ビ管理設時による攪乱)
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を少量含む、植物遺体を含む?)
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(地山ブロック少量含む)

00C S D 0011



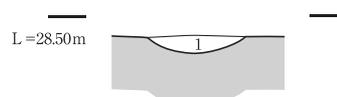
- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト

00C S D 0010



- 1 7.5YR4/3褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 4 7.5YR4/3褐色シルト(小礫を含む、炭化物を少量含む)
- 5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物)
- 6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫・炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR黒褐色粘質土ブロック・炭化物を含む、S B0012の埋土を含む)
- 8 5YR4/6赤褐色粘質シルトと7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの斑土

00C S D 0015



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫含む、炭化物少量含む)

第51図 溝断面図④ (1:50)

#### 4. 池状遺構

00 A b 区において他の遺構と様相を異にし、礫で護岸したような遺構が検出されている。池状遺構として考えている。

**00 A S X 0006** 00 A b 区のほぼ中央で検出された遺構で、長径 672cm、短径残存長 566cm、検出面からの深さは最大 42cm を測る。底部には礫が敷き詰められたようになっており、他の遺構とは様相が異なっていることがわかる。そのため、池のような遺構ではないかと想定している。とすると、00 A S D 0008 は、池状遺構と何らかの関係をもつ溝である可能性が高い。土層は大きく 2 層に分かれ、下層よりは 16 世紀代と思われる常滑産の甕などが、上層からは 18 世紀初頭頃と思われる播鉢などが出土しており、江戸時代前期まで続く遺構であったことが考えられる。

#### 5. 井戸

今回の調査において、この時期に属する井戸を 7 基確認している。江戸時代後期の井戸に比べ掘り形が広く、上層を礫で埋めたものも一部で見られた。以下、個別に紹介する。

**98 B S E 0001** 98 B 区のほぼ中央で検出された井戸で、98 B S D 0014 の北側に位置している。長径 428cm、短径 387cm で、平面は不定形を呈している。検出面からの深さは約 290cm で、断面はやや袋状に広がっている。木材などの井戸側は確認されていない。椀類・播鉢などの陶器類や鍋・釜類などの土器が多く出土しており、時期は 16 世紀代から 17 世紀前半の時期が考えられる。

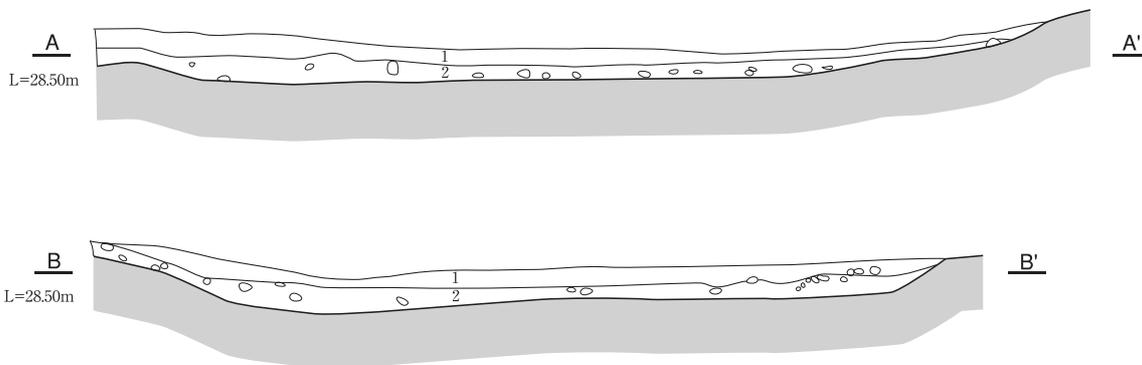
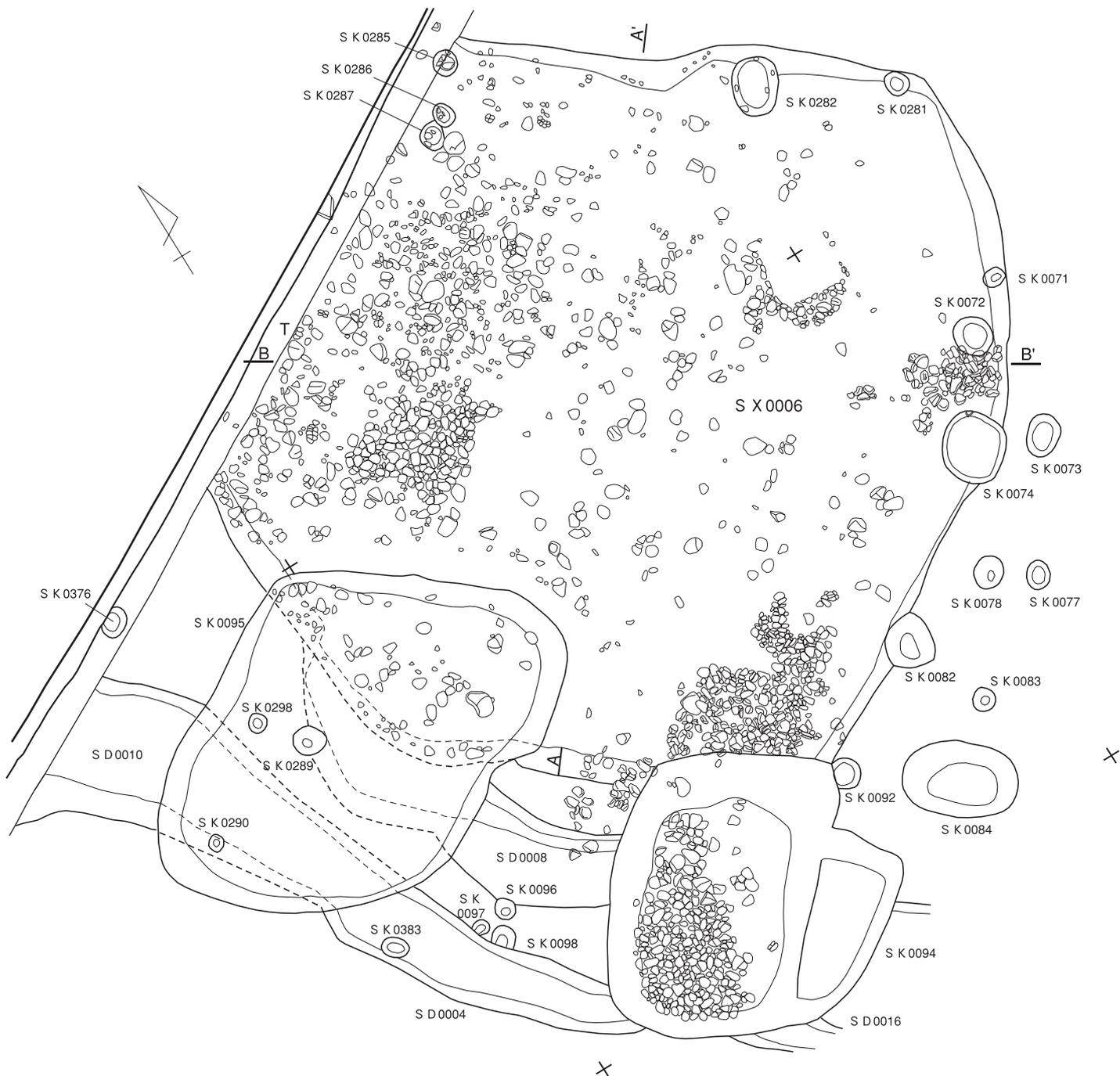
**98 C S E 0002** 98 C 区のほぼ中央で検出された井戸で、98 C S D 0015 の南側に位置している。長径 146cm、短径 106cm で、平面は楕円形を呈している。検出面からの深さは約 220cm で、断面はやや変形しているが円筒形に近い。木材などの井戸側は確認されていない。出土遺物から時期は 16 世紀後半頃と思われる。

**98 C S E 0003** 98 C 区のほぼ中央の西壁付近で検出された井戸で、98 C S D 0015 の西側に位置している。長径 248cm、短径残存長 188cm で、平面は不定形を呈している。検出面からの深さは約 300cm で、断面は下方が袋状に広がっている。木材などの井戸側は確認されていない。土師器皿や鍋・釜類の出土が多く、時期は 16 世紀代と思われる。

**00 A S E 0001** 00 A a 区の南東端で検出された井戸で、極一部が確認されているにとどまっている。長径・短径ともに残存長 140cm で、平面は不定形と想定される。底までの調査はできなかったが、検出面からの深さは 180cm 以上で、大半は礫で埋められていた。出土遺物から時期は 16 世紀代と思われる。

**00 A S E 0003** 00 A b 区の西側の北壁付近で検出された井戸である。長径残存長 180cm、短径 163cm で、平面は楕円形と想定される。検出面からの深さは約 300cm で、断面は上部がやや広がるが円筒形に近い形をしている。木材などの井戸側は確認されていない。出土遺物は小片が多く時期を明らかにし難いが、16 世紀代と思われる。

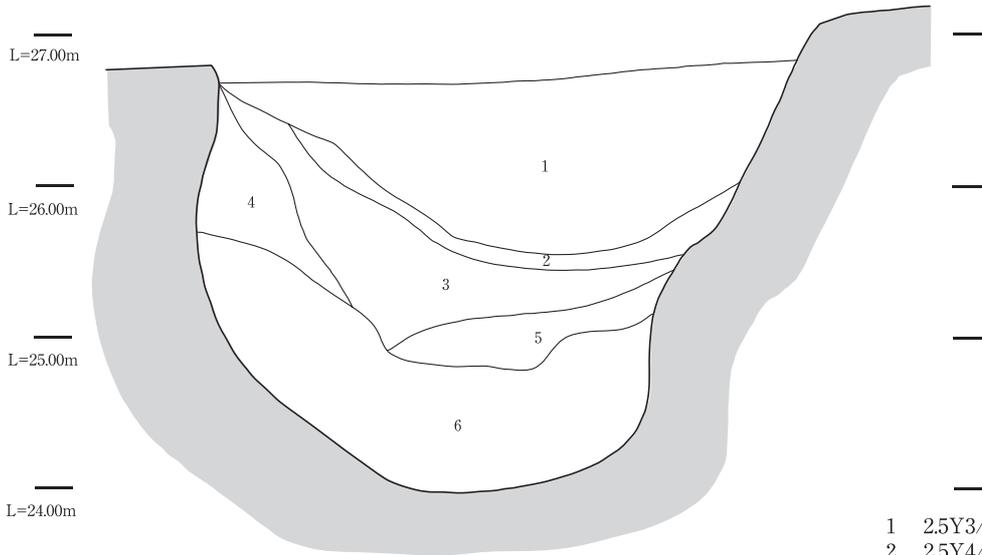
**00 B S E 0001** 00 B b 区のほぼ中央の東側で検出された井戸で、00 B S D 0003・S D 0024 に挟まれる形で位置している。長径 252cm、短径 247cm で、平面は不定円形を呈している。検出面からの深さは約 260cm で、断面はやや袋状に広がっている。木材などの井戸側は確認されていない。出



- 1 5YR4/4に於い赤褐色粘質シルトと7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土(10YR6/4に於い黄橙色シルトブロックを含む、炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR5/4に於い褐色粘質土(礫を多く含む、炭化物を少量含む)

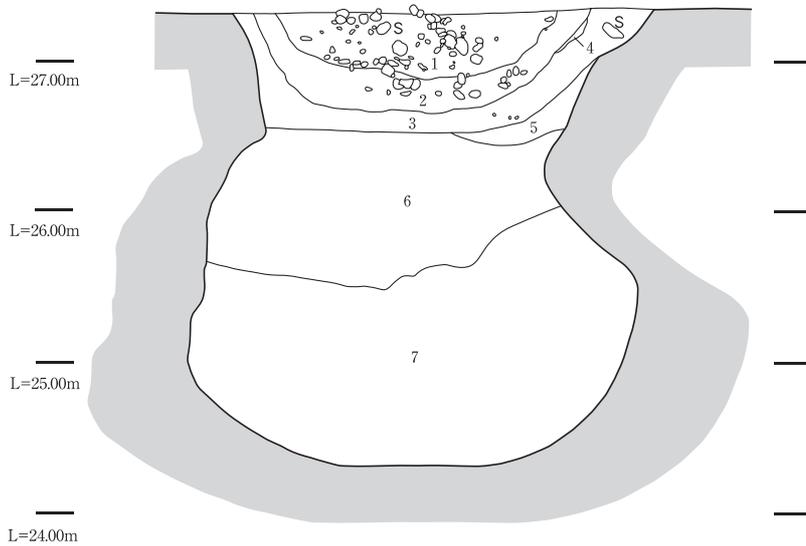
第 52 図 00 B S X 0006 平面図・断面図 (1:50)

98 B S E 0001



- 1 2.5Y3/1黒褐色粘質土(礫を多量に含む)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土(礫を多量に含む)
- 3 2.5Y4/1黄灰色シルト(礫を多く含む)
- 4 2.5Y3/2黒褐色シルト(礫を多く含む)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト(礫を多く含む)
- 6 5Y5/1灰色シルト(礫を含む)

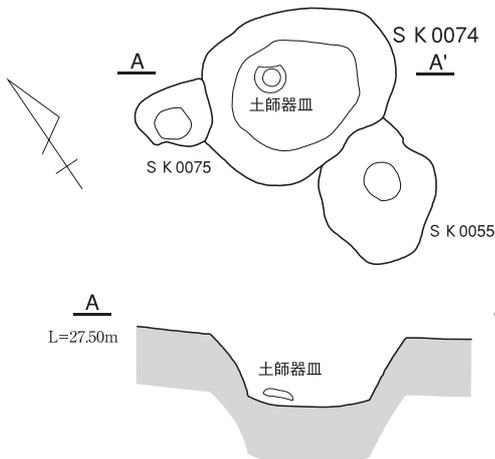
98 C S E 0003



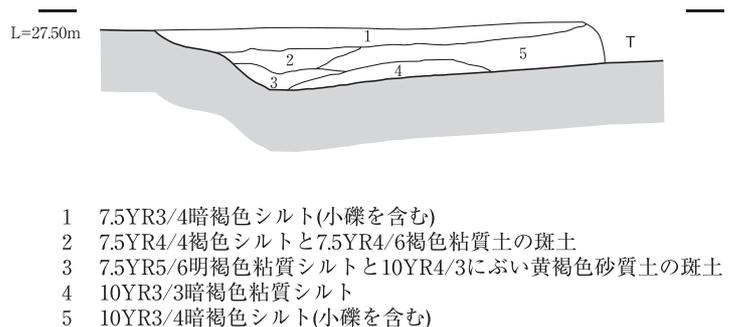
- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質土(礫・炭化物を多く含む)
- 2 10YR4/4褐色粘質土
- 3 7.5YR4/4褐色粘質土
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 5 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 6 7.5YR5/6明褐色粘質シルトの斑土
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色シルトの斑土

第53図 98 B S E 0001・98 C S E 0003 断面図 (1:50)

98 D S K 0074



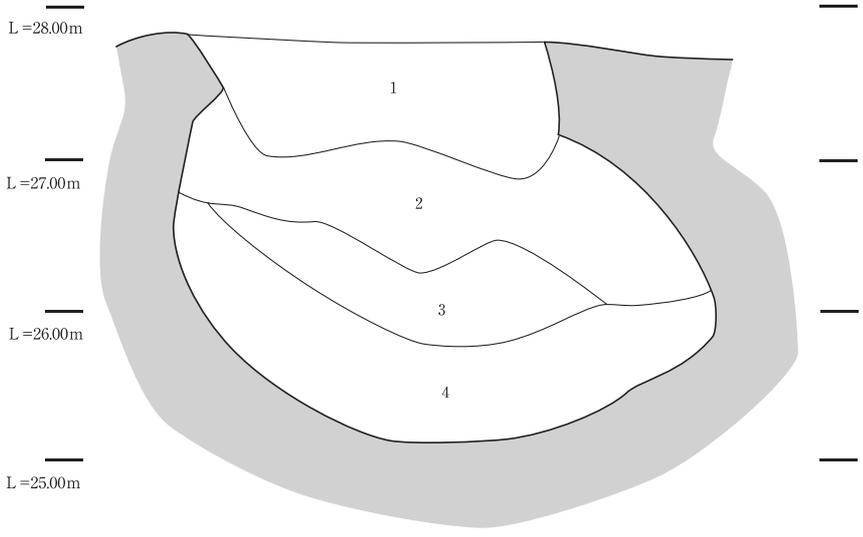
98 F S K 0062



- 1 7.5YR3/4暗褐色シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR4/4褐色シルトと7.5YR4/6褐色粘質土の斑土
- 3 7.5YR5/6明褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質土の斑土
- 4 10YR3/3暗褐色粘質シルト
- 5 10YR3/4暗褐色シルト(小礫を含む)

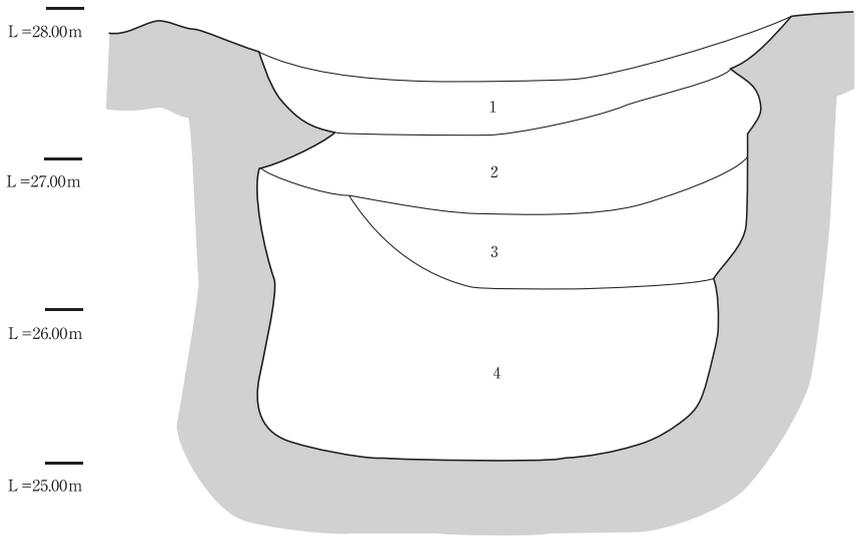
第54図 98 D S K 0074 遺物出土状態図・98 F S K 0062 断面図 (1:50)

00 B S E 0001



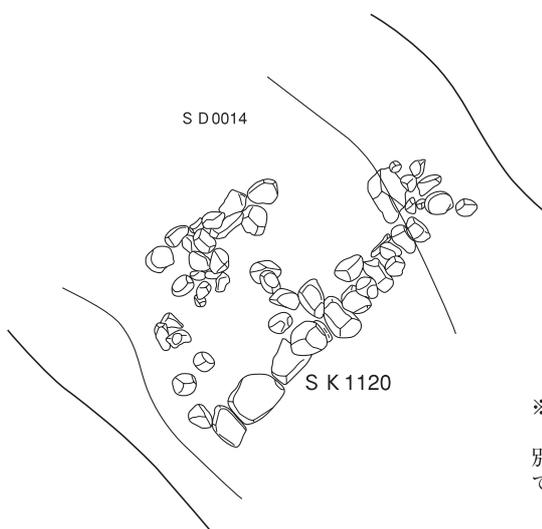
- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト  
(小礫・礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルト(砂を含む、河原石のような円礫を多く含む)
- 3 7.5YR4/4褐色シルト  
(砂を多く含み締まり弱い、拳以下の礫を含む)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂  
(河原石のような円礫を含む)

00 B S E 0002



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト  
(小礫・礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 7.5YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック(小礫・礫を含む)
- 3 10YR4/4褐色中粒砂(拳大の礫を含む)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂(拳大の礫を含む)

第55図 00 B S E 0001・S E 0002 断面図 (1:50)



※断面図については、第48図を参照。  
98 B S D 0014の中で検出された石組遺構を98 B S K 1120と別遺構として取り扱ったが、S D 0014との明確な区別はできていない。

第56図 98 B S K 1120 平面図 (1:50)

土遺物から時期は16世紀代と思われる。

**00 B S E 0002** 00 B b 区の東側の北壁付近で検出された井戸で、00 B S D 0030 の北側に位置している。長径447cm、短径342cmで、平面は不定形を呈している。検出面からの深さは約300cmで、断面は円筒形に近い形をしている。井桶・井枠などの構造物は確認されていない。出土遺物から時期は16世紀代と思われる。

## 6. 土坑

多くの土坑が検出されているが、大半は掘立柱建物の柱穴である可能性が高いようである。ここでは出土遺物を実測した遺構を中心に紹介する。

**98 A S K 0211** 98 A 区の西側の北壁付近で検出された土坑である。長径59cm、短径51cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大14cmを測る。土師器皿などが出土している。

**98 A S K 0227** 98 A 区の西端付近で検出された土坑である。長径32cm、短径22cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大33cmを測る。古瀬戸後期の縁釉皿などが出土している。

**98 B S K 0071** 98 B 区の南側で検出された土坑である。長径390cm、短径245cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大54cmを測る。無蓋壺などが出土している。

**98 B S K 0107** 98 B 区の中央の東壁付近で検出された土坑である。長径130cm、短径残存長126cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは5cmを測る。折縁皿などが出土している。

**98 B S K 1120** 98 B 区の中央付近で検出された土坑である。長径230cm、短径170cmで平面不定方形を呈し、検出面からの深さは47cmを測る。焙烙などが出土している。

**98 C S K 0708** 98 C 区の南側で検出された土坑である。長径35cm、短径20cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大11cmを測る。丸皿などが出土している。

**98 D S K 0034** 98 D 区の南端付近で検出された土坑である。長径56cm、短径49cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大76cmを測る。天目椀などが出土している。

**98 D S K 0062** 98 D 区の南端付近で検出された土坑である。長軸146cm、短軸104cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。丸皿・播鉢などが出土している。

**98 D S K 0074** 98 D 区の南端付近で検出された土坑である。長径65cm、短径50cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大23cmを測る。土師器皿などが出土している。

**98 E S K 0036** 98 E 区の西壁付近で検出された土坑である。長径195cm、短径130cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大40cmを測る。丸皿などが出土している。

**98 E S K 0040** 98 E 区の西壁付近で検出された土坑である。長径推定250cm、短径推定100cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは36cmを測る。播鉢・羽釜などが出土している。

**98 E S K 0180** 98 E 区の北側で検出された土坑である。長径53cm、短径39cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは41cmを測る。天目椀などが出土している。

**98 E S K 0239** 98 E 区のほぼ中央で検出された土坑である。長径40cm、短径24cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。古瀬戸後期の縁釉皿などが出土している。

**98 E S K 0548** 98 E 区の北側で検出された土坑である。長径68cm、短径32cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは56cmを測る。土師器皿などが出土している。

**98 F S K 0062** 98 F 区の東側の南壁付近で検出された土坑である。長径516cm、短径残存長277cm

で平面不定形を呈し、検出面からの深さは41cmを測る。端反碗・土師器皿などが出土している。

**98 F S K 0064** 98 F 区の東側で検出された土坑である。長径92cm、短径67cmで平面円形を呈し、検出面からの深さは約200cmを測る。井戸である可能性が高いが、不明な点が多い。丸皿・内耳鍋などが出土している。

**98 F S K 0124** 98 F 区の中央の北壁付近で検出された土坑である。長径134cm、短径92cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。内耳鍋などが出土している。

**98 F S K 0137** 98 F 区の中央付近で検出された土坑である。長径53cm、短径39cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。土師器皿などが出土している。

**98 F S K 0218** 98 F 区の西端付近で検出された土坑である。長径72cm、短径66cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは62cmを測る。天目碗などが出土している。

**00 A S K 0123** 00 A b 区の西端付近で検出された土坑である。長径56cm、短径48cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは61cmを測る。縁釉皿などが出土している。

**00 B S K 0203** 00 B a 区の南端付近で検出された土坑である。長径74cm、短径65cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは33cmを測る。内耳鍋などが出土している。

**00 B S K 0311** 00 B a 区の南側で検出された土坑である。長径42cm、短径33cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは9cmを測る。平鉢などが出土している。

**00 B S K 0597** 00 B a 区の北側で検出された土坑である。長径41cm、短径40cmで平面不定円形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。青磁の香炉片などが出土している。

**00 B S K 0637** 00 B a 区の北側で検出された土坑である。長径推定92cm、短径58cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは6cmを測る。内耳鍋などが出土している。

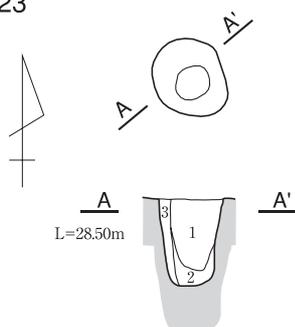
**00 B S K 1082** 00 B a 区の北側の西壁付近で検出された土坑である。長径58cm、短径34cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。羽釜などが出土している。

**00 B S K 1378** 00 B a 区の北側の北壁付近で検出された土坑である。長径残存長80cm、短径28cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。天目碗などが出土している。

**00 B S K 1487** 00 B a 区の中央の東壁付近で検出された土坑である。長径残377cm、短径残313cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは23cmを測る。播鉢などが出土している。

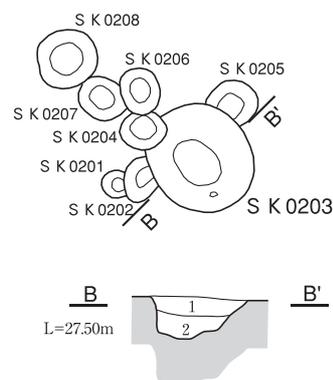
**00 B S K 1586** 00 B a 区の北端付近で検出された土坑である。長径43cm、短径30cmで平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。平鉢などが出土している。 (鈴木正貴)

00 A S K 0123



- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土
- 3 7.5YR4/6褐色粘質シルト

00 B S K 0203



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト

第57図 00 A S K 0123・00 B S K 0203平面図・断面図 (1:50)

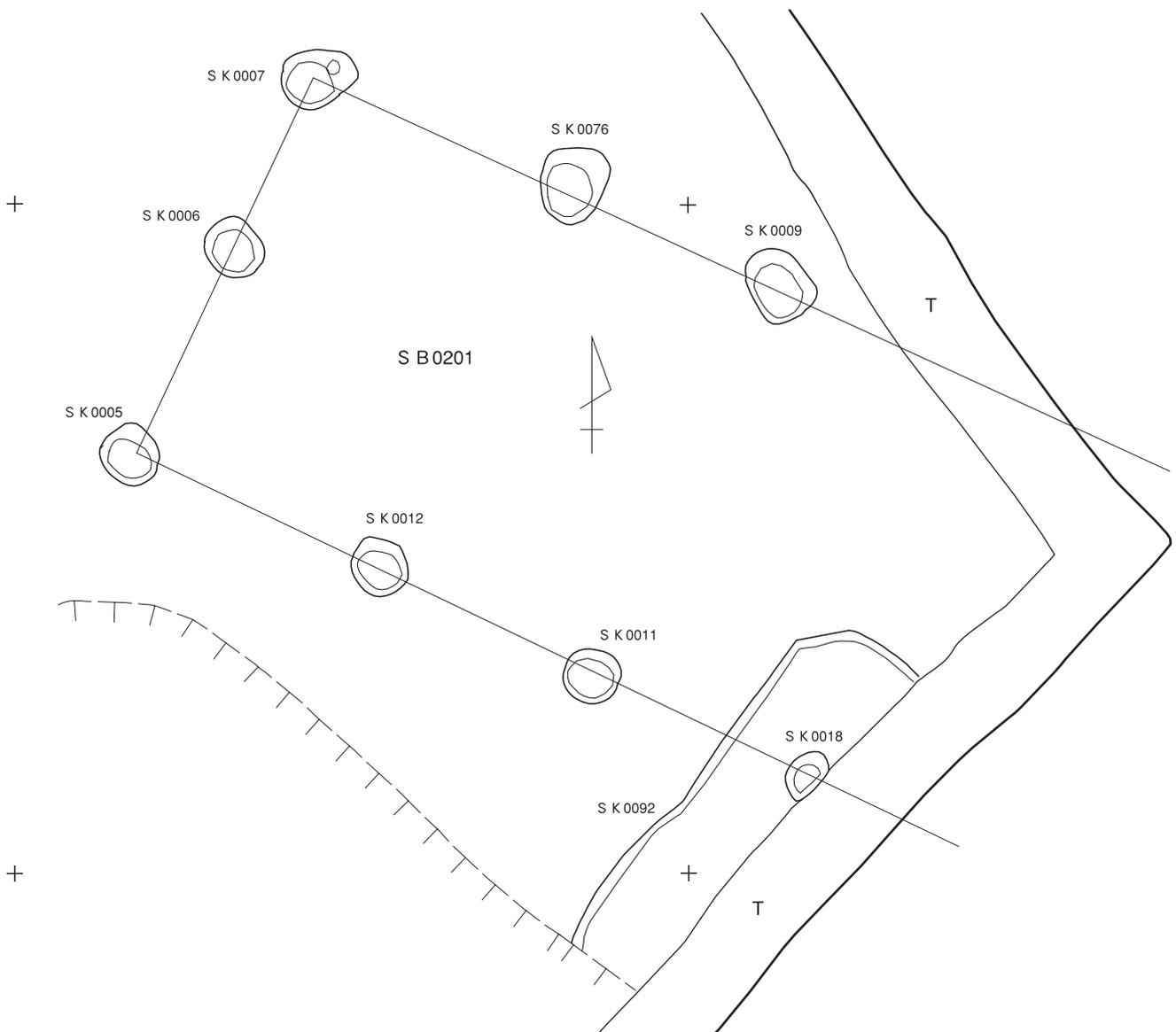
## 第6節 江戸時代後期の遺構

今回の調査において、この時期の遺構を確認したのは、掘立柱建物1軒、溝十数条、道路状遺構4条、井戸5基、池状遺構1基、石敷遺構1基、土坑などである。「今村絵図」(第72図)に見られるように、屋敷地とその周辺に水田が広がっていた情景が確認されている。

### 1. 掘立柱建物

柱穴と思われる土坑が多く検出されていることから、多くの建物が想定できるが、時期が決定できる建物は1軒のみである。

**98 D S B 0201** 98 D 区の南東隅の南壁付近で検出された掘立柱建物で、98 D S D 0002 の東側に位置している。確認された建物は、主軸が  $N - 63^{\circ} - W$  を示し、中世の98 D S B 0101 より傾きが大きくなっている。規模は2間×3間以上の建物で、心心間の距離は150cm・170cmと200cm・180cm・190cmとなっている。柱穴は8基確認されており、径42~56cmで平面円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは14~48cmを測る。98 D S K 0007・S K 0009・S K 0018で江戸時代後期と思われる遺物が出土している。



第58図 98 D S B 0201 平面図 (1:50)

## 2. 溝

今回の調査でこの時期に該当する溝は十数条検出されており、大部分は屋敷地と水田、水田と水田を区画するための溝や用水路としての溝などと想定される。溝の両側に礫を組んだ石組みの溝が多い。以下に主な溝を個別に紹介するが、出土遺物が少なく時期を決めがたい。

**98 A S D 0001** 98 A 区の東側で検出された溝で、幅 90～138cm、検出面からの深さは最大 29cm を測る。断面は U 字形に近く、溝の方向性は N - 29° - E を示している。98 A S D 0005 とともに道路状遺構 98 A S F 0001 の側溝であったと考えている。出土遺物から時期は 19 世紀以降と思われる。

**98 A S D 0005** 98 A 区の東側で検出された溝で、幅 28～83cm、検出面からの深さは最大 15cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 28° - E を示している。98 A S D 0001 とともに道路状遺構 98 A S F 0001 の側溝と考えている。出土遺物から時期は 19 世紀以降と思われる。

**98 A S D 0006** 98 A 区の東側で検出された溝で、幅 37～73cm、検出面からの深さは最大 14cm を測る。断面は U 字形を呈し、形状は L 字状に南西に屈曲している。溝の方向性は N - 52° - W を示している。溝の両側に礫が検出されており、石組みの溝であったことが確認されている。出土遺物から時期は 19 世紀前半頃と思われる。

**98 A S D 0008** 98 A 区の中央やや東側で検出された溝で、幅 25～38cm、検出面からの深さは最大 13cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 53° - W を示している。出土遺物から時期は 18 世紀後半以降と思われる。

**98 A S D 0009** 98 A 区の中央やや東側で検出された溝で、幅 42～71cm、検出面からの深さは最大 22cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 54° - W を示している。出土遺物から時期は 19 世紀初め頃と思われる。

**98 A S D 0012** 98 A 区の西側で検出された溝で、幅 112～164cm、検出面からの深さは最大 35cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 38° - W を示している。出土遺物から時期は 18 世紀後半から 19 世紀前半頃と思われる。

**98 A S D 0013** 98 A 区の西側で検出された溝で、幅 22～106cm、検出面からの深さは最大 14cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 37° - W を示している。出土遺物から時期は 18 世紀末以降と思われる。

**98 B S D 0005** 98 B 区の南端付近で検出された溝で、幅 70～133cm、検出面からの深さは最大 31cm を測る。断面は U 字形を呈し、形状は L 字状に西に屈曲している。溝の方向性は N - 48° - W を示している。98 B S D 0010 とともに道路状遺構 98 B S F 0002 の側溝と考えられる。出土遺物は小片が多く時期を決めがたいが、18 世紀後半以降と思われる。

**98 B S D 0010** 98 B 区の南側で検出された溝で、幅 62～196cm、検出面からの深さは最大 18cm を測る。断面は U 字形を呈し、形状は L 字状に東に屈曲している。溝の方向性は N - 46° - W を示している。98 B S D 0005 とともに道路状遺構 98 B S F 0001・S F 0002 の側溝と考えている。出土遺物は小片が多く時期を決めがたいが、18 世紀後半以降と思われる。

**98 B S D 0011** 98 B 区の中央やや南側の西壁付近で検出された溝で、幅 66～86cm、検出面からの深さは最大 24cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 34° - W を示している。溝の両

端から礫が検出され、石組みの溝であったことが確認されている。出土遺物は小片が多く詳しくはわからないが、18世紀後半以降と思われる。

**98 B S D 0012** 98 B区中央やや南側の東壁付近で検出された溝で、幅44～56cm、検出面からの深さは最大13cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-48°-Eを示している。出土遺物は小片が多く時期を決めがたいが、17世紀代以降と思われる。

**98 C S D 0007** 98 C区の中央やや南側で検出された溝で、幅116～165cm、検出面からの深さは最大34cmを測る。溝の方向性はほぼN-45°-Eを示している。屋敷地を区画する溝になる可能性がある。出土遺物から時期は19世紀以降と思われる。

**98 C S D 0012** 98 C区の中央やや北側で検出された溝で、幅91～122cm、検出面からの深さは最大16cmを測る。断面はU字形と想定され、溝の方向性はN-59°-Wを示している。溝の両側から礫が検出されたことから石組みの溝であり、西側では最低でも4段が積まれていたが、東側ではほとんど確認できなかった。北西に位置する池状遺構98 C S K 0454と関連する遺構ではないかと考えられる。出土遺物から時期は18世紀末以降と思われる。

**98 C S D 0013** 98 C区の北側で検出された溝で、幅98～176cmで、検出面からの深さは最大20cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-49°-Wを示している。出土遺物は小片が多く時期は不明であるが、18世紀代以降と思われる。

**98 D S D 0001** 98 D区の北側で検出された溝で、幅50～247cm、検出面からの深さは14cmを測る。出土遺物は小片が多く時期は不明であるが、18世紀代以降と思われる。

**98 E S D 0001** 98 E区の北側で検出された溝で、幅144～252cm、検出面からの深さは最大57cmを測る。断面は丸底に近く、形状はL字状に北側に屈曲している。溝の方向性はN-31°-Eを示している。屋敷を区画する溝かと想定される。出土遺物から時期は決めがたいが、18世紀代以降と思われる。

また、前節で述べたように98 E S D 0004では、二股に分かれた一つの溝がこの時期に属するのであるが、その規模はよくわかっていない。出土遺物などから18世紀後半以降と思われる。

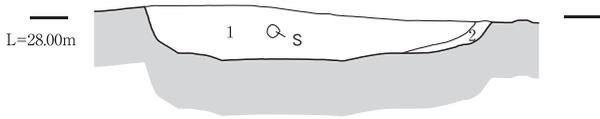
**98 F S D 0001** 98 F a区の東端で検出された溝で、幅30～82cm、検出面からの深さは最大44cmを測る。断面はU字形を呈し、形状はL字状で南側に屈曲している。溝の方向性はN-34°-Eを示している。出土遺物は小片が多く時期は不明であるが、18世紀後半以降と思われる。

**98 F S D 0007** 98 F a区の東側で検出された溝で、幅135～238cm、検出面からの深さは最大21cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-48°-Wを示している。出土遺物から時期は18世紀後半以降と思われる。

**98 F S D 0011** 98 F a区の中央やや北側で検出された溝で、幅48～163cm、検出面からの深さは最大20cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-52°-Eを示している。98 F S D 0015とともに、屋敷地を区画する溝ではないかと考えられる。出土遺物から時期は江戸時代後期に属すると思われる。

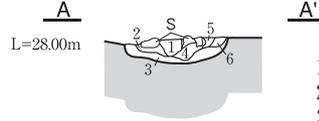
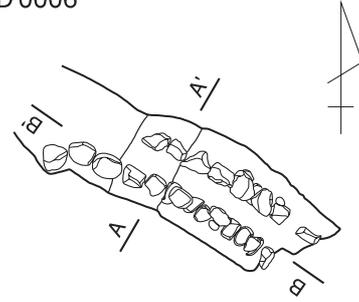
**98 F S D 0015** 98 F a区の中央やや西側で検出された溝で、幅91～120cm、検出面からの深さは最大31cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-38°-Wを示している。98 F S D 0011

98A S D 0001

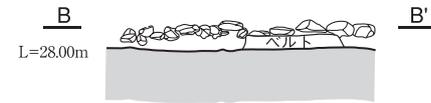


- 1 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト
- 2 10YR4/4褐色粘土(小礫を含む)

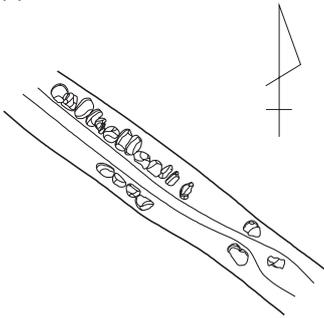
98A S D 0006



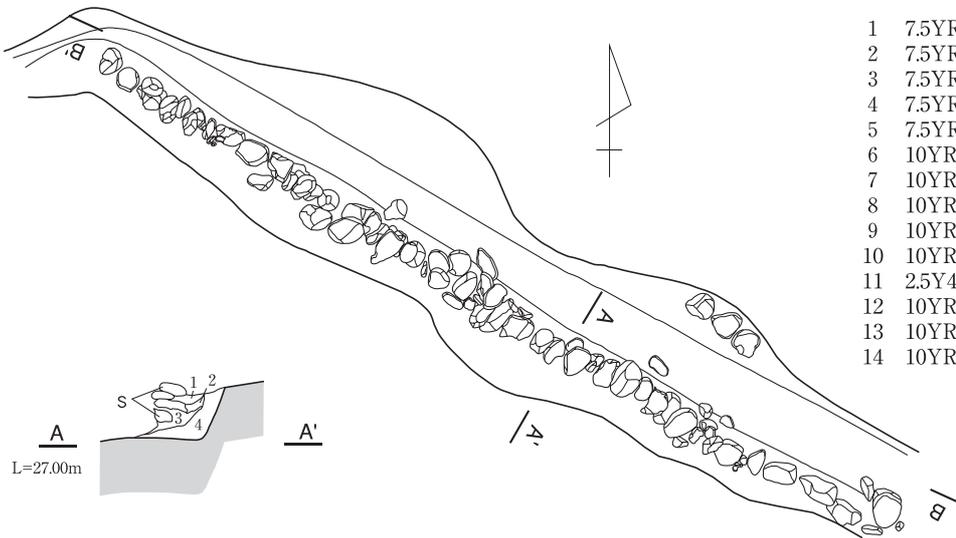
- 1 7.5YR5/4にぶい褐色シルト
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
- 3 10YR5/6黄褐色粘土
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色粘土
- 6 7.5YR4/6褐色粘土(小石を含む)



98B S D 0011



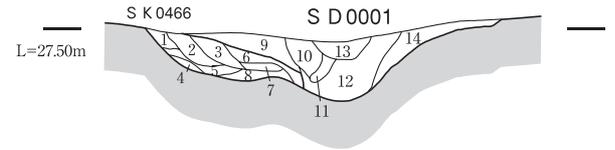
98C S D 0012



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
- 3 10YR4/2灰黄褐色粘質土
- 4 10YR4/4褐色粘質シルト(1 mm以下の砂粒を含む)



98E S D 0001



- 1 7.5YR4/6褐色粘質シルト
- 2 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 3 7.5YR4/6褐色粘質シルト
- 4 7.5YR4/6褐色粘質シルト
- 5 7.5YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘土の斑土
- 6 10YR4/4褐色粘質シルト
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 8 10YR4/6褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 9 10YR3/4暗褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 10 10YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 11 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
- 12 10YR4/4褐色砂質シルト
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
- 14 10YR4/4褐色粘質シルト(小礫を含む)

第 59 図 溝平面図・断面図・立面図① (1:50)

とともに屋敷地を区画する溝ではないかと考えている。出土遺物は小片が多く時期は決めがたいが、江戸時代後期に属すると思われる。

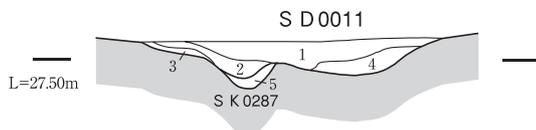
**00 A S D 0002** 00 A b 区の東側で検出された溝で、幅40～63cm、検出面からの深さは最大28cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-52°-Eを示している。屋敷地と水田を区画する溝と考えられ、時期は18世紀後半以降と思われる。

**00 A S D 0004** 00 A b 区の中央付近で検出された溝で、00 A S D 0010 と同一の溝となる可能性が高い。幅43～68cm、検出面からの深さは最大9cmを測るのみである。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-31°-Wを示している。汚水溜りと思われる98 A S K 0094に関連する溝と考えている。出土遺物が少なく時期は決めにくい、江戸時代後期に属すると思われる。

**00 A S D 0007** 00 A b 区の中央の南壁付近で検出された溝で、幅28～33cm、検出面からの深さは最大6cmのみである。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-56°-Wを示している。98 A S D 0004と同様に98 A S K 0094に関連する遺構と考えている。出土遺物が少なく時期は明らかにできないが、江戸時代後期に属する遺構と思われる。

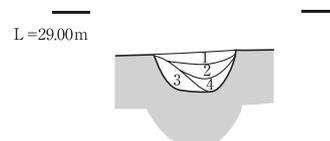
**00 A S D 0010** 00 A b 区の中央の北壁付近で検出された溝で、00 A S D 0004 と同一の溝となる可能性が高い。幅114～140cm、検出面からの深さは最大23cmを測る。断面はU字形を呈し、溝の方向性はN-33°-Wを示している。汚水溜りと思われる98 A S K 0094に関連する溝と考えている。出土遺物が少なく時期は決めにくい、江戸時代後期に属すると思われる。

98 F S D 0011



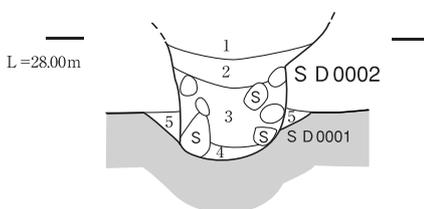
- 1 10YR3/4暗褐色粘質土(小礫を含む)
- 2 10YR4/4褐色細粒砂
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 4 7.5YR4/4褐色砂質シルト
- 5 10YR4/4褐色粘質土

00 A S D 0002



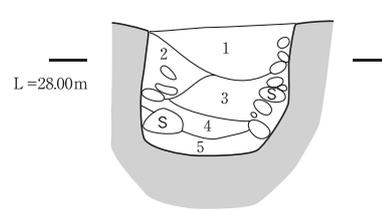
- 1 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(小礫を多く含む)
- 2 7.5YR5/6明褐色粘質土(小礫を少量含む)
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土(酸化して全体に5YR4/4にぶい赤褐色に見える、礫を含む)
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(酸化してところどころ5YR4/4にぶい赤褐色に見える、炭化物を少量含む)

00 B S D 0002



- 1 2.5Y5/3黄褐色砂質土(小礫・炭化物を少量含む、鉄分などの沈着あり)
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト(砂を含む、小礫・炭化物を少量含む、鉄分などの沈着あり)
- 3 10YR4/2灰黄褐色細粒砂(炭化物を含む)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(砂を含む)
- 5 10YR3/4暗褐色シルト(地山ブロックを含む、小礫を少量含む)

00 B S D 0032



- 1 2.5Y5/1黄灰色シルト(小礫・炭化物を少量含む、鉄分などの沈着により全体に褐色に見える)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色シルト(小礫を含む、鉄分などの沈着あり)
- 3 5Y5/1灰色シルト(砂を含む、炭化物を少量含む、鉄分などの沈着あり)
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト(砂を含む、炭化物を少量含む、鉄分などの沈着あり)
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(地山ブロックを含む、鉄分などの沈着あり)

第60図 溝断面図② (1:50)

**00 A S D 0019** 00 A b 区のほぼ中央の南壁付近で検出された溝で、幅 9 ~ 20cm で、検出面からの深さは 4 cm を測るのみである。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 43° - W を示している。溝の性格は不明であるが、屋敷地内をさらに区画する溝ではないかと考えている。98 A S D 0011 と同一の溝になる可能性がある。出土遺物は小片が多いが、江戸時代後期に属するものと思われる。

**00 B S D 0002** 00 B a 区の南側で検出された溝で、幅 22 ~ 65cm、検出面の深さは最大 20cm を測る。断面は U 字形を呈し、溝の方向性は N - 44° - E を示している。調査区では底部を検出したのみで、西壁をみとみると溝の両側に礫が確認され石組みの溝であったことがわかる。水田の用水路として利用されたのではないかと考えている。出土遺物は少なく時期は明確にはできないが、江戸時代後期に属する遺構と思われる。

**00 B S D 0032** 00 B a 区の北側で検出された溝で、幅 36 ~ 97cm、検出面からの深さは最大 46cm を測る。断面は U 字形で、溝の方向性はほぼ N - 37° - E を示している。00 B S D 0002 と同様石組みの溝であり、水田の用水として利用されたと考えている。出土遺物から時期は 18 世紀末以降と思われる。

### 3. 道路状遺構

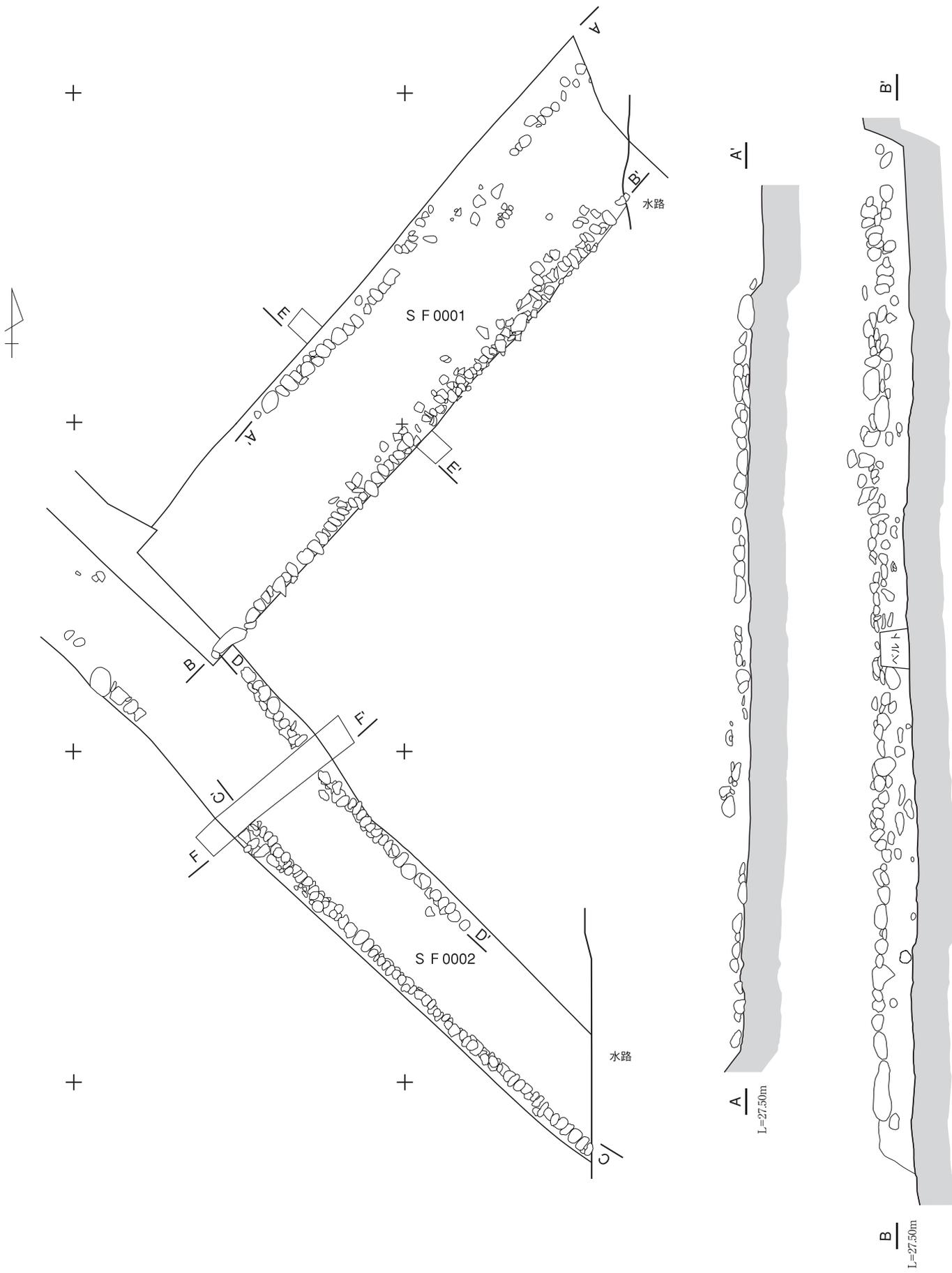
98 A 区・98 B 区・98 C 区において 3 本の道路と思われる遺構が確認され、98 B 区で T 字にそれぞれ交差している。検出段階では確認でなかったために正確に捉えることはできなかったが、遺構や壁のセクションなどから捉えることができた。この道路の両脇に屋敷が並んでいたと想定される。3 本の道路が全て同時に存在していたという確証はないが、道路という性格上同時期に近代まで存続していたと考えている。以下、個別に紹介する。

**98 A S F 0001** 98 A 区の東側で検出された道路状遺構で、98 A S D 0001 や 98 A S D 0005 を側溝としていと考えられる。幅 80 ~ 136cm で、北壁セクションで厚さ約 30cm を測る。道路の方向性は側溝の溝の方位と同じで、98 B S F 0001・98 C S F 0001 と 1 本の道であったと考えられる。時期は不明な点が多いが、江戸後期に属する遺構と関連があることや、埋土の中から 18 世紀以前の遺物が出土していることなどから、江戸時代後期に属する遺構と思われる。

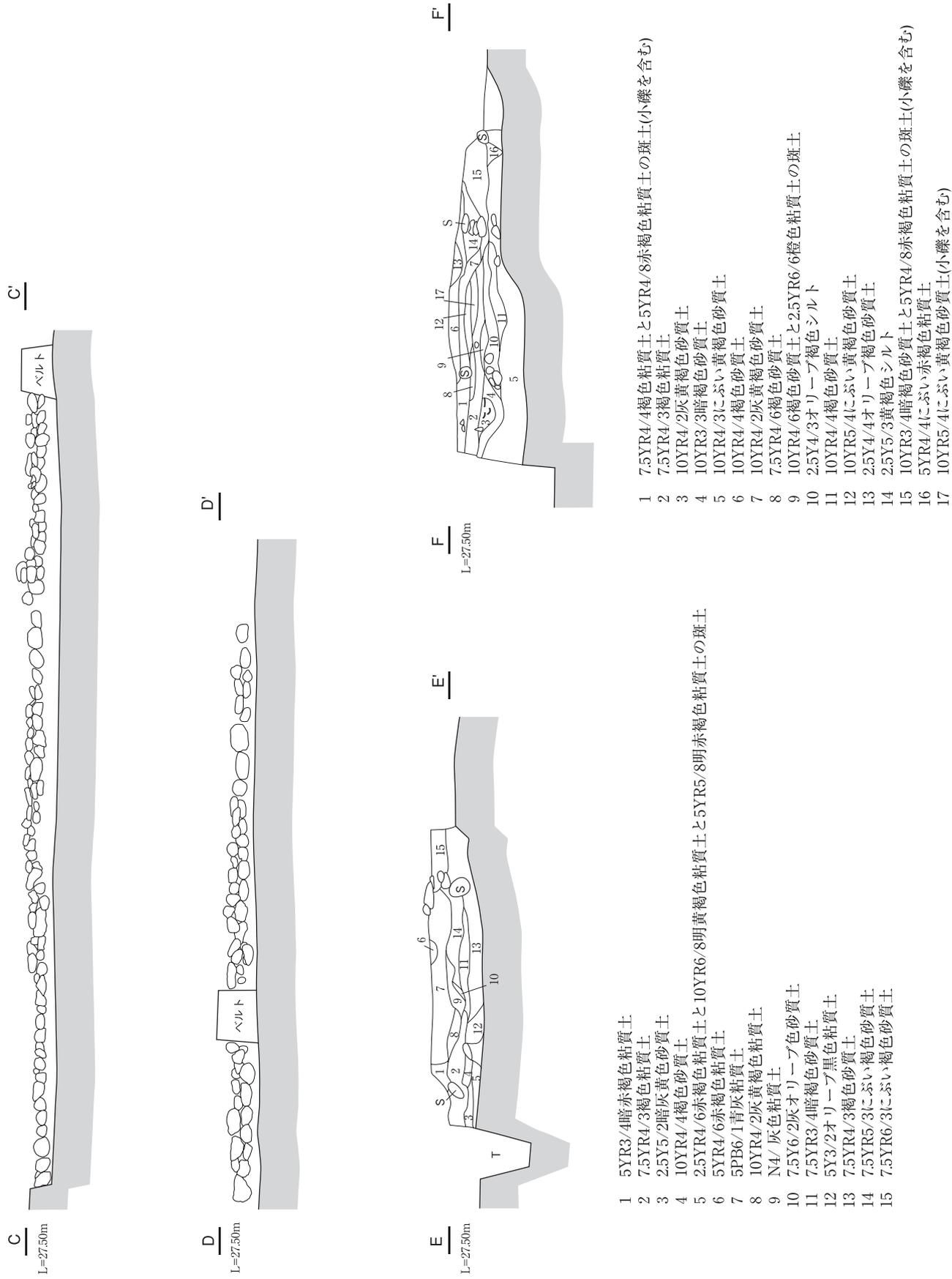
**98 B S F 0001** 98 B 区の中央やや南側で検出された道路状遺構で、98 B S F 0002 とほぼ直交している。98 B S D 0010 が側溝になるのではないかと考えられる。道路の両脇には礫が並べられ、路肩が崩れないように護岸が行われている。幅約 220 ~ 260cm で、厚さ約 50cm を測る。道路の方向性は N - 49° - E を示している。時期は不明であるが、98 A S F 0001 と同様で江戸時代後期に属すると思われる。

**98 B S F 0002** 98 B 区の南側で検出された道路状遺構で、98 B S F 0001 とほぼ直交している。98 B S D 0005 や 98 C S D 0010 は側溝で、道路の両側には 98 F S F 0001 同様に礫が並べられている。幅約 150 ~ 190cm で、厚さ約 60 ~ 70cm を測る。道路の方向性は N - 38° - W を示している。時期は不明であるが、他の道路と同様江戸時代後期に属すると思われる。

**98 B S F 0003** 98 B 区の南側の西壁付近で検出された道路状遺構で、98 B S F 0002 とほぼ直交している。98 B S D 0005 を側溝とし、幅はよくわからないが約 100 ~ 160cm ほどであったと思われる。



第 61 图 98 B S F 0001 · S F 0002 平面图 · 立面图 (平 1:80、立 1:50)



第62図 98 B S F 0001・S F 0002 立面図・断面図 (1:50)

る。道路の方向性はN-48°-Eを示している。時期は不明であるが、他の道路と同様江戸時代後期に属すると思われる。

**98 C S F 0001** 98 C区のほぼ中央で検出された道路状遺構で、戦国期と思われる98 C S D 0009の上で確認されている。幅約230~260cm程で、道路の方向性はN-48°-Eぐらいで、98 A S F 0001・98 B S F 0001と1本の道路を構成していたと考えられる。時期は不明であるが、他の道路と同様江戸時代後期に属すると思われる（第49図参照）。

#### 4. 井戸

今回の調査において、この時期に属する井戸を5基確認している。江戸前期までの井戸に比べ規模が小さく、ほぼ円筒状に掘られていることが見てとれる。以下、個別に紹介する。

**98 A S E 0001** 98 A区のほぼ中央の南壁付近で検出された井戸で、98 A S B 0001の中に位置している。数個の礫が円形に検出されており、長径122cm、短径114cmで、平面はほぼ円形を呈している。断ち割り調査を実施していないが、検出面からの深さは100cm以上と想定される。出土遺物は小片が多く時期は決定できないが、江戸時代後期に属する井戸と思われる。

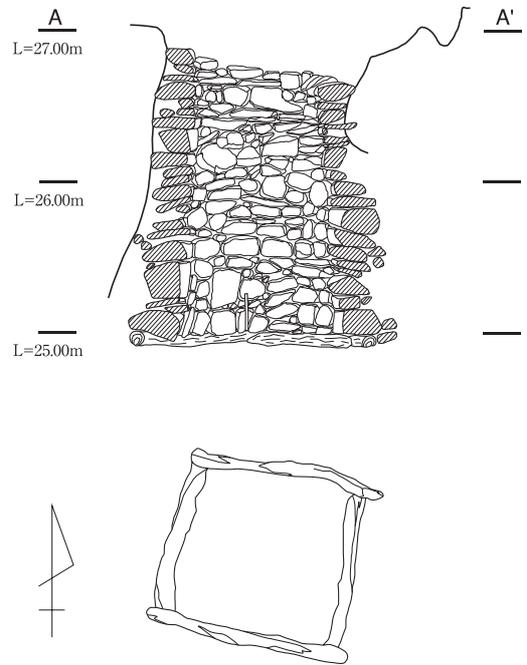
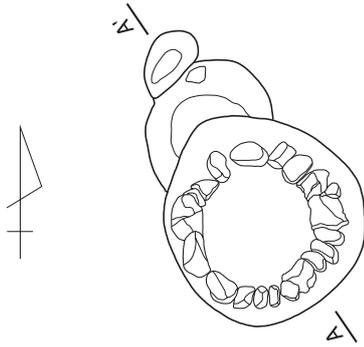
**98 A S E 0002** 98 A区の東端の北壁付近で検出された井戸で、98 A S D 0002が井戸に伴う溝になる可能性がある。長径152cm、短径151cmで、平面はほぼ円形を呈している。検出面からの深さは約260cmで、断面は上部がやや広がっているが円筒形に近い。木材などの井戸側は確認されていない。出土遺物は小片が多く時期はわかりにくいですが、江戸時代後半の井戸と思われる。

**98 B S E 0002** 98 B区の北端で検出された石組みの井戸で、98 A区との境付近に位置している。長径140cm、短径127cmで、平面はほぼ円形を呈している。検出面からの深さは約210cmで、断面は下方がやや広がっている。木材などの井戸側は確認されていないが、石の下には4本の丸太を少し加工しただけの木材を四角に組んで敷いており、石の沈下を防いでいるのかもしれない。また、底からは竹が出土しており、息抜きのために入れられていたとすれば、井戸廃絶時に儀礼が行われた井戸ということになる。供膳具の椀・皿類や調理具の鉢類、貯蔵具の瓶類などが出土しており、時期は18世紀後半から19世紀前半までと思われる。

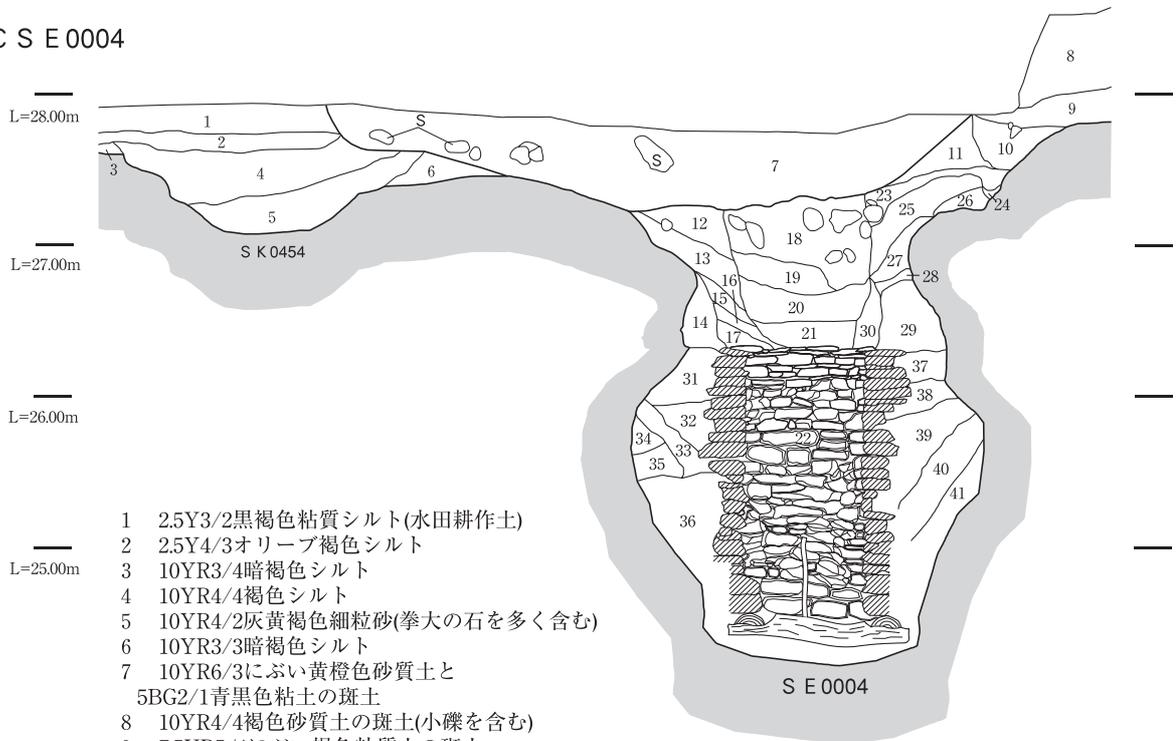
**98 C S E 0004** 98 C区の北端の西壁付近で検出された石組みの井戸で、98 A区との境付近に位置している。井戸の一部が確認されたのみで、長径残存長166cm、短径残存長99cm程で、平面は楕円形と想定される。検出面からの深さは約290cmで、断面は袋状に広がっている。98 B S E 0002と同様に木材などの井戸側は確認されていないが、石の下の丸太の土台や底の息抜きの竹も検出されている。広東椀や瀬戸・美濃産の磁器製の型打皿が出土しており、時期は19世紀前半頃と思われる。

**00 A S E 0002** 00 A b区のほぼ中央の南壁付近で検出された井戸で、00 A S K 0094の南側に位置している。一部が確認されたのみで、長径100cm、短径残存長52cmで、平面は円形と想定される。検出面からの深さは約260cmで、断面は円筒状になっている。木材などの井戸側は確認されていない。広東椀などが出土していることから、時期は19世紀前半と思われる。

98 B S E 0002



98 C S E 0004

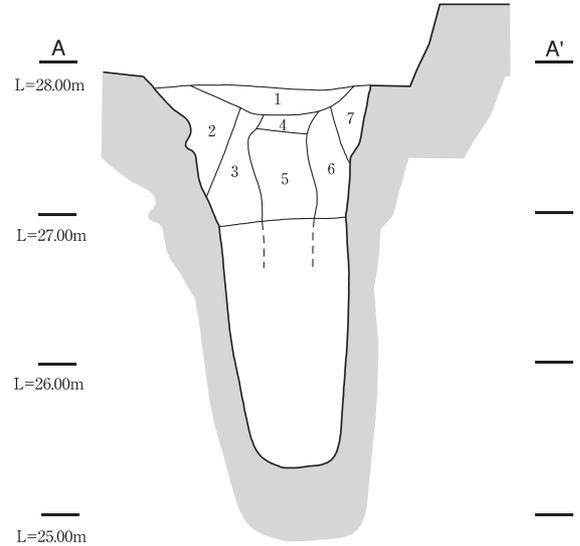
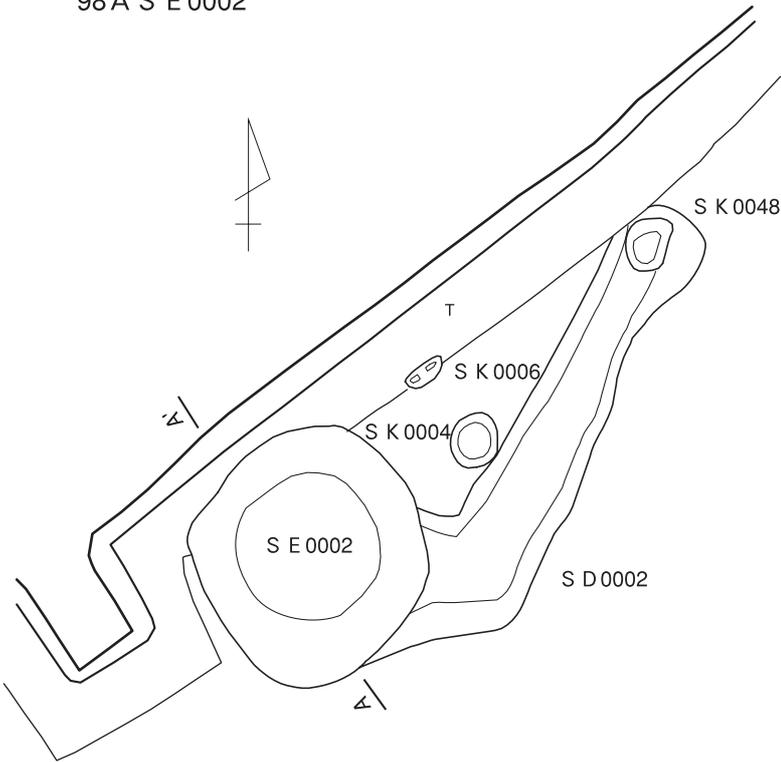


- 1 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト(水田耕作土)
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
- 3 10YR3/4暗褐色シルト
- 4 10YR4/4褐色シルト
- 5 10YR4/2灰黄褐色細粒砂(拳大の石を多く含む)
- 6 10YR3/3暗褐色シルト
- 7 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土と  
5BG2/1青黑色粘土の斑土
- 8 10YR4/4褐色砂質土の斑土(小礫を含む)
- 9 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土の斑土
- 10 10YR5/6黄褐色粘質土と  
10YR5/4にぶい黄褐色粘質土の斑土
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
- 12 10YR4/1褐灰色粘質土
- 13 2.5YR4/2暗灰黄色粘質土(小礫を多く含む)
- 14 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 16 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土
- 17 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
- 18 10YR6/4にぶい黄橙色砂質土(人頭大の石を含む)
- 19 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- 20 2.5Y3/2黒褐色シルト
- 21 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- 22 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
- 23 2.5Y5/3黄褐色砂質土(礫を多く含む)
- 24 10YR6/4にぶい黄褐色砂質土(中粒砂を含む)
- 25 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土(中粒砂を含む)
- 26 7.5YR5/4にぶい褐色砂質土(中粒砂を含む)
- 27 10YR4/4褐色砂質土(中粒砂を含む)

- 28 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト(砂を含む)
- 29 10YR4/4褐色粘質シルト(砂を含む)
- 30 2.5Y3/2黒褐色シルト
- 31 10YR4/2灰黄褐色シルトの斑土
- 32 10YR5/3にぶい黄褐色シルトの斑土
- 33 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂と  
10YR6/6明黄褐色中粒砂の斑土
- 34 10YR6/6明黄褐色中粒砂
- 35 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂
- 36 2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂
- 37 10YR5/3にぶい黄褐色シルトの斑土(小礫を含む)
- 38 10YR5/4にぶい黄褐色シルトの斑土
- 39 10YR5/3にぶい黄褐色シルトと  
10YR5/4にぶい黄褐色シルトの斑土
- 40 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂
- 41 7.5YR6/8橙色砂質土

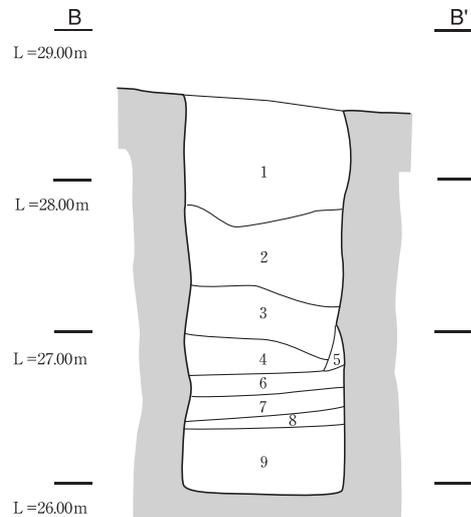
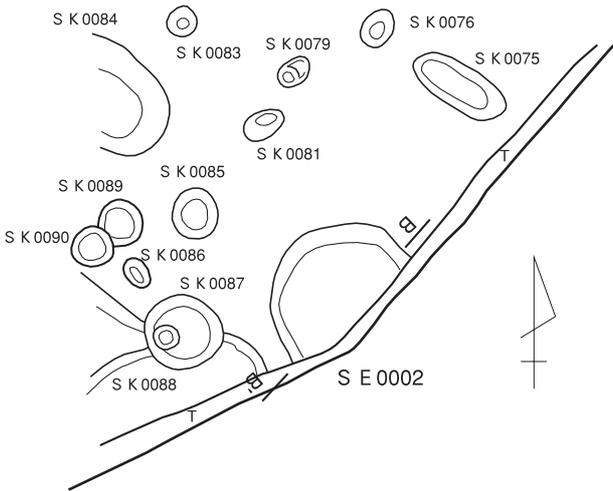
第 63 図 98 B S E 0002・98 C S E 0004 平面図・断面図 (1:50)

98 A S E 0002



- 1 10YR4/4褐色粘質土(小礫を含む)
- 2 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
- 3 7.5YR4/4褐色粘質土(小礫を含む)
- 4 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト
- 6 7.5YR4/4褐色粘質土
- 7 7.5YR5/6明褐色粘質土

00 A S E 0002



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(砂・炭化物を含む)
- 2 7.5YR4/3褐色粘質シルト(砂・炭化物を含む)
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色粘土(砂・炭化物を含む)
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色粘土(砂を多く含む)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色粘土(砂を多く含む)
- 6 2.5Y5/2暗灰黄色粘土(砂を含む、鉄分の沈着により黄色っぽく変色)
- 7 2.5Y5/1黄灰色粘土(砂を含む)
- 8 2.5Y4/1黄灰色粘質土と2.5Y4/2暗灰黄色粘質土の斑土(砂を多く含む)
- 9 5Y4/1灰色粘質シルト(砂と円礫を含む)

第 64 図 98 A S E 0002・00 A S E 0002 平面図・断面図 (1:50)

## 5. 池状遺構

98 C 区において他の遺構と様相を異にし、埋土中に多くの礫を含む遺構が検出されている。ここでは池状遺構として紹介する。

**98 C S K 0454** 98 C 区の北端の西壁付近で検出された遺構で、98 A 区との境付近で98 C S E 0004 の南側に位置している。規模は長径 530cm、短径 494cm で、平面は不定円形を呈し、検出面からの深さは最大 43cm を測る。遺構の埋土の中に礫が多く含まれていることなどから、池のような遺構ではないかと想定している。98 C S D 0012 の石組みの溝も、この遺構と何らかの関係する溝である可能性がある。出土遺物としては、供膳具の椀・皿類、調理具の捏ね鉢・搦鉢、貯蔵具の壺類などの他、灯火具や神仏具なども見られ、時期は 18 世紀後半から 19 世紀初頭頃までと思われる。

## 6. 石敷遺構

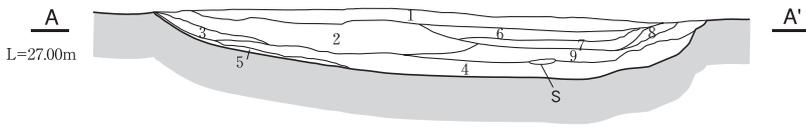
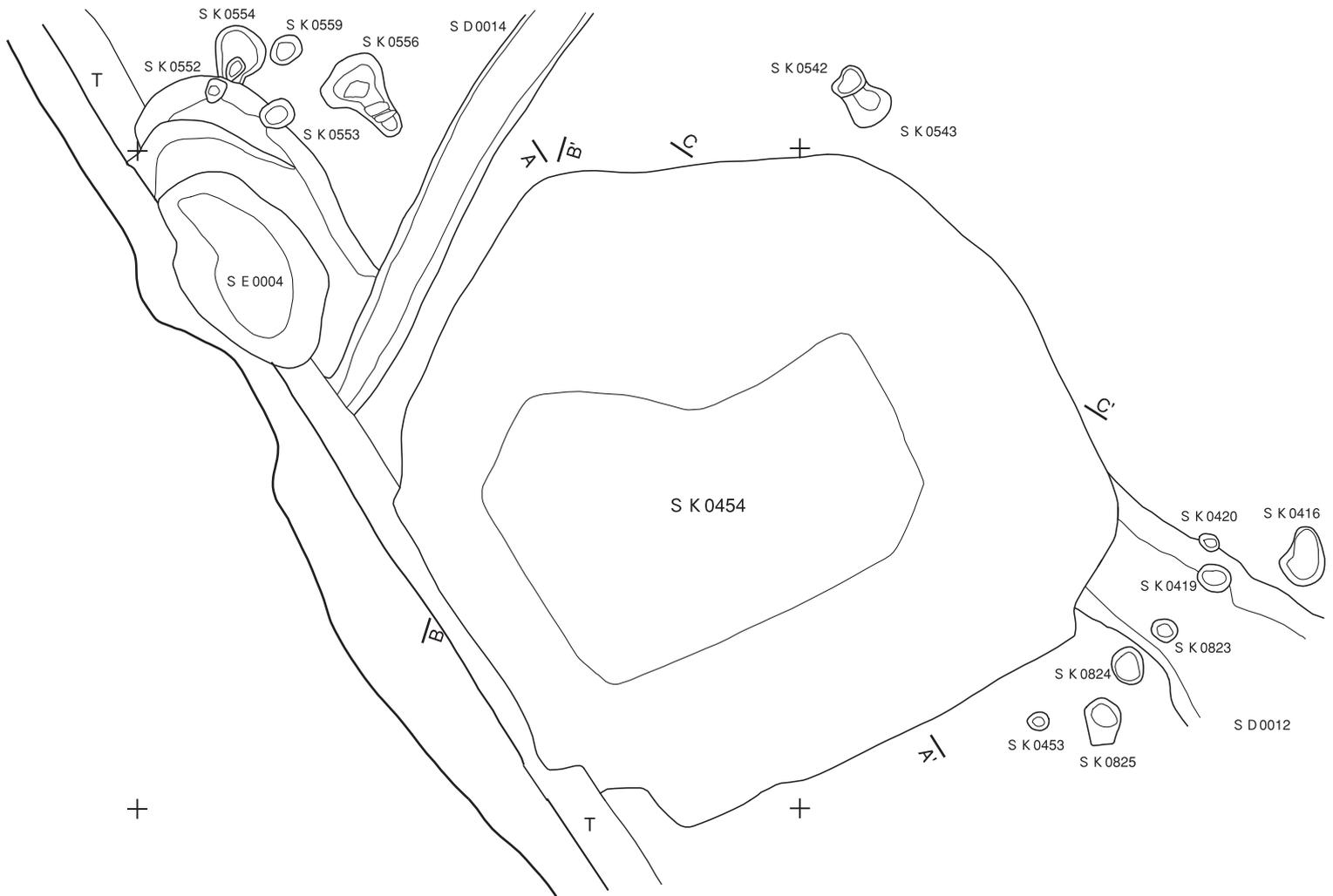
98 C 区において他の遺構と様相を異にした遺構が検出されている。遺構の床面にやや小振りな礫が敷き詰められており、ここでは石敷遺構として紹介する。

**98 C S K 0066** 98 C 区の北端付近で検出された遺構で、98 A 区との境付近で98 C S D 0012 の東側に位置している。規模は長径残存長 211cm、短径残存長 108cm で、平面は不定楕円形ではないかと想定され、検出面からの深さは最大 34cm を測る。底部には礫が敷き詰められたようになっていることや、遺構の埋土の中にも礫が多く見られることなど、他の遺構と様相が異なっていることが確認できる。そのため、98 C S K 0454 のような池状遺構と想定されるが確証がないため、性格不明の石敷遺構と考えておきたい。出土遺物は意外と多く、供膳具の椀・皿・鉢類や調理具の鍋・釜類・搦鉢の他、貯蔵具・灯火具・化粧具・神仏具など多種にわたっており、時期は 18 世紀後半までと思われる。

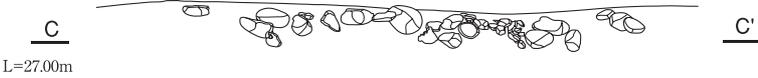
## 7. 汚水溜り遺構

00 A b 区において大型で 1 段段差をもつ土坑が確認されており、遺構の周辺の状態などから汚水溜りのような遺構ではないかと考えている。

**00 A S K 0094** 00 A b 区のほぼ中央の南壁付近で検出された遺構で、98 A S E 0002 のすぐ北西側に位置している。規模は長径 240cm、短径 234cm で、平面は不定楕円形を 2 つ合わせたようであり、検出面からの深さは最大 84cm を測る。断面は急に掘り下げられており、側面には掘削時の工具の痕が明確に残っていた。遺構の埋土は粗粒砂または中粒砂で、遺構検出の段階から確認されていた。遺構の南側に一段低い段（検出面からの深さは最大 22cm）が設けられており、南側と北側にそれぞれ 98 A S D 0007 と 98 A S D 0004・S D 0010 が接続する形で位置している。98 A S D 0004・S D 0010 から流れ込んだ排水（汚水）が一旦 98 A S K 0094 に蓄えられ、その中でゴミなどが沈殿する。水の上部はゴミが除去され、ある程度浄化された水が 98 A S D 0007 によって排出されるというようなことを考えることはできないだろうか。そうすると本遺構は水を浄化するための施設（汚水溜り）と想定することができる。また、隣接する 00 A S K 0095 は、礫が詰まっている状態で検出されており、溝を流れてきた排水の一次的な浄化を行う施設とも考えられる。出土遺物は少量でかつ小片であるために時期を決定することは難しいが、前時期の池状遺構 00 A S X 0006 を切っていることなどから、18 世紀後半以降の江戸時代後期に属する遺構と思われる。

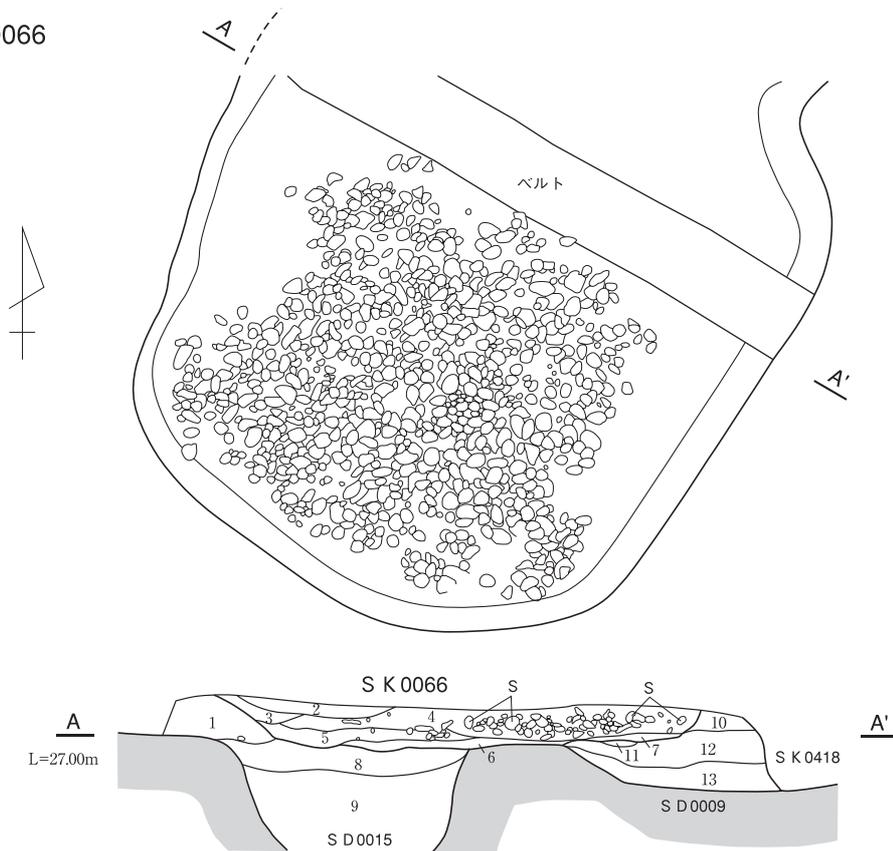


- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(小礫を含む)
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 4 5Y3/2オリーブ黒色シルト(炭化物を含む)
- 5 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト(1mm以下の砂粒を含む)
- 6~9 不明



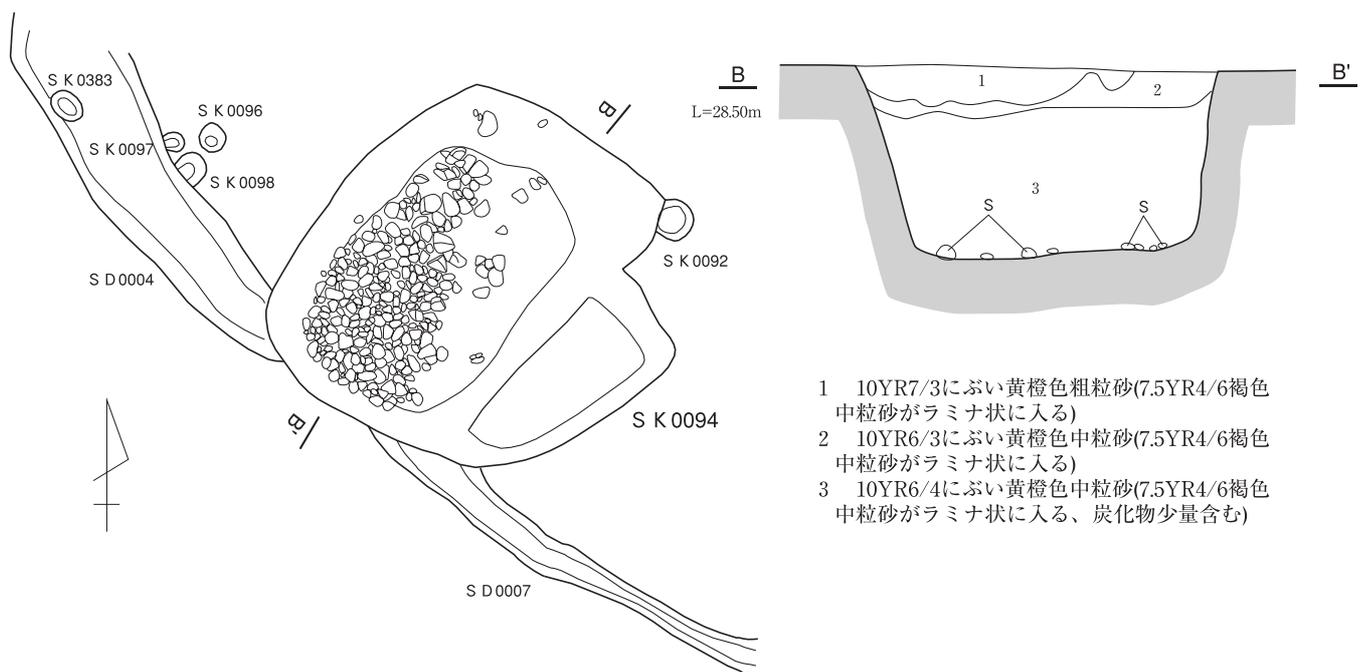
第65図 98 C S K 0454 平面図・断面図・立面図 (1:50)

98 C S K 0066



- |  |  |
|--|--|
| 1 10YR3/4暗褐色粘質シルトと10YR5/6黄褐色粘質シルトの斑土(5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロックを含む) | 8 10YR4/2灰黄褐色シルト                             |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土   | 9 10YR5/6黄褐色粘質シルト                            |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(炭化物を含む)                                 | 10 10YR4/4褐色砂質土                              |
| 4 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(拳大の礫を多く含む)                              | 11 10YR4/2灰黄褐色粘土                             |
| 5 10YR4/4褐色砂質土   | 12 7.5YR4/3褐色粘質シルトと10YR6/6明黄褐色粘質シルトの斑土       |
| 6 7.5YR4/4褐色粘質土  | 13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと2.5YR5/3にぶい赤褐色粘質シルトの斑土 |
| 7 10YR5/3にぶい黄褐色粘土(小礫を含む)                                   |  |

00 A S K 0094



- |   |
|---|
| 1 10YR7/3にぶい黄橙色粗粒砂(7.5YR4/6褐色中粒砂がラミナ状に入る)         |
| 2 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂(7.5YR4/6褐色中粒砂がラミナ状に入る)         |
| 3 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂(7.5YR4/6褐色中粒砂がラミナ状に入る、炭化物少量含む) |

第 66 図 98 C S K 0066・00 A S K 0094 平面図・断面図 (1:50)

## 8. 土坑

江戸時代の土坑というと廃棄土坑などが多いが、今回の調査においてはほとんど見られていない。前述した特殊な遺構以外には常滑産の甕を埋設した土坑や小さな土坑が見られる程度で、時期・性格の判別のできる土坑は非常に少ない。また、根石や柱根の残っている土坑や、セクションから柱根の抜き取り痕が視察できることがあり、掘立柱建物の柱穴も存在しているものと思われる。ここでは出土遺物を実測した遺構を中心に紹介する。

**98 A S K 0038** 98 A 区の中央の北壁付近で検出された土坑である。長径 182cm、短径 168cm で平面不定方形を呈し、検出面からの深さは最大 24cm を測る。灯火具である灯蓋などが出土している。

**98 A S K 0066** 98 A 区の中央の 98 C 区との境付近で検出された土坑である。長径 118cm、短径残存長 27cm で平面楕円形と想定され、検出面からの深さは最大 14cm を測る。

**98 A S K 0078** 98 A 区の東側の南壁付近で検出された埋甕土坑である。長径残存長 72cm、短径 59cm で平面楕円形と想定され、検出面からの深さは最大 13cm を測る。水田などの水甕として利用されたものと考えられる。

**98 A S X 0001** 98 A 区の中央で検出された埋甕土坑である。長径 115cm、短径 71cm で平面不定楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 22cm を測る。2～3 個体の甕が潰された状況で出土しており、使用されなくなった甕を廃棄したものと思われる。

**98 A S X0003** 98 A 区の中央で検出された土坑である。長径 260cm、短径 186cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 49cm を測る。鉄釉・灰釉掛け分けの腰折椀などが出土している。

**98 B S K 0191** 98 B 区の北側で検出された大型の土坑である。長径 896cm、短径残存長 322cm で平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大 57cm を測る。土坑というよりも溝として捉えた方がいいのかも知れない。供膳具である椀・皿類がある程度まとまって出土している。

**98 B S K 0197** 98 B 区の中央付近で検出された埋甕土坑である。長径・短径ともに 82cm で平面円形を呈し、検出面からの深さは最大 50cm を測る。水甕であるが、すぐ西側に石組み井戸 98 B S E 0002 が位置していることから、井戸との関係が深い遺構である可能性が高い。甕がほぼ 1 個体以外に小椀などが出土している。

**98 B S K 0200** 98 B 区の中央で検出された土坑である。長径推定 98cm、短径推定 82cm で平面楕円形と想定され、検出面からの深さは最大 26cm を測る。

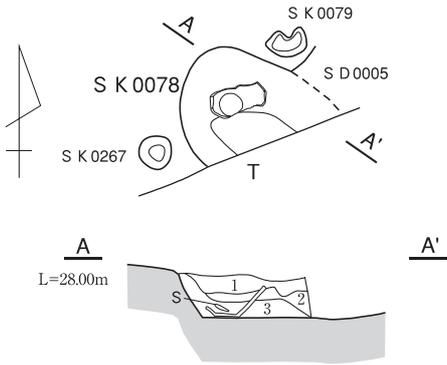
**98 B S K 1022** 98 B 区の南側で検出された土坑である。長径 340cm、短径 250cm で平面長方形を呈し、検出面からの深さは最大 44cm を測る。周囲に礫が検出されているが、性格不明の遺構である。天目椀や腰鍔椀などの椀類、羽釜などが出土している。

**98 B S K 1062** 98 B 区の南側で検出された埋甕土坑である。長軸 105cm、短軸 100cm で平面不定円形を呈し、検出面からの深さは 60cm を測る。水田などの埋甕である可能性がある。小型の土師器皿などが出土している。

**98 C S K 0073** 98 C 区の南端付近で検出された土坑である。長径 25cm、短径 16cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 7 cm を測る。丸皿などが出土している。

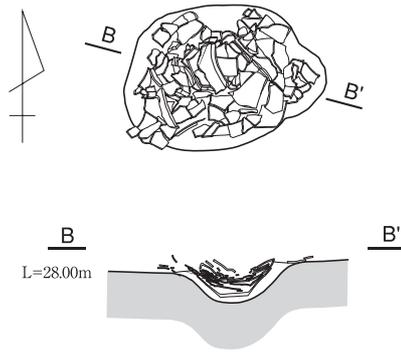
**98 C S K 0553** 98 C 区の北端の西壁付近で検出された土坑である。長径 26cm、短径 20cm で平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 39cm を測る。

98 A S K 0078

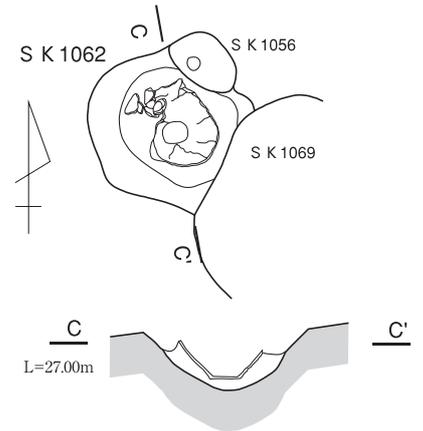


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 3 7.5YR3/4暗褐色砂質土

98 A S X 0001

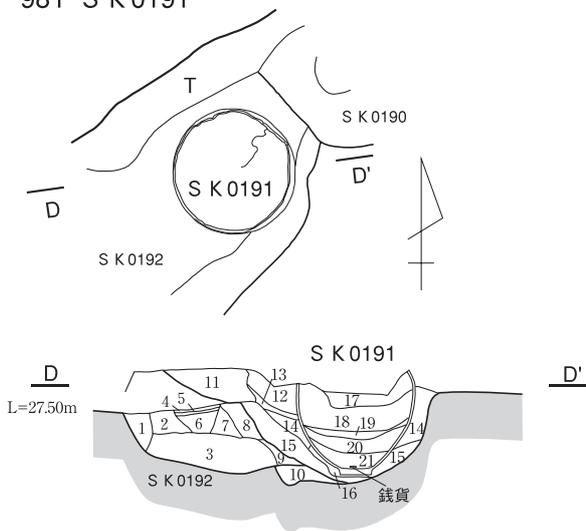


98 B S K 1062

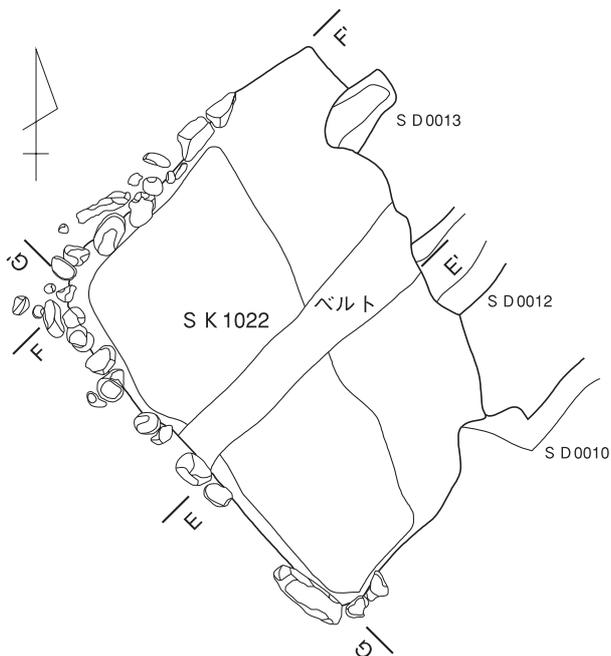


- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
- 2 10YR3/4暗褐色粘質シルト(小礫を含む)
- 3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/4褐色粘質土の斑土
- 4 10YR4/6褐色粘土
- 5 10YR4/4褐色砂質土
- 6 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR2/2黒褐色粘質シルトの斑土(炭化物を少量含む)
- 7 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 8 7.5YR4/4褐色粘質土と5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトの斑土(小礫を少量含む)
- 9 10YR4/4褐色粘質シルトと5YR4/6赤褐色粘質シルトの斑土
- 10 7.5YR4/4褐色粘質シルト
- 11 10YR4/4褐色中粒砂
- 12 7.5YR4/4褐色シルトと5YR4/4にぶい赤褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質土の斑土
- 13 10YR4/4褐色中粒砂
- 14 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトの斑土
- 15 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質土の斑土
- 16 10YR7/2にぶい黄褐色粘土
- 17 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土
- 18 10YR4/4褐色砂質土(炭化物を含む)
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
- 20 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
- 21 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂

98 F S K 0191



98 B S K 1022



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
- 2 2.5Y3/2黒褐色細粒砂
- 3 5Y4/2灰オリーブ色シルト
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
- 6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
- 8 5Y4/2灰オリーブ色砂質土
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
- 11 5Y3/1オリーブ黒色シルト
- 12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
- 13 不明

第 67 図 土坑平面図・断面図・立面図 (1:50)

**98 F S K 0072** 98 F 区の東側の北壁付近で検出された土坑である。長径210cm、短径残存長73cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大96cmを測る。端反腕などが出土している。

**98 F S K 0191** 98 F 区の北端の北壁付近で検出された埋甕土坑である。長径190cm、短径残存長144cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大42cmを測る。他の埋甕と同様水甕として利用されていたと思われる。

**98 F S K 0218** 98 F 区の西端付近で検出された土坑である。長径72cm、短径66cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは62cmを測る。天目碗などが出土している。

**00 A S K 0039** 00 A b 区の東端付近で検出された土坑である。長径推定72cm、短径65cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは28cmを測る。徳利の底部などが出土している。

**00 A S K 0093** 00 A b 区の中央で検出された土坑である。長径388cm、短径261cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは最大15cmを測る。

**00 A S K 0228** 00 A b 区の西端の西壁付近で検出された土坑である。長径104cm、短径88cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大30cmを測る。小型の御酒徳利などが出土している。

**00 A S K 0234** 00 A b 区の西端の西壁付近で検出された土坑である。長径残存長179cm、短径114cmで平面楕円形と想定され、検出面からの深さは最大39cmを測る。

**00 A S K 0288** 00 A b 区の東側で検出された土坑である。長径推定120cm、短径77cmで平面楕円形と想定され、検出面からの深さは僅かに3cmのみである。小振りの丸碗などが出土している。

**00 B S K 0715** 00 B a 区の北壁の中央付近で検出された土坑である。長径推定48cm、短径40cmで平面不定形を呈し、検出面からの深さは23cmを測る。瓦片などが出土している。

**00 B S K 0994** 00 B a 区のはぼ中央の東壁付近で検出された土坑である。長径43cm、短径26cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大18cmを測る。瓶の口縁部などが出土している。

**00 B S K 1127** 00 B a 区の西端の西壁付近で検出された土坑である。長径残存長106cm、短径残存長102cmで平面不定楕円形と想定され、検出面からの深さは最大16cmを測る。手捏ねの土師器皿などが出土している。

**00 B S K 2072** 00 B b 区の南端付近で検出された土坑である。長径69cm、短径54cmで平面楕円形を呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。青磁の端反腕などが出土している。

## 第7節 時期不明の遺構

最後に、掘立柱建物・井戸・土坑などで、出土量が少量または無遺物であるために、時期を確定することができない遺構をここでまとめて紹介したいと思う。

### 1. 掘立柱建物

**00 A S B 0201** 00 A b 区の東側の北壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N - 42° - Eを示している。1間×3間以上の建物と想定され、心心間の距離は、120cmと160～175cmとなっている。

**00 A S B 0202** 00 A b 区の東側の南壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 35^{\circ} - E$ を示している。1 間  $\times$  3 間以上の建物と想定され、心心間の距離は160～180cmとなっている。

**00 B S B 0201** 00 B a 区のほぼ中央の北壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 27^{\circ} - E$ を示している。2 間  $\times$  3 間の建物で、心心間の距離は160cm・190cmと160～210cmとなっている。

**00 B S B 0202** 00 B 区の北端、00 B a 区の東壁付近と00 B b 区の西壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 18^{\circ} - E$ を示している。2 間  $\times$  3 間以上の建物と想定され、心心間の距離は120cm・150cmと150～160cmとなっている。

**00 B S B 0203** 00 B a 区の西端の南壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 41^{\circ} - W$ を示している。2 間  $\times$  4 間の建物で、心心間の距離は、220cm・180cmと170～180cmとなっている。

**00 B S B 0204** 00 B a 区のほぼ中央の北壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 35^{\circ} - E$ を示している。3 間  $\times$  4 間の建物で、心心間の距離は130～160cmと160～180cmとなっている。

**00 B S B 0205** 00 B a 区の西端の南壁付近で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 60^{\circ} - E$ を示している。1 間  $\times$  3 間以上の建物と想定され、心心間の距離は170～220cmとなっている。

**00 B S B 0206** 00 B a 区の西側で検出された掘立柱建物である。建物の主軸方向は、 $N - 38^{\circ} - E$ を示している。1 間  $\times$  2 間の建物で、心心間の距離は300cmと180cm・200cmとなっている。

## 2. 井戸

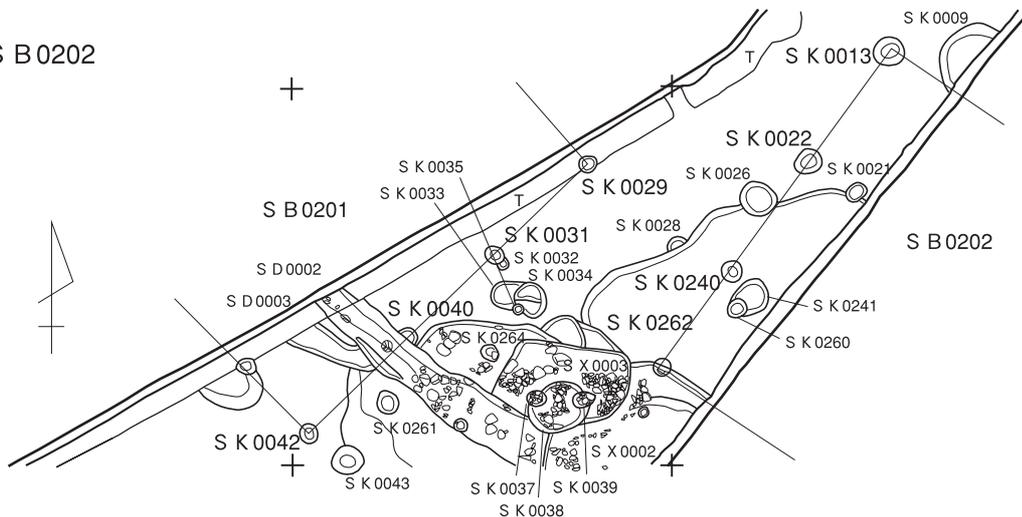
**98 A S E 0003** 98 A 区の中央のやや東寄りで検出された井戸で、98 C 区との境付近に位置している。長径106cm、短径104cmで、平面はほぼ円形を呈している。検出面からの深さは約160cmで、断面は円筒形に近い。木材などの井戸側は確認されていない。

**98 C S E 0001** 98 C 区の北端の東壁付近で検出された井戸で、98 A 区との境付近に位置している。長径115cm、短径101cmで、平面は不定円形を呈している。検出面からの深さは約270cmで、断面はやや崩れてはいるが円筒形に近い。木材などの井戸側は確認されていない。

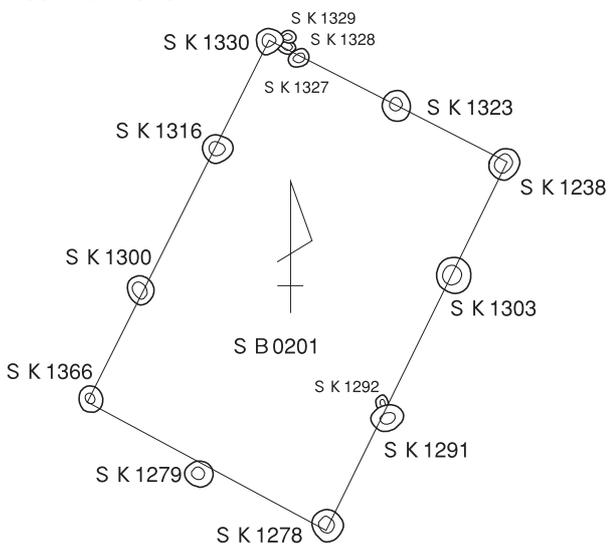
## 3. 土坑

**00 B S K 1393** 00 B a 区の北壁の中央付近で検出された土坑で、検出段階において埋土が炭化物で真っ黒な遺構として確認されている。断面をよく見てみると、骨と思われる小片が埋土中に含まれており、地山部分には火を受けて土が固く焼け締まっているように観察できた。詳しくは脂肪酸分析を行っているのでそちらを参考していただきたい（第IV章第2節）。残念ながら遺物が出土していないので、時期を決定することができない。（小嶋廣也）

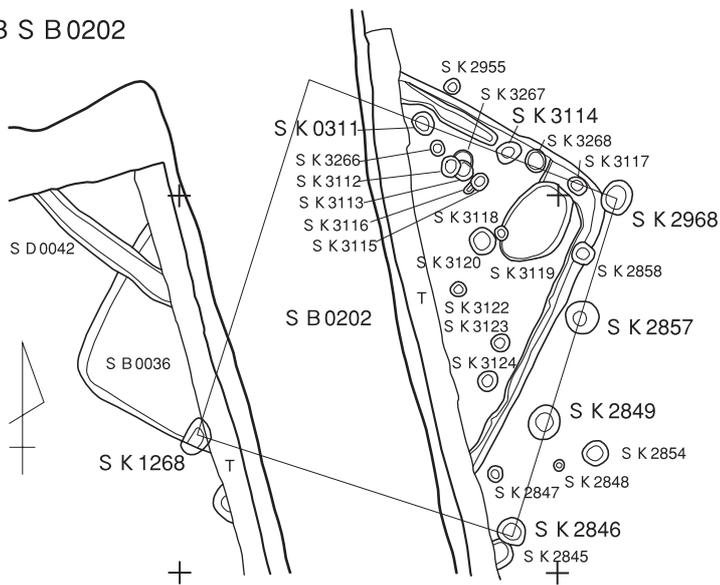
00A S B 0201 • S B 0202



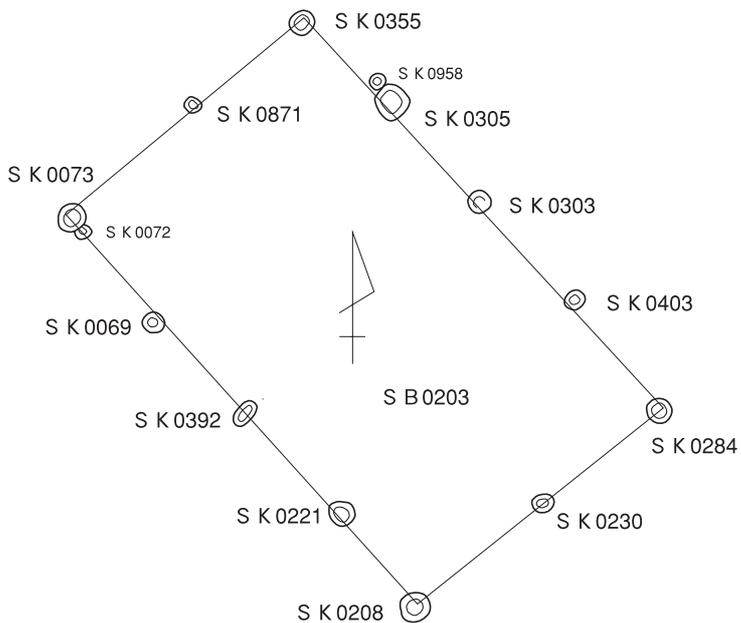
00B S B 0201



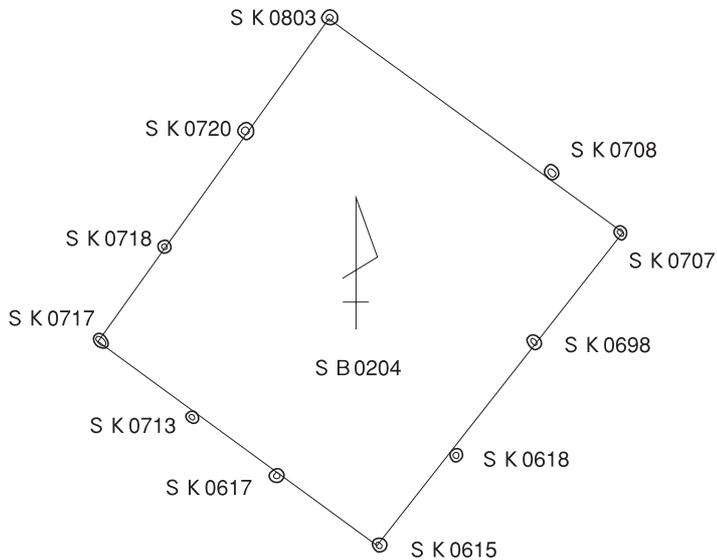
00B S B 0202



00B S B 0203

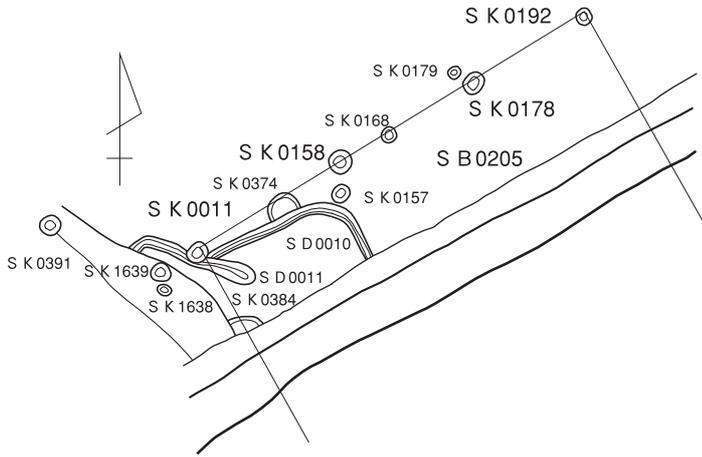


00B S B 0204

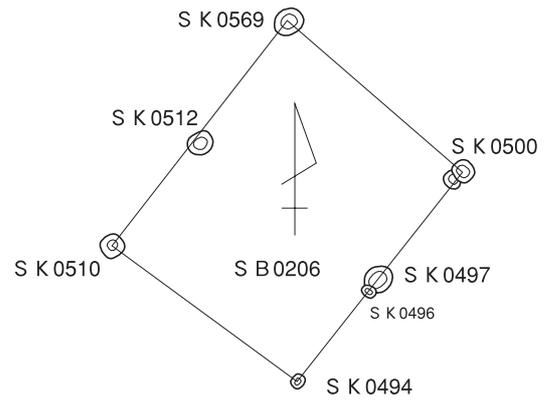


第 68 図 掘立柱建物平面図① (1:100)

00 B S B 0205

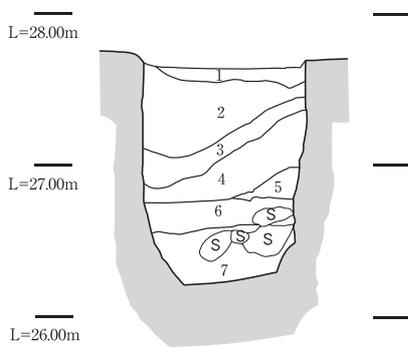


00 B S B 0206



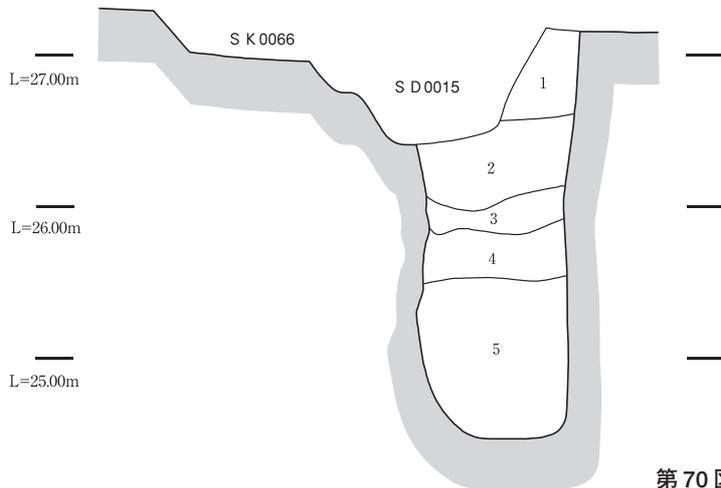
第 69 図 掘立柱建物平面図② (1:100)

98 A S E 0003



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック(炭化物を含む)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(炭化物を含む)
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘質シルトの斑土
- 4 7.5YR5/3にぶい褐色シルトと5YR5/3にぶい赤褐色粘質シルトの斑土
- 5 7.5YR6/6橙色シルト
- 6 7.5YR6/6橙色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの斑土
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂(礫を含む)

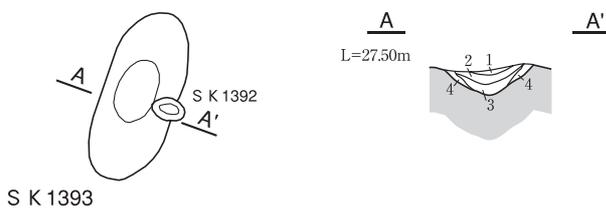
98 C S E 0001



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと7.5YR5/4にぶい褐色シルトの斑土(炭化物・礫を多く含む)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと7.5YR5/4にぶい褐色シルトの斑土(炭化物・礫を多く含む)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと7.5YR5/4にぶい褐色シルトの斑土(炭化物・礫を多く含む)
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 5 5Y4/1灰色シルト(炭化物・礫を含む)

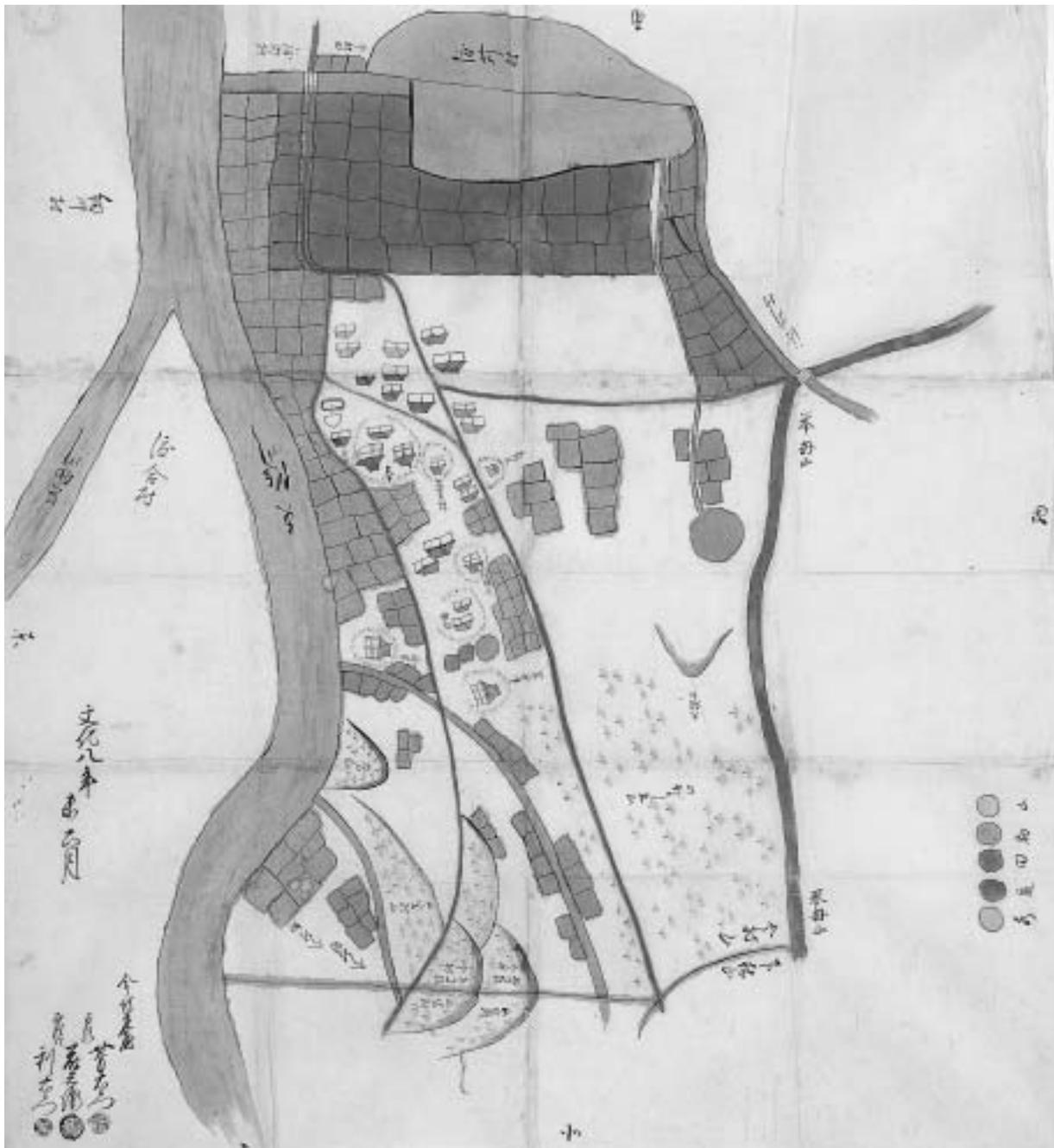
第 70 図 98 A S E 0003・98 C S E 0001 断面図 (1:50)

00 B S K 1393



- 1 7.5YR3/3暗褐色粘質土(炭化物を少量含む)
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト(炭化物を多く含む、骨片を含む)
- 3 10YR3/2黒褐色粘質シルト(炭化物を多く含む)
- 4 5YR4/4にぶい赤褐色シルト=焼土か  
(やや固く締まっている、火を受けて地山が変色しているのか)

第 71 図 00 B S K 1393 平面図・断面図 (1:50)



第72図 「今村絵図（文化8 = 1811年）」（『豊田の古絵図 - 挙母藩領近世絵図集大成 -』より転載）

絵図の内容

- 社寺 神明（氏神）・小猿投宮・天道宮・常行院・薬師堂・観音堂
- 郷倉1 御高札1 人家18軒（本百姓）
- 池川 矢作川・足助川（巴川）・小流6・今村渡刈村共用池・無名溜池1
- 山 東高根山・西高根山・大塚山・のほり立山・丸山・山室村山
- 道 挙母道（細川村～長興寺村～挙母）・渡刈村～長興寺村道・山室村～細川村道

19世紀初頭の今町遺跡周辺の絵図である。寺と書いているあたりが現在の常行院と考えられ、この周辺が発掘調査を行った地点と思われる。この時期遺跡の大部分が水田であったことがわかるが、発掘調査においても同様の結果が得られている。

なお、『豊田の古絵図』では、これ以外に2枚の「今村絵図」が掲載されている。1枚は、寛延2（1749）年4月の「三州加茂郡今村絵図（領知村々巻枚絵図）」で、記名のある物件が少なく後世の作と考えられている。もう1枚は、「年代不詳村絵図」で、内容は極めて簡略であり、明治維新期に挙母藩において急拠作成されたものと考えられている。この文化8年の「村絵図」は、同時代公図と確認されており、記載内容も豊富であるため、今回紹介した。

### 第Ⅲ章 遺 物



発掘作業風景（南東から）

# 第1節 縄文時代の遺物

## 1. 縄文土器

縄文時代の遺物はまとまった形では検出されなかったが、時期のわかる土器が数点出土した。

<中期> 1は、台付きの深鉢の台部である。底部の一部が残存するが、上部の深鉢は失われている。円筒形をなし、周囲に縦長の楕円形の透かしが5～6ヶ所入るものと推定される。透かし間は隆帯を縦に貼り付け、柱状をなしている。黄褐色で粗砂、細砂を多量に含む胎土である。98E区SK0187より検出された。

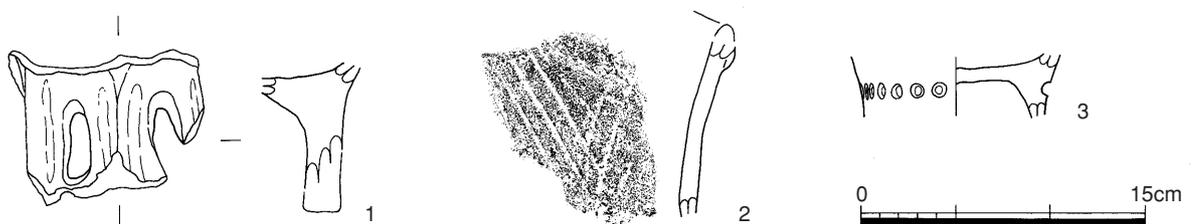
類例は、岐阜県各務原市畑畑遺跡で全形のわかるものが出土している。当該遺跡出土の中期縄文土器第IV群4類がこれに相当し、上部の深鉢がいわゆるキャリパー型の器形をとるもので、中期中葉～後葉の時期と考えられる。

<後期> 2は、深鉢の口縁部である。口縁はわずかししか残存していないが、波状口縁であると考えられる。口縁部には、隆帯が巡らされ、頸部には一部斜格子文状となる平行沈線が施文される。粗砂および細砂を多量に含み、わずかに細礫が混じる胎土で、明黄褐色を呈す。98B区の西壁トレンチより検出され、直下より縄文時代の円形竪穴住居址が検出されている。

類例は、愛知県知多郡南知多町林ノ峰貝塚に認められる。『林ノ峰貝塚I』においてC貝層出土土器5類櫛描条線文を施す一群とされたものに、同様の施文をもつ波状口縁の深鉢が存在する。これは、口縁部の隆帯をもたないが、同貝層6類には類似した隆帯を有するものがあり、これらと近似した土器と考えられる。同報告書では、C貝層の土器群をもって後期前葉の林ノ峰IV式を設定しており、同時期と考えられる。

<晩期> 3は、台付き鉢の鉢の底部から台との境界の部分である。鉢の部分は、半球形の浅鉢型をなすものと考えられる。台部は、円錐形をなすと推測される。境界部分に、円形の刺突文が巡らされている。粗砂および細砂を多量に含む胎土で、明赤褐色を呈する。近世初期の時期の98C区SD0009より検出された。

類例は、愛知県宝飯郡小坂井町稲荷山貝塚、同豊田市丸根遺跡などで認められる。晩期中葉稲荷山式の時期と考えられる。(酒井俊彦)



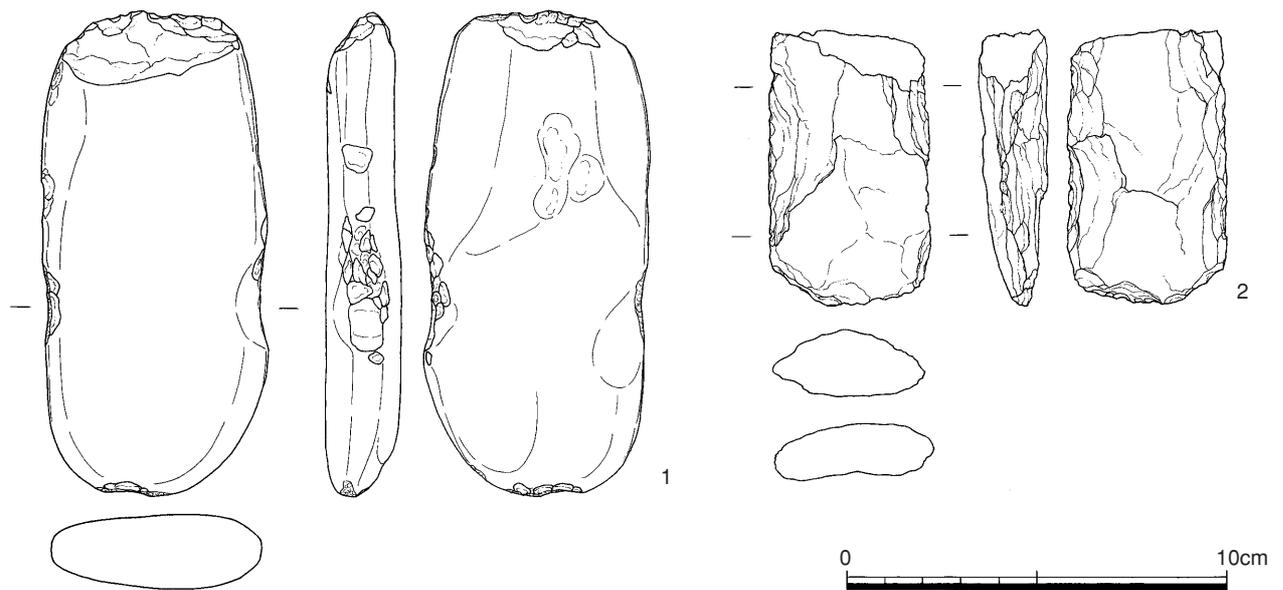
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種		法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				
1	98E	SK0187	—	台付深鉢	—	残6.2	—	—	—	—	不明	縄文中期、楕円形の透かし、透かしの間に隆帯貼付	22	E-001
2	98B	西トレンチ	—	深鉢	—	残9.3	—	—	—	—	不明	縄文後期、波状口縁か、平行沈線あり		E-002
3	98C	SD0009	—	台付鉢	—	残3.3	—	—	—	—	不明	縄文晩期、円形の刺突文	22	E-003

第73図 縄文時代の遺物① (1:4)

## 2. 石器類

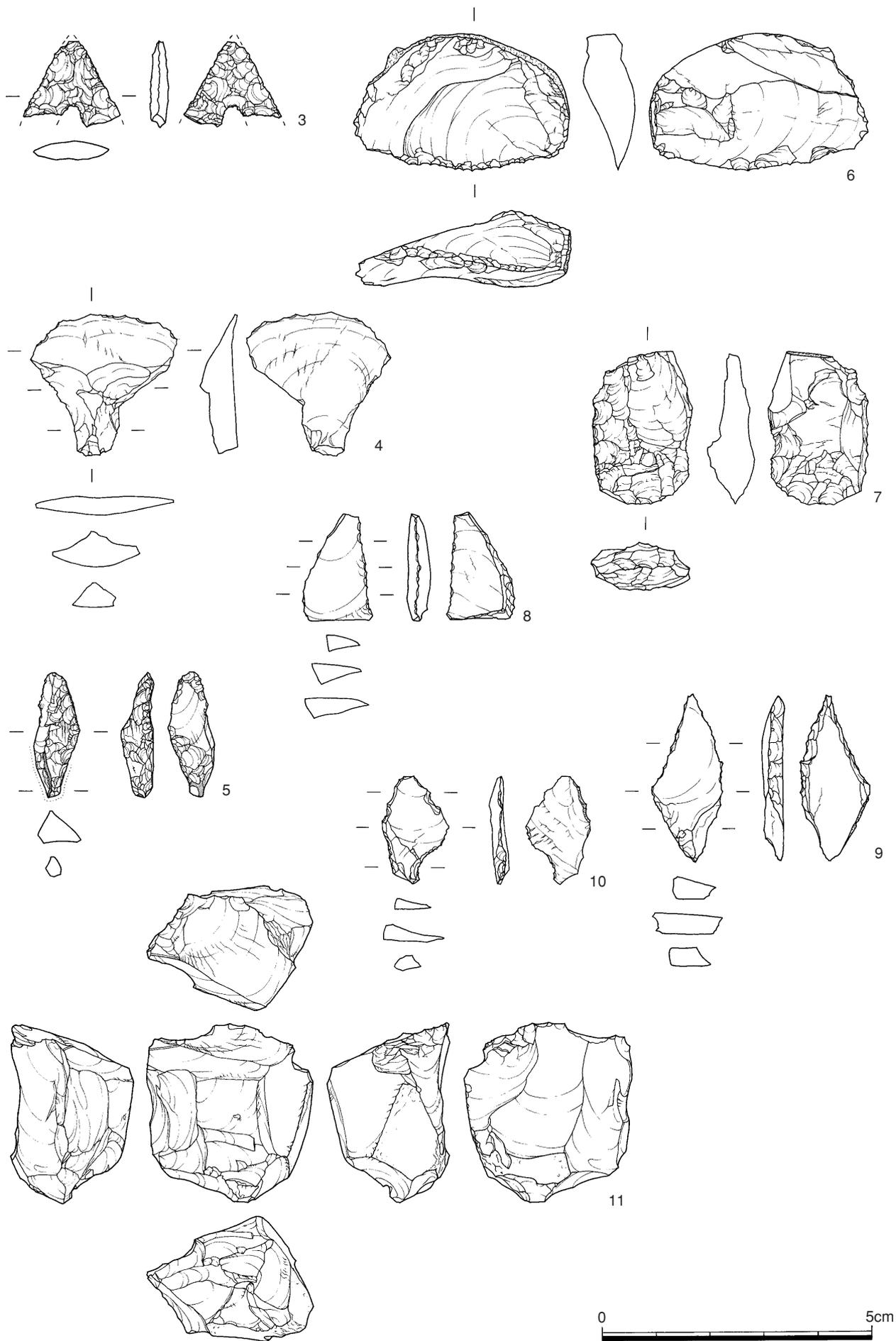
本遺跡の南西約1.6kmに位置する水入遺跡において、後期旧石器時代と思われるナイフ形石器をはじめとする石器類が300点以上出土している。本遺跡も水入遺跡に近くよく似た地形をしていることから注意していたところ、当該期の遺構からの出土ではないが後世の遺構埋土の中や遺構検出の段階で、石器と思われる遺物やフレイク・コアなどが164点確認されている。とくに00B区・00C区から多く出土している。形態から縄文時代の遺物と思われるものもあるが、大部分はフレイク・コアであるため時期は定かではない。

このうち製品は図化した11点のみで、1は礫石錘、2は打製石斧、3は石鏃、4・5はドリル、6・7はスクレイパー、8～10はナイフ形石器、11は細石核である。これらの製品以外には、磨石と思われるものが3点、コアが5点あり、残りはすべてフレイクで一部に使用痕が認められる。石材としてはチャートが多く、他に溶結凝灰岩・泥質凝灰岩・濃飛流紋岩・花崗岩・黒曜石・ホルンフェルス・オパール・長石・石英などが見られる。



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (mm・g)				石材	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	種類	形状	最大長	最大幅	最大厚	重量				
1	98C	SK0186	石器類	礫石錘	124	56	19	256.6	結晶片岩		22	S-001
2	00B	SX0003トレンチ	石器類	打製石斧	73	42	18	73.4	ホルンフェルス		22	S-002
3	00C	SK0329	石器類	石鏃	16	18	3	0.6	黒曜石		22	S-003
4	00B	SB0008	石器類	ドリル	27	26	6	2.9	チャート		22	S-004
5	00B	SB0008	石器類	ドリル	23	8	6	0.9	黒曜石	回転による摩滅、使用痕あり	22	S-005
6	00C	SB0005	石器類	スクレイパー	26	41	12	11.8	チャート	使用痕あり	22	S-006
7	00C	SB0011	石器類	楔形石器	29	19	9	4.7	チャート	スクレイパーⅢ	22	S-007
8	00C	SK0712	石器類	ナイフ形石器	20	13	4	0.8	溶結凝灰岩		22	S-008
9	00C	SK0225	石器類	ナイフ形石器	31	13	4	1.7	チャート		22	S-009
10	00B	SK0073	石器類	ナイフ形石器	20	12	3	0.6	チャート		22	S-010
11	00B	SD0049	石器類	細石核	34	31	20	19.3	溶結凝灰岩		22	S-011

第74図 縄文時代の遺物② (1:2)



第75図 縄文時代の遺物③ (1:1)

## 第2節 古代の遺物

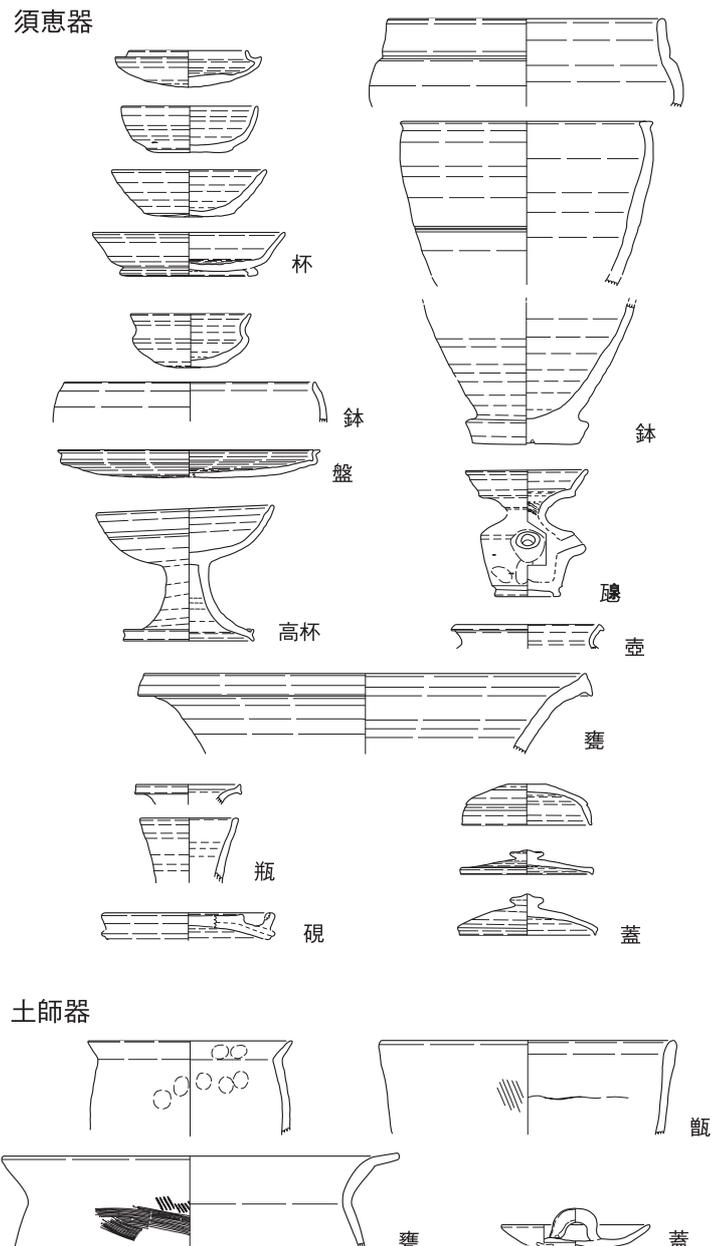
### 1. 概要

古代の遺物としては、須恵器・土師器以外に、製塩土器や土錘などが確認されている。製塩土器と土錘については別項で述べるので、ここでは須恵器と土師器を説明する。遺物の時期は、須恵器の編年により東山50号窯様式から鳴海32号窯様式までである。大まかな用途別の分類は次の通りである。なお個体数は、口縁部計測法によるの12分の1を基準にして数えてある(本章第4節の統計方法を参照)。

須恵器	供膳具	杯・鉢・盤・高坏
	調理具	甑・甗・鉢
	貯蔵具	甕・壺・瓶
	その他	蓋
土師器	供膳具	椀・高杯
	調理具	甑・甗
	その他	蓋

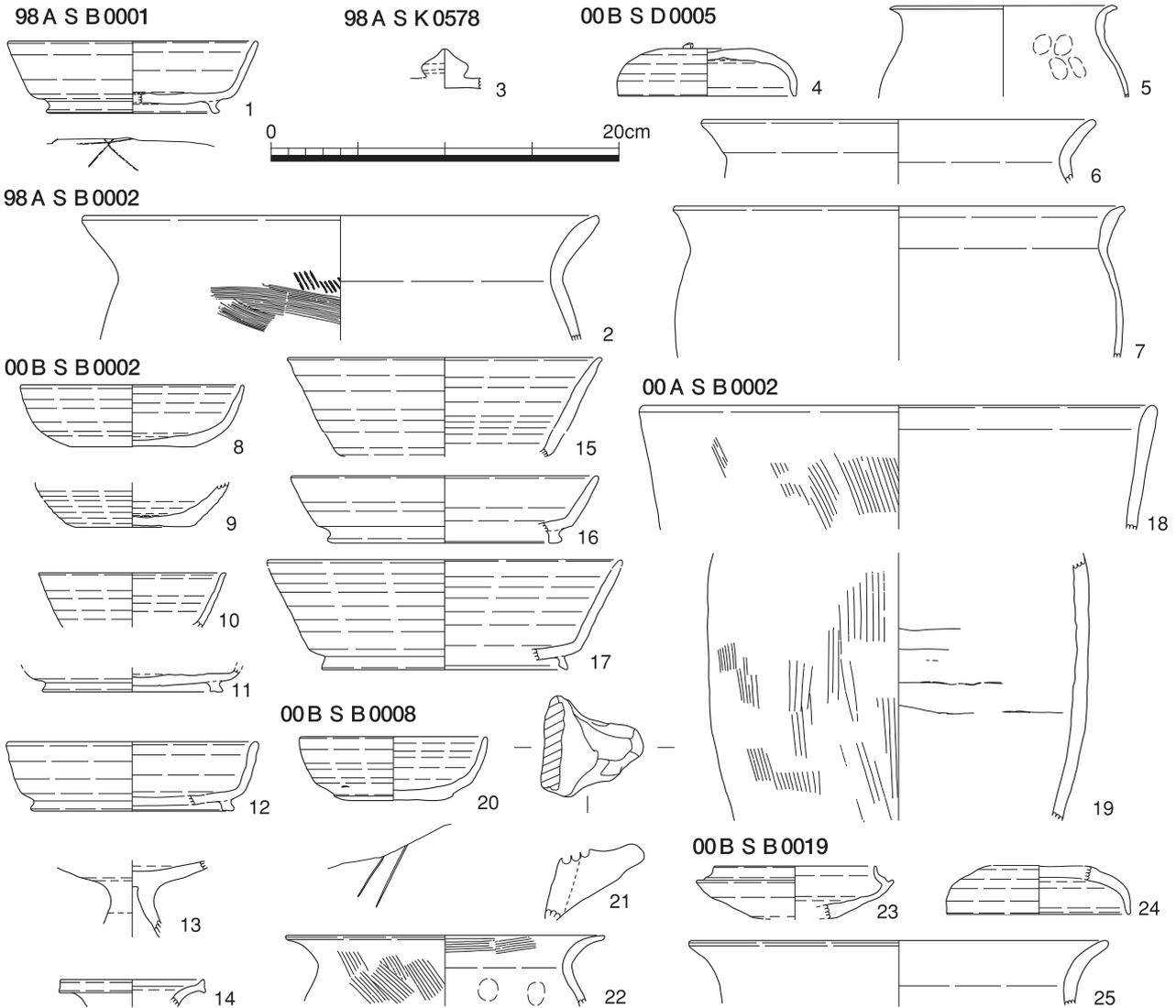
一覧表では、さらに細かな分類を行っている。例えば、供膳具の杯では有台杯・無台杯・杯身、その他の蓋では摘み蓋・杯蓋などに分けた。大まかにカウントした数を示すと、須恵器は総破片数2,533点、接合前口縁破片数553点、個体数63.33個体であった。このうち蓋類は、総破片数284点、接合前口縁破片数156点、個体数16.67個体である。また土師器は、総破片数10,144点、接合前口縁破片数248点、個体数17.75個体である。このうち蓋類は総破片数3点、接合前口縁破片数1点、個体数0.67個体である。用途別にみると、須恵器では、供膳具80.4%、調理具7.5%、貯蔵具10.0%、土師器では調理具が98.5%と出土量の殆どを占めている。また、須恵器の供膳具の中でも杯が94.2%を占めている。出土した遺物は細かな破片が多く、図化できる資料は少なかった。

また、僅かではあるが5世紀代と思われる須恵器や灰釉陶器も検出段階の遺物として出土している。



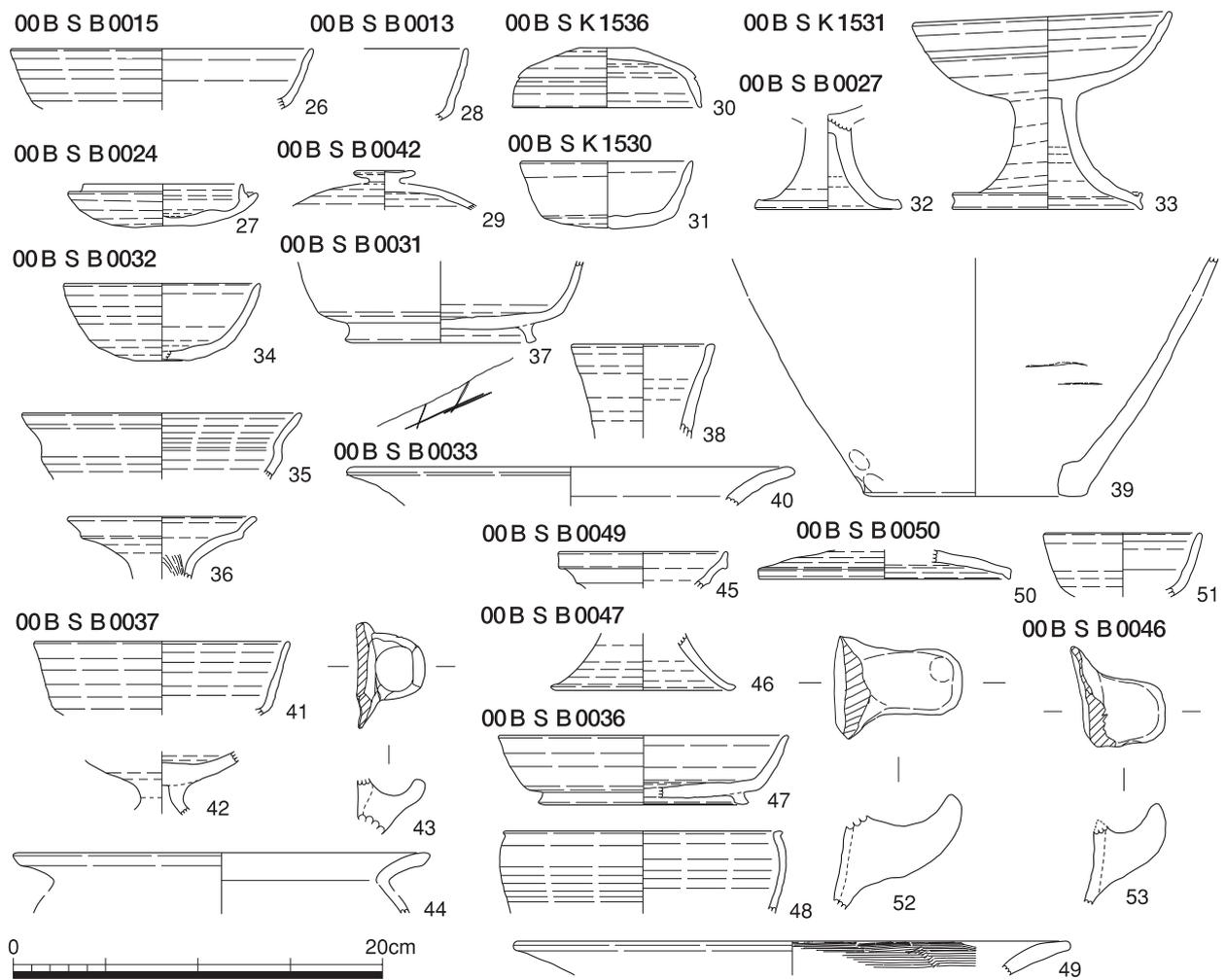
第76図 古代の遺物分類図

2. 出土遺物



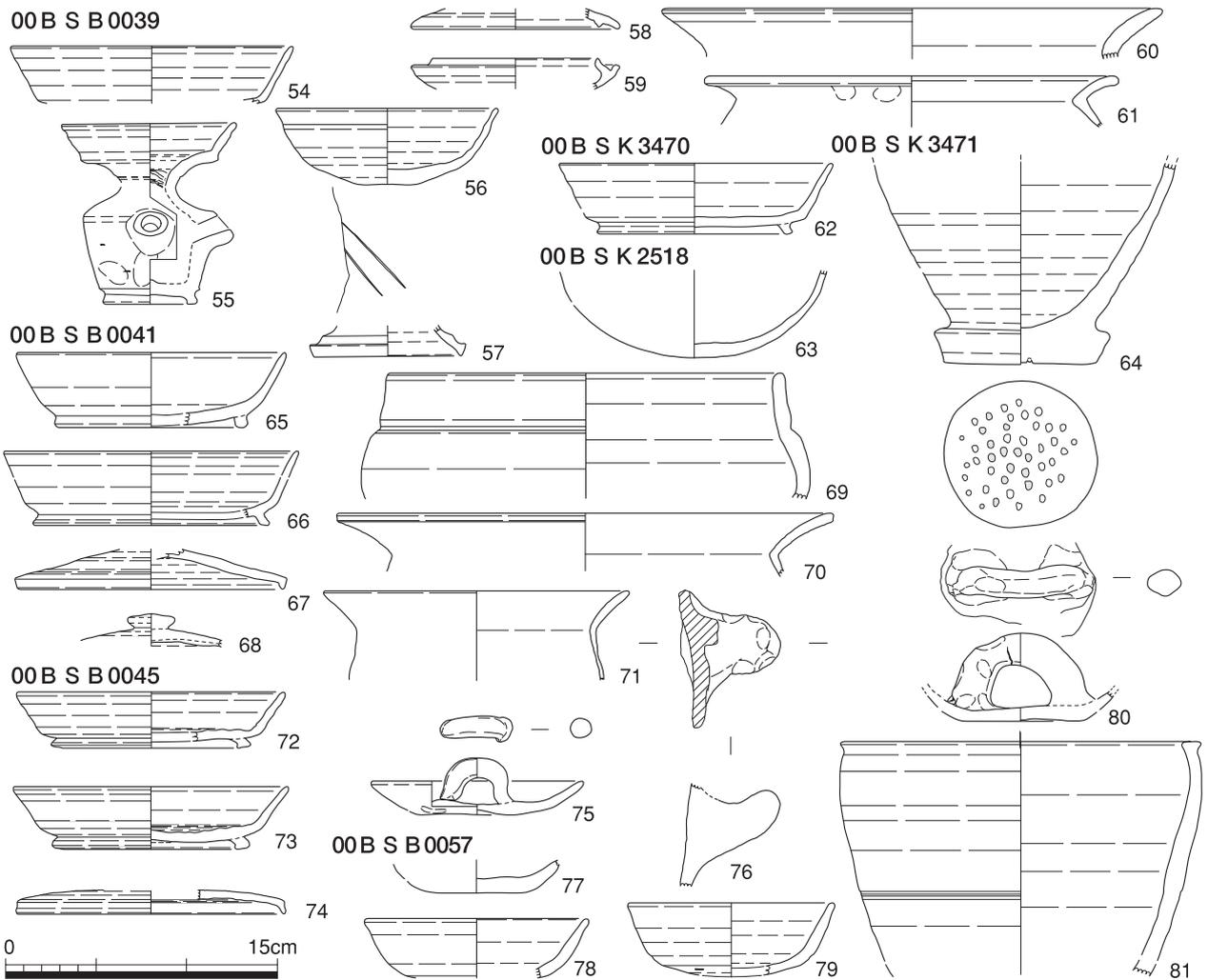
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
1	98A	SB0001	供膳具	杯	—	4.2	(14.2)	—	(9.8)	ナデ	ナデ	猿投	I-17、高台内篋記号あり	22	E-004
2	98A	SB0002	調理具	甕	—	残7.2	(29.6)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅、内面器壁剥離	24	E-005
3	98C	SK0578	その他	蓋	摘み蓋	残2.3	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径2.2cm		E-006
4	00B	SD0005	供膳具	蓋	杯蓋	2.8	(10.1)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	23	E-007
5	00B	SD0005	調理具	甕	—	残5.3	(12.6)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-008
6	00B	SD0005	調理具	甕	—	残3.7	(22.3)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-009
7	00B	SD0005	調理具	甕	—	残8.8	(25.8)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	23	E-010
8	00B	SB0002	供膳具	杯	杯身	3.6	(12.6)	—	(3.6)	ナデ	ナデ	猿投	NN-32	22	E-011
9	00B	SB0002	供膳具	杯	無台杯か	残2.6	—	—	6.6	ナデ	ナデ	猿投	NN-32か、底部回転糸切り痕	22	E-012
10	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯か	残3.2	(10.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	NN-32		E-013
11	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯	残1.4	—	—	(10.3)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	NN-32		E-014
12	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯	4.0	(14.2)	—	(11.6)	ナデ	ナデ	猿投	NN-32		E-015
13	00B	SB0002	供膳具	高杯	—	残4.5	—	—	—	ナデか	ナデか	猿投	全体に摩滅、白色粘土混入		E-016
14	00B	SB0002	貯蔵具	瓶	長頸瓶	残1.6	(8.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	NN-32、自然釉かかる		E-017
15	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯	残5.7	(17.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	NN-32		E-018
16	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯	3.9	(17.6)	—	(12.8)	ナデ	ナデ	猿投	NN-32		E-019
17	00B	SB0002	供膳具	杯	有台杯	残6.4	(20.4)	—	(14.1)	ナデ	ナデ	猿投	NN-32		E-020
18	00A	SB0002	調理具	甕	—	残7.3	(29.2)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体にやや摩滅	24	E-021
19	00A	SB0002	調理具	甕	—	残15.5	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅、外面煤付着	24	E-022
20	00B	SB0008	供膳具	杯	無台杯	3.7	(10.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41	22	E-023
21	00B	SB0008	調理具	甕	—	残4.4	—	—	—	指押え	指押え+ナデ	不明			E-024
22	00B	SB0008	調理具	甕	—	残4.1	(18.2)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体にやや摩滅		E-025
23	00B	SB0019	供膳具	杯	杯身	残3.1	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	22	E-026
24	00B	SB0019	その他	蓋	杯蓋	残2.8	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17、外面自然釉かかる		E-027
25	00B	SB0019	調理具	甕	—	残3.8	(24.0)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明			E-028

第77図 古代の遺物① (1:4)



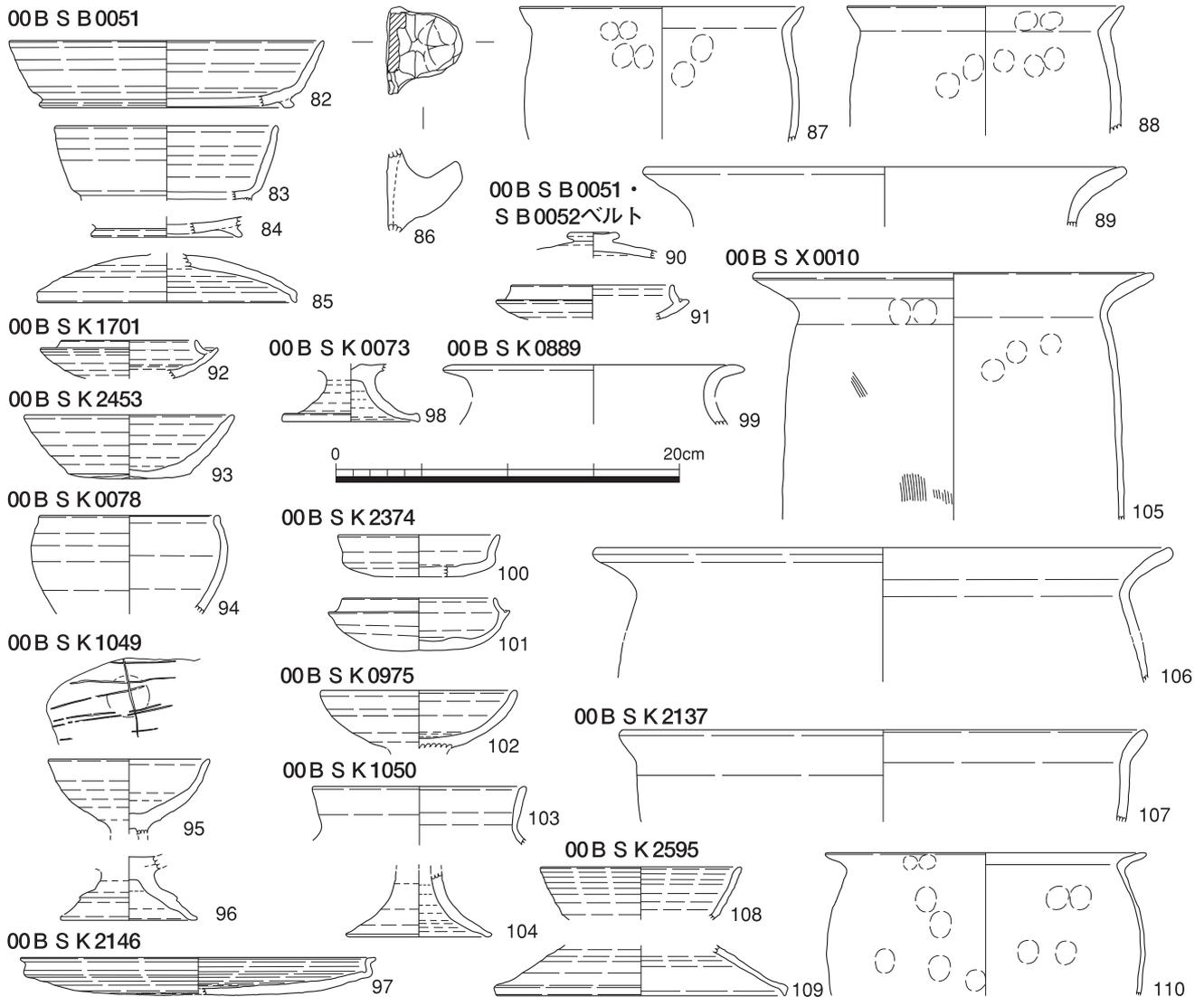
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
26	00B	SB0015	供膳具	杯	有台杯	残3.4	(16.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17か		E-029
27	00B	SB0024	供膳具	杯	杯身	2.4	8.6	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	22	E-030
28	00B	SB0013	供膳具	杯	有台杯	残3.9	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17か		E-031
29	00B	SB0042	その他	蓋	摘み蓋	残2.1	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径 (3.3) cm		E-032
30	00B	SK1536	供膳具	蓋	杯蓋	3.3	(10.2)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	23	E-033
31	00B	SK1530	供膳具	杯	無台杯	3.7	9.2	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	H-50かI-17		E-034
32	00B	SB0027	供膳具	高杯	—	残5.3	—	(8.0)	—	ナデ	ナデ	猿投		23	E-035
33	00B	SK1531	供膳具	高杯	—	10.9	(13.7)	—	(10.1)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投か	H-50以前か	23	E-036
34	00B	SB0032	供膳具	杯	無台杯	4.2	(10.6)	—	(3.0)	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-037
35	00B	SB0032	供膳具	鉢	—	残3.6	(15.0)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-038
36	00B	SB0032	貯蔵具	甔	—	残3.4	(10.0)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	H-50かI-17		E-039
37	00B	SB0031	供膳具	杯	有台杯	残4.5	—	—	(10.3)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	22	E-040
38	00B	SB0031	貯蔵具	瓶	平瓶	残5.2	(7.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17、自然釉かかる		E-041
39	00B	SB0031	調理具	甔	—	残13.0	—	—	(11.5)	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅		E-042
40	00B	SB0033	調理具	甔	—	残2.1	(25.8)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅		E-043
41	00B	SB0037	供膳具	杯	有台杯	—	(13.7)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-044
42	00B	SB0037	供膳具	高杯	—	残3.4	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17か、白色粘土混入か		E-045
43	00B	SB0037	調理具	甔	—	残2.9	—	—	—	指押え	指押え+ナデ	不明	全体に摩滅、外面把手下側黒く変色		E-046
44	00B	SB0037	調理具	甔	—	残3.3	(22.7)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-047
45	00B	SB0049	その他	その他	その他	残2.0	(9.0)	—	—	ナデ	ナデ	不明	器種不明、内面自然釉かかる		E-048
46	00B	SB0047	供膳具	高杯	—	残3.1	(9.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投			E-049
47	00B	SB0036	供膳具	杯	有台杯	3.8	(15.6)	—	(11.1)	ナデ	ナデ	猿投	I-17	22	E-050
48	00B	SB0036	供膳具	鉢	—	残4.5	(15.0)	(15.6)	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41か	22	E-051
49	00B	SB0036	調理具	甔	—	残1.8	(29.9)	—	—	ナデ	ナデ	不明			E-052
50	00B	SB0050	その他	蓋	摘み蓋	残1.6	(13.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17~C-2		E-053
51	00B	SB0050	供膳具	杯	無台杯	残3.5	(8.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投			E-054
52	00B	SB0050	調理具	甔	—	残6.3	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅		E-055
53	00B	SB0046	調理具	甔	—	残5.5	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体にやや摩滅	23	E-056

第78図 古代の遺物② (1:4)



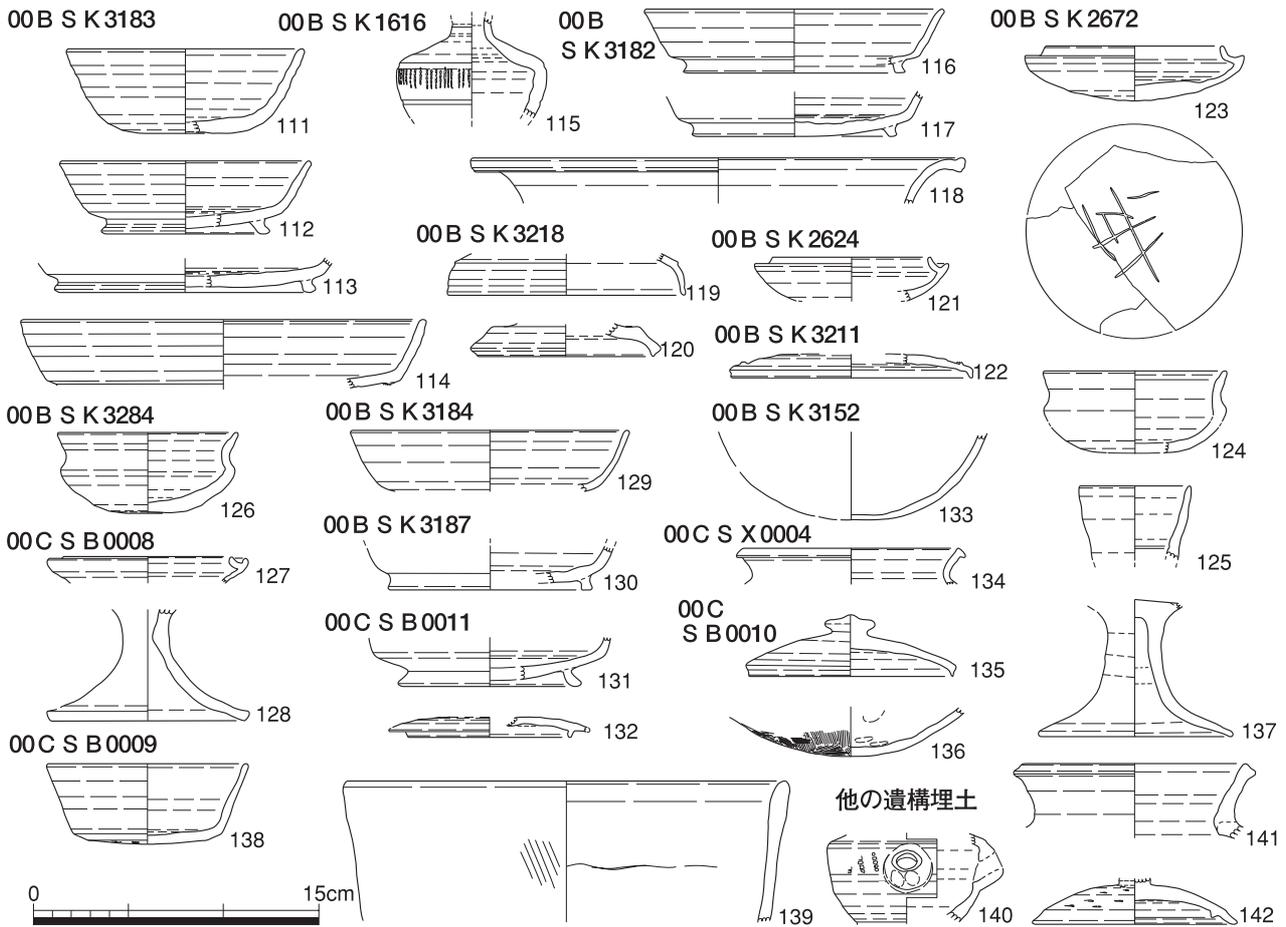
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
54	00B	SB0039	供膳具	杯	有台杯	残3.2	(15.5)	—	—	ナデ	ナデ	猿投			E-057
55	00B	SB0039	貯蔵具	甗	—	10.1	9.6	—	5.0	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投か	NN-32か、内外面降灰付着	23	E-058
56	00B	SB0039	供膳具	杯	無台杯	4.3	(12.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41、底部銘記号	22	E-059
57	00B	SB0039	供膳具	高杯	—	残1.7	(8.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	内面自然釉かかる		E-060
58	00B	SB0039	その他	蓋	返り蓋	残1.1	(11.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-061
59	00B	SB0039	供膳具	杯	杯身	残1.7	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-062
60	00B	SB0039	調理具	甗	—	残2.8	(27.3)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-063
61	00B	SB0039	調理具	甗	—	残2.9	(22.4)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-064
62	00B	SK3470	供膳具	杯	有台杯	4.0	(14.9)	—	10.9	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17~C-2	22	E-065
63	00B	SK2518	調理具	甗	—	残4.9	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	内外面に煤付着、全体に摩滅	23	E-066
64	00B	SK3471	調理具	鉢	捏ね鉢	残11.2	—	—	8.5	自然釉	ナデ	猿投	8世紀代、底部に穴(44ヶ所)あり	23	E-067
65	00B	SB0041	供膳具	杯	有台杯	4.2	(14.8)	—	(10.2)	ナデ	ナデ	猿投	I-17か	22	E-068
66	00B	SB0041	供膳具	杯	有台杯	4.1	(16.2)	—	(12.7)	ナデ	ナデ	猿投	I-17か		E-069
67	00B	SB0041	その他	蓋	摘み蓋	残2.2	(14.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41	23	E-070
68	00B	SB0041	その他	蓋	摘み蓋	残1.8	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径(2.6)cm	23	E-071
69	00B	SB0041	調理具	鉢	—	残7.0	(21.8)	(24.8)	—	ナデ	ナデ	猿投	黄土を塗布、全体にやや摩滅	22	E-072
70	00B	SB0041	調理具	甗	—	残3.5	(27.1)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-073
71	00B	SB0041	調理具	甗	—	残5.0	(16.8)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅		E-074
72	00B	SB0045	供膳具	杯	有台杯	3.1	(14.8)	—	(9.7)	ナデ	ナデ	猿投	I-41	22	E-075
73	00B	SB0045	供膳具	杯	有台杯	3.5	(15.0)	—	(9.5)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-41	22	E-076
74	00B	SB0045	その他	蓋	摘み蓋か	残1.4	(14.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41か		E-077
75	00B	SB0045	その他	蓋	—	3.2	11.6	—	—	—	—	不明		23	E-078
76	00B	SB0045	調理具	甗	—	残5.7	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	23	E-079
77	00B	SB0057	調理具	甗	—	残1.9	—	—	(5.0)	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅、外面煤付着		E-080
78	00B	SB0057	供膳具	杯	無台杯	残3.3	(12.1)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17		E-081
79	00B	SB0057	供膳具	杯	無台杯	残4.0	(11.3)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	22	E-082
80	00B	SB0057	その他	蓋	—	5.9	—	—	—	—	指押え	不明		23	E-083
81	00B	SB0057	供膳具	鉢	捏ね鉢	残13.1	(19.9)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	8世紀代	23	E-084

第79図 古代の遺物③ (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				
82	00B	SB0051	供膳具	杯	有台杯	4.0	(18.2)	—	(14.4)	ナデ	ナデ	猿投	NN-32か	E-085
83	00B	SB0051	供膳具	杯	有台杯	残4.4	(12.7)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	NN-32か	E-086
84	00B	SB0051	供膳具	杯か	有台杯か	残1.2	—	—	(8.6)	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅	E-087
85	00B	SB0051	供膳具	蓋	摘み蓋か	残2.9	(15.1)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-41、剥離痕、降灰付着	23 E-088
86	00B	SB0051	調理具	甌	—	残4.9	—	—	—	指押え	指押え+ナデ	不明	外面把手下側黒く変色	E-089
87	00B	SB0051	調理具	甕	—	残7.8	(17.6)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	E-090
88	00B	SB0051	調理具	甕	—	残7.6	(16.0)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅	E-091
89	00B	SB0051	調理具	甕	—	残3.5	(27.8)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体にやや摩滅	E-092
90	00B	SB0051	その他	蓋	摘み蓋	残1.5	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17か、摘み径3.0cm	23 E-093
91	00B	SK01701	供膳具	杯	杯身	残2.0	(9.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	E-094
92	00B	SK1701	供膳具	杯	杯身	残2.3	(7.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		22 E-095
93	00B	SK2453	供膳具	杯	無台杯	3.7	(12.2)	—	(7.1)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	NN-32、底部回転糸切り痕	22 E-096
94	00B	SK0078	供膳具	椀か	—	残5.8	(10.4)	(11.5)	—	ナデ	ナデ	猿投	H-50~I-17	22 E-097
95	00B	SK1049	供膳具	高杯	—	残4.4	(9.4)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	23 E-098
96	00B	SK1049	供膳具	高杯	—	残3.8	—	—	(8.0)	ナデ	ナデ	猿投	H-50かI-17	E-099
97	00B	SK2146	供膳具	盤	無台盤	残2.3	(20.5)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	NN-32、自然釉かかる	E-100
98	00B	SK0073	供膳具	高杯	—	残3.4	—	—	(7.9)	ナデ	ナデ	猿投	I-17	23 E-101
99	00B	SK0889	調理具	甕	—	残3.5	(17.6)	—	—	ナデか	ナデか	不明		E-102
100	00B	SK2374	供膳具	鉢か	—	2.5	(9.3)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	E-103
101	00B	SK2374	供膳具	杯	杯身	3.1	8.8	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	22 E-104
102	00B	SK0975	供膳具	高杯	—	残3.4	(11.3)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17	23 E-105
103	00B	SK1050	貯蔵具	壺	—	残3.4	(12.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17、黄土を塗布、内外面自然釉かかる	E-106
104	00B	SK1050	供膳具	高杯	—	残3.9	—	—	(8.1)	ナデ	ナデ	猿投	I-41	E-107
105	00B	SX0010	調理具	甕	—	残14.5	(23.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	全体に摩滅	24 E-108
106	00B	SX0010	調理具	甕	—	残7.9	(33.4)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅	E-109
107	00B	SK2137	調理具	甕	—	残5.4	(30.6)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅	E-110
108	00B	SK2595	供膳具	杯	有台杯	残3.1	(11.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		22 E-111
109	00B	SK2595	その他	蓋	—	残3.0	(16.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	外面自然釉かかる	E-112
110	00B	SK2595	調理具	甕	—	残8.4	(18.6)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	E-113

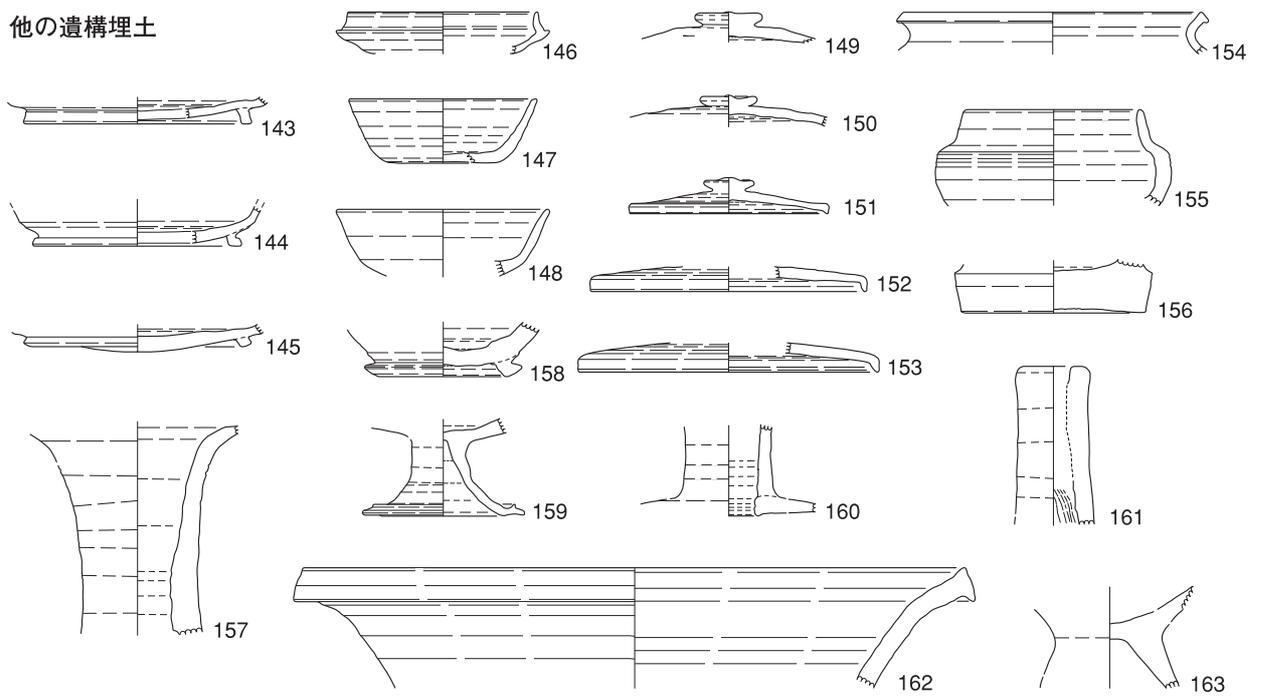
第80図 古代の遺物④ (1:4)



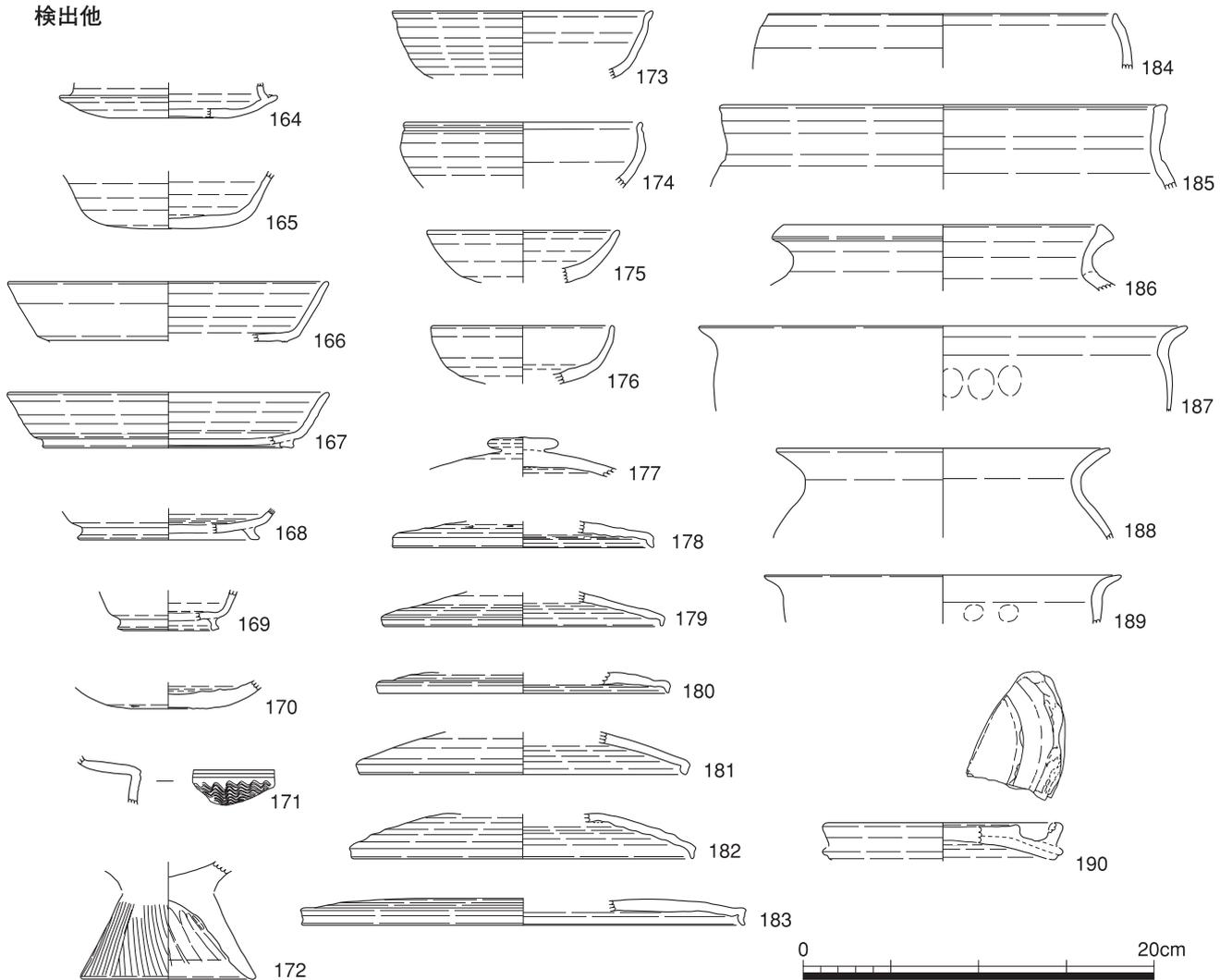
遺物 番号	調査区	調査地点	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
111	00B	SK3183	供膳具	杯	無台杯	4.5	(12.4)	—	(4.6)	ナデ	ナデ	猿投	I-41		E-114
112	00B	SK3183	供膳具	杯	有台杯	3.9	(13.0)	—	(8.4)	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41		E-115
113	00B	SK3183	供膳具	杯	有台杯	残1.5	—	—	(13.2)	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41		E-116
114	00B	SK3183	供膳具	杯	有台杯	残3.6	(21.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41、高台部欠損		E-117
115	00B	SK1616	貯蔵具	甗	—	残5.3	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41か、櫛による刻み目	23	E-118
116	00B	SK3182	供膳具	杯	有台杯	3.4	(15.4)	—	(11.5)	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-119
117	00B	SK3182	供膳具	杯	有台杯	残2.4	—	—	(10.8)	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	C-2か	22	E-120
118	00B	SK3182	貯蔵具	甗	—	残2.4	(25.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	5世紀代か		E-121
119	00B	SK3218	その他	その他	杯蓋か	残2.2	(12.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	H-50		E-122
120	00B	SK3218	貯蔵具	高坏か	—	残1.7	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	H-50~I-17、自然釉かかる		E-123
121	00B	SK2624	供膳具	杯	杯身	残2.3	(8.3)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17、外面降灰付着		E-124
122	00B	SK2624	供膳具	蓋	摘み蓋か	残1.3	(12.6)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	剥離痕、一部融着		E-125
123	00B	SK2672	供膳具	杯	杯身	2.9	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17、外面降灰付着、底部窰記号	22	E-126
124	00B	SK2672	供膳具	鉢	—	残4.4	(9.5)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-127
125	00B	SK2672	貯蔵具	瓶	平瓶	残4.0	(5.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	23	E-128
126	00B	SK3284	供膳具	鉢	—	4.3	(9.4)	—	(5.6)	ナデ	ナデ+ケズリか	猿投	I-17	22	E-129
127	00C	SB0008	供膳具	杯	杯身	残1.4	(8.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-130
128	00C	SB0008	供膳具	高杯	—	残5.9	10.2	—	—	—	—	猿投	I-17、焼成不良か、調整不明瞭	23	E-131
129	00B	SK3184	供膳具	杯	有台杯	残3.3	(14.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-132
130	00B	SK3187	供膳具	杯	有台杯	残2.3	—	—	(10.6)	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41		E-133
131	00C	SB0011	供膳具	杯	有台杯	残2.6	—	—	(9.2)	ナデか	ナデか	猿投	I-17、全体に摩滅		E-134
132	00C	SB0011	その他	蓋	返り蓋	残1.1	(8.0)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-135
133	00B	SK3152	調理具	甗	—	残4.7	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅、外面煤付着	23	E-136
134	00C	SX0004	貯蔵具	壺	短頸壺	残1.9	(11.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17		E-137
135	00C	SB0010	その他	蓋	摘み蓋	3.3	10.8	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	I-17~I-41、摘み径2.6cm	23	E-138
136	00C	SB0010	調理具	甗	—	残2.7	—	—	—	指押え+ナデ	ナデ	不明	外面煤付着	23	E-139
137	00C	SB0010	供膳具	高杯	—	残7.3	10.1	—	—	—	—	猿投	焼成不良か、調整不明瞭	23	E-140
138	00C	SB0009	供膳具	杯	無台杯	4.3	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ+ケズリ	猿投	C-2	22	E-141
139	00C	SB0009	調理具	甗か	—	残7.5	(23.1)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	23	E-142
140	00A	SX0006	貯蔵具	甗	—	残4.8	—	—	—	ナデ	指押え+ナデ	猿投	I-17、櫛による刻み目		E-143
141	00A	SK0094	貯蔵具	瓶	横瓶か	残4.0	(11.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	23	E-144
142	00A	SK0288	その他	蓋	返り蓋	残2.4	(10.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	23	E-145

第81図 古代の遺物⑤ (1:4)

他の遺構埋土



検出他



第 82 図 古代の遺物⑥ (1 : 4)

遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
143	00B	SD0039	供膳具	杯	有台杯	残1.2	—	—	(11.9)	ナデ	ナデ+ナズリ	猿投	I-17	E-146
144	00B	SD0039	供膳具	杯	有台杯	残2.1	—	—	(10.9)	ナデ	ナデ	猿投	I-41~C-2	E-147
145	00B	SD0028	供膳具	杯	有台杯	残1.5	—	—	(10.9)	ナデ	ナデ+ナズリ	猿投	I-41~C-2	22 E-148
146	00B	SK0513	供膳具	杯	杯身	残2.2	(9.9)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	E-149
147	00B	SD0024	供膳具	杯	無台杯	3.4	(9.8)	—	(6.6)	ナデ	ナデ	猿投	I-17	E-150
148	00B	SK3022	供膳具	杯	無台杯	残3.6	(11.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	E-151
149	00B	SD0045	その他	蓋	摘み蓋か	残1.6	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径 (3.5) cm	23 E-152
150	00B	SD0003	その他	蓋	摘み蓋か	残1.7	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径 (3.0) cm	23 E-153
151	98B	SD0014	その他	蓋	摘み蓋	1.9	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41前後、摘み径 (26) cm、外面自然釉かかるがとんでいる	23 E-154
152	00B	SD0049	その他	蓋	摘み蓋か	残1.3	(14.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17~C-2	E-155
153	00B	SD0039	その他	蓋	摘み蓋か	残1.6	(15.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-41か	E-156
154	00B	SD0043	貯蔵具	壺	—	残2.2	(15.6)	—	—	ナデ	ナデ	不明	自然釉かかる	E-157
155	98A	SD0012	供膳具	鉢	—	残5.1	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	外面自然釉かかる	22 E-158
156	98B	SD0006	調理具	鉢	捏ね鉢	残2.8	—	—	9.6	ナデ	ナデ	猿投	NN-32か、底部回転糸切り痕	23 E-159
157	98B	SD0014	貯蔵具	瓶	長頸瓶か	残11.1	—	—	—	ナデ	ナデ	不明	一部自然釉かかる	23 E-160
158	98B	SK0120	貯蔵具	瓶	—	残2.9	—	—	6.7	ナデ	ナデ	不明		23 E-161
159	98B	SD0014	供膳具	高杯	—	残5.1	—	—	8.4	ナデ	ナデ	猿投	5世紀代、自然釉かかる	23 E-162
160	98B	SK0120	貯蔵具	瓶	平瓶	残4.8	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	自然釉かかる	23 E-163
161	98C	SD0009	その他	その他	その他	残8.4	3.2	—	—	ナデか	ナデ	猿投	全体に摩滅	E-164
162	98C	SK0450	貯蔵具	甕	—	残6.4	(34.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	8世紀後半以降、自然釉かかる	E-165
163	98C	SD0009	貯蔵具	台付甕	—	残5.4	—	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅	E-166
164	00B	検出	供膳具	杯	杯身	残2.0	—	—	(7.0)	ナデ	ナデ	猿投	I-17、口縁部摩滅	E-167
165	00B	検出	供膳具	杯	無台杯	残3.3	—	—	(6.8)	ナデ	ナデ	猿投	I-41	E-168
166	00B	検出	供膳具	杯	有台杯	残3.5	(18.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-169
167	00B	トレンチ	供膳具	杯	有台杯	3.2	(18.2)	—	(14.2)	ナデ	ナデ	猿投	8世紀後半か	E-170
168	00B	検出	供膳具	杯	有台杯	残1.8	—	—	(10.2)	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41	E-171
169	00B	検出	貯蔵具	壺か	—	残2.3	—	—	(5.2)	ナデ	ナデ	猿投	C-2	E-172
170	00B	検出	貯蔵具	壺	—	残1.5	—	—	(4.8)	ナデ	ナデ+ナズリ	猿投		E-173
171	00B	軽トレンチ	貯蔵具	壺	—	残2.7	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	自然釉かかる、櫛による波状文	E-174
172	98A	表土	貯蔵具	台付甕	—	残6.7	—	—	(9.8)	ナデ	ナデ	不明		E-175
173	00B	検出	供膳具	鉢か	—	残3.9	(14.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-176
174	00B	検出	供膳具	鉢か	—	残3.8	(13.4)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-177
175	00B	検出	供膳具	高杯か	—	残3.0	(10.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-178
176	00B	検出	供膳具	高杯か	—	残3.4	(10.3)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-179
177	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋	残2.3	—	—	—	ナデ	ナデ	猿投	摘み径 (4.0) cm	23 E-180
178	98A	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残1.5	(14.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-181
179	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残2.0	(16.0)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-182
180	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残1.2	(16.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-183
181	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残2.4	(18.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-184
182	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残2.6	(19.3)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-185
183	00B	検出	その他	蓋	摘み蓋か	残1.5	(25.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		E-186
184	00B	検出	供膳具	鉢	鉄鉢	残3.1	(19.8)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17	E-187
185	00A	表土	供膳具	鉢か	—	残4.8	(25.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	I-17~I-41	E-188
186	00B	検出	貯蔵具	壺	短頸壺	残3.8	(18.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投		23 E-189
187	00B	検出	調理具	甕	—	残4.9	(27.8)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明		E-190
188	00B	検出	調理具	甕	—	残5.1	(19.0)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅、一部器壁剥離	E-191
189	00B	検出	調理具	甕	—	残2.8	(20.2)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体に摩滅	E-192
190	98Fa	検出	その他	陶硯	円面硯	残2.1	(13.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	細長い透かしが入る	23 E-193

参考文献

榎崎彰一 「猿投窯の編年について」 『愛知県古窯跡群分布調査報告書 (Ⅲ) 尾北地区・三河地区』

愛知県教育委員会 1983

### 3. 製塩土器

豊田市内の神明遺跡や梅坪遺跡などで、製塩土器の出土が知られている。内陸部である豊田市で製塩土器を製作することはないので、海岸部から矢作川を通じて運ばれてきたものであることは明らかである。

本遺跡においても、製塩土器の脚部が、竪穴住居などの遺構や検出段階、後世の遺構の埋土の中から出土している。遺構から出土したものの23点、それ以外が11点、計34点が確認されている。34点中29点は00B区から出土している。今回、細かな分類は実施せず数を数えるに留まった。出土した全ての製塩土器の脚部は、棒状脚の先端が尖るものばかりで、円筒脚は確認されていない。棒状脚でも大型から小型までの資料が見受けられるが、全体が想定できるのは数点しか出土していないので不明である。破片の中に器壁が薄手で赤い破片があり、製塩土器の杯部である可能性が高いものもあったが不明な点も多く、今回はそれらの破片は土師器の甕としてカウントしている。

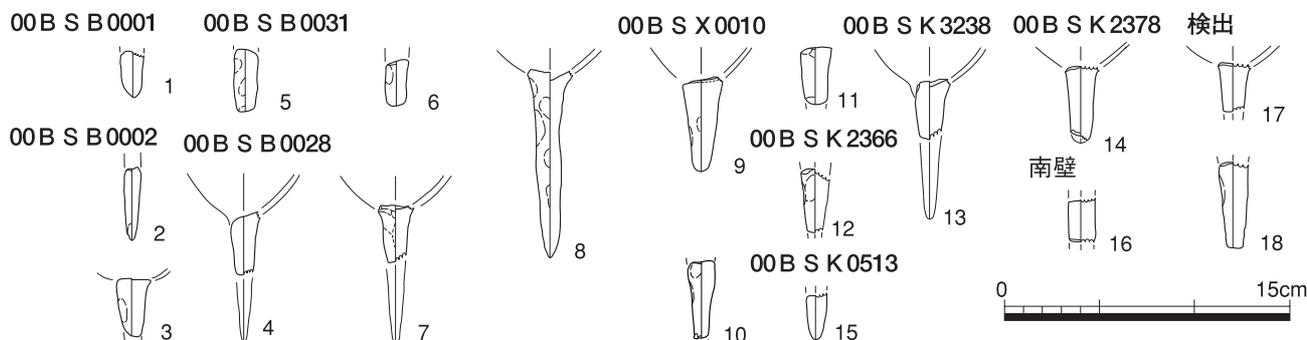
#### 参考文献

森 泰通 「豊田市域出土の製塩土器について」『豊田市埋蔵文化財調査報告書 第6集 神明遺跡』

豊田市教育委員会 1996

福岡晃彦他 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第20集 松崎遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

1991



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm・g)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	長さ	幅	重さ	内面	外面				
1	00B	SB0001	その他	製塩土器	脚部	残2.5	残1.2	3.1	—	—	不明			E-194
2	00B	SB0002	その他	製塩土器	脚部	残3.9	残0.9	2.2	—	—	不明			24 E-195
3	00B	SB0002	その他	製塩土器	脚部	残3.1	残1.8	8.5	—	—	不明			24 E-196
4	00B	SB0028	その他	製塩土器	脚部	残3.4	残1.4	4.9	—	—	不明			24 E-197
5	00B	SB0031	その他	製塩土器	脚部	残3.3	残1.3	4.3	—	—	不明			E-198
6	00B	SB0031	その他	製塩土器	脚部	残2.5	残1.2	3.5	—	—	不明			24 E-199
7	00B	SB0031	その他	製塩土器	脚部	残3.1	残1.8	7.3	—	—	不明			24 E-200
8	00B	SB0031	その他	製塩土器	脚部	残10.0	残2.4	21.8	—	—	不明			24 E-201
9	00B	SX0010	その他	製塩土器	脚部	残5.1	残2.1	13.1	—	—	不明			24 E-202
10	00B	SX0010	その他	製塩土器	脚部	残4.1	残1.4	6.3	—	—	不明			24 E-203
11	00B	SX0010	その他	製塩土器	脚部	残3.1	残1.6	6.3	—	—	不明			E-204
12	00B	SK2366	その他	製塩土器	脚部	残3.4	残1.5	5.3	—	—	不明			E-205
13	00B	SK3238	その他	製塩土器	脚部	残3.3	残1.5	8.2	—	—	不明			24 E-206
14	00B	SK2378	その他	製塩土器	脚部	残4.0	残1.8	8.9	—	—	不明			24 E-207
15	00B	SK0513	その他	製塩土器	脚部	残2.5	残1.1	2.2	—	—	不明			24 E-208
16	00A	南壁	その他	製塩土器	脚部	残2.4	残1.4	5.6	—	—	不明			E-209
17	00B	検出	その他	製塩土器	脚部	残2.6	残1.7	5.7	—	—	不明			E-210
18	00B	検出	その他	製塩土器	脚部	残4.6	残1.5	10.1	—	—	不明			E-211

第83図 製塩土器 (1:4)

#### 4. 土錘

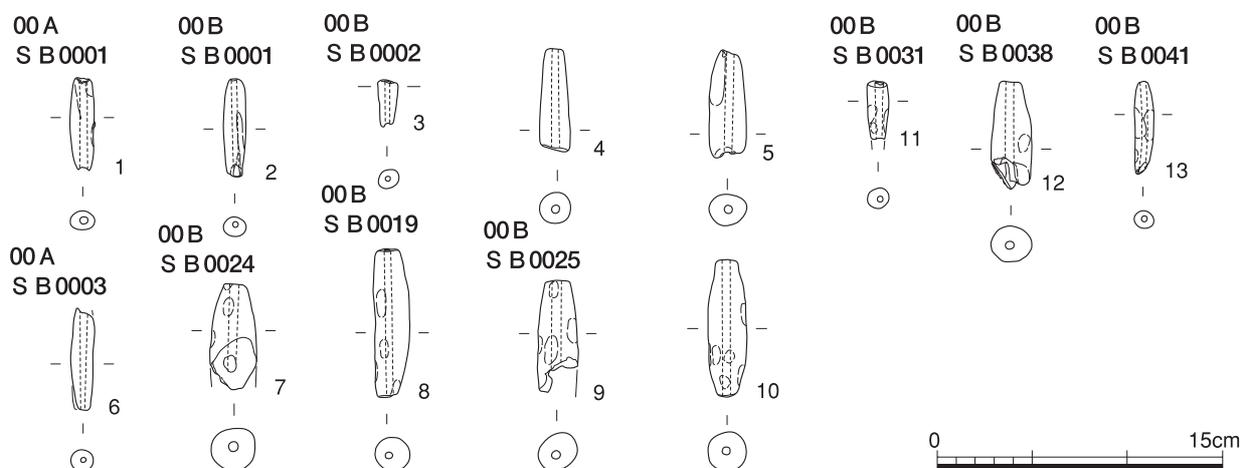
本遺跡で出土した土錘は、完形品及び破片を含め、堅穴住居などの遺構からのものが61点、検出段階のものが10点の計71点で、全て土師質製品である。遺構といっても全て古代の遺構から出土したわけではなく、堅穴住居などの古代の遺構から出土したものが51点、それ以外の10点は中世の土坑や戦国時代以降の溝の埋土などから出土しており、全てが古代の土錘であるとは言い切れない。71点中64点は00B区から出土しており、製塩土器と同様の傾向を示している。今回、細かな分類を行わず数を確認した程度で留めた。

本遺跡から出土した土錘を見てみると、管状型の土錘が殆どで、細長いタイプと中型のタイプの2種類が見られる。松崎遺跡などで確認されている大型タイプの管状型のものや球状・紡錘型・有溝型の土錘は出土していない。

これらのことから、この地に住む人々が釣りや魚網を利用して漁撈活動をしていたことを伺うことができる。

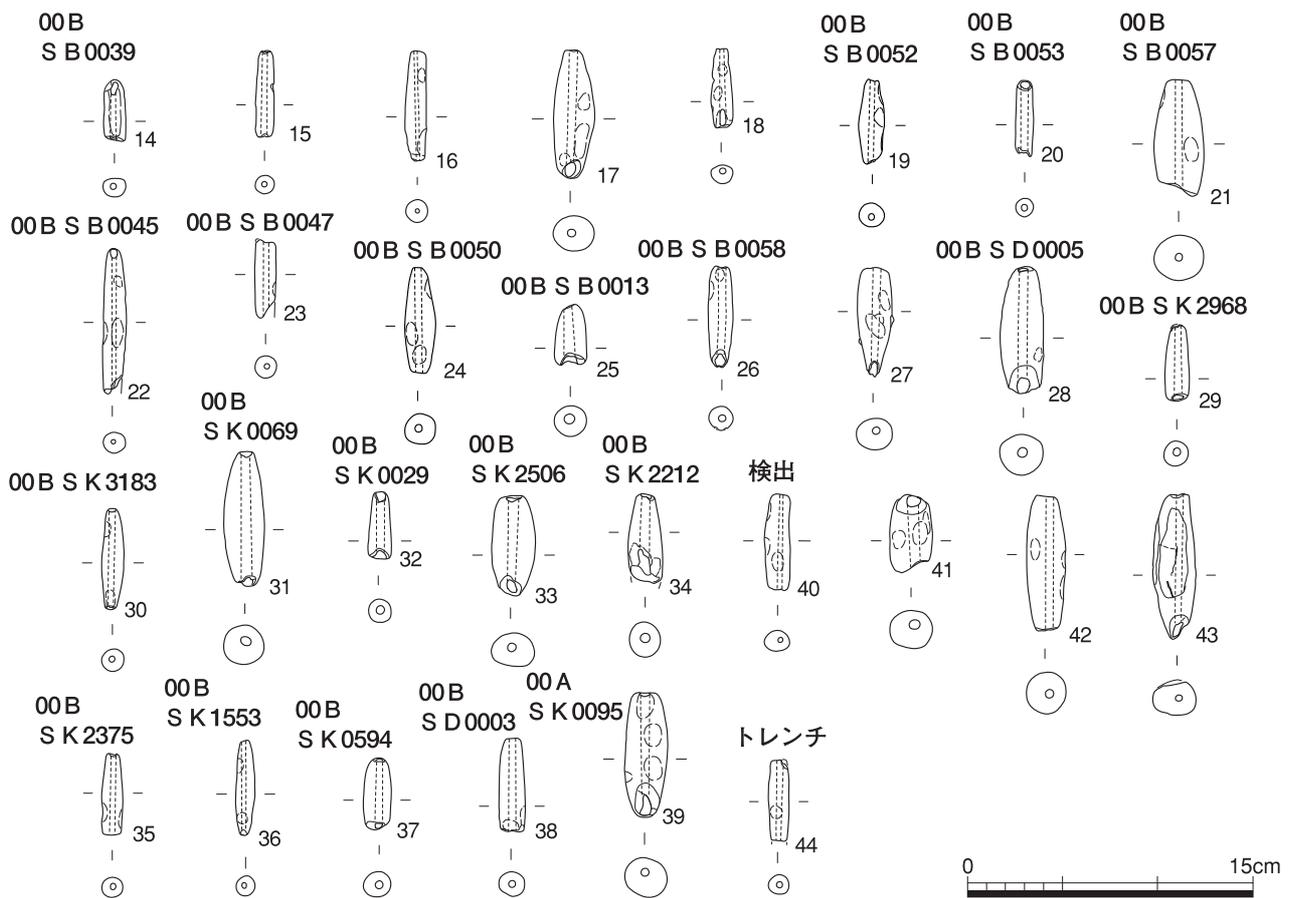
#### 参考文献

福岡見彦他 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第20集 松崎遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター  
1991



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種			法量 (cm・g)				釉薬・調整など		産地	備 考	PL	登録 番号
		用途	器種	器形	長さ	幅	孔径	重さ	内面	外面				
1	00A SB0001	その他	土錘	—	5.0	1.3	0.4	5.4	—	—	不明		24	E-212
2	00B SB0001	その他	土錘	—	5.2	1.2	0.3	6.1	—	—	不明		24	E-213
3	00B SB0002	その他	土錘	—	残2.6	1.1	0.3	2.0	—	—	不明			E-214
4	00B SB0002	その他	土錘	—	5.5	1.6	0.5	12.6	—	—	不明		24	E-215
5	00B SB0002	その他	土錘	—	5.8	2.0	0.5	19.4	—	—	不明		24	E-216
6	00A SB0003	その他	土錘	—	5.5	1.2	0.4	6.4	—	—	不明	全体に黒く変色	24	E-217
7	00B SB0024	その他	土錘	—	残5.6	残2.5	0.5	24.5	—	—	不明			E-218
8	00B SB0019	その他	土錘	—	7.9	1.9	0.4	27.1	—	—	不明		24	E-219
9	00B SB0025	その他	土錘	—	残6.0	2.1	0.5	20.7	—	—	不明			E-220
10	00B SB0025	その他	土錘	—	7.3	2.1	0.5	25.5	—	—	不明		24	E-221
11	00B SB0031	その他	土錘	—	残3.1	1.2	0.4	4.0	—	—	不明		24	E-222
12	00B SB0038	その他	土錘	—	残5.8	2.2	0.5	19.7	—	—	不明		24	E-223
13	00B SB0041	その他	土錘	—	4.9	1.1	0.3	3.9	—	—	不明		24	E-224

第84図 土錘① (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm・g)				釉薬・調整など		産地	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	長さ	幅	孔径	重さ	内面	外面				
14	00B	SB0039	その他	土錘	—	3.3	1.2	0.3	3.6	—	—	不明			E-225
15	00B	SB0039	その他	土錘	—	4.6	1.0	0.3	3.9	—	—	不明		24	E-226
16	00B	SB0039	その他	土錘	—	5.9	1.2	0.2	6.8	—	—	不明		24	E-227
17	00B	SB0039	その他	土錘	—	5.9	2.2	0.4	22.9	—	—	不明		24	E-228
18	00B	SB0039	その他	土錘	—	4.2	1.2	0.4	3.7	—	—	不明		24	E-229
19	00B	SB0052	その他	土錘	—	4.5	1.4	0.3	6.3	—	—	不明	全体に黒く変色	24	E-230
20	00B	SB0053	その他	土錘	—	残4.0	1.0	0.4	3.3	—	—	不明		24	E-231
21	00B	SB0057	その他	土錘	—	6.2	2.6	0.4	38.0	—	—	不明	一部黒く変色	24	E-232
22	00B	SB0045	その他	土錘	—	残7.7	1.2	0.3	9.1	—	—	不明		24	E-233
23	00B	SB0047	その他	土錘	—	残4.2	1.2	0.3	5.7	—	—	不明		24	E-234
24	00B	SB0050	その他	土錘	—	5.1	1.6	0.4	11.7	—	—	不明		24	E-235
25	00B	SB0013	その他	土錘	—	残3.3	1.7	0.6	7.1	—	—	不明			E-236
26	00B	SB0058	その他	土錘	—	5.4	1.3	0.4	7.8	—	—	不明		24	E-237
27	00B	SB0058	その他	土錘	—	残5.8	1.8	0.4	14.8	—	—	不明		24	E-238
28	00B	SD0005	その他	土錘	—	6.8	2.3	0.5	29.5	—	—	不明		24	E-239
29	00B	SK2968	その他	土錘	—	4.1	1.3	0.4	5.9	—	—	不明		24	E-240
30	00B	SK3183	その他	土錘	—	5.4	1.2	0.3	5.8	—	—	不明			E-241
31	00B	SK0069	その他	土錘	—	7.2	2.2	0.6	25.9	—	—	不明		24	E-242
32	00B	SK0029	その他	土錘	—	3.6	1.3	0.5	4.2	—	—	不明			E-243
33	00B	SK2506	その他	土錘	—	5.3	2.3	0.5	19.1	—	—	不明	下方端部欠損か	24	E-244
34	00B	SK2212	その他	土錘	—	残4.8	1.8	0.5	11.8	—	—	不明			E-245
35	00B	SK2375	その他	土錘	—	4.3	1.1	0.3	5.1	—	—	不明		24	E-246
36	00B	SK1553	その他	土錘	—	5.1	1.0	0.3	4.1	—	—	不明		24	E-247
37	00C	SK0594	その他	土錘	—	3.8	1.5	0.4	6.7	—	—	不明		24	E-248
38	00B	SD0003	その他	土錘	—	残5.0	1.4	0.4	9.3	—	—	不明		24	E-249
39	00A	SK0095	その他	土錘	—	6.6	2.3	0.5	28.1	—	—	不明		24	E-250
40	00B	検出	その他	土錘	—	5.2	1.4	0.3	8.4	—	—	不明		24	E-251
41	00B	検出	その他	土錘	—	4.2	2.3	0.6	19.4	—	—	不明		24	E-252
42	00B	検出	その他	土錘	—	7.2	2.0	0.4	32.3	—	—	不明		24	E-253
43	98B	検出	その他	土錘	—	7.7	2.3	0.4	28.9	—	—	不明		24	E-254
44	00B	南壁トレンチ	その他	土錘	—	残4.3	1.1	0.4	4.8	—	—	不明		24	E-255

第85図 土錘② (1:4)

# 第3節 中世の遺物

## 1. 概要

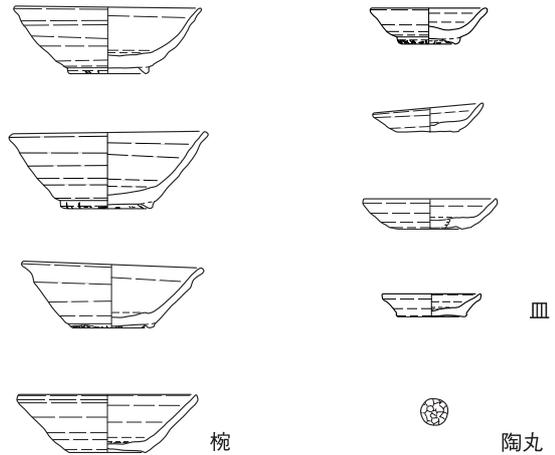
中世の竪穴状遺構や溝、土坑墓から、山茶碗類などの遺物が出土しているが、細かな破片が多く図化できる遺物が少なかったのが残念である。遺物の時期は、山茶碗類の編年の4型式から9型式までと思われる。大まかな用途別の分類は次の通りである。なお個体数は、口縁部計測法による12分の1を基準にして数えてある（本章第4節の統計方法を参照）。

- 山茶碗類 供膳具 碗・皿（小碗）
- 調理具 鉢
- その他 陶丸・その他
- 施釉陶器 貯蔵具 壺
- 焼締陶器 貯蔵具 甕・甕
- 輸入磁器 供膳具 碗
- 土師器 調理具 鍋
- その他

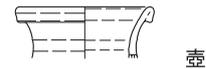
ここでカウントしたのは、完全に中世と考えられる遺構から出土した遺物と検出などで出土したもののみである。

大まかにカウントした数を示すと、山茶碗類が総破片数759点、接合前口縁破片数220点、個体数27.25個体であった。このうち供膳具が99.4%を占め、中でも碗が81.3%となっている。それ以外に、その他に分類した陶丸が2点のみ出土している。施釉陶器の壺は、総破片数11点、接合前口縁破片数1点、個体数0.33個体である。焼締陶器は、甕類が破片で8点出土している。輸入磁器も碗の底部と思われる破片が2点出土している程度である。また、土師器は総破片数19点、接合前口縁破片数4点、個体数0.33個体である。その大部分は鍋で、口縁部で確認できたのは伊勢型鍋のみで、破片ではくの字鍋と思われるものも見られたが不明な点が多い。

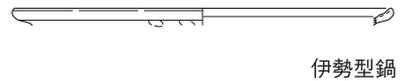
### 山茶碗類



### 施釉陶器



### 土師器

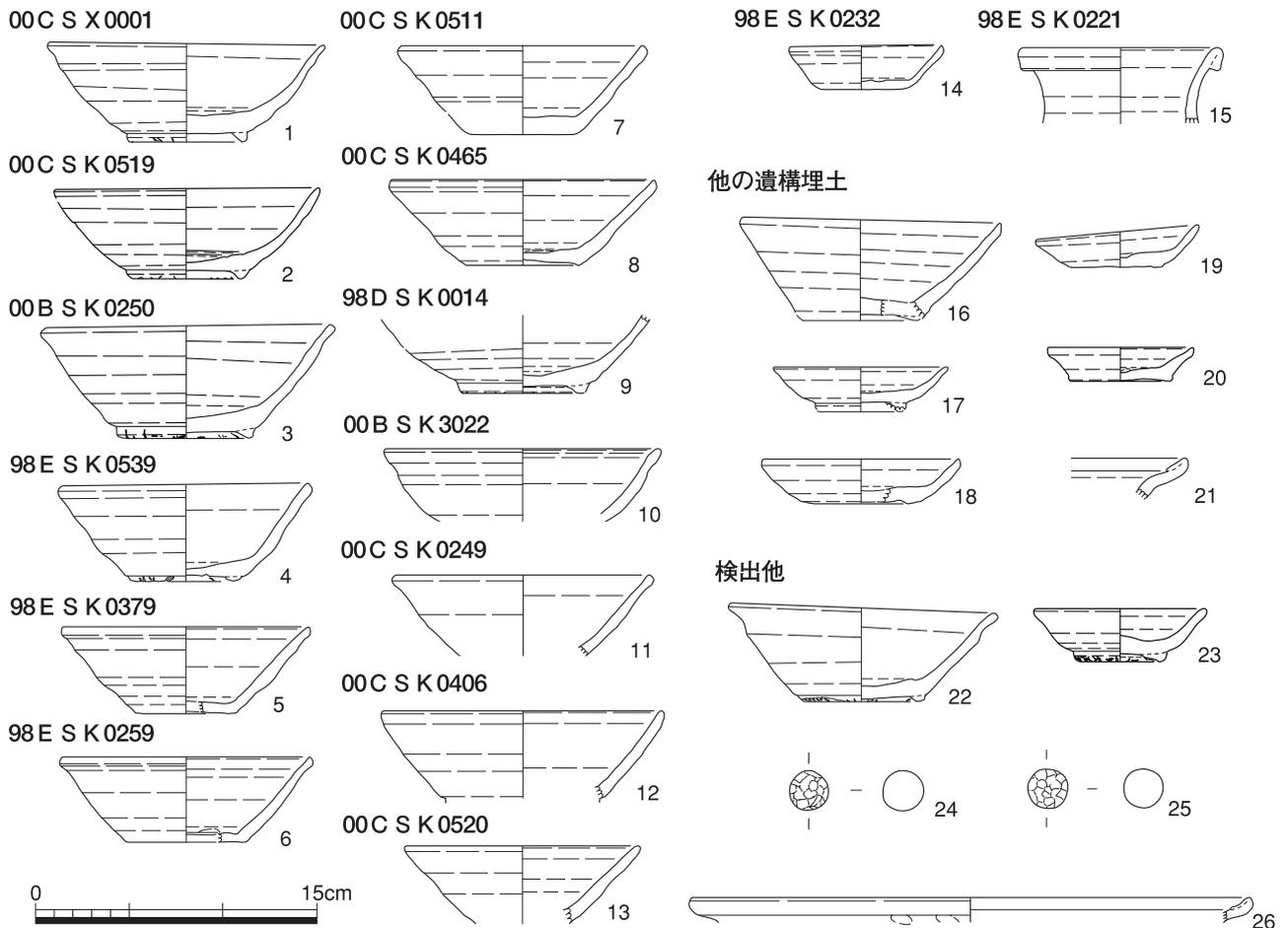


第86図 中世の遺物分類図

## 参考文献

藤澤良祐 「山茶碗と中世集落」『尾呂 本文編付編2』 瀬戸市教育委員会 1990

2. 出土遺物



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
1	00C	SX0001	供膳具	山茶碗類	碗	5.3	14.7	—	6.1	ナデ	ナデ	猿投か	第5型式、見込み剥離痕・高台初圧痕・底部回転糸切り痕	24	E-256
2	00C	SK0519	供膳具	山茶碗類	碗	4.9	(14.1)	—	5.7	ナデ	ナデ	猿投	第5型式、高台初圧痕	24	E-257
3	00B	SK0250	供膳具	山茶碗類	碗	6.0	15.3	—	6.9	ナデ	ナデ	猿投	第5型式、高台初圧痕	24	E-258
4	98E	SK0539	供膳具	山茶碗類	碗	5.3	13.1	—	5.2	ナデ	ナデ	瀬戸か	第7型式、見込み強い指ナデ、高台初圧痕	24	E-259
5	98E	SK0379	供膳具	山茶碗類	碗	4.7	(13.2)	—	(5.3)	ナデ	ナデ	瀬戸か	第8型式、見込み強い指ナデ、底部回転糸切り痕、高台剥離か		E-260
6	98E	SK0259	供膳具	山茶碗類	碗	4.6	(13.2)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	瀬戸	第8型式、見込みに強い指ナデ、底部回転糸切り痕・板状圧痕か		E-261
7	00C	SK0511	供膳具	山茶碗類	碗	残4.8	(12.9)	—	(5.9)	ナデ	ナデ	瀬戸	第8型式、見込み強い指ナデ、底部回転糸切り痕、高台剥離か	24	E-262
8	00C	SK0465	供膳具	山茶碗類	碗	4.6	(14.1)	—	6.0	ナデ	ナデ	瀬戸か	第9型式、見込みに強い指ナデ、底部回転糸切り痕、高台剥離か	24	E-263
9	98D	SK0014	供膳具	山茶碗類	碗	残4.2	—	—	6.5	ナデ	ナデ	猿投	第4型式		E-264
10	00B	SK3022	供膳具	山茶碗類	碗	残3.9	(14.6)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	第5型式		E-265
11	00C	SK0249	供膳具	山茶碗類	碗	残4.4	(13.5)	—	—	ナデ	ナデ	瀬戸	第7型式か第8型式		E-266
12	00C	SK0406	供膳具	山茶碗類	碗	残4.2	(14.8)	—	—	ナデ	ナデ	瀬戸か	第8型式以降		E-267
13	00C	SK0520	供膳具	山茶碗類	碗	残4.2	(12.4)	—	—	ナデ	ナデ	瀬戸か	第8型式以降		E-268
14	98E	SK0232	供膳具	山茶碗類	皿	2.4	8.1	—	4.5	ナデ	ナデ	猿投か	第5型式、底部回転糸切り痕	24	E-269
15	98E	SK0221	貯蔵具	壺	無蓋壺	残4.1	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ	瀬戸	釉が剥離している、古瀬戸、四耳壺か		E-270
16	98B	SD0002	供膳具	山茶碗類	碗	(5.6)	13.8	—	(6.2)	ナデ	ナデ	瀬戸	第7型式、見込み強い指ナデ、高台初圧痕	24	E-271
17	00B	SD0047	供膳具	山茶碗類	皿	残2.3	(9.2)	—	—	ナデ	ナデ	猿投	第4型式、底部回転糸切り痕、内面自然釉かかる、高台内自然釉付着	24	E-272
18	00B	SD0047	供膳具	山茶碗類	皿	2.4	(10.4)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	猿投	第5型式、底部回転糸切り痕・粘土付着、見込み強い指ナデ、自然釉かかる		E-273
19	00B	SD0046	供膳具	山茶碗類	皿	2.3	8.6	—	5.0	ナデ	ナデ	猿投	第5型式、底部回転糸切り痕	24	E-274
20	98C	SD0009	供膳具	山茶碗類	皿	1.8	(7.8)	—	(5.3)	ナデ	ナデ	不明	第6型式、見込み強い指ナデ、底部回転糸切り痕		E-275
21	00B	SD0047	調理具	鍋	伊勢型鍋	残1.1	—	—	—	ナデ	ナデ	不明	13世紀代、外面煤付着		E-276
22	00B	検出	供膳具	山茶碗類	碗	5.3	14.1	—	6.4	ナデ	ナデ	猿投	第6型式、高台初圧痕・底部回転糸切り痕	24	E-277
23	00B	南トレンチ	供膳具	山茶碗類	皿	2.9	(8.7)	—	4.2	ナデ	ナデ	猿投	第4型式、高台初圧痕	24	E-278
24	00B	検出	その他	陶丸	—	—	—	—	—	—	—	不明	長径2.1cm、短径2.0cm、重さ11.3g	24	E-279
25	00A	検出	その他	陶丸	—	—	—	—	—	—	—	不明	径2.1cm、重さ10.0g	24	E-280
26	00B	検出	調理具	鍋	伊勢型鍋	残0.9	(29.8)	—	—	ナデ	黒釉ナデ?	不明	13世紀代		E-281

第 87 図 中世の遺物 (1 : 4)

## 第4節 戦国時代から江戸時代前期までの遺物

遺構編で触れたように戦国時代と江戸時代の遺物が出土している。出土遺物の大半は土器・陶磁器類で、他に瓦類、石製品、金属製品が見られる。遺物の分類は陶磁器類のみに限定した。しかし、戦国時代・江戸時代という明確な区分ではなく、18世紀半ばぐらいを境に戦国時代から江戸時代前期までと江戸時代後期の2時期に分けられる。このため、単純に戦国時代・江戸時代と遺物を分類することはできず、独立した分類を実施することができなかった。そこで、今回は近世の分類を中心に遺物を見ることになり、戦国時代の遺物の様相を明らかにできない可能性もある。分類・統計方法は以下の通りである。なお、瓦類や石製品については江戸時代後期の陶磁器類の後にまとめて掲載している。

### 陶磁器類

#### 分類

『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』(1993)で行われた分類と同様に、用途別の分類を行った。それぞれの用途に基づく分類については、以下第2表から第4表の通りである。

用途については、1 - 供膳具、2 - 調理具、3 - 貯蔵具、4 - 灯火具、5 - 火具、6 - 化粧具、7 - 神仏具、8 - 喫煙具、9 - 調度具、0 - その他に分け、さらに各々に器種・器形を組み合わせ

用途	器種	器形	備考	
1 供膳具	1 椀	1 天目椀	口径8.5cm以上 天目茶椀	
		2 丸椀		
		3 腰折椀		
		4 平椀	柳茶椀	
		5 筒椀		
		6 端反椀		
		7 広東椀	小杉椀	
		8 腰錆椀		
		0 その他		
	2 小椀	小坏 猪口	1 天目椀	口径8.5cm未満
			2 丸椀	
			3 平椀	
			4 筒椀	
			5 端反椀	
			6 蕎麦猪口	
			0 その他	
	3 皿		1 丸皿	口径15cm未満
			2 端反皿	
			3 稜皿	
4 折縁皿				
5 菊皿				
6 型打皿				
7 ひだ、稜花皿				
8 土師器皿A			ロクロ成形のもの	
9 土師器皿B			非ロクロ(手捏ね)成形のもの	
0 その他				
4 鉢		1 丸鉢	口径15cm以上	
		2 端反鉢	大平鉢、黄瀬戸鉢	
		3 折縁鉢	笠原鉢	
		4 平鉢		
		5 型打鉢		
		6 稜花鉢		
		7 織部	向付	
		0 その他		

第2表 陶磁器類分類表①

用途	器種	器形	備考	
2 調理具	1 鍋・釜	1 内耳鍋A	半球形内耳鍋	
		2 内耳鍋B	内灣形内耳鍋	
		3 内耳鍋C	くの字形内耳鍋	
		4 茶釜形鍋		
		5 羽釜		
		6 焙烙		
		7 行平		
		8 鍋	土鍋	
		0 その他		
		2 鉢	1 片口	
	2 捏ね鉢			
	0 その他			
	3 播鉢		1 I類	戦国期I類
		2 II類	戦国期II類	
		3 III類	戦国期III類	
		4 IV類	17世紀	
		5 V類	17世紀後葉	
		6 VI類	18世紀前半	
		7 VII類	18世紀後半	
		8 VIII類	18世紀後葉	
		9 IX類	19世紀	
		0 その他	備前播鉢・堺播鉢	
	4 瓶	1 土瓶		
		2 銚子		
		3 急須		
		4 欄徳利A		
		5 欄徳利B	ちろり	
0 その他				
5 その他	1 卸皿			
	0 その他			
	3 貯蔵具	1 瓶	1 徳利A	高台が付くもの
		2 徳利B	平底	
		3 徳利C	断面が三角形のもの	
		4 徳利D	断面が四角形のもの	
		5 徳利E	高田徳利など	
		6 油徳利		
		7 汁次A	丸形	
		8 汁次B	筒形	
		9 汁次C	その他	
		0 その他	しびんなど	
	2 壺	1 蓋付壺		
		2 無蓋壺		
		3 茶壺		
		4 小型壺	茶入など	
		5 土師壺		
		0 その他		
	3 甕A		常滑産	
		1 I類	N字口縁	
		2 II類	Y字口縁	
		3 III類	Y字口縁	
		4 IV類	T字口縁	
		5 V類	字口縁	
		6 VI類	その他	
	0 その他			
	4 甕B		常滑産以外	
		1 半銅A		
		2 半銅B	口縁が外反するもの	
		3 銭甕		
		4 甕	銅丸形のもの	
		0 その他		
	5 鉢	1 蓋物A	蓋受けの無いもの	
		2 蓋物B	蓋受けの有るもの	
		0 その他		
		6 その他		
4 灯火具	1 皿	1 灯明皿	口縁部に油煙の付着した皿すべて	
		2 灯蓋	受皿	
		3 行灯皿	盤形の皿	
		0 その他		
		2 秉燭	1 I類	受皿と灯芯たてが接合したもの
		2 II類	脚付きのもの	
		3 III類	タンコロ	
		4 IV類	窓あきの蓋のつくもの	
		5 V類	軟質陶器系のもの	
		0 その他		
		3 瓦燈	1 瓦燈	
			0 その他	
		4 燭台		蠟燭を乗せる台
			0 その他	

第3表 陶磁器類分類表②

用途	器種	器形	備考
5 火 具	1 鉢	1 火鉢	
		2 瓶掛	
		3 風炉	
		4 こん炉A	内部構造が一重のもの
		5 こん炉B	内部構造が二重のもの
		6 蚊いぶし	
		7 火容	窓付きのもの
		8 火桶	
		0 その他	
		2 壺	1 火消し壺
	0 その他		
	3 くど	1 くどA	口唇部が円筒状のもの
		2 くどB	口唇部がL字に外部へ屈曲するもの
	4 その他	1 五徳	三脚の環状台
2 十能			
0 その他	0 その他	さや・七厘・煙突など	
6 化粧具	1 紅皿		
	2 壺	1 お歯黒壺	口縁部の一ヶ所が鷹口状を呈するもの
		2 髪油壺	
		3 転用	他器種の転用品
	0 その他		
	3 髪盥		
0 その他			
7 神仏具	1 瓶	1 神酒徳利A	鶴首
		2 神酒徳利B	口唇部外反または玉縁状を呈するもの
		0 その他	
	2 香炉	1 筒形	
		2 袴腰形	
		0 その他	
	3 仏飯器		
	4 仏用具		
	5 香合		蓋物Bの小型製品
	6 線香筒		
0 その他			
8 喫煙具	1 火容	1 筒形	口縁部に敲打痕のあるものすべて
		2 香炉形	小型の火鉢状を呈するもの
		0	
	2 灰落し		
0 その他			
9 調度具	1 植木鉢	1 植木鉢	
		2 半銅	半銅甕の転用品
		3 転用	他器種の転用品
		4 蘭鉢	
		0 その他	
	2 餌鉢	1 餌鉢	環状の摘みのある半銅形の小椀
		2 餌播鉢	播鉢の小型製品
		0 その他	
	3 花生	1 筒形	体部から口縁にかけて直線的なもの
		2 壺形	口縁が外反するもの
		0 その他	
	4 水指	1 水指	壺形で蓋の有るもの
		2 建水	壺形で蓋の無いもの
		3 水盤	浅鉢状で口縁を折り返しているもの
		0 その他	
	5 水甕	1 水甕	
		2 手洗鉢	口縁部が外反するもの
		0 その他	
	6 壺	1 唾壺	
		0 その他	
0 その他			
0 その他	1 柄杓	1 柄杓	
		2 筒形容器	
		3 手桶	
		4 土管	
0 その他	0 その他		
0 その他	1 蓋	1 蓋A	落とし蓋で折り返しのないもの
		2 蓋B	落とし蓋で折り返しの有るもの
		3 蓋C	扁平蓋で返りの無いもの
		4 蓋D	扁平蓋で返りの有るもの
		5 蓋E	環状の摘みが付き返しの無いもの
		6 蓋F	摘みが無く返しの無いもの
		7 蓋G	摘みが無く返しの有るもの
		8 蓋H	湾曲した傘状を呈するもの
		9 蓋I	有孔のものすべて
		0 その他	
		0 その他	0 その他

第4表 陶磁器類分類表③

細分化した。用途別分類ということで遺物の形態にとらわれずに使用痕の有無を重視し、例えば皿でも口縁部に油煙が付着している場合には灯明皿に含めて、統計処理を行っている。このため、一般に行われている形態による分類とは異なっていることを予め断っておく。

## 統計方法

陶磁器類の統計には、口縁部計測法を用いた。分類に基づき用途・器種・器形別に口縁部の残存率を計測し、個体数を算出する方法をとった。計測は、残存する口縁を接合した後、12分の1単位で行い、12分の1未満を1、12分の1以上で12分の2未満を2とし、順次3、4、……、11、12とカウントした。この集計が接合後口縁残存率である。個体数は、これを12で割って小数点以下第2位まで求めたもの（小数点第3位を四捨五入）である。ここで注意すべきことは、個体数は遺物組成を目的とした統計上の数値であって、個体識別に基づく数値とは異なり、実体の個体数ではないという点である。この数値を利用する際には、この点に留意することが必要である。なお、比較検討のため、接合前の口縁部破片数と総破片数も合わせて集計した。

器種としての蓋については、本来身となる器種と一体のものであり、組成の統計処理上ダブルカウントとなるため、独立の用途0 - その他として1項をたてて集計し、用途組成図及び本文中の比率は、出土遺物から蓋を除外した数値で表している。

ここで提示した数値は、あくまでも今回の発掘調査で出土した本遺跡における遺物組成の比率・割合であって、必ずしも一般的な遺物組成を示しているわけではない。以下、個別遺構の記述については、全体の概要で示した比率・割合を本遺跡における陶磁器類のあり方の平均値ととらえ、これに対してどのように変化しているのかを中心に見ていくこととする。

なお、本節では前述の通り遺物組成を主眼としたため、個々の遺物についての記述は極力抑え、各実測図の下の観察表に限定した。表中の法量で推定できたものには( )、できなかったものは残と表示し、産地の瀬・美とは瀬戸・美濃を略したものである。また、各遺物の材質については、各実測図の通番の右側にD：土器、T：陶器、J：磁器、G：瓦質製品というアルファベットで表記してある。各遺構・遺物の時期決定に当たっては、研究の進んでいる瀬戸・美濃産の陶磁器類や肥前産磁器類を手がかりとし、それぞれの年代観については各生産地で明らかになっているものに拠った。

## 参考文献

- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』 1993
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『吉田城遺跡Ⅱ - 愛知県東三河事務所地点の調査 -』 1995
- 瀬戸市史編集委員会 『瀬戸市史 陶磁史編 3～5』 1967・1993
- 瀬戸市歴史民俗資料館 『研究紀要 V～Ⅷ・X』 1986～1989・1991
- 大橋康二 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989
- 九州近世陶磁学会 『九州近世陶磁学会10周年記念 九州陶磁の編年』 2000

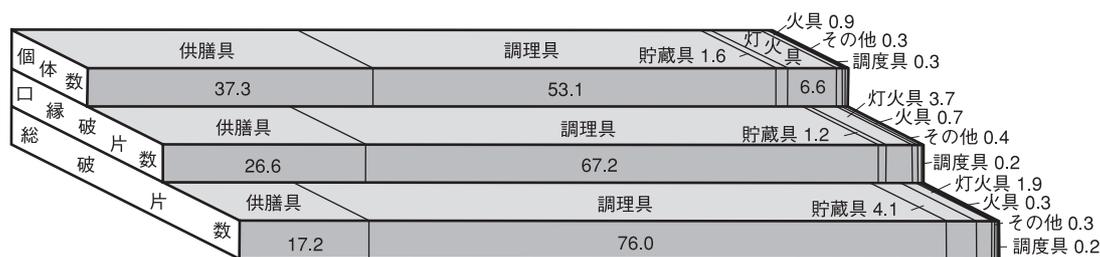
概要

ここでは、戦国時代から江戸時代前期までに属する遺構から出土した遺物のみを対象とし、出土量は少ないがその概要を見てみたい。

遺構から出土した土器・陶磁器類は、総破片数で10,405点である。総個体数は277.08個体で、接合前口縁破片数は2,412点にとどまっている。戦国時代の遺構もあるが、大半のものが江戸時代前期まで存続しているため、用途別に10に分類した遺物の数に多寡は見られるものの全てにわたって出土していることが確認される。

まず、用途別に見てみると、調理具が53.1%と圧倒的に多く、中でも鍋・釜類の占める割合が高いことがあげられる。全体で見ても48.4%と高い。この調理具と供膳具（37.3%）・貯蔵具（1.6%）という3つの用途の遺物で91.9%を占め、日常生活に直接関連する遺物群の出土が高いことも特徴の1つといえるであろう。灯火具については、名古屋城三の丸遺跡と異なり土師器皿を灯明皿としないため6.6%と低いですが、供膳具の土師器皿を全て灯明皿としてみると21.9%となり三の丸遺跡に近い数値を得ることができる。

また、材質面から見てみると、鍋・釜類の出土量が多いこともあるが、土師質製品の占める割合が全体の70.4%と高いことがわかる。また、磁器製品の出土量が極端に低いことも確認できる。



第88図 戦国時代から江戸時代前期までの遺構出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		301	6		307		188	5		193		487	7		494
	小椀		12	5		17		5	3		8		18	6		24
	皿	507	361	3	8	879	257	158	2	1	418	897	262	20	1	1180
	鉢		33			33		22			22		95			95
	その他															
	小計	507	707	14	8	1236	257	373	10	1	641	897	862	33	1	1793
調理具	鍋・釜	1610	2			1612	1485	2			1487	6673	17			6690
	鉢		10			10		8			8		23			23
	播鉢		137			137		121			121		1181			1181
	瓶		1			1		1			1		4			4
	その他												2			2
	小計	1610	150			1760	1485	132			1617	6673	1227			7900
貯蔵具	瓶												30	1		31
	壺		37			37		17			17	1	152			153
	甕A		12			12		11			11		213			213
	甕B		3			3		2			2		27			27
	鉢												1			1
	その他												1			1
	小計		52			52		30			30	1	424	1		426
灯火具		216			216		89			1	90	197	2		1	200
火具			25		4	29		14		2	16	1	24		8	33
化粧具			5			5		4			4		14			14
神仏具			3			3		3			3		11	2	1	14
喫煙具			3			3		2			2		2			2
調度具			10			10		5			5		17		2	19
蓋			2		7	9		2		2	4		2		2	4
合計		2333	957	14	21	3325	1831	565	10	6	2412	7769	2585	36	15	10405

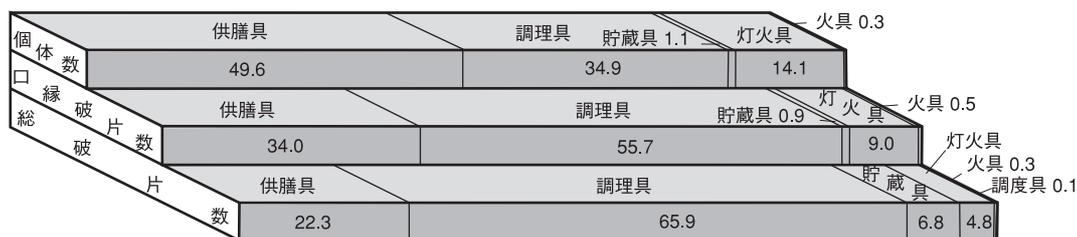
第5表 戦国時代から江戸時代前期までの遺構出土陶磁器類集計表

98 B S D 0014 本遺構の時期は、16世紀中葉から17世紀後半と考えられる。

江戸前期までの屋敷地を区画していたと考えられる溝であるが、出土遺物は総破片数719点、接合前口縁破片数212点、個体数30.08個体である。

用途別にその組成を見てみると、供膳具14.92個体(49.6%)、調理具10.50個体(34.9%)、貯蔵具0.33個体(1.1%)、灯火具4.25個体(14.1%)、火具0.08個体(0.3%)となる。調度具で1点破片が出土している以外に、他の用途の遺物や蓋類は出土していない。中でも、供膳具の出土量が多く、器種別に見てみると皿類の出土が供膳具の中で80.4%と高いことがわかる。椀類対皿類の比率は1:4.36(本遺跡では1:2.86)で、名古屋城三の丸遺跡で示されている数値(1:2.18)のほぼ倍となっている。また、鉢類の出土量は低い。調理具では、鍋・釜類の比率が92.1%に上がり、鉢類・播鉢類の出土が少ないことがわかる。鍋・釜類では、内耳鍋Aが72.1%と圧倒的に多く、羽釜が17.4%、以下茶釜形鍋の5.2%、内耳鍋Bの3.5%と続き、内耳鍋Cと焙烙はそれぞれ0.9%と少ない。灯火具の出土量が少ないように思われるが、土師器皿を全て灯火具として算出すると6.92個体・23.0%となる。

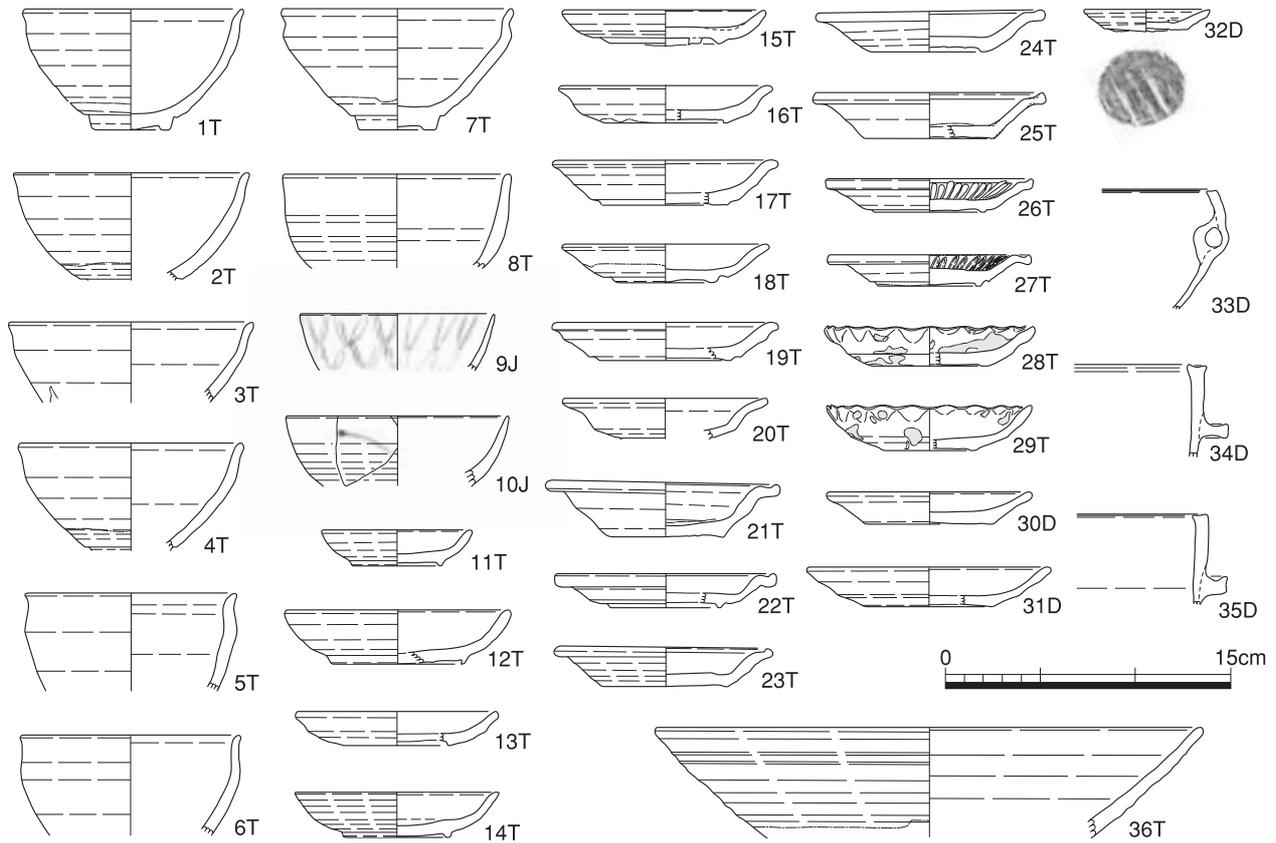
材質面では、土師質製品54.8%、陶器製品44.0%、磁器製品1.1%で、陶器製品の割合が高くなっていることがわかる。



第89図 98 B S D 0014 出土陶磁器類用途組成図

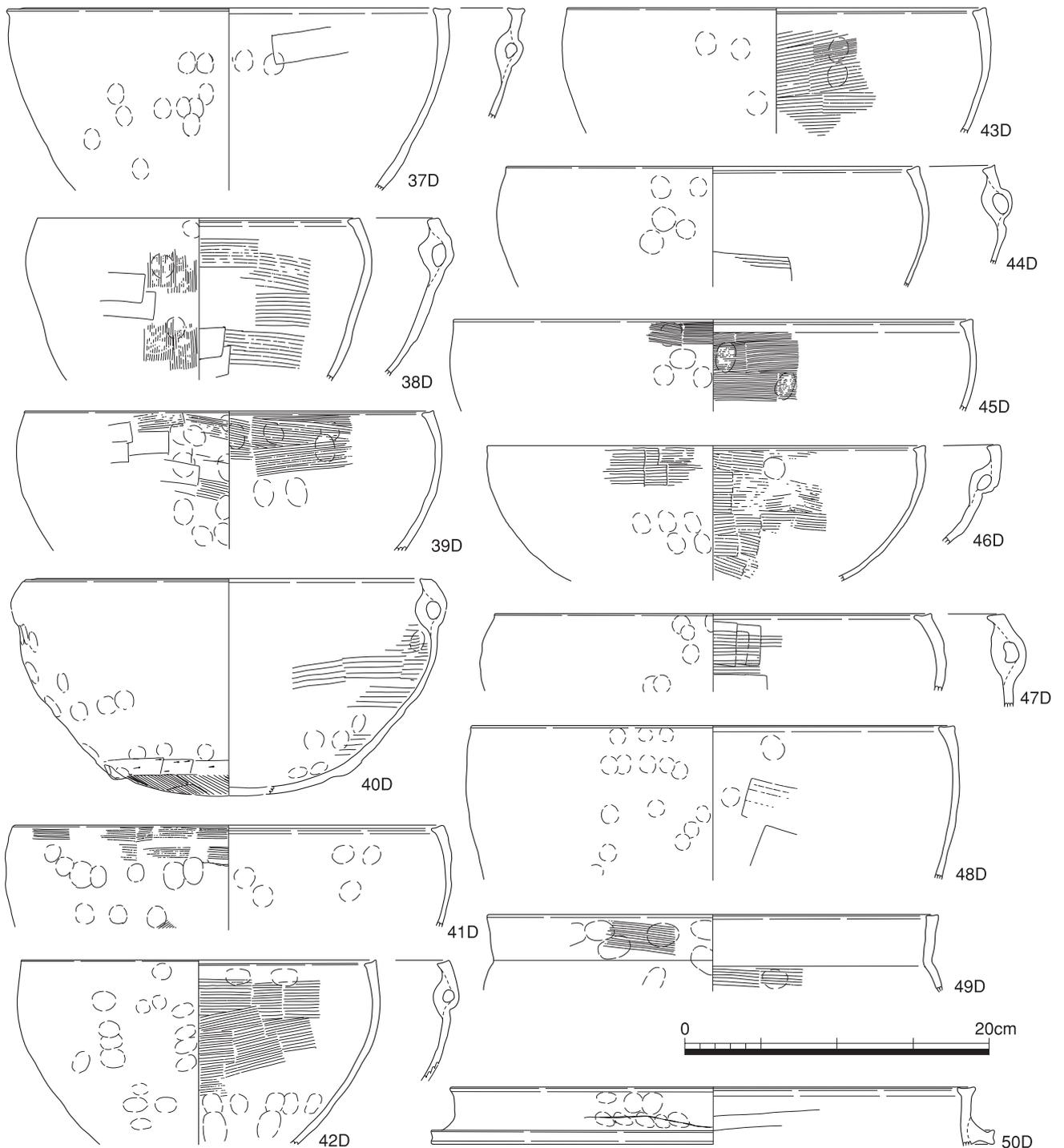
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		29	4		33		19	3		22		37	3		40
	小椀															
	皿	32	112			144	16	32			48	61	41			102
	鉢		2			2		2			2		18			18
	その他															
	小計	32	143	4		179	16	53	3		72	61	96	3		160
調理具	鍋・釜	115	1			116	110	1			111	429	2			431
	鉢		3			3		2			2		4			4
	播鉢		7			7		5			5		39			39
	瓶															
	その他															
	小計	115	11			126	110	8			118	429	45			474
貯蔵具	瓶												4			4
	壺		3			3		1			1		12			12
	甕A												20			20
	甕B		1			1		1			1		13			13
	鉢															
	その他															
	小計		4			4		2			2		49			49
灯火具		51				51	19				19	32	1			33
火具			1			1		1			1		2			2
化粧具																
神仏具																
喫煙具																
調度具													1			1
蓋																
合計		198	159	4		361	145	64	3		212	522	194	3		719

第6表 98 B S D 0014 出土陶磁器類集計表



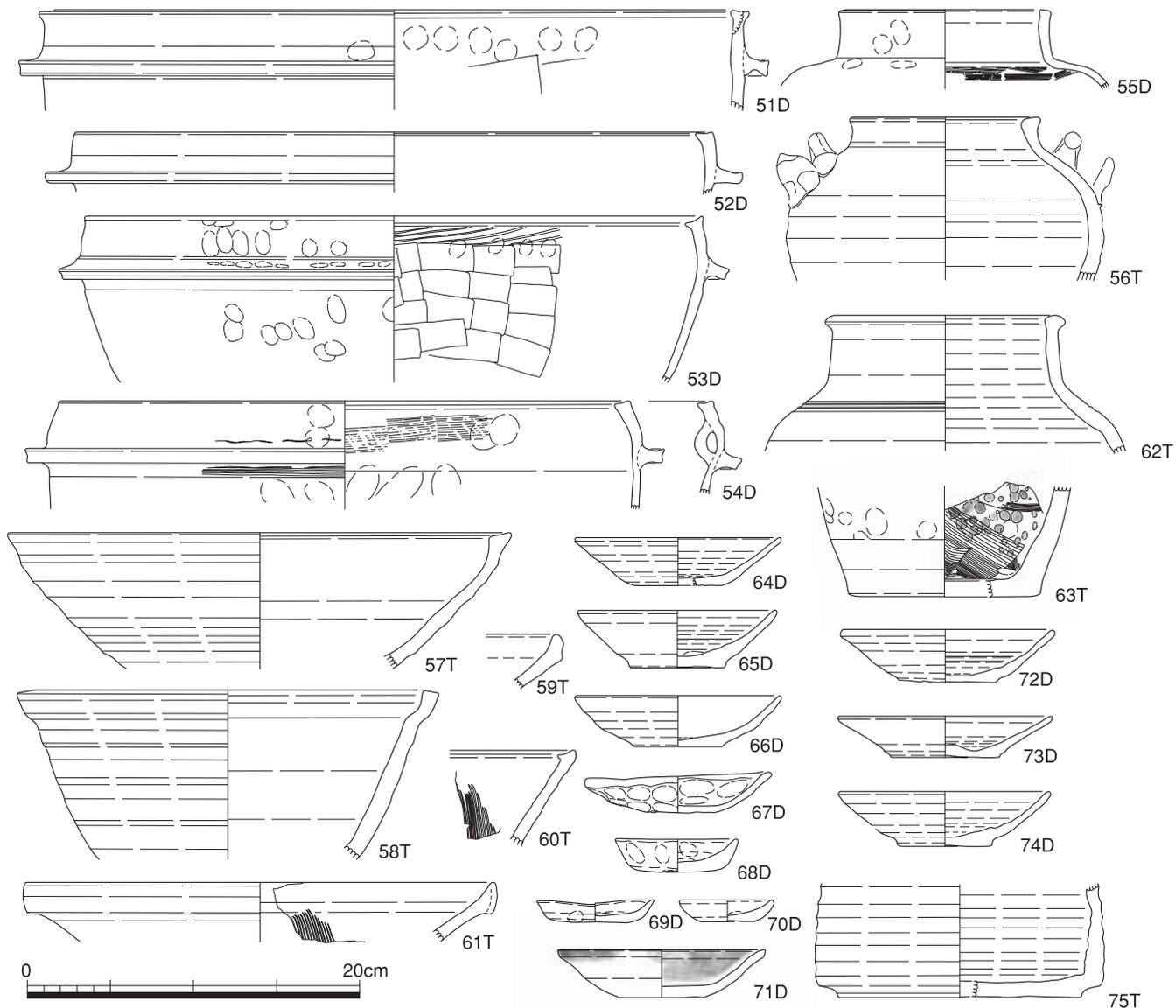
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
1	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	6.4	(11.4)	—	4.0	鉄釉	鉄釉+鉄化粧	瀬・美		25	E-282
2	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	残5.7	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-283
3	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	残4.3	(12.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-284
4	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	残5.7	(11.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-285
5	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	残5.2	(11.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-286
6	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	残5.3	(11.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-287
7	98B	SD0014	供膳具	椀	天目椀	6.4	(11.4)	—	4.0	鉄釉	鉄釉+鉄化粧	瀬・美		25	E-288
8	98B	SD0014	供膳具	椀	丸椀	残5.0	(11.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-289
9	98B	SD0014	供膳具	椀	丸椀	残3.0	(10.2)	—	—	—	—	肥前	染付 (一重網目文+二重網目文)		E-290
10	98B	SD0014	供膳具	椀	丸椀	残3.7	(11.6)	—	—	—	—	肥前	染付		E-291
11	98B	SD0014	供膳具	皿	丸皿	1.9	7.9	—	4.6	灰釉	灰釉	瀬・美	高台畳付・高台内剥離痕	25	E-292
12	98B	SD0014	供膳具	皿	丸皿	2.9	(11.8)	—	(6.9)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕	25	E-293
13	98B	SD0014	供膳具	皿	丸皿	1.8	(10.4)	—	(5.5)	長石釉	長石釉	瀬・美	碁笥底、高台内トチン痕、内面黒く変色、灯明皿に転用か		E-294
14	98B	SD0014	供膳具	皿	丸皿	2.4	(10.8)	—	5.6	灰釉	灰釉	瀬・美	高台釉剥ぎ、高台内トチン痕	25	E-295
15	98B	SD0014	供膳具	皿	丸皿	1.9	10.5	—	5.8	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内輪トチン融着、外面トチン痕	25	E-296
16	98B	SD0014	供膳具	皿	端反皿	2.0	(10.8)	—	(6.5)	長石釉	長石釉	瀬・美	二次的に火を受けている	25	E-297
17	98B	SD0014	供膳具	皿	端反皿	2.4	(11.6)	—	(6.8)	長石釉	長石釉	瀬・美			E-298
18	98B	SD0014	供膳具	皿	端反皿	2.1	(10.6)	—	4.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みトチン痕	25	E-299
19	98B	SD0014	供膳具	皿	端反皿	2.0	(11.6)	—	(7.0)	長石釉	長石釉	瀬・美			E-300
20	98B	SD0014	供膳具	皿	端反皿	残2.2	(10.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-301
21	98B	SD0014	供膳具	皿	折縁皿	3.0	11.9	—	6.0	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ、見込み・高台内輪トチン痕	25	E-302
22	98B	SD0014	供膳具	皿	折縁皿	1.8	(11.4)	—	(5.8)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台剥離痕		E-303
23	98B	SD0014	供膳具	皿	折縁皿	2.2	10.9	—	6.7	鉄釉+鉄化粧	鉄釉	瀬・美		25	E-304
24	98B	SD0014	供膳具	皿	折縁皿	2.1	11.8	—	6.2	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ、見込み・高台内剥離痕	25	E-305
25	98B	SD0014	供膳具	皿	折縁皿	2.5	(11.8)	—	(6.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ、高台内剥離痕		E-306
26	98B	SD0014	供膳具	皿	菊皿	1.7	(10.8)	—	5.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みトチン融着、高台内輪トチン融着	25	E-307
27	98B	SD0014	供膳具	皿	菊皿	1.7	10.4	—	5.4	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ、高台内輪トチン剥離痕	25	E-308
28	98B	SD0014	供膳具	皿	ひだ皿	2.1	(10.8)	—	(6.2)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉散らし、見込み・高台内トチン痕		E-309
29	98B	SD0014	供膳具	皿	ひだ皿	2.4	(10.8)	—	(5.0)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉散らし、見込み・高台内トチン痕	25	E-310
30	98B	SD0014	供膳具	皿	土師器皿A	1.8	(10.4)	—	(6.8)	ナデか	ナデ	不明	内面摩滅		E-311
31	98B	SD0014	供膳具	皿	土師器皿A	2.1	(12.8)	—	(6.8)	ナデ	ナデ	不明	底部糸切り後ナデ消し		E-312
32	98B	SD0014	供膳具	皿	土師器皿A	1.2	6.5	—	4.4	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-313
33	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.9	—	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-314
34	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残4.8	—	—	—	ナデか	指押え+ナデか	不明	外面煤付着、全体摩滅		E-315
35	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残4.8	—	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-316
36	98B	SD0014	供膳具	鉢	平鉢	残5.9	(28.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-317

第90図 98 B S D 0014 ① (1:4)



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL 登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
37	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.1	(27.2)	(29.2)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-318
38	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残10.2	(21.1)	(22.8)	—	ナデ+ケズリ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-319
39	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.2	(26.8)	(28.1)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-320
40	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(14.4)	(25.2)	(27.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面底部炭化物付着	E-321
41	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.8	(28.4)	(29.4)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-322
42	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.2	(23.2)	(24.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-323
43	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残8.3	(27.4)	(28.4)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-324
44	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残8.0	(27.2)	(28.5)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅	E-325
45	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.1	(34.2)	(34.7)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-326
46	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残8.9	(29.6)	(29.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着	E-327
47	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.1	(28.6)	(30.8)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-328
48	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残10.1	(31.6)	(32.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-329
49	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残5.1	(29.6)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-330
50	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残3.8	(34.4)	—	—	ナデ+ケズリ	指押え+ナデ	不明		E-331

第91図 98 B S D 0014② (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
51	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.1	(40.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-332
52	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残3.6	(38.4)	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体摩滅		E-333
53	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残10.1	(37.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-334
54	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.6	(34.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-335
55	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残4.7	(11.6)	—	—	ナデ	ナデ	不明	外面煤付着		E-336
56	98B	SD0014	調理具	鍋・釜	その他	残9.9	(11.2)	(19.2)	—	鉄釉	鉄釉	瀬戸	古瀬戸、釜		E-337
57	98B	SD0014	調理具	鉢	その他	残8.3	(30.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	捏ね鉢か		E-338
58	98B	SD0014	調理具	鉢	捏ね鉢	残10.3	(23.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-339
59	98B	SD0014	調理具	搦鉢	Ⅱ類	残3.3	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部外面摩滅		E-340
60	98B	SD0014	調理具	搦鉢	Ⅱ類	残5.9	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-341
61	98B	SD0014	調理具	搦鉢	Ⅲ類	残3.6	(28.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-342
62	98B	SD0014	貯蔵具	壺	無蓋壺	残8.2	(13.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部剥離痕		E-343
63	98B	SD0014	貯蔵具	壺	その他	残6.7	—	—	(11.6)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑	底部穿孔か		E-344
64	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(12.3)	—	(5.4)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕・板状圧痕、内面油煙付着		E-345
65	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	3.5	(11.8)	—	5.7	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部板状圧痕		E-346
66	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	3.1	(12.2)	—	(5.2)	ナデ	ナデ	不明	底部糸切り後ナデ消し、内外面油煙付着		E-347
67	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	2.5	(10.9)	—	(4.1)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面油煙付着		E-348
68	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	2.0	7.2	—	5.3	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	見込み強い指ナデ	26	E-349
69	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	1.4	6.9	—	4.3	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	見込み強い指ナデ		E-350
70	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	1.3	5.5	—	3.3	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、見込み強い指ナデ		E-351
71	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(12.4)	—	5.0	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、内面・口縁部油煙付着、底部回転糸切り後ナデ消しか	26	E-352
72	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	3.2	12.7	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	内面油煙付着、底部回転糸切り痕、板状圧痕、見込み強い指ナデ		E-353
73	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	2.5	(12.8)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内面油煙付着		E-354
74	98B	SD0014	灯火具	皿	灯明皿	3.4	(12.6)	—	5.5	ナデ	ナデ	不明	内面油煙付着、底部回転糸切り痕、板状圧痕、見込み強い指ナデ	26	E-355
75	98B	SD0014	その他	その他	その他	残6.9	—	—	(14.6)	ナデ	ナデ	瀬・美	底部回転糸切り痕、見込み摩滅痕、さや転用か	26	E-356

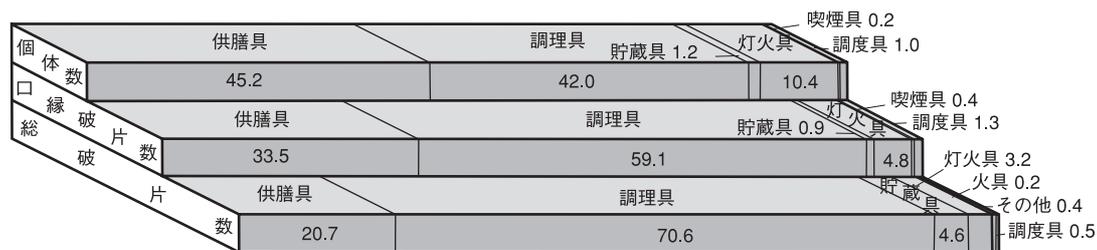
第92図 98 B S D 0014 ③ (1:4)

98 C S D 0009 本遺構の時期は、16世紀から17世紀前半と思われる。

98 B S D 0014と同様、屋敷地を区画する溝と考えられる。出土した遺物は、総破片数658点、接合前口縁破片数231点、個体数34.50個体である。

用途別にその組成を見てみると、供膳具15.58個体(45.2%)、調理具14.50個体(42.0%)、貯蔵具0.42個体(1.2%)、灯火具3.58個体(10.4%)、喫煙具0.08個体(0.2%)、調度具0.33個体(1.0%)である。これ以外に、火具・神仏具は破片のみ、蓋が0.08個体出土している。器種別に見てみると、供膳具の比率がやや多く、椀類対皿類の比率は1:4.55と高いことがわかる。調理具の比率はやや低くなっているが、鍋・釜類は88.5%と比率を下げていることが関係しているのかも知れない。鍋・釜類は、内耳鍋Aが63.6%と高く、内耳鍋Bの16.2%、羽釜の9.7%、茶釜形鍋の7.1%、内耳鍋Cの3.2%と続き、焙烙は確認していない。これに対し、挿鉢の出土量が増えている。

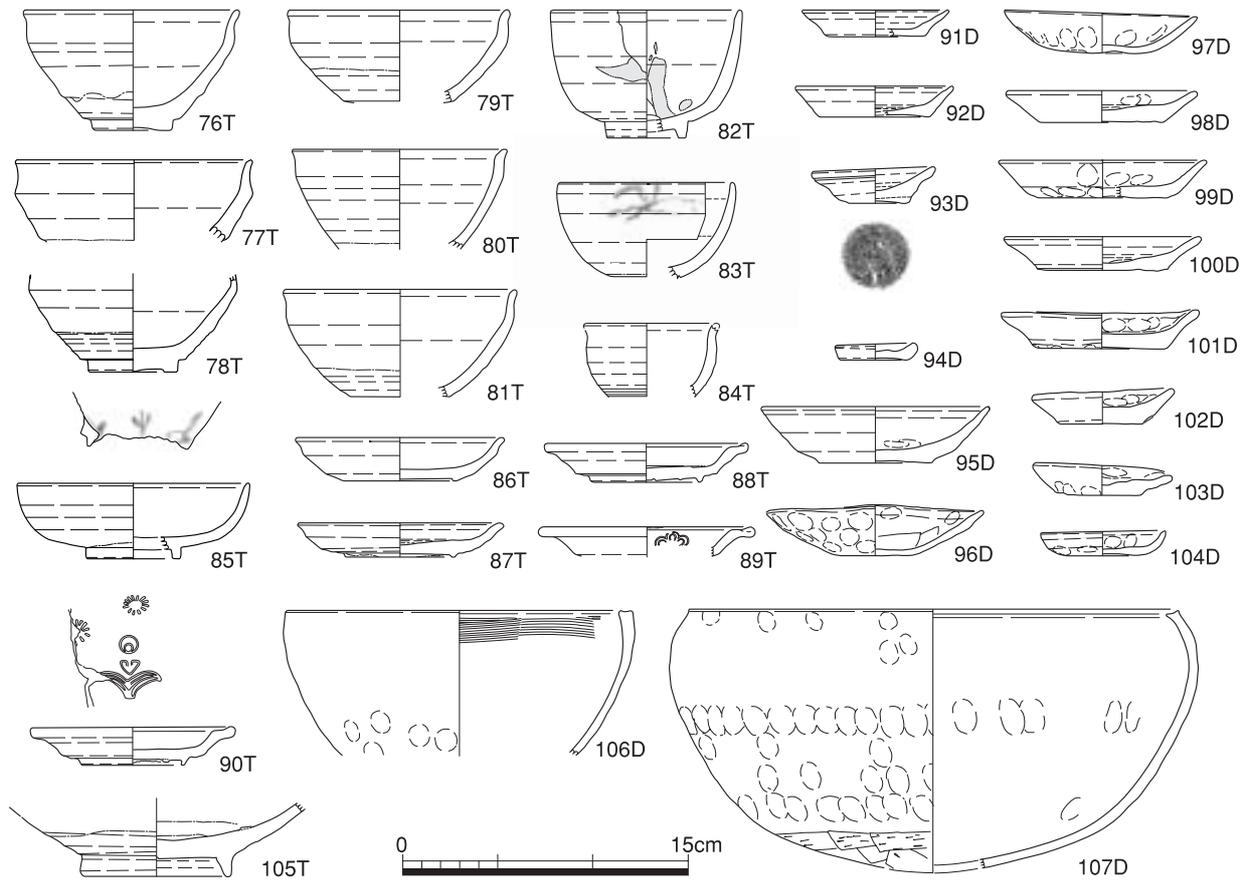
材質面では、土師質製品74.9%、陶器製品24.2%、磁器製品1.0%となっている。98 B S D 0014に比べ土師質製品の比率が高く、名古屋城三の丸遺跡の戦国時代の遺物組成に近いように思われる。



第93図 98 C S D 0009 出土陶磁器類用途組成図

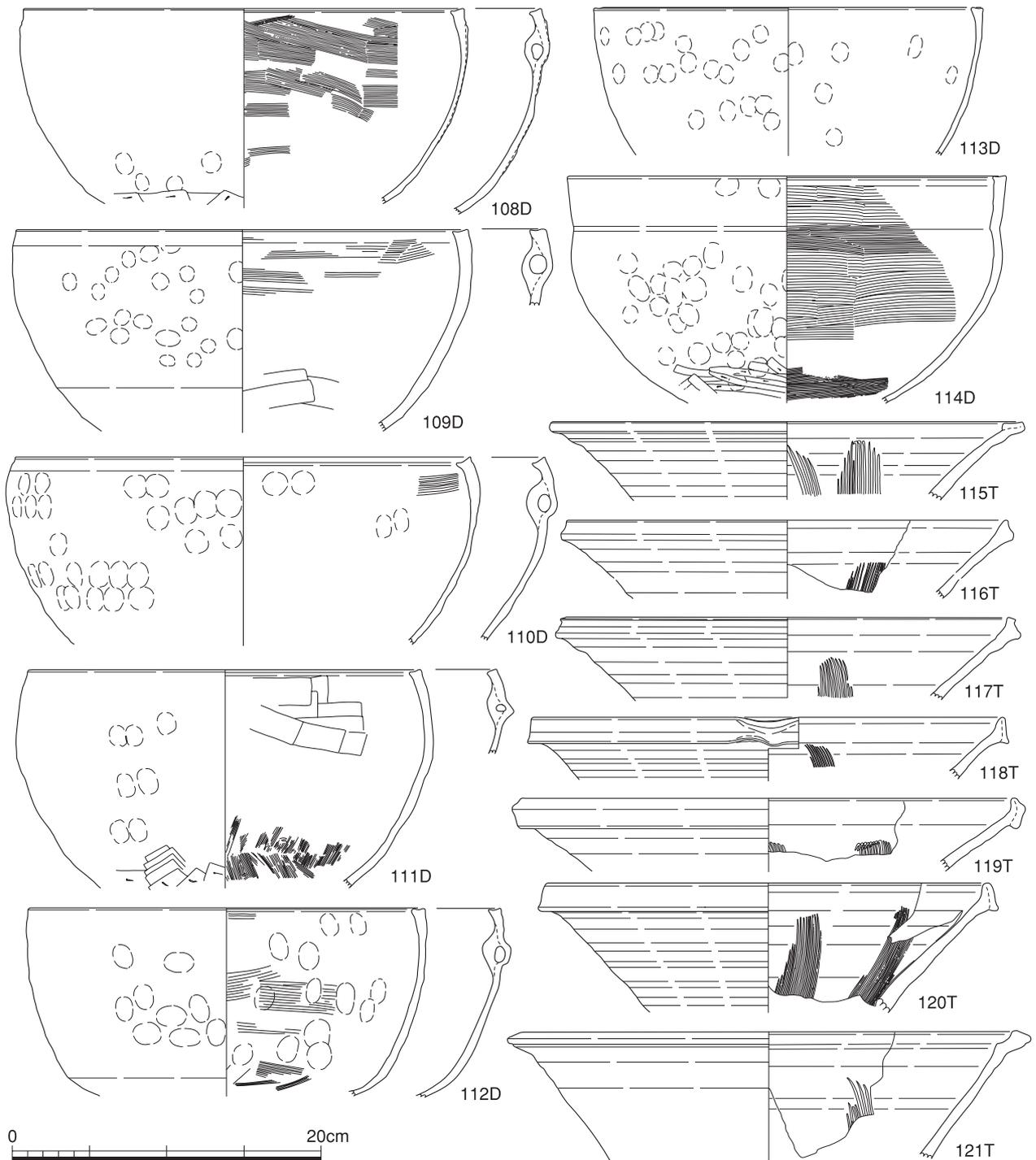
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		33			33	15			15		32				32
	小椀			2		2		1		1		1	2		3	
	皿	113	35	2		150	42	16	1	59	64	23	2		89	
	鉢		2			2		2		2		12			12	
	その他															
	小計	113	70	4		187	42	33	2	77	64	68	4		136	
調理具	鍋・釜	154				154	123			123	421				421	
	鉢		3			3		2		2		2		2		
	挿鉢		17			17		11		11		41		41		
	その他															
	小計	154	20			174	123	13		136	421	43		464		
貯蔵具	瓶											2			2	
	壺		3			3		1		1		5		5		
	甕A											22		22		
	甕B		2			2		1		1		1		1		
	鉢															
	その他															
	小計		5			5		2		2		30		30		
灯火具		43			43	11			11	21				21		
火具												1		1		
化粧具																
神仏具												1		1		
喫煙具			1		1		1		1		1			1		
調度具			4		4		3		3		3			3		
蓋			1		1		1		1		1			1		
合計		310	101	4		415	176	53	2	231	506	148	4	658		

第7表 98 C S D 0009 出土陶磁器類集計表



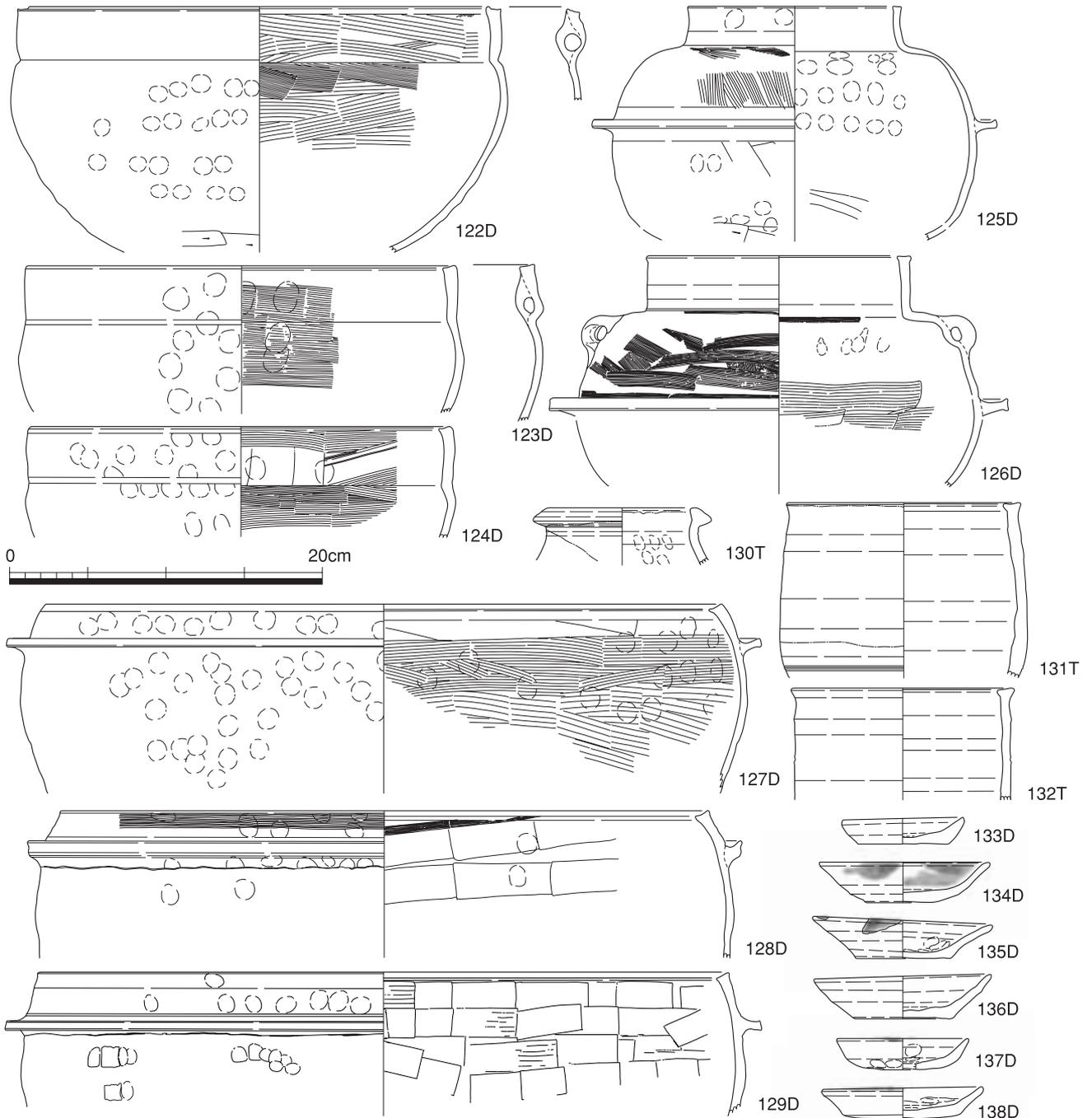
遺物番号	調査区	調査地点	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
76	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	6.3	11.1	—	3.9	鉄釉	鉄釉+炭化層	瀬・美	削出し高台	25	E-357
77	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	残4.7	(9.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-358
78	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	残5.2	—	—	4.5	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-359
79	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	残4.8	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-360
80	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	残5.3	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-361
81	98C	SD0009	供膳具	椀	天目椀	残5.7	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-362
82	98C	SD0009	供膳具	椀	丸椀	6.8	(9.8)	—	(4.2)	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	灰釉筆散し		E-363
83	98C	SD0009	供膳具	椀	丸椀	残5.0	(8.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (草文か)		E-364
84	98C	SD0009	供膳具	小椀	端反椀	残3.9	(6.3)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-365
85	98C	SD0009	供膳具	皿	丸皿	4.0	(12.2)	—	(4.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (梅樹文か)		E-366
86	98C	SD0009	供膳具	皿	丸皿	2.3	(11.0)	—	5.8	長石釉	長石釉	瀬・美	碁笥底、見込み・高台内トチン痕	25	E-367
87	98C	SD0009	供膳具	皿	丸皿	1.8	10.6	—	5.8	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕	25	E-368
88	98C	SD0009	供膳具	皿	折縁皿	2.1	(10.4)	—	(5.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	釉白濁、高台内剥離痕	25	E-369
89	98C	SD0009	供膳具	皿	折縁皿	残1.6	(11.0)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	印花 (陰刻)		E-370
90	98C	SD0009	供膳具	皿	折縁皿	2.0	(10.6)	—	5.4	灰釉	灰釉	瀬・美	釉白濁、見込みトチン痕、高台内輪トチン痕	25	E-371
91	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.4	(7.6)	—	(4.8)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-372
92	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.6	(8.2)	—	(5.6)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-373
93	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.9	6.4	—	3.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-374
94	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢA	0.9	4.2	—	3.7	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り後ナデ消し	25	E-375
95	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.0	(11.9)	—	(6.0)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-376
96	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	2.7	(11.2)	—	(3.6)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-377
97	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	2.3	10.1	—	5.4	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明		25	E-378
98	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.7	(9.8)	—	(6.6)	指押え+ナデか	ナデか	不明	全体摩滅		E-379
99	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	2.0	(10.7)	—	(6.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕		E-380
100	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.8	(10.2)	—	(5.8)	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部板状圧痕		E-381
101	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	2.1	10.4	—	6.9	指押え+ナデ	ナデ	不明		25	E-382
102	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.9	7.4	—	4.4	指押え+ナデ	ナデ	不明	底部板状圧痕		E-383
103	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.7	7.4	—	3.9	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕	25	E-384
104	98C	SD0009	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.2	6.5	—	4.1	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-385
105	98C	SD0009	供膳具	鉢	その他	残3.9	—	—	7.7	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み剥離痕		E-386
106	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残7.7	(18.4)	(18.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤付着		E-387
107	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(14.3)	(26.4)	(28.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面炭化物付着		E-388

第94図 98C S D 0009 ① (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
108	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.7	(28.6)	(29.2)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	内面一部摩滅、外面煤・炭化物付着	E-389	
109	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残13.3	(29.1)	(29.9)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤厚く付着	E-390	
110	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.3	(29.6)	(30.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着	E-391	
111	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残14.3	(25.4)	(27.2)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面器壁一部摩滅	E-392	
112	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.3	(25.6)	(26.2)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着	E-393	
113	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.7	(24.6)	(25.2)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅	E-394	
114	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残14.8	(28.4)	(28.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面炭化物付着	E-395	
115	98C	SD0009	調理具	搗鉢	I類	残5.1	(30.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数12本か	E-396	
116	98C	SD0009	調理具	搗鉢	II類	残5.1	(28.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本か	E-397	
117	98C	SD0009	調理具	搗鉢	II類	残6.4	(28.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数11本か	E-398	
118	98C	SD0009	調理具	搗鉢	III類	残4.1	(30.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数10本か	E-399	
119	98C	SD0009	調理具	搗鉢	III類	残4.8	(31.7)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	外面体部剥離痕	E-400	
120	98C	SD0009	調理具	搗鉢	III類	残8.4	(28.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数16本	E-401	
121	98C	SD0009	調理具	搗鉢	IV類	残8.4	(31.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅	E-402	

第95図 98CSD0009② (1:4)



遺物 番号	調査区	調査地点	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
122	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残15.8	(29.4)	(31.9)	—	ナデ	顔え+ナデ	不明	外面煤付着	26	E-403
123	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残9.5	(27.4)	(28.5)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-404
124	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残7.1	(26.8)	(27.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-405
125	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残15.1	(13.7)	(23.4)	—	指押え+ナデ	顔え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤付着		E-406
126	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残14.8	(16.7)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-407
127	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	羽釜	残12.2	(43.4)	(46.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤厚く付着		E-408
128	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	羽釜	残9.5	(41.4)	(44.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-409
129	98C	SD0009	調理具	鍋・釜	羽釜	残9.3	(44.2)	(46.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-410
130	98C	SD0009	貯蔵具	壺	無蓋壺	残3.4	(10.2)	—	—	指押え+ナデ	鉄釉	不明	外面煤付着		E-411
131	98C	SD0009	貯蔵具	甕B	—	残11.3	(14.6)	(15.8)	—	ナデ	灰釉	瀬・美	灰釉白濁、外面煤付着		E-412
132	98C	SD0009	神仏具	香炉	筒形	残7.2	(14.2)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	釉白濁		E-413
133	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	1.7	7.7	—	5.7	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内外面油煙付着	26	E-414
134	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	2.6	(10.8)	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、口縁部・内面油煙付着		E-415
135	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	2.7	11.4	—	6.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、油煙付着、口縁部打ち欠き	26	E-416
136	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(11.2)	—	6.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内外面油煙付着、口縁部打ち欠き	26	E-417
137	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	2.0	(8.4)	—	(4.6)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	口縁部油煙付着		E-418
138	98C	SD0009	灯火具	皿	灯明皿	2.0	10.2	—	7.4	指押え+ナデ	ナデ	不明	内外面油煙付着、口縁部打ち欠き		E-419

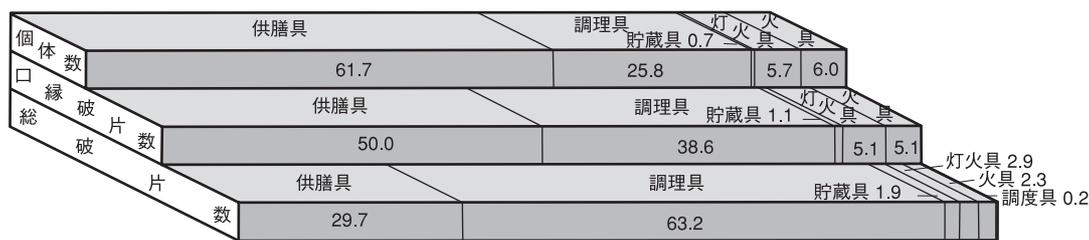
第96図 98 C S D 0009 ③ (1 : 4)

98 D S D 0002 本遺構の時期は、16世紀中葉から17世紀前半と考えられる。

屋敷地を区画する溝で、出土した遺物は総破片数622点、接合前口縁破片数176点、個体数24.83個体である。

用途別に見てみると、供膳具15.33個体(61.7%)、調理具6.12個体(25.8%)、貯蔵具0.17個体(0.7%)、灯火具1.42個体(5.7%)、火具1.50個体(6.0%)である。化粧具・神仏具・喫煙具の出土はなく、調度具は破片1点のみである。供膳具・火具の比率が高く、調理具が極端に低くなっていることがわかる。供膳具では、椀類と皿類の比率が1:1.67と椀の出土量が多くなり、陶器・皿類の出土の比率が高いことがわかる。調理具では、鍋・釜類が92.2%が依然多く、播鉢の出土量が極端に少ないことが読みとれる。鍋・釜類は、内耳鍋Aが69.0%と高く、羽釜22.5%、内耳鍋Cが5.6%、茶釜形鍋と焙烙がそれぞれ1.4%と続き、内耳鍋Bは確認できていない。また火具では、火鉢がまとまって出土していることにより比率が高くなっている。

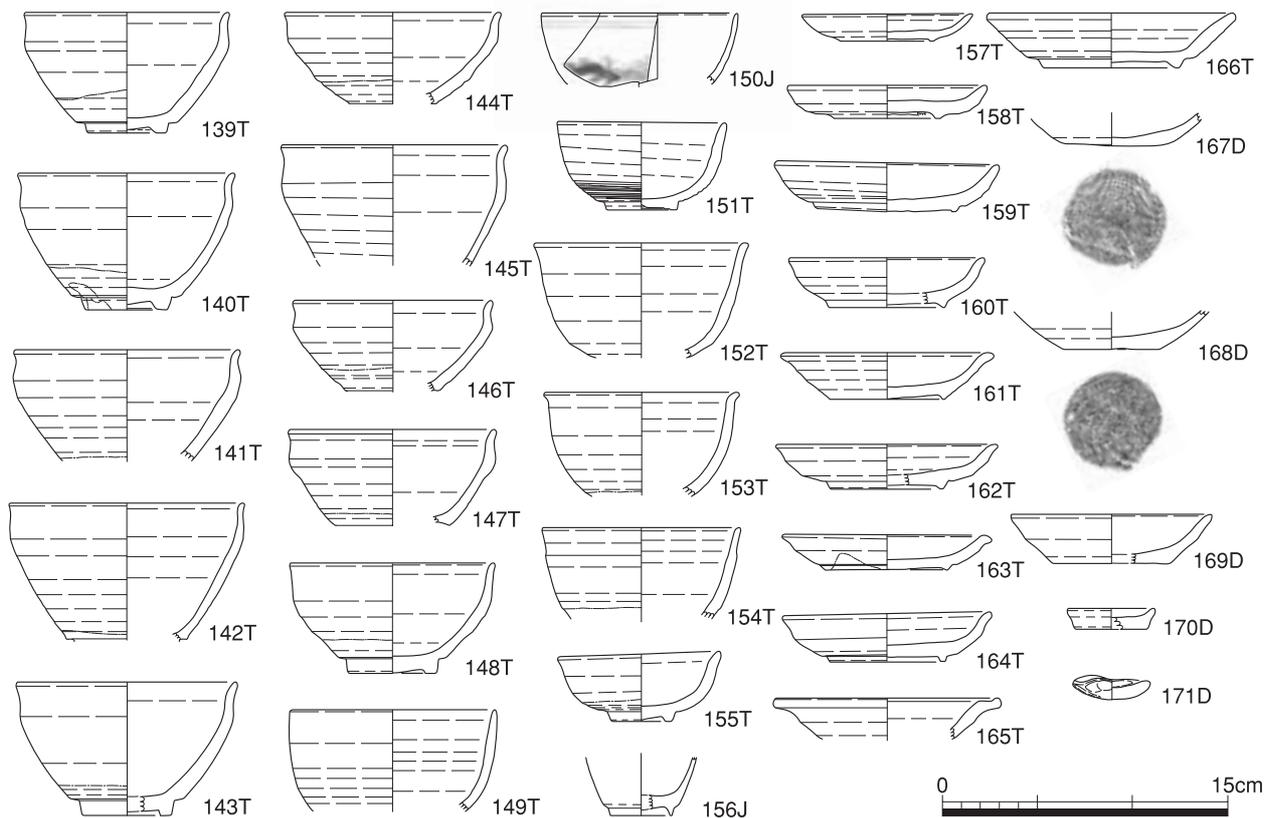
材質面からみてみると、土師質製品45.0%、陶器製品54.7%、磁器製品0.3%で、土師質製品の比率が下がり陶器製品の比率が高く、戦国時代の遺物組成よりも江戸時代のものに近い様相を示しているようである。



第97図 98 D S D 0002 出土陶磁器類用途組成図

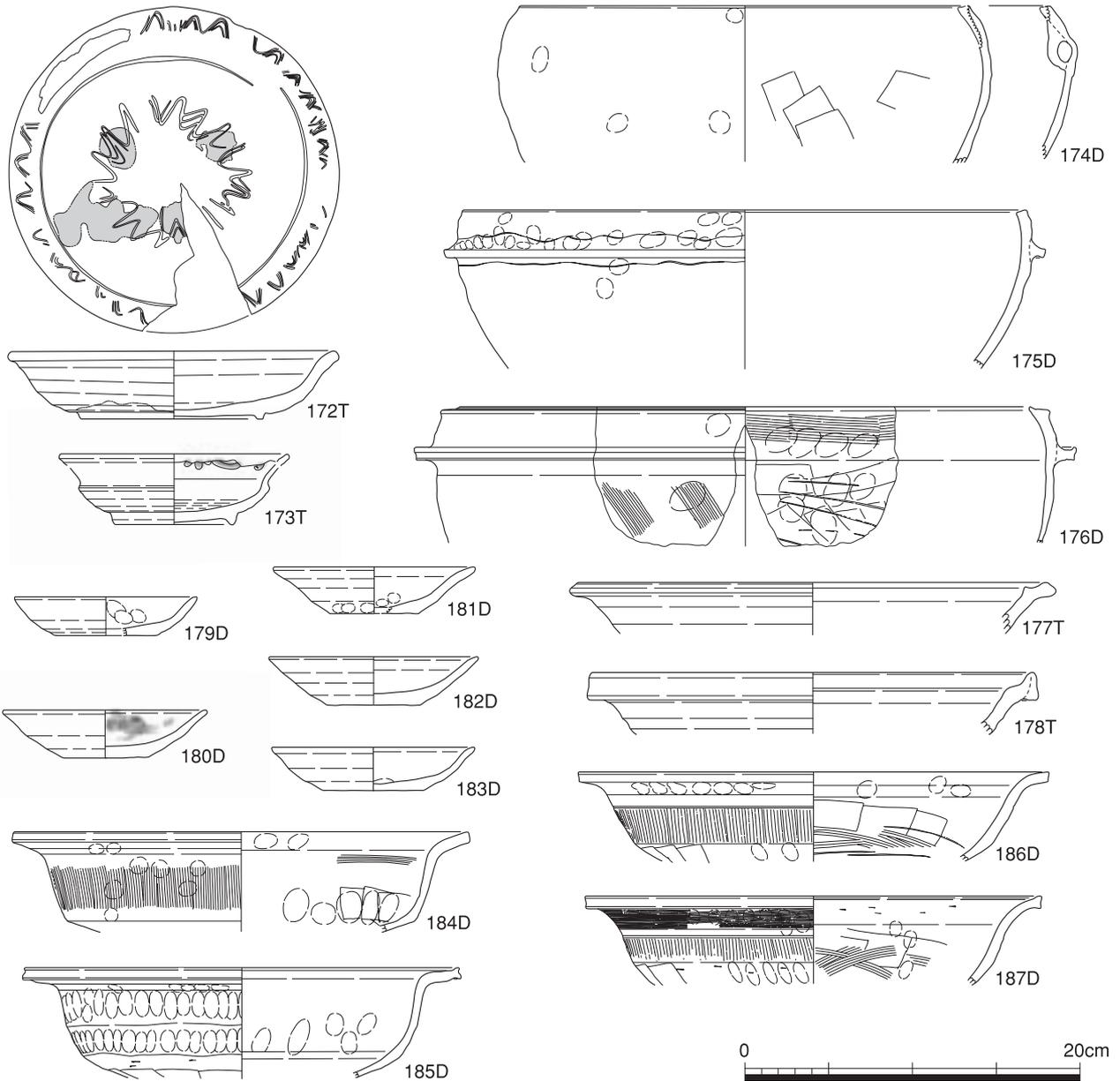
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他
供膳具	椀		60	1		61	33	1		34		66	2		68
	小椀		8			8	2			2		2	1		3
	皿	46	56			102	23	23		46	75	33			108
	鉢		13			13	6			6	6				6
	その他														
	小計	46	137	1		184	23	64	1	88	75	107	3	185	
調理具	鍋・釜	71				71	62			62	357	2			359
	鉢											1			1
	播鉢		6			6		6		6		32			32
	その他														
	小計	71	6			77	62	6		68	357	35		392	
貯蔵具	瓶														
	壺		1			1		1		1		4			4
	甕A		1			1		1		1		7			7
	甕B											1			1
	その他														
	小計		2			2		2		2		12			12
灯火具		17			17	9			9	18				18	
火具			18		18		9		9		14			14	
化粧具															
神仏具															
喫煙具															
調度具	蓋											1		1	
合計		134	163	1		298	94	81	1	176	450	169	3	622	

第8表 98 D S D 0002 出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
139	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	6.4	(10.6)	—	4.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美		25	E-420
140	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	7.3	(11.2)	—	4.3	鉄釉	鉄釉	瀬・美		25	E-421
141	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残5.9	(11.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-422
142	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残7.2	(12.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-423
143	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	7.1	(11.4)	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-424
144	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残4.9	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-425
145	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残6.2	11.8	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-426
146	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残4.8	(10.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-427
147	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残5.1	(10.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-428
148	98D	SD0002	供膳具	椀	天目椀	5.8	(10.8)	—	(4.5)	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-429
149	98D	SD0002	供膳具	椀	丸椀	残5.4	(10.8)	—	—	灰釉	灰釉	肥前			E-430
150	98D	SD0002	供膳具	椀	丸椀	残3.8	(10.4)	—	—	—	—	肥前	染付		E-431
151	98D	SD0002	供膳具	椀	丸椀	4.7	8.8	—	3.7	長石釉	長石釉	瀬・美	削出し高台、糸切り痕	25	E-432
152	98D	SD0002	供膳具	椀	端反椀	残6.1	(11.3)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	灰釉白濁		E-433
153	98D	SD0002	供膳具	椀	端反椀	残5.5	(10.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-434
154	98D	SD0002	供膳具	椀	端反椀	残4.8	(10.4)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-435
155	98D	SD0002	供膳具	小椀	丸椀	3.7	8.4	—	3.2	長石釉	長石釉	瀬・美	胎部トチン痕	25	E-436
156	98D	SD0002	供膳具	小椀	その他	残3.1	—	—	(3.2)	—	—	肥前	見込み・高台砂融着		E-437
157	98D	SD0002	供膳具	皿	丸皿	1.4	(8.9)	—	(4.9)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内トチン融着		E-438
158	98D	SD0002	供膳具	皿	丸皿	1.8	(10.4)	—	(5.7)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内輪トチン融着		E-439
159	98D	SD0002	供膳具	皿	丸皿	2.7	11.7	—	7.2	長石釉	長石釉	瀬・美	高台剥離痕	25	E-440
160	98D	SD0002	供膳具	皿	端反皿	2.6	(10.2)	—	(6.2)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-441
161	98D	SD0002	供膳具	皿	端反皿	2.5	(10.6)	—	6.1	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕		E-442
162	98D	SD0002	供膳具	皿	端反皿	2.4	(11.4)	—	(5.9)	長石釉	長石釉	瀬・美			E-443
163	98D	SD0002	供膳具	皿	端反皿	1.9	10.2	—	6.4	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台内トチン痕		E-444
164	98D	SD0002	供膳具	皿	端反皿	2.4	10.8	—	6.2	灰釉	灰釉	瀬・美	内面灰融着、高台内トチン痕	25	E-445
165	98D	SD0002	供膳具	皿	折縁皿	残2.2	(11.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-446
166	98D	SD0002	供膳具	皿	稜皿	2.9	(12.8)	—	7.2	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み・高台内トチン痕	25	E-447
167	98D	SD0002	供膳具	皿	土師器ⅢA	残1.5	—	—	5.1	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-448
168	98D	SD0002	供膳具	皿	土師器ⅢA	残2.0	—	—	4.8	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-449
169	98D	SD0002	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.6	(10.6)	—	(6.2)	ナデ	ナデ	不明			E-450
170	98D	SD0002	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.1	(4.5)	—	(3.7)	ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-451
171	98D	SD0002	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.3	4.1	—	—	指押え	指押え	不明		25	E-452

第98図 98 D S D 0002 ① (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
172	98D	SD0002	供膳具	鉢	端反鉢	4.1	19.3	—	10.8	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉散らし、線刻、見込み・高台内トチン痕	26	E-453
173	98D	SD0002	供膳具	鉢	織部	4.3	(13.6)	—	7.0	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵、高台内トチン痕、向付か	26	E-454
174	98D	SD0002	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.4	(26.8)	(29.6)	—	ナデ+ナズリ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-455
175	98D	SD0002	調理具	鍋・釜	羽釜	残9.6	(33.6)	(34.4)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、器壁剥離		E-456
176	98D	SD0002	調理具	鍋・釜	羽釜	残8.2	(34.0)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-457
177	98D	SD0002	調理具	播鉢	I類	残3.9	(27.9)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-458
178	98D	SD0002	調理具	播鉢	Ⅲ類	残3.7	(26.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-459
179	98D	SD0002	灯火具	皿	灯明皿	2.3	(10.8)	—	(6.0)	指押え+ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内面油煙付着		E-460
180	98D	SD0002	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(12.0)	—	(4.8)	ナデ	ナデ	不明	内面油煙付着		E-461
181	98D	SD0002	灯火具	皿	灯明皿	2.8	(12.0)	—	(5.2)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着		E-462
182	98D	SD0002	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(12.4)	—	5.4	ナデ	ナデ	不明	外面・底部に油煙付着		E-463
183	98D	SD0002	灯火具	皿	灯明皿	2.6	(12.0)	—	(6.1)	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、内外面油煙付着		E-464
184	98D	SD0002	火 具	鉢	火鉢	残6.0	(27.0)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面煤付着		E-465
185	98D	SD0002	火 具	鉢	火鉢	残6.5	(25.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナズリ	不明	内面煤付着	26	E-466
186	98D	SD0002	火 具	鉢	火鉢	残5.3	(29.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面煤付着		E-467
187	98D	SD0002	火 具	鉢	火鉢	残5.3	(27.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面煤付着		E-468

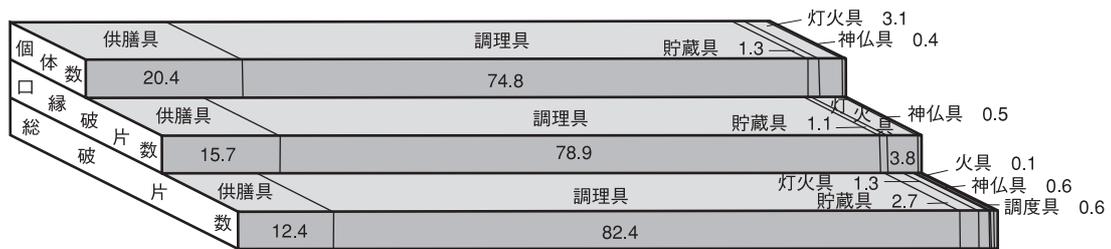
第99図 98 D S D 0002② (1:4)

98 E S D 0004 本遺構の時期は、16世紀代から18世紀中葉までである。

屋敷地を区画する溝であるが、前章でも述べたように江戸時代後期の遺物を一部含んでいる可能性がある。出土遺物は、総破片数714点、接合前口縁破片数185点、個体数18.83個体である。

用途別では、供膳具3.83個体（20.4%）、調理具14.08個体（74.8%）、貯蔵具0.25個体（1.3%）、灯火具0.58個体（3.1%）、神仏具0.08個体（0.4%）である。火具・調度具は破片が出土しているが、化粧具・喫煙具・蓋類は出土していない。供膳具では椀類対皿類の比率が1：2.55と平均値に近い数値を示している。調理具では、鍋・釜類対挿鉢の比率が5.50：1であるように、鍋・釜類が84.6%と低下し挿鉢の出土量が僅かながら増えている。鍋・釜類では、内耳鍋Aが76.9%と高く、羽釜9.1%、内耳鍋B 8.4%、内耳鍋C 3.5%、茶釜形鍋2.1%で、焙烙は確認していない。また、神仏具の個体数は少量であるが、仏餉具が数点まとまって出土していることが特徴である。

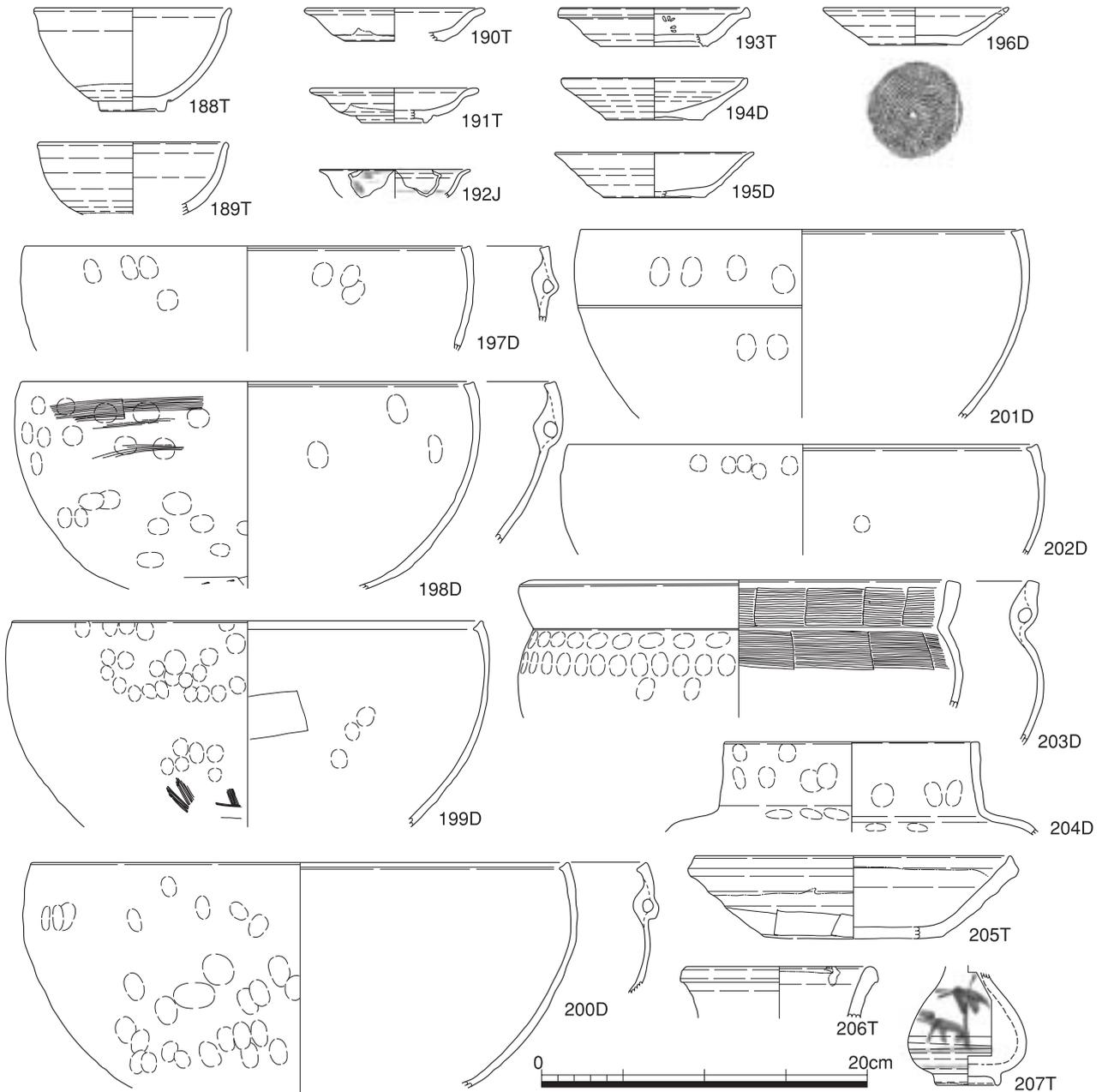
材質面からみてみると、土師質製品73.9%、陶器製品25.7%、磁器製品0.4%で、土師質製品の占める割合が高いことがわかる。



第100図 98 E S D 0004 出土陶磁器類用途組成図

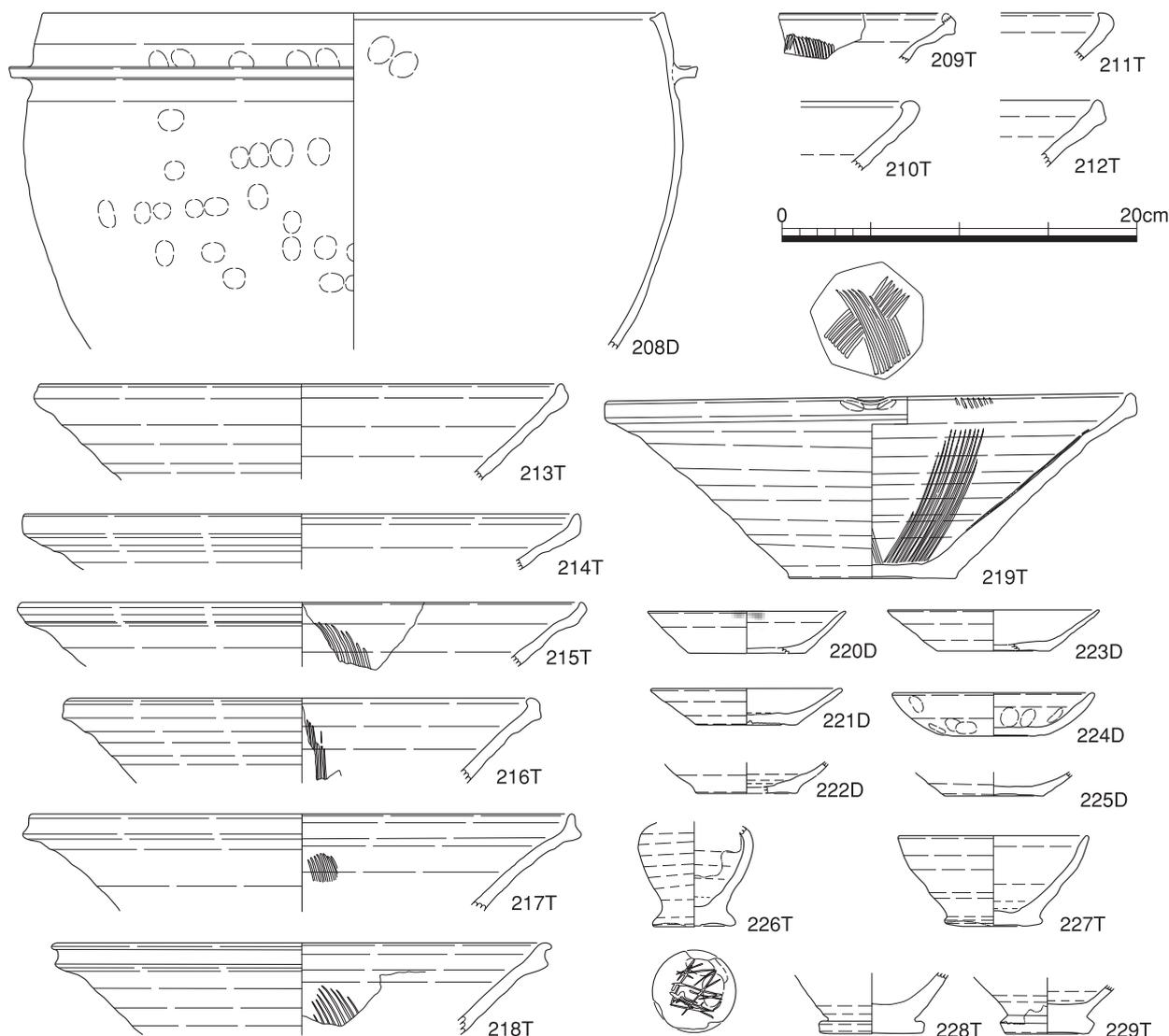
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		11			11		6			6		21			21
	小椀		2			2		1		1		1	1		2	
	皿	17	10	1		28	14	5	1	20	52	10	1		63	
	鉢		5			5		2		2		3			3	
	その他															
	小計	17	28	1		46	14	14	1	29	52	35	2		89	
調理具	鍋・釜	143				143	122			122	532				532	
	挿鉢		26			26		24		24		56			56	
	瓶															
	その他															
	小計	143	26			169	122	24		146	532	56			588	
貯蔵具	瓶											1			1	
	壺		2			2		1		1		11			11	
	甕A		1			1		1		1		6			6	
	甕B											1			1	
	鉢															
	その他															
	小計		3			3		2		2		19			19	
灯火具		7			7	7				7	9				9	
火具														1	1	
化粧具																
神仏具			1		1		1			1		4			4	
喫煙具																
調度具												4			4	
蓋																
合計		167	58	1		226	143	41	1	185	593	118	2	1	714	

第9表 98 E S D 0004 出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
188	98E	SD0004	供膳具	椀	天目椀	6.4	(12.0)	—	7.9	鉄釉	鉄釉+炭化層	瀬・美			E-469
189	98E	SD0004	供膳具	椀	丸椀	残4.5	(11.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-470
190	98E	SD0004	供膳具	皿	端反皿	残2.1	(10.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-471
191	98E	SD0004	供膳具	皿	端反皿	2.2	(10.4)	—	(4.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕		E-472
192	98E	SD0004	供膳具	皿	端反皿	残1.8	(9.2)	—	—	—	—	肥前	染付		E-473
193	98E	SD0004	供膳具	皿	折縁皿	2.4	(11.4)	—	(6.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	印花文、釉白濁、二次的に火を受けている		E-474
194	98E	SD0004	供膳具	皿	土師器皿A	2.7	(11.3)	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部回転糸切り後ナデ消し、板状圧痕		E-475
195	98E	SD0004	供膳具	皿	土師器皿A	2.8	(12.2)	—	(6.2)	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-476
196	98E	SD0004	供膳具	皿	土師器皿A	2.3	(11.4)	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	口縁部・底部に焼成後穿孔、底部回転糸切り痕	25	E-477
197	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.5	(27.4)	(28.0)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤・炭化物付着		E-478
198	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.8	(27.8)	(28.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤付着		E-479
199	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.8	(28.9)	(30.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤・炭化物付着		E-480
200	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残14.9	(33.2)	(34.1)	—	指押え+ナデか	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤・炭化物付着		E-481
201	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残11.7	(27.2)	(28.0)	—	ナデか	指押え+ナデか	不明	内面摩滅、外面煤・炭化物付着		E-482
202	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.9	(28.8)	(29.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面摩滅、外面煤付着		E-483
203	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残10.2	25.7	26.8	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、全体に摩滅		E-484
204	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残5.6	(15.6)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体摩滅		E-485
205	98E	SD0004	調理具	鉢	その他	5.1	(19.4)	—	(10.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内面摩滅	26	E-486
206	98E	SD0004	貯蔵具	壺	その他	残3.2	(11.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	四耳壺		E-487
207	98E	SD0004	貯蔵具	瓶	徳利	残7.4	—	7.3	3.7	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵(笹文)		E-488

第101図 98 E S D 0004 ① (1 : 4)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
208	98E	SD0004	調理具	鍋・釜	羽釜	残19.1	(35.0)	(37.2)	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	全体摩滅、外面煤・炭化物付着		E-489
209	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残2.8	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数13本か		E-490
210	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残4.0	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-491
211	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残2.7	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-492
212	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残3.8	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-493
213	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残5.4	(29.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-494
214	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残3.2	(31.1)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-495
215	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残3.7	(31.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-496
216	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残4.8	(26.1)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-497
217	98E	SD0004	調理具	掃鉢	I類	残5.5	(30.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-498
218	98E	SD0004	調理具	掃鉢	Ⅲ類	残5.2	(27.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数9本か		E-499
219	98E	SD0004	調理具	掃鉢	Ⅲ類	10.3	29.5	—	9.3	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕、内外面トチン痕、櫛目数12本	26	E-500
220	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	2.4	(11.0)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	不明	口縁部一部油煙付着、底部回転糸切り痕		E-501
221	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	2.1	(10.6)	—	(5.5)	ナデ	ナデ	不明	内外面油煙付着、底部回転糸切り痕		E-502
222	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	残1.8	—	—	(5.4)	ナデか	ナデか	不明	全体摩滅、内面一部油煙付着、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-503
223	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	2.3	(11.8)	—	(6.4)	ナデか	ナデか	不明	全体摩滅、内面一部油煙付着、見込み強い指ナデか、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-504
224	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	2.5	(11.2)	—	(4.4)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着		E-505
225	98E	SD0004	灯火具	皿	灯明皿	残1.4	—	—	(5.5)	ナデ	ナデ	不明	内外面油煙付着、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-506
226	98E	SD0004	調度具	花生	壺型	残6.0	—	6.5	4.5	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-507
227	98E	SD0004	神仏具	仏餉具	—	5.2	(10.5)	—	(5.5)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-508
228	98E	SD0004	神仏具	仏餉具	—	残3.5	—	—	(5.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-509
229	98E	SD0004	神仏具	仏餉具	—	残3.2	—	—	4.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-510

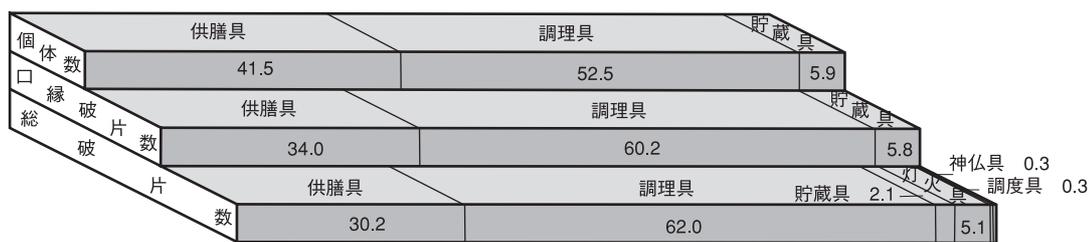
第102図 98 E S D 0004 ② (1 : 4)

98 B S D 0017 本遺構の時期は、16世紀代から17世紀前半頃と思われる。

これも屋敷地を区画する溝で、出土した遺物は総破片数334点、接合前口縁破片数103点、個体数9.83個体である。出土量は少ないが、98 B S D 0014などと同時期の遺構として重要である。

用途別にみても、供膳具4.08個体(41.5%)、調理具5.17個体(52.5%)、灯火具0.58個体(5.9%)である。貯蔵具・神仏具・調度具は破片が出土しているが、火具・化粧具・喫煙具・蓋類は出土していない。出土量が少ないので言い切れないことが多いが、供膳具の椀類対皿類の比率は1:5.13と皿類が多く出土していることや、調理具において鍋・釜類が87.1%と優位を占めているところは、これまで確認してきた遺物組成と同様の傾向を示している。鍋・釜類では、内耳鍋Aが69.8%、羽釜22.6%、内耳鍋Bが7.5%と続き、内耳鍋C・茶釜形鍋・焙烙は確認していない。また灯火具の比率が低いことも、供膳具の土師器皿を灯明皿とカウントすれば10.59個体(33.9%)となり、供膳具が1.33個体(13.8%)と減少して、名古屋城三の丸遺跡における組成と大差ないことがわかる。

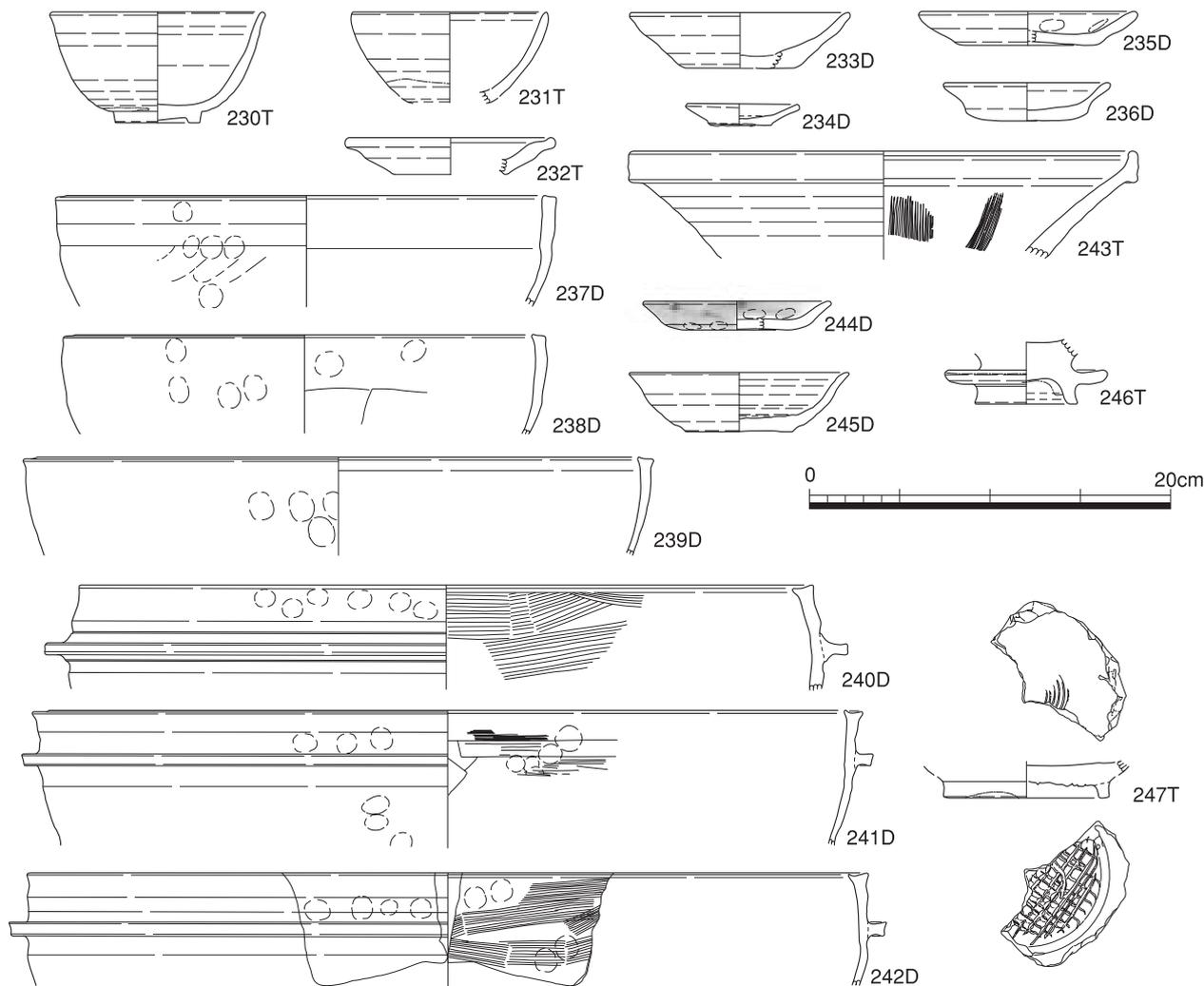
材質面からみると、土師質製品78.8%、陶器製品21.2%である。土師器皿や鍋・釜類が多く出土していることから、土師質製品の比率が平均値よりも高くなっている。磁器製品は出土せず、その他に分類した瓦質製品が調度具で1点出土している。



第103図 98 B S D 0017 出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		8			8		6			6		17			17
	小椀												1			1
	皿	33	8			41	24	5			29	70	12			82
	鉢												1			1
	その他															
	小計	33	16			49	24	11			35	70	31			101
調理具	鍋・釜	53	1			54	54	1			55	185	1			186
	鉢												2			2
	播鉢		8			8		7			7		18			18
	その他												1			1
	小計	53	9			62	54	8			62	185	22			207
貯蔵具	瓶												4			4
	壺															
	甕A												1			1
	甕B												2			2
	鉢															
	その他															
	小計											7				7
灯火具		7				7	6				6	17				17
火具																
化粧具																
神仏具													1			1
喫煙具																
調度具															1	1
蓋																
合計		93	25			118	84	19			103	272	61		1	334

第10表 98 B S D 0017 出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
230	98B	SD0017	供膳具	椀	天目椀	6.2	(10.6)	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	体部トチン融着	25	E-511
231	98B	SD0017	供膳具	椀	天目椀	残5.1	(10.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-512
232	98B	SD0017	供膳具	皿	折縁皿	残2.1	(11.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-513
233	98B	SD0017	供膳具	皿	土師器皿A	3.1	(12.0)	—	(6.2)	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-514
234	98B	SD0017	供膳具	皿	土師器皿A	1.3	6.1	—	3.5	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-515
235	98B	SD0017	供膳具	皿	土師器皿B	1.9	(11.8)	—	(7.4)	指押え+ナデか	ナデか	不明	底部板状圧痕、全体に摩滅		E-516
236	98B	SD0017	供膳具	皿	土師器皿B	2.1	(9.7)	—	(7.1)	ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-517
237	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残6.2	(26.4)	(27.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-518
238	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.5	(25.4)	(27.2)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-519
239	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.5	(33.4)	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-520
240	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	羽釜	残5.8	(40.6)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤僅かに付着		E-521
241	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	羽釜	残7.6	(44.2)	(45.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面煤付着		E-522
242	98B	SD0017	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.3	(46.6)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-523
243	98B	SD0017	調理具	搦鉢	皿類	残6.0	(27.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数17本		E-524
244	98B	SD0017	灯火具	皿	灯明皿	1.6	(10.2)	—	(5.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着		E-525
245	98B	SD0017	灯火具	皿	灯明皿	3.3	(12.0)	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内面・底部油煙付着		E-526
246	98B	SD0017	その他	その他	その他	残3.6	—	—	5.4	鉄釉	鉄釉	瀬・美	釉発色せず、天目台か仏匱具か	26	E-527
247	98B	SD0017	供膳具	鉢	その他	残2.1	—	—	(8.9)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内卸目、剥離痕	26	E-528

第104図 98 B S D 0017 (1 : 4)

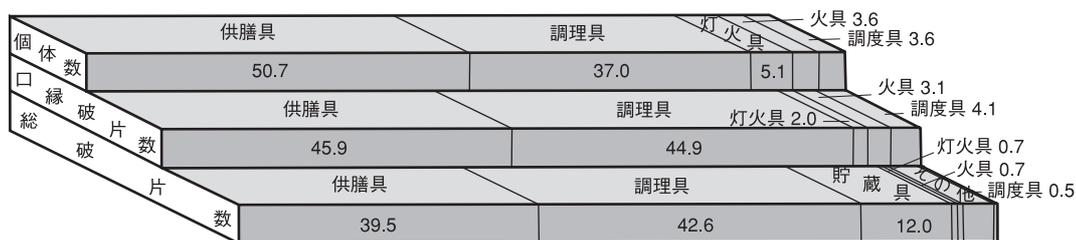
98 B S D 0002 本遺構の時期は、16世紀後半から18世紀前半と思われる。

屋敷地を区画する溝で、出土遺物は総破片数408点、接合前口縁破片数98点、個体数11.50個体である。出土量は少ないが、同時期の遺構として見ておきたい。

用途別にみると、供膳具5.83個体(50.7%)、調理具4.25個体(37.0%)、灯火具0.58個体(5.1%)、火具0.42個体(3.6%)、化粧具0.42個体(3.6%)である。供膳具の比率が高くなっており、

椀類対皿類も1.23：1と椀類が皿類を上回っている。このあたりは江戸時代の要素が強くなってきたようである。それにより調理具の比率が下がり、鍋・釜類と播鉢の比率も2.77：1と近接するようになってきている。鍋・釜類では、内耳鍋Aが66.7%と高く、内耳鍋B 13.9%、羽釜11.1%、茶釜形鍋5.6%、焙烙2.8%と続き、内耳鍋Cは確認していない。火具・化粧具については、火鉢と鬘盥が出土していることが大きく影響しているようである。

材質面からみてみると、土師質製品が37.0%と低いのに対し陶器製品は57.2%と高く、ここからも近世的な遺物組成をみることができる。磁器製品は2.9%とやや高く供膳具を中心に出土しており、その他に分類した瓦質製品も2.9%となっている。



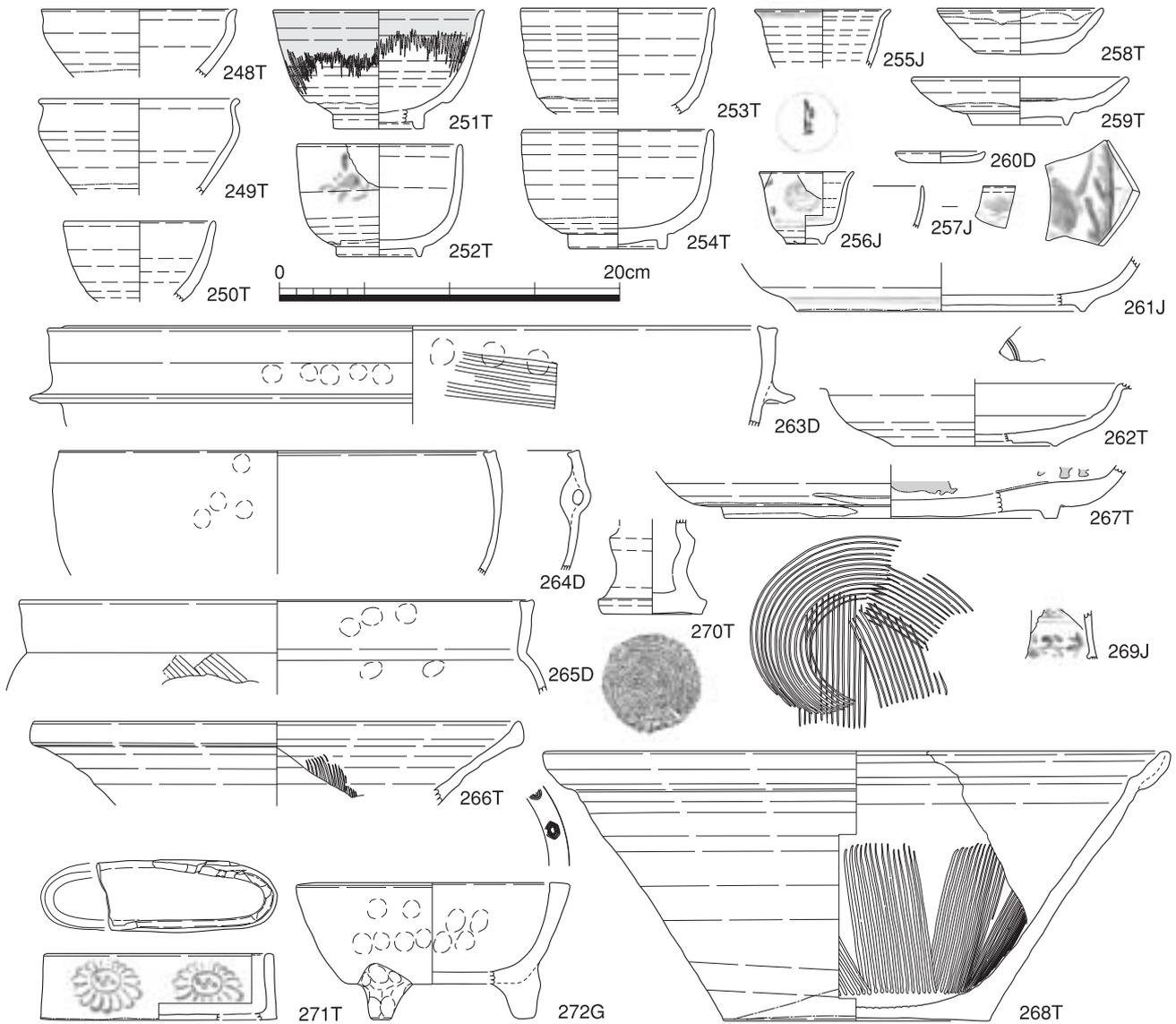
第105図 98 B S D 0002 出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		36	1		37		26	1		27		85	1		86
	小椀			3		3			2		2		2	2		4
	皿	10	20			30	6	10			16	32	21	1		54
	鉢												17			17
	その他															
	小計	10	56	4		70	6	36	3		45	32	125	4		161
調理具	鍋・釜	36				36	32				32	127	2			129
	鉢		2			2		2		2		2			2	
	播鉢		13			13		10		10		43			43	
	瓶															
	その他															
	小計	36	15			51	32	12		44	127	47			174	
貯蔵具	瓶											10	1		11	
	壺											8			8	
	甕A											27			27	
	甕B											3			3	
	鉢															
	その他															
	小計										48	1		49		
灯火具		5			2	7	1			2	2			1	3	
火具			3		2	5		2		3		2		1	3	
化粧具			5			5		4		4		14			14	
神仏具												1		1	2	
喫煙具																
調度具												2			2	
蓋																
合計		51	79	4	4	138	39	54	3	2	98	161	239	5	3	408

第11表 98 B S D 0002 出土陶磁器類集計表

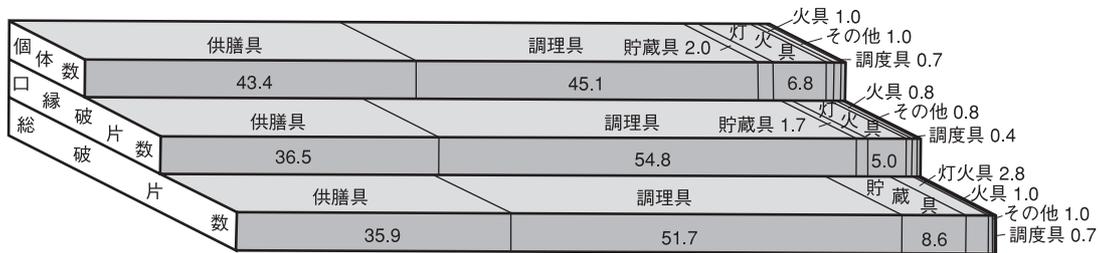
### その他のSD合計

前述以外で、この時期に属する溝から出土した遺物をまとめたものを「その他のSD合計」として扱う。出土遺物は、総破片数1,118点、接合前口縁破片数242点、個体数24.58個体である。前述までの溝に比べ、神仏具・喫煙具などの遺物が見られ、やや新しい時期の様相も伺える。



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
248	98B	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残4.0	(11.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-529
249	98B	SD0002	供膳具	椀	天目椀	残5.7	(11.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-530
250	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	残4.8	(8.8)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-531
251	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	7.1	(12.2)	—	(5.4)	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け		E-532
252	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	6.7	(9.5)	—	4.8	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (山水文か)	25	E-533
253	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	残6.3	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-534
254	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	7.1	(10.9)	—	(5.6)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-535
255	98B	SD0002	供膳具	小椀	端反椀	残3.5	(7.8)	—	—	—	—	肥前	染付		E-536
256	98B	SD0002	供膳具	小椀	端反椀	4.3	5.6	—	2.2	—	—	肥前	染付	25	E-537
257	98B	SD0002	供膳具	椀	丸椀	残2.5	—	—	—	—	—	肥前	色絵 (黒・朱)		E-538
258	98B	SD0002	供膳具	皿	丸皿	2.8	9.6	—	5.0	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み摩滅痕、口縁部打ち欠き、底部回転糸切り痕	25	E-539
259	98B	SD0002	供膳具	皿	丸皿	2.9	(12.6)	—	5.7	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み輪剥ぎ、着込み・高台剥離痕	25	E-540
260	98B	SD0002	供膳具	皿	土師器皿A	0.7	(5.6)	—	3.8	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部回転糸切り痕		E-541
261	98B	SD0002	供膳具	皿	その他	残2.9	—	—	(16.6)	—	—	中国	染付 (草花文)	26	E-542
262	98B	SD0002	供膳具	鉢	折縁鉢	残3.7	—	—	(9.5)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み線刻、蛇ノ目高台		E-543
263	98B	SD0002	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.0	(40.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-544
264	98B	SD0002	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残7.3	(25.6)	(26.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、全体に摩滅		E-545
265	98B	SD0002	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残5.6	(30.1)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、全体に摩滅		E-546
266	98B	SD0002	調理具	播鉢	Ⅲ類	残5.0	(28.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-547
267	98B	SD0002	供膳具	鉢	その他	残3.2	—	—	(19.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉筆散らし、見込み釉剥ぎ、高台内トチン痕		E-548
268	98B	SD0002	調理具	播鉢	Ⅶ類	15.9	(36.4)	—	15.4	鉄釉	鉄釉	瀬・美	節目数14本、内面摩滅・トチン痕、底部回転糸切り痕	26	E-549
269	98B	SD0002	貯蔵具	瓶	その他	残2.9	—	—	—	—	—	肥前	染付 (草花文)		E-550
270	98B	SD0002	調度具	花生	壺形	残5.6	—	5.4	6.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕	26	E-551
271	98B	SD0002	化粧具	鬘盤	—	3.9	(13.4)	—	14.0	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (花文か)、底部 (4.3) cm	26	E-552
272	98B	SD0002	火 具	鉢	火鉢	8.1	(14.1)	—	(10.1)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面炭化物付着、口縁部押印、全体に摩滅	26	E-553

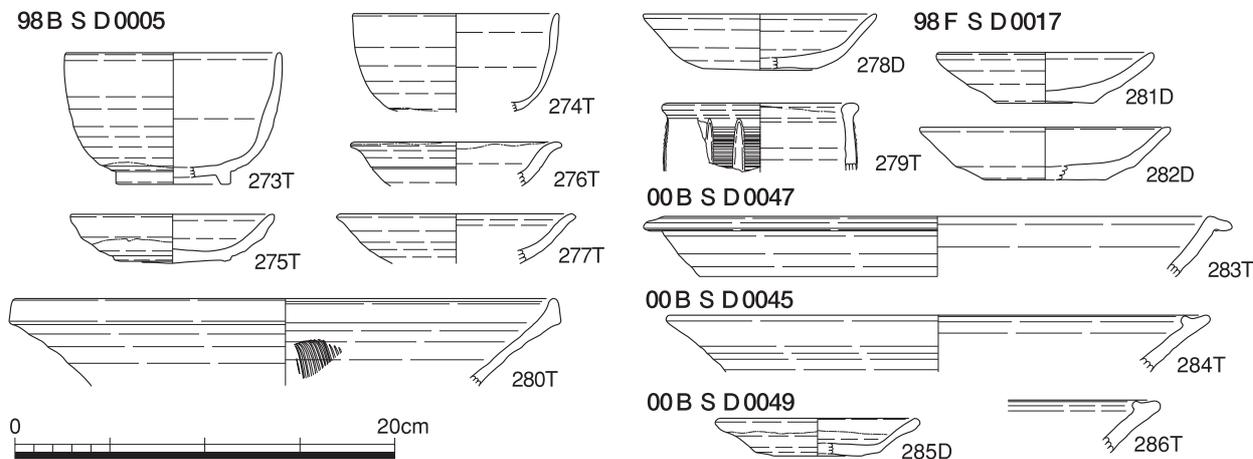
第106図 98 B S D 0002 (1 : 4)



第107図 その他のSD合計出土陶磁器類用途組成図

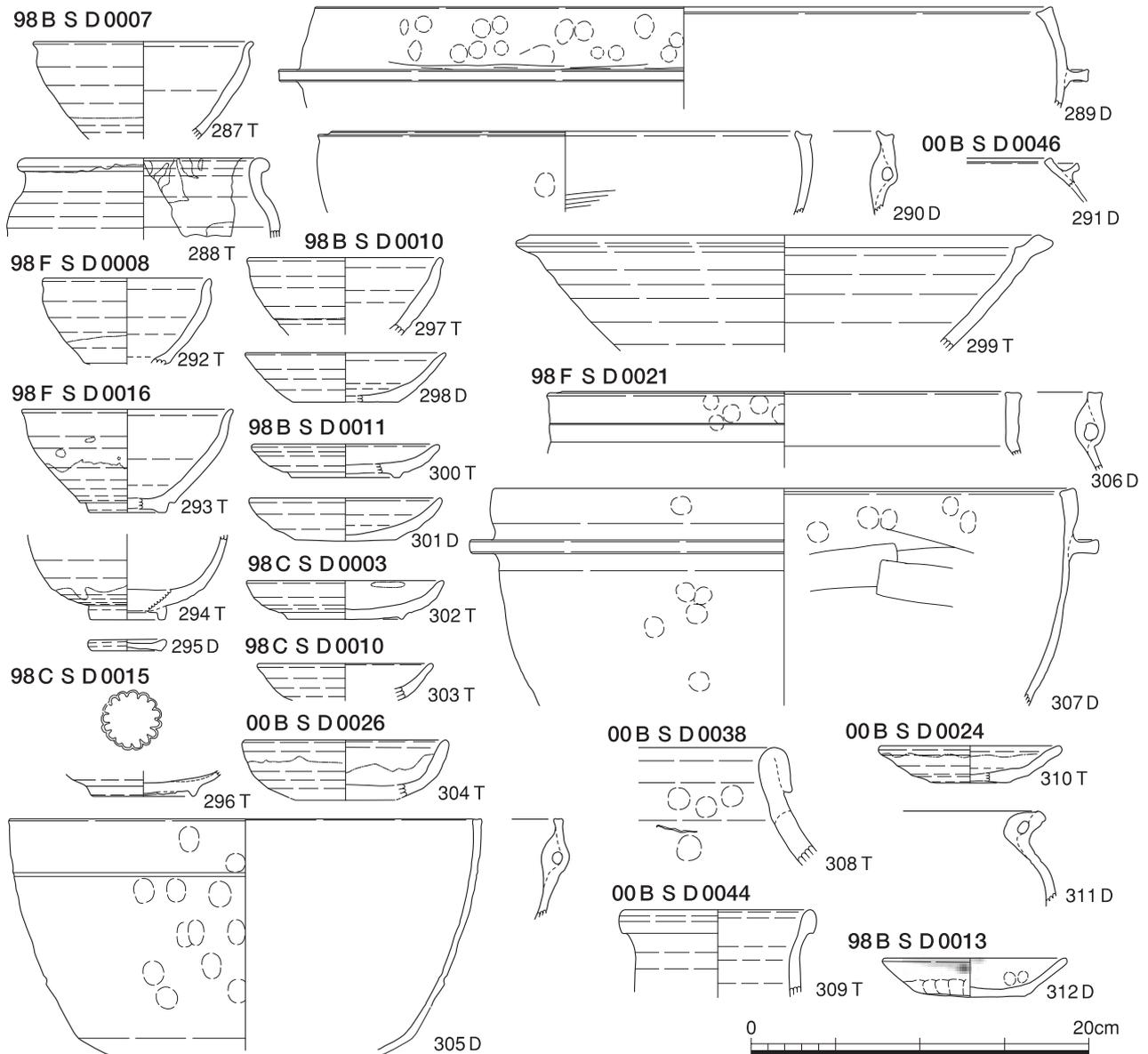
用途	器種	接合後口縁残存率				計	接合前口縁破片数				計	総破片数				計	
		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		
供膳具	碗		40			40		31			31		92	1		93	
	小碗		2			2		2		2		7			7		
	皿	50	29			79	29	19		48	240	36			276		
	鉢		7			7		7		7		25			25		
	その他																
	小計	50	78			128	29	59		88	240	160	1		401		
調理具	鍋・釜	112				112	109			109	500	3			503		
	鉢		2			2		2		2		6			6		
	搦鉢		19			19		21		21		67			67		
	瓶											1			1		
	その他																
	小計	112	21			133	109	23		132	500	77			577		
貯蔵具	瓶											3			3		
	壺		5			5		3		3		44			44		
	甕A		1			1		1		1		46			46		
	甕B											3			3		
	鉢																
	その他																
	小計		6			6		4		4		96			96		
灯火具		20				20	12			12	30	1			31		
火具			1		2	3		1		2		3		4	7		
化粧具																	
神仏具			1			1		1		1		1	1		2		
喫煙具			2			2		1		1		1			1		
調度具			2			2		1		1		1		1	2		
蓋			1			1		1		1		1			1		
合計			182	112		2	296	150	91		1	242	770	341	2	5	1118

第12表 その他のSD合計出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号	
			用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
273	98B	SD0005	供膳具	碗	丸碗	7.0	(11.2)	—	(6.0)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-554
274	98B	SD0005	供膳具	碗	丸碗	残5.2	(10.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-555
275	98B	SD0005	供膳具	皿	丸皿	2.6	(10.6)	—	(6.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕、高台摩滅痕		E-556
276	98B	SD0005	供膳具	皿	端反皿	残2.3	(10.8)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-557
277	98B	SD0005	供膳具	皿	土師器ⅢA	残2.6	(12.2)	—	—	ナデ	ナデ	不明			E-558
278	98B	SD0005	灯火具	皿	灯明皿	3.0	(12.2)	—	6.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、外面油煙付着		E-559
279	98B	SD0005	喫煙具	灰落し	—	残4.6	(9.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-560
280	98B	SD0005	調理具	搦鉢	I類	残4.7	(28.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本か		E-561
281	98F	SD0017	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.7	(11.2)	—	(5.0)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り後ナデ消し・板状圧痕、内面摩滅		E-562
282	98F	SD0017	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.8	(13.0)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-563
283	00B	SD0047	供膳具	鉢	折縁鉢	残3.2	(28.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬戸	古瀬戸後期、折縁大皿		E-564
284	00B	SD0045	調理具	搦鉢	Ⅱ類	残3.0	(28.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-565
285	00B	SD0049	供膳具	皿	端反皿	2.0	(10.4)	—	(4.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	底部回転糸切り痕		E-566
286	00B	SD0049	調理具	搦鉢	Ⅱ類	残2.8	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-567

第108図 その他のSD合計① (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区	調査区	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
287	98B	SD0007	供膳具	椀	天目椀	残5.8	(12.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-568	
288	98B	SD0007	貯蔵具	壺	無蓋壺	残4.7	(14.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-569	
289	98B	SD0007	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.1	(43.6)	(45.5)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	内面摩滅		E-570	
290	98B	SD0007	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残4.8	(27.4)	(29.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明			E-571	
291	00B	SD0046	調理具	鍋・釜	羽釜	残3.5	—	—	—	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-572	
292	98F	SD0008	供膳具	椀	天目椀	残5.2	(9.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-573	
293	98F	SD0016	供膳具	椀	天目椀	6.2	(12.4)	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉+炭化層	瀬・美	削り出し高台	25	E-574	
294	98F	SD0016	供膳具	椀	丸椀	残5.1	—	—	(4.4)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-575	
295	98F	SD0016	供膳具	皿	土師器皿A	0.7	4.4	—	4.1	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り後ナデ消し		E-576	
296	98C	SD0015	供膳具	皿	丸皿か	残1.5	—	—	(4.9)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み印花、高台内輪トチン融着	25	E-577	
297	98B	SD0010	供膳具	椀	天目椀	残4.6	(11.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-578	
298	98B	SD0010	供膳具	皿	土師器皿A	3.0	(12.8)	—	(7.2)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-579	
299	98B	SD0010	調理具	播鉢	IV類	残6.9	(30.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-580	
300	98B	SD0011	供膳具	皿	丸皿	2.0	(10.8)	—	(6.2)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕		E-581	
301	98B	SD0011	灯火具	皿	灯明皿	2.6	(11.2)	—	(6.2)	ナデ	ナデ	不明	見込み油煙付着		E-582	
302	98C	SD0003	供膳具	皿	丸皿	2.3	(11.5)	—	(6.8)	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台トチン痕	25	E-583	
303	00C	SD0010	供膳具	皿	丸皿	残2.2	(10.2)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-584	
304	00B	SD0026	供膳具	皿	丸皿	残3.5	(11.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-585	
305	00B	SD0026	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残13.8	(27.8)	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着、内面摩滅、外面一部器壁剥離		E-586	
306	98F	SD0021	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残4.5	(26.6)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-587	
307	98F	SD0021	調理具	鍋・釜	羽釜	残13.0	(34.4)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-588	
308	00B	SD0038	貯蔵具	甕A	その他	残7.1	—	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑			E-589	
309	00B	SD0044	貯蔵具	壺	その他	残5.2	(11.0)	—	—	ナデ	灰釉	瀬戸	古瀬戸、四耳壺か		E-590	
310	00B	SD0024	供膳具	皿	端反皿	2.3	(9.9)	—	(4.0)	灰釉	灰釉	瀬戸	古瀬戸後期、緑釉皿、底部回転系切り痕		E-591	
311	00B	SD0024	調理具	鍋・釜	内耳鍋C	残5.7	—	—	—	ナデか	ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅、外面刷毛目		E-592	
312	98B	SD0013	灯火具	皿	灯明皿	2.4	10.7	—	6.7	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕、内外面油煙付着	26	E-593	

第109図 その他のSD合計② (1:4)

98 C S E 0003 本遺構の時期は16世紀代と思われる。

98 C 区の溝に囲まれた屋敷地内にある井戸で、出土遺物は総破片数2,751点、接合前口縁破片数322点、個体数30.42個体である。

用途別にみても、供膳具4.05個体(14.8%)、調理具25.67個体(84.4%)、貯蔵具0.25個体(0.8%)となる。灯火具・調度具は破片のみ出土し、他の用途の遺物は出土していない。やや灯火具が少ないように見えるが、土師器皿を灯明皿と考えれば戦国時代の遺物組成に近似している。供膳具において椀類が出土していないこと、調理具においても鍋・釜類が98.7%と断然と高く播鉢の出土量が少ないこと、貯蔵具において破片ではあるが甕Aと分類した常滑産の甕類の出土量が多くなっていることなどがこの遺構の特徴としてあげられる。鍋・釜類では、内耳鍋Aがやはり76.3%と高く、羽釜19.1%、内耳鍋B 2.3%、茶釜形鍋1.3%、不明なものが1.0%で、内耳鍋C・焙烙は確認できていない。灯火具は破片しか出土しておらず、土師器皿を灯明皿と考えても1.83個体(6.0%)と少ない。

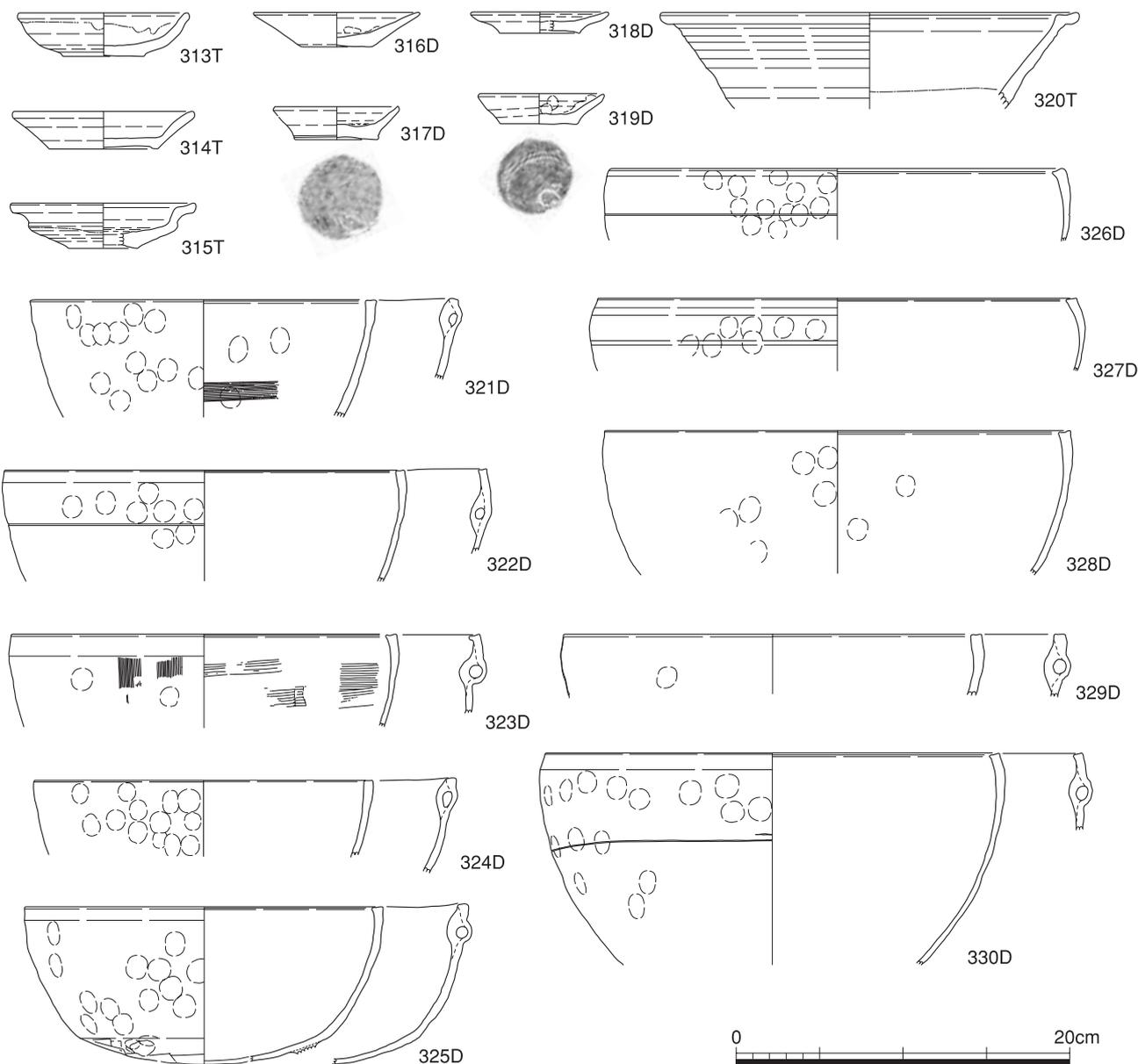
材質面でみても、土師質製品89.3%、陶器製品が10.7%となっている。磁器製品は破片が出土しているが、供膳具に限られている。



第110図 98 C S E 0003 出土陶磁器類用途組成図

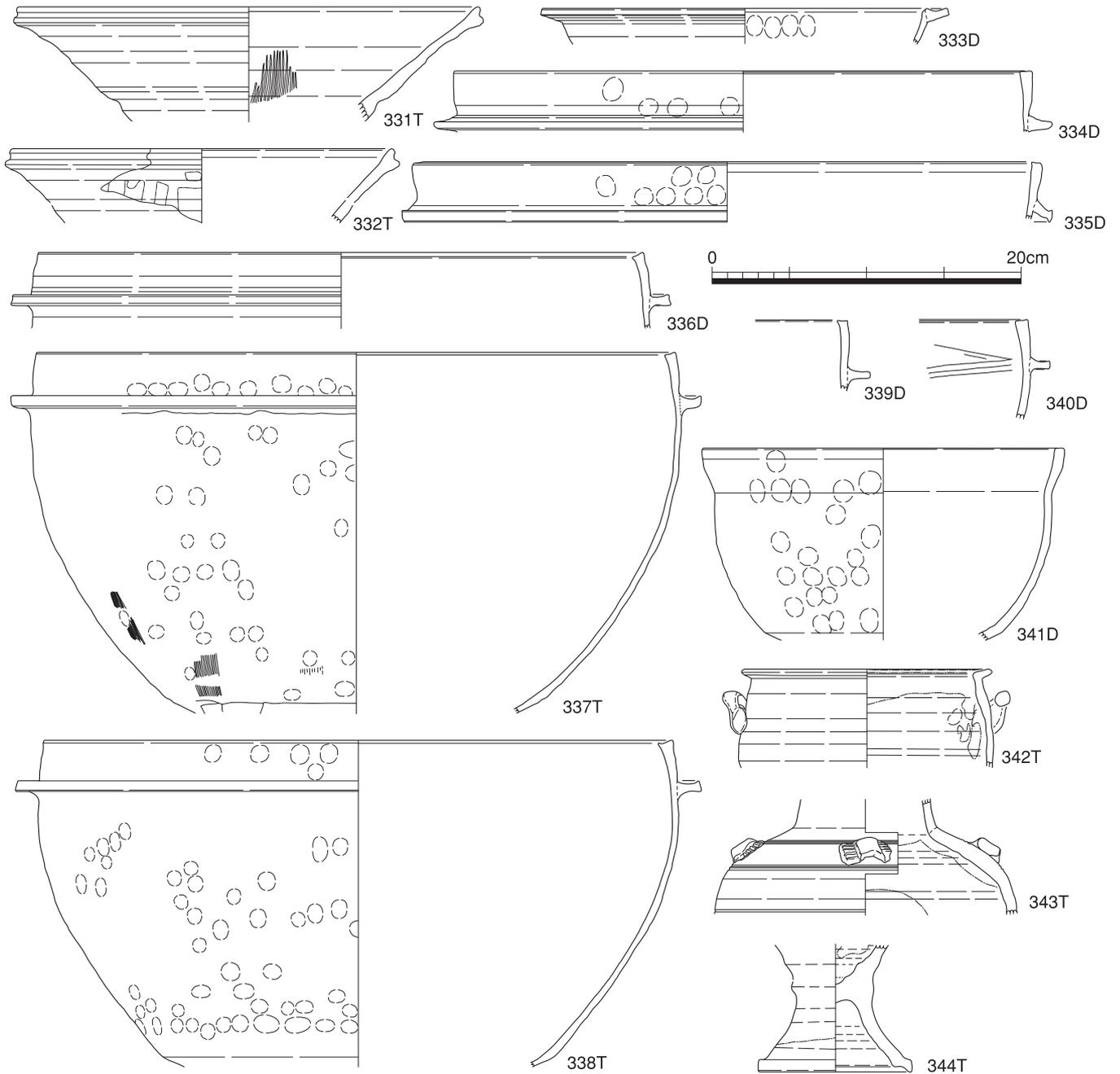
用途	器種	接合後口縁残存率				計	接合前口縁破片数				計	総破片数				計
		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他	
供膳具	椀															
	小椀															
	皿	22	31			53	5	16			21	6	23	16		45
	鉢		1			1		1			1		2			2
	その他															
	小計	22	32			54	5	17			22	6	25	16		47
調理具	鍋・釜	304				304	294				294	1946				1946
	鉢												1			1
	播鉢		4			4		5			5		730			730
	瓶													1		1
	その他													1		1
	小計	304	4			308	294	5			299	1946	732			2678
貯蔵具	瓶															
	壺		3			3		1			1		7			7
	甕A												14			14
	甕B															
	鉢															
	その他															
	小計		3			3		1			1		21			21
灯火具												2				2
火具																
化粧具																
神仏具																
喫煙具																
調度具													3			3
蓋																
合計		326	39			365	299	23			322	1954	781	16		2751

第13表 98 C S E 0003 出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
313	98C	SE0003	供膳具	皿	端反皿	2.7	(9.6)	—	4.4	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み強い指ナデ、底部回転糸切り痕	25	E-594
314	98C	SE0003	供膳具	皿	稜皿	2.3	(10.8)	—	(6.5)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みトチン痕、高台内輪トチン痕	25	E-595
315	98C	SE0003	供膳具	皿	折縁皿	2.7	(10.8)	—	(4.2)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕	25	E-596
316	98C	SE0003	供膳具	皿	土師器皿A	2.1	(9.9)	—	(4.2)	ナデか	ナデか	不明	全体摩滅		E-597
317	98C	SE0003	供膳具	皿	土師器皿A	2.0	(7.4)	—	5.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-598
318	98C	SE0003	供膳具	皿	土師器皿A	1.3	(8.1)	—	(4.8)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-599
319	98C	SE0003	供膳具	皿	土師器皿A	1.9	7.5	—	4.6	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-600
320	98C	SE0003	供膳具	鉢	折縁鉢	残5.8	(24.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	灰釉剥離		E-601
321	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残7.1	(20.6)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着・器壁一部剥離、内面やや摩滅		E-602
322	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.7	(24.0)	(24.4)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-603
323	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.6	(23.2)	(23.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面やや摩滅		E-604
324	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残4.6	(20.3)	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-605
325	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(9.5)	(21.4)	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-606
326	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残4.3	(27.1)	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-607
327	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残4.4	(28.8)	(29.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤僅かに付着、内面摩滅		E-608
328	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残8.7	(28.0)	(28.3)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着、内外面摩滅		E-609
329	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残3.6	(25.2)	(25.6)	—	ナデか	ナデか	不明	外面煤・炭化物付着、内面摩滅		E-610
330	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.8	(27.4)	(28.1)	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-611

第111図 98CSE0003①(1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
331	98C	SE0003	調理具	播鉢	Ⅱ類	残7.5	(29.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数13本か		E-612
332	98C	SE0003	調理具	播鉢	Ⅱ類	残4.9	(24.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-613
333	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残2.3	(23.7)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	不明	外面煤付着、内面やや摩滅		E-614
334	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残4.0	(37.4)	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデ	不明	銚下部分煤付着、内面摩滅		E-615
335	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残3.9	(39.6)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-616
336	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残5.0	(39.0)	—	—	ナデか	指押え+ナデか	不明	銚下部分煤付着、内外面摩滅		E-617
337	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残23.6	(41.4)	—	(23.6)	ナデか	指押え+ナデか	不明	外面煤付着、内面摩滅	26	E-618
338	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残21.3	(40.7)	—	(25.3)	ナデか	指押え+ナデか	不明	外面煤付着、内面摩滅	26	E-619
339	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残4.6	—	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	内面摩滅		E-620
340	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.5	—	—	—	ナデか	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-621
341	98C	SE0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残12.5	(23.4)	—	—	ナデか	指押え+ナデか	不明	外面煤・炭化物付着、内面摩滅		E-622
342	98C	SE0003	貯蔵具	壺	蓋付壺	残6.4	(15.8)	16.4	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-623
343	98C	SE0003	貯蔵具	壺	その他	残7.6	—	(19.6)	—	ナデ	ナデ	灰釉	古瀬戸、四耳壺	26	E-624
344	98C	SE0003	調度具	花生	壺形	残8.3	—	—	9.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-625

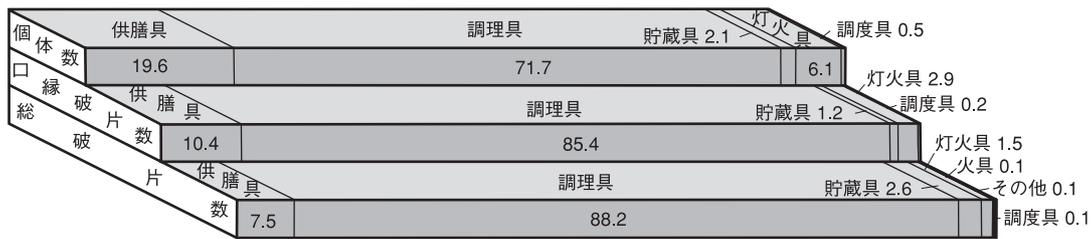
第112図 98 C S E 0003 ② (1 : 4)

98 B S E 0001 本遺構の時期は、16世紀代から17世紀前半と思われる。

98 B 区の屋敷地と想定されるところで検出された井戸で、出土遺物は総破片数1,973点、接合前口縁破片数598点、個体数63.92個体である。

用途別にみても、供膳具12.50個体(19.6%)、調理具45.83個体(71.7%)、貯蔵具1.33個体(2.1%)、灯火具3.92個体(6.1%)、調度具0.33個体(0.5%)で、火具・神仏具は破片のみ出土し、化粧具・喫煙具は出土していない。供膳具の椀類対皿類は1:2.75であるが、土師器皿を灯明具と見ると13.3:1と椀類の出土量が極端に増加することになる。ここでも鉢類は出土していない。調理具においても、鍋・釜類対播鉢を見ると、22.9:1と圧倒的に鍋・釜類の出土が優勢を占めている。鍋・釜類では、内耳鍋Aが52.7%とやや減少し、内耳鍋B23.3%、羽釜19.5%、茶釜形鍋4.3%と続き、内耳鍋C・焙烙は確認していない。貯蔵具において、壺類の出土量が多いことも戦国時代の遺物組成に準じている。また蓋類が、総破片数・接合前口縁破片数とも2点、個体数0.58個体出土している。

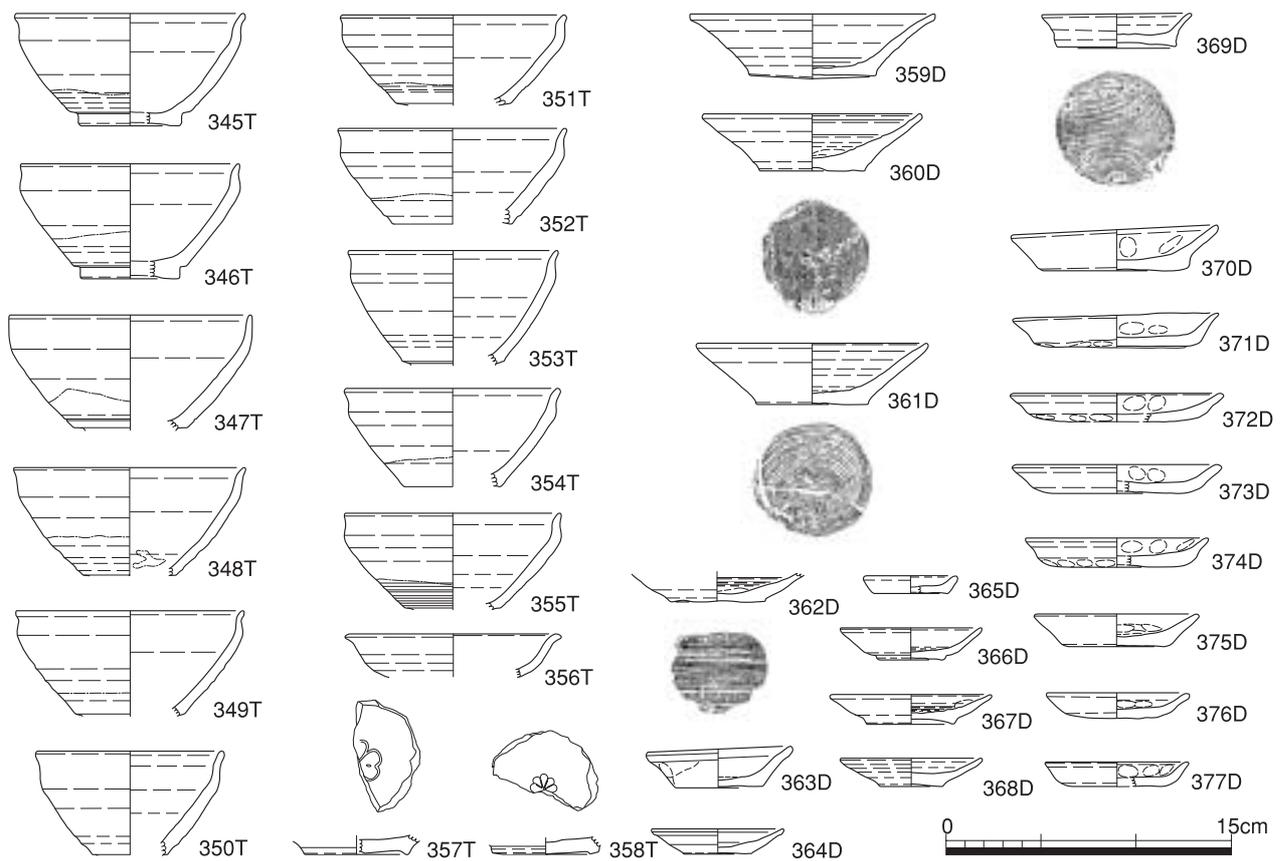
材質面から見ると、土師質製品が88.0%と圧倒的に高く、陶器製品が11.1%、その他とした瓦質製品が0.9%になっている。磁器製品は破片も出土していない。



第113図 98 B S E 0001 出土陶磁器類用途組成図

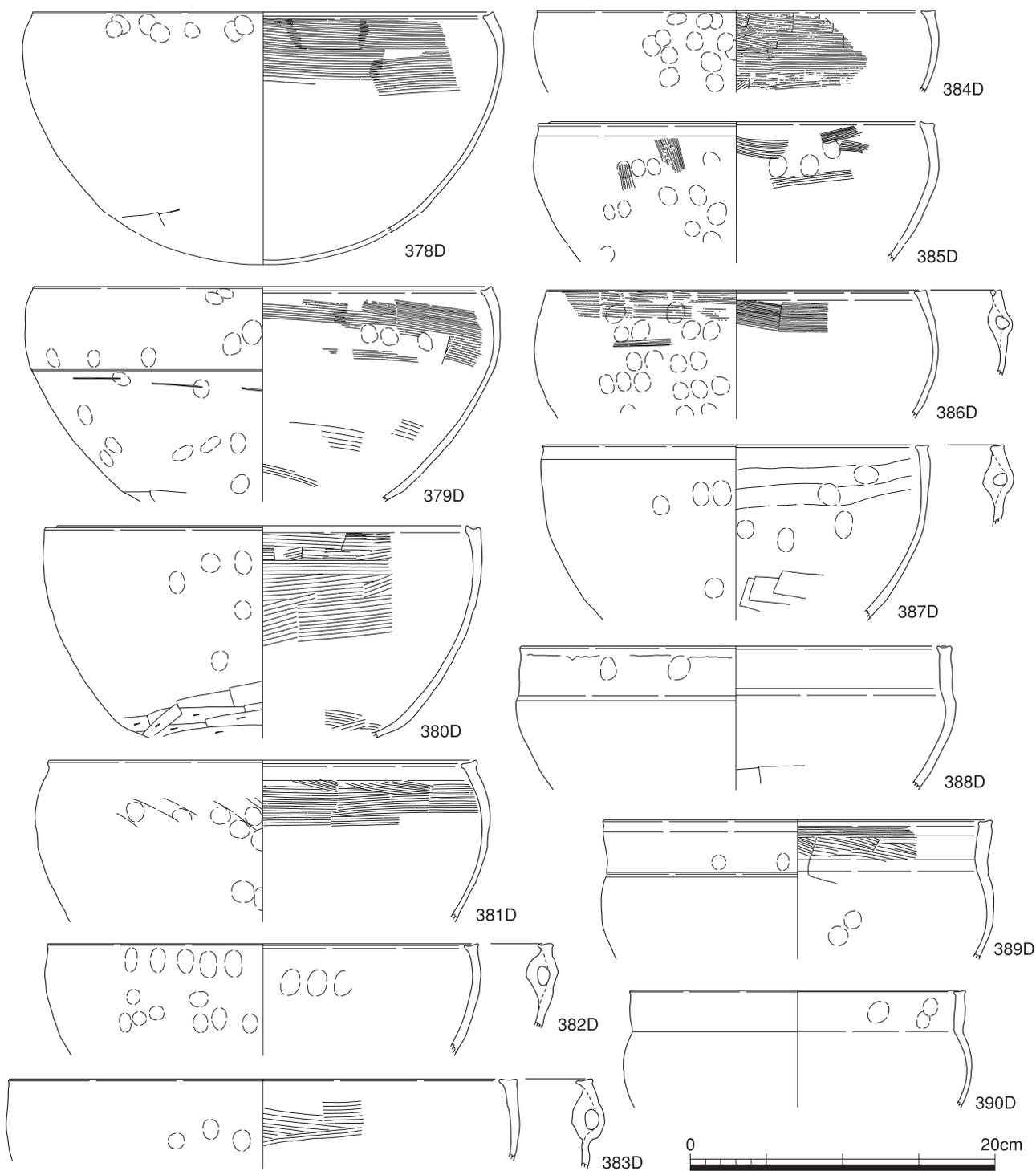
用途	器種	接合後口縁残存率				計	接合前口縁破片数				計	総破片数				計
		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他	
供膳具	椀		40			40		19			19		59			59
	小椀															
	皿	107	3			110	41	2			43	79	10			89
	鉢															
	その他															
	小計	107	43			150	41	21			62	79	69			148
調理具	鍋・釜	527				527	490				490	1655	1			1656
	播鉢		23			23		19			19		82			82
	瓶												1			1
	その他															
	小計	527	23			550	490	19			509	1655	84			1739
貯蔵具	瓶											4				4
	壺		13			13		5			5	1	23			24
	甕A		3			3		2			2		21			21
	甕B												1			1
	鉢															
	その他										1					1
	小計		16			16		7			7	2	49			51
灯火具		47				47	17				17	29				29
火具												1				1
化粧具																
神仏具													1			1
喫煙具																
調度具			4			4		1			1		1			1
蓋					7	7				2	2				2	2
合計		681	86		7	774	548	48		2	598	1766	204		3	1973

第14表 98 B S E 0001 出土陶磁器類集計表



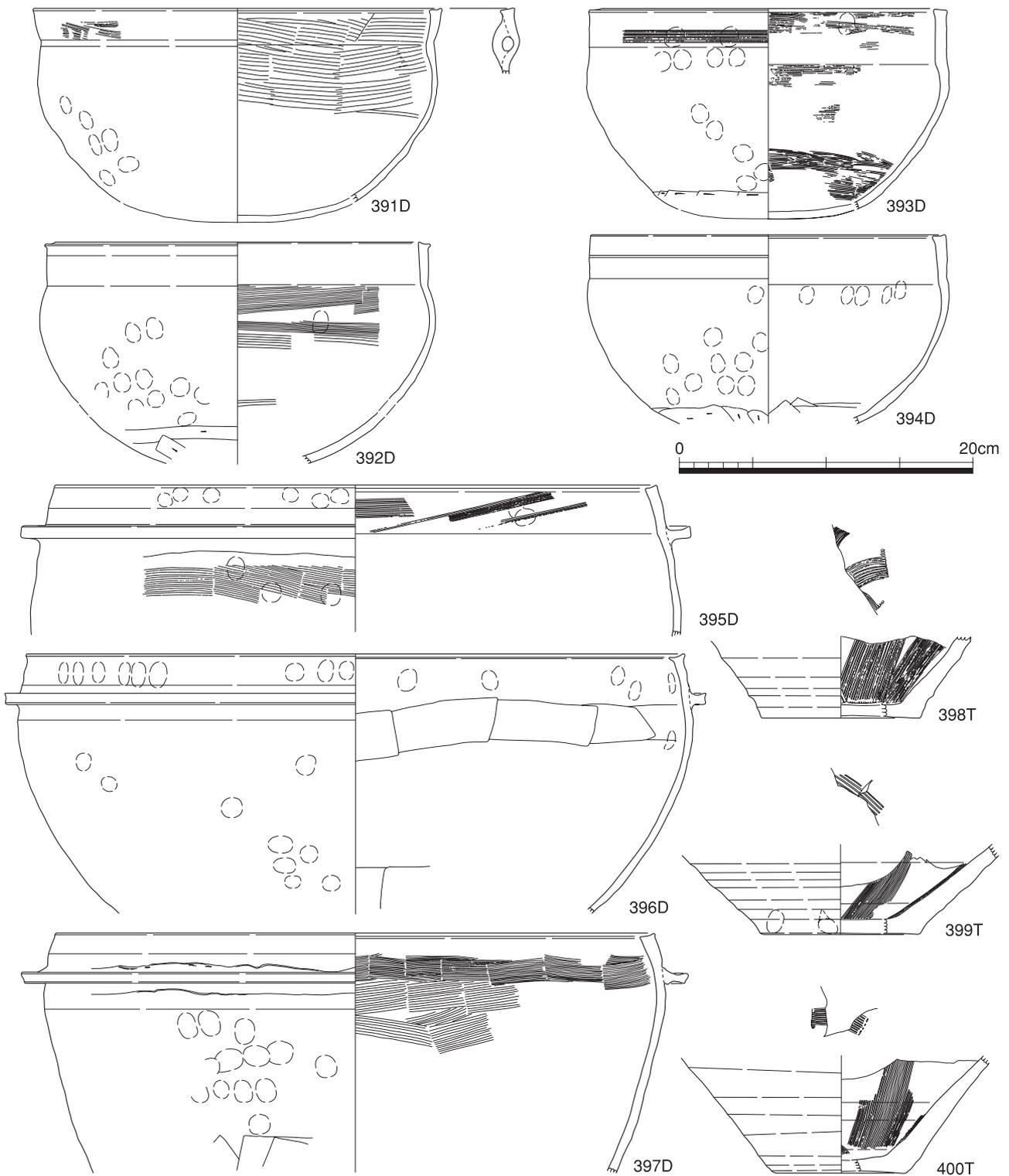
遺物 番号	調査地点	遺構	器 種			法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備 考	PL	登録 番号	
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
345	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	6.0	(12.2)	—	(5.2)	鉄釉	鉄釉+灰化	瀬・美	削り出し高台		E-626
346	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	6.1	(11.4)	—	(5.2)	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-627
347	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残6.2	(12.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-628
348	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.7	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-629
349	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.6	(12.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-630
350	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.5	(9.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-631
351	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残4.8	(11.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-632
352	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.2	(11.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-633
353	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残6.1	(11.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-634
354	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.2	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-635
355	98B	SE0001	供膳具	椀	天目椀	残5.1	(11.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-636
356	98B	SE0001	供膳具	皿	端反皿	残2.3	(10.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-637
357	98B	SE0001	供膳具	皿	丸皿か	残1.0	—	—	(5.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み印花、高台内輪トチン痕	25	E-638
358	98B	SE0001	供膳具	皿	丸皿か	残0.9	—	—	(4.6)	灰釉	ナデ+ナズリ	瀬・美	見込み印花、高台摩滅	25	E-639
359	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.9	(12.8)	—	(6.4)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-640
360	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.0	11.5	—	5.6	ナデ	ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部回転系切り痕・板状圧痕	25	E-641
361	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.2	(12.1)	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕・板状圧痕	25	E-642
362	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	残1.4	—	—	5.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、板状圧痕、見込み強い指ナデ		E-643
363	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.2	7.6	—	4.6	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕	25	E-644
364	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.3	(7.0)	—	(3.6)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、見込み強い指ナデ		E-645
365	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.0	(4.8)	—	(3.9)	ナデ	ナデ	不明	内外面摩滅		E-646
366	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.7	(7.5)	—	(3.6)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-647
367	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.6	(8.4)	—	(4.6)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-648
368	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.5	(7.4)	—	(3.2)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-649
369	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.8	7.8	—	6.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-650
370	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	2.4	(10.8)	—	7.7	指押え+ナデか	ナデ+ナズリ	不明	全体に摩滅		E-651
371	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.9	10.8	—	8.8	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-652
372	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	(10.8)	—	(8.1)	指押え+ナデか	指押え+ナデ	不明	内面摩滅		E-653
373	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	(10.8)	—	(7.6)	指押え+ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅、底部板状圧痕か		E-654
374	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.6	(9.6)	—	(5.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	全体に摩滅		E-655
375	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.7	(8.4)	—	(5.1)	ナデ	ナデ	不明	底部板状圧痕		E-656
376	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.4	7.4	—	4.8	指押え+ナデ	ナデ	不明	底部板状圧痕		E-657
377	98B	SE0001	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.3	(7.4)	—	(4.8)	指押え+ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-658

第114図 98 B S E 0001 ① (1 : 4)



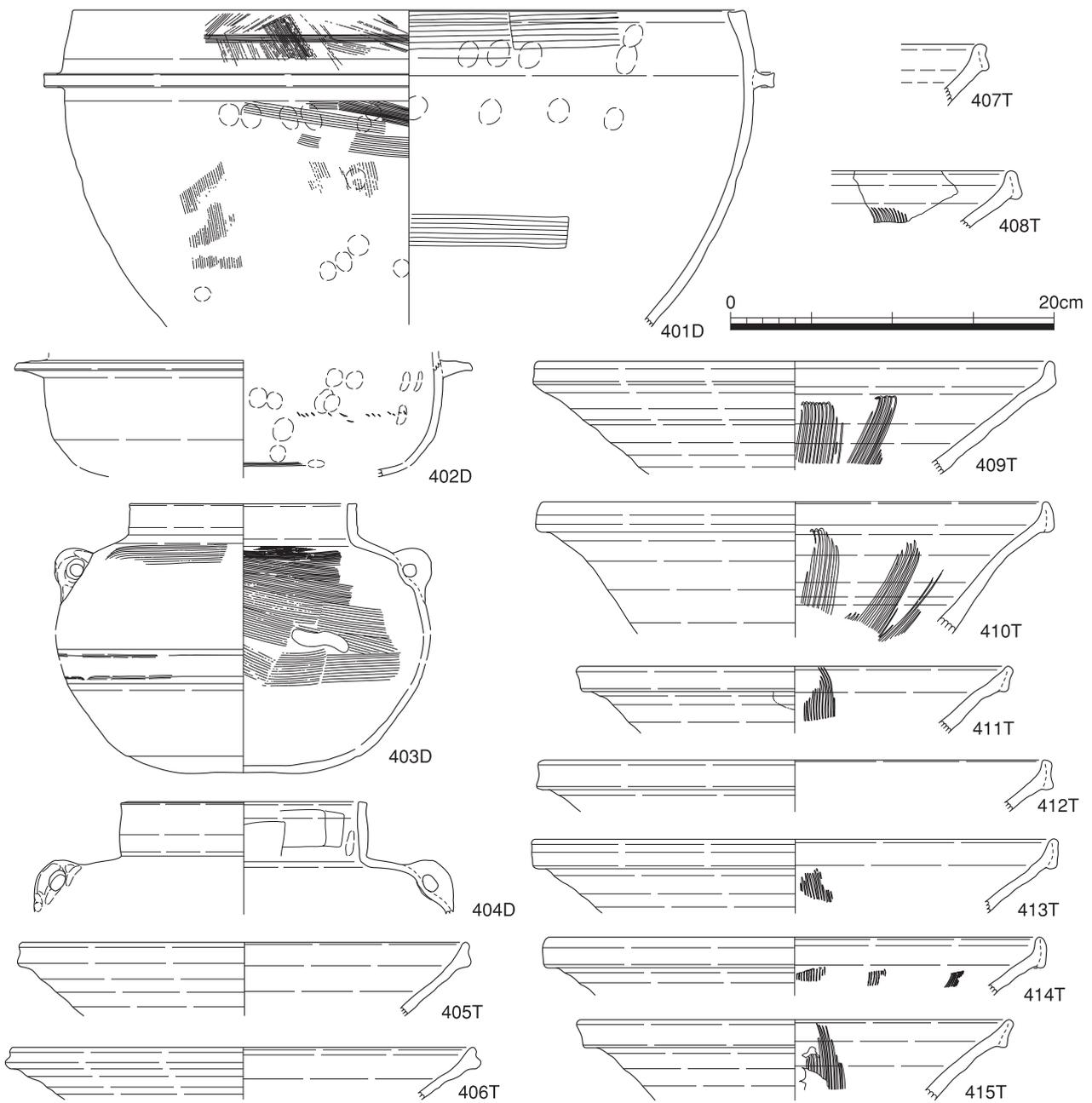
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
378	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(16.8)	(30.3)	(31.8)	—	ナデ	襷+ナデ+ナデ	不明	外面煤付着		E-659
379	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残14.2	(30.0)	(31.6)	—	指押え+ナデ	襷+ナデ+ナデ	不明	外面煤付着		E-660
380	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残14.1	(27.0)	(29.0)	—	ナデ	襷+ナデ+ナデ	不明	外面煤付着		E-661
381	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残10.7	(28.0)	(30.0)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-662
382	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残7.4	(28.4)	(28.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-663
383	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.0	(33.3)	(33.7)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-664
384	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.4	(26.1)	(26.7)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明			E-665
385	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.3	(24.2)	(26.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤僅かに付着・器壁一部剥離、内面やや摩滅		E-666
386	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残8.5	(24.8)	(26.6)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面煤付着か		E-667
387	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残11.6	(25.4)	(25.8)	—	襷+ナデ+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着		E-668
388	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残9.5	(28.0)	(28.9)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着		E-669
389	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残9.2	(25.6)	(25.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-670
390	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残7.7	(22.1)	(23.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着		E-671

第115図 98 B S E 0001 ② (1 : 4)



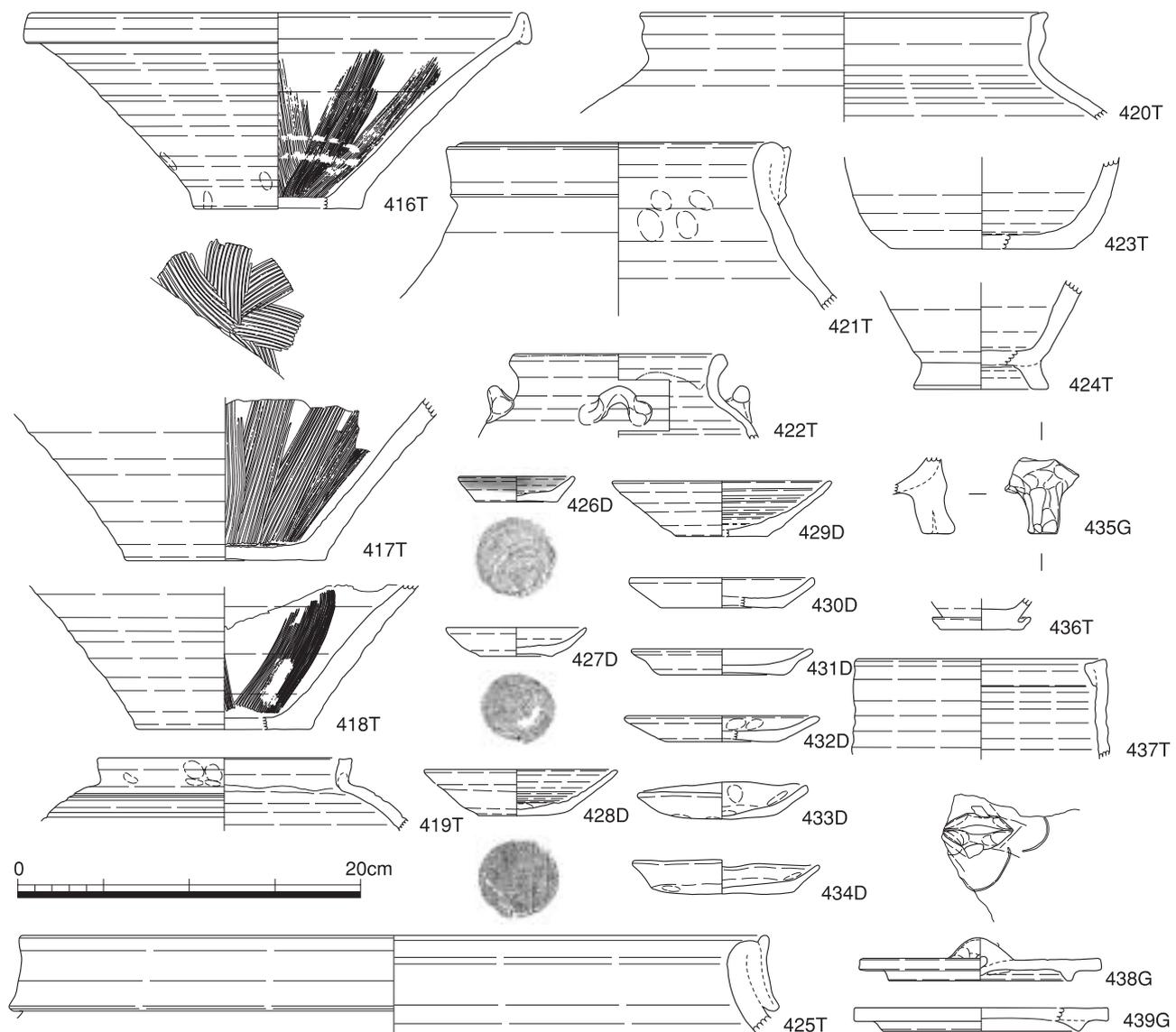
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
391	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	(14.7)	(27.8)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物多く付着、内面一部摩滅		E-672
392	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	(15.8)	(24.8)	(27.0)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-673
393	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	(14.4)	(22.8)	(24.8)	(15.6)	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内外面器壁剥離		E-674
394	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残13.0	(24.1)	(24.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-675
395	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	羽釜	残10.2	(41.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-676
396	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	羽釜	残17.8	(45.0)	(46.2)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-677
397	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	羽釜	残16.4	(41.0)	(42.5)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着、内面一部器壁剥離・摩滅		E-678
398	98B	SE0001	調理具	搗鉢	その他	残5.6	—	—	(10.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数24本(底部13本か)、底部回転糸切り痕		E-679
399	98B	SE0001	調理具	搗鉢	その他	残6.2	—	—	(10.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本、底部回転糸切り痕		E-680
400	98B	SE0001	調理具	搗鉢	その他	残8.1	—	—	8.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数25本、底部回転糸切り痕、内外面トチン痕		E-681

第116図 98 B S E 0001 ③ (1 : 4)



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
401	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	羽釜	残9.7	(41.5)	(42.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-682
402	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残7.3	—	(24.8)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着		E-683
403	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	16.9	(13.9)	(23.2)	(7.6)	ナデ	ナデ	不明	外面煤付着、鍔が剥がれているのか?	26	E-684
404	98B	SE0001	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残7.0	(15.2)	—	—	細いナデ+ナデ	ナデ	不明	外面煤付着		E-685
405	98B	SE0001	調理具	搗鉢	I類	残4.6	(27.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-686
406	98B	SE0001	調理具	搗鉢	I類	残3.3	(28.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-687
407	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残3.9	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-688
408	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残3.6	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数11本か、口縁部摩滅		E-689
409	98B	SE0001	調理具	搗鉢	I類	残7.0	(31.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数13本、口縁部摩滅		E-690
410	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残8.2	(31.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数11本か、口縁部摩滅		E-691
411	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残4.2	(26.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数12本か		E-692
412	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残3.2	(31.1)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-693
413	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残4.6	(32.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数13本か		E-694
414	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残3.6	(30.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数12本か		E-695
415	98B	SE0001	調理具	搗鉢	Ⅲ類	残5.1	(26.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本か		E-696

第117図 98 B S E 0001 ④ (1 : 4)

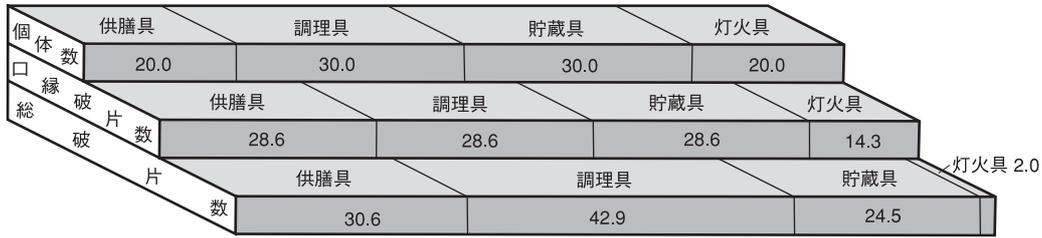


遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
416	98B	SE0001	調理具	掃鉢	皿類	11.5	(29.0)	—	(9.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数20本、内面摩滅		E-697
417	98B	SE0001	調理具	掃鉢	その他	残9.8	—	—	(11.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本 (内面底部12本)、内外面トチン痕		E-698
418	98B	SE0001	調理具	掃鉢	その他	残8.4	—	—	(10.2)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数24本、底部回転系切り痕		E-699
419	98B	SE0001	貯蔵具	壺	無蓋壺か	残4.3	(14.8)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	瀬・美			E-700
420	98B	SE0001	貯蔵具	壺	無蓋壺	残6.0	(23.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部トチン痕		E-701
421	98B	SE0001	貯蔵具	壺	その他	残9.6	(17.8)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑			E-702
422	98B	SE0001	貯蔵具	壺	蓋付壺	残4.9	(12.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部剥離痕	26	E-703
423	98B	SE0001	貯蔵具	壺	その他	残5.4	—	—	(10.2)	ナデ	鉄釉	瀬・美	底部回転系切り痕		E-704
424	98B	SE0001	貯蔵具	壺	その他	残6.4	—	—	(7.8)	ナデ	ナデ	瀬戸か	古瀬戸か		E-705
425	98B	SE0001	貯蔵具	甕A	I類	残5.7	(43.4)	—	—	ナデ	ナデ	常滑			E-706
426	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	1.6	6.6	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、内外面油煙付着、口縁部打ち欠きか	26	E-707
427	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	1.7	(8.1)	—	4.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、内外面油煙付着		E-708
428	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	2.7	11.2	—	4.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、板状圧痕、内外面油煙付着	26	E-709
429	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	3.2	(12.5)	—	(5.3)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、内面油煙付着		E-710
430	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	1.8	(10.6)	—	(7.2)	ナデか	ナデか	不明	全体摩滅、灯明皿か		E-711
431	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	1.5	(10.4)	—	(7.1)	ナデ	ナデ	不明	見込み油煙付着、全体に摩滅、底部板状圧痕か		E-712
432	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	1.5	(10.8)	—	(6.4)	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	内外面油煙付着、全体に摩滅、底部板状圧痕か		E-713
433	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	2.0	9.8	—	6.2	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	見込み強い指ナデ、底部板状圧痕、内外面油煙付着		E-714
434	98B	SE0001	灯火具	皿	灯明皿	2.0	10.8	—	8.3	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕、内面油煙付着	26	E-715
435	98B	SE0001	火具	その他	その他	残4.5	—	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	長径1.8cm・短径1.6cm		E-716
436	98B	SE0001	神仏具	仏前具か	—	残1.7	—	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転系切り痕		E-717
437	98B	SE0001	調度具	花生	水盤か	残5.9	(14.6)	—	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	口縁部炭化物付着、灰落しとして転用か		E-718
438	98B	SE0001	その他	蓋	IV類	2.5	(10.7)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	不明	肩径 (14.1) cm、つまみ長径4.4cm・幅2.2cm・孔径0.6cm		E-719
439	98B	SE0001	その他	蓋	その他	1.4	(11.4)	—	—	ナデか	ナデか	不明	肩径 (14.8) cm		E-720

第118図 98 B S E 0001 ⑤ (1 : 4)

その他の井戸合計

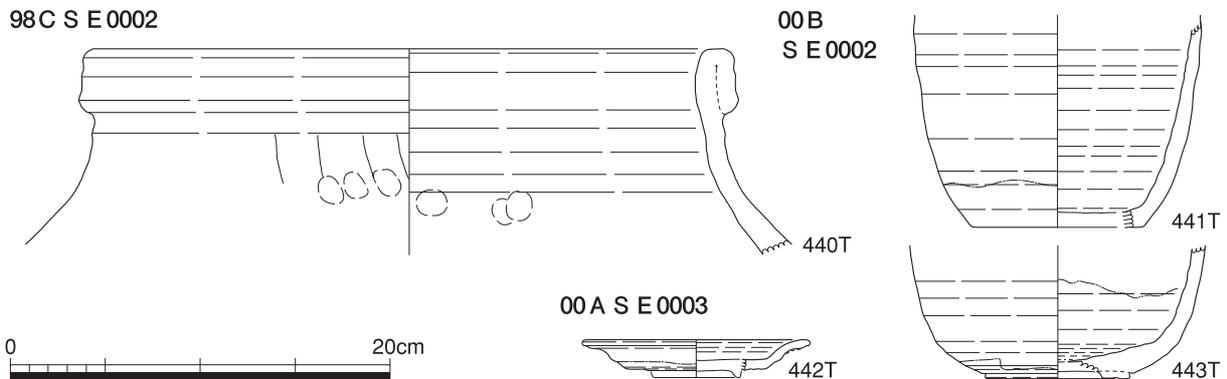
前述の2基以外で、この時期の井戸から出土した遺物をまとめたものを「その他の井戸合計」として扱う。出土した遺物は少なく、総破片数49点、接合前口縁破片数7点、個体数0.83個体である。



第119図 その他の井戸合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		1			1		1			1					2
	小椀															
	皿		1			1		1			1	10	2			12
	鉢												1			1
	その他															
	小計		2			2		2			2	10	5			15
調理具	鍋・釜	3				3	2				2	17				17
	鉢															
	播鉢												4			4
	瓶															
	その他															
	小計	3				3	2				2	17	4			21
貯蔵具	瓶															
	壺		1			1		1			1	6				6
	甕A		2			2		1			1	6				6
	甕B															
	鉢															
	その他															
	小計		3			3		2			2		12			12
灯火具																
火具			2			2		1			1		1			1
化粧具																
神仏具																
喫煙具																
調度具																
蓋																
合計			3	7			10	2	5			7	27	22		49

第15表 その他の井戸合計出土陶磁器類集計表



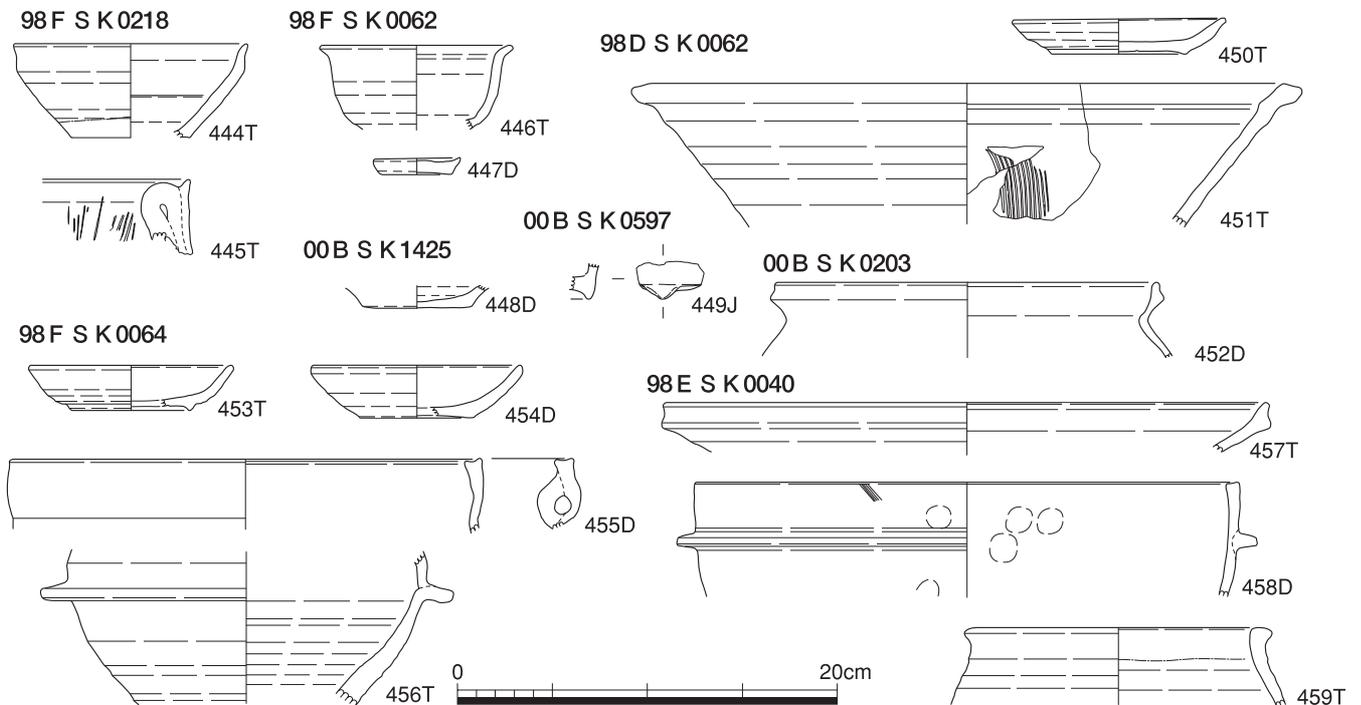
遺物番号	調査地点	調査区	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
440	98C	SE0002	貯蔵具	甕A	その他	残10.9	(31.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑	自然釉かかる、口縁部摩滅		E-721
441	00B	SE0002	貯蔵具	壺	その他	残11.3	—	(15.2)	(9.0)	ナデ	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕		E-722
442	00A	SE0003	供膳具	皿	腰折皿	残1.6	(11.7)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	釉剥離	26	E-723
443	00A	SE0003	調理具	鉢か	その他	残7.1	—	—	(7.5)	鉄釉+鉄化粧	鉄釉	瀬・美			E-724

第120図 その他の井戸合計 (1:4)

S K 合計

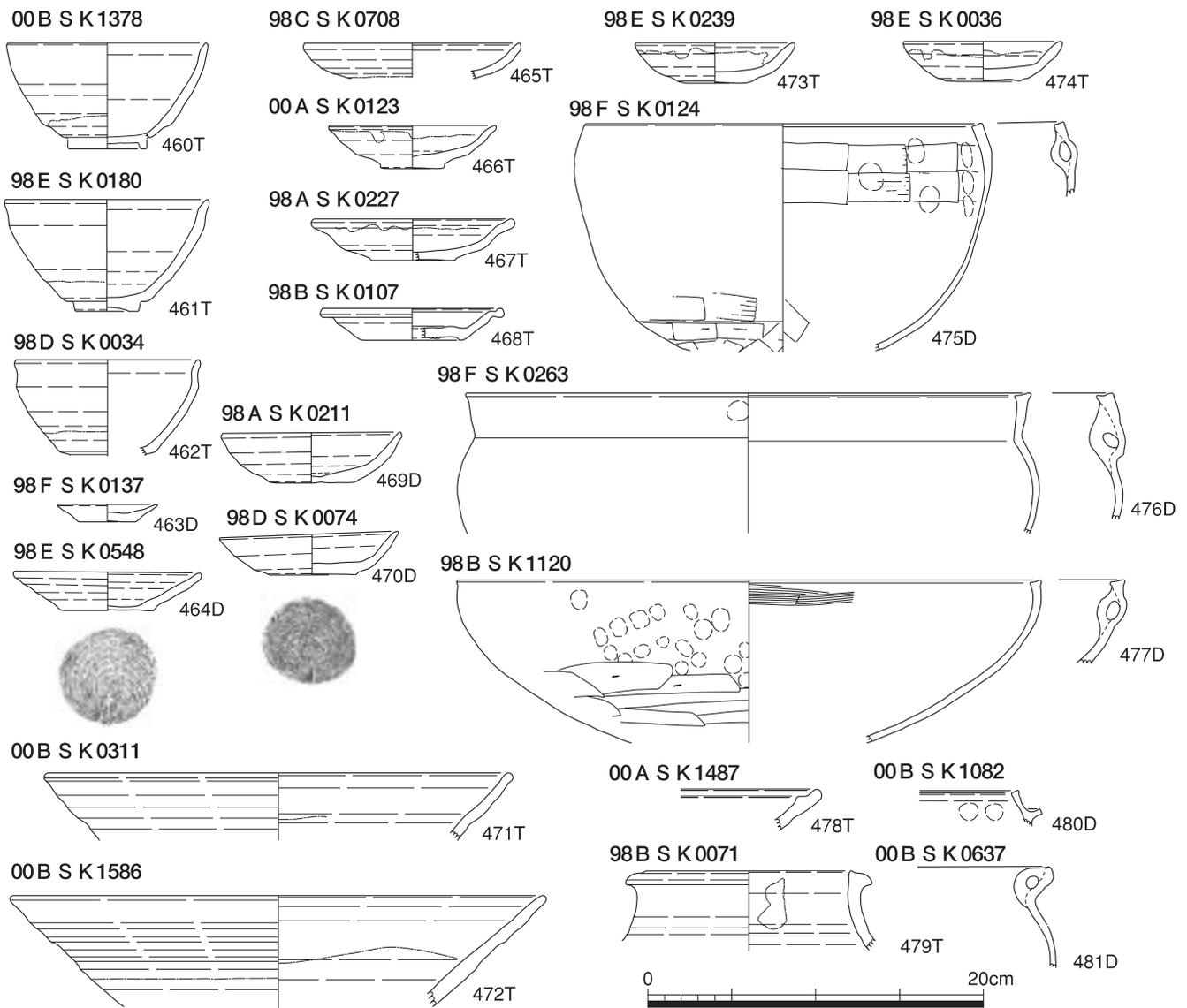
今町遺跡ではこの時期の土坑で、まとまった遺物を出土する遺構はなかった。そこで土坑から出土した遺物をまとめたものを「S K 合計」として扱うこととする。純粋な遺物の組成を見ることはできないが、ある程度の傾向を掴むことはできると思われる。出土した遺物の合計は、総破片数990点、接合前口縁破片数225点、個体数25.08個体である。

用途別に見てみると、供膳具14.50個体(57.8%)、調理具8.25個体(32.9%)、貯蔵具0.67個体(2.7%)、灯火具1.58個体(6.3%)、神仏具0.08個体(0.3%)で、火具・調度具は破片が出土しており、化粧具・喫煙具・蓋類は出土していない。供膳具に対して調理具の出土量が少ないことなど、全体的に見れば近世的な遺物組成の様相を示している。しかし、椀類対皿類は1:2.98と依然皿類が多く出土しており、僅かながらに戦国時代の遺物組成の様相を残していると思われる。



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
444	98F	SK0218	供膳具	椀	天目椀	残5.1	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-725
445	98F	SK0218	貯蔵具	甕A	I類	残4.0	—	—	—	ナデ	ナデ	常滑			E-726
446	98F	SK0062	供膳具	椀	端反椀	残4.5	(9.9)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美			E-727
447	98F	SK0062	供膳具	皿	土師器皿A	0.9	4.5	—	3.7	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-728
448	00B	SK1425	供膳具	皿	その他	残1.2	—	—	(5.6)	ナデか	ナデか	不明	全体に摩滅		E-729
449	00B	SK0597	神仏具	香炉	その他	残2.0	—	—	—	ナデ	青磁	肥前			E-730
450	98D	SK0062	供膳具	皿	丸皿	1.9	11.2	—	7.0	長石釉	長石釉	瀬・美	志野皿、見込み・高台内トチン痕	25	E-731
451	98D	SK0062	調理具	搦鉢	II類	残7.6	(33.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数12本か		E-732
452	00B	SK0203	調理具	鍋・釜類	内耳鍋B	残4.0	(19.9)	—	—	ナデか	ナデか	不明	内面煤付着、外面煤・炭化物付着		E-733
453	98F	SK0064	供膳具	皿	丸皿	2.4	(10.6)	—	(6.3)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕		E-734
454	98F	SK0064	灯火具	皿	灯明皿	2.8	(10.8)	—	(5.9)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内・外面油煙付着		E-735
455	98F	SK0064	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残3.7	(24.8)	—	—	ナデ	ナデ	不明			E-736
456	98F	SK0064	調理具	鍋・釜	その他	残9.0	—	(19.1)	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-737
457	98E	SK0040	調理具	搦鉢	I類	残2.6	(31.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-738
458	98E	SK0040	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.1	(28.8)	—	—	ナデか	瀬・美+ナデか	不明	全体摩滅、外面煤付着		E-739
459	98E	SK0040	貯蔵具	甕Bか	—	残4.1	(14.6)	—	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	口縁部トチン痕か		E-740

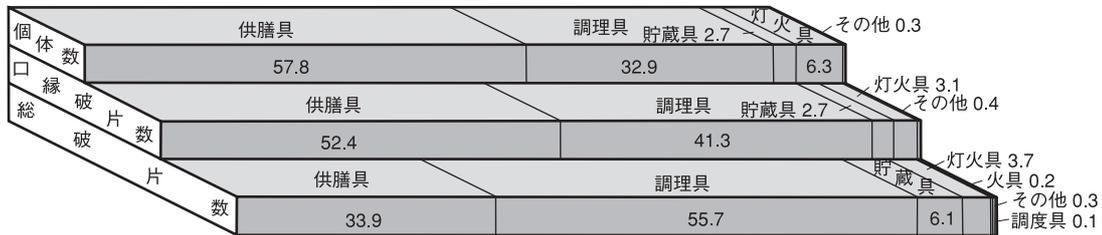
第121図 S K 合計① (1:4)



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
460	00B	SK1378	供膳具	椀	天目椀	残5.8	(11.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-741
461	98E	SK0180	供膳具	椀	天目椀	6.8	(12.0)	—	3.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美		25	E-742
462	98D	SK0034	供膳具	椀	天目椀	残5.8	(10.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-743
463	98F	SK0137	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.0	(6.0)	—	3.4	ナデ	ナデ	不明	全体に摩滅		E-744
464	98E	SK0548	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.4	11.0	—	5.6	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕	25	E-745
465	98C	SK0708	供膳具	皿	丸皿	残2.1	(12.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉散らしか		E-746
466	00A	SK0123	供膳具	皿	端反皿	2.6	(9.8)	—	(3.5)	灰釉	灰釉	藤岡	古瀬戸後期、緑釉皿、底部回転糸切り痕	25	E-747
467	98A	SK0227	供膳具	皿	折縁皿	2.5	(11.8)	—	(5.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	底部回転糸切り痕		E-748
468	98B	SK0107	供膳具	皿	折縁皿	1.9	(10.6)	—	(6.1)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ、高台内輪トチン融着		E-749
469	98A	SK0211	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.1	10.6	—	5.1	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り後ナデ消し	25	E-750
470	98D	SK0074	灯火具	皿	灯明皿	2.6	10.6	—	5.1	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、見込み・底部油煙付着	25	E-751
471	00B	SK0311	供膳具	鉢	平鉢	残4.1	(27.4)	—	—	灰釉+ナデ	灰釉	瀬・美	灰釉とんでいる		E-752
472	00B	SK1586	供膳具	鉢	平鉢	残6.7	(31.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	椀形鉢、古瀬戸後期Ⅳ期		E-753
473	98E	SK0239	供膳具	皿	丸皿	2.5	(9.4)	—	(4.5)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕	25	E-754
474	98E	SK0036	供膳具	皿	丸皿	2.4	9.4	—	4.5	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕、釉白濁	25	E-755
475	98F	SK0124	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(14.3)	(23.3)	(24.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ+ナゲ	不明	外面煤付着		E-756
476	98F	SK0263	調理具	鍋・釜	内耳鍋B	残8.4	(33.6)	(34.8)	—	指押え+ナゲか	指押え+ナゲか	不明	全体に摩滅		E-757
477	98B	SK1120	調理具	鍋・釜	焙烙	残9.8	(35.0)	—	—	ナデ	指押え+ナゲ+ナゲ	不明	外面煤付着		E-758
478	00B	SK1487	調理具	搦鉢	Ⅳ類	残2.5	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-759
479	98B	SK0071	貯蔵具	壺	無蓋壺	残4.8	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-760
480	00B	SK1082	調理具	鍋・釜	羽釜	残2.2	—	—	—	指押え+ナゲ	ナゲ	不明	全体に摩滅		E-761
481	00B	SK0637	調理具	鍋	内耳鍋C	残6.1	—	—	—	ナゲか	ナゲか	不明	外面ハケ目、煤・炭化物付着		E-762

第122図 SK合計② (1:4)

材質別に見てみると、土師質製品は55.8%、陶器製品が41.5%、その他とした瓦質製品が2.7%となっており、磁器製品は破片が1点出土しているのみである。陶器製品の占める割合が高いことが、材質の面からも新しい時代の様相を示していると思われる。



第123図 SK合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		43			43		32			32					76
	小碗															4
	皿	64	56		8	128	54	29		1	84	196	50		1	247
	鉢		3			3		2			2		9			9
	その他															
	小計	64	102		8	174	54	63		1	118	196	139		1	336
調理具	鍋・釜	85				85	80				80	482	5			487
	鉢												5			5
	搗鉢		13			13		12			12		57			57
	瓶		1			1		1			1		2			2
	その他															
	小計	85	14			99	80	13			93	482	69			551
貯蔵具	瓶															
	壺		6			6		3			3		20			20
	甕A		2			2		3			3		37			37
	甕B												3			3
	鉢															
	小計		8			8		6			6		60			60
灯火具		19			19	7				7	37					37
火具													1		1	2
化粧具																
神仏具			1		1		1			1		2	1			3
喫煙具													1			1
調度具																
蓋																
合計		168	125		8	301	141	83		1	225	715	272	1	2	990

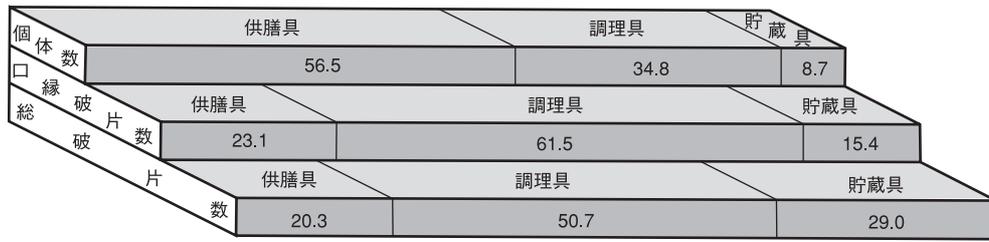
第16表 SK合計出土陶磁器類集計表

### その他の遺構出土合計

これまでに見てきた溝・井戸・土坑以外の遺構から出土した遺物をまとめたものを、「その他の遺構合計」として扱う。この中には、例えば00A区で検出された池状遺構（SX0006）などが含まれる。出土した遺物の合計は、総破片数69点、接合前口縁破片数13点、個体数1.92個体である。

用途別では、供膳具1.08個体（56.5%）、調理具0.67個体（34.8%）、貯蔵具0.17個体（8.7%）で、その他の用途に分類した遺物や蓋類などは出土していない。

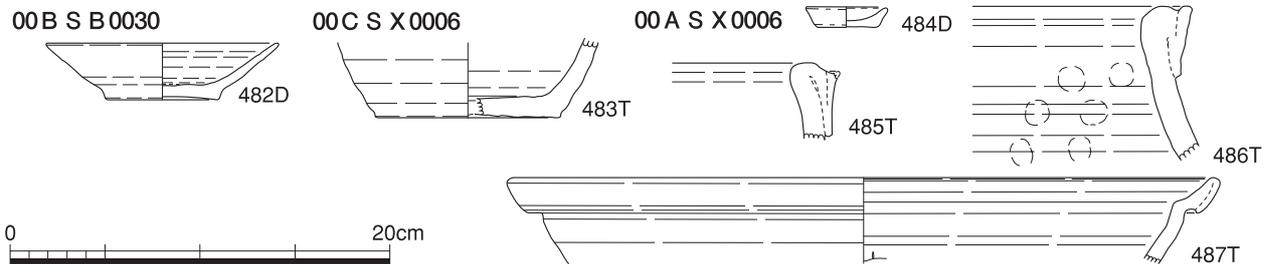
材質別では、土師質製品87.0%、陶器製品は13.0%で、磁器製品やその他の材質の製品は出土していない。



第124図 その他の遺構合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗															
	小碗															
	皿	13				13	3			3	12	1			13	
	鉢											1			1	
	その他															
	小計	13				13	3			3	12	2			14	
調理具	鍋・釜	7				7	7			7	22	1			23	
	鉢															
	搦鉢		1			1		1		1		12		12		
	瓶															
	その他															
	小計	7	1			8	7	1		8	22	13		35		
貯蔵具	瓶											2		2		
	壺											12		12		
	甕A		2			2		2		2	6		6			
	甕B															
	鉢															
	小計		2			2		2		2		20		20		
灯火具																
火具																
化粧具																
神仏具																
喫煙具																
調度具																
蓋																
合計			20	3		23	10	3		13	34	35		69		

第17表 その他の遺構合計出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	調査区	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号
				用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
482	00B	SB0030	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.0	(12.2)	—	(5.8)	ナデか	ナデか	不明	底部回転糸切り痕、全体に摩滅	25	E-763
483	00C	SX0006	貯蔵具	壺	その他	残4.0	—	—	(9.4)	ナデ	ナデ	瀬・美	底部回転糸切り痕		E-764
484	00A	SX0006	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.1	4.2	—	3.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り後ナデ消し	25	E-765
485	00A	SX0006	貯蔵具	甕A	I類	残4.1	—	—	—	ナデ	ナデ				E-766
486	00A	SX0006	貯蔵具	甕A	I類	残7.4	—	—	—	摺りえ+ナデ	ナデ				E-767
487	00A	SX0006	調理具	搦鉢	VI類	残4.6	(36.7)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-768

第125図 その他の遺構合計 (1:4)

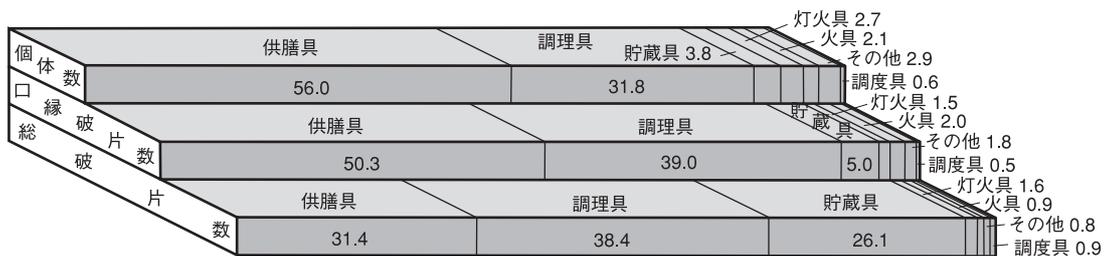
## 第5節 江戸時代後期の遺物

江戸時代後期の出土遺物は、土器・陶磁器類が大半を占め、他に瓦類、木製品、金属製品、石製品が見られる。本節では、土器・陶磁器類を中心に用途による器種組成を見ることとし、その他の遺物については後節で扱うこととする。用途による分類については、前節と同様である。

### 概要

今回の調査で出土した江戸時代後期の土器・陶磁器類は、検出などの遺物を含め総破片数12,321点、接合前口縁破片数2,558点、個体数279.67個体である。

用途別に見てみると、供膳具156.67個体（56.0%）、調理具89.00個体（31.8%）、貯蔵具10.75個体（3.8%）、灯火具7.58個体（2.7%）、火具5.83個体（2.1%）、化粧具3.75個体（1.3%）、神仏具3.92個体（1.4%）、喫煙具0.50個体（0.2%）、調度具1.67個体（0.6%）である。用途内の器種組成では、供膳具内の椀類対皿類は1.62：1で、椀類の出土量が皿類を越えている。調理具の鍋・釜類対播鉢は4.43：1となり、前時代よりもその差は縮まってきている。戦国時代から江戸時代前期との違いは、供膳具が出土遺物全体の半数以上を占めるようになったこと、特に椀類の出土量が急増していること、調理具において鍋・釜類の出土が減少し播鉢が増加していること、貯蔵具で壺類よりも甕類の出土が



第126図 江戸時代後期合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		975	90		1065		708	70		778		1938	143		2081
	小椀		82	33		115		39	17		56		81	28		109
	皿	410	239	9		658	241	160	7		408	1106	391	13		1510
	鉢		41	1		42		35	1		36		152	4		156
	その他															
	小計	410	1337	133		1880	241	942	95		1278	1106	2562	188		3856
調理具	鍋・釜	799	2			801	766	2			768	3816	19			3835
	鉢		85			85		72			72		227			227
	播鉢		181			181		151			151		642			642
	瓶		1			1		1			1		13	3		16
	その他												3			3
	小計	799	269			1068	766	226			992	3816	904	3		4723
貯蔵具	瓶		9			9		3			3	2	114	1		117
	壺		10			10		6			6		131	2		133
	甕A		92			92		104			104		2869			2869
	甕B		13			13		11			11		79			79
	鉢		5			5		3			3		8			8
	その他												6			6
	小計		129			129		127			127	2	3207	3		3212
灯火具		47	44			91	28	9			37	173	17	1		191
火具			62		8	70		45		5	50		92	1	14	107
化粧具			33	12		45		15	1		16		25	3		28
神仏具			28	19		47		13	10		23		40	18		58
喫煙具			6			6		6			6		8			8
調度具		1	19			20	1	11			12	4	95		3	102
蓋		1	51	10	1	63	1	13	2	1	17	1	29	3	3	36
合計		1258	1978	174	9	3419	1037	1407	108	6	2558	5102	6979	220	20	12321

第18表 江戸時代後期合計出土陶磁器類集計表

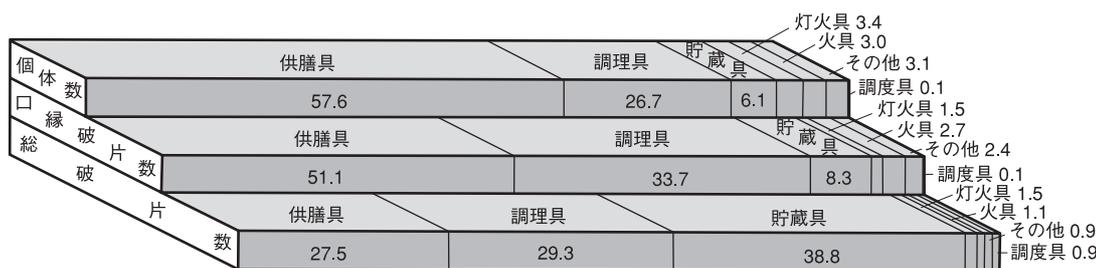
増えていること、出土量に違いこそはあるが全ての用途において遺物が確認されていること、などをあげることができる。これらの点をこの時期の特徴として考えておきたい。参考までに供膳具の土師器皿を灯明皿として計算し直してみると、供膳具122.50個体(43.8%)、灯火具41.75個体(14.9%)となる。また、蓋類が総破片数36点、接合前口縁破片数17点、個体数5.25個体出土している。これらに該当しない遺物として、加工円盤3点、人形類2点をあげることができるが、今回は除外し破片数などは数えていない。

材質面から見ると、土師質製品37.7%、陶器製品57.4%、磁器製品4.9%、その他とした瓦質製品が0.2%となっている。土師質製品が減少し、陶器製品が急増していることがわかる。

遺構から出土した遺物だけでみると、総破片数6,037点、接合前口縁破片数1,108点、個体数120.42個体である。

用途別では、供膳具69.42個体(57.6%)、調理具32.17個体(26.7%)、貯蔵具7.33個体(6.1%)、灯火具4.08個体(3.4%)、火具3.58個体(3.0%)、化粧具1.00個体(0.8%)、神仏具2.50個体(2.1%)、喫煙具0.25個体(0.2%)、調度具0.08個体(0.1%)である。数値の増減はあるが、概ね全体の割合はよく似ている。蓋類は総破片数18点、接合前口縁破片数5点、個体数2.00個体出土している。

また、材質面では土師質製品34.9%、陶器製品61.2%、磁器製品3.8%となっている。



第127図 江戸時代後期遺構出土陶磁器類用途組成図

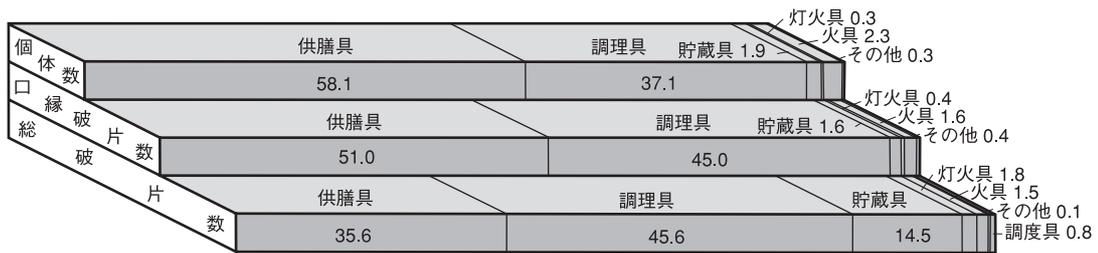
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		441	24		465	318	19		337		832	39			871
	小椀		24	14		38	12	7		19		21	12			33
	皿	205	96	3		304	117	70	2	189	477	196	4			677
	鉢		26			26		19		19		76				76
	その他															
	小計	205	587	41		833	117	419	28	564	477	1125	55			1657
調理具	鍋・釜	279				279	276			276	1390	8				1398
	鉢		40			40		37		37		91				91
	播鉢		66			66		58		58		267				267
	瓶		1			1		1		1		8	1			9
	その他															
	小計	279	107			386	276	96		372	1390	374	1			1765
貯蔵具	瓶		9			9		3		3	2	53	1			56
	壺		7			7		4		4		67	2			69
	甕A		65			65		79		79		2159				2159
	甕B		7			7		6		6		51				51
	鉢															
	その他															
	小計		88			88		92		92	2	2330	3			2335
灯火具		21	28			49	11	6		17	78	10	1			89
火具			43			43		30		30		63	1	2		66
化粧具			12			12		10		10		12	1			13
神仏具			16	14		30		7	7	14		28				28
喫煙具			3			3		3		3		3	10			13
調度具			1			1		1		1		51			2	53
蓋			14	10		24		3	2	5		13	3	2		18
合計		505	899	65		1469	404	667	37	1108	1947	4009	75	6		6037

第19表 江戸時代後期遺構出土陶磁器類集計表

S D 合計

江戸時代後期に属する溝から遺物はまとまって出土していない。そこで溝から出土した遺物をまとめたものを、「S D 合計」として取り扱う。出土した遺物は、総破片数 985 点、接合前口縁破片数 251 点、個体数 25.83 個体である。

用途別に見てみると、供膳具 15.00 個体 (58.1%)、調理具 9.58 個体 (37.1%)、貯蔵具 0.50 個体 (1.9%)、灯火具 0.08 個体 (0.3%)、火具 0.58 個体 (2.3%)、化粧具 0.08 個体 (0.3%) で、調度具は破片が出土しているが、神仏具・化粧具は出土していない。供膳具の出土量が多く、椀類と皿類の比率が 3.15 : 1 と椀類の出土量の方が皿類より多くなっていることは、名古屋城三の丸遺跡で指摘されている江戸時代後期の遺物組成の様相と同じである。調理具のうち鍋・釜類は、内耳鍋 A が 63.6% と高く、焙烙 28.9%、内耳鍋 B と羽釜ともに 5.7%、内耳鍋 C 1.1% で、茶釜形鍋は確認していない。焙烙の出土量が多いことが特徴としてあげられる。挿鉢については、鍋・釜類対挿鉢が 5.18 : 1 とやはり出土量は少ない。また蓋類は、総破片数 4 点、接合前口縁破片数 2 点、個体数 1.50 個体が出土している。この他、00 A 区 S D 0002 から、土製の人形が 1 点出土している。

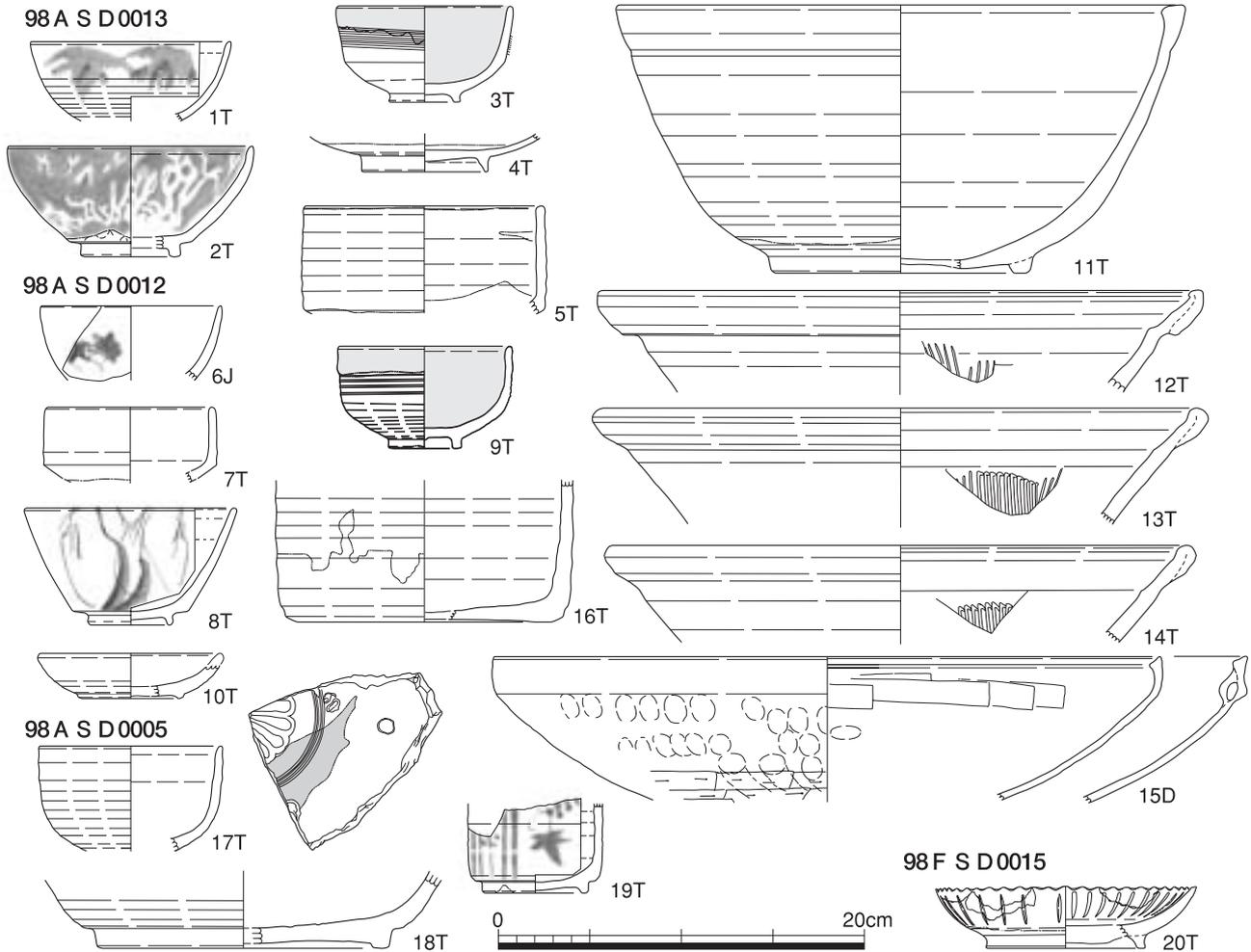


第 128 図 S D 合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		123	6		129		83	4		87		182	7		189
	小椀		1	7		8		1	3		4		3	3		6
	皿	24	16	1		41	19	14	1		34	84	50	3		137
	鉢		2			2		2			2		19			19
	その他															
	小計	24	142	14		180	19	100	8		127	84	254	13		351
調理具	鍋・釜	88				88	89			8	89	384	2			386
	鉢		9			9		8		8		13			13	
	挿鉢		17			17		14		14		49			49	
	瓶		1			1		1		1		1			1	
	その他															
	小計	88	27			115	89	23		112	384	65			449	
貯蔵具	瓶										2	7	1		10	
	壺		4			4		2		2		8	2		10	
	甕 A		2			2		2		2		114			114	
	甕 B											9			9	
	鉢															
	その他															
	小計		6			6		4		4	2	138	3		143	
灯火具		1			1		1			1	17	1			18	
火具		7			7		4			4		15			15	
化粧具		1			1		1			1		1			1	
神仏具																
喫煙具																
調度具												4			4	
	蓋		9	9		18		1	1	2		3	1		4	
合計		112	193	23		328	108	134	9		251	487	481	17	985	

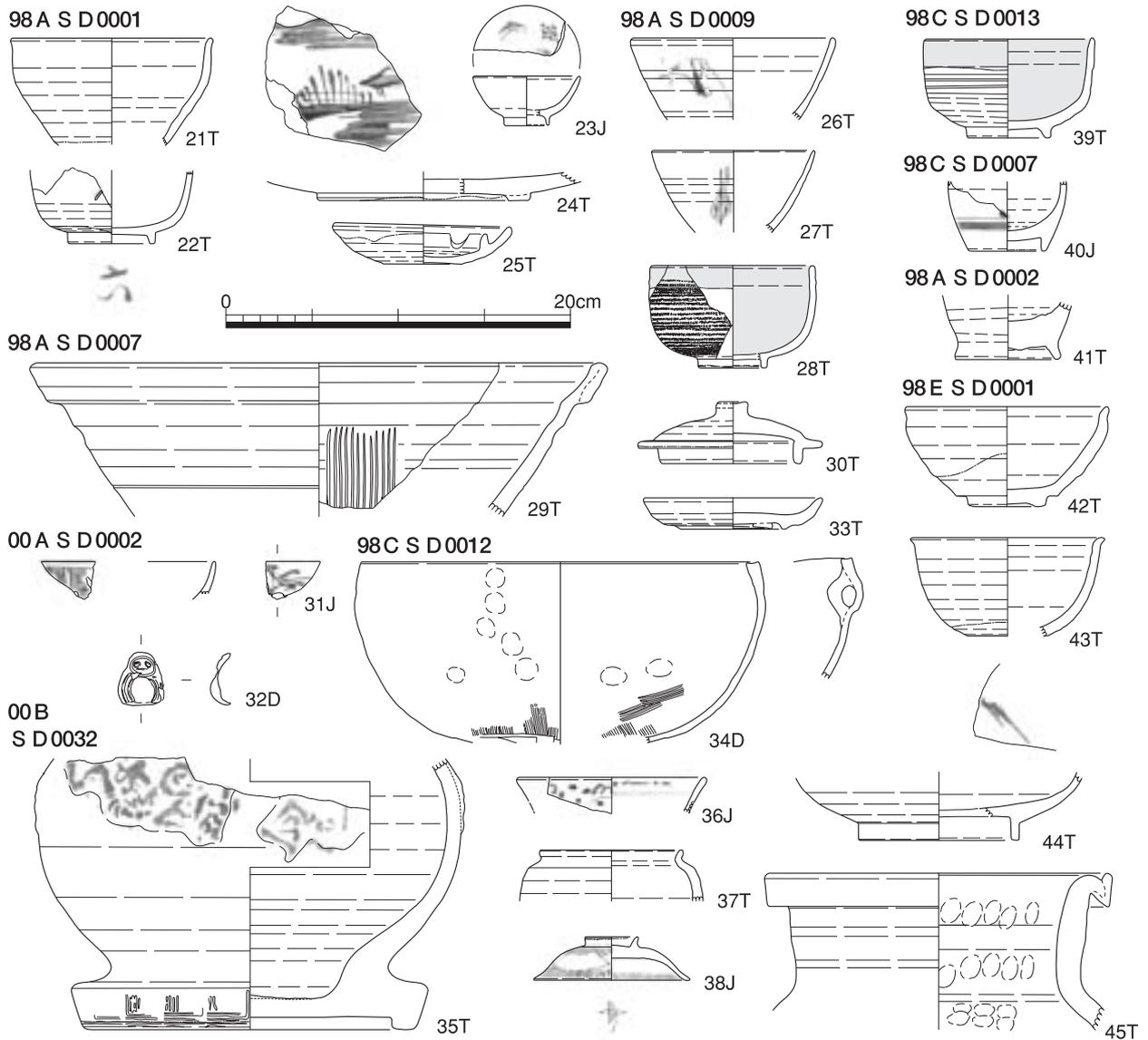
第 20 表 S D 合計出土陶磁器類集計表

材質別に見てみると、土師質製品36.1%、陶器製品59.0%、磁器製品4.8%で、本遺跡の江戸時代後期の平均値とよく似た結果となっている。



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL 登録 番号
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
1	98A SD0013	供膳具	椀	平椀	残5.3	(10.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵(笹文か)	E-769
2	98A SD0013	供膳具	椀	平椀	6.1	(13.2)	—	(5.0)	白泥+灰釉	白泥+灰釉	瀬・美	白泥による打ち刷毛目	27 E-770
3	98A SD0013	供膳具	椀	腰鍔椀	5.3	9.4	—	3.8	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台釉剥ぎ・トチン融着	27 E-771
4	98A SD0013	供膳具	皿	その他	残2.1	—	—	6.8	灰釉	灰釉+銅緑釉	肥前	高台内トチン痕、高台使用による摩滅	E-772
5	98A SD0013	火 具	火容	筒形	残5.9	(12.8)	(13.4)	—	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁部釉剥ぎ・摩滅、灰落とりに転用か	E-773
6	98A SD0012	供膳具	椀	丸椀	残4.1	(9.8)	—	—	—	—	肥前	染付・コンニャク印判か	E-774
7	98A SD0012	供膳具	椀	腰折椀	残4.2	(9.0)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-775
8	98A SD0012	供膳具	椀	平椀	6.5	(11.2)	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵(柳文)	27 E-776
9	98A SD0012	供膳具	椀	腰鍔椀	5.6	(9.4)	—	3.9	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台使用による摩滅	E-777
10	98A SD0012	供膳具	皿	丸皿	(2.5)	(9.8)	—	5.2	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内トチン痕、高台使用による摩滅	E-778
11	98A SD0012	調理具	鉢	捏ね鉢	14.7	(31.0)	—	(13.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み・外面トチン痕	28 E-779
12	98A SD0012	調理具	搦鉢	Ⅶ類	残5.7	(32.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-780
13	98A SD0012	調理具	搦鉢	Ⅶ類	残6.4	(32.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数13本か	E-781
14	98A SD0012	調理具	搦鉢	Ⅶ類	残5.4	(31.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-782
15	98A SD0012	調理具	鍋・釜	焙烙	残7.9	(36.4)	—	—	ナデ	銅+ナデ+ナリ	不明	外面煤付着	E-783
16	98A SD0012	その他	その他	筒形容器	残7.9	—	(16.3)	(13.8)	ナデ	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕	E-784
17	98A SD0005	供膳具	椀	丸椀	残5.8	(9.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-785
18	98A SD0005	供膳具	鉢	その他	残4.3	—	—	(15.7)	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉散らし、見込み印花、見込み・高台内トチン痕、高台釉剥ぎ	E-786
19	98A SD0005	供膳具	鉢	織部	残5.0	—	(7.4)	5.6	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵	28 E-787
20	98F SD0015	供膳具	皿	菊皿	3.4	(14.3)	—	(8.6)	灰釉	灰釉	瀬・美		28 E-788

第129図 SD合計①(1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
21	98A	SD0001	供膳具	椀	天目椀	残6.2	(11.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-789
22	98A	SD0001	供膳具	椀	丸椀	残4.3	—	—	5.0	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵 (山水文か)、高台内墨書「六」	27	E-790
23	98A	SD0001	供膳具	小椀	丸椀	2.9	(6.2)	—	(2.6)	—	—	関西系	染付 (網笠文)	27	E-791
24	98A	SD0001	供膳具	鉢	その他	残1.6	—	—	(12.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵+鉄絵 (山水模写文か)、見込みピン痕、高台輪剥ぎ・使用による摩滅	28	E-792
25	98A	SD0001	灯火具	皿	灯蓋	2.4	10.2	—	4.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美	外面剥離痕、内区径 (7.2) cm	29	E-793
26	98A	SD0009	供膳具	椀	平椀	残4.8	(11.5)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (柳文)		E-794
27	98A	SD0009	供膳具	椀	広東椀	残4.8	(9.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (小杉文)		E-795
28	98A	SD0009	供膳具	椀	丸椀	6.0	(9.4)	—	(4.0)	銅緑釉	銅緑釉+灰釉	瀬・美	鎧茶椀	27	E-796
29	98F	SD0007	調理具	播鉢	Ⅶ類	残9.0	(32.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	樋目数12本		E-797
30	98F	SD0007	その他	蓋	Ⅳ類	3.6	(7.8)	—	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	肩径10.6cm、つまみ径1.4cm	29	E-798
31	00A	SD0002	供膳具	皿	丸皿	残2.2	—	—	—	—	—	肥前	口縁部鉄錆、染付		E-799
32	00A	SD0002	その他	人形	—	—	—	—	—	指押え	—	不明	型押し成形、縦3.2cm、横2.7cm、厚さ1.2cm	30	E-800
33	98C	SD0012	供膳具	皿	丸皿	1.8	(10.4)	—	(6.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台剥離痕、高台内輪トチン融着		E-801
34	98C	SD0012	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.8	(23.2)	(23.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-802
35	00B	SD0032	火 具	鉢	瓶掛	残15.9	—	(24.6)	18.6	鉄釉	銅緑釉+鉄釉	瀬・美	駝付文、藍絵、銅緑釉白濁、内面鉄釉刷毛塗り、高台内鉄化膜、内面鉄分付着、高台摩滅	29	E-803
36	00B	SD0032	供膳具	椀	端反椀	残2.1	(10.8)	—	—	—	—	瀬・美	染付		E-804
37	00B	SD0032	貯蔵具	壺	茶入か	残3.0	(8.2)	—	—	ナデ	ナデ	瀬・美			E-805
38	00B	SD0032	その他	蓋	E類	2.6	9.1	—	—	—	—	瀬・美	染付	29	E-806
39	98C	SD0013	供膳具	椀	腰鍔椀	5.4	9.7	—	4.8	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台トチン痕	27	E-807
40	98C	SD0007	貯蔵具	瓶	その他	残4.1	—	(6.8)	4.5	ナデ	—	肥前	染付		E-808
41	98A	SD0002	神仏具	花生	壺形	残3.3	—	(11.4)	(5.9)	ナデ	灰釉	瀬・美	高台釉剥ぎ		E-809
42	98E	SD0001	供膳具	椀	天目椀	5.9	(11.6)	—	(3.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		27	E-810
43	98E	SD0001	供膳具	鉢	端反椀	残5.8	(11.3)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-811
44	98E	SD0001	供膳具	鉢	その他	残4.0	—	—	(9.3)	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵 (山水文か)		E-812
45	98E	SD0001	貯蔵具	壺	その他	残9.2	(19.7)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑		28	E-813

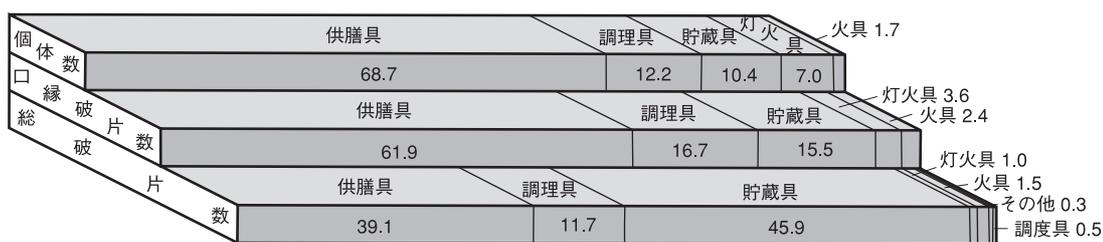
第130図 S D合計② (1:4)

井戸合計

江戸時代後期に属する井戸から出土した遺物をまとめたものを、「井戸合計」として扱う。出土した遺物は、総破片数397点、接合前口縁破片数84点、個体数9.58個体と、出土量は少ないが一括性が高い資料として注目される。

用途別では、供膳具6.58個体（68.7%）、調理具1.17個体（12.2%）、貯蔵具1.00個体（10.4%）、灯火具0.67個体（7.0%）、火具0.17個体（1.7%）で、神仏具・調度具・蓋類は破片が出土しているが、化粧具・喫煙具は出土していない。供膳具の比率が高く、供膳具内の椀類と皿類は1.24：1で差は僅かしかない。しかし、土師器皿を抜いてみると3.00：1となる。とくに広東椀の出土が目立っている。対照的に調理具の出土が減少しているが、これは鍋・釜類の出土が極端に少なくなっていることが大きく影響していると思われる。

材質別に見てみると、土師質製品26.1%、陶器製品72.2%、磁器製品1.7%となっており、陶器製品の出土量が多くなっている。この点は新しい時代の様相を示すが、磁器製品の出土量がやや少なすぎる感がある。

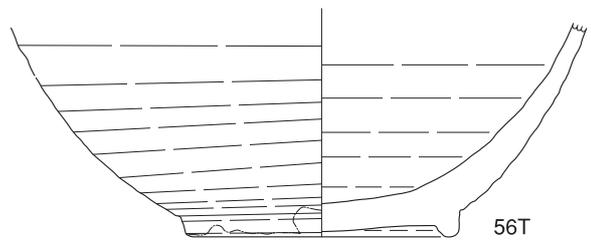
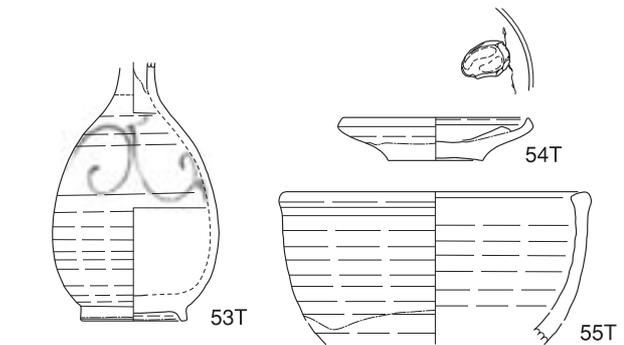
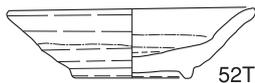
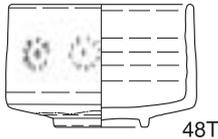
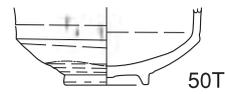
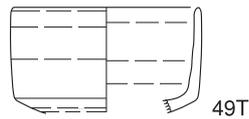
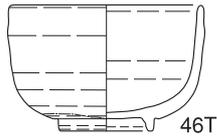


第131図 井戸合計出土陶磁器類用途組成図

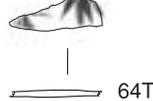
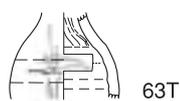
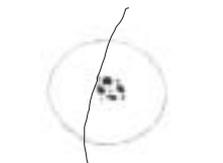
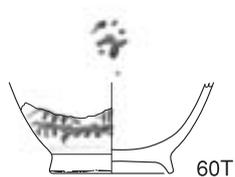
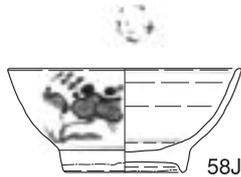
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		42			42		32			32		104			104
	小椀													1		1
	皿	20	12	2		34	8	9	1		18	21	20	1		42
	鉢		3			3		2			2		7			7
	その他															
	小計	20	57	2		79	8	43	1		52	21	131	2		154
調理具	鍋・釜	3				3	3				3	12	1			13
	鉢		9			9		9			9		22			22
	播鉢		2			2		2			2		11			11
	瓶															
	その他															
	小計	3	11			14	3	11			14	12	34			46
貯蔵具	瓶												11			11
	壺												1			1
	甕A		12			12		13			13		166			166
	甕B												3			3
	鉢															
	その他															
	小計		12			12		13			13		181			181
灯火具		7	1			8	2	1			3	2	2			4
火具			2			2		2			2		6			6
化粧具																
神仏具													1			1
喫煙具																
調度具													2			2
蓋													1			1
合計		30	83	2		115	13	70	1		84	35	358	2		397

第21表 井戸合計出土陶磁器類集計表

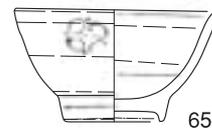
98B S E 0002



00A S E 0002



98C S E 0004



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
46	98B	SE0002	供膳具	椀	丸椀	6.7	(9.8)	—	4.8	灰釉	灰釉	瀬・美		27	E-814
47	98B	SE0002	供膳具	椀	丸椀	4.5	(8.8)	—	3.0	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (松竹梅文か)	27	E-815
48	98B	SE0002	供膳具	椀	筒椀	6.5	(9.4)	—	4.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (梅花文)	27	E-816
49	98B	SE0002	供膳具	椀	筒椀	残5.6	(9.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-817
50	98B	SE0002	供膳具	椀	腰折椀	残4.1	—	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (笹文か)		E-818
51	98B	SE0002	供膳具	皿	丸皿	4.4	(11.2)	—	3.7	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 + 鉄絵 (梅樹文)		E-819
52	98B	SE0002	供膳具	皿	端反皿	3.7	(13.1)	—	6.3	灰釉	灰釉	瀬・美	内面一部銅緑釉、高台摩滅	28	E-820
53	98B	SE0002	貯蔵具	瓶	德利A	残13.8	—	8.9	5.6	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (唐草文か)、高台摩滅	29	E-821
54	98B	SE0002	灯火具	皿	その他	2.3	(9.8)	—	5.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕、外面油煙付着	29	E-822
55	98B	SE0002	調理具	鉢	片口か	残8.1	(15.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	片口か		E-823
56	98B	SE0002	調理具	鉢	捏ね鉢か	残11.2	—	—	(13.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み・外面体部トチン痕・剥離痕		E-824
57	98B	SE0002	調理具	播鉢	Ⅵ類	残3.7	(28.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-825
58	00A	SE0002	供膳具	椀	広東椀	5.5	(12.2)	—	6.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	27	E-826
59	00A	SE0002	供膳具	椀	丸椀	残4.9	—	—	(5.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、高台釉剥ぎ、外面体部・高台内トチン痕		E-827
60	00A	SE0002	供膳具	椀	広東椀	残4.8	—	—	(6.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (五弁花・松文)、高台釉剥ぎ		E-828
61	00A	SE0002	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	(7.6)	—	(4.6)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-829
62	00A	SE0002	灯火具	皿	灯明皿	1.3	(7.6)	—	(4.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着		E-830
63	00A	SE0002	貯蔵具	瓶	その他	残4.6	—	(5.8)	—	ナデ	灰釉	瀬・美	鉄絵 (草文)		E-831
64	00A	SE0002	その他	その他	その他	—	—	—	—	透明釉	透明釉	信楽?	蓋か、残存長4.8cm、残存幅1.8cm、最大厚0.4cm		E-832
65	98C	SE0004	供膳具	椀	広東椀	6.1	10.6	—	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (梅花文)	27	E-833
66	98C	SE0004	供膳具	皿	型打皿	残1.8	—	—	—	—	—	瀬・美			E-834

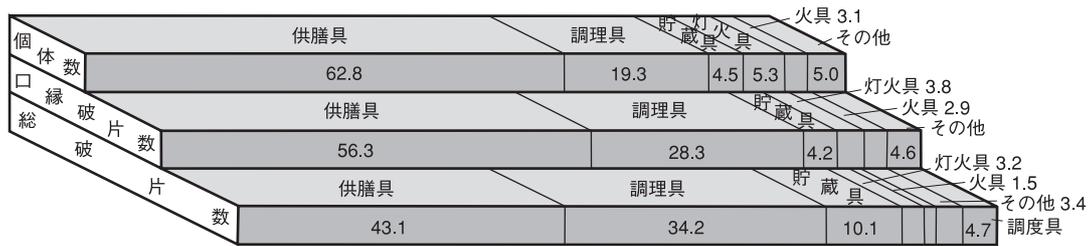
第 132 図 井戸合計 (1 : 4)

98 C S K 0066 本遺構の時期は18世紀後半と考えられる。

98C区で検出された石敷遺構で、出土遺物は総破片数673点、接合前口縁破片数241点、個体数29.83個体である。

用途別に見てみると、供膳具18.75個体(62.8%)、調理具5.75個体(19.3%)、貯蔵具1.33個体(4.5%)、灯火具1.58個体(5.3%)、火具0.92個体(3.1%)、化粧具0.67個体(2.2%)、神仏具0.83個体(2.8%)で、調度具は破片のみ出土し、喫煙具は出土していない。供膳具・調理具・貯蔵具の日常的な生活に関連する遺物群が86.6%とやや減少し、灯火具以下の副次的な生活に関連する遺物群の出土量が多くなっている。その他供膳具の比率が高くなっている点は江戸時代後期の特徴であるが、椀類対皿類は1:1.11でやや皿類が上回っている。ただし、土師器皿を灯火具にすると3.03:1となり、椀類の出土量の方が多くなる。調理具の鍋・釜類では、内耳鍋A 69.6%、焙烙30.4%で、他の器種は確認していない。

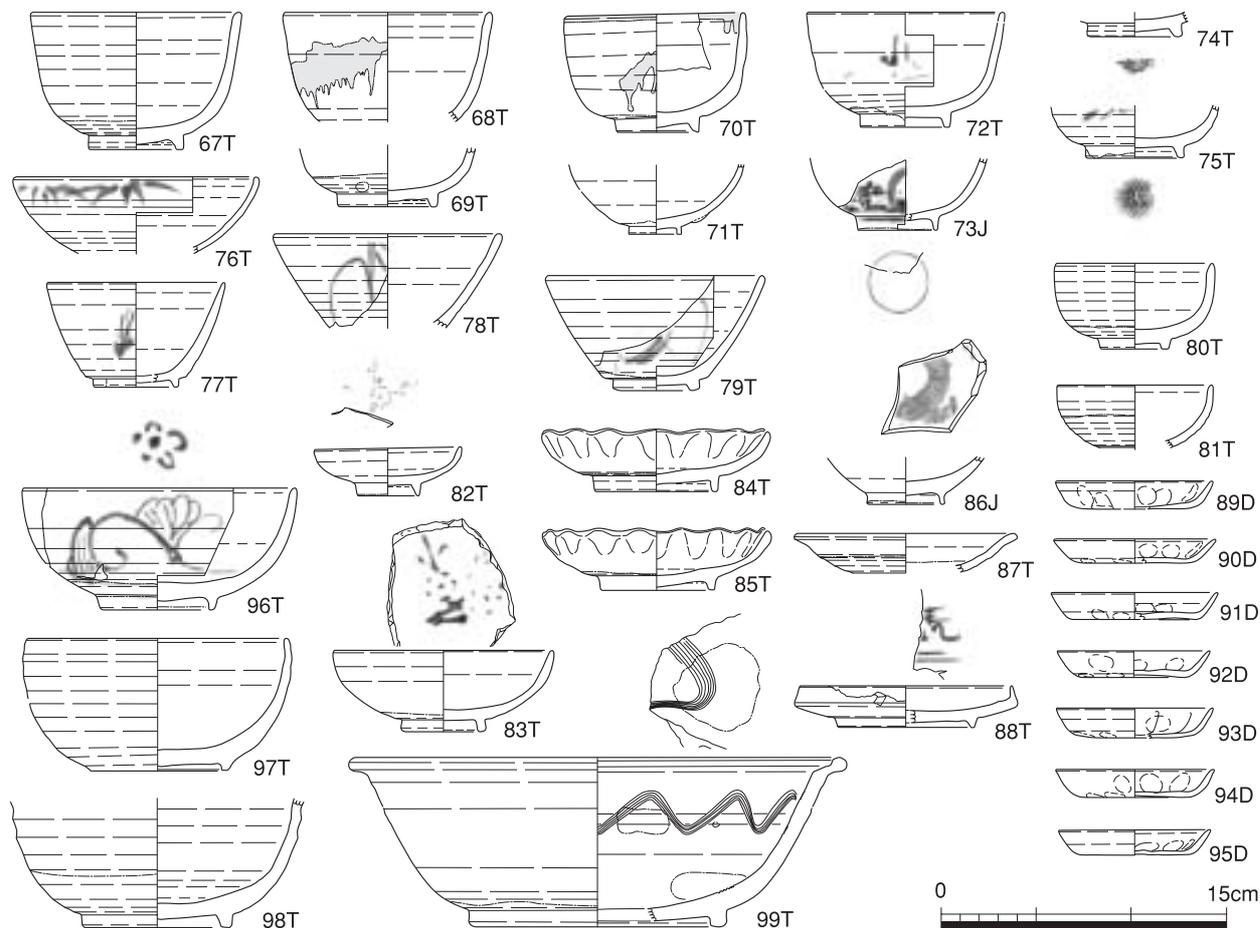
材質面から見てみると、土師質製品39.1%、陶器製品58.1%、磁器製品2.8%となっており、陶器製品の占める割合が高くなっている。また、磁器製品については供膳具以外の神仏具でも出土するようになっている。



第133図 98 C S K 0066 出土陶磁器類用途組成図

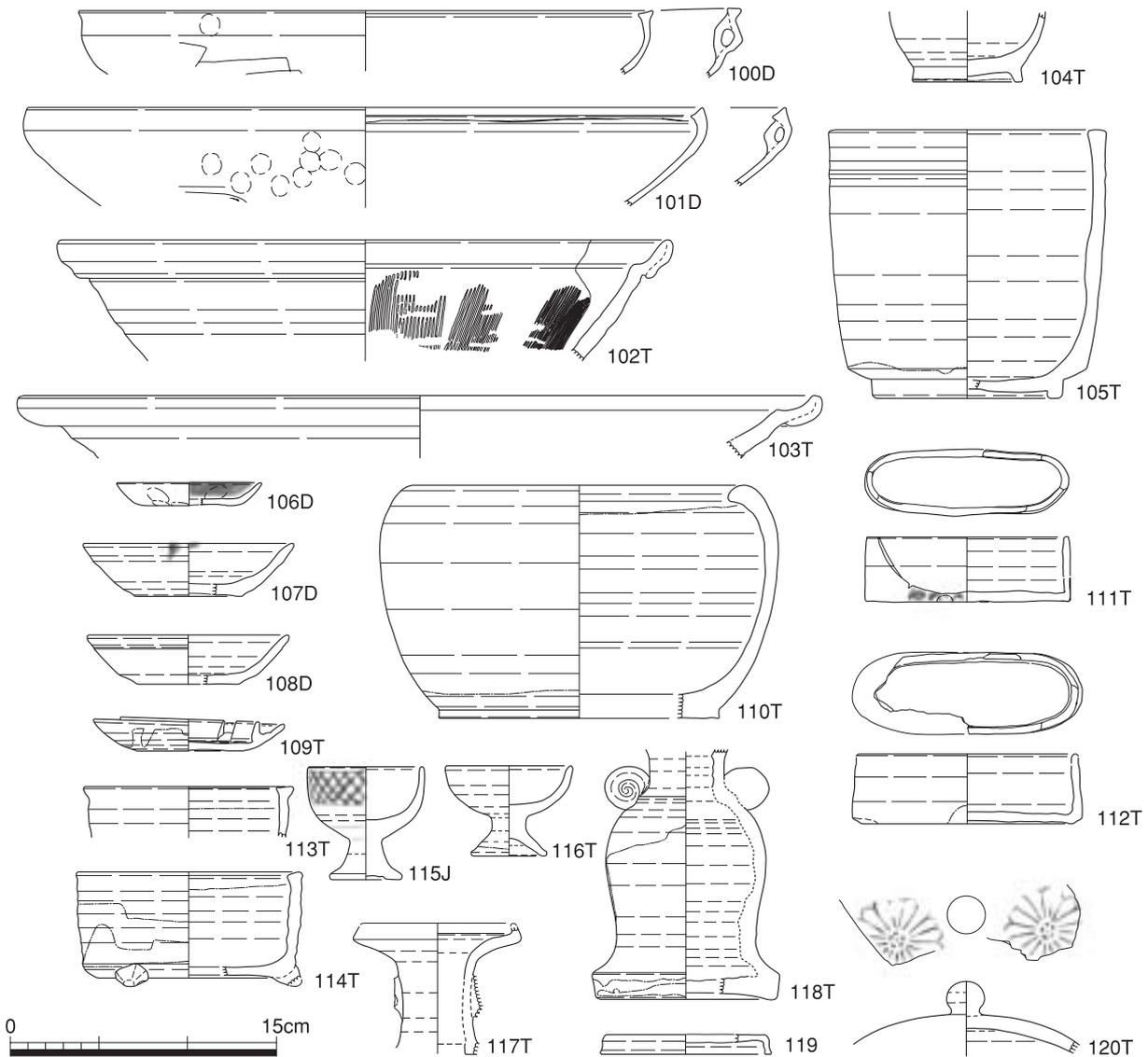
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		89	5		94		61	5		66		127	13		140
	小椀		14		1	15		7			7		8		1	9
	皿	73	31			104	30	21			51	67	47			114
	鉢		12			12		10			10		24			24
	その他															
	小計	73	146	6		225	30	99	6		135	67	206	14		287
調理具	鍋・釜	56				56	57				57	176				176
	鉢		9			9		7			7		24			24
	播鉢		4			4		4			4		28			28
	その他															
	小計	56	13			69	57	11			68	176	52			228
貯蔵具	瓶		6			6		1			1		5			5
	壺												1			1
	甕A		3			3		3			3		39			39
	甕B		7			7		6			6		22			22
	鉢															
	その他															
	小計		16			16		10			10		67			67
灯火具		11	8			19	7	2			9	17	4			21
火具			11			11		7			7		10			10
化粧具			8			8		8			8		9			9
神仏具			6	4		10		2	1		3		10	3		13
喫煙具																
調度具	蓋												30		1	31
	蓋		2			2		1			1		7			7
合計		140	210	10		360	94	140	7		241	160	395	17	1	673

第22表 98 C S K 0066 出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
			用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
67	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	7.3	(11.0)	—	4.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美		27	E-835
68	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残5.8	(10.8)	—	—	鉄釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	灰釉筆散らし		E-836
69	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残3.2	—	—	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美			E-837
70	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	6.4	9.3	—	4.3	鉄釉+灰釉	鉄釉+灰釉	瀬・美		27	E-838
71	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残3.7	—	—	2.8	灰釉	灰釉	瀬・美			E-839
72	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	6.1	(10.3)	—	4.7	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (山水文)	27	E-840
73	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残3.7	—	—	(4.2)	—	—	肥前	染付	27	E-841
74	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残1.3	—	—	4.8	灰釉	ナデ	肥前	高台内押印「清」		E-842
75	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残2.8	—	—	5.1	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵 (山水文か)、高台内押印「清」	27	E-843
76	98C	SK0066	供膳具	椀	平椀	残4.1	(12.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (笹文)		E-844
77	98C	SK0066	供膳具	椀	広東椀	5.6	(9.3)	—	(4.4)	灰釉	灰釉	信楽か	呉須絵+鉄絵 (小杉文)	27	E-845
78	98C	SK0066	供膳具	椀	平椀	残5.0	(11.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (柳文)		E-846
79	98B	SK0066	供膳具	椀	平椀	6.1	(11.3)	—	3.9	灰釉	灰釉	瀬・美	柳茶椀、鉄絵 (柳文)、高台摩滅		E-847
80	98C	SK0066	供膳具	小椀	丸椀	4.6	(8.4)	—	3.6	灰釉	灰釉	瀬・美		27	E-848
81	98C	SK0066	供膳具	小椀	丸椀	残3.4	(8.1)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁部炭化物付着		E-849
82	98C	SK0066	供膳具	皿	丸皿	2.6	7.7	—	3.2	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (桜樹文)	27	E-850
83	98C	SK0066	供膳具	皿	丸皿	4.3	(11.5)	—	(4.1)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵+鉄絵 (梅樹文)		E-851
84	98C	SK0066	供膳具	皿	ひだ皿	3.3	(11.8)	—	6.4	灰釉	灰釉	瀬・美		28	E-852
85	98C	SK0066	供膳具	皿	ひだ皿	3.3	12.2	—	6.2	灰釉	灰釉	瀬・美		28	E-853
86	98C	SK0066	供膳具	椀	丸椀	残2.6	—	—	4.0	—	—	肥前	色絵 (赤・緑)、見込み・高台剥離痕	28	E-854
87	98C	SK0066	供膳具	皿	端反皿	残2.1	(11.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-855
88	98C	SK0066	供膳具	皿	その他	2.2	(11.2)	—	(7.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、高台内トチン痕	28	E-856
89	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	8.2	—	5.8	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部焼成後穿孔か		E-857
90	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.3	(8.4)	—	(5.4)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕		E-858
91	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.4	(8.8)	—	(6.4)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	見込み強い指ナデか		E-859
92	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.4	8.1	—	5.3	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕か		E-860
93	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.6	(8.2)	—	(3.6)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-861
94	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	8.3	—	5.7	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	底部板状圧痕		E-862
95	98C	SK0066	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.4	(7.9)	—	(5.9)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-863
96	98C	SK0066	供膳具	鉢	丸鉢	6.5	(14.3)	—	5.7	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (梅花文+草花文か)	28	E-864
97	98C	SK0066	供膳具	鉢	丸鉢	7.1	(13.6)	—	7.2	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み・高台トチン痕	28	E-865
98	98C	SK0066	供膳具	鉢	丸鉢	残6.9	—	—	(7.5)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕、片口か	28	E-866
99	98C	SK0066	供膳具	鉢	折縁鉢	8.9	(25.8)	—	(13.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	波状文、銅緑釉散らし		E-867

第134図 98 C S K 0066 ① (1 : 4)



遺物 番号	調査地点 調査区	調査区	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
100	98C	SK0066	調理具	鍋・釜	焙烙	残4.2	(32.4)	—	—	ナデ	ナデ	不明	外面煤付着		E-868	
101	98C	SK0066	調理具	鍋・釜	焙烙	残5.6	(38.2)	(38.8)	—	ナデ	ナデ	不明	外面煤付着		E-869	
102	98C	SK0066	調理具	搦鉢	Ⅶ類	残6.9	(34.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数20本		E-870	
103	98C	SK0066	調理具	搦鉢	Ⅷ類	残3.6	(44.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-871	
104	98C	SK0066	貯蔵具	瓶	その他	残4.1	—	—	(5.8)	ナデ	鉄釉	瀬・美	高台釉剥ぎ		E-872	
105	98C	SK0066	貯蔵具	甕B	半胴A	15.3	(15.4)	—	(10.4)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部トチン痕、剥離痕	29	E-873	
106	98C	SK0066	灯火具	皿	灯明皿	1.3	(8.2)	—	(5.2)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面・外面底部油煙付着		E-874	
107	98C	SK0066	灯火具	皿	灯明皿	3.0	(11.6)	—	(6.0)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、口縁部油煙付着		E-875	
108	98C	SK0066	灯火具	皿	灯明皿	2.8	(11.2)	—	(5.8)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内面油煙付着		E-876	
109	98C	SK0066	灯火具	皿	灯蓋	1.9	(10.8)	—	5.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美		29	E-877	
110	98C	SK0066	火具	鉢	火鉢	13.3	(19.2)	—	(15.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		29	E-878	
111	98C	SK0066	化粧具	鬢盤	—	3.7	(11.2)	—	11.4	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、短径口径 (3.6) cm・底径3.8cm		E-879	
112	98C	SK0066	化粧具	鬢盤	—	4.0	(12.3)	—	(11.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	底部トチン痕、短径口径 (4.3) cm・底径4.5cm		E-880	
113	98C	SK0066	神仏具	香炉	筒形	残2.9	(11.7)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-881	
114	98C	SK0066	神仏具	香炉	筒形	(6.4)	(12.6)	—	(10.2)	灰釉	灰釉+銅線	瀬・美	見込み使用痕、口縁部釉剥ぎ	29	E-882	
115	98C	SK0066	神仏具	仏飯具	—	6.5	(6.4)	—	(3.8)	—	—	肥前	染付 (格子文)	29	E-883	
116	98C	SK0066	神仏具	仏飯具	—	5.1	(7.0)	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-884	
117	98C	SK0066	調度具	花生	壺型	残7.1	(8.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-885	
118	98C	SK0066	調度具	花生	壺型	残14.2	—	9.2	10.2	灰釉	うのふ釉+鉄釉	瀬・美		29	E-886	
119	98C	SK0066	その他	蓋	Ⅵ類	1.1	(9.6)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	肩径 (9.1) cm		E-887	
120	98C	SK0066	その他	蓋	Ⅳ類	残4.1	—	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	鉄絵 (菊花文)、つまみ径2.1cm	29	E-888	

第135図 98 C S K 0066 ② (1 : 4)

98 B S K 0191 本遺構の時期は、18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。

98 B 区で検出された遺構で、出土した遺物は総破片数267点、接合前口縁破片数58点、個体数8.00個体である。出土量は少ないが、数少ないまとまった遺構として注目される。

用途別に見てみると、供膳具4.92個体（61.5%）、調理具1.00個体（12.5%）、貯蔵具0.25個体（3.1%）、灯火具0.08個体（1.0%）、火具1.25個体（15.6%）、化粧具0.25個体（3.1%）、神仏具0.25個体（3.1%）で、調度具は破片が1点出土しているが、喫煙具・蓋類は出土していない。供膳具・調理具・貯蔵具という日常的な生活に関連する遺物群は77.1%と低下し、火鉢がまとまって出土していることもあり灯火具以下の副次的生活に関連する遺物群が増加している。また、供膳具の椀類と皿類が3.08：1で椀類が高い比率で出土している点も江戸時代後期の特徴を表しているものと思われる。特に腰錆椀が多く出土している。鍋・釜類では、内耳鍋A 66.7%、茶釜形鍋33.3%で、他の器種のものは確認できていない。

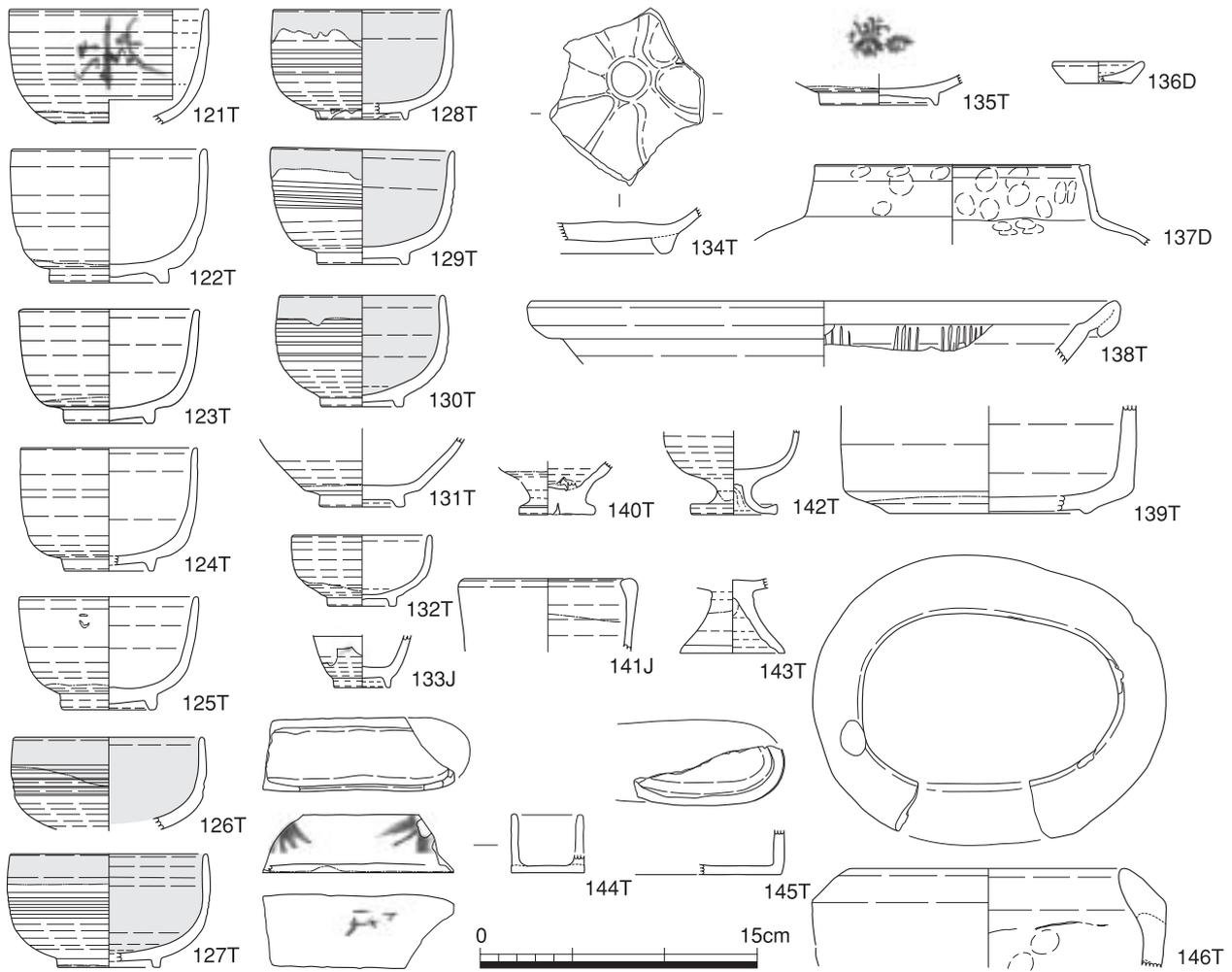
材質面から見てみると、土師質製品22.9%、陶器製品74.0%、磁器製品3.1%で、土師質製品が極端に低下し、陶器製品が多くなっている。磁器製品の出土量もやや少ないが、供膳具以外でも出土するようになっている。



第136図 98 B S K 0191 出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		40			40	24			24		69				69
	小椀		6			6	2			2		6	2			8
	皿	12	1			13	5	1		6	9	8				17
	鉢											1				1
	その他															
	小計	12	47			59	5	27		32	9	84	2			95
調理具	鍋・釜	9				9	7			7	31					31
	鉢											6				6
	播鉢		3			3		2		2		17				17
	その他															
	小計	9	3			12	7	2		9	31	23				54
貯蔵具	瓶															
	壺											1				1
	甕A		3			3		4		4		80				80
	甕B											6				6
	その他															
	小計		3			3		4		4		87				87
灯火具		1			1	1			1	2	1	1			4	
火具			15		15	10			10		17	1			18	
化粧具			3		3	1			1		2	1			3	
神仏具				3	3			1		1	4	1			5	
喫煙具																
調度具												1			1	
蓋																
合計		22	71	3		96	13	44	1		58	42	219	6		267

第23表 98 B S K 0191 出土陶磁器類集計表



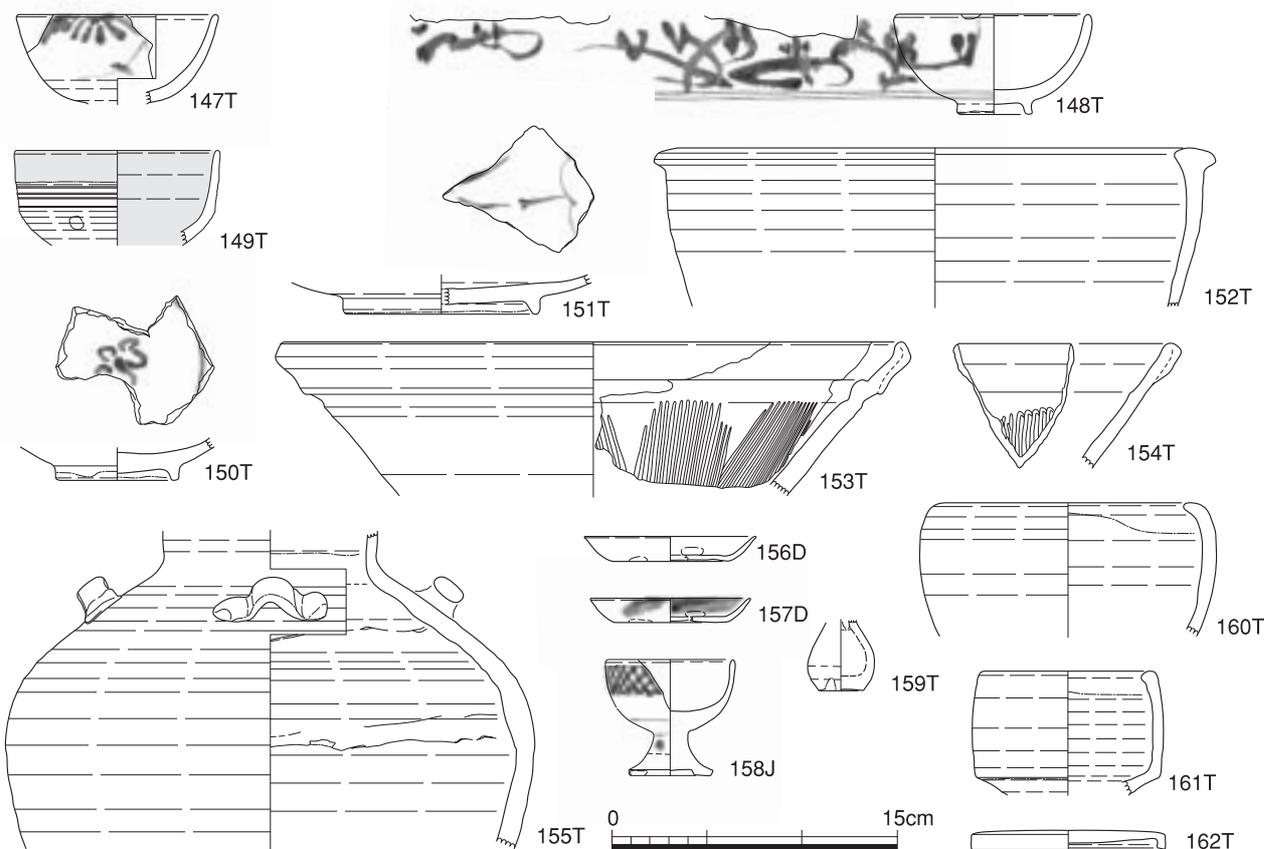
遺物 番号	調査地点	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
121	98B	SK0191	供膳具	椀	丸椀	残6.3	(10.5)	—	—	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵 (山水文)		E-889
122	98B	SK0191	供膳具	椀	丸椀	7.3	(10.2)	—	6.2	灰釉	灰釉	瀬・美	釉白濁、二次的に火を受けたのか	27	E-890
123	98B	SK0191	供膳具	椀	丸椀	6.2	(9.6)	—	4.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-891
124	98B	SK0191	供膳具	椀	丸椀	6.7	(9.5)	—	(4.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台摩滅		E-892
125	98B	SK0191	供膳具	椀	丸椀	6.2	(9.6)	—	5.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-893
126	98B	SK0191	供膳具	椀	腰鍔椀	残5.1	(10.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕		E-894
127	98B	SK0191	供膳具	椀	腰鍔椀	6.2	(10.6)	—	(5.6)	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台トチン融着・剥離痕		E-895
128	98B	SK0191	供膳具	椀	腰鍔椀	6.0	(9.5)	—	4.8	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台内トチン痕	27	E-896
129	98B	SK0191	供膳具	椀	腰鍔椀	6.4	(9.8)	—	4.9	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台摩滅		E-897
130	98B	SK0191	供膳具	椀	腰鍔椀	6.1	(8.8)	—	(4.4)	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台内トチン痕		E-898
131	98B	SK0191	供膳具	椀	その他	残3.7	—	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美	高台摩滅		E-899
132	98B	SK0191	供膳具	小椀	丸椀	3.9	(7.4)	—	(3.6)	灰釉	灰釉	瀬・美		27	E-900
133	98B	SK0191	供膳具	小椀	その他	残2.9	—	—	3.1	—	—	肥前	染付、高台釉剥ぎ		E-901
134	98B	SK0191	供膳具	皿	型打皿	残2.5	—	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		28	E-902
135	98B	SK0191	供膳具	皿	その他	残1.7	—	—	6.4	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (草花文か)	28	E-903
136	98B	SK0191	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.2	(4.8)	—	(3.6)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-904
137	98B	SK0191	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残4.4	(14.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-905
138	98B	SK0191	調理具	捕鉢	Ⅵ類	残3.5	(31.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-906
139	98B	SK0191	火具	火容	筒形	残5.9	—	—	(10.8)	ナデ	鉄釉	瀬・美	内面トチン痕		E-907
140	98B	SK0191	灯火具	ひょうそく	脚付	残2.9	—	—	4.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕、底部穿孔 (3mm)	29	E-908
141	98B	SK0191	神仏具	香炉	筒形	残4.0	(9.0)	—	—	青磁釉	青磁釉	肥前			E-909
142	98B	SK0191	神仏具	仏飯具	—	残4.6	—	—	(9.6)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-910
143	98B	SK0191	神仏具	仏飯具	—	残4.0	—	—	5.2	灰釉	灰釉	瀬・美	底部剥離痕		E-911
144	98B	SK0191	化粧具	髪盤	—	3.2	—	—	—	灰釉	鉄釉	瀬・美	呉須絵、底部墨書「トは」か	29	E-912
145	98B	SK0191	化粧具	髪盤	—	残2.4	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部幅 (5.2) cm		E-913
146	98B	SK0191	火具	鉢	その他	残5.4	(15.0)	(19.3)	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	自然釉かかる	29	E-914

第137図 98 B S K 0191 (1 : 4)

98 C S K 0454 本遺構の時期は18世紀後半から19世紀初頭と思われる。

98 C 区で検出された池状遺構で、出土遺物は総破片114点、接合前口縁破片数33点、個体数3.42個体である。出土量は少ないが、数少ないまとまった遺物を出土する遺構である。

用途別には、供膳具1.50個体(43.9%)、調理具0.75個体(22.0%)、貯蔵具0.42個体(12.2%)、灯火具0.17個体(4.9%)、火具0.42個体(12.2%)、神仏具0.17個体(4.9%)で、その他の化粧具・喫煙具・調度具は出土していない。ここでも供膳具・調理具・貯蔵具という日常的な生活に関連する遺物群は78.0%と低くなっており、副次的な生活に関連する遺物群が多く出土するようになっている。



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				
147	98C SK0454	供膳具	椀	丸椀	残4.8	(10.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-915
148	98C SK0454	供膳具	椀	丸椀	5.3	(10.1)	—	3.7	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵(草花文か)、高台釉剥ぎ・使用による摩滅	27 E-916
149	98C SK0454	供膳具	椀	腰鑄椀	残5.1	(10.9)	—	—	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美		E-917
150	98C SK0454	供膳具	皿	その他	残1.8	—	—	(6.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	E-918
151	98C SK0454	供膳具	皿	その他	残2.1	—	—	(10.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、高台釉剥ぎ	E-919
152	98C SK0454	調理具	鉢	捏ね鉢	残8.4	(27.0)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-920
153	98C SK0454	調理具	播鉢	Ⅶ類	残8.2	(32.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数15本	E-921
154	98C SK0454	調理具	播鉢	Ⅶ類	残6.6	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅	E-922
155	98C SK0454	貯蔵具	壺	茶壺か	残16.9	—	(28.0)	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛けか	28 E-923
156	98C SK0454	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.3	(9.0)	—	(6.2)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面やや摩滅	E-924
157	98C SK0454	灯火具	皿	灯明皿	1.4	(8.1)	—	(5.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着、底部板状圧痕	E-925
158	98C SK0454	神仏具	仏飯具	—	6.2	(6.6)	—	4.3	—	—	肥前	染付(格子文)	29 E-926
159	98C SK0454	神仏具	瓶	神酒徳利B	残3.7	—	3.5	2.3	ナデか	灰釉	瀬・美	底部回転糸切り痕、ミニチュア製品か	29 E-927
160	98C SK0454	火具	鉢	火鉢	残7.1	(13.5)	(15.7)	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-928
161	98C SK0454	神仏具	香炉	筒形	残6.5	(8.8)	(10.0)	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内面煤付着	E-929
162	98C SK0454	その他	蓋	Ⅶ類	1.0	(10.2)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	肩径(10.1) cm	29 E-930

第138図 98 C S K 0454 (1 : 4)

供膳具のうち椀類対皿類の比率は8.00：1で椀類が圧倒的に多くなり、調理具の鍋・釜類、鉢類、播鉢の比が1：1：1となっているように、江戸時代後期の遺物組成の傾向を掴むことができる。また蓋類は、総破片数1点、接合前口縁破片数1点、個体数0.25個体が出土している。

材質面で見ると、土師質製品が14.6%と極端に低くなり、逆に陶器製品は82.9%と高くなっている。磁器製品は2.4%とやや低くなっている。



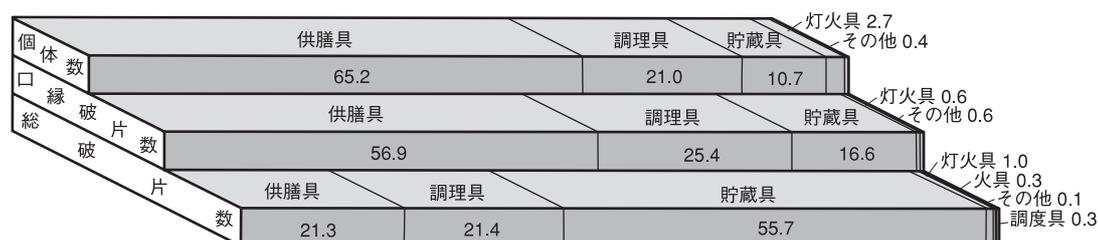
第139図 98 C S K 0454 出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		16			16		13			13		26	2		28
	小椀												1			1
	皿	1	1			2	1	1			2	4	5			9
	鉢															
	その他															
調理具	小計	1	17			18	1	14			15	4	32	2		38
	鍋・釜	3				3	2			2	4					4
	鉢		3			3		3			3		4			4
	播鉢		3			3		3			3		6			6
	瓶															
貯蔵具	小計	3	6			9	2	6			8	4	10			14
	瓶															
	壺												7			7
	甕A		5			5		3		3		45			45	
	甕B															
灯火具	瓶															
	小計	2				2	1			1	1				1	
火具							3			3		5			5	
化粧具																
神仏具			1	1	2		1	1		2		2	1		3	
喫煙具																
調度具																
蓋			3		3		1			1		1			1	
合計		6	37	1		44	4	28	1		33	9	102	3	114	

第24表 98 C S K 0454 出土陶磁器類集計表

その他のSK合計

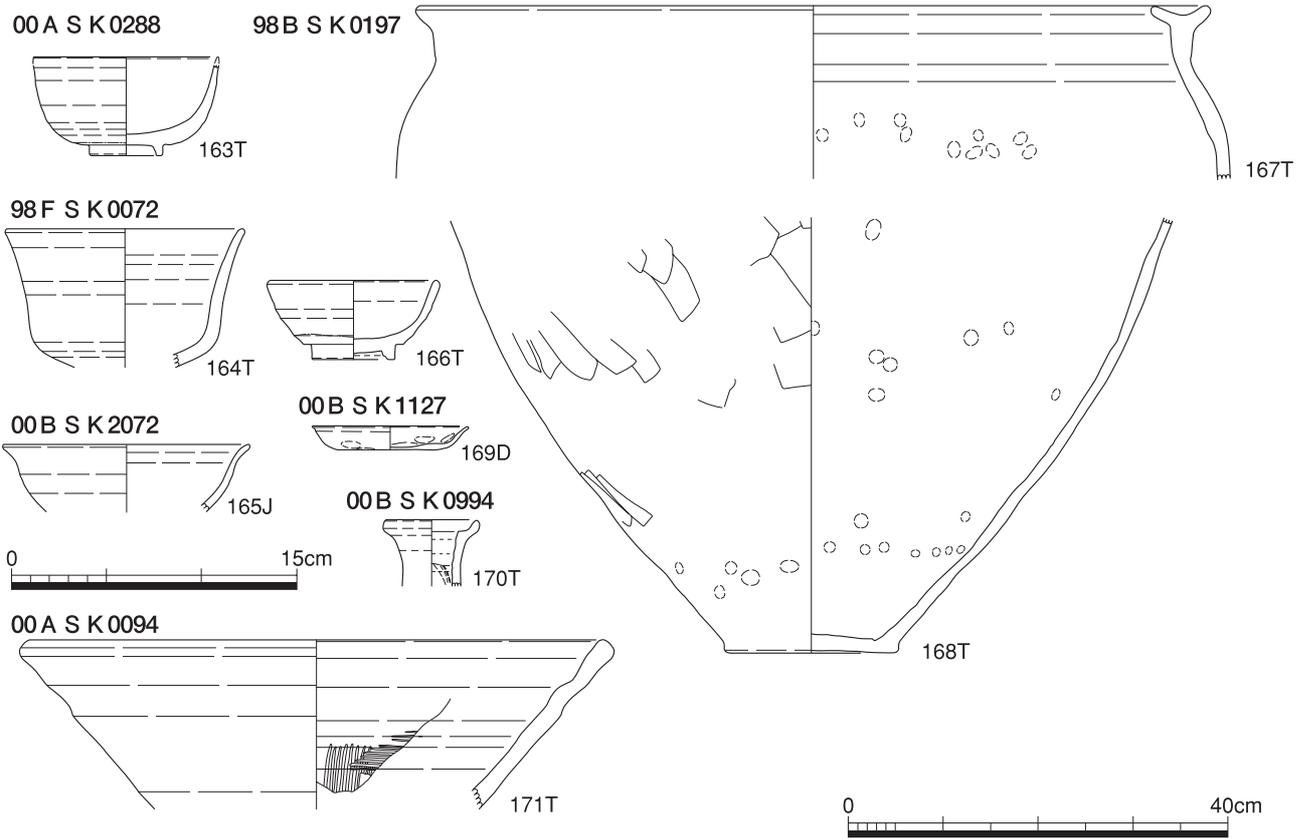
前述した土坑以外の土坑から出土した遺物をまとめたものを、「その他のSK合計」として扱う。出土遺物の合計は、総破片数1,569点、接合前口縁破片数181点、個体数18.67個体である。



第140図 その他のSK合計出土陶磁器類用途組成図

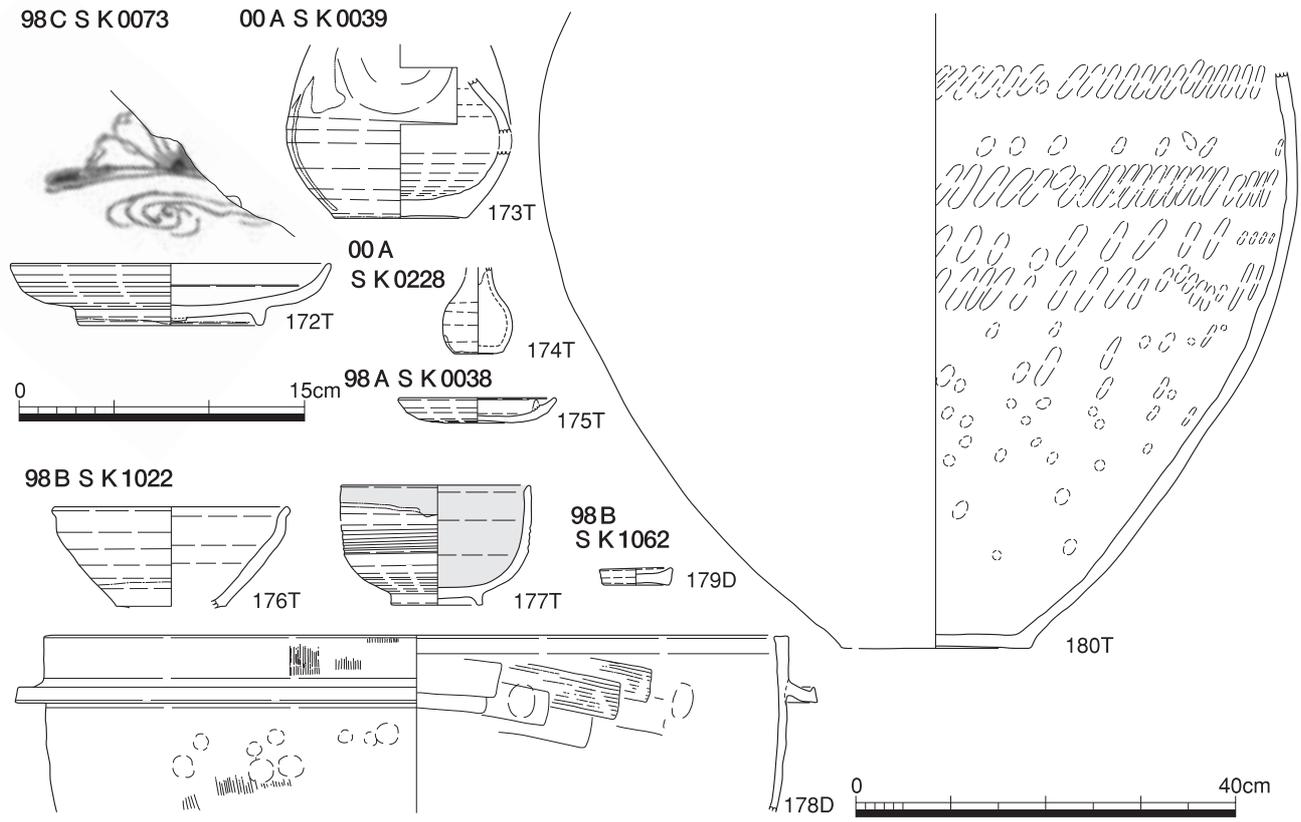
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		63	5		68		49	3		52		143	5		148
	小椀		2			2		1			1		1	1		2
	皿	52	18			70	35	13			48	145	31			176
	鉢		6			6		2			2		8			8
	小計	52	89	5		146	35	65	3		103	145	183	6		334
調理具	鍋・釜	40				40	38				38	303				303
	鉢		2			2		2			2		5		5	
	搗鉢		5			5		6			6		27		27	
	瓶															
	小計	40	7			47	38	8			46	303	32		335	
貯蔵具	瓶		3			3		2			2		14		14	
	壺												15		15	
	甕A		21			21		28			28		840		840	
	甕B												5		5	
	小計		24			24		30			30		874		874	
灯火具		6			6		1			1	15	1			16	
火具												3		1	4	
化粧具																
神仏具				1	1				1	1		1	1		2	
喫煙具																
調度具												3		1	4	
蓋																
合計		92	126	6		224	73	104	4		181	463	1097	7	2	1569

第25表 その他のSK合計出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	用途	器種			法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号
			器種	器形	器高	口径	底径	内面	外面					
163	00A SK0288	供膳具	椀	丸椀	5.3	(9.7)	—	(3.6)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-931
164	98F SK0072	供膳具	椀	端反椀	残7.4	(12.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-932
165	00B SK2072	供膳具	椀	端反椀	残3.5	(12.8)	—	—	青磁	青磁	肥前?			E-933
166	98B SK0197	供膳具	椀	丸椀	4.2	(8.6)	—	4.3	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みトチン痕		E-934
167	98B SK0197	貯蔵具	甕A	Ⅲ類	残18.4	(82.8)	—	—	指押え+ナデ	ナデか	常滑	168と同一個体か		E-935
168	98B SK0197	貯蔵具	甕A	Ⅲ類	残46.2	—	—	(17.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑	167と同一個体か		E-936
169	00B SK1127	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.3	(8.1)	—	(5.2)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-937
170	00B SK0994	貯蔵具	瓶	その他	残3.5	4.8	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-938
171	00A SK0094	調理具	搗鉢	Ⅶ類	残8.9	(30.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁摩滅		E-939

第141図 その他のSK合計① (167・168は1:8、他は1:4)

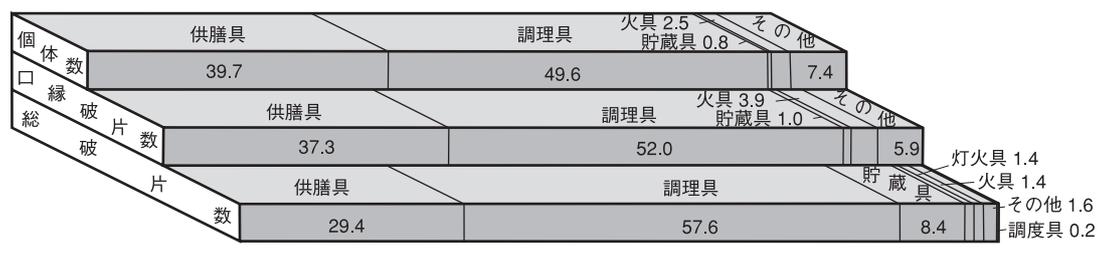


遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種		法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号	
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
172	98C	SK0073	供膳具	皿	丸皿	3.3	(16.8)	—	(9.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、高台内トチン融着、高台摩滅	27	E-940
173	00A	SK0039	貯蔵具	瓶	徳利Dか	残9.2	—	(11.9)	(7.0)	灰釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	外面灰釉流し掛け、底部摩滅		E-941
174	00A	SK0228	神仏具	瓶	神酒徳利B	残4.6	—	—	2.6	ナデ	灰釉	瀬・美	ミニチュアか	29	E-942
175	98A	SK0038	灯火具	皿	灯蓋	1.4	(8.2)	—	(3.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		29	E-943
176	98B	SK1022	供膳具	碗	天目碗	残5.3	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-944
177	98B	SK1022	供膳具	碗	腰鎗碗	6.4	(10.0)	—	4.8	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台内トチン痕、高台摩滅		E-945
178	98B	SK1022	調理具	鍋・釜	羽釜	残9.4	(39.2)	(39.2)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-946
179	98B	SK1062	供膳具	皿	土師器皿A	0.9	3.7	—	3.4	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-947
180	98B	SK1062	貯蔵具	甕A	その他	残67.7	—	79.7	(20.0)	指押え+ナデ	ナデか	常滑			E-948

第142図 その他のSK合計② (180のみ1:8、他は1:4)

S F 合計

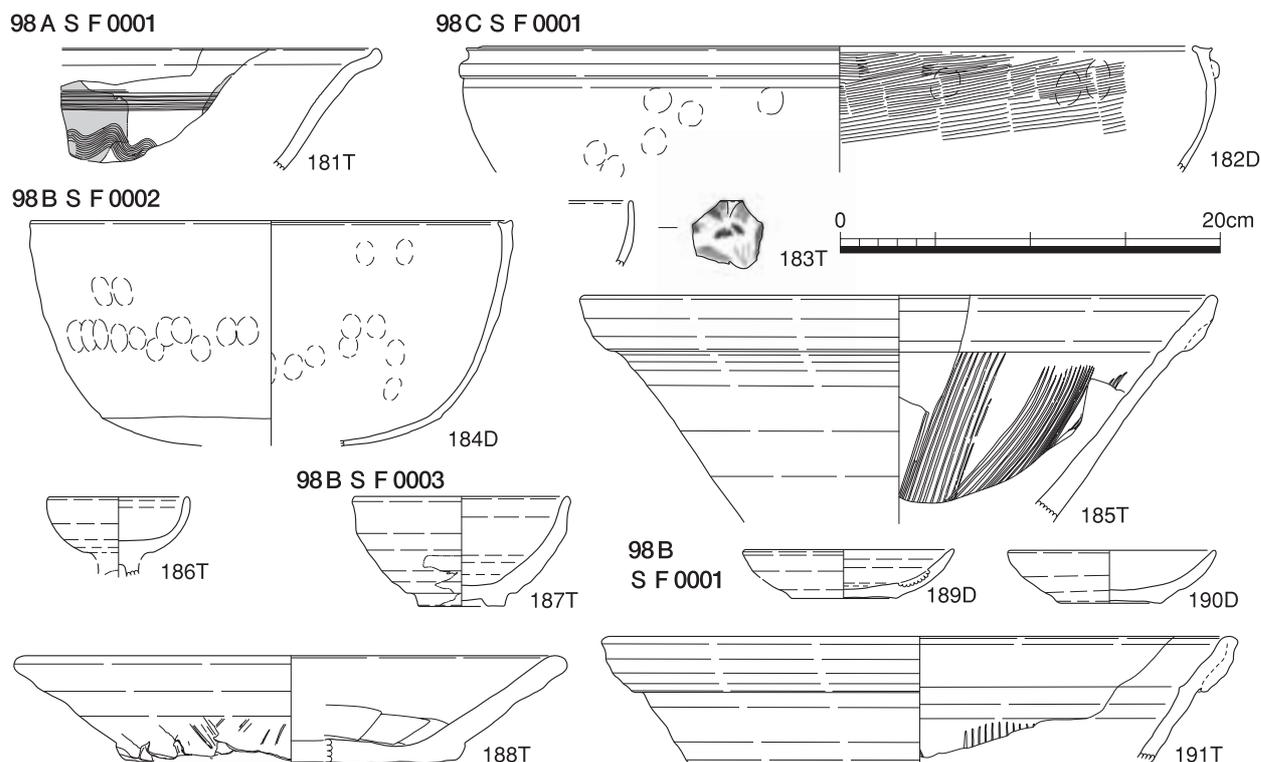
S F 番号をつけた遺構の埋土から出土した遺物をまとめたものを、「S F 合計」として扱う。98 A から98 C 区で検出された道路状遺構であるが、出土した遺物は、総破片数491点、接合前口縁破片数102点、個体数10.08個体である。



第143図 S F 合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				計	接合前口縁破片数				計	総破片数				計
		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他	
供膳具	椀		27	1		28		22	1		23		73	4		77
	小椀			1		1			1		1			2		2
	皿	13	4			17	10	2			12	46	9			55
	鉢		2			2		2			2		10			10
	その他															
	小計	13	33	2		48	10	26	2		38	46	92	6		144
調理具	鍋・釜	32				32	30				30	178	4			182
	鉢		4			4		4			4		10			10
	搗鉢		24			24		19			19		86			86
	瓶												4			4
	その他															
	小計	32	28			60	30	23			53	178	104			282
貯蔵具	瓶												1			1
	壺												10			10
	甕A		1			1		1			1		28			28
	甕B												2			2
	鉢															
	その他															
	小計		1			1		1			1		41			41
灯火具												7				7
火具			3			3		4			4		7			7
化粧具																
神仏具			5	2		7		2	2		4		3	3		6
喫煙具			2			2		2			2		2			2
調度具													1			1
蓋														1		1
合計			45	72	4		121	40	58	4		102	231	250	10	491

第26表 SF合計出土陶磁器類集計表

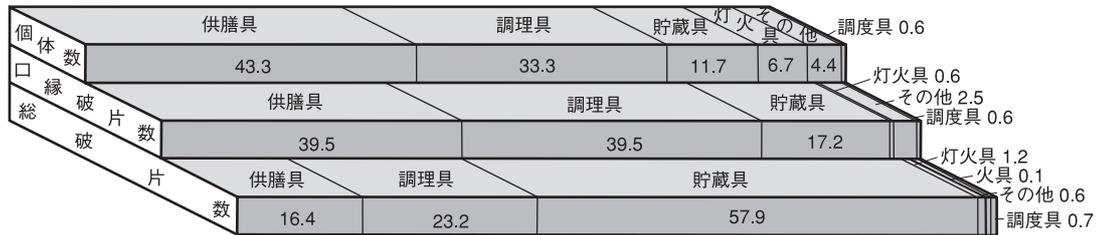


遺物番号	調査地点	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録番号	
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
181	98A	SF0001	供膳具	鉢	折縁鉢	残6.5	—	—	—	灰釉+銅緑釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉散らし		E-949
182	98C	SF0001	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.7	(37.4)	(39.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤付着		E-950
183	98C	SF0001	供膳具	椀	丸椀	残3.5	—	—	—	灰釉	灰釉	信楽	色絵(赤・青・緑)		E-951
184	98B	SF0002	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残12.0	(25.4)	(25.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内面炭化物付着、外面煤付着、全体に摩滅		E-952
185	98B	SF0002	調理具	搗鉢	Ⅶ類	残12.1	(33.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本、内面使用による摩滅		E-953
186	98B	SF0002	神仏具	仏飯具	—	残4.3	(7.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	灰釉白濁		E-954
187	98B	SF0003	供膳具	椀	天目椀	5.9	(11.2)	—	4.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-955
188	98B	SF0003	火具	鉢	火桶	5.7	(28.1)	—	(14.0)	ナデ+ケズリ	ナデ+ケズリ	常滑	内面煤付着	29	E-956
189	98B	SF0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.6	(10.9)	—	5.5	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕、内外面摩滅		E-957
190	98B	SF0001	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.8	(10.9)	—	5.3	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕	28	E-958
191	98B	SF0001	調理具	搗鉢	Ⅶ類	残6.7	(32.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部摩滅		E-959

第144図 SF合計(1:4)

S X 合計

S X 番号をつけた遺構から出土した遺物をまとめたものを、「S X 合計」として扱う。性格不明の遺構が多いが、検出として扱うべき遺物を含んでいる可能性がある。



第 145 図 S X 合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		41	7		48		34	6		40		105	10		115
	小椀		1	5		6		1	2		3		2	2		4
	皿	10	13			23	9	9			18	101	26			127
	鉢		1			1		1			1		7			7
	その他															
	小計	10	56	12		78	9	45	8		62	101	140	12		253
調理具	鍋・釜	48				48	50				50	302	1			303
	鉢		4			4		4			4		7			7
	播鉢		8			8		8			8		43			43
	瓶												3	1		4
	その他															
	小計	48	12			60	50	12			62	302	54	1		357
貯蔵具	瓶												15			15
	壺		3			3		2			2		24			24
	甕 A		18			18		25			25		847			847
	甕 B												4			4
	鉢															
	その他															
	小計		21			21		27			27		890			890
灯火具		12			12		1			1	17	1				18
火具															1	1
化粧具																
神仏具			4	3		7		2	1		3		7	1		8
喫煙具			1			1		1			1		1			1
調度具			1			1		1			1		10			10
蓋				1		1			1		1		1	1		2
合計		58	107	16		181	59	89	10		158	420	1104	15	1	1540

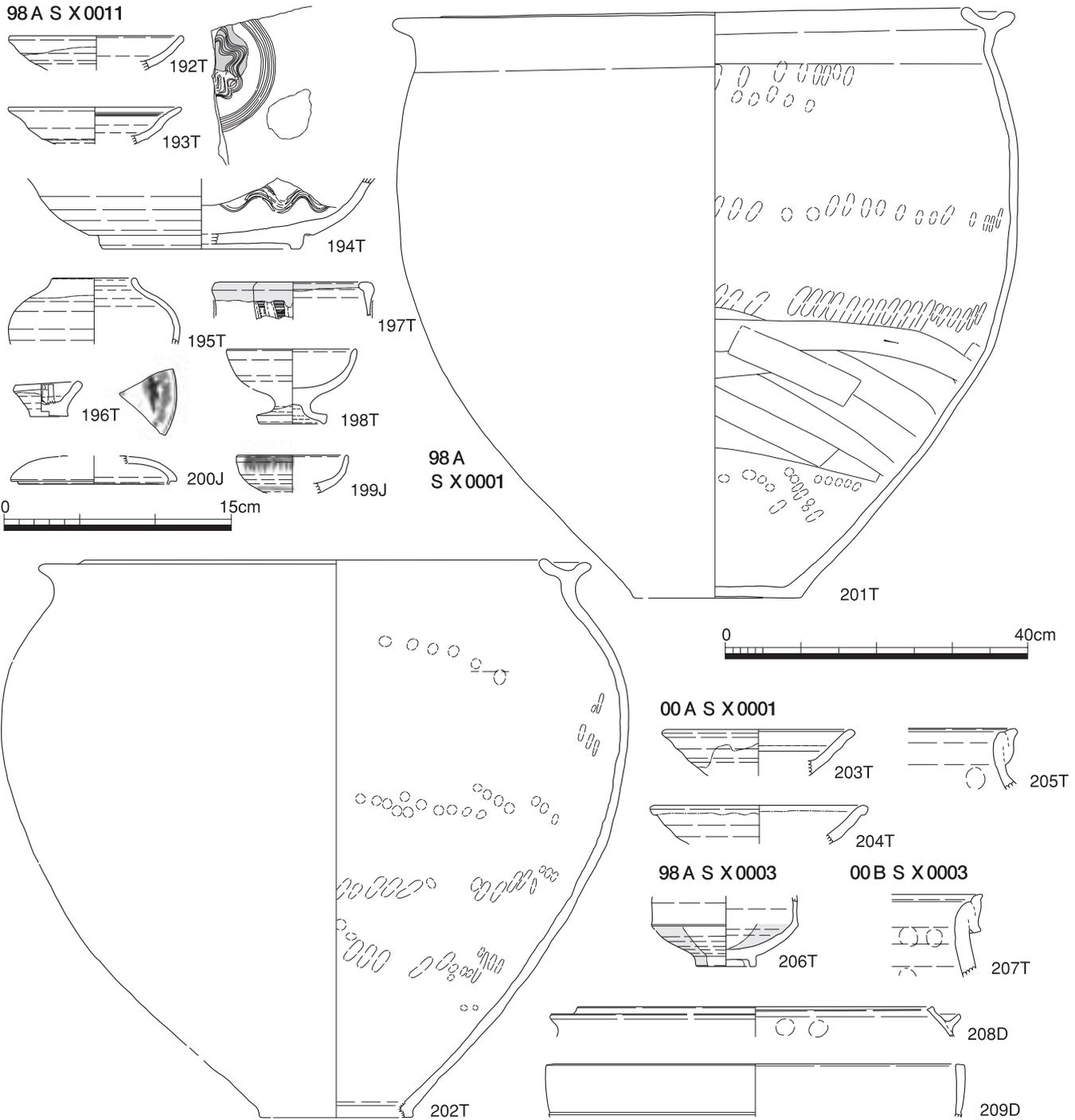
第 27 表 S X 合計出土陶磁器類集計表

検出合計

掘り下げ時や遺構検出段階において出土した遺物の合計を、「検出合計」として扱う。このため、戦国時代以後の遺物も含まれていることに注意が必要である。また、本来は遺構出土の遺物となるべきものが、この「検出合計」の中に加算されている可能性も残っている。出土した遺物の合計は、総破片数 5,204 点、接合前口縁破片数 1,183 点、個体数 127.75 個体である。全出土遺物に占める割合は、23.0%である。

用途別に見てみると、供膳具 69.25 個体 (54.2%)、調理具 48.67 個体 (38.1%)、貯蔵具 2.67 個体 (2.1%)、灯火具 2.83 個体 (2.2%)、火具 1.42 個体 (1.1%)、化粧具 0.75 個体 (0.6%)、神仏具 1.00 個体 (0.8%)、喫煙具 0.17 個体 (0.1%)、調度具 1.00 個体 (0.8%) である。数値の増減はあるが、全ての用途の遺物が出土している。供膳具・調理具・貯蔵具という日常的な生活に関連する遺物群が全体の 94.4% を占めており、やや比率が高くなっている。他に、蓋類が総破片数 10 点、接合前口縁破片

98A S X 0011

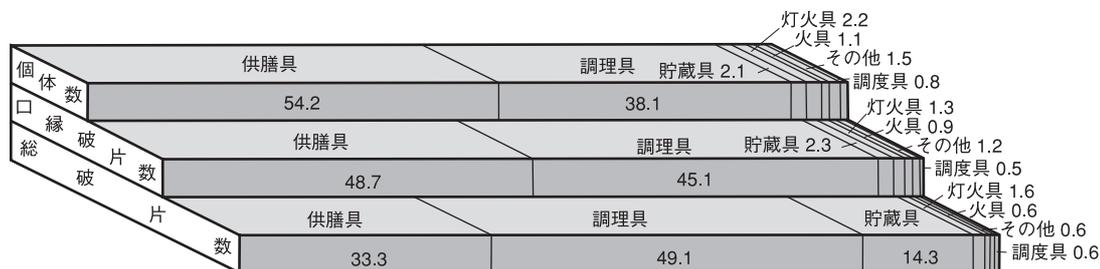


遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
192	98A SX0011	供膳具	皿	丸皿	残2.3	(11.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	外面油煙付着か		E-960
193	98A SX0011	供膳具	皿	端反皿	残2.5	(10.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-961
194	98A SX0011	供膳具	鉢	端反鉢	残4.7	—	—	(13.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台内トチン痕、高台使用による摩滅	28	E-962
195	98A SX0011	貯蔵具	壺	その他	残4.4	(5.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-963
196	98A SX0011	灯火具	乗燭	タンコロ	2.3	4.1	—	2.5	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-964
197	98A SX0011	喫煙具	灰落し	—	残2.4	(9.4)	—	—	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美			E-965
198	98A SX0011	神仏具	仏飯具	—	5.0	(8.4)	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-966
199	98A SX0011	神仏具	仏飯器	—	残2.5	(7.2)	—	—	—	—	肥前	染付 (雨降文)		E-967
200	98A SX0011	その他	蓋	その他	残1.9	(9.8)	—	—	—	—	肥前	染付 (草花文か)、肩径 (11.0) cm	29	E-968
201	98A SX0001	貯蔵具	甕A	Ⅲ類	79.0	69.3	82.4	21.6	指押え+ナデ	ナデか	常滑			E-969
202	98A SX0001	貯蔵具	甕A	Ⅲ類	74.5	60.8	82.7	(19.9)	指押え+ナデ	ナデか	常滑			E-970
203	00A SX0001	供膳具	皿	端反皿	残3.1	(12.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	緑釉皿		E-971
204	00A SX0001	供膳具	皿	端反皿	残2.6	(13.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	緑釉皿		E-972
205	00A SX0001	貯蔵具	壺	その他	残3.6	—	—	—	指押え+ナデ	ナデ	瀬戸か			E-973
206	98A SX0003	供膳具	椀	腰折椀	残4.7	—	—	3.8	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	掛け分け	27	E-974
207	00B SX0003	貯蔵具	壺	無蓋壺	残6.5	—	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	内面自然釉かかる		E-975
208	00B SX0003	調理具	鍋・釜	羽釜	残2.0	(23.4)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	不明			E-976
209	00B SX0003	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残3.6	(27.8)	—	—	ナデか	ナデか	不明	外面煤付着、全体に摩滅		E-977

第146図 S X合計 (201・202は1:8、他は1:4)

数7点、個体数1.92個体出土している。また、加工円盤が1点出土している。

材質面から見てみると、土師質製品43.3%、陶器製品52.3%、磁器製品3.8%、その他とした瓦質製品0.5%となっている。



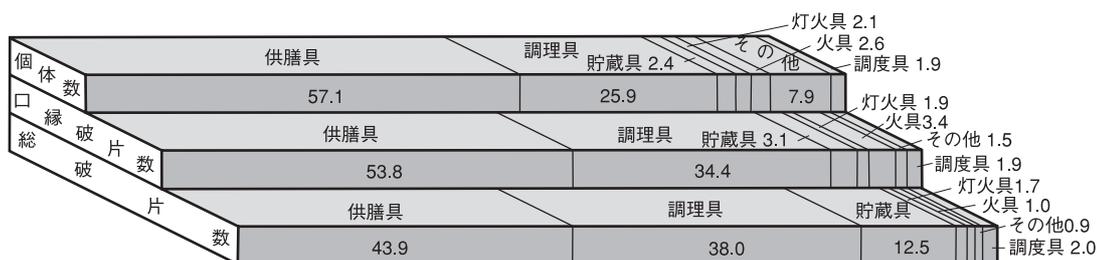
第147図 検出合計出土陶磁器類用途組成図

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		445	33		478		327	27		354		901	48		949
	小椀		43	16		59		21	7		28		42	11		53
	皿	176	101	5		282	104	71	4		179	515	149	6		670
	鉢		12			12		12			12		55	1		56
	その他															
	小計	176	601	54		831	104	431	38		573	515	1147	66		1728
調理具	鍋・釜	465	2			467	433	2			435	2134	10			2144
	鉢		36			36		28			28		110			110
	播鉢		81			81		67			67		291			291
	瓶												2	2		4
	その他												1			1
	小計	465	119			584	433	97			530	2134	414	2		2550
貯蔵具	瓶												45			45
	壺		3			3		2			2		54			54
	甕A		22			22		20			20		616			616
	甕B		2			2		2			2		16			16
	鉢		5			5		3			3		6			6
	その他												6			6
	小計		32			32		27			27		743			743
灯火具		22	12			34	14	1			15	79	5			84
火具			9		8	17		6		5	11		18		12	30
化粧具			9			9		4			4		11			11
神仏具			7	5		12		5	3		8		9	6		15
喫煙具			2			2		2			2		4			4
調度具		1	11			12	1	5			6	3	26			29
蓋		1	22			23	1	6			7	1	9			10
合計		665	824	59	8	1556	553	584	41	5	1183	2732	2386	74	12	5204

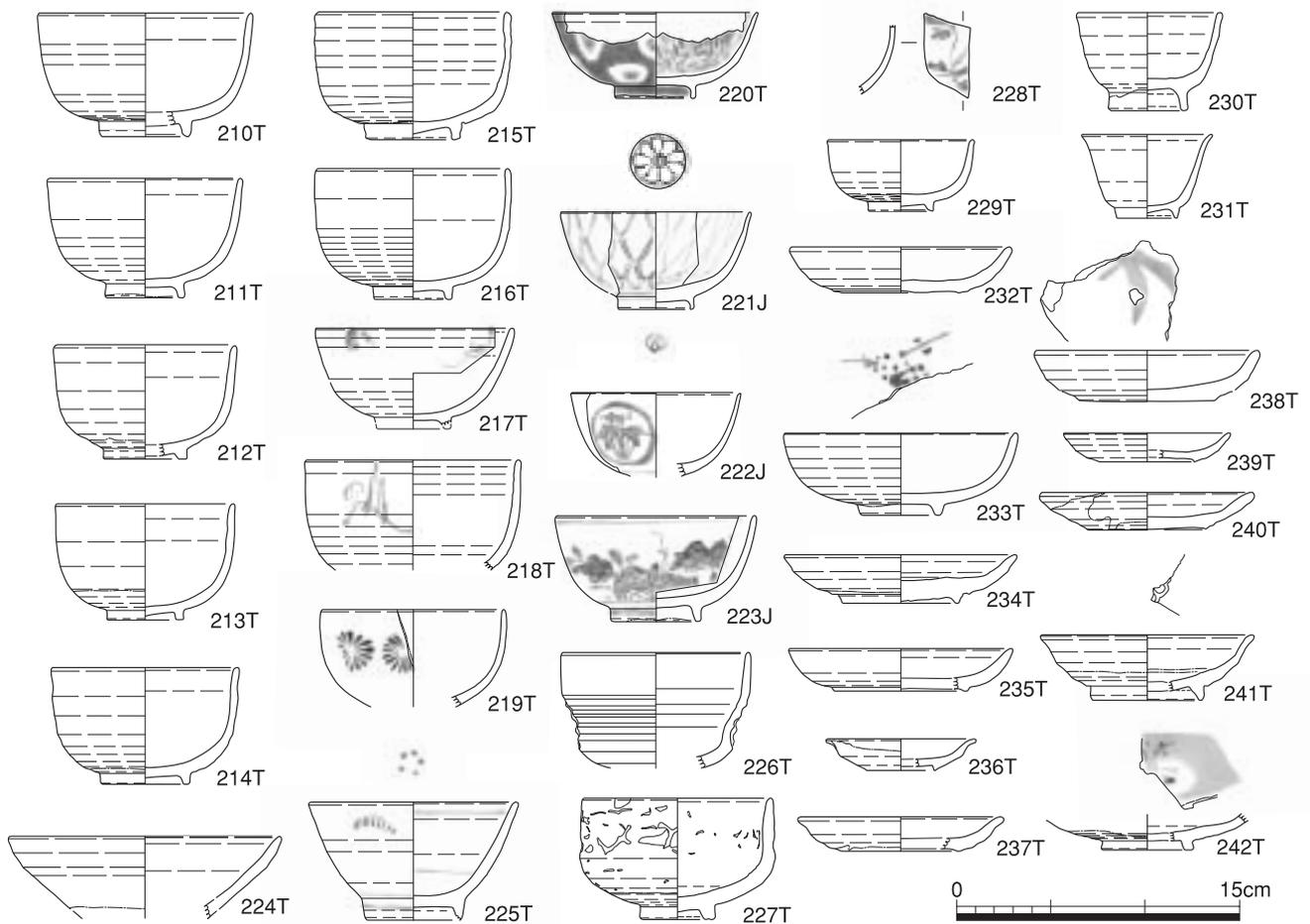
第28表 検出合計出土陶磁器類集計表

その他合計

これまでに示したものの以外の、例えば表土剥ぎ時やトレンチなどから出土した遺物の合計を、「その他合計」として扱う。磁器製の人形が1点出土している。

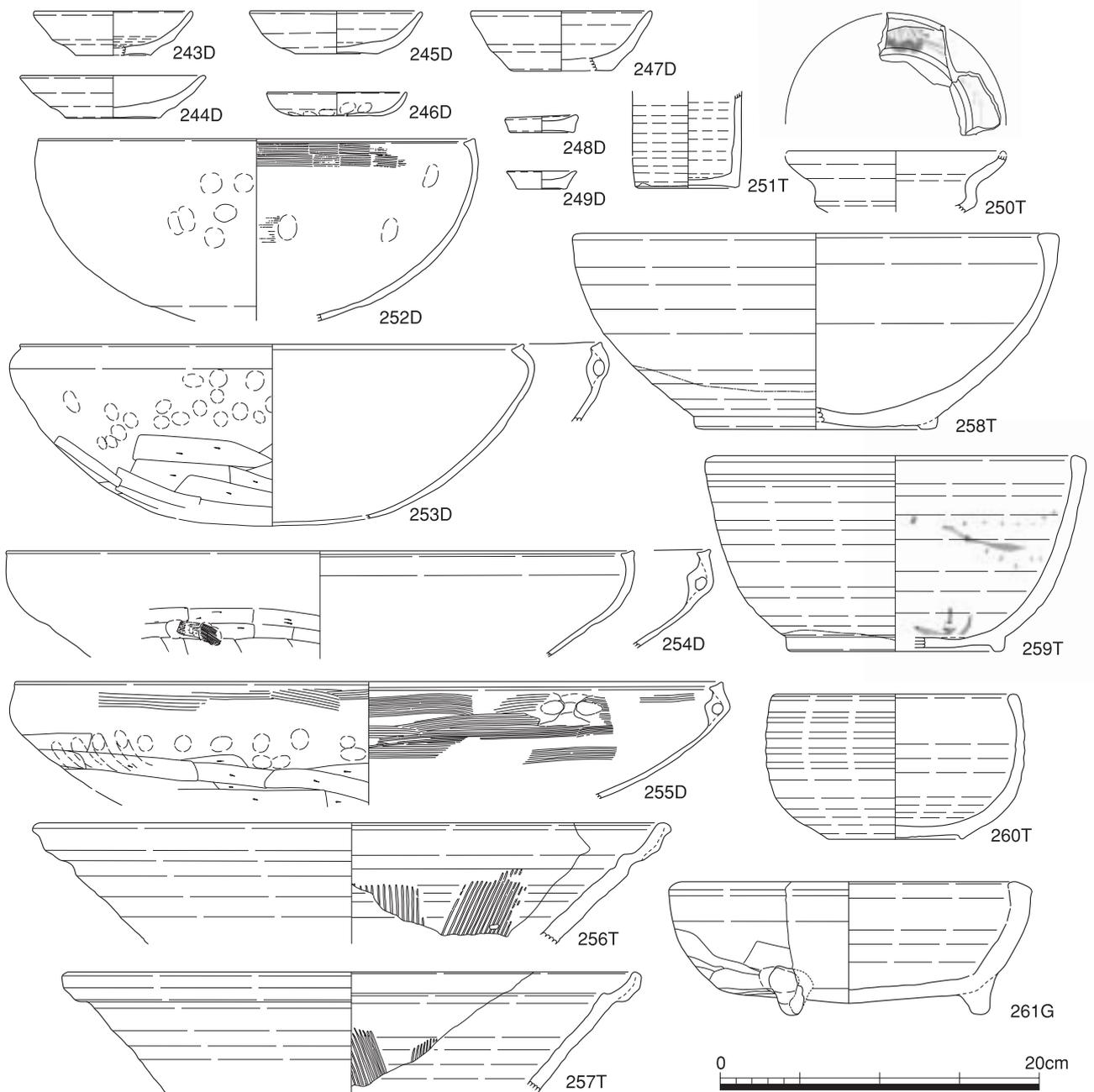


第148図 その他合計出土陶磁器類用途組成図



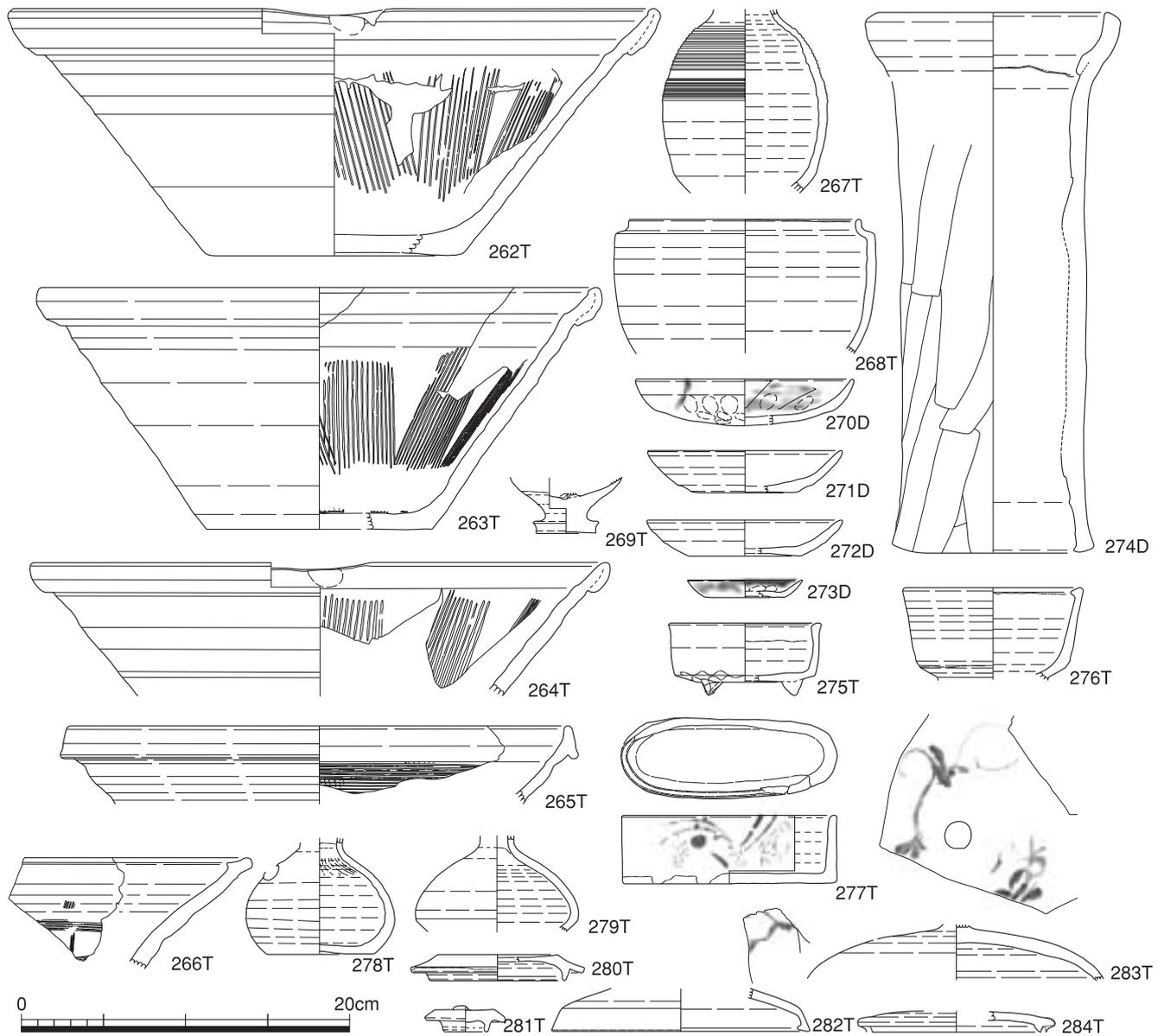
遺物 番号	調査地点 調査区	調査 遺構	用途	器種		法量 (cm)			釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				
210	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.6	(11.2)	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-978
211	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.4	(10.2)	—	4.2	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕、高台釉剥ぎ	27 E-979
212	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.1	(9.6)	—	(4.4)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		27 E-980
213	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.2	(9.4)	—	4.0	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン融着	E-981
214	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.3	(9.8)	—	4.4	灰釉	灰釉	瀬・美		27 E-982
215	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	6.9	(10.0)	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美		27 E-983
216	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	7.0	(10.1)	—	4.0	灰釉	灰釉	瀬・美		27 E-984
217	00A	検出	供膳具	椀	丸椀	残5.2	(10.4)	—	(3.9)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	27 E-985
218	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	残5.9	(11.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵 (山水文)	E-986
219	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	残5.2	(9.6)	—	—	灰釉	灰釉	京都	上絵 (赤・青・花文)	27 E-987
220	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	4.6	(10.8)	—	(4.2)	白泥+透明釉	白泥+透明釉	肥前	白泥による蛸手・打ち刷毛目、高台釉剥ぎ・砂融着	27 E-988
221	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	5.2	(10.0)	—	3.9	—	—	肥前	染付 (菊花文・一重目文+二重目文・渦福か)	E-989
222	98B	検出	供膳具	椀	丸椀	残4.6	(9.0)	—	—	—	—	肥前	染付	E-990
223	98A	検出	供膳具	椀	丸椀	5.7	(10.5)	—	(4.6)	—	—	関西系	染付、高台釉剥ぎ	27 E-991
224	00A	検出	供膳具	椀	平椀	残4.4	(14.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	釉剥離	E-992
225	98A	検出	供膳具	椀	広東椀	6.3	(10.9)	—	4.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、高台釉剥ぎ	E-993
226	98B	検出	供膳具	椀	その他	残6.2	(9.8)	—	—	灰釉	鉄釉+灰釉	瀬・美		E-994
227	98C	検出	供膳具	椀	その他	6.5	(10.2)	—	3.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	長石釉散らし	E-995
228	98B	検出	供膳具	椀	その他	残3.8	—	—	—	—	—	肥前	色絵 (赤・緑・黒)、蓋か	E-996
229	98B	検出	供膳具	小椀	丸椀	3.8	(7.7)	—	3.4	灰釉	灰釉	瀬・美		27 E-997
230	98A	検出	供膳具	小椀	端反椀	5.3	(7.6)	—	3.9	灰釉	灰釉	瀬・美		27 E-998
231	98B	検出	供膳具	小椀	端反椀	5.5	(6.8)	—	3.2	—	—	肥前	高台釉剥ぎ・砂融着	27 E-999
232	98A	検出	供膳具	皿	丸皿	残2.4	(11.6)	—	(6.4)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕、高台摩滅	E-1000
233	98A	検出	供膳具	皿	丸皿	4.4	(12.2)	—	(4.1)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵+鉄絵 (梅樹文)	28 E-1001
234	98B	検出	供膳具	皿	端反皿	2.6	(11.8)	—	(5.7)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み蛇ノ目釉剥ぎ・トチン融着	27 E-1002
235	98F	検出	供膳具	皿	丸皿	2.3	(11.8)	—	(7.2)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台釉剥離	E-1003
236	98B	検出	供膳具	皿	端反皿	1.7	(7.8)	—	(3.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	碁笥底	E-1004
237	98B	検出	供膳具	皿	端反皿	(1.9)	(10.6)	—	(6.4)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内トチン痕	E-1005
238	00A	検出	供膳具	皿	丸皿	2.8	(11.8)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵 (笹文)	E-1006
239	98A	検出	供膳具	皿	丸皿	1.6	(8.8)	—	(5.0)	長石釉	長石釉	瀬・美	碁笥底	27 E-1007
240	98B	検出	供膳具	皿	丸皿	2.0	(11.2)	—	(6.3)	長石釉	長石釉	瀬・美	長石釉白濁	E-1008
241	98B	検出	供膳具	皿	端反皿	3.5	(11.2)	—	(5.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み蛇ノ目釉剥ぎ・印花	E-1009
242	98B	検出	供膳具	皿	その他	残1.9	—	—	(4.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	白泥+呉須絵 (梅樹文か)	28 E-1010

第149図 検出① (1:4)



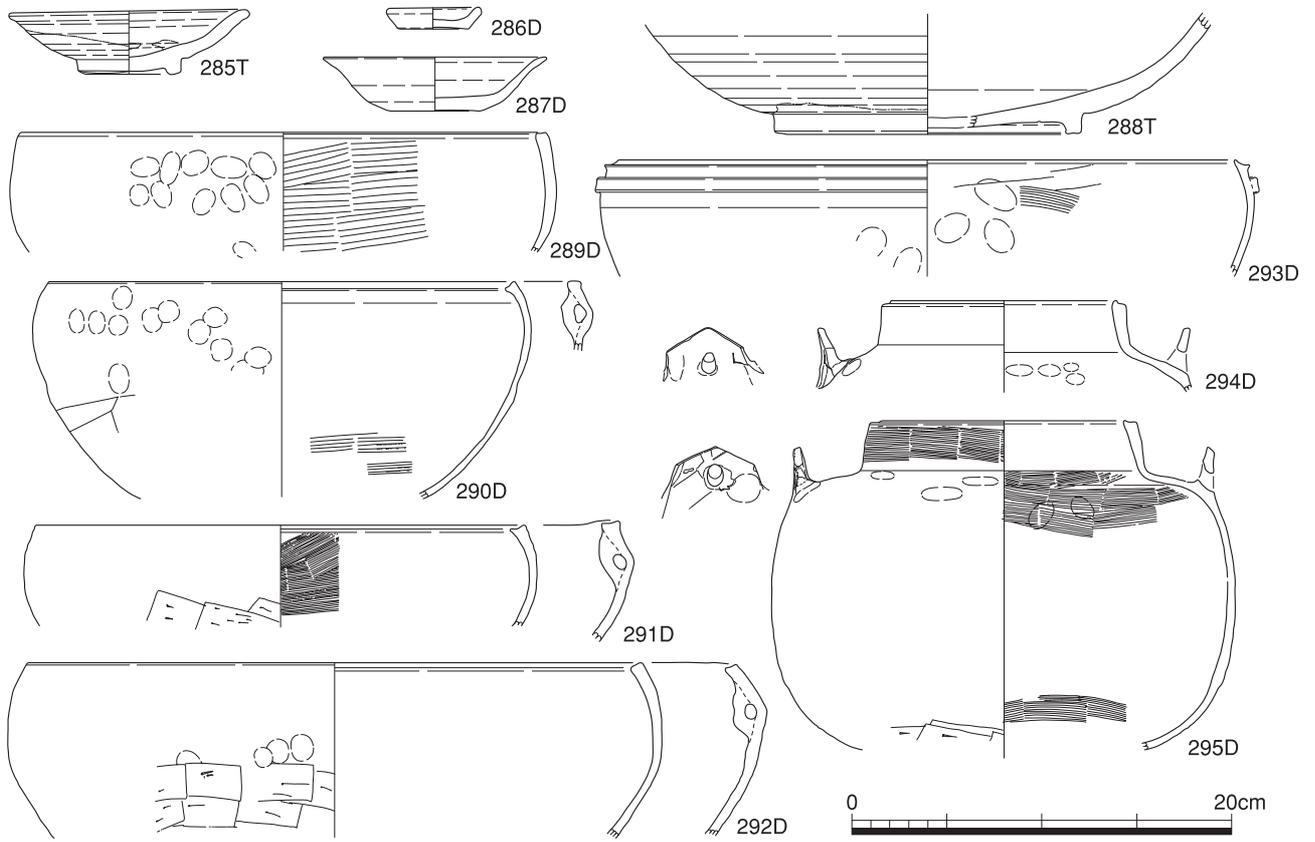
遺物 番号	調査区	調査地点 遺構	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
243	98B	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.8	(9.8)	—	(4.8)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-1011
244	98B	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.7	(11.4)	—	(5.8)	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、底部回転系切り後ナデ消しか		E-1012
245	98B	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	2.7	10.7	—	5.2	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕	28	E-1013
246	98A	検出	供膳具	皿	土師器ⅢB	1.5	(8.6)	—	(5.3)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明			E-1014
247	98F	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	3.8	(11.2)	—	(5.3)	ナデ	ナデ	不明	底部回転系切り痕		E-1015
248	98B	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.1	4.4	—	4.1	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、底部回転系切り後ナデ消しか		E-1016
249	98B	検出	供膳具	皿	土師器ⅢA	1.1	(4.4)	—	3.0	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、底部回転系切り後ナデ消しか		E-1017
250	98B	検出	供膳具	鉢	その他	残3.9	—	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵		E-1018
251	98A	検出	調度具	その他	筒形	残6.2	—	(6.8)	(6.1)	ナデ	灰釉	京都か	内面底部に製作時のキズか		E-1019
252	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残11.5	(27.2)	(27.9)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物付着		E-1020
253	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(11.6)	(31.6)	(33.0)	—	ナデか	指押え+ナデ+ナゲ	不明	外面煤付着、内面摩滅		E-1021
254	98B	検出	調理具	鍋・釜	焙烙	残6.7	(39.4)	(39.6)	—	ナデ	指押え+ナゲ+ナゲ	不明	外面煤付着		E-1022
255	98B	検出	調理具	鍋・釜	焙烙	残7.8	44.6	45.2	—	ナデ	指押え+ナゲ+ナゲ	不明	外面煤付着	28	E-1023
256	98B	検出	調理具	播鉢	Ⅶ類	残7.6	(39.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数15本、内面・口縁部使用による摩滅		E-1024
257	98B	検出	調理具	播鉢	Ⅶ類	残7.6	(35.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-1025
258	98B	検出	調理具	鉢	捏ね鉢	12.4	(29.8)	—	(14.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みトチン痕		E-1026
259	98B	検出	調理具	鉢	捏ね鉢	12.4	(22.6)	—	(13.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵か、見込みトチン痕、灰釉一部剥離	28	E-1027
260	98A	検出	調理具	鉢	その他	9.2	(14.8)	—	(8.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	碁笥底、見込み・高台内にトチン痕	28	E-1028
261	98B	検出	火 具	鉢	火鉢	(8.4)	(20.9)	—	(16.4)	ナデ	ナゲ+ナゲ	不明	内面炭化物付着	29	E-1029

第150図 検出②(1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
262	98B	検出	調理具	播鉢	Ⅶ類	(15.2)	(39.0)	—	(15.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数14本、底部回転糸切り痕、内外面使用による摩滅		E-1030
263	98B	検出	調理具	播鉢	Ⅶ類	14.9	(33.8)	—	(14.0)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数16本、底部回転糸切り痕、内外面使用による摩滅	28	E-1031
264	98B	検出	調理具	播鉢	Ⅶ類	残8.2	(33.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数11本		E-1032
265	98A	検出	調理具	播鉢	Ⅲ類	残4.7	(32.9)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-1033
266	98A	検出	調理具	播鉢	Ⅱ類	残6.8	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部・内面摩滅		E-1034
267	98B	検出	貯蔵具	瓶	その他	残11.3	—	(10.2)	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	油徳利か	29	E-1035
268	98B	検出	貯蔵具	鉢	蓋物B	残8.3	(14.0)	(16.1)	—	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁部釉剥ぎ	28	E-1036
269	98C	検出	灯火具	乗燭	Ⅱ類	残3.4	—	—	3.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切り痕		E-1037
270	98B	検出	灯火具	皿	灯明皿	(2.9)	(13.2)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	口縁部・内面油煙付着		E-1038
271	98C	検出	灯火具	皿	灯明皿	2.6	(11.9)	—	5.6	ナデ	ナデ	不明	内外面油煙付着、底部回転糸切り痕		E-1039
272	98B	検出	灯火具	皿	灯明皿	2.2	(11.8)	—	(6.7)	ナデ	ナデ	不明	全体摩滅、内外面油煙付着、底部回転糸切り後ナデ消しか		E-1040
273	00A	検出	灯火具	皿	灯明皿	1.1	(7.0)	—	(4.8)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	内外面油煙付着		E-1041
274	98A	検出	調度具	その他	土管	33.2	(15.5)	11.4	12.3	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑		29	E-1042
275	98B	検出	神仏具	香炉	筒形	4.4	(9.2)	—	(5.9)	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-1043
276	98B	検出	神仏具	香炉	筒形	残5.7	(10.5)	—	—	ナデ	透明釉	肥前			E-1044
277	98B	検出	化粧具	髪盥	—	4.2	(12.9)	—	13.1	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、幅口縁 (4.5) cm・底部4.8cm	29	E-1045
278	98B	検出	貯蔵具	壺	髪油壺	残7.1	—	(9.1)	6.6	ナデ	鉄釉	瀬・美	二次的に火を受けているのか	29	E-1046
279	98B	検出	貯蔵具	壺	髪油壺	残5.9	—	(10.0)	—	ナデ	灰釉	瀬・美			E-1047
280	98B	検出	その他	蓋	Ⅶ類	1.6	(8.2)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	内面煤・赤色顔料付着、肩径 (7.4) cm・最大径 (10.6) cm	29	E-1048
281	98A	検出	その他	蓋	Ⅳ類	1.6	2.6	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	肩径3.7cm、最大径4.9cm、つまみ長径1.1cm・短径0.8cm	29	E-1049
282	98B	検出	その他	蓋	その他	残2.6	(15.6)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	鉄絵		E-1050
283	98B	検出	その他	蓋	その他	残3.4	—	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	呉須絵	29	E-1051
284	00B	検出	その他	蓋	その他	残1.3	(10.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	最大径 (12.1) cm、身の一部融着		E-1052

第151図 検出③ (1:4)

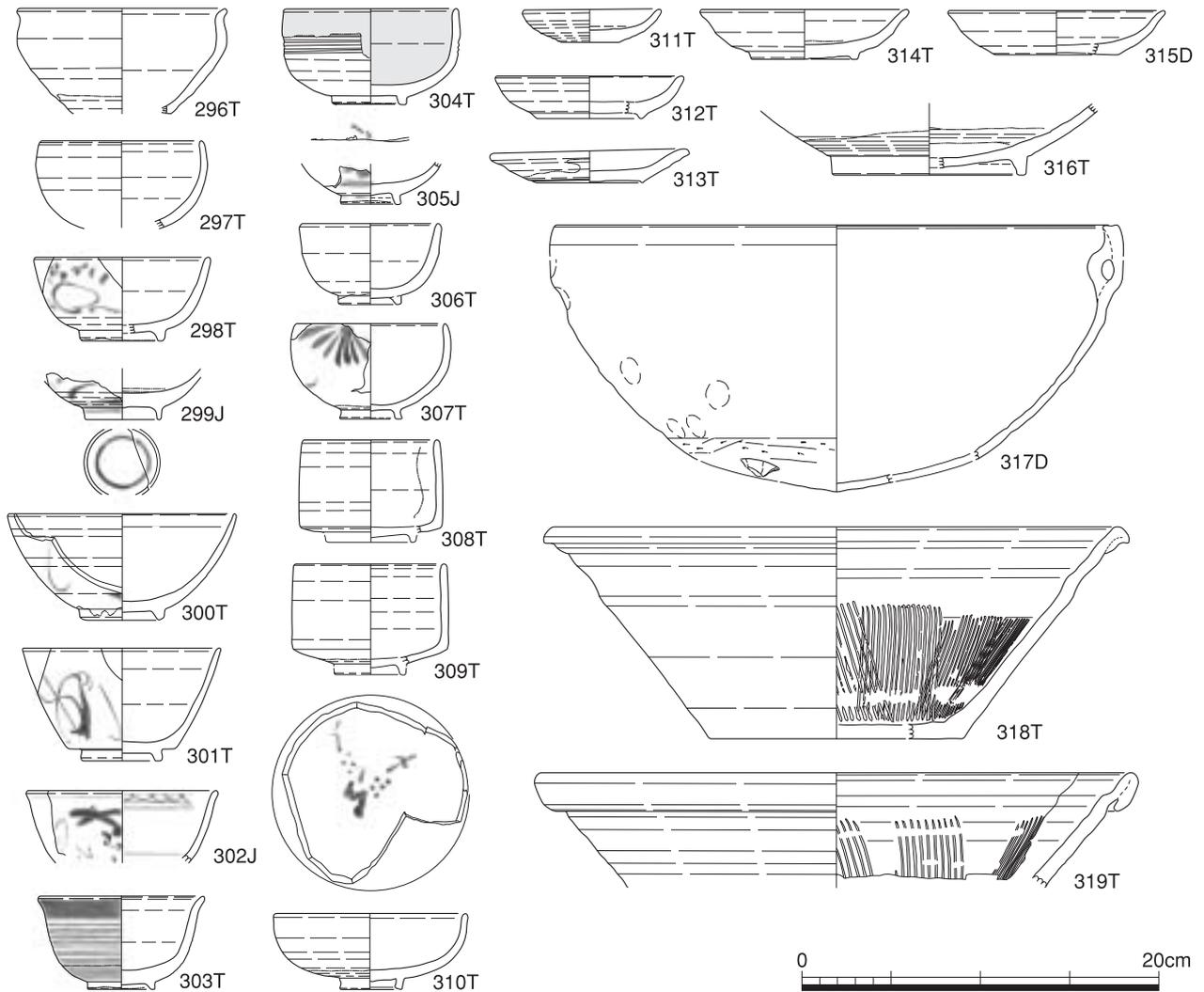


遺物 番号	調査地点 調査区	調査区	検出	器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
				用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
285	98B	検出	供膳具	皿	端反皿	3.5	12.3	—	4.5	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み蛇の目釉剥ぎ	28	E-1053	
286	98B	検出	供膳具	皿	土師器皿A	1.2	4.7	—	3.7	ナデ	ナデ	不明			E-1054	
287	98B	検出	灯火具	皿	土師器皿A	2.9	(11.7)	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り後ナデ消し、内外面油煙附着		E-1055	
288	98B	検出	供膳具	鉢	その他	残6.4	—	—	(15.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みトチン痕		E-1056	
289	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残6.3	(27.6)	(28.9)	—	ナデ	指押え+ナデ	不明			E-1057	
290	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残11.5	(24.4)	(27.1)	—	ナデ	指押え+ナデ+ナデ	不明	外面煤・炭化物附着		E-1058	
291	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残5.4	(25.8)	(27.1)	—	ナデ	ナデ+ナズリ	不明	外面煤附着		E-1059	
292	98B	検出	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	残9.3	(32.4)	(34.6)	—	ナデ	指押え+ナデ+ナデ	不明	外面煤附着		E-1060	
293	98B	検出	調理具	鍋・釜	羽釜	残6.2	(32.6)	(34.6)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤附着		E-1061	
294	98B	検出	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残4.7	(11.6)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤附着		E-1062	
295	98B	検出	調理具	鍋・釜	茶釜形鍋	残13.5	(12.6)	(24.4)	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	外面煤・炭化物附着		E-1063	

第152図 検出④ (1:4)

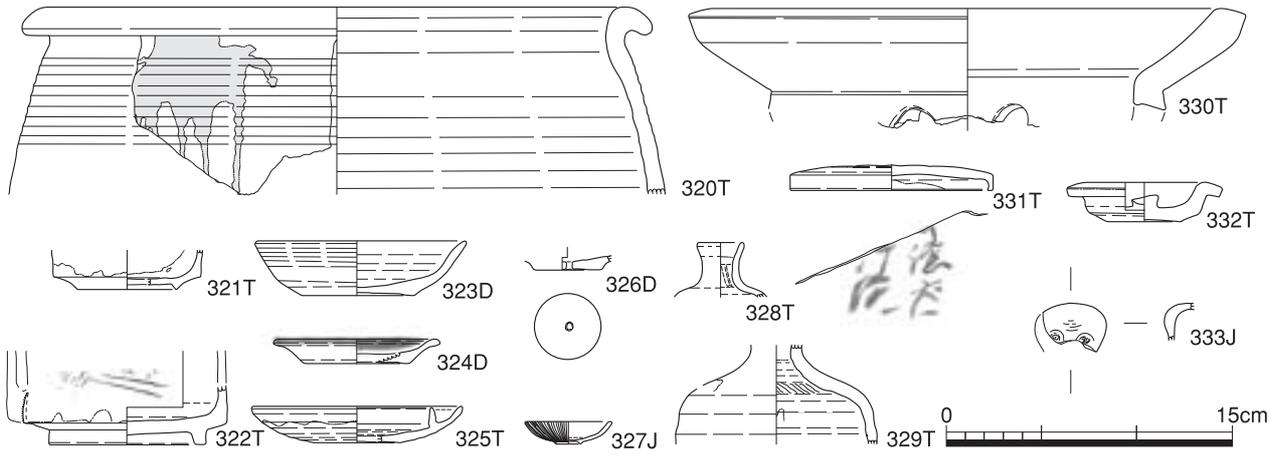
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		89	33		122		63	24		87		206	56		262	
	小椀		15	3		18		6	3		9		18	5		23	
	皿	29	42	1		72	20	19	1		40	114	46	3		163	
	鉢		3	1		4		4	1		5		21	3		24	
	その他																
	小計	29	149	38		216	20	92	29		141	114	291	67		472	
調理具	鍋・釜	55				55	57				57	292	1			293	
	鉢		9			9		7			7		26			26	
	播鉢		34			34		26			26		84			84	
	瓶												3			3	
	その他												2			2	
	小計	55	43			98	57	33			90	292	116			408	
貯蔵具	瓶												16			16	
	壺												10			10	
	甕A		5			5		5			5		94			94	
	甕B		4			4		3			3		12			12	
	鉢												2			2	
	その他																
	小計		9			9		8			8		134			134	
灯火具		4	4			8	3	2			5	16	2			18	
火具			10			10		9			9		11			11	
化粧具			12	12		24		1	1		2		2	2		4	
神仏具			5			5		1			1		3	2		5	
喫煙具			1			1		1			1		1			1	
調度具			7			7		5			5	1	18		1	20	
蓋			15			15		16			16		7		1	8	
合計			88	255	50	1	394	80	156	30	1	267	423	585	71	2	1081

第29表 その他合計出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
296	98A	トレンチ	供膳具	椀	天目椀	残6.0	(11.7)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-1064
297	00A	北壁トレンチ	供膳具	椀	丸椀	残4.9	(8.8)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	灰釉白濁		E-1065
298	98B	表土剥ぎ	供膳具	椀	丸椀	4.8	(9.7)	—	(4.5)	灰釉	灰釉	瀬・美	釉白濁、呉須絵		E-1066
299	98A	表土剥ぎ	供膳具	椀	丸椀	残2.9	—	—	4.1	—	—	肥前	染付、見込み蛇ノ目釉剥ぎ・剥離痕、高台砂融着	27	E-1067
300	98A	表土	供膳具	椀	平椀	6.0	(12.6)	—	4.1	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (柳文)	27	E-1068
301	98A	トレンチ	供膳具	椀	平椀	6.4	(11.1)	—	4.2	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (柳文)	27	E-1069
302	00B	南壁	供膳具	椀	端反椀	残4.1	(10.6)	—	—	—	—	瀬・美	染付 (草花文?)		E-1070
303	98A	表土	供膳具	椀	端反椀	5.2	(9.2)	—	3.6	白泥+灰釉	白泥+灰釉	瀬・美	白泥による刷毛目、高台釉剥ぎ	27	E-1071
304	98C	トレンチ	供膳具	椀	腰鍔椀	5.4	(9.6)	—	4.1	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台摩滅		E-1072
305	98C	排土中	供膳具	椀	丸椀	残2.3	—	—	(3.4)	白泥+透明釉	白泥+透明釉	不明	色絵 (朱・緑・茶)		E-1073
306	98A	表土剥ぎ	供膳具	小椀	丸椀	4.6	(7.6)	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美		27	E-1074
307	98A	表土	供膳具	小椀	丸椀	5.4	(8.4)	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美	上絵付け (赤・緑か)	27	E-1075
308	00A	西壁トレンチ	供膳具	小椀	筒椀	残5.2	(7.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-1076
309	98A	表土	供膳具	椀	筒椀	残5.8	(8.3)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-1077
310	98A	表土	供膳具	皿	丸皿	4.3	(10.9)	—	3.5	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵+鉄絵 (梅樹文)		E-1078
311	98A	排土中	供膳具	皿	丸皿	1.9	7.6	—	3.2	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み・外面剥離痕	28	E-1079
312	98E	西トレンチ	供膳具	皿	丸皿	2.4	(10.4)	—	(5.9)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台摩滅		E-1080
313	98B	南トレンチ	供膳具	皿	端反皿	1.9	10.8	—	6.0	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台内トチン痕	28	E-1081
314	98A	表土	供膳具	皿	端反皿	2.8	(11.5)	—	(5.8)	灰釉	灰釉	瀬・美	高台釉剥ぎ・摩滅	28	E-1082
315	98A	表土	供膳具	皿	土師器皿A	2.5	(12.1)	—	(6.8)	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕		E-1083
316	98A	表土	供膳具	鉢	その他	残4.1	—	—	(10.7)	灰釉+鉄化磁	灰釉	瀬・美	高台摩滅		E-1084
317	98E	西トレンチ	調理具	鍋・釜	内耳鍋A	(15.1)	(31.3)	—	—	ナデか	調子ナデナゲ	不明	外面煤付着、内外面摩滅		E-1085
318	98A	南トレンチ	調理具	搦鉢	V類	12.0	(31.7)	—	(14.0)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数16本、底部回転糸切り痕、見込み・内面・底部使用による摩滅	28	E-1086
319	98B	Bトレンチ	調理具	搦鉢	V類	残6.5	(33.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数11本、口縁部摩滅		E-1087

第153図 その他① (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
320	98C	排土中	貯蔵具	甕B	甕	残10.0	(30.4)	—	—	鉄釉+灰釉	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け		E-1088
321	98A	北壁清掃	貯蔵具	鉢	蓋物B	残2.1	—	(8.0)	(5.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	碁笥底		E-1089
322	98	表採	貯蔵具	瓶	汁次B	残3.9	—	—	8.2	ナデ	灰釉	瀬・美	鉄絵、把手はめ込み	28	E-1090
323	98C	排土	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(10.9)	—	5.9	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切り痕、内面油煙付着	29	E-1091
324	98A	表土	灯火具	皿	灯明皿	1.3	(8.4)	—	(5.4)	ナデ	ナデ	不明	口縁部・内面油煙付着、底部回転糸切り痕か		E-1092
325	98A	表土	灯火具	皿	灯臺	1.9	(11.0)	—	(4.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内区径 (7.9) cm		E-1093
326	00A	北壁	灯火具	皿	灯明皿	残0.8	—	—	3.4	ナデか	ナデか	不明	見込み油煙付着か、全体に摩滅、底部穿孔 (径5mm)		E-1094
327	98A	トレンチ	化粧具	紅皿	—	1.2	4.5	—	1.3	白磁	白磁	肥前	型押し成形	29	E-1095
328	98B	Bトレンチ	化粧具	壺	髪油壺	残2.9	(2.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-1096
329	98B	南トレンチ	貯蔵具	瓶	その他	残5.3	—	(10.6)	—	鉄釉+灰釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	灰釉流し掛け、肩径 (9.4) cm		E-1097
330	98A	トレンチ	火具	鉢	その他	残6.0	(26.6)	—	—	ナデか	ナデか	常滑か	体部に穿孔あり		E-1098
331	98B	Bトレンチ	その他	蓋	VI類	1.4	(10.7)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	内面墨書、肩径 (10.7) cm	29	E-1099
332	98B	Bトレンチ	その他	蓋	落し蓋	2.1	6.8	—	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	つまみ径1.5cm	29	E-1100
333	98A	表土	その他	その他	その他	残2.6	—	—	—	指押え	—	瀬・美	人形、型押し成形		E-1101

第154図 その他② (1:4)

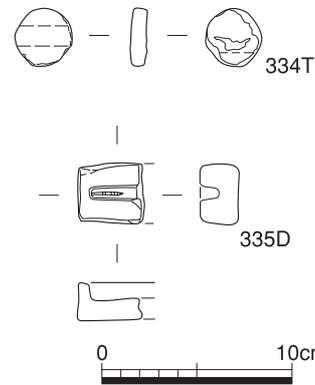
その他の遺物

用途分類で取り扱った以外の遺物として、人形類や加工円盤、用途不明の遺物が出土している。少量であるので、ここでまとめておきたい。

人形類は2点のみ (32・333) で、陶磁器類の中に凶化してある。また、159・174はミニチュア製品と考えることができる。

加工円盤は、検出段階で2点、表土から1点の計3点出土している。陶器製品の鉢類や甕Bの破片を利用している。

用途不明の遺物は、335の1点である。土師質のもので、錘を作る鋳型かと思われるが不明である。



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整など		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
334	98C	検出	その他	その他	その他	—	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	加工円盤、長径3.1cm・短径2.9cm・厚さ0.9cm	30	E-1102
335	98A	検出	その他	その他	その他	2.0	—	—	—	指押え+ナデか	指押え+ナデか	不明	錘の鋳型か、長さ残3.4cm・幅3.2cm	30	E-1103

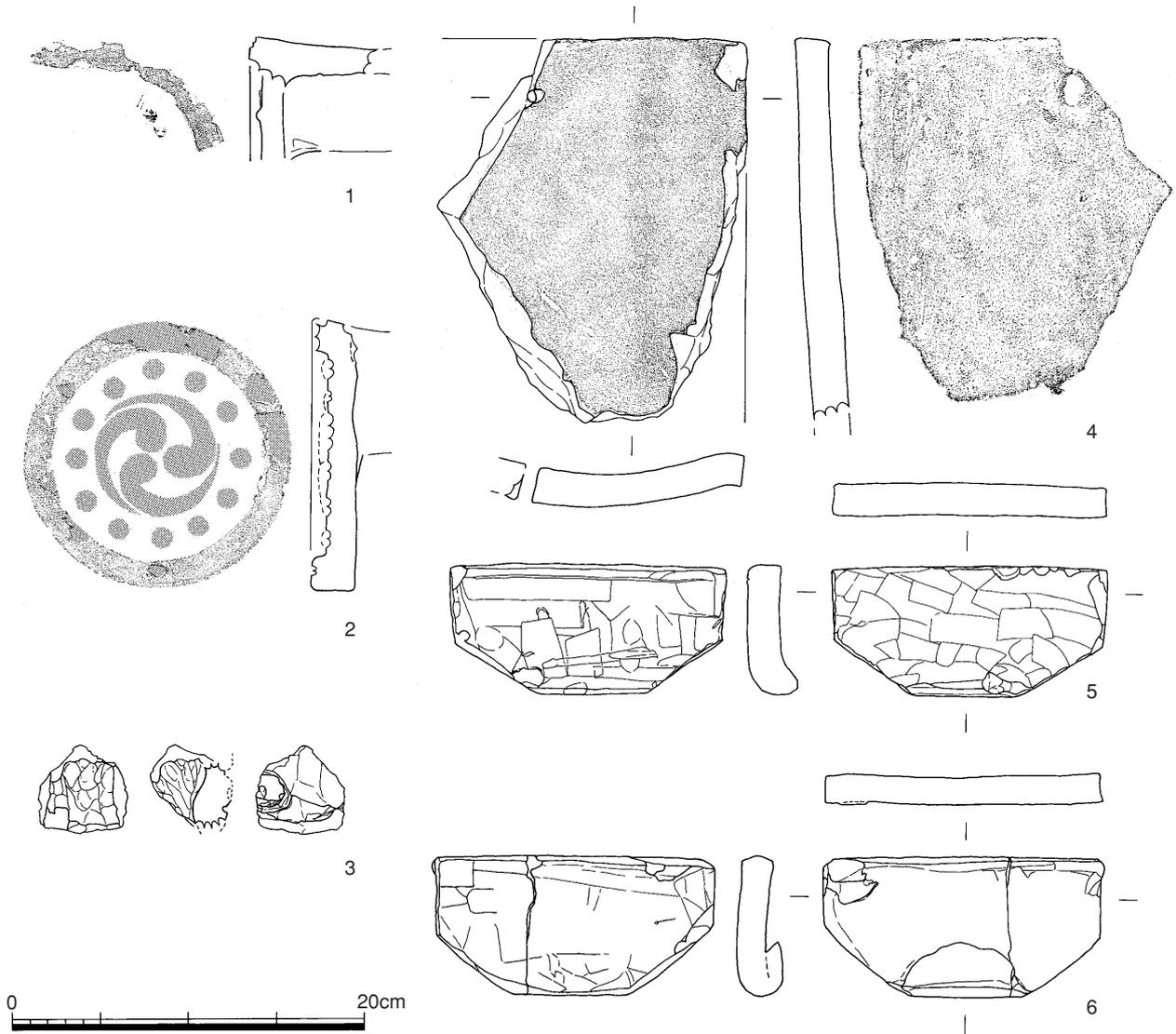
第155図 その他の遺物 (1:4)

## 第6節 土器・陶磁器類以外の遺物

第4節で戦国時代から江戸時代前期までの土器・陶磁器類を、第5節で江戸時代後期の土器・陶磁器類を見てきた。本節では、土器・陶磁器類以外の瓦類・木製品・金属製品・石製品を扱うが、陶磁器類のようなカウントは実施していない。なお、古代・中世で出土した遺物も掲載してある。

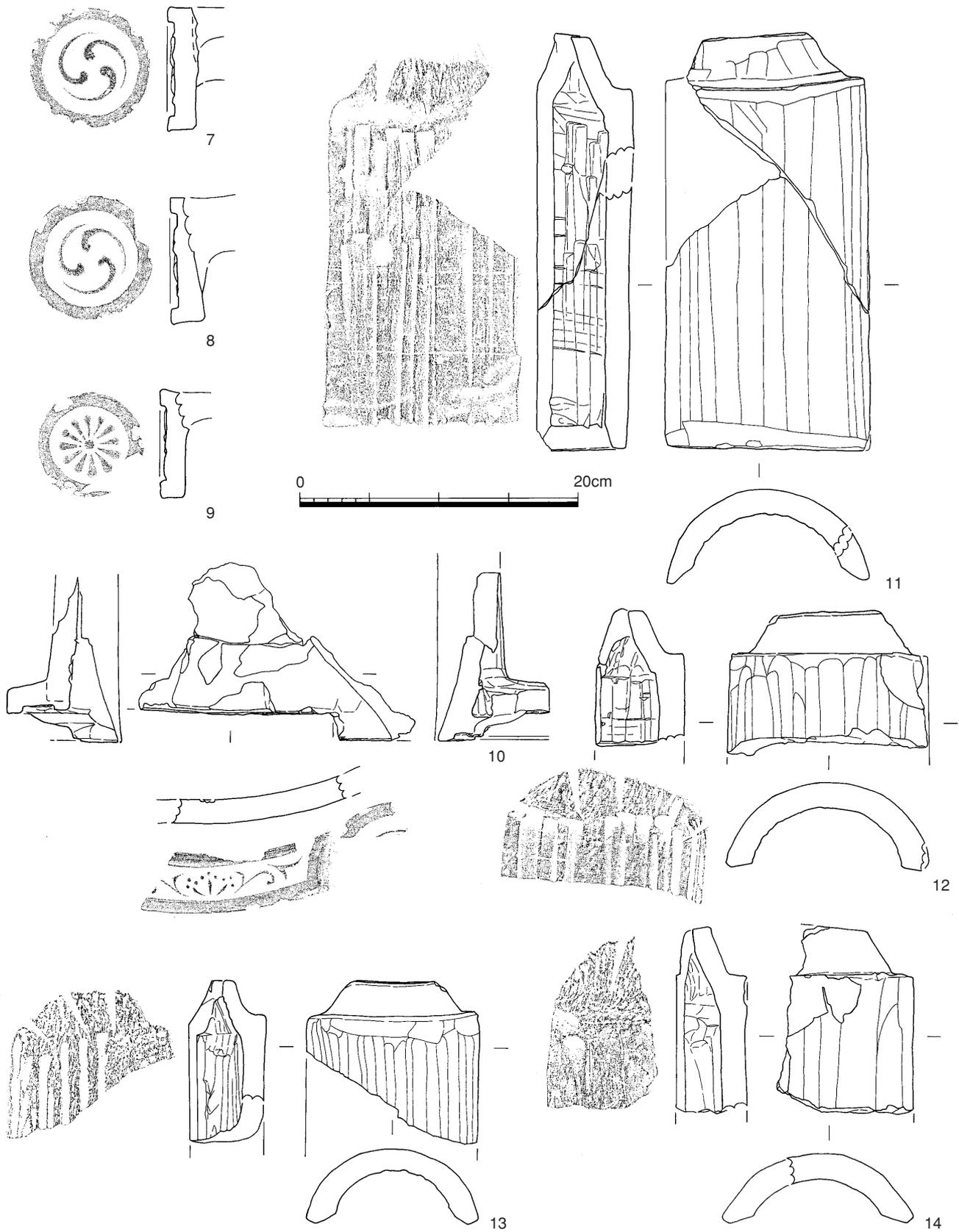
### 1. 瓦類

今回の発掘調査において、瓦溜りと考えられる遺構は確認されていない。そのため、細かな分類やカウントを実施していない。大まかに本瓦である軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦と、軒棧瓦・棧瓦などの他に、飾り瓦や面戸瓦が出土している。



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm)				調整など		備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	種類	形状	長さ	幅	厚さ	高さ	内面	外面			
1	98C	SK0454	軒丸瓦	—	—	—	—	—	—	ケズリ	表面銀化、煤付着	30	E-1104
2	98A	検出	軒丸瓦	—	—	—	2.5	—	ナデ+ケズリ	ケズリ	左巻三巴文、珠文12	30	E-1105
3	00A	SK0234	飾り瓦	—	残5.1	残5.0	2.2	—	—	指押え	—	30	E-1106
4	98A	SD0012	平瓦	—	残21.8	残11.5	2.1	—	ケズリ	ケズリ	穿孔(径8mm)	30	E-1107
5	00A	SE0002	道具瓦	面戸瓦	14.6	7.4	1.9	—	ケズリ	ケズリ	—	30	E-1108
6	98B	SE0002	道具瓦	面戸瓦	15.8	7.9	1.6	—	—	—	—	—	E-1109

第156図 瓦類① (1:4)

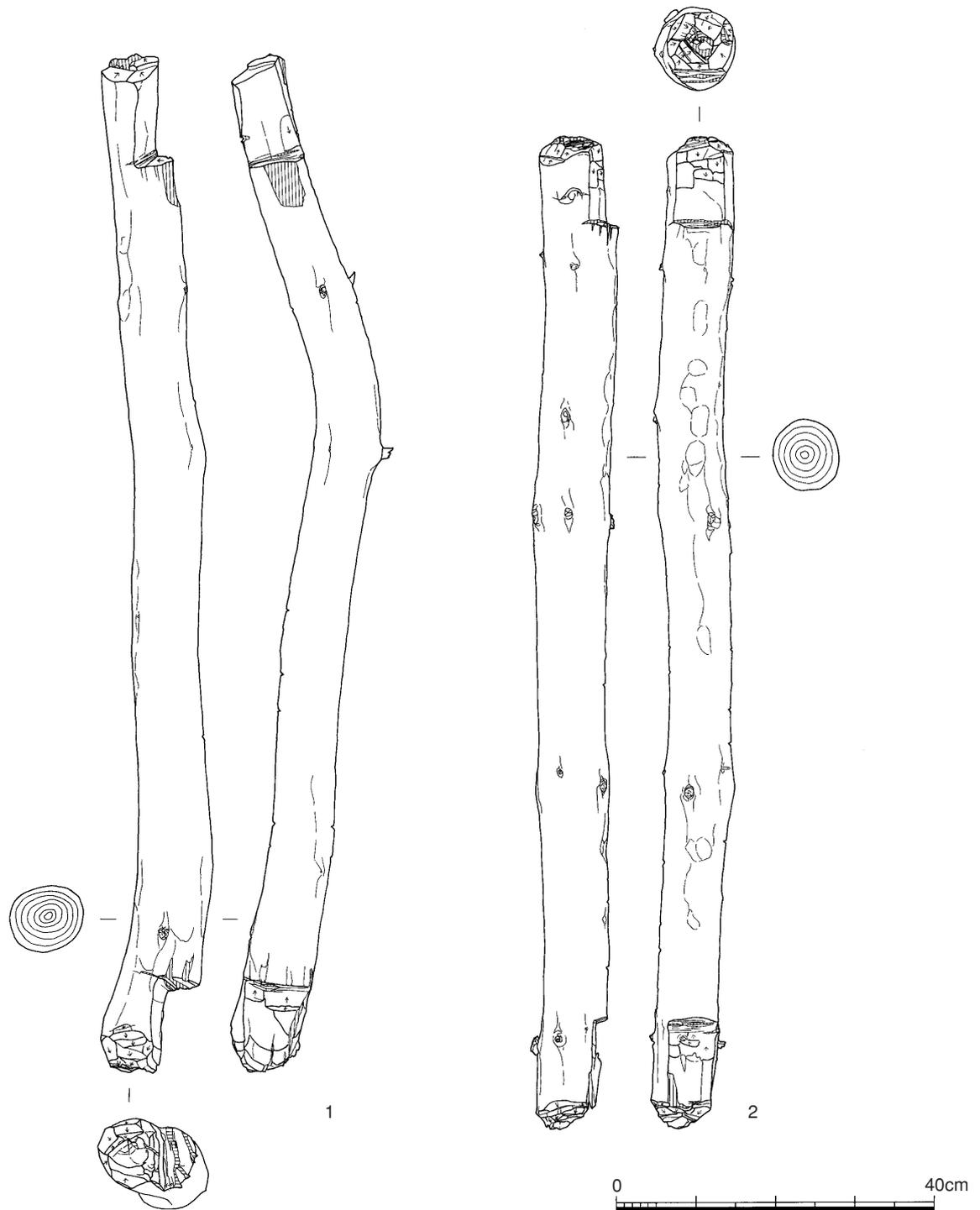


遺物 番号	調査地点 調査区 遺構番号	種類		法量 (cm)				調整など		備考	PL	登録 番号
		種類	形状	長さ	幅	厚さ	高さ	内面	外面			
7	00B SK0715	軒棧瓦	丸部	—	—	2.1	—	ナデ	ケズリ	右卷三巴文		E-1110
8	98C SK0066	軒棧瓦	丸部	—	—	2.5	—	ナデ	ケズリ	右卷三巴文、表面銀化		E-1111
9	98C SK0066	軒棧瓦	丸部	—	—	1.8	—	ナデ	ケズリ	菊花文、表面銀化	30	E-1112
10	00A SK0093	軒棧瓦	—	—	—	1.7	5.1	ナデ+ケズリ	ケズリ	三子葉文・均等唐草文+三巴文か	30	E-1113
11	98C SK0066	丸瓦	—	30.1	—	1.8	6.7	ケズリ	ケズリ		30	E-1114
12	00A SE0002	丸瓦	—	—	—	1.9	6.4	ケズリ	ケズリ	表面銀化		E-1115
13	98A SD0012	丸瓦	—	—	—	1.8	5.4	ケズリ	ケズリ	表面銀化		E-1116
14	98B SK0200	丸瓦	—	—	—	1.9	推5.0	ケズリ	ケズリ	表面やや銀化		E-1117

第157図 瓦類② (1:4)

## 2. 木製品

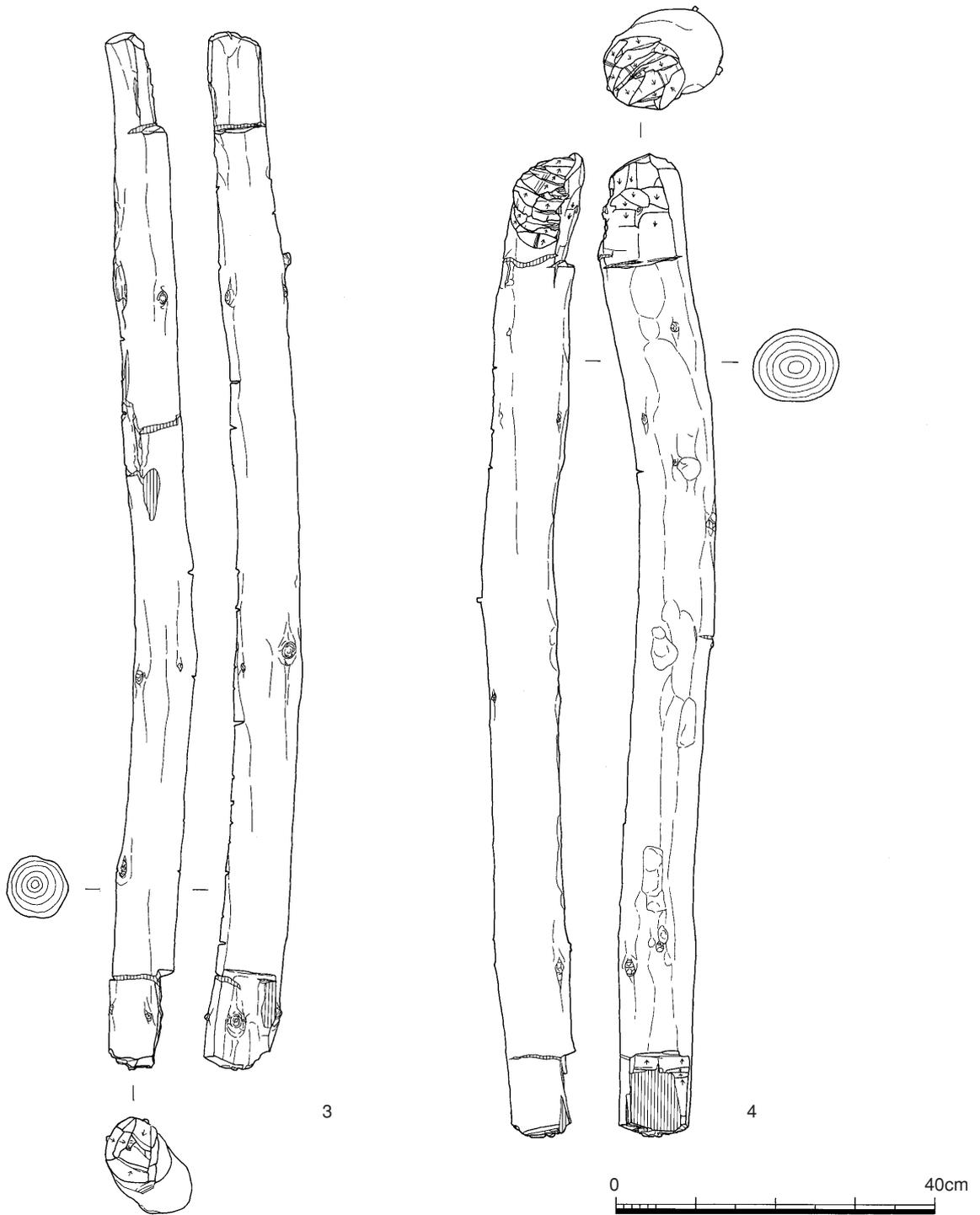
木製品としては、建築部材と思われる板材などが、井戸や溝・池状遺構から出土している。他の遺跡で出土しているような漆椀などの漆器製品や箸・曲物・下駄などの製品はほとんど出土していない。



遺物 番号	調査地点		種 類		法量 (cm)			材質	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	種類	形状	最大長	最大径	本体長				
1	98B	SE0002	木	井戸土台木	128.9	8.8	104.3	針葉樹か	下部石による押圧あり、鋸痕あり		W-001
2	98B	SE0002	木	井戸土台木	125.3	8.7	100.2	針葉樹か	上部石による歪みあり		W-002

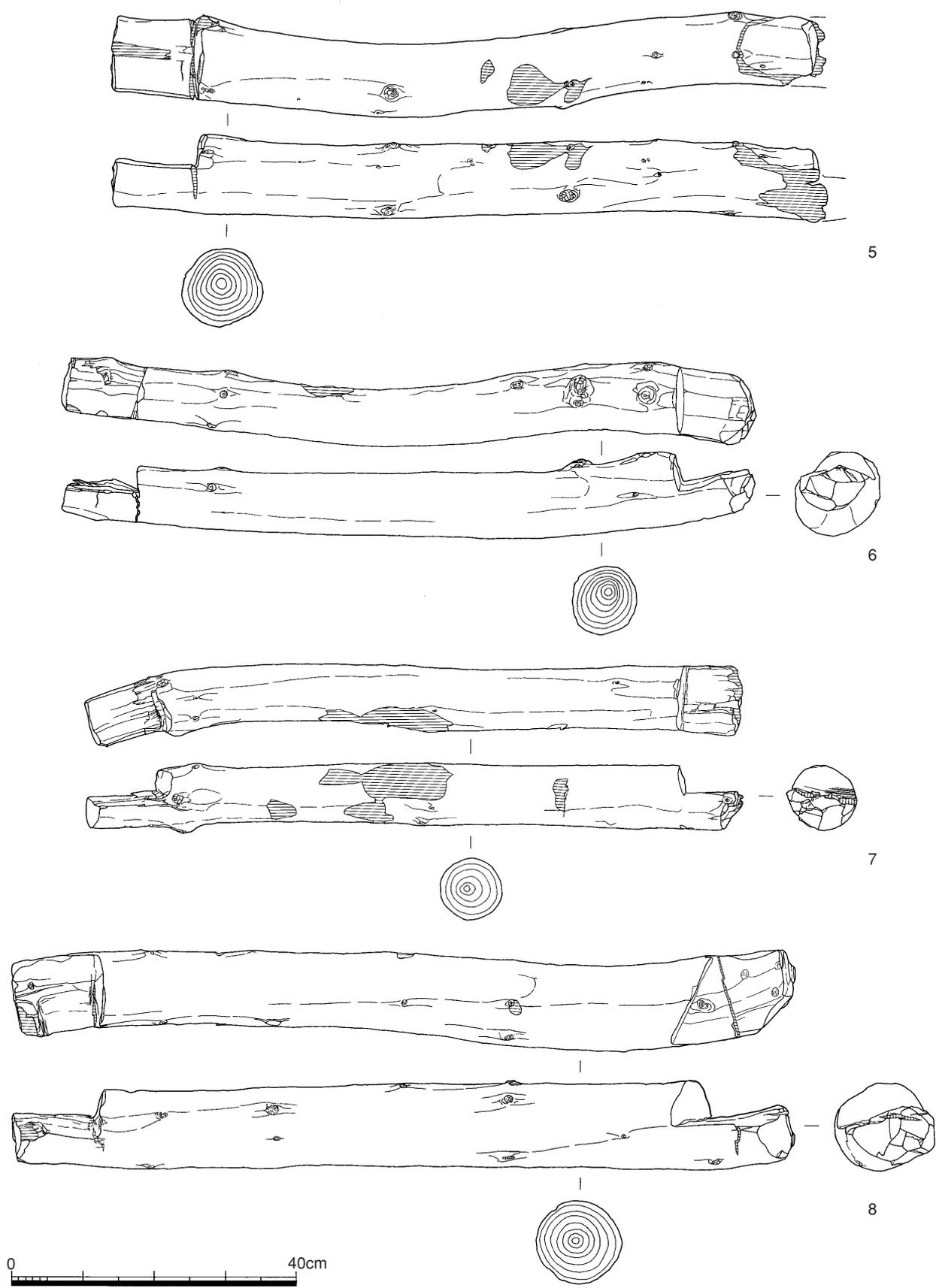
第 158 図 木製品① (1 : 8)

今回は2基の石組井戸の土台木を実測するので精一杯であった。1～4は98BSE0002、5～8は98CSE0004の石組み井戸の土台木で、伐り出した痕や鑿痕（両端の加工を「相欠き継ぎ」という）がそのまま残っている部分が多く、ほとんど時間をおくことなく土台として使われたと想定できる。また、赤漆櫛が1点だけ出土している（図版30参照）。



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm)			材質	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	種類	形状	最大長	最大径	本体長				
3	98B	SE0002	木	井戸土台木	130.4	7.8	105.8	針葉樹か	下部石による押圧あり		W-003
4	98B	SE0002	木	井戸土台木	123.9	10.0	98.7	針葉樹か	上部石による押圧あり		W-004

第159図 木製品② (1:8)

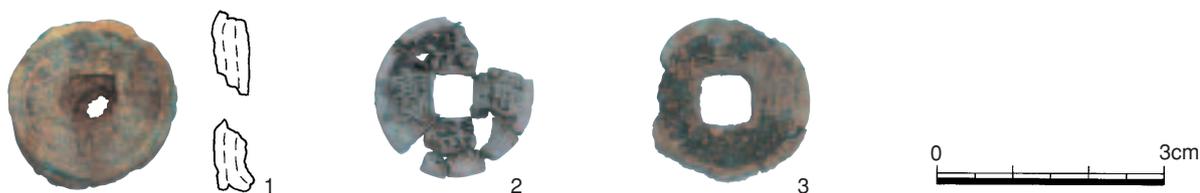


遺物 番号	調査地点		種 類		法量 (cm)			材質	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	種類	形状	最大長	最大径	本体長				
5	98C	SE0004	木	井戸土台木	100.4	11.2	85.6	針葉樹か			W-005
6	98C	SE0004	木	井戸土台木	97.1	10.1	75.5	針葉樹か			W-006
7	98C	SE0004	木	井戸土台木	92.0	10.0	73.3	針葉樹か			W-007
8	98C	SE0004	木	井戸土台木	109.6	11.8	85.7	針葉樹か	段を斜め方向に切り出している		W-008

第 160 図 木製品③ (1 : 8)

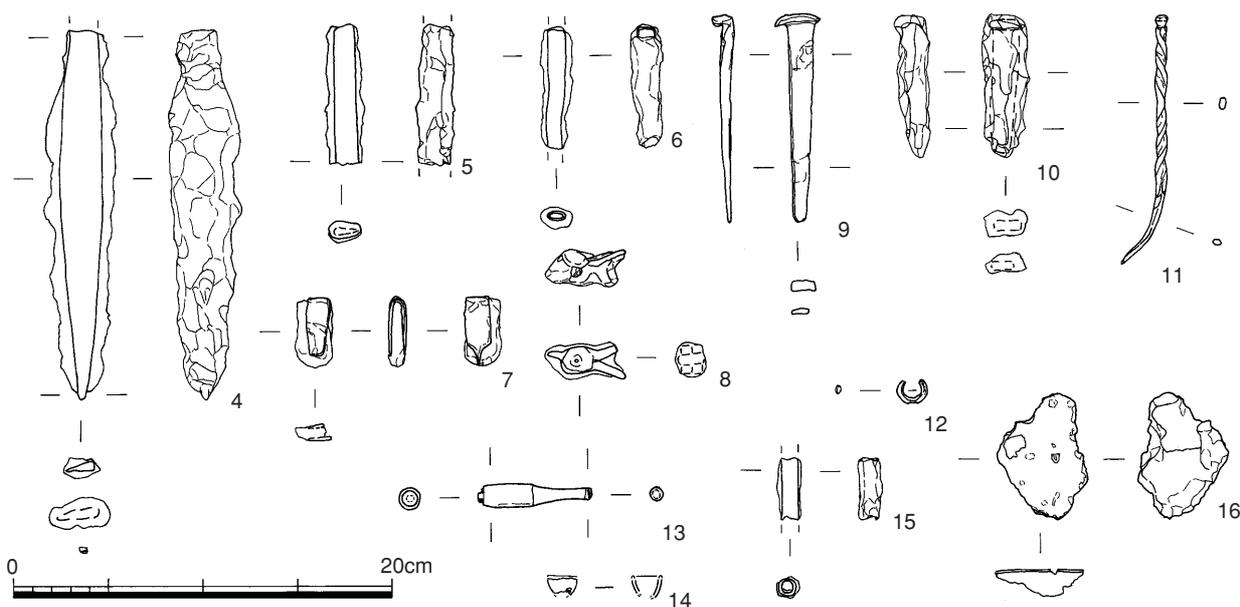
### 3. 金属製品

金属製品は、釘・刀子・などの鉄製品、銭貨・煙管などの銅製品や真鍮製品の他、鞆の羽口や鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土している。出土量は極端に少ないように思われる。ただし、ここには戦国時代以降のもの以外に、中世の土坑墓から出土した刀子や古代の竪穴住居から出土した鉄滓なども図化して載せてある。



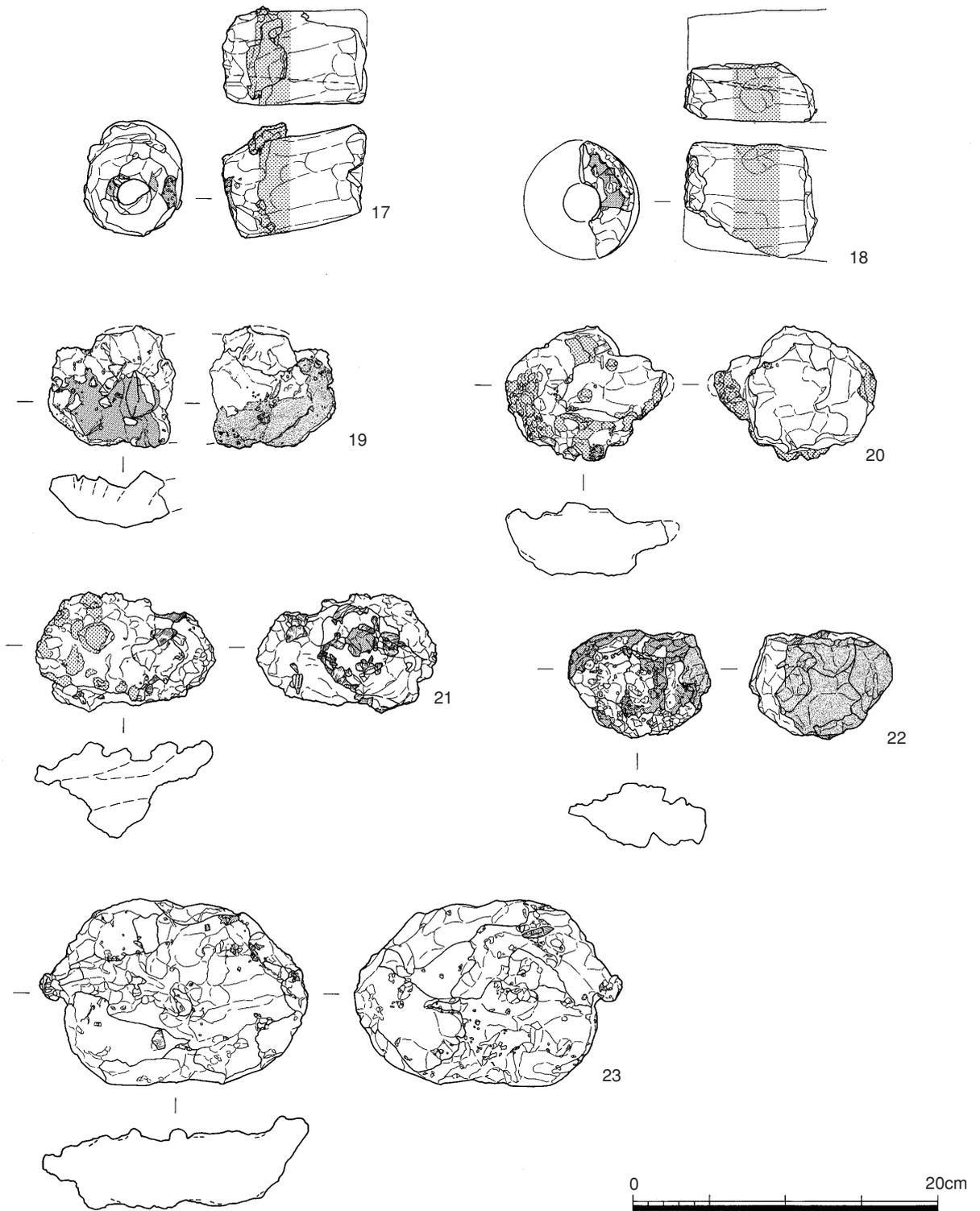
遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				材質	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	径	孔径	厚さ	重さ				
1	98E	SK0200	その他	銭貨	2.2	0.7	0.5	7.2	銅	元豊通寶、3枚融着、北宋、初鑄1078年		M-001
2	98E	SK0391	その他	銭貨	2.2	0.6	0.2	0.8	銅	洪武通寶、明、初鑄1368年		M-002
3	00A	SK0288	その他	銭貨	2.2	0.7	0.1	1.3	銅	寛永通寶、新寛永か		M-003

第161図 金属製品① (1:1)



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				材質	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	長さ	幅	厚さ	重さ				
4	00C	SX0001	装身具	刀子	19.6	2.3	(0.5)	147.6	鉄	残存長19.6cm、最大幅3.5cm、最大厚2.3cm	30	M-004
5	98C	SK0258	装身具	小柄	残7.5	2.1	1.3	25.2	鉄		30	M-005
6	00A	SD0002	その他	不明	残6.5	0.9	0.1	12.1	真鍮	煙管か		M-006
7	00B	SD0047	その他	不明	6.8	1.3	0.1	12.9	銅+鉄	飾り金具か	30	M-007
8	00B	SD0053	調度具	鉢か	残4.2	1.4	1.6	18.2	鉄			M-008
9	98A	SK0318	建具	釘	11.0	1.5	0.5	29.7	鉄	頭部幅2.4cm	30	M-009
10	00A	検出	建具	釘	7.1	1.6	(0.5)	37.5	鉄	残存長7.6cm、最大幅2.4cm、最大厚1.7cm	30	M-010
11	98A	SX0014	火具	火箸	13.7	0.6	0.3	14.7	鉄		30	M-011
12	00C	検出	その他	不明	—	—	0.4	0.5	銅	飾り金具か、径1.5cm	30	M-012
13	00A	東壁	喫煙具	煙管	5.7	1.2	0.2	11.3	銅	吸口、羅字残存	30	M-013
14	98F	調査区壁	喫煙具	煙管	残0.9	—	0.1	1.2	銅	火皿径(1.5)cm		M-014
15	00A	北壁	その他	不明	残3.3	0.9	0.1	4.7	真鍮	煙管か		M-015
16	00A	検出	その他	不明	残6.7	残4.6	0.05	25.7	鉄	飾り金具か		M-016

第162図 金属製品② (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				材質	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	長さ	幅	厚さ	重さ				
17	98C	トレンチ	その他	輪	9.6	6.0	1.9	—	土器	羽口、鉄滓・壁面融着	30	M-017
18	98B	SF01北トレンチ	その他	輪	残8.3	(7.4)	2.4	—	土器	羽口、鉄滓融着		M-018
19	00B	SB0045	その他	鉄滓	7.9	7.9	3.4	174.7	鉄	椀形滓、土器片・炉材を含む	30	M-019
20	98B	SE0001	その他	鉄滓	9.3	7.1	4.3	196.0	鉄	椀形滓、気泡により空洞多い		M-020
21	98B	SE0002	その他	鉄滓	11.7	7.8	6.5	286.5	鉄	椀形滓が4つ融着している、小石・木炭片含む		M-021
22	98B	検出	その他	鉄滓	17.4	12.3	7.3	1300	鉄	椀形滓、小石・木炭片含む		M-022
23	98B	検出	その他	鉄滓	10.6	8.9	4.9	437.1	鉄	椀形滓、小石・木炭片・植物質痕含む	30	M-023

第163図 金属製品③ (1:4)

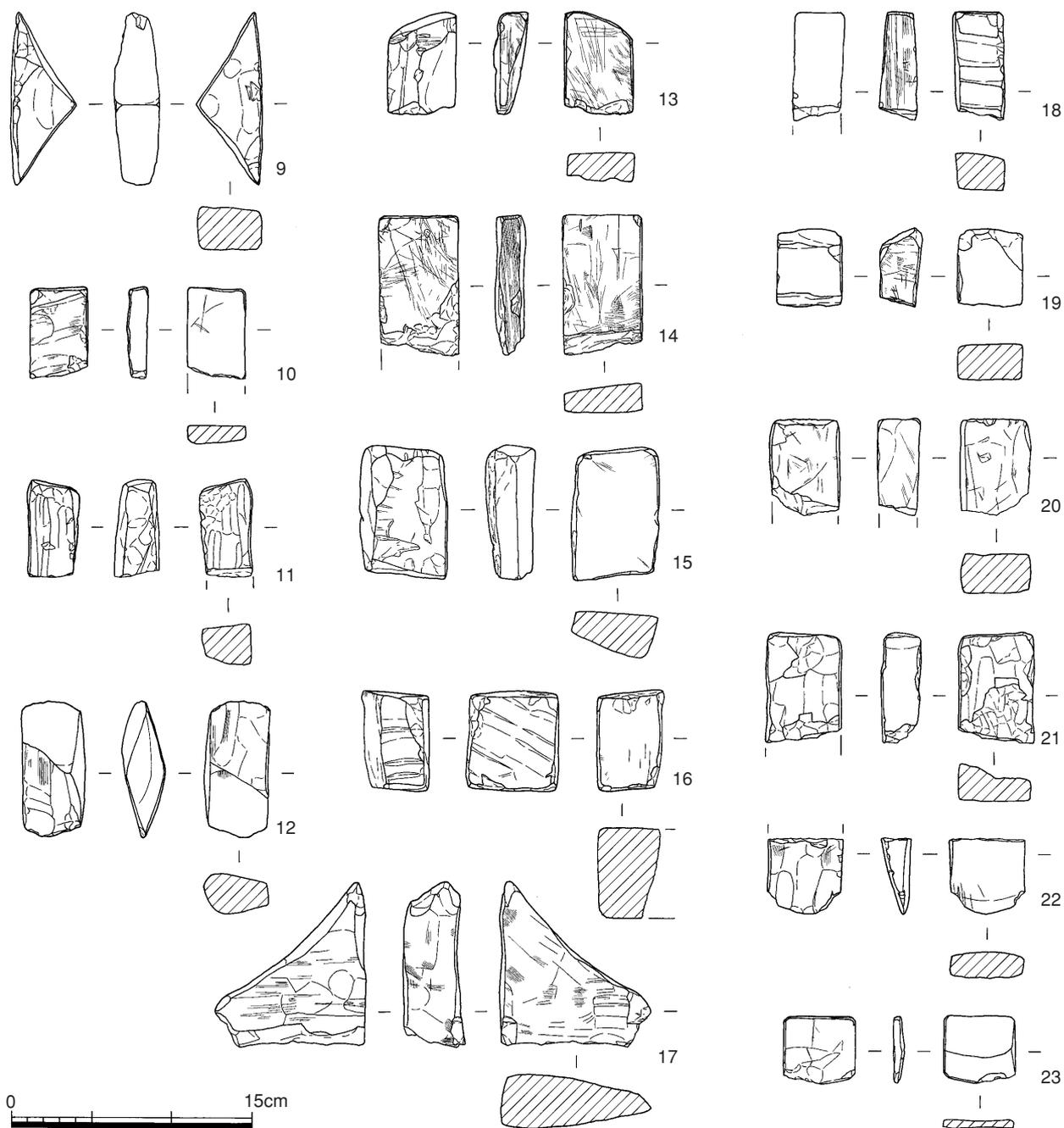
#### 4. 石製品

石製品は、硯・砥石・石臼の他、五輪塔の火輪が出土している。特に目を引くのが1の溶結凝灰岩製の硯で、海の部分に桃の実の形をかたどり、周囲に茎や葉を線刻している。風流なもので、ここに住んでいた人の趣味の高さを彷彿とさせるものである。(小嶋廣也)



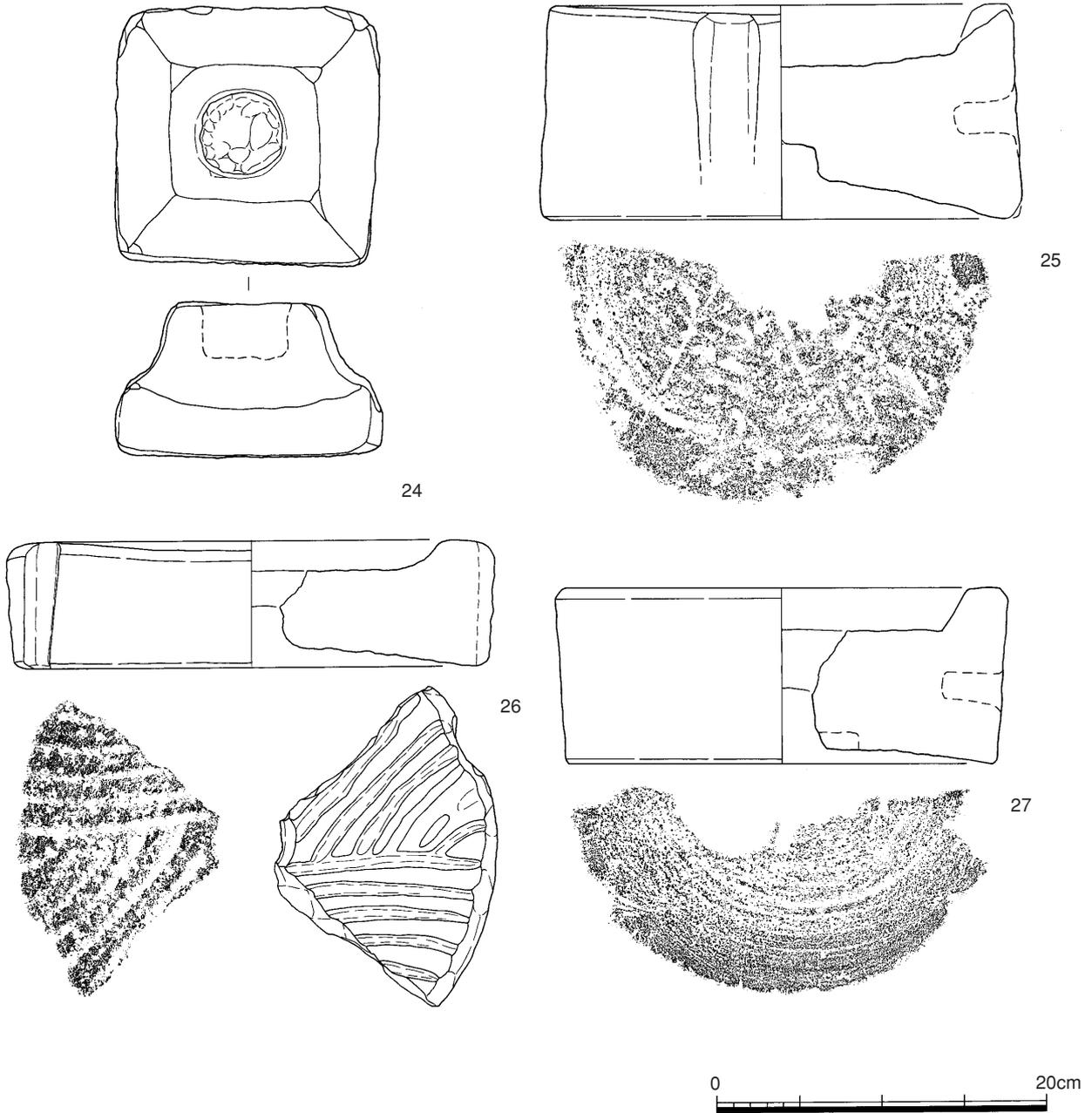
遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				石 材	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	長さ	幅	厚さ	重さ				
1	98C	SD0009	文房具	硯	残12.2	残9.8	残1.5	—	溶結凝灰岩	桃の実状の池・葉の線刻	30	S-012
2	98B	SE0002	文房具	硯	残7.0	6.2	残1.2	75.0	泥岩		30	S-013
3	98C	SK0418	文房具	硯	残12.3	残6.3	残2.2	153.7	ホルンフェルス			S-014
4	98A	SD0012	その他	砥石	残2.9	残4.8	0.7	4.2	凝灰質泥岩			S-015
5	98A	SD0012	その他	砥石	残10.3	残3.2	4.3	228.2	凝灰岩	切り出し痕か	30	S-016
6	98A	SD0012	その他	砥石	残9.3	8.1	2.3	212.6	ホルンフェルス		30	S-017
7	98A	SK0191	その他	砥石	残10.0	3.3	7.0	338.4	凝灰岩	切り出し痕か	30	S-018
8	98A	SD0011	その他	砥石	残6.3	5.1	2.3	102.7	泥質凝灰岩		30	S-019

第164図 石製品① (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				石材	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	長さ	幅	厚さ	重さ				
9	98B	SD0005	その他	砥石	10.8	2.8	4.1	109.1	凝灰岩			S-020
10	98B	SD0002	その他	砥石	残5.6	3.6	1.2	38.8	ホルンフェルス			S-021
11	98D	SD0002	その他	砥石	残5.9	2.7	3.3	83.3	凝灰岩	切り出し痕か	30	S-022
12	98C	SK0022	その他	砥石	残8.5	4.0	2.5	40.0	凝灰岩	転用品か		S-023
13	98C	SK0066	その他	砥石	残6.0	4.2	1.8	61.1	凝灰質泥岩	視の転用か		S-024
14	98C	SK0066	その他	砥石	残8.8	4.9	1.8	137.7	凝灰質泥岩	切り出し痕か		S-025
15	00C	SK0384	その他	砥石	8.0	5.4	2.7	185.5	凝灰質泥岩	切り出し痕か	30	S-026
16	00A	SE0002	その他	砥石	6.1	4.1	5.8	248.0	凝灰岩	切り出し痕か		S-027
17	98C	SK0066	その他	砥石	10.4	3.5	9.4	367.8	凝灰質泥岩			S-028
18	98C	SK0454	その他	砥石	残6.3	3.1	2.3	73.3	凝灰岩	切り出し痕か		S-029
19	98A	検出	その他	砥石	残4.9	残4.0	2.5	88.3	凝灰質泥岩	大きな砥石からの転用か		S-030
20	98B	検出	その他	砥石	残6.1	4.4	2.6	99.9	凝灰岩			S-031
21	98B	検出	その他	砥石	残6.9	2.2	4.6	106.8	凝灰岩	切り出し痕か		S-032
22	98D	検出	その他	砥石	残4.7	4.7	1.8	46.8	凝灰岩	切り出し痕か		S-033
23	00A	南壁	その他	砥石	残4.2	4.5	0.5	13.2	泥質凝灰岩	切り出し痕か		S-034

第165図 石製品② (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類		法量 (cm・g)				石 材	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構番号	用途	種類	長さ	幅	高さ	重さ				
24	98C	SD0009	神仏具	五輪塔	15.9	15.7	—	3200	花崗岩	火輪、軸受部径5.6cm、深さ3.2cm	30	S-035
25	98C	SD0012	調理具	石臼	—	—	—	2300	花崗岩	上臼、把手を填める溝(幅3.6cm、深さ0.6cm)あり	30	S-036
26	98C	SK0427	調理具	石臼	—	—	—	6700	砂質凝灰岩	上臼、把手を填める穴(縦2.4cm、横2.0cm、深さ3.8cm)・溝(幅3.9cm、深さ0.3cm)あり、目地摩滅		S-037
27	98B	SD0014	調理具	石臼	—	—	—	4500	砂質凝灰岩	上臼、把手を填める穴(縦2.0cm、横2.1cm、深さ3.6cm)あり、目地摩滅	30	S-038

第166図 石製品③ (1:4)

## 第Ⅳ章 科学分析



現地説明会風景（北西から）

# 第1節 矢作川沖積低地北部、今町遺跡における古環境解析

鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子

## はじめに

矢作川沖積低地の上部更新統最上部～完新統の地層は、下位より基底砂礫層・下部泥層・下部砂層・上部泥層・上部砂層・頂部泥層・頂部砂（礫）層に区分される（松沢ほか，1965；森山・小沢，1972；森山・浅井，1980）。それらのうち、先史～歴史時代である完新統最上部層については、地質学的手法に基づく検討は少なく、古環境情報は未だ不明な点が多い。今回、豊田市南部の今町遺跡において層相および微化石試料より矢作川沖積低地北部の古環境復元を試みたので報告する。

## 試料および研究方法

古環境解析にあたって、微化石分析用試料を98C区において出土する考古遺物より18世紀後半～19世紀初頭（江戸時代後半）と推定される池状遺構 S K 0454、98D 区の16世紀中葉～17世紀前半の溝（堀） S D 0002 において採取した。なお、微化石分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。各分析方法を以下に記す。

珪藻分析は湿重7g前後を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理・自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。希釈後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入し、プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数した。種の同定には Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b) などを用いた。堆積環境の解析にあたって、汽水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については Asai and Watanabe (1995) の環境指標種を参考とした。

花粉分析は湿重約10g秤量し、水酸化カリウム処理・篩別・重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）・フッ化水素酸処理・アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的処理を施して、花粉・孢子化石を分離・濃集した。残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作製後、光学顕微鏡下で走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行った。各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した。

植物珪酸体は約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理・超音波処理（70W，250KHz，1分間）・沈定法・重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集した。希釈後、カバーガラス上に滴下・乾燥させ、乾燥後、プリユラックスで封入しプレパラートを作製した。400倍の光学顕微鏡下で全面走査し、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらの珪酸体を包含する珪化組織片を近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数した。

## 分析結果

考古遺構から採取した試料について花粉・植物珪酸体・珪藻分析を行なった。以下にその結果を記す。

### 98C区 SK0454

遺構を埋める堆積物は下位より3層に区分され、全て粘土層からなる。下位の1層（標高26.76～26.87m）は暗灰色を呈する砂粒子を混じえる粘土層からなり、2層（標高26.87～27.08m）は褐灰色を呈する礫ないし砂粒子を混じえる粘土層からなる。3層（標高27.08～27.16m）は灰色粘土層からなる。下位層より各層1試料の合計3試料を採取した。

#### a. 花粉分析

花粉化石は3試料とも良好に検出される（第167図）。木本花粉の出現傾向は類似しており、マツ属が優占する。このほかツガ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・ツバキ属などを低率ながら伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、ついでツバ属が検出される。このほかカヤツリグサ科・サナエタデ節-ウナギツカミ節・ワタ属・ゴマ属・キュウリ属・ユウガオ属・ヨモギ属・キク亜科などが検出される。

#### b. 植物珪酸体分析

試料1～3は同様な産状を示し、タケ亜科の産出がめだち、栽培植物のイネ属・ヨシ属・ウシクサ族（ススキ属を含む）・イチゴツナギ亜科などが検出される（第168図）。また、イネ属は、珪化組織片として稲籾殻に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列・機動細胞列も認められる。

#### c. 珪藻分析

試料1～3とも淡水性珪藻と陸生珪藻とが混在する（第169図）。試料1の主な産出種は陸域にも水域にも耐性のあるB群（伊藤・堀内，1991）であり、有機汚濁の進んだ富栄養水域にも一般的な好汚濁性種（Asai, K. and Watanabe, T., 1995）の *Navicula confervacea*、分布がほぼ陸域に限られる陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）の *Navicula mutica* が約15～25%と多産し、A群の *Hantzschia amphioxys*、未区分陸生珪藻（伊藤・堀内，1991）の *Pinnularia schoenfelderi*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、*Pinnularia gibba*などを伴う。試料2・3になると、*Navicula confervacea*を除く *Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia schoenfelderi*、B群の *Stauroneis obtuse*などが5～20%産出する。淡水性珪藻では流水不定性の *Cymbella silesiaca*、*Pinnularia gibba*などを伴う。

### 98D区 SD0002

溝を埋める堆積物は下位より5層に区分される。1層（標高26.98～27.05m）は明褐色粘土層、2～3層（標高27.05～27.41m）は細礫の混じる灰褐色粘土層、4～5層（標高27.41～27.68m）も細礫の混じる赤褐色粘土層よりなる。下位層より各層1試料、合計5試料を採取した。

#### a. 花粉分析

花粉化石は5試料ともほとんど検出されない。わずかに検出される花粉化石も保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっている。検出される種類は、木本花粉が3種類（ツガ属・マツ属・ツツジ科）の

み、草本花粉が7種類（イネ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ソバ属・ワタ属・アリノトウグサ属・オミナエシ属・キク亜科）、シダ類胞子の合計11種類である。

#### b. 植物珪酸体分析

試料1～5の全体にタケ亜科の産出がめだち、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科などが検出される（第170図）。また、珪化組織片としてイネ属穎珪酸体や葉部の短細胞列、タケ亜科短細胞列が認められる。

#### c. 珪藻分析

5試料のうち2試料（試料2・3）から珪藻化石が産出する。それ以外の3試料は20～47個体と少ない（第171図）。試料2・3は陸生珪藻が90%以上と優占することを特徴とし、群集組成も近似する。A群の*Navicula mutica*が40～50%と優占し、同じくA群の*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*が20%前後と多産する。

### 遺構の堆積環境

今町遺跡では2つの考古遺構（98C区池状遺構SK0454、98D区堀SD0002）を埋める堆積物について、花粉・植物珪酸体・珪藻の各微化石分析を行なった。分析結果を基に考察を加える。

考古遺跡は標高約27mに位置し、試料を採取した各遺構は、赤褐色～黄褐色を呈し塊状・均質で固結度の高い粘土層である上部更新統、碧海層を掘削していた。

98C区SK0454を埋積する堆積物から検出される花粉化石は、木本花粉のマツ属が多産した。マツ属花粉の多産に関して、愛知県稲沢市の下津北山遺跡では近～現代以前と推定される堆積物中や、放棄河道跡の15世紀末の層準からマツ属が優占した（鬼頭ほか，2000）。また、愛知県一宮市の馬引横手遺跡では標高4.0m、 $1720 \pm 70$  yrs BP（Gak-19725）の14C年代値を示す粘土層層準でコナラ亜属アカガシ亜属やコナラ属コナラ亜属の出現に伴ってマツ属も比較的高率で確認された（鬼頭ほか，1999a）。また、愛知県豊明市、大脇城遺跡の堀（16世紀後半～17世紀中頃）ではコナラ属コナラ亜属とマツ属が優占した（鬼頭ほか，1999b）。マツ属（複維管束亜属）花粉について、関東平野では12～13世紀を境にマツ属花粉の急増が報告されている（安田ほか，1980）。また、日本全域では古墳時代以降マツ属花粉が増加するとの報告もある（塚田，1974）。西日本では古墳時代と中世末に際だって増加する傾向があるといわれ、それは窯業や製鉄業といった人類による自然（森林）破壊に起因すると考えられている（渡辺氏私信）。今町遺跡98C区SK0454の埋積物は18世紀後半～19世紀初頭を示し、人為活動も活発化していた時代である。今町遺跡周辺域での里山の維持管理が行なわれていたことを示すものかもしれない。

一方で、98D区SD0002では花粉化石はほとんど検出されなかった。また、98C区SK0454でもマツ属以外の木本花粉、例えばコナラ属の検出率が低かった。花粉・シダ類胞子は腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、一般に、落葉広葉樹に由来する花粉よりも、針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性がつよいとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。針葉樹花粉が多産する事実は、水の影響の少ない、より好気的な環境であったと推定される。堆積時に取り込まれた花粉が分解・消失し、分解につよい花粉が選択的に残されたと考えられる。

草本花粉ではソバ属をはじめ、ワタ属・ゴマ属などの栽培植物が推定できる種群が、極少量ではあるが確認されている。18世紀後半～19世紀初頭の調査区周辺域での栽培が推定できる。

珪藻化石は *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia schoenfelderi* が多産した。*Hantzschia amphioxys* や *Navicula mutica* は陸生珪藻と呼ばれるものである。陸生珪藻は水中や水底の環境以外、例えば、コケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気にさらされた場所でも生育できる一群である。堆積物の珪藻分析を行なった際に、これらの種群が70～80%以上の高率に優占する結果が得られた場合、その試料が堆積した場所は水域以外の大気にさらされ、乾燥した環境であったことが推定できる。特に *Hantzschia amphioxys* は離水した乾燥環境に耐えうることのできる陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）に分類される。98D区 S D 0002では、これら陸生珪藻を90%以上と高率で多産した。本遺構は冠水せず、好気的な環境にあったことがわかる。98C区 S K 0454でも陸生珪藻を多産したが、*Cymbella* 属や *Gomphonema* 属などの流水性種も確認されるため、S D 0002と比較して水の影響があったと思われる。

## 謝辞

本論をまとめるにあたり、文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏には歴史時代の花粉化石についてご教示いただいた。愛知県埋蔵文化財センター整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・田中和子氏・服部久美子氏・村上志穂子氏には図面作成にあたりお手伝いいただいた。以上の方々に記してお礼申し上げます。

## 文献

- 安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，42，73-88.
- Asai,K. & Watanabe,T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, 35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻学会誌，6，23-45.
- 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美，1999a，馬引横手遺跡の古環境復元，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第84集「馬引横手遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，61-79.
- 鬼頭 剛・吉野道彦・堀木真美子・尾崎和美，1999b，微化石分析による大脇城跡の古環境解析，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第86集「大脇城遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，189-202.
- 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美，2000，下津北山遺跡における古環境解析，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集「下津北山遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，70-81.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆，1986，植物珪酸体分析，その特性と応用，第四紀研究 25，31-64.
- 小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，27，1-20.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1991a, Bacillariophyceae,Teil 3, Centrales,

Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1991b, Bacillariophyceae,Teil4,Achnanthaceae,Kritische Ergaenzungen zu

Navicula(Lineolatae)und Gomphonema, Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

松沢 勲・嘉藤良次郎・北崎梅香・進藤義武, 1965, 衣浦地区の地質構造および地盤地質, 都市地盤調査報告書, 9,

建設省計画局, 愛知県, 16-31.

森山昭雄・小沢 恵, 1972, 矢作川流域の沖積平原の地形と沖積層について, 第四紀研究, 11,193-207.

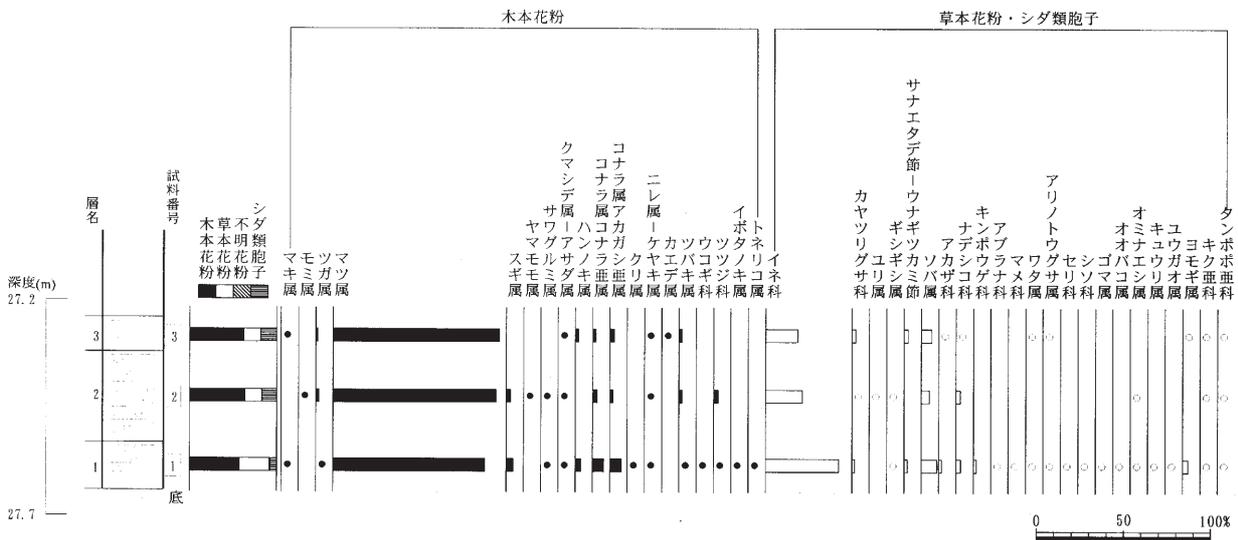
森山昭雄・浅井道広, 1980, 矢作川河床堆積物と供給岩石の造岩鉱物との粒度組成.

中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院

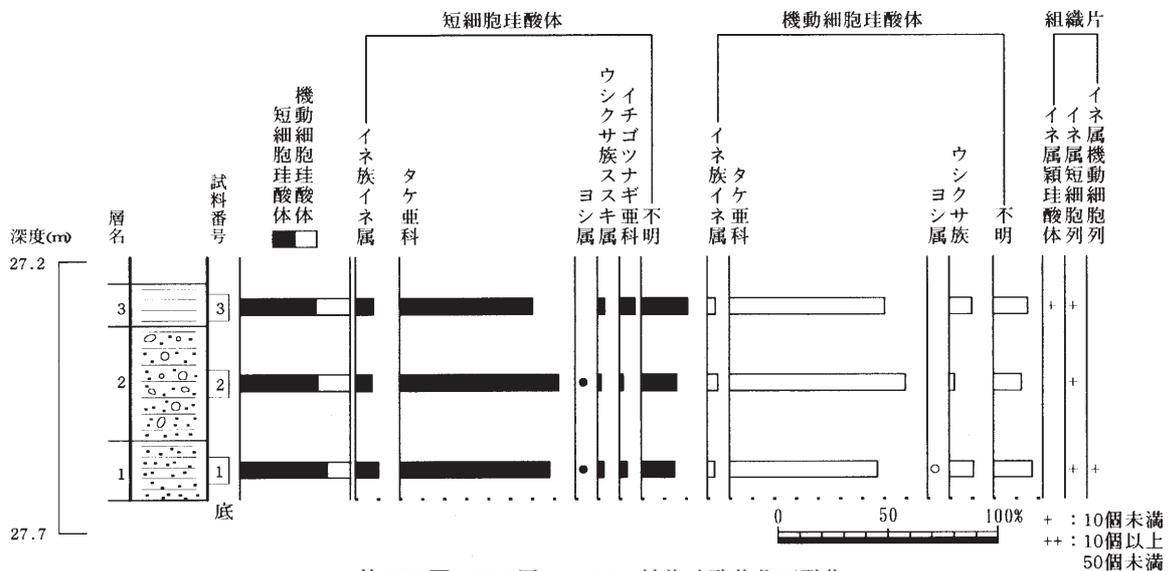
徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・孢子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

塚田松雄, 1974, 古生態学, 共立出版株式会社.

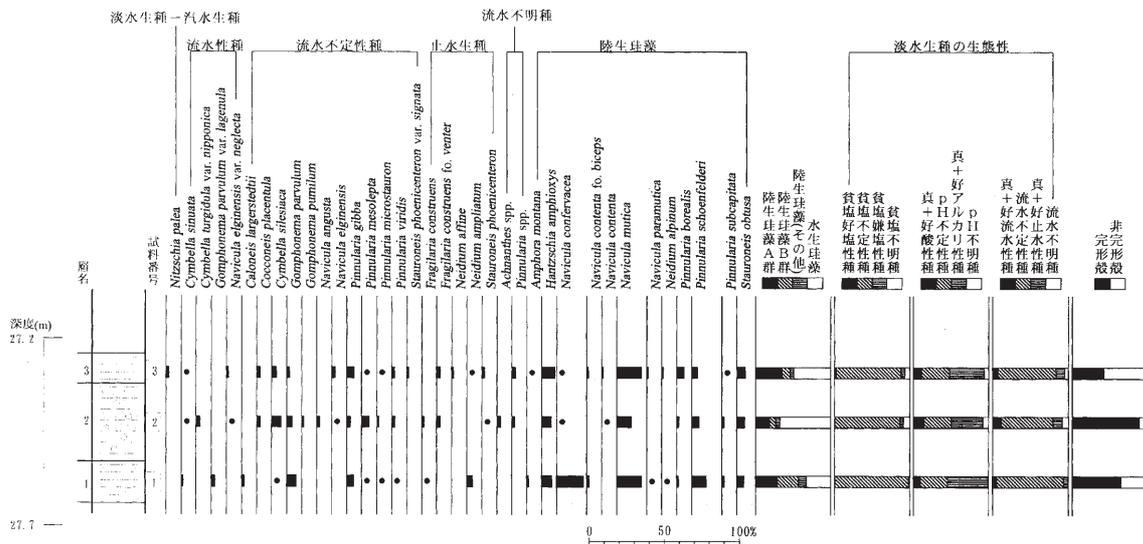
安田喜憲, 1980, 環境考古学事始, NHK ブックス 365, 日本放送出版協会.



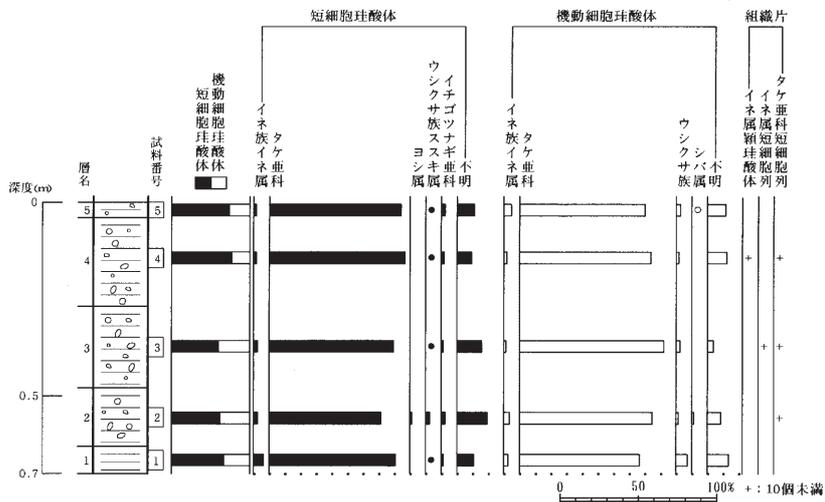
第167図 98C区 S K 0454花粉化石群集



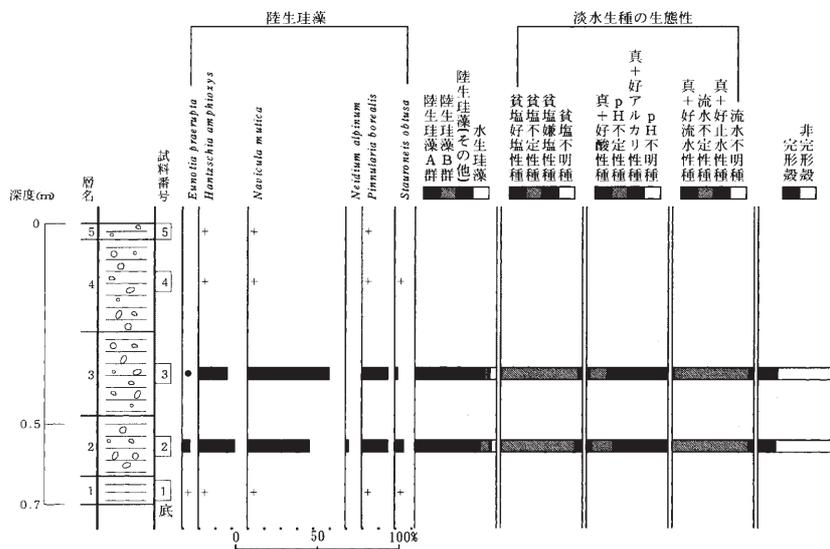
第168図 98C区 S K 0454植物珪酸体化石群集



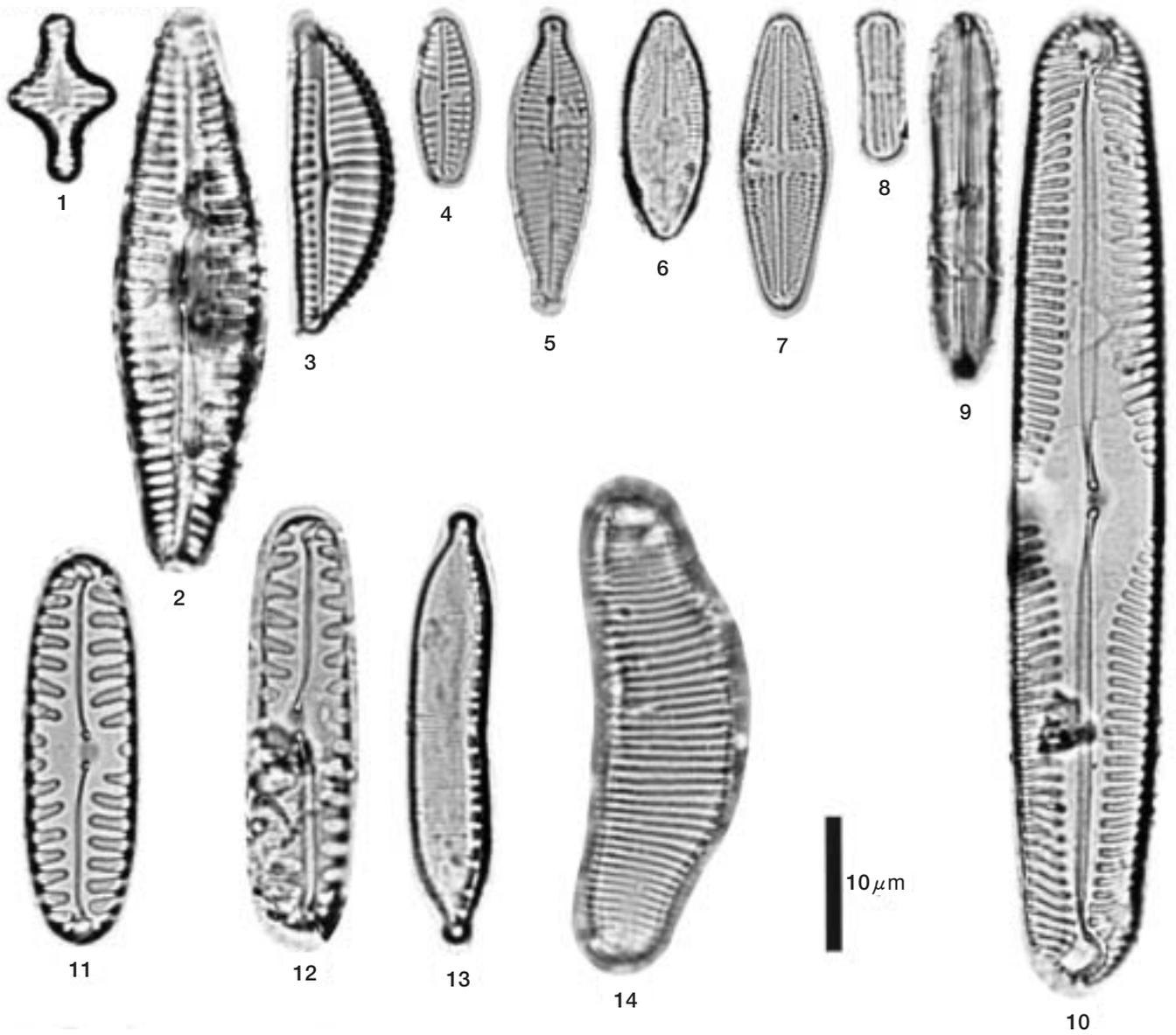
第169図 98C区SK0454の珪藻化石群集



第170図 98D区SD0002植物珪酸体化石群集

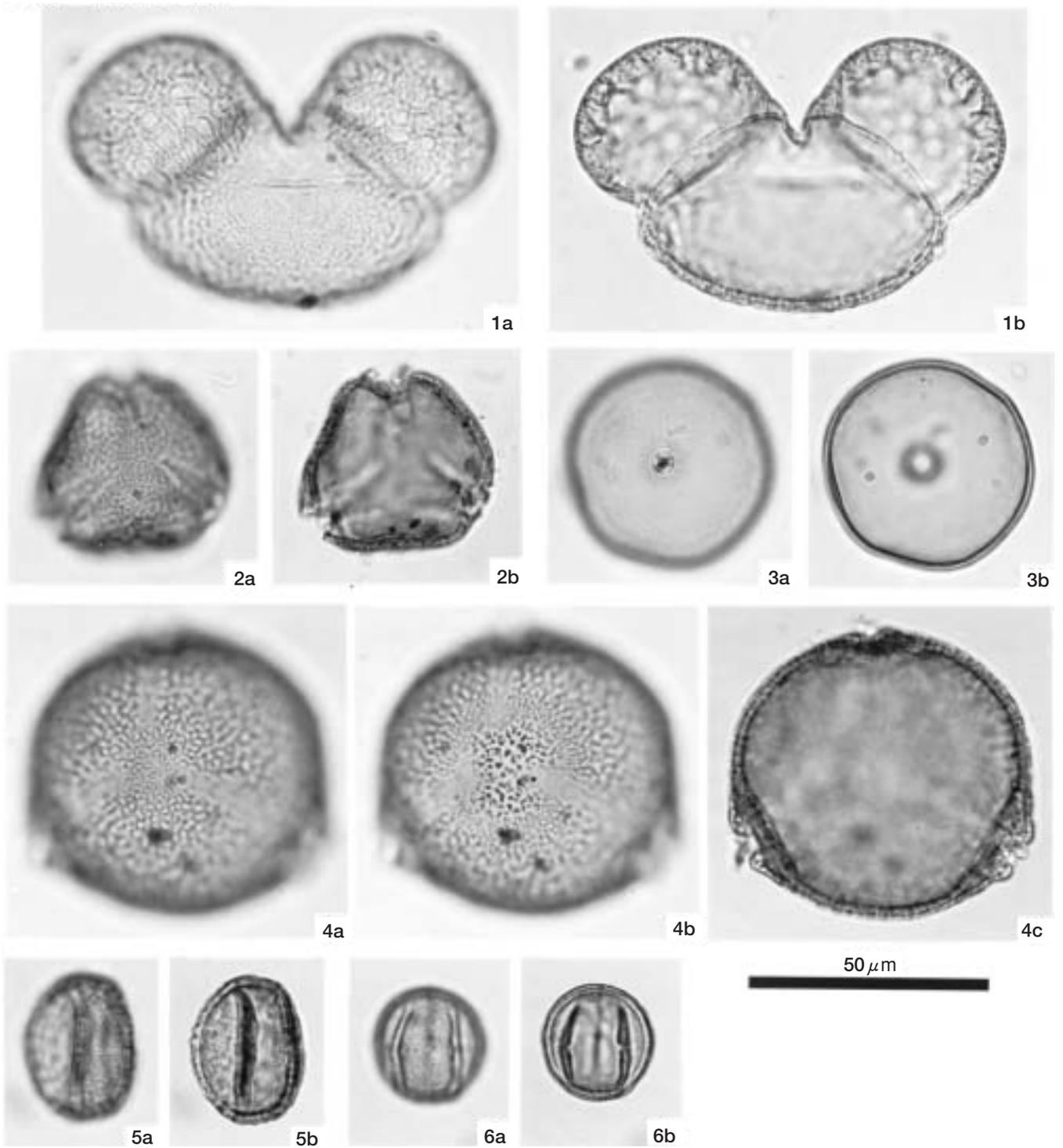


第171図 98D区SD0002の珪藻化石群集



1. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow
2. *Cymbella japonica* Reichelt
3. *Cymbella silesiaca* Bleisch
4. *Cymbella sinuata* Gregory
5. *Gomphonema parvulum* var. *lagenula* (Kuetzing) Frenguelli
6. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow
7. *Navicula mutica* Kuetzing
8. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott) Hustedt
9. *Neidium alpinum* Hustedt
10. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
11. *Pinnularia borealis* Ehrenberg
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg
13. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
14. *Eunotia praerupta* Ehrenberg

第172图 写真图版1 珪藻化石



- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. マツ属       | 2. ツバキ属       |
| 3. イネ属       | 4. ユウガオ属      |
| 5. コナラ属コナラ亜属 | 6. コナラ属アカガシ亜属 |

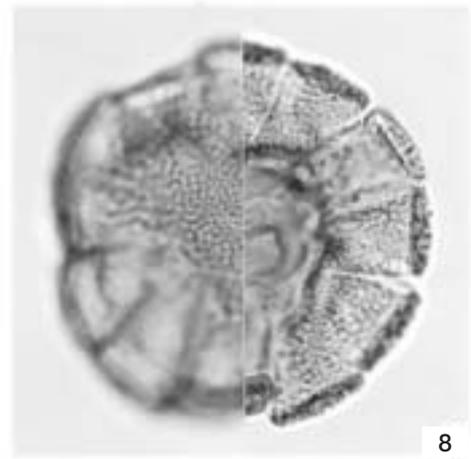
第173図 写真図版2 花粉化石(1)



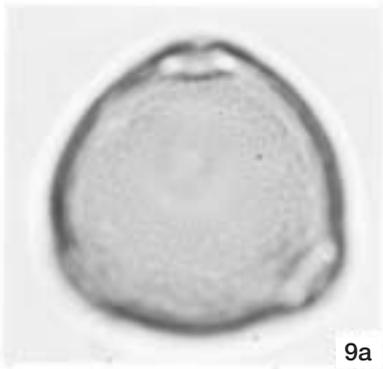
7a



7b



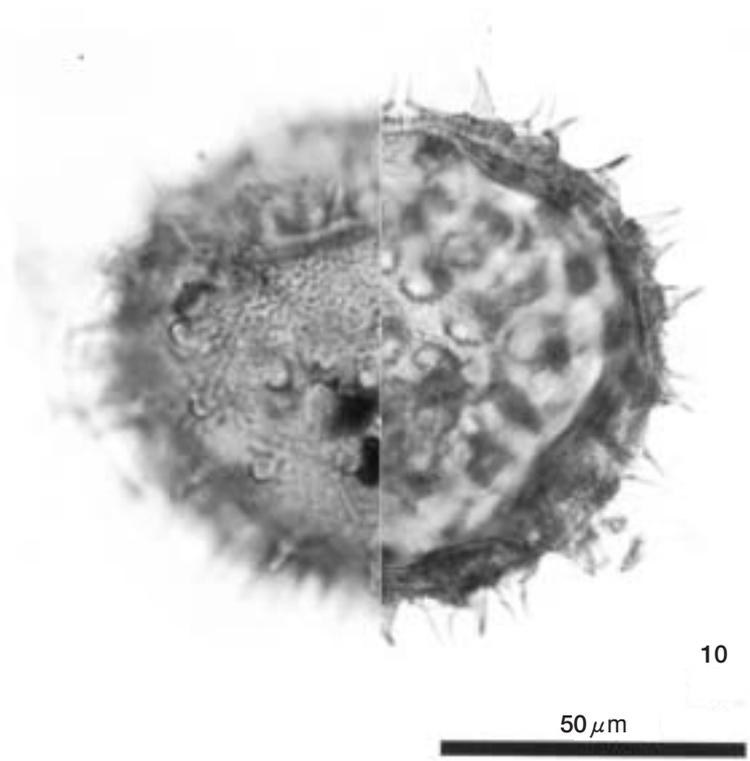
8



9a



9b



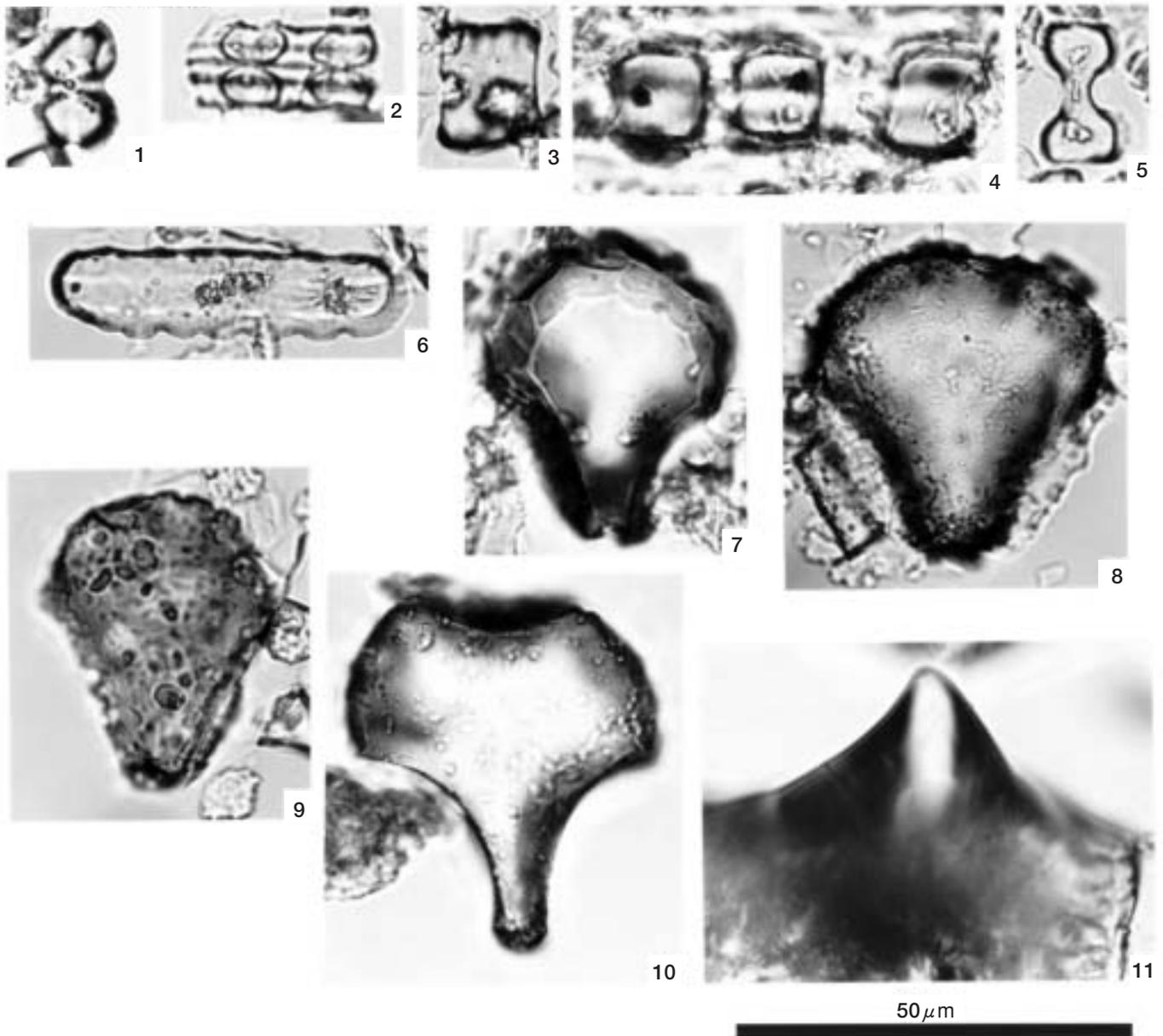
10

50  $\mu$ m

7.ソバ属  
9.キュウリ属

8.ゴマ属  
10.ワタ属

第174図 写真図版3 花粉化石(2)



- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体    | 2. イネ属短細胞列        |
| 3. タケ亜科短細胞珪酸体   | 4. タケ亜科短細胞列       |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体   | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体   | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体    |
| 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 | 10. シバ属機動細胞珪酸体    |
| 11. イネ属穎珪酸体     |                   |

第175図 写真図版4 植物珪酸体

## 第2節 今町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

(株)ズコーシャ・総合科学研究所 中野寛子、清水 了

門 利恵、星山賢一

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと<sup>(1)</sup>、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>(2)</sup>、約5千年前のハーゼルナッツ種子<sup>(3)</sup>に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した<sup>(4)</sup>。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて今町遺跡から出土した土坑の性格を解明しようとした。

### 1. 土壌試料 (00 B 区 S K 1393)

愛知県豊田市に所在する今町遺跡は飛鳥時代～江戸時代後半のものと推定されている。この遺跡から出土した江戸時代後半以降と推定されている土坑内外の土壌試料を分析した。試料No. 1とNo. 2を骨片が混ざっていたこの土坑の底部から、No. 3を対照試料として底面直下から採取した。00B区SK1393の周辺にも多くの土坑が点在していたが、骨片が出土したのはこの土坑のみであった。

### 2. 残存脂肪の抽出

土壌試料438～575gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、

再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化ナトリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を第30表に示す。抽出率は0.0015～0.0021%、平均0.0018%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器などの試料の平均抽出率0.0010～0.0100%の範囲内のものではあったが、低めであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。その中では遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸が結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

### 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノール-エチルエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。<sup>(5)</sup>

残存脂肪の脂肪酸組成を第176図に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成をみると、試料No.1とNo.2はほぼ同一の組成パターンで、No.3は他の2試料と大きく異なっていないが、やや組成パターンが異なっていた。このうち炭素数18までの中級脂肪酸はパルミチン酸が最も多く、次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多く分布していた。試料No.1とNo.2はオレイン酸含有量がNo.3よりも多く、ステアリン酸含有量はNo.3よりも少なかった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれている。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸は、それら3つの合計含有率が試料No.1とNo.2で約8～9%、No.3で約13%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸3つの合計含有率は約4～10%であるから、すべての試料中での高級飽和脂肪酸含有量はさほど多くはないが、その中では試料No.3に最も多めであった。高

級飽和脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級飽和脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、今町遺跡のすべての試料中では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多かったが、中でも土坑内試料No.1とNo.2はほぼ同じ組成パターンで、土坑外試料No.3のみがややパターンが異なることがわかった。高級飽和脂肪酸はすべての試料中でさほど多くはなく、その中では土坑外試料にやや多めであることもわかった。

#### 4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第177図に示す。残存脂肪から15~20種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールはすべての試料中に約10~11%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、コレステロール含有量はすべての試料中で通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりもやや多めであった。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約7~15%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量はすべての試料中でかなり少なめで、特に試料No.3で少なかった。

クリ、クルミなどの堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンペステロールが約5~7%、スチグマステロールが約3~9%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中のカンペステロール、スチグマステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであったが、その中では試料No.3での含有量が最も少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約1~2%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはエルゴステロールは数%分布している。従って、この程度の量は単に土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1に約4%。No.2とNo.3に約1~2%分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、1~2%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存し

ている脂肪の持ち主の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある<sup>(6)</sup>。従って、今回のコプロスタノール含有量は試料No.1でわずかに多めで、No.2とNo.3では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>(7)</sup>、土器・石器・石製品で0.8～23.5である<sup>(8,9)</sup>。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を第31表に示す。表からわかるように、分布比はすべての試料が0.6以上であった。このことはすべての試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。

以上、今町遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールがすべての試料にやや多め、哺乳動物由来のコプロスタノールが土坑内試料No.1にわずかに多めである他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料が0.6以上を示し、すべての試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性があることがわかった。ステロール分析の結果を考え合わせても、脂肪酸分析で多く含まれていた高級飽和脂肪酸が動物、植物のいずれに由来するか推測できなかった。

## 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ愛知県内の遺跡で、土壌に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬した場合の脂肪と類似していると判定した川地遺跡<sup>(10)</sup>、水入遺跡<sup>(11)</sup>、6世紀末～7世紀初めのものと推定されている円墳の周溝や土坑、中世のものと推定されている土坑、13世紀半ば～後半のものと推定されている土坑に残存する脂肪は、それぞれヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似していると判定した門間沼遺跡<sup>(12)</sup>、土坑に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料、ニホンジカ、イノシシのような動物試料の脂肪と類似していると判定した八王子遺跡(一宮市)、土坑に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料中の脂肪、すなわち高等動物の体脂肪や骨油に類似していると判定した権現山遺跡<sup>(14)</sup>、判定が困難ではあったが、脂肪酸やステロールのわずかな違いから大半の墓壙には微量ながら動物遺体または動物由来の脂肪が残存していたと推測した川原遺跡<sup>(15)</sup>、同じ川原遺跡で異なる時期に分析し脂肪酸とステロールのわずかな特徴から動物由来の脂肪が微量に残存している可能性も考えられるが、性格判定は困難であったもの<sup>(16)</sup>、出土土壌から人骨が検出されその土坑内に埋葬されたヒトの性格や血液型の判定を試みた堀内貝塚<sup>(17)</sup>、出土土壌を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡<sup>(18)</sup>、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡<sup>(19)</sup>、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺菰遺跡<sup>(20)</sup>、ヒトの体脂肪、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生動物試料の脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第178図である。

図からわかるように、今町遺跡の試料No.1とNo.2は相関行列距離0.05以内でA群を形成し、非常によく類似していた。今町遺跡の試料No.3は堀内貝塚、川地遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内で

B群を形成し、非常によく類似していた。他の対照試料はC～H群を形成した。これらの群のうちA～D群は相関行列距離0.1以内の所にあり、互いによく類似していた。

以上、今町遺跡の土坑内試料No.1とNo.2は非常によく類似しており、これらの試料は土坑外試料No.3ともよく類似していることがわかった。また、これらすべての試料中に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料の脂肪と類似していることがわかった。

## 6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などに由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植土、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を第179図に示す。図からわかるように、試料No.1とNo.2は第2象限の原点に近い所でA群、No.3は同じ第2象限の原点からやや離れた所でB群を形成した。これらの分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、今町遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は、高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

## 7. 総括

今町遺跡から出土した土坑00B区SK1393の性格を判定するために、土坑内外土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、土坑に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料の脂肪と類似していることがわかった。今回の土坑内試料は土坑の底部から採られたことは判っているが、それ以上の詳細は不明であった。哺乳動物由来のコプロスタノール含有量のわずかな差が有意な数値であるとすれば、そのことから遺体の配置状況も推測できたかもしれない。また、土坑の内外で脂肪酸やステロールの組成に著しい差がなく、コレステロールとシトステロールの分布比は土坑外試料の方がむしろ高かったが、これは土坑外試料採取地点が土坑底面直下であるため、土坑の底面確認面の下の一部にも遺体の脂肪が滲み出したのかもしれない。

## 参考文献

- (1) R.C.A.Rottländer and H. Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10 卷, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292 卷, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, 『Naturewissenschaften』, 70 卷, 1983, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残留脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第 10 卷(6), 1984, pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer : 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem』, 358 卷, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法はなにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 眞編, クバプロ, 1995, pp148.
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教博, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第 26 卷, 1984, pp40.
- (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残留する動物油脂」, 『真脇遺跡』, 石川県鳳至郡能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- (9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書第 3 集, 北海道文化財研究所, 1987, pp191.
- (10) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏 : 「川地遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 愛知県埋蔵文化財センター.
- (11) 中野益男, 中野寛子, 清水 了, 門 利恵, 星山賢一 : 「水入遺跡から出土した土抗に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 愛知県埋蔵文化財センター.
- (12) 鬼頭 剛 : 「門間沼遺跡における脂肪酸分析」, 『門間沼遺跡』, 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 80 集, 愛知県埋蔵文化財センター, 1999, pp185.
- (13) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏 : 「八王子遺跡から出土した遺物・遺構に残存する脂肪の分析」, 『八王子遺跡報告編』, 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 92 集, 愛知県埋蔵文化財センター, 2001, pp187.
- (14) 中野益男, 中野寛子, 門 利恵, 長田正宏 : 「権現山遺跡から出土した土抗に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 愛知県埋蔵文化財センター.
- (15) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏 : 「川原遺跡から出土した墓壙に残存する脂肪の分析」, 『川原遺跡 第三分冊』, 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 91 集, 愛知県埋蔵文化財センター, 2001, pp33.
- (16) 中野益男, 中野寛子, 清水 了, 門 利恵, 長田正宏 : 「川原遺跡から出土した方形周溝墓に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 愛知県埋蔵文化財センター.
- (17) 中野益男, 中野寛子, 清水 了, 門 利恵, 星山賢一 : 「堀内貝塚から出土した遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 愛知県安城市埋蔵文化財研究会.
- (18) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏 : 「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.

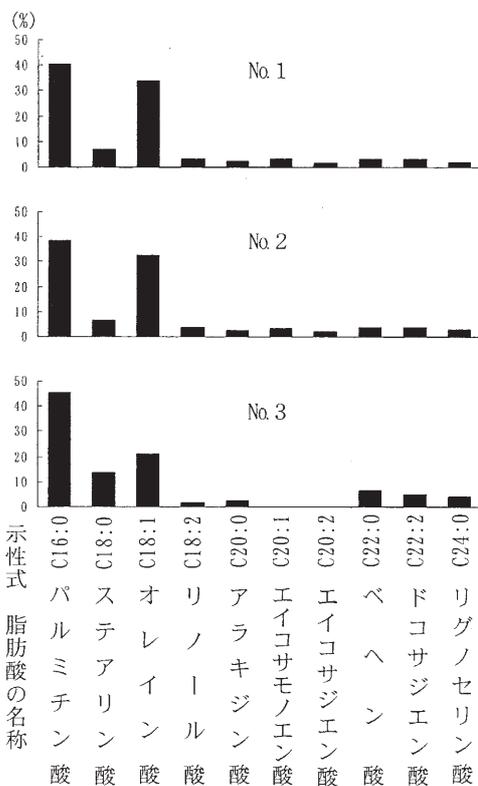
- (19) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏:「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」,『原川遺跡 I』, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第17集, (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- (20) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏:「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」,『摺萩遺跡』, 宮城県文化財調査報告書第132集, 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課, 1990, pp929.

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土坑底部	509.6	10.9	0.0021
2	"	575.3	10.2	0.0018
3	土坑底面直下	437.8	5.1	0.0015

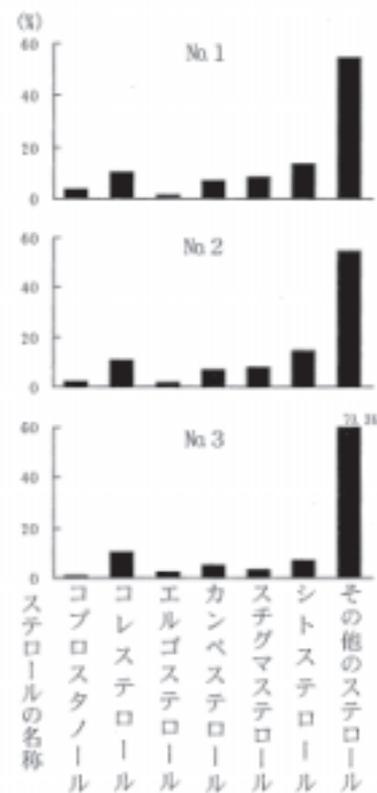
第30表 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	コプロスタノール(%)	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/ シトステロール
1	3.83	10.32	13.86	0.74
2	2.33	11.03	14.61	0.76
3	0.85	10.53	7.30	1.44

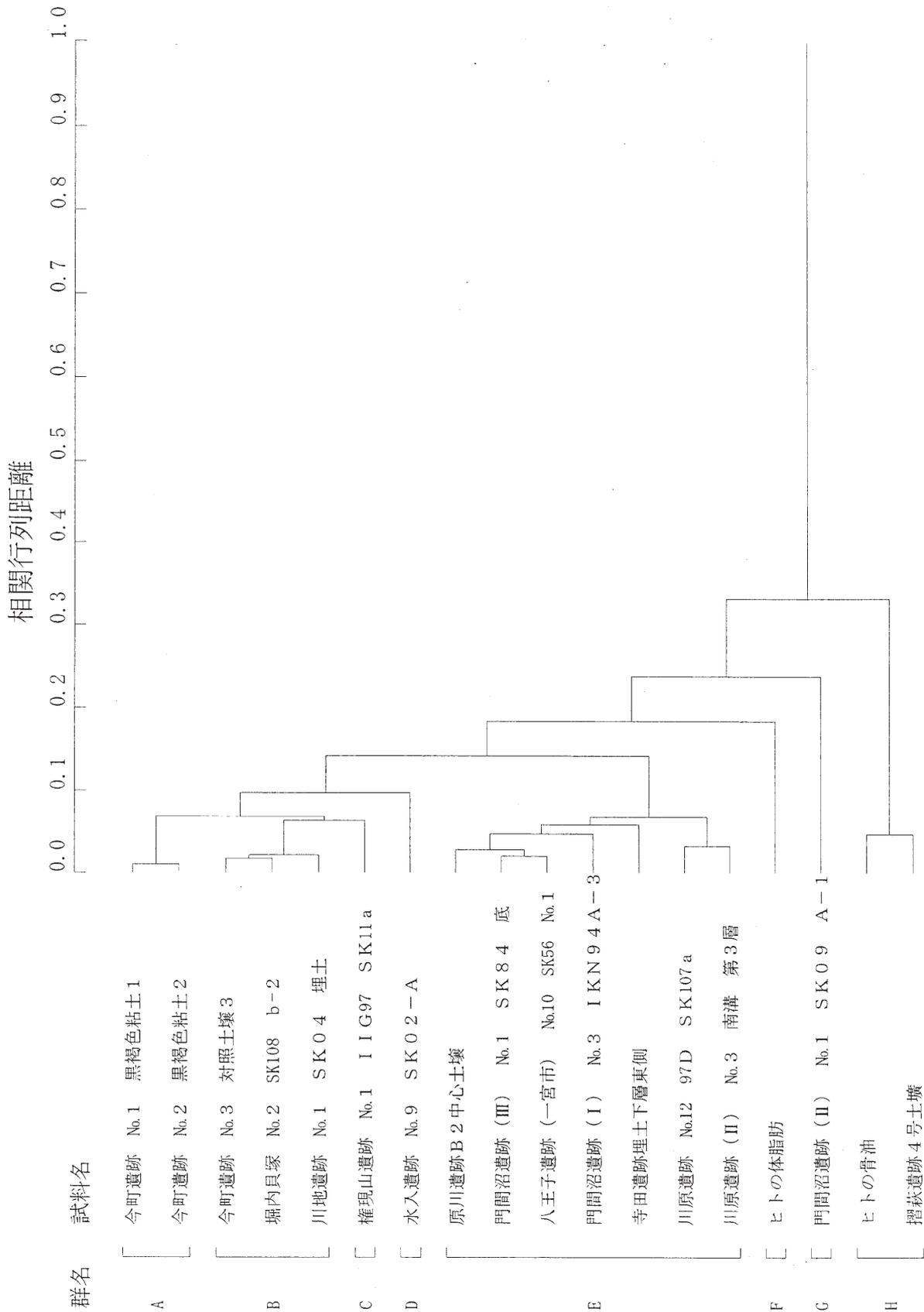
第31表 試料中に分布するステロールの割合



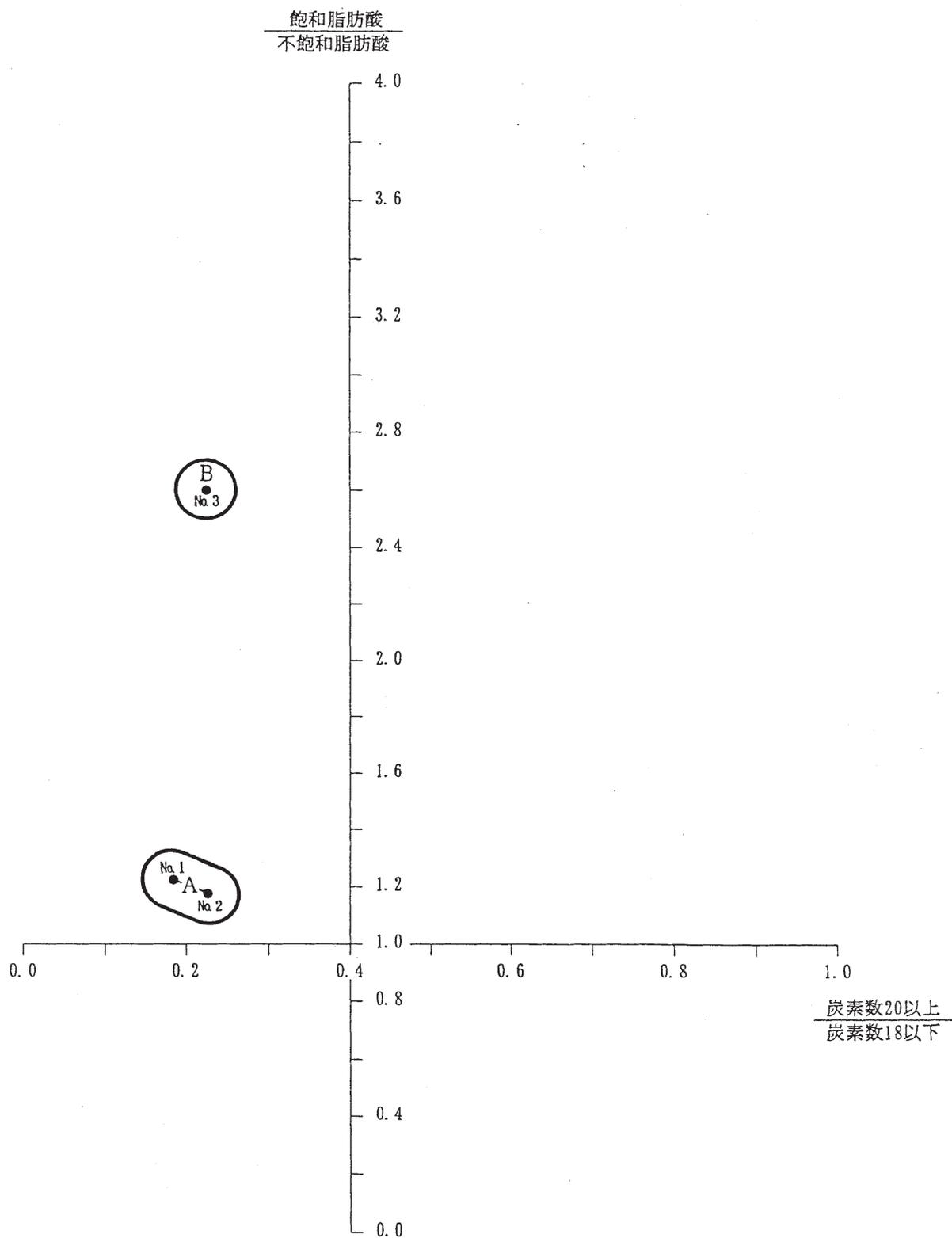
第176図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第177図 試料中に残存する脂肪のステロール組成



第178図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第 179 図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

## 第V章 まとめ



調査区周辺（空撮写真）

## まとめ

以上、今町遺跡8,400㎡における発掘調査によって得られた成果を、項目毎に分けて事実関係をできるだけ限り報告してきた。本遺跡において縄文時代、古代、中世、戦国時代から江戸時代前期、江戸時代後期と5つの時代の遺構と遺物が確認されてきた。最後に、時期毎に見ることでまとめにかえたい。

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構として、明確になっているのは98 B S B 0001の竪穴住居1棟と98 E S K 0187の土坑1基のみである。竪穴住居からは縄文時代晩期中葉の台付鉢、土坑からは中期中葉から後葉の台付深鉢が出土している。豊田市内では草創期に属する酒呑ジュリナ遺跡が有名であるが、本遺跡の南西に位置する水入遺跡で、草創期～早期前半の焼土坑群、中期後半の竪穴住居、晩期の土器棺墓などが確認されており、周辺にも大明神A遺跡・西糟目遺跡・北田遺跡（共に消失）が見られ、今町付近にまで人々が生活していたことが確認された。

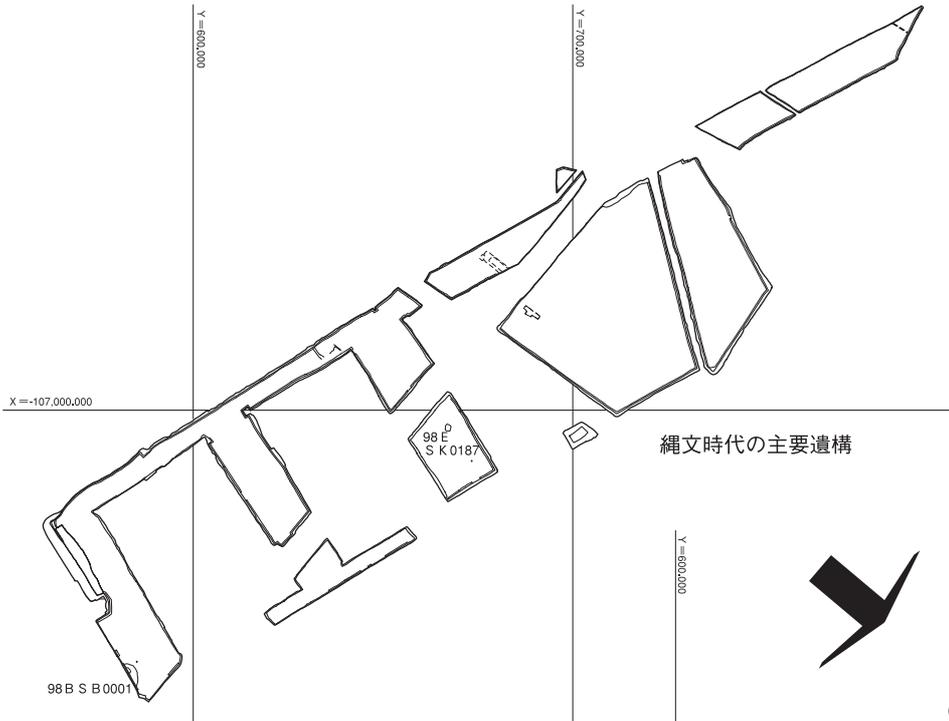
土器以外に、石器類が検出段階や後世の遺構埋土中から出土している。コアやフレイクが多く時期は特定できないが、一部に後期旧石器時代と思われるものも見受けられる。水入遺跡では、後期旧石器時代のナイフ型石器が出土しており、本遺跡との関係が注目される。

### 2. 古代（飛鳥時代から奈良時代）

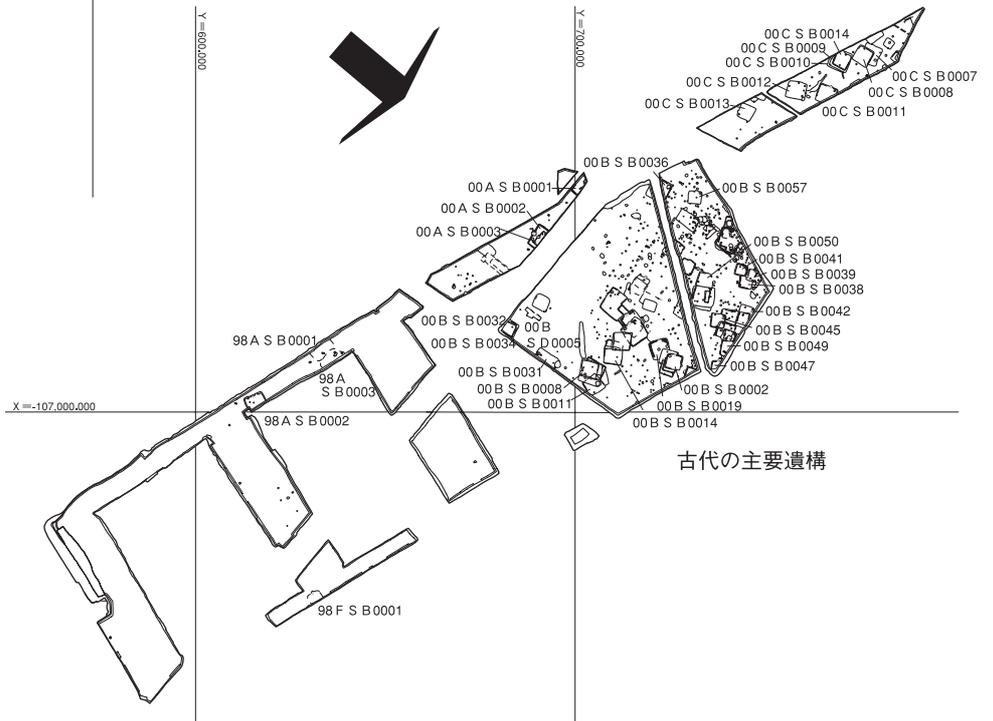
矢作川流域には、梅坪遺跡、高橋遺跡、水入遺跡、郷上遺跡、神明遺跡など多くの古代集落遺跡が知られ、中には拠点となるような大規模な集落を見ることができる。その多くは中位段丘あるいは低位段丘の端部に立地しており、本遺跡も同様の立地条件にある。遺跡が所在する今町付近は、三河国賀茂郡信茂郷とも碧海郡采女郷ともいわれ、どちらに属する集落であったかは明らかになっていない。

古代の遺構としては、竪穴住居が住居と思われるものを含めると調査区全体で97軒が検出されている。住居の時期は、出土遺物などから飛鳥時代後半から奈良時代までと思われるが、小片が多く正確な時期を決定できる住居は少なかった。住居の規模は一辺が5～7m程の隅丸方形を呈し、多くの住居で周溝が確認され、一部の住居で貯蔵穴やカマド痕などが検出されている。短い期間の中で何回かの建て替えが行われていたと思われる。残念ながらどの住居が同時期に存在していたかという細かな検証を行っていないため、詳しいことはわかっていない。また、古代に属する掘立柱建物については存在していた可能性はあるが確認できていない。

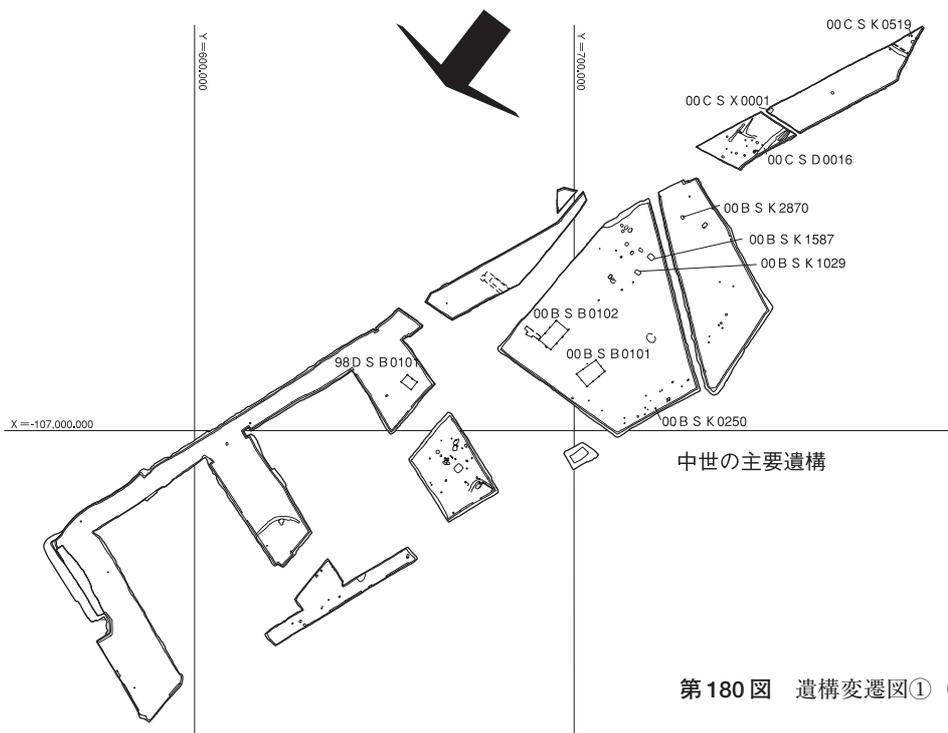
須恵器・土師器以外に、製塩土器や土錘が出土している。特に生活に必要な塩は、矢作川河口の三河湾で生産されて内陸部に運ばれていたことは、矢作川上流に位置する梅坪遺跡で大量の製塩土器が出土していることから明らかで、それを裏付ける一資料となろう。塩と同時にその他の物資をも輸送していたであろうことは簡単に想像でき、当時の人々の川運における活発な活動を見ることができよう。土錘は漁に利用された網の土製の錘で、生活に河川との関係が深かったことを示している。これら以外に灰釉陶器片が少量確認されているが、明確な遺構は検出されていない。



縄文時代の主要遺構



古代の主要遺構



中世の主要遺構

第 180 図 遺構変遷図① (1:2000)

### 3. 中世（鎌倉時代）

この頃、本遺跡周辺は「衣」と呼ばれ、高橋荘に属し中条氏の支配下にあったようである。中世の遺構については、掘立柱建物や土坑墓、溝などが確認されている。しかし、掘立柱建物については詳細は不明で、屋敷地を区画する溝も明確には確認されていない。土坑墓については、00 C S X 0001は屋敷墓の可能性が高いとの指摘を受けてはいるが、<sup>(1)</sup>その他は出土遺物がほとんどなく、居住域と墓域が区別されていた可能性が考えられる程度で、不明な点が多い。

### 4. 戦国時代から江戸時代前期

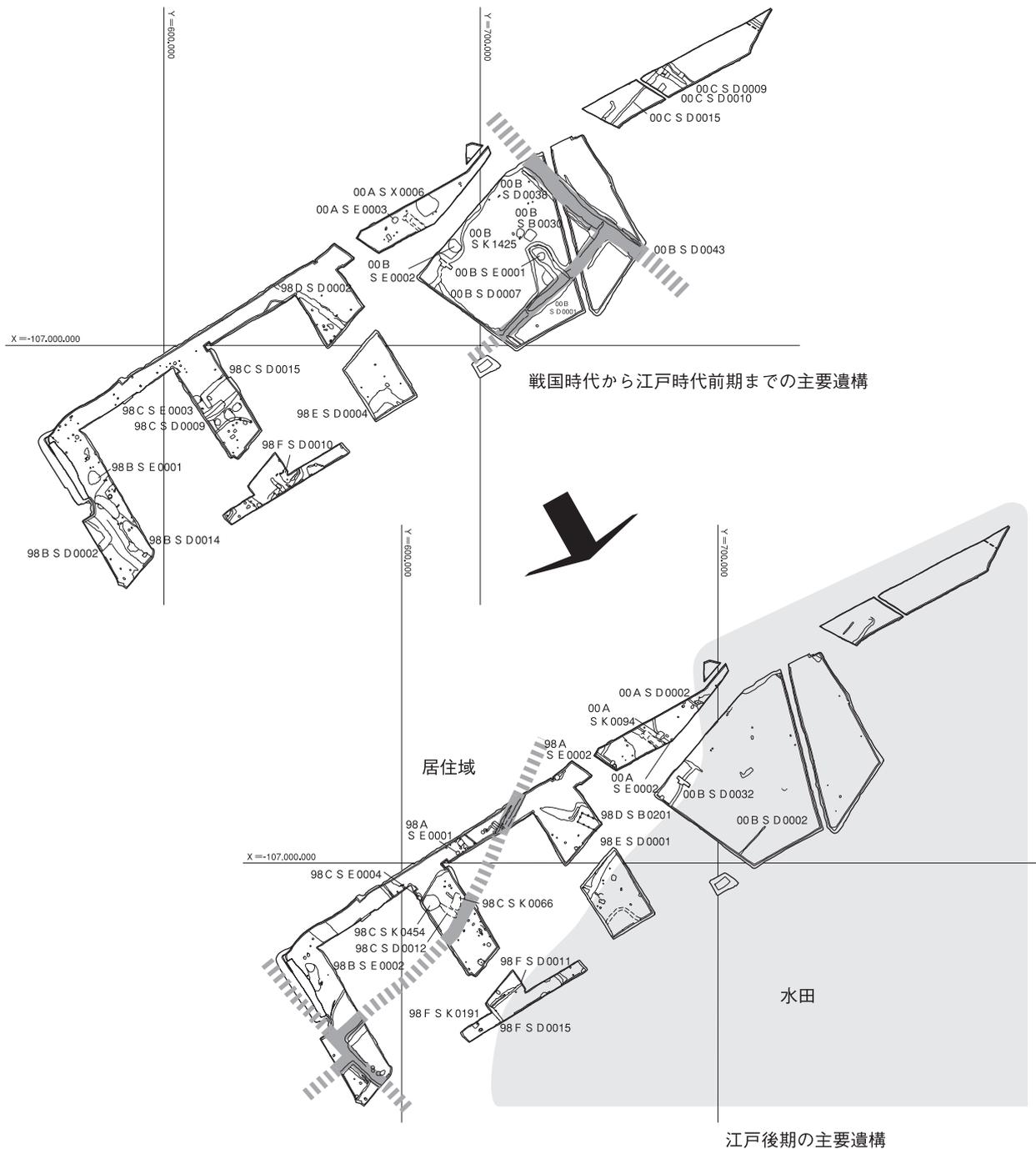
この時期に該当する遺構は、竪穴状遺構・溝・井戸・土坑などがあげられる。溝については、屋敷地を区画する溝と考えられ、特に98 B S D 0002・S D 0014、98 C S D 0002、98 E S D 0004、98 F S D 0010は幅3 m前後の溝で、堀とも想定される。また、98 C S D 0009と98 C S D 0015は、その位置関係から「柵形」を形成していたとも考えられる。<sup>(2)</sup>00 B S D 0001・S D 0003・S D 0037・S D 0038・S D 0043・S D 0044・S D 0049・S D 0050などの溝では、溝が対をなして平行になっており、溝と溝の間に当該期の遺構が検出されていないところから、その空間が道路として利用されていたのではないかと考えている。この道路は、00 B b 区の東側でT字状に交差している。全体的に見てみると、1辺が50 m前後の規模を持つ屋敷地の存在が想定され、その中に建物や井戸などが検出されている。建物については、竪穴状建物が確認されているのみであるが、根石や柱痕の残存する柱穴が確認されていることから、複数の掘立柱建物の存在が考えられる。

「柵形」を有する防御を意識した構造を持つ堀と思われる溝が検出されていることや、調査地点及び周囲に「元屋敷」、「北垣内」、「前田」という城館に関連すると考えられる地名が存在することなどから、城館跡であった可能性が考えられる。<sup>(3)</sup>また、調査区付近に所在する天文12（1543）年に創建された常行院との関係が注目される場所である。

### 5. 江戸時代後期

江戸時代になると、この地域の地名である「衣」が「拳母」と改められ、根川六か村（金谷・下林・下市場・長興寺・今・山室）の今村として拳母藩領に属していた。18世紀前半までは戦国時代と同様の様相を呈していたと思われるが、18世紀中期以降、洪水などの被害により大規模な土木事業（整地）が行われたようで、これによってこの地域の様相が大きく変わったものと思われる。本遺跡の南西に位置する郷上遺跡では、18世紀代に頻発する洪水を避けて現在の台地上の鴛鴨集落に移動していることが確認されており、<sup>(4)</sup>時期的にも符合しているように思われる。江戸時代後期の遺構としては、掘立柱建物・溝・井戸・道路状遺構・土坑などである。溝は、居住域と水田を区画する溝や、用排水用の溝と思われ、多くは石組みの溝として検出されている。道路は大きく2状が検出されており、98 B S F 0001・98 C S F 0001・98 A S F 0001と98 B S F 0002で、98 B 区の西側でT字状に交差している。この道路の両側に屋敷地が展開していたと思われる。掘立柱建物は1棟検出されたのみであるが、根石や柱痕の残存する柱穴が見られることからその存在が想定される。第72図で示した「今村絵図」で見られるように、屋敷地と水田の広がる長閑な農村の風景が想像される。

これらの遺構以外に、出土した遺物はその大半が戦国時代以降の土器・陶磁器類で占められている。個々の遺物に関する記述を省略し、用途による分類、口縁残存率・口縁破片数・総破片数を求め、遺構毎にその用途や材質による組成の変化を明らかにしようとした。しかし、良好な一括資料に恵まれなかったこともあり、それぞれの組成などの相違を明確にしたとは言い切れない。また、それらを十分に比較・検討することができず、単なるデータの紹介に終始し、出土遺物の絶対量の変化についてまで言及することができなかったこと、用途や材質組成の相違、地域差、身分・階級による遺物組成の相違を明らかとすることなど、すべてが不十分のまま終わっている。これからの研究課題としておきたい。



第181図 遺構変遷図② (1:2,000)

さらに、戦国時代以降の土器・陶磁器類の用途組成の整理に力点をおきすぎたため、それ以外の遺物がほとんど検討されることなくなおざりにされた感がある。すべての出土遺物の総合的な分析により、初めて当時の人々の生活の実態に迫ることができるものと思われる。これは単に編者の力量不足に他ならず、記して謝罪しておきたい。

最後になりましたが、多くの方々のご協力を得て本書を編集することができました。発掘調査に参加していただいた発掘調査補助員・発掘作業員のみなさん、整理作業に参加していただいた調査研究補助員・整理補助員・整理作業員のみなさん、実地において指導をいただいた方々に、心より感謝申し上げます。  
(小嶋廣也)

## 註

- (1) 瀬戸市埋蔵文化財センターの岡本直久氏よりご教示いただいた。
- (2) 鈴木正貴 「今町遺跡」 『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成10年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1999
- (3) (2)と同じ
- (4) 酒井俊彦 「郷上遺跡」 『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成9年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1998

## 参考文献

- 『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成9年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1998
- 『財団法人愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成10年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1999
- 『平成11年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』 (財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2000
- 『豊田市史 1 自然・原始・古代・中世』 豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会 1976
- 『豊田市史 2 近世』 豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会 1981
- 『矢作川流域資料調査報告書 - 矢作川の自然と文化をテーマとした博物館構想資料-』 矢作川流域資料調査会 1993
- 『特別展 発掘された東海の古代 - 律令制下の国々-』 名古屋市博物館 1994 平成5年度特別展図録
- 『企画展 古代集落遺跡を掘る - 西三河のムラと都-』 安城市歴史博物館 1995 平成7年度企画展図録
- 『特別展 集落遺跡の語る古代矢作川流域』 豊田市教育委員会 2000 平成11年度特別展図録

---

# 図 版

---



ある日の調査区（北から）

# 図版目次

図版 1	遺構配置図 (1)
図版 2	遺構配置図 (2)
図版 3	遺構配置図 (3)
図版 4	遺構配置図 (4)
図版 5	遺構配置図 (5)
図版 6	遺構配置図 (6)
図版 7	遺構配置図 (7)
図版 8	遺構配置図 (8)
図版 9	遺構配置図 (9)
図版 10	遺構配置図 (10)
図版 11	遺構配置図 (11)
図版 12	遺構配置図 (12)
図版 13	遺構配置図 (13)
図版 14	遺構写真 (1) 98年度調査区全景 (空撮写真)
図版 15	遺構写真 (2) 00年度調査区全景 (空撮写真)
図版 16	遺構写真 (3) 縄文時代の遺構・古代の遺構 (1)
図版 17	遺構写真 (4) 古代の遺構 (2)
図版 18	遺構写真 (5) 古代の遺構 (3)・中世の遺構
図版 19	遺構写真 (6) 戦国時代から江戸時代前期までの遺構 (1)
図版 20	遺構写真 (7) 戦国時代から江戸時代前期までの遺構 (2)・江戸時代後期の遺構 (1)
図版 21	遺構写真 (8) 江戸時代後期の遺構 (2)
図版 22	遺物写真 (1) 縄文時代の遺物・古代の遺物 (1)
図版 23	遺物写真 (2) 古代の遺物 (2)
図版 24	遺物写真 (3) 古代の遺物 (3)・中世の遺物
図版 25	遺物写真 (4) 戦国時代から江戸時代前期までの遺物 (1)
図版 26	遺物写真 (5) 戦国時代から江戸時代前期までの遺物 (2)
図版 27	遺物写真 (6) 江戸時代後期の遺物 (1)
図版 28	遺物写真 (7) 江戸時代後期の遺物 (2)
図版 29	遺物写真 (8) 江戸時代後期の遺物 (3)
図版 30	遺物写真 (9) 瓦類・木製品・金属製品・石製品・その他の用途の遺物

## 凡例

### 1. 遺構番号

S B：堅穴住居・掘立柱建物 S D：溝 S E：井戸 S F：道路状遺構 S K：土坑 S X：その他  
ただし、今回の調査においては、柱穴と判断できても Pit ではなく S K 番号を付けている。また、遺構配置図においては、S K は 4 桁の数字のみで表記している。

### 2. 縮率

遺構配置図 1:200

遺構図版分割図 1:2,500

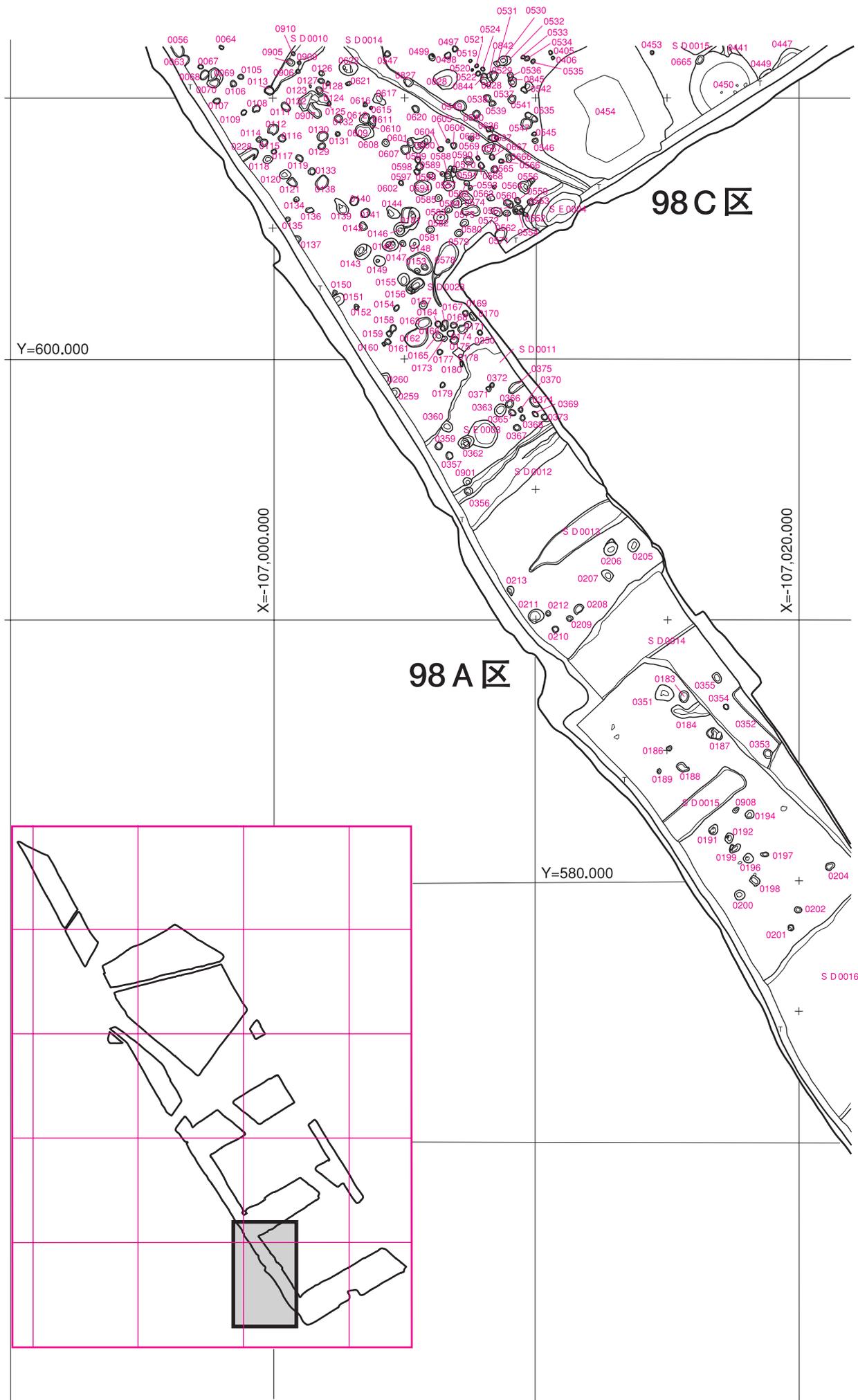
遺物 基本的には 1:4 であるが、一部に原寸・1:2・1:6 がある。

遺物の番号については、須恵器・陶磁器類・瓦類などは挿図中の番号と同一であるが、木製品・金属製品・石製品 (石器類を含む) については、挿図中の番号の前に W・M・S を付けて表示してある。また、少数ではあるが図版掲載以外の遺物については、写真図版に掲載し、遺物番号は各々の挿図番号の末番号からの通し番号扱いにしている。

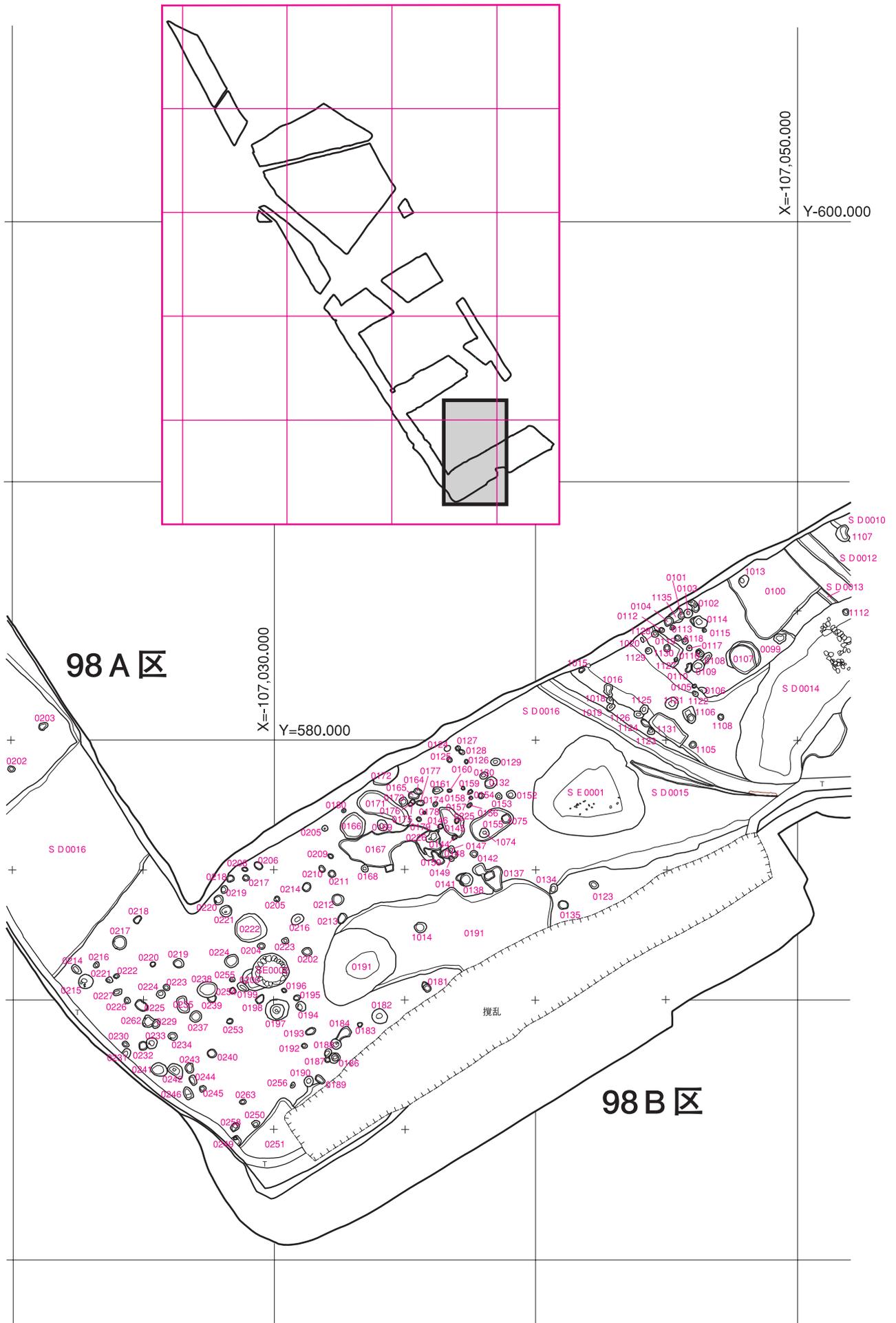
### 3. 付表 (遺構一覧・遺物一覧)

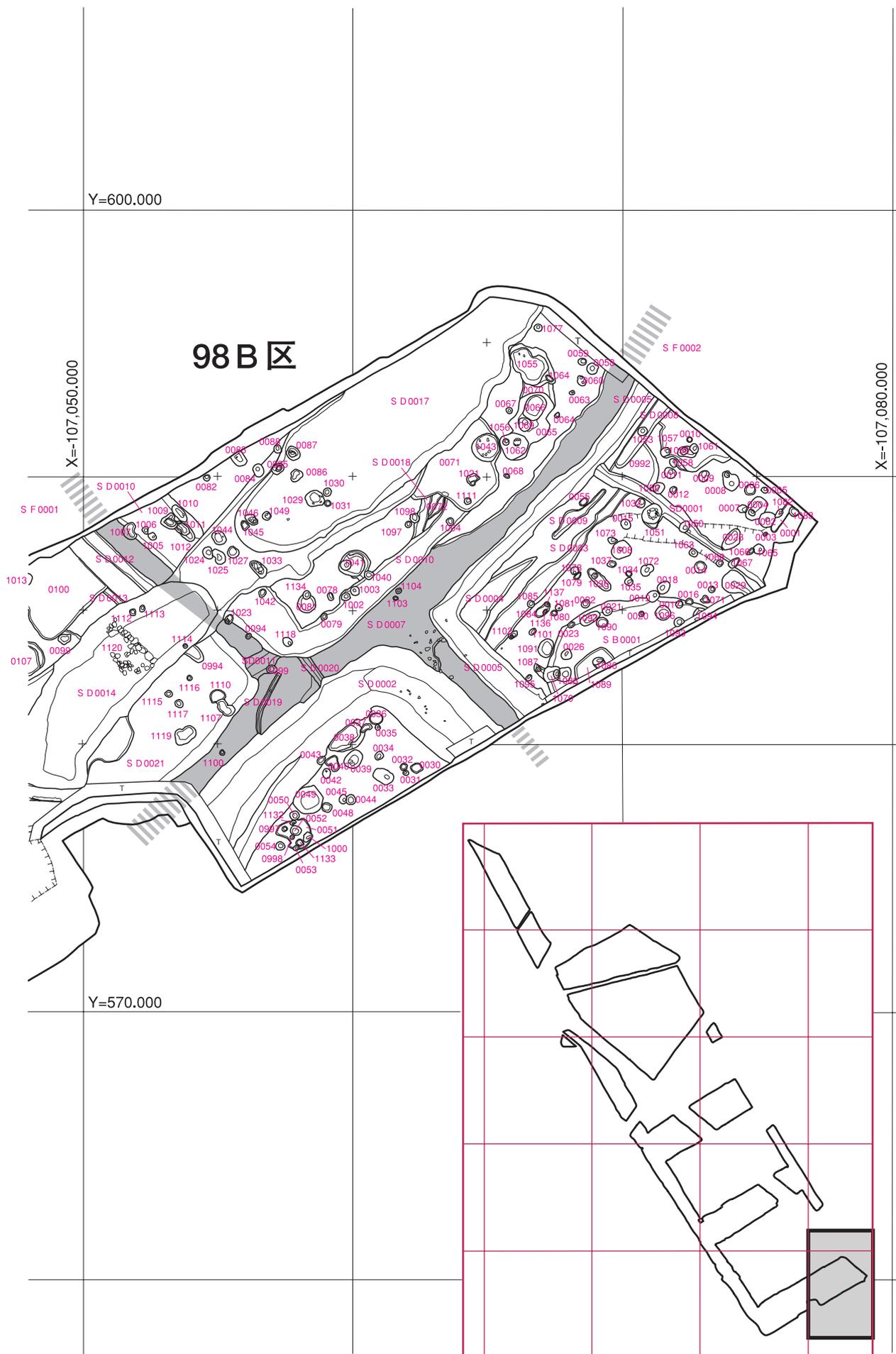
本書の中には掲載していない。付属の CD-ROM の中に収録してあるのでそちらを参考にさせていただきたい。

ただし、一覧表中の法量について、数値の前に記された「残」は残存した部分のみの計測値を示し、「推」は復元推定値を示している。なお、遺構一覧の規模については、遺構図から計測した数値であり、実際の数値ではないことを付け加えておく。

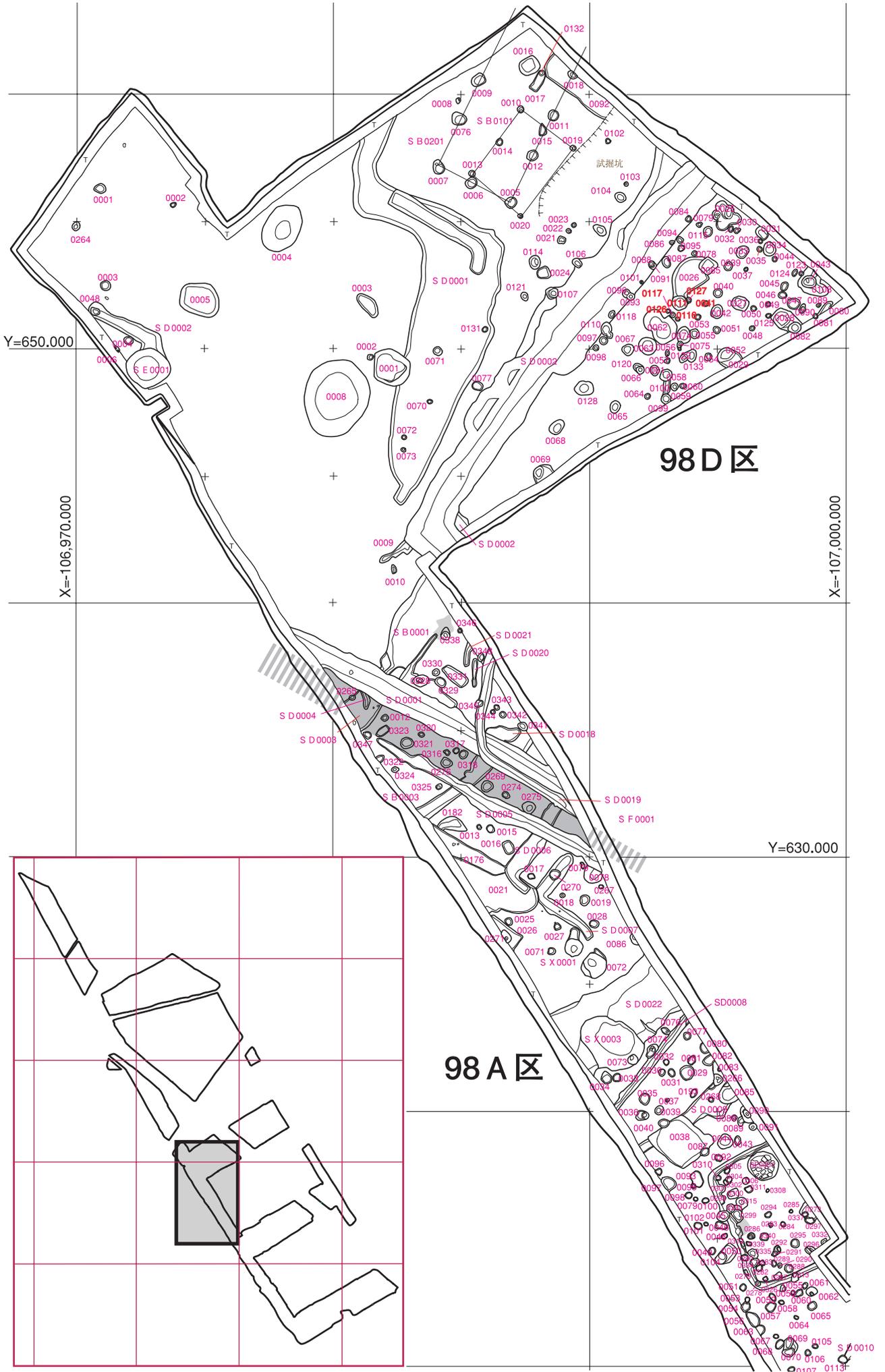


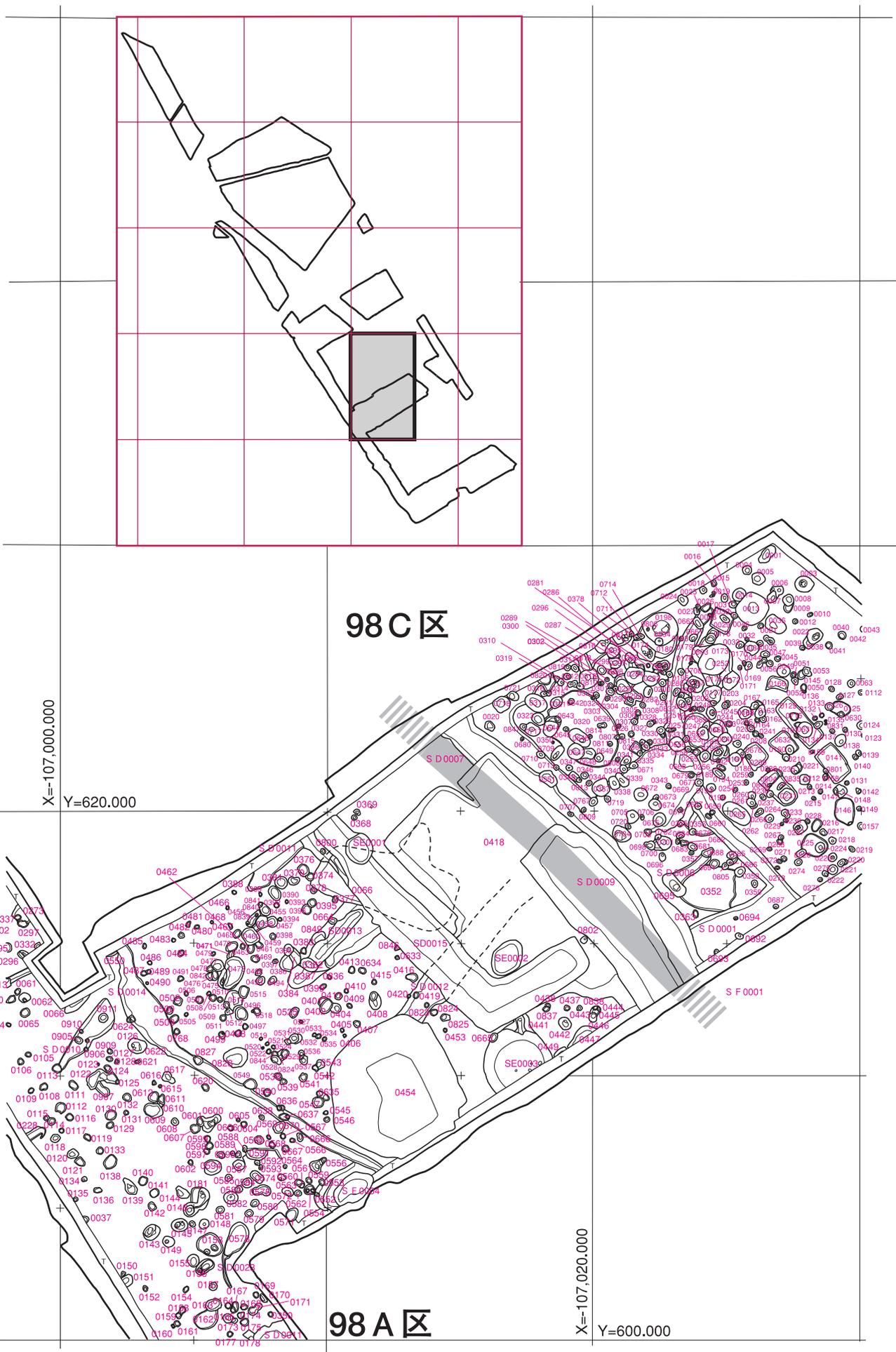
図版 2 遺構配置図 (2)



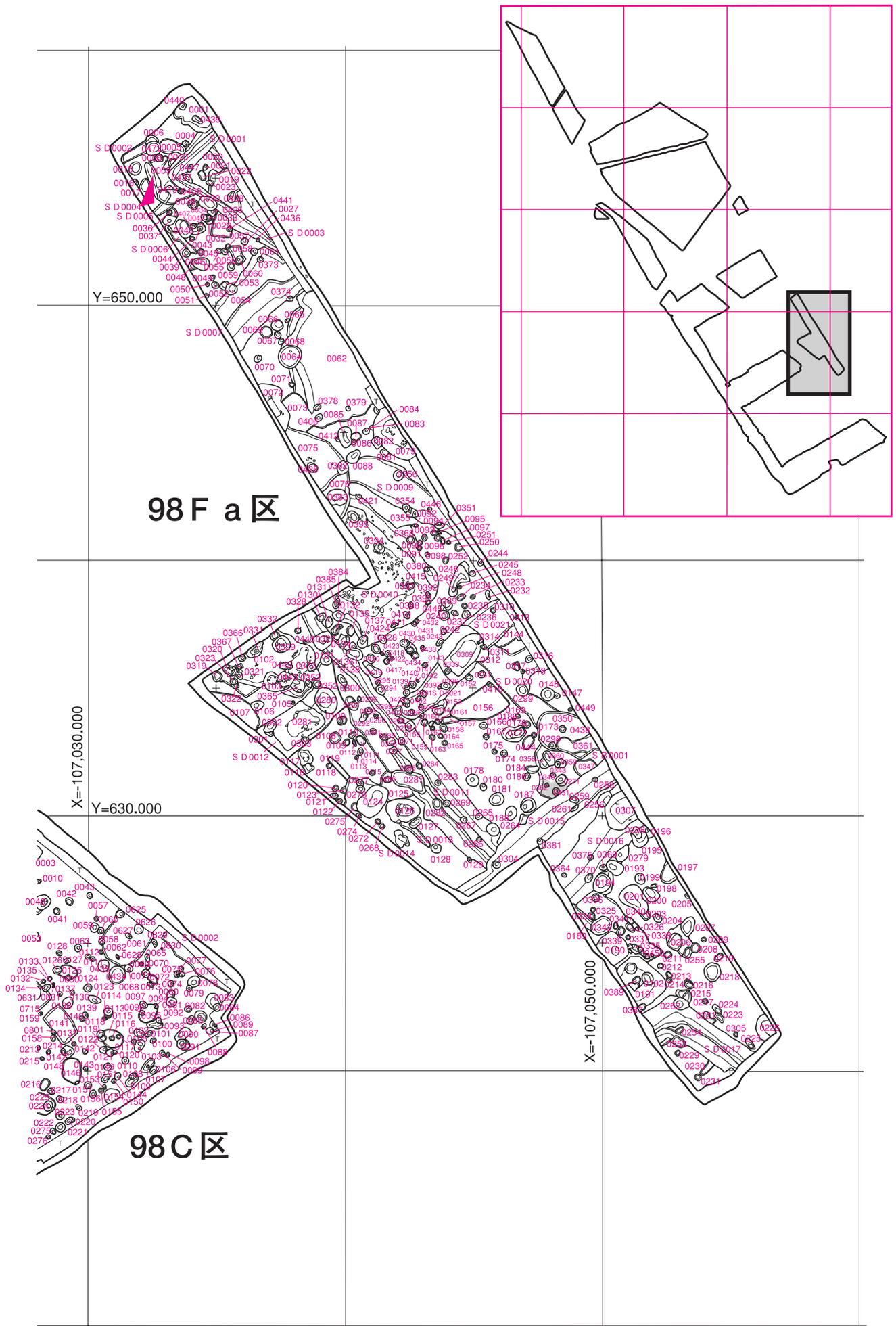


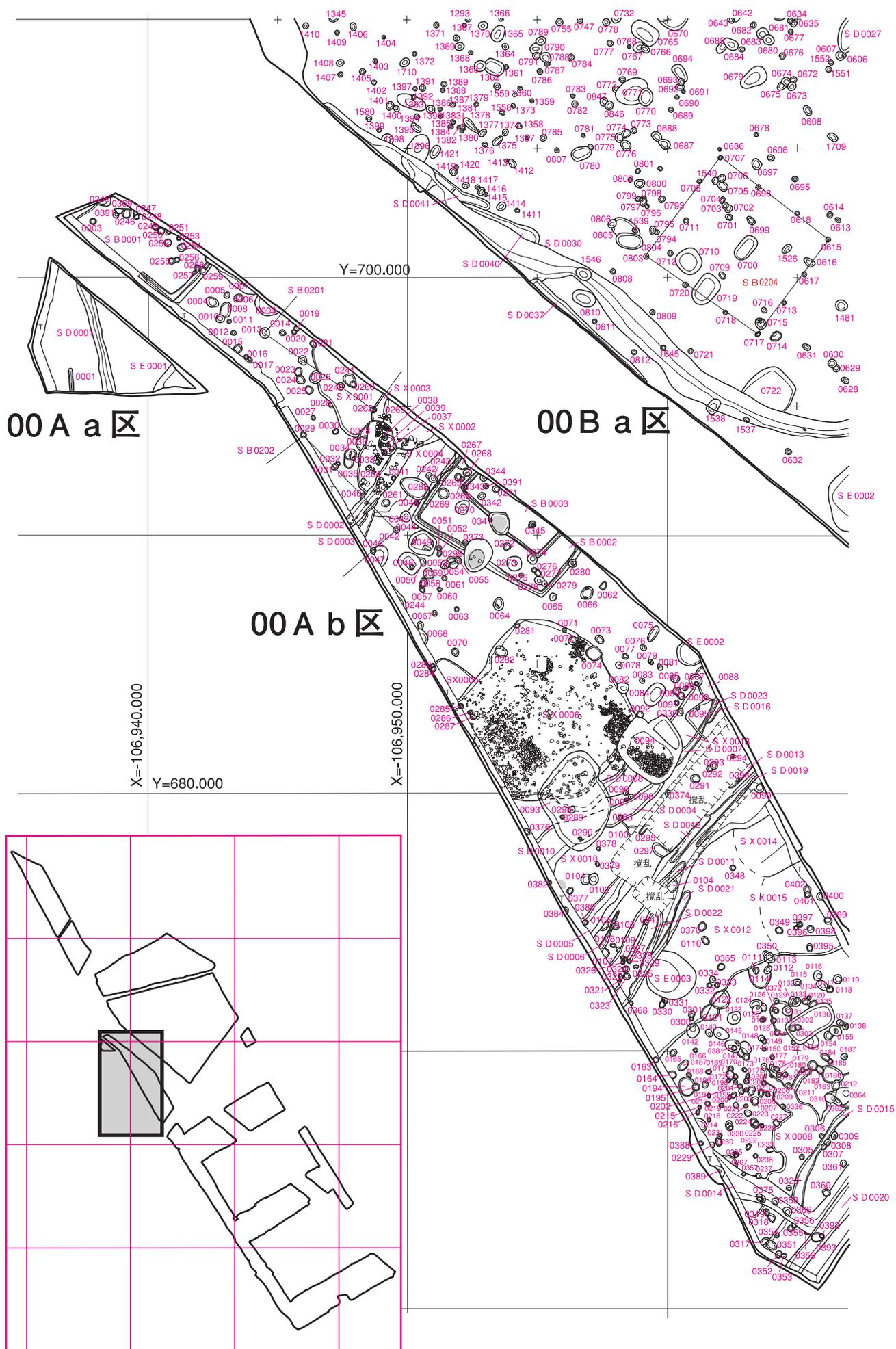
図版 4 遺構配置図 (4)



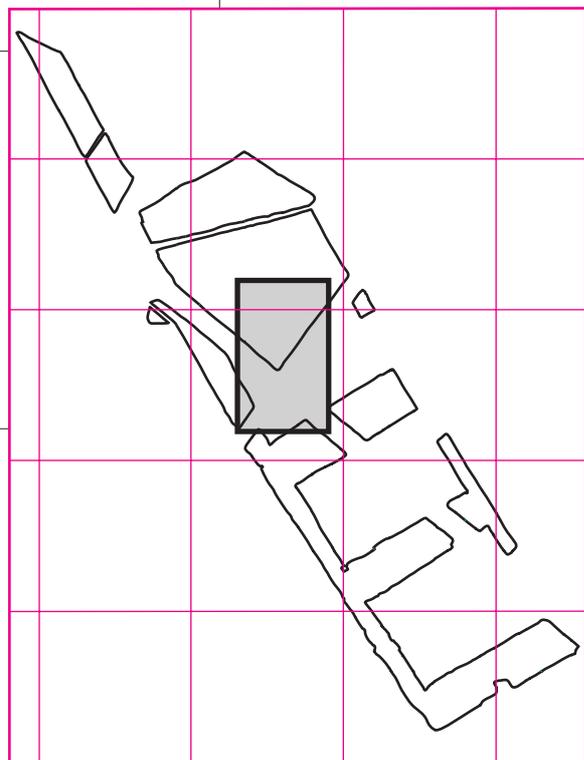
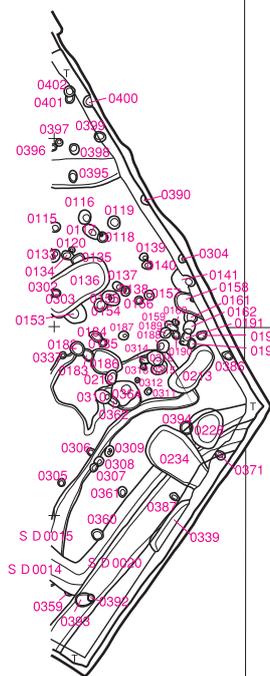
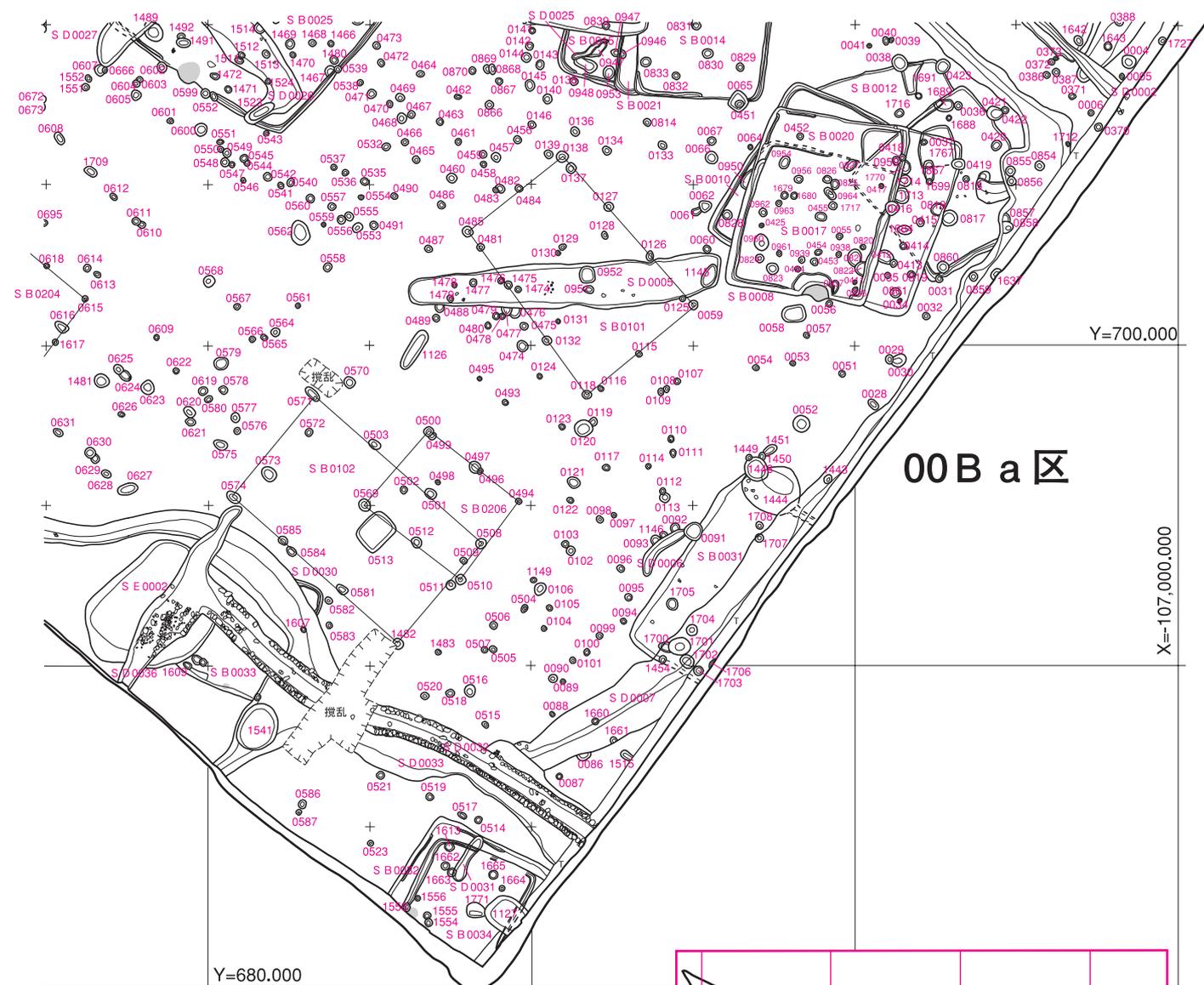


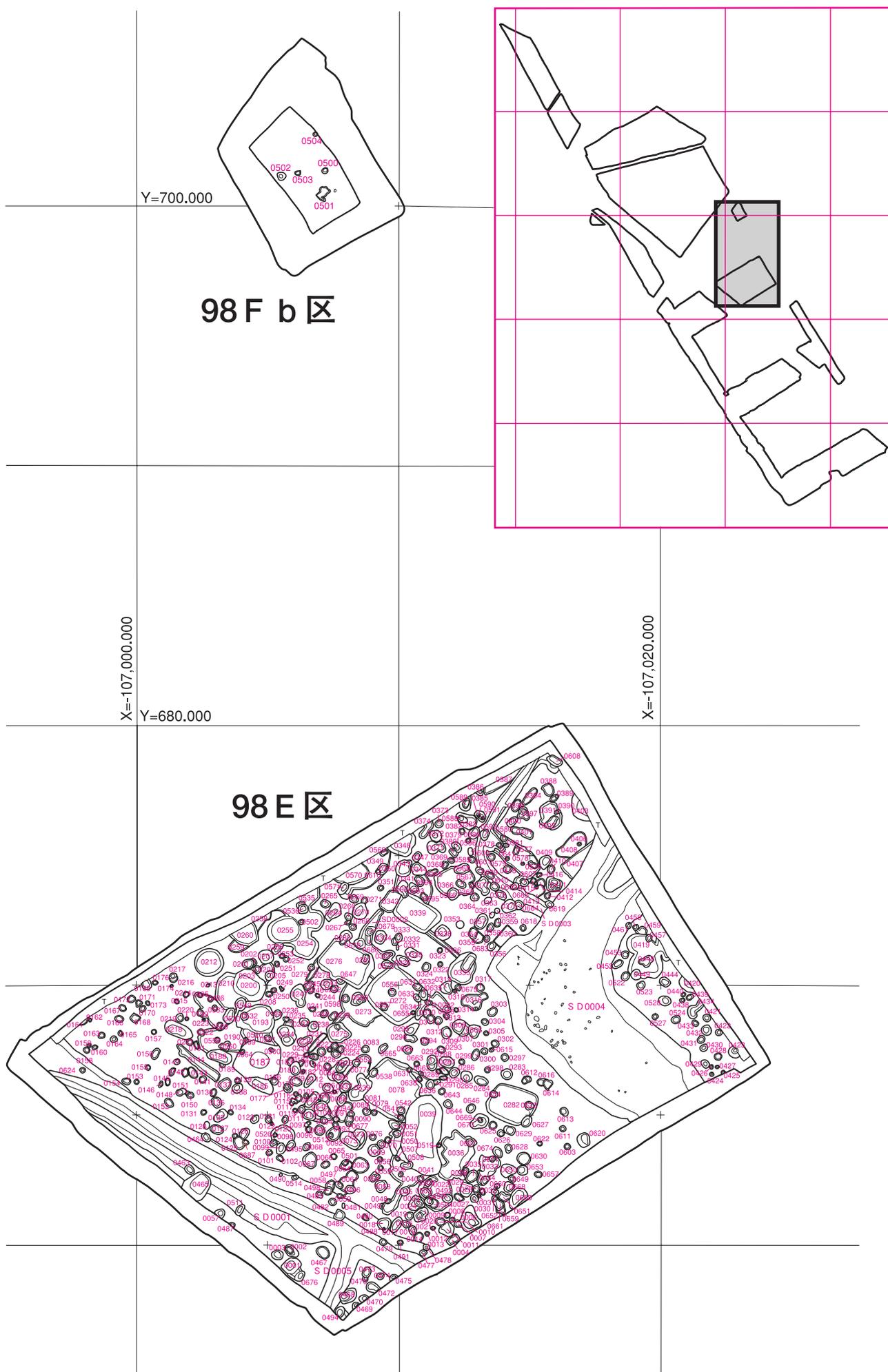
图版 6  
遺構配置図 (6)





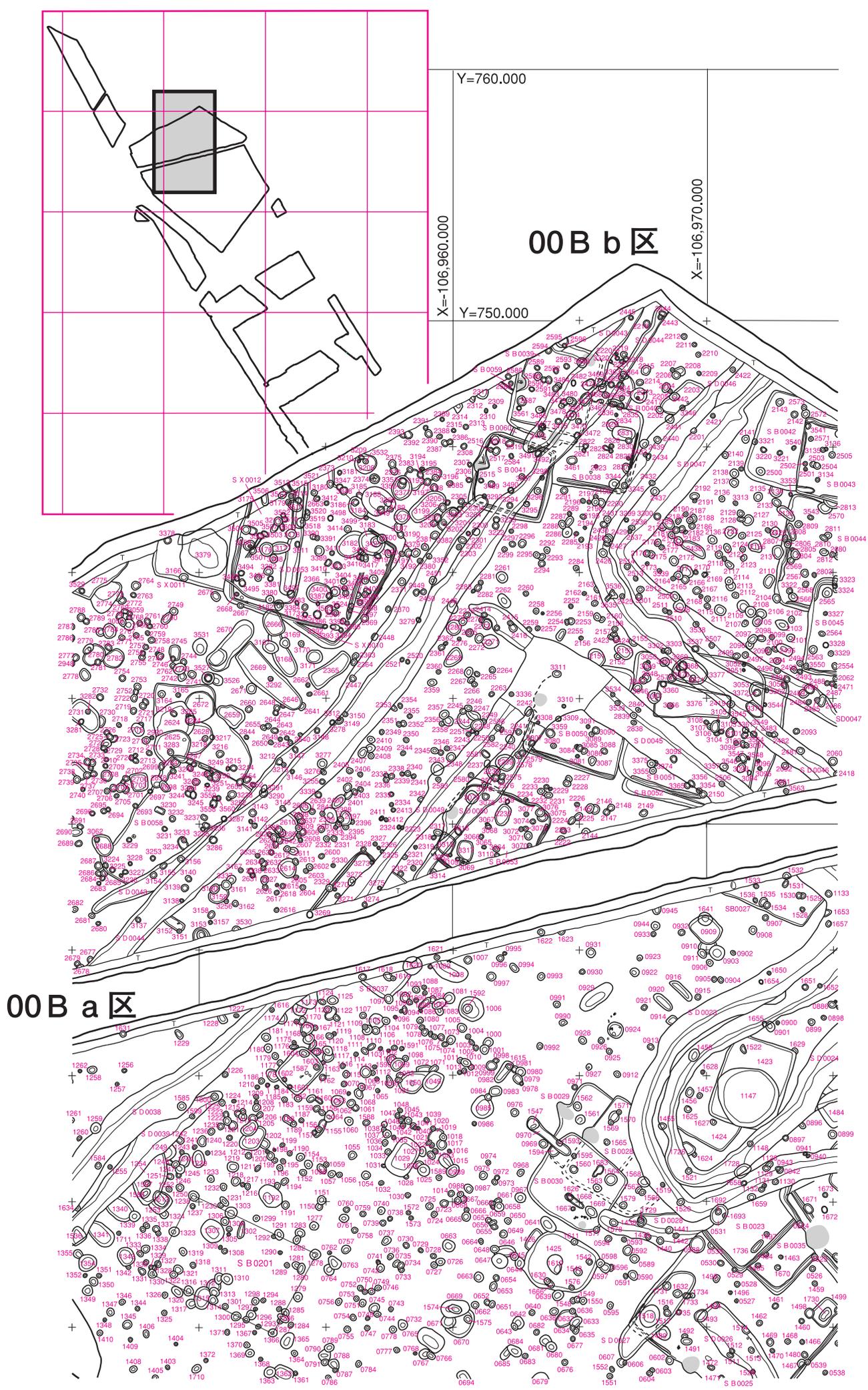
图版 8  
遺構配置図 (8)

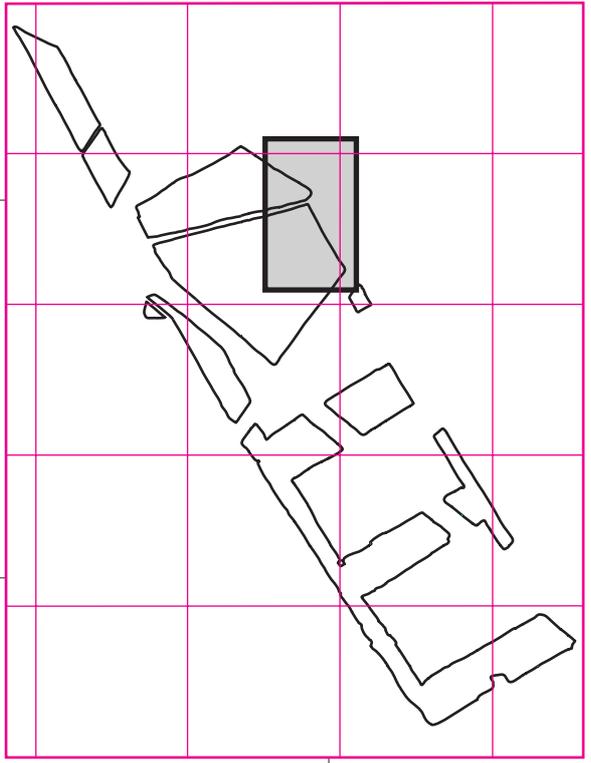


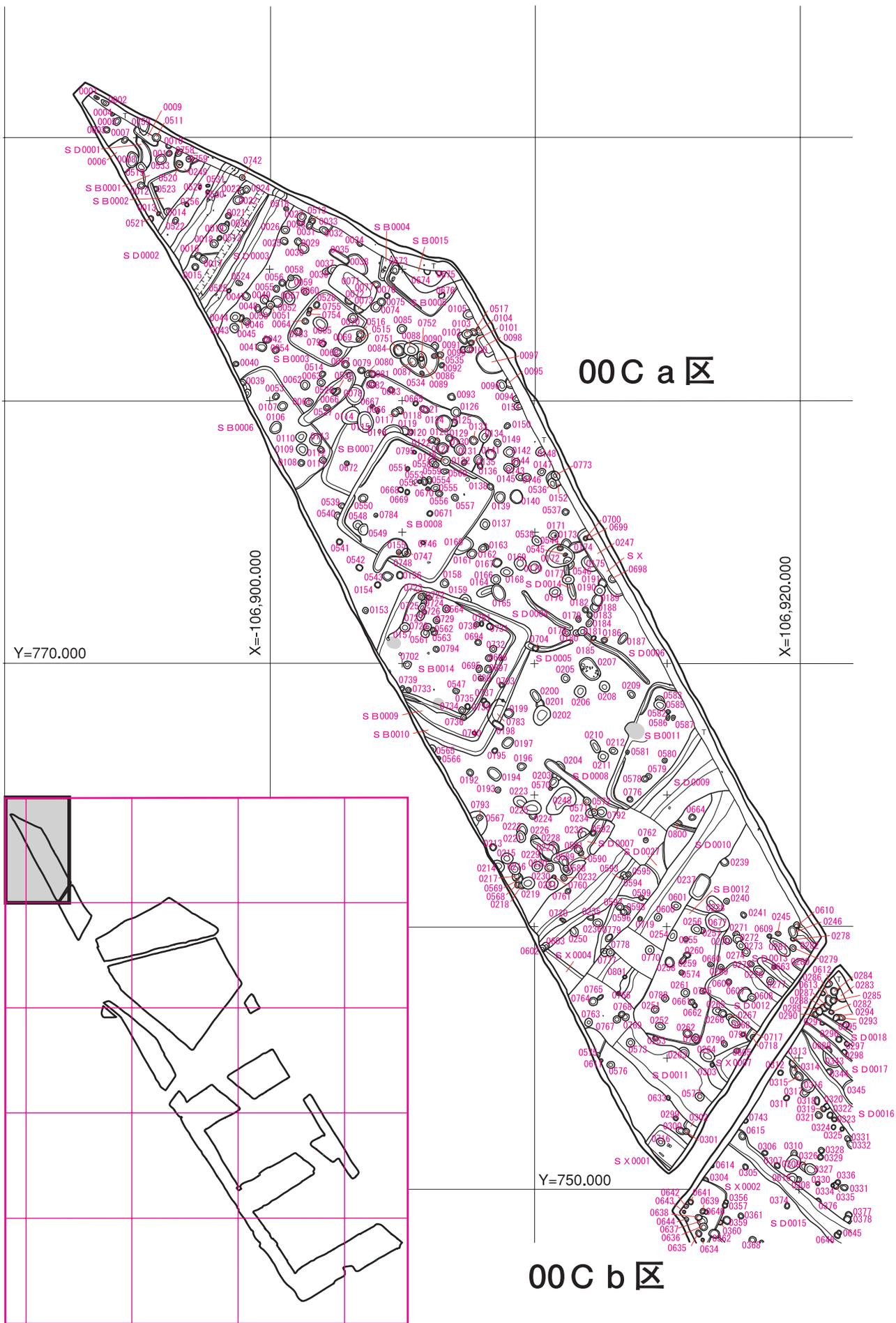


圖版 10  
遺構配置圖 (10)









図版14 遺構写真(1) 98年度調査区全景(空撮写真)





※空撮写真を一部合成している。

左：98 B S B 0001  
(東から)  
右：98 E S K 0187  
セクション  
(西から)



左：98 A S B 0001・  
S B 0003  
(北東から)  
右：98 A S B 0002  
遺物出土状態  
(東から)



左：00 A S B 0002・  
S B 0003 遺物出土状態  
(南から)  
右：00 B S B 0002  
S B 0003・S B 0004・  
S B 0005・S B 0016  
(南から)



左：00 B S B 0008・  
S B 0009・S B 0010・  
S B 0011・S B 0012・  
S B 0017・S B 0020  
(南から)  
右：00 B S B 0013・  
S B 0014・S B 0015・  
S B 0026  
(南から)



左：00 B S B 0019  
(南西から)  
右：00 B S B 0028・  
S B 0029・S B 0030  
(南西から)





左：00 B S B 0038・S B 0039・  
S B 0040・S B 0041  
(南西から)



右：00 B S B 0039内  
遺物出土状態  
(東から)



左：00 B S B 0044・S B 0045・  
S B 0046・S B 0054  
(南西から)



右：00 B S B 0045  
遺物出土状態  
(北西から)



左：00 B S B 0057  
(南から)



右：00 B S B 0057  
遺物出土状態  
(北西から)



左：00 B S B 0050・S B 0051・  
S B 0052  
(南西から)



右：00 B S B 0022  
カマドセクション  
(北東から)



左：00 C S B 0007・S B 0008  
(南東から)



右：00 B S B 0055  
カマドセクション  
(南西から)

左：00 C S B 0009・  
S B 0010・S B 0014  
(南東から)



右：00 C S B 0010  
遺物出土状態  
(南西から)



左：00 B S B 0102  
(西から)



右：00 C S X 0001  
遺物出土状態  
(北東から)



左：98 C S K 0209  
セクション  
(南東から)



右：98 E S K 0212  
セクション  
(南から)



左：98 E S K 0276  
セクション  
(南西から)



右：00 B S K 1029  
セクション  
(北西から)



左：98 D S K 0014  
遺物出土状態  
(北西から)



右：00 C S K 0519  
遺物出土状態  
(南東から)





左：00 B S K 1425  
(北から)  
右：98 B S D 0014  
セクション  
(北西から)



左：98 B S D 0017  
セクション  
(北西から)  
右：98 C S D 0009  
セクション  
(北東から)



左：98 C S K 0418・  
S D 0015 セクション  
(北西から)  
右：98 D S D 0002  
セクション  
(北東から)



左：98 E S D 0004  
セクション  
(北西から)  
右：00 B S D 0001・S D 0003  
(南西から)



左：00 B S D 0043・S D 0044・  
S D 0049・S D 0050  
(北西から)  
右：00 C S D 0009・S D 0010  
(南東から)



左：00 A S X 0006  
(西から)  
右：98 B S K 1120  
礫出土状態  
(南東から)



左：98 B S E 0001  
上層セクション  
(南西から)  
右：00 B S E 0001  
断ち割り状況  
(南から)



左：98 A S D 0006  
石列出土状況  
(北西から)  
右：98 B S D 0011  
石列出土状況  
(北西から)



左：98 C S D 0012  
石列出土状況  
(北から)  
右：00 B S D 0032  
石列出土状況  
(南西から)



左：98 B S F 0001  
(南西から)  
右：98 C S F 0001  
(東から)





左：98 B S E 0002  
上層石組状況  
(西から)



右：98 C S E 0004  
上層石組状況  
(東から)



左：00 A S E 0002  
断ち割り状況  
(北西から)



右：98 C S K 0066  
石敷状況  
(北西から)



左：98 C S K 0454  
石出土状況  
(南西から)



右：00 A S K 0094  
完掘状況  
(南西から)



左：98 B S K 1022  
石出土状況  
(北東から)



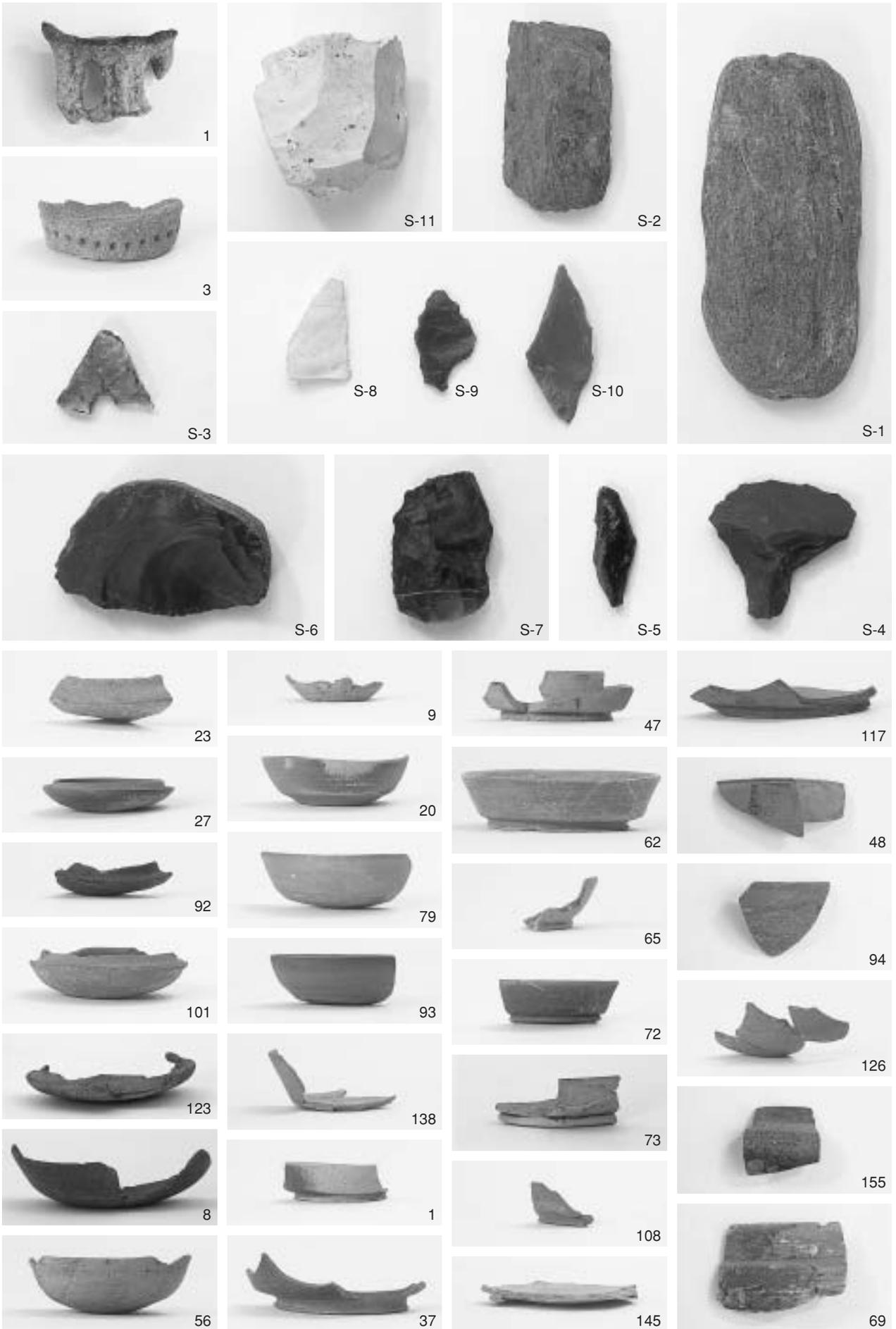
右：98 A S X 0001  
遺物出土状態  
(北西から)

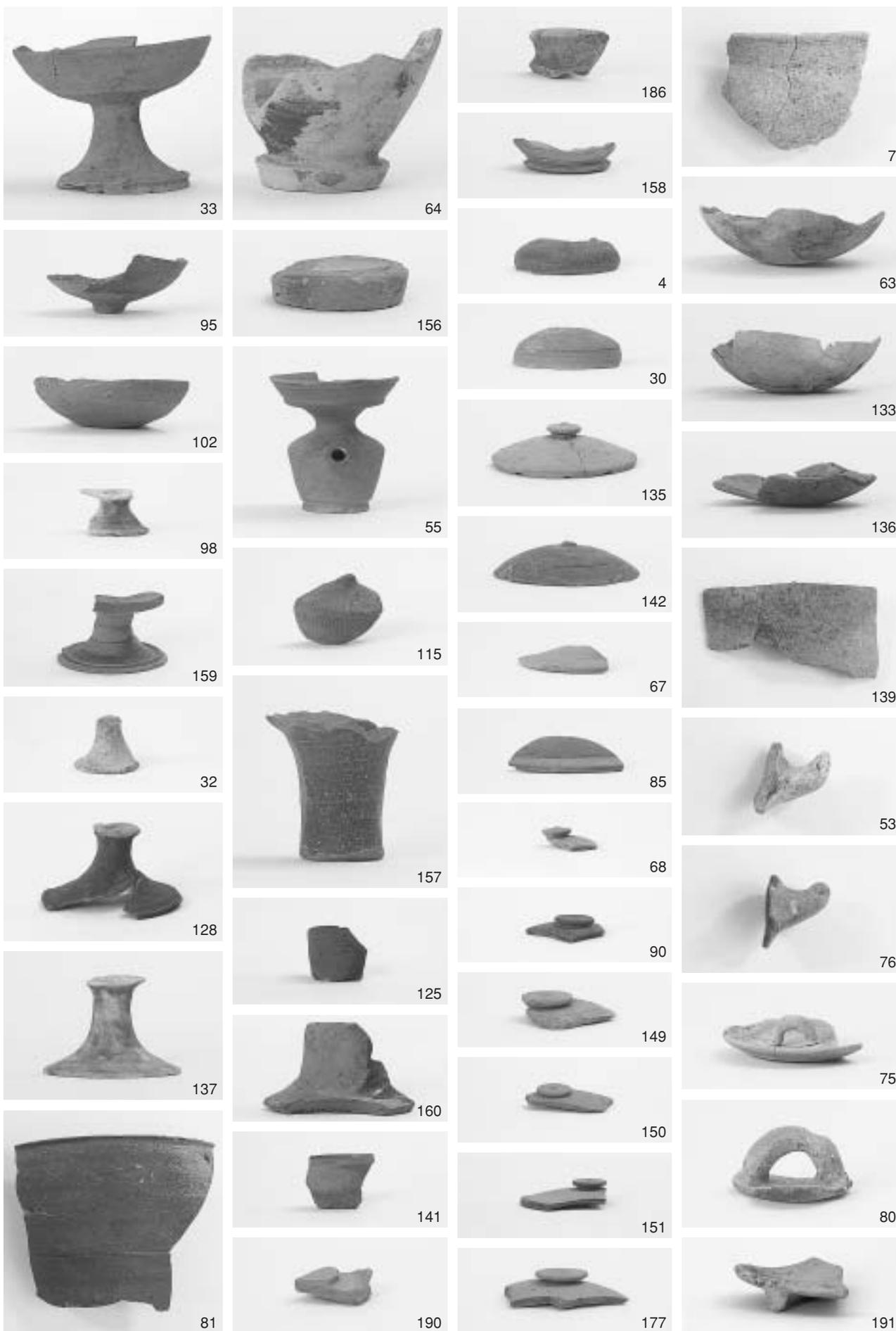


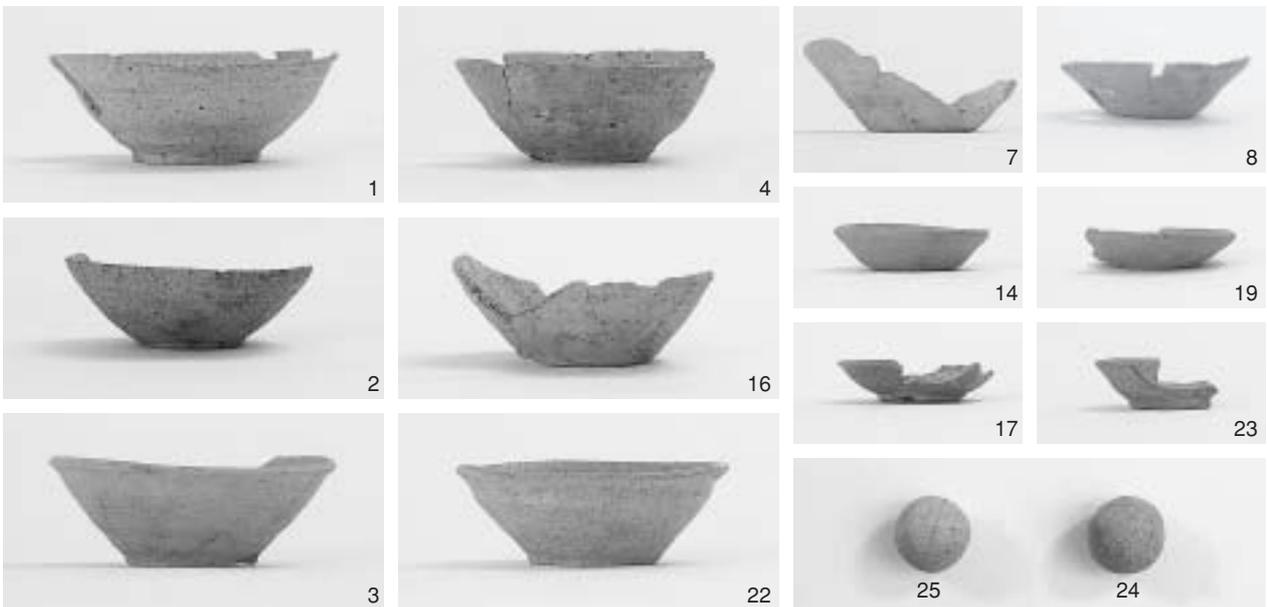
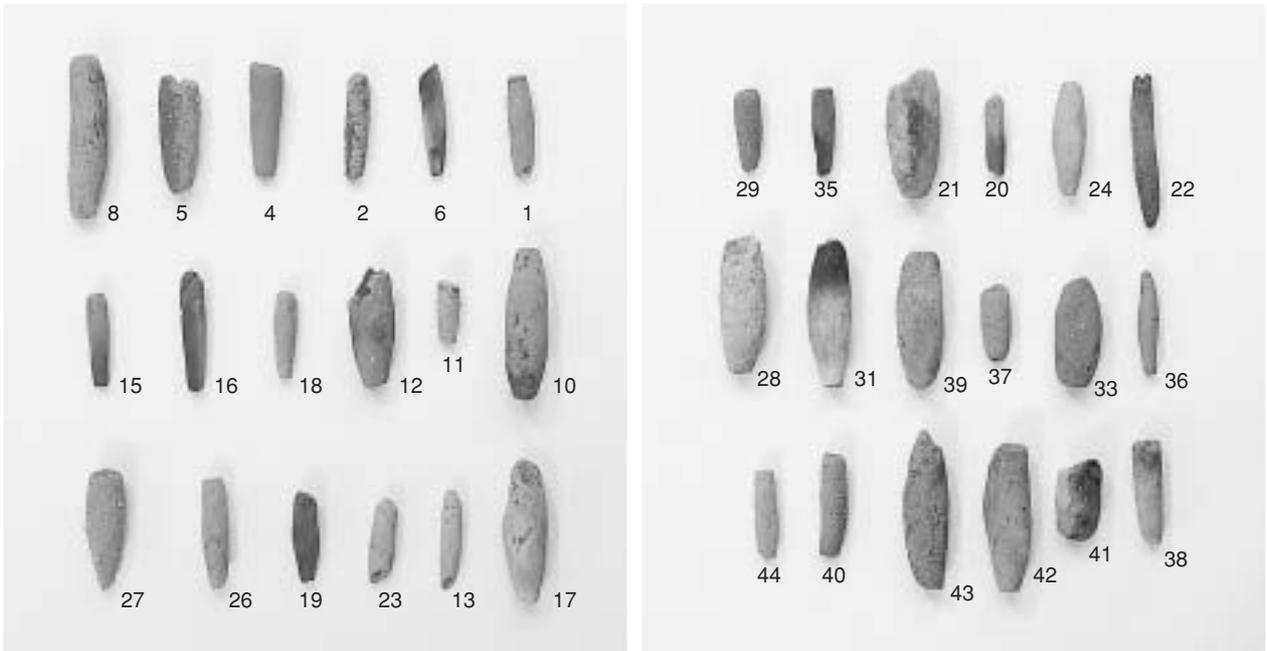
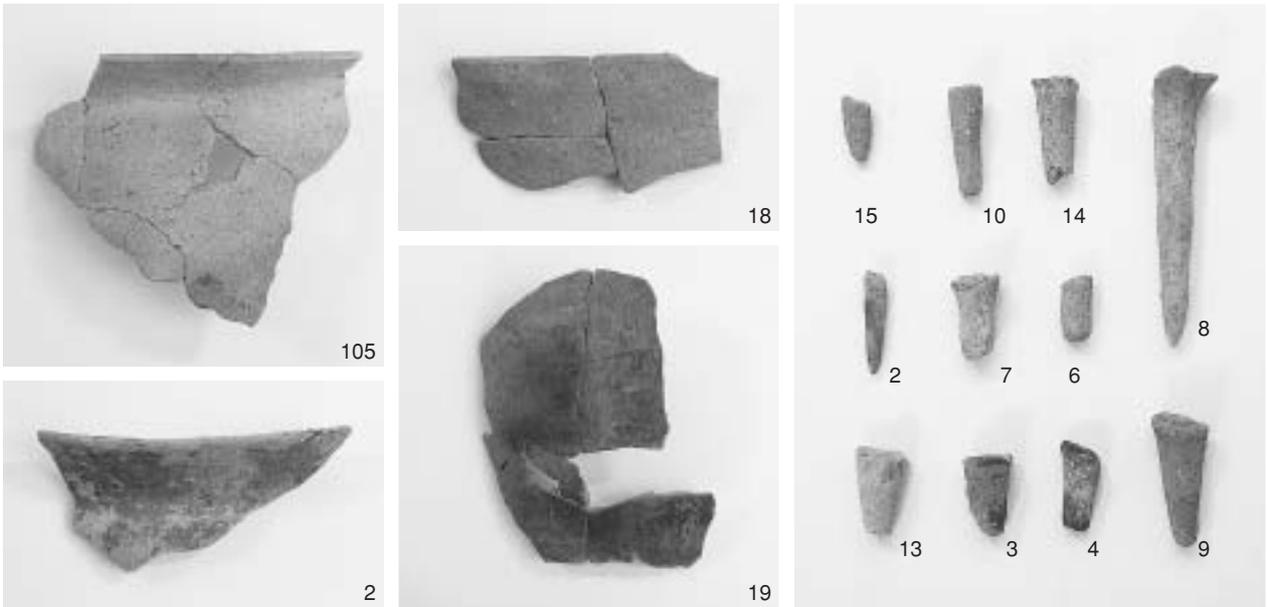
左：98 B S K 1062  
遺物出土状態  
(西から)

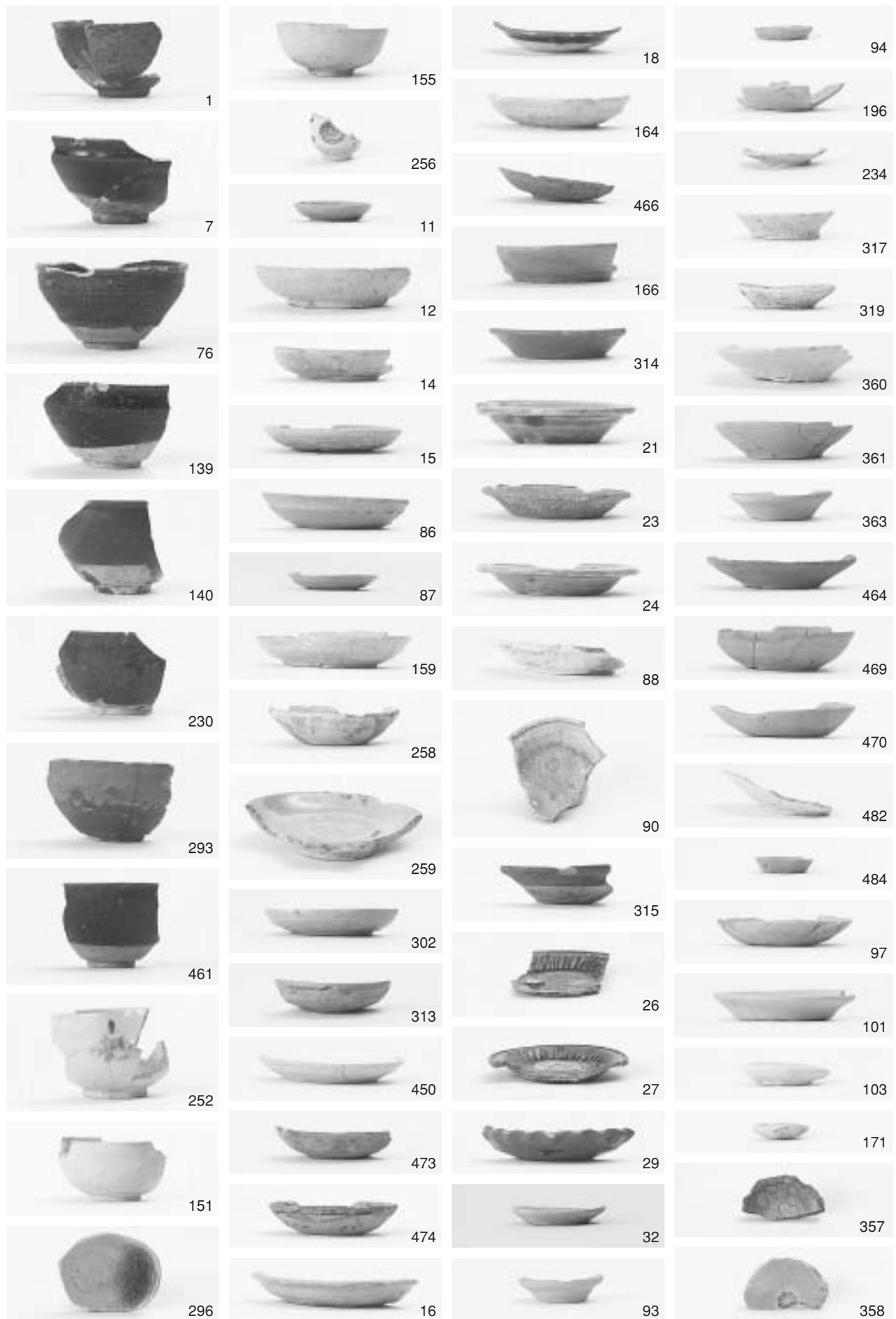


右：98 F S K 0191  
遺物出土状態  
(南から)

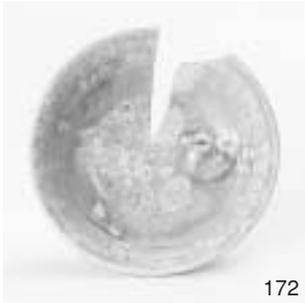


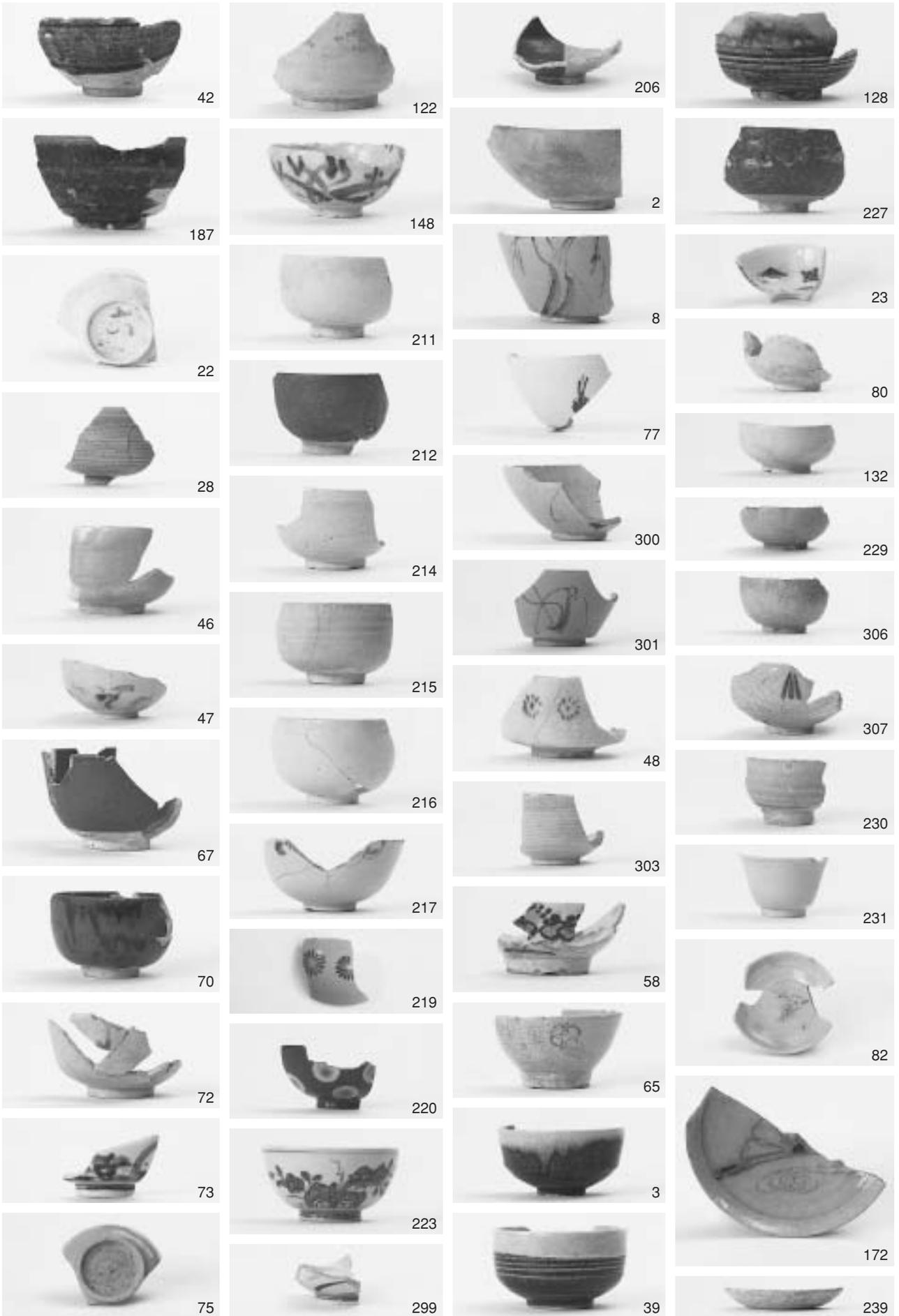


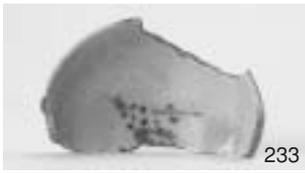




図版25 遺物写真(4)戦国時代から江戸時代前期までの遺物(1)







233



311



313



52



285



314



20



134



84



85



190



245



286



24



242



86



135



88



263



259



259



194



321



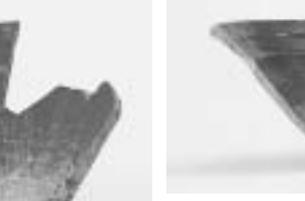
96



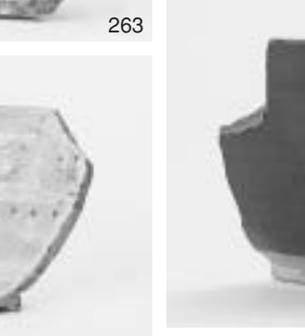
98



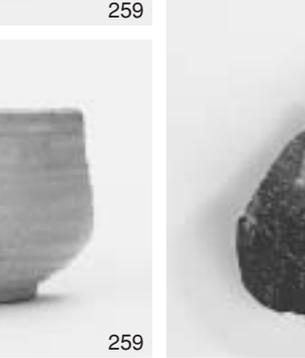
255



318



11



155



260



268



97



19



255



318



11



155



45



322





# 報告書抄録

ふりがな	いまちよういせき							
書名	今町遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第105集							
編著者名	小嶋廣也・武井繁樹・鈴木正貴・酒井俊彦・鬼頭剛・堀木真美子・上田恭子・(株)ズコーシャ							
編集機関	財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦2002年 8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまちよういせき 今町遺跡	あいちけんとよたし 愛知県豊田市 いまちよう 今町	23211	63476	35度 2分 8秒	137度 10分 28秒	98年度 20000917 ～ 20010225 00年度 20020612 ～ 20021201	8,400  4,400  4,000	第二東海 自動車道 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
今町遺跡	集落	縄文時代  古代  中世  戦国時代から江 戸時代前期  江戸時代後期	竪穴住居1棟、土坑  竪穴住居97棟、 溝状遺構、土坑  掘立柱建物3軒、溝 土坑墓25基、土坑  竪穴状建物2軒、溝、 井戸7基、土坑、 池状遺構1基  掘立柱建物1軒、溝、 道路状遺構4条、 井戸5基、土坑、 池状遺構1基、 石敷遺構1基	縄文土器、石器類  須恵器、土師器、灰釉陶器、 製塩土器、土錘、鉄滓  灰釉系陶器、土器、施釉陶器、 刀子  陶磁器類、土器、石製品、 金属製品  陶磁器類、土器、石製品、 金属製品				



---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第105集

## 今町遺跡

2002年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社

---